

あたしのパパは不滅ときどき爆散

GODIGISII

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

封印から解き放たれた一般男性（五千歳）が、エルフ娘を拾って親探しの旅をする話。

ライトとヘビーの中間なミドルファンタジーを目指しています

目次

第一章 不死者の帰還

第一話	「いしのなかにいる」	1
第二話	「まずは衣を」	8
第三話	「しがない手品師」	15
第四話	「歳の差五千の似た者同士」	29
第五話	「驚愕と期待」	37
第六話	「私がお前の父親だ」	46
第七話	「臨終食」	54
第八話	「天の肉」	60
第九話	「超ヘイワ的措置」	66
第十話	「救難信号」	75
第十一話	「聖呪」	82
第十二話	「なんて声、出してやがる」	92
第十三話	「二つの琥珀」	99
第十四話	「亜竜狩り専門家」	105
第十五話	「こんには、綺麗な俺」	113
第十六話	「不死者の見る夢」	120
第十七話	「流行りの歌を一つ」	128
第十八話	「最期の輝き」	135
第十九話	「超古典的な捨て台詞」	143
第二十話	「悪たれ小娘」	150
第二十一話	「蘇りし湖」	158
第二十二話	「毒杯の王」	166
第二十三話	「ママに話してちょうだいな？」	174

第二十四話 「おじぎをするのだ!!」

第二十五話 「愛娘と愛弟子」

第二章 通りすがりの革命家

第一話 「いつもの景色」

第二話 「忘れられない鋭い蹴り」

第三話 「内なる魅力」

第四話 「ごくありきたりな勧誘」

第五話 「悪辣なる不死者」

第六話 「次やったらゼツエンだから」

第七話 「傷心」

第八話 「哀しみを背負いし漢」

第九話 「ささやかな願い」

第十話 「娘をください」

第十一話 「魚の餌」

第十二話 「愚かで臆病な生き物」

第十三話 「皮肉」

第十四話 「猜疑」

第十五話 「大人ってほんと汚い」

第十六話 「開かずの扉」

第十七話 「終の秘拳」

第十八話 「特別稽古」

第十九話 「化けの皮」

第二十話 「起源」

第二十一話 「苦痛」

第二十二話 「弟子入り」

第二十三話 「歪んだ決意」

383

第二十四話 「雪解け」

391

第二十五話 「末永く幸せにねーっ!」

403

第三章 因果応報の不文律 前編

第一話 「第二の故郷」

414

第二話 「歓迎」

422

第三話 「コーネンキってヤツじゃない?」

429

第四話 「隠し事」

435

第五話 「用法用量は守るのだぞ」

442

第六話 「寄生契約」

448

第七話 「よければ目玉も」

457

第八話 「希望の花」

464

第九話 「ルール」

471

第十話 「心治国家」

480

第十一話 「誓って人は殺してないさ」

487

第十二話 「愛を力に変える魔法」

494

第十三話 「合言葉」

503

第十四話 「元海賊」

509

第十五話 「出航」

519

第十六話 「芸術点」

524

第十七話 「恋敵の頭を踏み潰すくらい感覚」

531

第十八話 「吐きたい? 吐きたくない?」

540

第十九話 「アタイはタコ」

545

第二十話 「まだまだ若いもんには負けんよ」

553

第三章 因果応報の不文律 後編

第一話	「後戻り」	563
第二話	「思考停止」	570
第三話	「ケジメ」	577
第四話	「未来予知の魔法」	584
第五話	「野蛮で困る」	592
第六話	「この想いは恋だろうか」	598
第七話	「二つある」	606
第八話	「健闘を祈る」	614
第九話	「食べ放題」	622
第十話	「不毛の地」	630
第十一話	「決勝で会おうぜ！」	638
第十二話	「巨人の魂」	646
第十三話	「オコッテナイヨ」	658
第十四話	「確認」	667
第十五話	「絶賛指名手配中の超絶訳アリ物件」	680
第十六話	「挑戦者」	691
第十七話	「裏アレン流究極奥義」	699
第十八話	「約束」	715
第十九話	「親子喧嘩をしよう」	726
第二十話	「よくやった」	734
第二十一話	「迷宮」	747
第二十二話	「最後の試練」	762
第二十三話	「勇者様のやり方」	770
第二十四話	「真紅の宝石」	783
第二十五話	「知らぬが慈母神」	795

第二十六話 「死んだ人間は蘇らない」

第二十七話 「お前を抹殺する」

817 801

第一章 不死者の帰還

第一話 「いしのなかにいる」

ぐきゆるるる、と。

一際大きな、唸り声染みた腹の音が鳴った。

これはおそらくきつと最後の警告。

このまま何も口にしなければ半日もせずに俺は死ぬだろう。

「かれこれ五万回には届いちやっただかなあ……？」

一体どこで何を間違ったのだろうか。

何も見えない暗闇の中、自問自答じみた呟きがこぼれた。……ってこれ、前回飢え死にした際にも全く同じことを考えていた気がするな。

いかんいかん、同じことの繰り返しではまたすぐに気が狂ってしまう。何か気分転換をしないと。

歌でも歌うか？

しりとりでもするか？

それとも久々に唇でも食べておこうかな？

それくらいしか気を紛らわす方法はないのだ。なぜなら俺はずっと――

――いしのなかにいるのだから。

現在進行形で俺の体はほんの僅か、数ミリ程度の隙間を残して巨大な石の中に閉じ込められている。体よく言えば封印、俗な言い方をすればならコンクリ詰めというヤツだ。

何十何百年前だったかは覚えていないが、埋められてしばらくはピクリとも身体を動かさずにいた。それでも必死に力を籠め続け、飢え死に寸前の痩せ細った状態でも頑張ったおかげでピクリとは動かせるようになり。

口周りにはリスなんかのげっ歯類のごとく前歯でガリガリと削って、

なんとか舌を伸ばせるくらいに広げたのだ。

この調子でいけば十万年後には抜け出せるだろう。

……よし、自分を見失わないために一人しりとりを自己紹介縛りでしょう。

「俺の名前はアレン・メーテウス。好きな食べ物は牛の肝臓、だったと思う。生まれ故郷はえつとたしか……どこだっけなあ……ああそうだ、南国のミリベ島^{しま}」

信じられない。

生まれ故郷さえ、すぐには思い出せなくなっているほどに記憶が抜け落ちてしまったなんて。

信じたくない。

「まるで物語の登場人物のような、波乱に満ちた半生を送ってきた」

この半生は「今までの人生」という意味の半生であって、決して「一生の半分」という意味ではない。

はたして俺の生涯に半分なんて区切りが付く日が訪れるのだろうか？

「戦いに明け暮れた日々もあれば、魔術や占いなんかに傾倒した日々もあった」

ああ、懐かしいなあ。

数多の猛者達と休む間もなく死闘を繰り返して広げたっけ。そして数千通りの殺され方をしたはず。あの頃は本当に血の気が多かった。

英雄や達人などと呼ばれた者達の子孫は今、どこで何をしているのだろうか？

もしもここから出れたら、挨拶くらいはしに行こうと思う。出れたらの話だが。

「旅を、安らげる場所を求めて世界中を旅した俺は神と崇められることもあれば、人ならざるモノとして忌み嫌われ、心臓に銀の杭を打たれて殺されたりもした」

なんでもその地域では、化け物の心臓に銀の杭を打てば殺せるといふ伝承があるのだ。あるのだが、銀とか金とか関係無しに心臓に杭を打てば死ぬのは当たり前だと何度思ったことか。

「ただひたすらに求め続けて、やっと辿り着いた安住の地」

この石の中で目が覚めた時から、その辺りの記憶は特に曖昧なのだ。

その場所が地図のどこにあつて、そこに誰がいたのかは全く思い出せない。

けどなんとなく、ぼんやりとだが、幸せに暮らしていたような気がするんだ。

「……しよっぱい」

音も無く塩気のある液体が口に流れ込んできた。

あの空間を思い出そうとすると必ずこうなってしまうのだ。覚えていないだけで、よほど思い入れがあつたのだろうか。

「血みどろの闘争から離れ、滅多に死ぬこともなく穏やかな暮らしをしていたはずなのだが、気が付いたらここにいた」

たしかに俺は安住の地を求めたさ。求めたが、こういうわけじゃないんだよ。

「怠惰は、日中仕事もせずに寝転がるような怠惰は嫌いじゃないが、さすがに何十何百年と同じ場所から動けないのは許容できない」

人たるもの、散歩の一つもできないと気が狂ってしまう。

実際俺もこの場所で何千回と自分を見失った。いつそのままま精神が壊れ続けていたら楽だったのかもしれない。

だけど飢えて死ぬたびに正常な心と体に戻されてしまう故、そんなごまかしは許されなかった。

「一体俺が何をしたって言うんだ。誰か教えてくれないか。悲しいよ、寂しいよ、苦しいよ、ごめん。ごめん。本当にごめん——」

最後はしりとりを成していなかったが、とにかくこれで終わるだ。

このしりとりも何十万回とやったせいで、四百種類程度の定型文を組み合わせるだけになってしまった。

今のと全く同じ内容を五百回は繰り返した覚えがある。最後はいつも、誰に向けているのか分からない謝罪の言葉をこぼして終わるのだ。

「は……はは……」

どんな苦痛よりも。

どんな拷問よりも。

終わりのない孤独が一番辛い。

形のない何かに押し潰されて、自分が自分でなくなっていくような気さえする。

「今回はもう、ダメかなあ」

長年の経験則から餓死するより先に、精神が壊れてしまうだろうと推測できた。

その時だった。

ヒタヒタヒタ、と。

小さな足音が二つ、揃ってこちらに向かってくるのに気が付いた。そしてそれはすぐそこで止まったではないか。

「や、やっぱり戻ろうよお」

「なに言ってるんだ！ ここまで来て逃げたら、みんなに言いふらして

やるからな！」

二人の人間の話し声が鮮明に聞こえてくる。

俺が三百年かけて編み出した声紋分析により、どちらも十歳ちよつとの男の子だと判明した。

それにしても他人の声を聞くのは半年ぶりだ。入口が埋まってしまったのではないかとずっと不安だったのだ。

「ちやちやっつと終わらせて、大人の男になろうぜ！」

「う、うん……」

いつからだったかは覚えていないが、この洞穴には稀に男児が来る。

その目的は誰しも同じで、『洞穴の奥にある巨石に小便をかける』というものだ。

それができれば大人の男として認められたり、仲間に入れてもらえたりする、いわゆる度胸試しというヤツだ。

「で、でもやつぱりやめたほうがいいよお……。バチが当たりそうかもん」

「しかたねーな。んじやあオレが先にやってやるよ。それで何もなかったらお前もやれよな！」

今回やってきた二人も例外ではなく、俺に温水をぶっかけるつもりでいる。

実際に小便をかけられるのは石なのだが、長年この中にいるせいで愛着が湧いてきたというか同化したというか、とにかくこの石と俺は等しいのだ。

石に小便をかけるという行為は、俺に小便をかけるという行為に他ならないのだ。

などと思いついた直後に、ジヨロロロと勢いのある排泄音が。

ああ、何の断りもなくかけてしまったね。

お返しに平均寿命より五年早く死ぬ呪いをかけてやったからな。

「ふうー……。ほら、何も起きねーだろ？」

「そうみたい、だね」

ズボンをずり上げる音とずり下ろす音が立て続けに聞こえてくる。

「パーツといけ、パーツと！」

「……うん」

時代が変わっても、人というのはなんとも流されやすい生き物なのだろうか。

信心深い君なら最後まで何もしないのではと期待していたが、まあこれも仕方のないことか。君の寿命は三年くらいで勘弁してあげよう。

チヨロロ、と。

勢いのない排泄音が反響し、続けてズボンをずり上げる音もした。

「ずいぶんと出が悪かったじゃねーの」

「出してる途中で怖くなっちゃって……。ごめんなさい、石さん」

……いえ、お構いなく。

君のような心優しい子が現れたのは三十年ぶりだよ。

その調子で何かこう、石相手に世間話でもしてはくれないだろうか？ 将来の夢とか好きな女の子の話なんかだと尚良い。

俺の寂しさを十分に満たしてくれるなら、平均寿命より五年以上長生きできるお呪いまじなをかけてあげよう。

「もう帰ろうぜ」

「うん」

もちろんそんなささやかな願いが届くことはなく、二人はこの場から離れようとした。

そのはずだったのだが。

——ピシリツ、と。

「えっ?」

突然響いた亀裂音が二人の足を、この場所から離れようとする意思を止めた。

矢継ぎ早にいくつもの鋭い亀裂音が鳴り響く。

それは言うならば、卵から雛が孵る時の音に似ている。

そして最後に小さくピシツと鳴って、それは止まった。

「な、何だったんだ今のは……?」

「石から音が鳴ってたけど、まさか……割れたんじや」

小便でこの石が割れただつて? 面白い冗談だこと。

この石の中ではね、魔法の類が一切使えないようになってるんだ。俺を封印するために作られた特別製の石なんだよ。もしも魔法が使えたら、自爆魔法で粉々にできるのにさ。

……とまあ要するにだ、そんな石が簡単に割れるわけがないんだ。

長年諦めずにこうやって、力を籠めているがビクともしな……

「……へ?」

「ひいつ!」

「だっ、だだだ……だれだアンタ!」

押し返す力が消えたと感じた直後、視界が開けて俺の顔に、手に、足に、ぬるい空気が当たるようになった。と同時に、何か硬いモノが倒れて地面に打ちつけた音も聞こえた。

そのまま十数秒の時間が経ち、次第に目も慣れてきた。

それで認識できた光景のおかげで、夢か何かを見ているのだと思いつき、三度瞬きをした……が。

俺の目にははつきりと、怯える二人の少年が映っていた。

第二話 「まずは衣を」

「首が、回せ……る」

せいぜい二度くらいしか回せなかった首が、三百六十度回転できるようになっていた。

それで左右を見ると、真っ二つに割れた巨石が転がっていて。

「手が……」

開きっぱなしだった手が動かせるようになり、何百年かぶりに握り拳を作れた。

前回飢え死にしてから一週間近く経つので体はかなり固くなってしまったが、手も足も何不自由なく動かせるようになっていたではないか。

俺は解放されたのだ！

「信じられ、ない」

「それはこっちのセリフだ！ オジサン、アンタ一体ナニモンだ!？」

「まさか、石の神様……ですか？」

よく見ると二人は、所々につきはぎのある服を着ている。貧民なのだろうか？

いや、俺の服だって経年劣化が激しいから何も言えないな。

何万回と石に擦り付けたせいで上下揃って紙のような薄さになり、かつては真っ白だったポンチョも今では茶色に汚れ……って、ポンチョだけは埋められる前からすでに汚れきっていたな。

とまあ、そんなことは今はどうでもいい。

まずは目の前の彼らへの感謝及び懐柔を完了させねば。

「君達のおかげだ。なんと感謝をしたらよいか……」

心からの感謝の表現及び不信感を払拭させるハグをしようと思ひ、一歩進んだその時だった。

ぱさりと。何か落ちる音がして俺の身体が軽くなった。

「っ!？」

「へっ、へっ……」

真下を見ると、ボロボロに擦り切れた服がまとまって落ちていた。

そして俺が身に纏っているのは腰上までの丈のポンチョのみ。
つまりは俺の半身がむき出しになり、我が愛し子が二人に挨拶をし
ていたのだ。

やっちまったぜ。

「――変態だあああああーッ!!」
生存本能が大きく働いたのだろう。

さっきまで一歩も動かずに固まっていた二人は身を翻し、出口に向
かって全速力で駆けだした。

「あつ、ころー！ ちよつと待てー！」

二人は年長者の制止を無視して逃げてゆく。
ならば、仕方ない。

「――《霜ノ足枷》」

その言葉を唱えると、ひんやりとした風が俺の横を通り過ぎた。

そしてそれはすぐに追いつき、纏い、大人の腕と同程度の太さを持
つそれらを膝まで凍らせた。

「なっ！ なんだこれッ!」

「なんで!? 足がつ!!」

未知の恐怖に襲われた二人は、しけた日の海藻のように激しく揺れ
動いている。

その小さな体と心は焦りで満たされ、冷静な判断をする余裕がない
のだろう。

さて、気を狂わせてしまう前に助けてやらねば。

「逃げ出すなんて酷いじゃないか。大人の話は最後まで聞かなくては
ダメだよ」

俺は優しく諭すようにして、二人に歩み寄る。が、

「来るな来るな来るなああああああつ!!」

「やだあああああああつ!!」

近づけば近づくほど、二人の顔は歪んでいく。そしてなりふり構わ
ず泣き叫ぶようになった。

「ああもう、分かったから静かにしてくれ。今度は口を凍らせてしま
うよ?」

「っ!」

二人はそれを聞いた途端に口を閉じ、揃ってコクリと頷いた。

「いい子だ。それでは君から……と、ちよつと待つてくれ。たしかこ
れを解くには、えつと……」

《雪解ケノ雫》
ユキド
シズク

少し自信はなかったが、心優しい少年の膝までを凍らせていたもの
がちやんと水に変わってくれた。

危ない危ない、解き方を忘れかけていた。二人が餓死するまでここ
で凍らせたままにするところだった。

「あ、あの。どうしてぼくだけ」

「そ、そうだけオジサン。オレのも——オジサンじゃない! お兄さ
んと呼べツ!!」

「ひっ!」

「……めんなさい……」

突然怒鳴られたわんぱく坊主は、完全に心を挫かれてしまったよう
だ。消え入るような声で謝ってからすぐに目を泳がせ、まだ生え揃っ
ていない歯をガチガチと鳴らし始めた。

ああ、やってしまった。

「……すまない。怖がらせるつもりはなかったんだ」

ただちよつと、俺がおじさんではないことを分かって欲しかったん
だ。

俺の実年齢を知った上でおじいさんと呼ぶのなら分かるが、おじさ
んということは見た目で判断したのだろうか?

だけどそれは間違いだ。

俺の肉体は常に、二十代半ばの新鮮な若者のそれなのだ。

おそらくここが洞穴の中で薄暗いために、老けて見えてしまったの
だろう。

きつとそうだ、そうに違いない。

「あの! レオくんを逃してくれませんか!? ぼくが代わりになりま
すから!!」

「バ、バカっ！ なに言ってるんだよエル！ お前だけでもさっさと逃げろよ！」

自己犠牲の精神。

それは動物なんかにはほとんど見られない、人の特質というべきものの。

俺はそれが好きだ、と同時に嫌いでもある。

「実は、君達を無事に帰してあげる方法が一つだけある」

「ぼくは、何をすればいいんですか？」

「見て分かる通り、俺は全裸だ。なのでボロでいいから服を持って来てくれないか？ それと言わなくても分かると思うけど、俺の事を誰にも喋ってはいけないよ？」

「わ、わかりましたっ！ すぐに持ってきます！」

言われるがままに少年は駆けていった。

やはりいつの時代も、その精神を上手く扱えれば生きやすいことに違いはない。

「ふうー……」

ようやくひと段落付いたので額に手を当てるとじつとりとした脂汗が拭き取れた。昔旅先で殺人犯と疑われ、崖の上で追い詰められた時なんかより遥かに焦ってしまった。

まあ、とにかくこれでなんとかなるだろう。

あの子は必ず帰ってくる。あの目は義に厚い者のそれだ。きっと誰からも慕われ、頼られ、最後は大勢に看取られて逝くのだと確信できる。

それはそうと、この子も解いてあげないと。

「《雪解ケノ雫》……突然凍らせてしまつてすまないね。さつきはアレしかなかったんだ。それと寒くはないかい？」

「……ちよ、ちよつとだけ」

「すぐに暖めてあげよう。《春ノ訪レ》」

レオ君ことわんぱく坊主の両脚を自由にしてから、暖気でその小さな体を包み込んであげた。

そのおかげからか、寒さからくる震えと、俺への怖れからくる震え

の両方がおさまったように見える。

「オジ……お兄さん。アンタまさか、魔法使いなのか？」

「いいや、違う。俺は手品師だ」

「えっ、でも。さっきのアレは」

「俺は手品師だ。断じて魔法使いなんかじゃない。いいね？」

「は、はい」

優しく脅しつけると、それ以上は何も言わなくなった。

咄嗟の判断で魔法を使ってしまったが、この時代の魔法使いがどう
いう扱いをされているかが分からないうちは、魔法を使えることを隠
すべきだ。

「エルくんが戻ってくるまで、一つ昔話をしてあげよう」

「昔話？」

「とある魔法使いの話さ——」

遙か昔、不滅の大魔導と呼ばれた魔法使いがいた。

その男は特段才能があったわけではないが、代わりに時間があつ
た。永遠にも思える時間が。

男は百年かけて魔法を一つ使えるようになり、それから千年かけて
魔法を極めた。その後には新たな魔法を創り出すこともあつたそう
だ。

しかし何を血迷つたか男はある日、西の大帝国相手に一人で宣戦布
告をしてしまう。

そして自身の命と引き換えに放つ超魔法を何百発と撃ち続け、つい
にその帝国を滅ぼしたのだ。

世界の半分を牛耳っていた帝国が滅んだことで喜ぶ人も多くいた
が、恐れる人はもつといた。

その後全ては悪い方へ傾き、魔法使いへの印象は最悪になり、魔女
狩りなんてものが流行るようになってしまった。

「——そして世界中から魔法使いが消えましたとき」

「うえー、なんかむなくそわりい……」

「昔話なんてそんなものさ」

「そもそもなんでソイツは西のてーこくをほろぼしたんだ？ 全部ソ

イツのせいじゃんか」

「うっ」

きつとその国は秘密裏に、世界を滅ぼしかねない禁忌の実験を行っていたのだ。

そしてそれを止めるため、名前を呼んではいけないとまで言われた最悪の魔法使いは奔走したんだ。

どこの誰かは知らないけど、そうに違いない。

「さて、そろそろ来るだろう」

一息ついて洞穴の出口を見ると、ちょうどそこにエルくんの姿が現れた。

「——も、持ってきましたーっ!!」

そして大事そうに服を携えながらこちらへ向かってくる。

「ほらね」

「なんで分かったんだ!?! これも手品なのか?」

「これは手品でも魔法でもない、長年の勘というものだよ」
もちろんそんなことはない。

空気の流れと音を感じ取っただけだ。

「……あ、あのっ! これ、いいですか!?!」

「ああ、これでいい。ありがとう」

ずっと走っていたのだろう。俺に手渡してすぐに手をついて座り込み、荒い呼吸を整え始めた。

その間に俺は岩陰に隠れ、大人サイズだが、やはり所々につきはぎのある服に着替えた。

今更隠しても意味はないのだが、一応そうした。

「これで、オレたちを逃がしてくれるんだよな?」

「怖い思いをさせてすまなかったね。もういつでも行ってくれて構わない……いや、ちよつと待ってくれ。最後に一つだけ聞きたいことがある」

「な、なんだよ?」

「今年は一体、何……あ」

それを聞く途中で、突然の眩暈に見舞われた。

視界が歪み、平衡感覚が狂い、

「あっ!?!」

「えっ?」

側頭部に強い衝撃を受けて視界が真っ黒になり、

「オ、オイ!?!」

「だっ、大丈夫ですか!?!」

戸惑う二人の声を聞きながら、俺の意識は途切れた――

「……ど、どうするんだよこれ!?! たぶん血も出てるぞ!」

「とりあえず連れて行かなきゃ!」

第三話 「しがない手品師」

「……は……？」

目を開けると、所々カビついたボロボロの天井が見えた。隅の方には蜘蛛の巣が張ってあったりもする。

姿勢と背中の感触からして、俺はベッドか何かに横たわっているようだ。

それとなぜか頭が窮屈だったので触ってみると、キツく包帯を巻かれているのが分かった。

……そういえばさつき、洞穴で倒れて気を失ったんだっただな。

それからここに運ばれて手当てを受けた、と。

「おっ！」

「シスター！ お兄さんが起きたよーっ！」

体を起こすと、二人の少年が俺に気付いて寄ってきて、シスターなる人物に呼びかけた。

とするとここは孤児院か何かなのだろう。

「君達が助けてくれたのかい？」

「おう！ 感謝しろよな！」

「それはそうと手品師のお兄さん、お腹減ってますよね？ 今から昼ご飯を食べますが、一緒にどうですか？」

「おお、それはありがたい。ぜひとも一緒に過ごさせてもらおうよ」

なんともありがたいことに、食事まで用意してくれるらしい。

まあ実は空腹感や疲れは完全に消えているし、頭の傷も完全に塞がっている。つまりは応急処置の甲斐なく、俺は一度死んだわけだ。

今回の死因は飢餓による衰弱と頭部裂傷による失血といったところか。

「ほら、早くいこーぜ！」

◆?◆?◆?

「……ちそうさまでした！」

「オレがいちばんのりーっ！」

「あつー！ ずるーい！」

「まってよー！」

何人かの子供達が席を立つなり外に飛び出していった。

「気をつけるんですよーっ！ ……すみません旅人さん。本当に粗末なものしか出せなくて」

それを見届けながら、白髪混じりの女性が俺に言った。

見るからに優しい気な雰囲気を出している彼女は、この孤児院を一人で切り盛りしているシスターである。

「いやいやそんな！ こちらこそ助けていただいた上に食事までさせてもらって、なんとお礼をしたらいいか。死ぬまでここで働きましようか？」

「ふふっ、面白い冗談ですこと」

いいえ、冗談ではありません。

百年経つか、一度死ぬまでは好きなように俺をこき使ってくれて構いませんよ？

「……でしたら、この村にいる間は子供達の相手をしてくださいませんか？ それだけでも本当に助かります」

「分かりました」

決してご馳走とは言えなかったが、何百年かぶりの……いや、千年以上してなかった他人との幸せな食事だった。……そう、どうやら俺が石の中に埋められてから実に千年と数十年の月日が経っていたのだ。

兎にも角にも、だ。

しばらくは野草と俺の肉を切り取って食べる自給自足もとい自吸自食を覚悟していたので、この孤児院に大きな借りができてしまった。

借りは何かあっても返さなければならぬ。

「ねえおにーちゃんー！」

「ん？ なんだい？」

俺の命二つ分に相当する借りをどう返そうかと考えている最中に、

残った子供達に囲まれた。

みんなして俺に興味津々なようだ。

「おにーちゃんは旅人で！」

「手品師で！」

「占い師なんでしょ!？」

「ああ、そうだよ」

洞穴でこっそり手品の練習をしていたら、誤って石に埋まってしまったところをあの二人に助けられた。という体で自己紹介をしてしまったのだ。

興味が湧くのは当然だろうな。

「じゃあさじやあさー！ なにか占ってみて！」

「そうだね……。ではシスター」

「はい？ 私ですか？」

「ええそうです」

一人で台所と食卓を歩き来して、食器を片付けているシスターに声をかけた。

「……あなたは今、何か大きな悩みをお持ちですね？」

「えっ……」

それを聞いてシスターの動きと表情がピタリと固まる。どうやら凶星のようだ。

「そんなのシスター!?! なやんでるのー!?!」

「おにーちゃんはほんとうに占い師なんだね！」

「かつこいーっ！」

「ははは」

もちろん今のは占いではない。

神様や精霊なんかの加護を受けているわけでもないのです、そう簡単にできるわけがない。俺にできる占いといえば、的中率が三割に満たない占星術程度だ。

今のは表情筋の変化や仕草、それと人生経験からシスターの内情を察しただけだ。

子供達の手前、どうにかして明るく振る舞ってひた隠しにしていた

が、俺にはバレバレだった。俺は彼女と全く同じことをした人を二人は見たのだから。

「何があったのか話してくれませんか？ あなたの心の隙間、お埋めしますよ」

「じ、実は——」

シスターは後悔の涙をにじませながら全てを話してくれた。

ボロボロに剥がれ落ちた内壁や使い古した家具なんかを見て分かる通り、この孤児院は困窮している。

寄付金と借金、それとシスターが内職で稼いだ金で必死にやりくりをしているのだ。

そして今日、借金取りがやってきて『借金のカタに子供を一人渡すか、この土地と孤児院を明け渡すか』の選択を迫られたという。

「私は最低です。いくら他の子供のためとはいえ、それを選択してしまいました。……カレン、ごめんなさい」

子供達は皆、涙を流して自分を責め立てるシスターを慰めている。しかしどういいうわけか、連れて行かれた子の心配をする者は一人としていない。

「レオくんはエルくんや。カレンちゃんとやらはどういう子なんだい？ みんなに嫌われているのかい？」

「オレたちが嫌ってるっていうより、アイツ自身が嫌いなんだ。カレンはなー、ウサギじゃないけど耳がこう、びよーんって長くて……なんていうんだっけか？」

「エルフ。カレンちゃんはハーフエルフだよ」

「ほう、それは珍しい」

ハーフエルフ、つまりは人とエルフの間にできた子か。

となるとその子が連れて行かれた理由も、高い魔法適性を活かして人殺しの道具に育てられるか、エルフ特有の整った容姿を活かして愛玩道具にされるかのどちらかでほぼ間違いないな。

どちらにせよ、このままではその子の未来は悲惨なものとなってしまっただろう。

このままでは、だが。

「カレンちゃんの所有物を何か一つ、持ってきてくれないか？　できるだけ思い入れのあるようなものがいい」



「おっ」

ぽとり、と。

村の外れまで来て、俺の目の前を導くように飛んでいた髪留めが地に落ちた。

傷一つない青紫色の花の髪留め、恐らくキキョウの花だと思われるそれをすぐに拾い上げ、手で土を払う。

もちろんこれは俺の私物ではなくカレンちゃんの物だ。ちつとばかりお借りして、人探しの魔法をかけたのだ。

そして魔法の効力が切れたということはこの辺りに……。

「……アレか」

平和な村には似合わない檻付きの馬車が一台停まっていた。ちょうどそこに三人の男達と一人の少女が向かっている。

男達の身なりからして、余所行きの錦とギラギラ光るブレスレットなんかを身に付けた成金感漂う男が借金取りの親分で、帯剣した二人がその用心棒といったところか。

それと当たり前のように少女の両手には手枷が嵌められている。

「オラー・さっさと乗りやがれー」

少女は俯いたまま檻の中に押し込まれた。

縞模様には赤と黒が織り交ざった長髪が揺れる。そして話に聞いた通りエルフ特有の端正な顔立ちと長耳を持っていた。

あの子がカレンちゃんの間違いないだろう。

「もう二度とこの村には帰ってこれねえからなあ？　別れの挨拶は済ませとけよ？」

「待ってください!!」

男達が馬車に乗り込もうと足をかけた瞬間に呼び止めた。

すぐさま二人の用心棒が雇用主を守るように立ちふさがり、それぞれ

れ利き手を柄に添えた。

警戒はしているが、敵意はまだ感じられない。

「てめえ、誰だ？」

まず初めに片方が単純な質問を。

俺はそれに対してあらかじめ用意していた答えを。

「私の名前はアレン・メーテウス。ただのしがない手品師です」

それを聞いて二人はますます困惑した顔になり、何も言わなくなつた。

するとすぐに二人の間から親分が出てきて口を開いた。

「手品師が何の用だ？ 見ての通り俺は忙しいんだよ。大事な商品を急いで届けなくちゃならねえんだ」

「商品というのは、そちらの女の子のことですか？」

「ああそうだ。なんならお前が買うか？ ……まあ、そのナリじや金貨一枚すら持つてねえだろうがなっ！」

親分はイヤミたらしくそれを言ってから、豪快に笑った。

それにしても商品、ねえ……。

千年経とうが薄汚れた人間つてのは必ずいるんだな。

「そうですね。たしかに明日の食費すらありません」

「とするとなんだあ？ 物乞いか？ それなら他所でやってくれや」

「金は払えませんがその代わり……この場でできる手品なら何でもご覧に入れますので、その子を渡してはくれませんかね？」

俺の提案で、この場の時間が一瞬だけ止まった。

しかしすぐに男達は腹を抱えて笑い、俺のことを傑作だと褒めてくれた。

もしかしたら助かるのかもしれないと内心期待していた少女も、「何を言っているんだコイツは？」といった半ば呆れた視線を檻の中から向けてくる。

「そうかよそうかよ！ どんな手品でも見せてくれるってか？ ……

オイ」

「へい」

親分に命令され、用心棒の一人が俺に短剣を投げ渡してくれた。

はてさて、これで一体何をしろと言われるのだろうか？

「——そいつを自分の心臓に刺してみろ」

……ああ、よかった。

この短剣を純金に変えてみせろ、とかじゃなくて本当によかった。

「本当に、それでよろしいのですね？」

「……は？」

「この短剣を私の心臓に突き刺すだけで、よろしいのですね？」

刺した後でやっぱり違ったなんて言われぬように、一応確認を取っておく。

刺し損は嫌だからな。

「オイオイオイ、本気で言ってるのか？ 死ぬぜオマエ？ そいつには文字通り種も仕掛けもないんだぞ？」

軽く自分の指先を刺してみると小さな痛みと共に血が流れ出た。

たしかにこれは、命を奪うために作られた物で間違いない。

「ええ、問題ありません」

「じよ、冗談だろ……？」

「それと先に断っておきますが、私の手品は中々に現実味がありますので、覚悟して——」

「——なんなのよオツ!!」

俺が全てを言い切る前に、檻の中の少女が吠えた。

「なんなのアンタ、バカなの!? いきなり現れてわけわかんないこと言い出してさ! バカなんですよ!」

少女は堰を切ったようにまくしたてる。

半ば自暴自棄になって喚き散らす。

「そんなものを心臓に刺したら死ぬに決まってるじゃない! あたし、アンタのことを知らないわよ! シスターに頼まれたの? だからってそんなことするなんて、やっぱりバカですよ! ……もういいから、はやくどっか行ってよ!!」

俺の事を心配してくれているのか、それとも目の前で人が死ぬのを

見たくないだけかのかのどちらかは分からないが、必死に泣き叫んでくれている。

「恐れなくていい。必ずそこから救い出してあげよう。だから少しの間だけ、目を閉じてくれるかな？ この手品は子供には刺激が強いんだ」

だからトラウマにならないように警告だけはしてあげた。あとはもう自己責任だ。

そして俺は短剣を両手で握り、その刃先を左胸に向けて構えた。

「それでは皆様、準備はよろしいでしょうか？ 三つ数えた後、刺してご覧に入れますよう」

「本当にやらないわよね!？」

「さん……………にい……………」

「ねえ！ やめてつてば!!」

男達は何も言わずに俺を見据えている。

少女は尚も叫び続けているが、ここまでできてやめる気は毛頭ない。

「いち……………フツ！ ……ぐふつ」

鋭利な鉄が肉を裂き、身体の芯まで入り込んでくるこの感覚。

一瞬ひんやりしたと思ったら、それはすぐに灼けるような激痛に変わる。

ああ、懐かしい痛みだ。

「ンなツ!？」

「ウソだろ!？」

「いやっ……………いやあツ——」

男達の驚く声と、それを掻き消す甲高い悲鳴を聞きながら俺の意識は途絶えた。



「信じらんねえ……………。コイツ、マジでやりやがった」

「オイ、本当に脈もないぞ。死んでやがる」

俺の死を確認した男達はずいぶんと困惑しているようだ。

ついさつきまで甲高い声を上げていた少女はうんともすんとも言わなくなっている。おそらく俺の意識が途切れている間に気を失ってしまったのだろう。

だから見るなど言ったのに。

「……親分、どうするんすかこれ？」

「し、知らねえよ。そこら辺に埋めときやいいだろ」

「いや、そっちじゃなくて。手品を見たらこのガキを渡すっていう約束だったじゃないすか」

「ああ、そっちか」

そうだよ。

俺は言われた通りにやってみせたんだから、無事にカレンちゃんを孤児院へ送り返してくれ。

それから俺を焼くなり埋めるなり、好きなように葬るがいい。

……まさかとは思うが、約束を反故にするなんてことはないだろうね？

「んなもん無効に決まってるんだろ！ 手品じゃなくて本当に死んじまってるんだからよ！」

ああ、そう。

そんなことを言っちゃうのね。

せっかく穩便に済ましてあげようと思ったのになあ。

「オラ、さっさと行くぞ」

「現代人は祟りも呪いも恐れないのだな」

「祟りが怖くてこんな商売ができるかよ！ ……つて、ちよつと待て。今誰が喋った？ お前か？」

「俺じゃないっす」

「俺でもねえです」

「……私ですよ」

俺は地べたから背を離し、その場に立った。

同時に刃の消えた短剣が胸から落ち、カランと乾いた音を立てる。

それを目の当たりにした男達は目を丸くしたり口をパクパクさせたりして、完全に言葉を失っている。

「とりあえずこちら、刃のほとんどを飲み込んでしまいましたが一応お返ししますね」

「あ……うあ……」

目の前で起こった出来事を見て、半分魂が抜けたような、間拔けな顔をしてへたり込んでいる用心棒の一人に短剣を返した。

「それと親分殿。約束通りその子を貰っていきますので、檻の鍵を貸してください」

「は………ハッ!? お、オイお前! コイツを殺せ!!」

「へ、へい!!」

親分は辛うじて現実に戻ってこれたようだ。

そして彼の命により、用心棒の一人が剣を抜いて襲い掛かってきた。

「食らえッ!」

「……うっ」

またしても鉄の刃が体の奥深くに届き、俺の命と意識は奪われた。

「……や、やったのか!」

「へい、確実に手ごたえがありました」

心の臓を一刺し。お見事でしたよお兄さん。

お見事なんですけどね、この服はどうしてくれるんですかね。

流石に二度も赤染めしたらそう簡単には洗い流せないですよ。

「にしてもまさか、アレが本当に手品だったとはな……」

「とんでもなく現実味があったっすね……」

「いやあ。実はアレ、手品じゃないんですよ」

「ッ!」

そのまま二本の脚で立ち上がり、服に付いた塵を払っていると、今しがた俺を刺し殺した彼も気を失って倒れた。

こうして残ったのは、中々の胆力を持つ親分だけとなった。

「なっ!? ななな………なんで生きてやがるッ!? てめえはたしかに死んだはずじゃ……。一体何者だ!」

「あれ？ 一番最初に言いましたよね？ 『ただのしがない手品師です』と」

「ただの手品師なわけねえだろ！ はぐらかすんじゃないか」
「だから何度も言ってるじゃないですか」

怒りと戸惑いが混ざり合い、親分の顔が醜く歪む。
そんな彼に、俺はとびきりの笑顔を見せて答える。

「——ただの『死しが無い』手品師だって」

それを聞いた直後に、なんとも言えない顔に早変わりした。
コロコロ表情の変わる人間はいつ見ても面白いものである。

「……嘘だ！ さっきのアレも手品なんだろ!? なあ!!」

どうやら理解はしたが、信じたくはないらしい。

「そうですねえ。では、もう一つご覧に入れましょうか」

だから俺はまたしても剣をお借りして、自分の右腕を切り落としてみせた。

温かい血がぼたぼたと流れ落ちる。

おお、痛い痛い。

「お……お前、いきなり何をやって……」

「よおく見ててくださいいね？」

そして断面から新しい腕を生やしてみせ。

ついでに生やした手を握ったり閉じたりして、ちゃんと動かせることも見せてやった。

「ひいッ!!」

「これで私が不死者だと信じてもらえましたね？ まあ正確には『不死者』と言うよりも、『死んだままではいられない者』と言った方がいいのですが。一応さっきのアレで、二度死にましたし……つて、聞いちゃいけないか」

完全に腰を抜かした親分は、俺の話も聞かずに這いずりながら逃げようとしていた。

「止まりなさいって……」
《泥沼ドロ沼ノ双腕ソウワブン》

地より二本の腕を生やし、親分の足を掴ませ口を塞がせる。

それからゆっくりと近づくと、大の男が涙を流して必死にもがきだした。

「やあ、ぐ機嫌はいかがですかな」

「ンーツー！　ンンーツー!!」

口を塞いでいるせいで何を言っているかは分からないが、「許してくれ!」とか「殺さないでくれ!」とかそんなところだろう。

もちろん殺すつもりなんてない。

ちよつとした頼みを聞いてくれればそれでいい。

「とりあえず、檻の鍵を貸してくださいね?」

すると親分は素直にポケットから銀の鍵を取り出して俺に手渡した。

「もう一つお願いがあるんだけど、いいかな?」

「ンーツー!」

「孤児院の借金を帳消しにして、全財産の半分を孤児院に寄付してほしいんだ。それと最後にこの村から立ち去ってくれと嬉しいな」

もう一つどころではなかったが、まあ問題ないだろう。

「して、返答は?　断るといふのなら、君を肉のない不死者に変えるつもりだよ」

「ンンーツー!!　ンンンーツー!!!」

命より大事な物がある人間なんていないのだから。



気絶したままのカレンちゃんを背負って孤児院に帰ると、シスターが涙を流しながら駆け寄って来た。

「ああ!　カレン!　カレンツ!!　ありがとうございますメーテウス様!　この恩はどうやって返せば……」

「いえ構いません、先に助けてもらったのはこちらですから。それと取り戻すついでに借金も全て帳消ししておきました。近いうちに多額の寄付金も入りますので、それで子供達に何か良い物を見繕って

あげてください」

「えっ……」

「では私は、子供達と遊ぶ約束をしてありますのでこれで」

それから子供達と遊んだり、俺の新鮮な右腕と引き換えに親分から頂いた装飾品を売って旅に必要な品を買い揃えていたら、すっかり日が沈んでしまった。

「そろそろ、行かないとな」

俺の正体が知られた以上、遅くとも夜が明ける前にはこの村から立ち去らなければならない。

不死者が現れたという噂が広まる前にさっさと出発しなければならぬのだ。

もしもこのまま滞在していたら、数日としないうちに討伐隊やら軍やらの物騒な連中がやって来て、辺り一帯を人の住めない土地に変えてしまうだろう。

「名残惜しいけど仕方ない。いつもやってきたことだけだ
だけどまたいつか。」

あの子達が立派に育っているであろう二十年後くらいに訪れよう。
「繁栄と平穏のあらんことを」

最後に祈りとまじないの言葉をかけてから、俺は夜道を歩き始めた。

今も昔も変わることのない月に照らされ、煌めく小川に沿ってしばらく歩いた。

ふと目の前を横切ったウサギを見て腹が鳴ったので夕食の準備をする……が、その前に。

「その君、俺に何か用かな？」

ぱつと振り返って木々の茂る方に声をかけた。

その直後に木の後ろでガサツと音が鳴ったが、出てこようとはしな

いし返答もない。

村を出た直後から何者かに尾行されていたので、道中軽く鼻歌なんかを歌って完全に油断しているように見せかけもしたのだが、一度も襲ってきたりはしなかった。

では一体何が目的なのだろうか？

「ほら、怖がらずに出ておいで。なんなら一緒に食事でもどうだい？」
そこまで言うと、木の陰から一人の女の子がおずおずと出てきた。

月光に照らされたその子は赤と黒が混ざり合った髪に長く尖った耳、そして碧い瞳を持っていた。

名はカレン。

村の子供達の中で唯一俺の秘密を知っている子だ。

なぜか遠足なんかで持っていくような荷物袋を肩から腰にかけている。

「やあカレンちゃん、こんなところで何をしているんだい？」

俺に用があるのは間違いないのだろうけど、何を言われるのか。

助けてもらった礼を言いに来たのかな？

それとも精神衛生上よろしくないものを見せてしまったことで文句を言われるのかな？

または大穴でその首よこせと言われる可能性が無きにしもあらず。

「あ……」

しかし少女の発した言葉は、そのどれでもなかった。

「——あたしも連れて行って!!」

第四話 「歳の差五千の似た者同士」

「あたしも連れて行つて……とな？」

「……そ、そうよ！ 旅人なんでしょ？ あたしも連れて行つてよ！」

少女の碧い双眸はじつと俺を見据えている。

その輝きに嘘偽りは微塵も感じられない。

しかし不死者の旅に同行したいだなんて、ずいぶんと物好きな子がいるものだ。

だからといってそう簡単に受け入れるわけにはいかないが。

「たしかに俺は旅人だが、君を連れて行くわけにはいかない」

「なんでよ!？」

「危険だからに決まっているだろう。……さあ、帰るんだ。夜道は危ないから村まで送つてあげよう」

「やだ！ 帰らない!!」

「むう……」

先ほど助けた時に分かつてはいたが、ずいぶんと強情な子だ。

一体どんな育てられ方をしたのか。それともこれは遺伝なのか。

どちらにせよ親の顔を見てみたいものだ。

「全部自分でなんとかするから！」

これは子供特有の万能感というものだな。

生き抜くことの厳しさを知らず、何があつてもなんとかなると思っている。

一体どこからそんな自信が湧いてくるのか不思議でならない。

そもそも自信ではなく過信、または慢心なのだが。

「ぜったいに迷惑はかけないから！ 連れて行つてよ！」

「絶対、ねえ……」

齢千歳に満たない者の発する『絶対』は基本的に信用しない主義なんだ。

「ねえおねがい！ あたしにできることなら何でもするから！」

「……うん。熱意だけは人一倍あるね。素晴らしいよ」

「そ、それじゃあ……!」

「俺がただの旅人だったら折れていたね」

「えっ？」

一瞬舞い上がったと思ったら、すぐにしゅんとした。

こんな単純な子はなおさら危険な旅には連れて行けない。さつきと論してお帰りいただく。

「ただの旅人じゃないって、どういうことなの？」

「カレンちゃん、君は俺の秘密を知っているはずだよ。さつき見ただろっ」

「だ、だってアレは手品……」

「手品じゃないよ。本物の剣を心臓に刺して死んだ。だけど今もこうして生きている。もう、分かるね？」

俺は化け物に等しい。

そのことを言わずとも理解してくれたようで、目の前の少女は口をつぐんだ。

「俺はただ生きていてだけで命を狙われてきたんだ。そんな男と一緒に旅をしたら命がいくつあっても足りないのは分かるだろう？」

「で、でも！ あたしだって……」

「いいから帰りなさい」

あたしだって何だ？ ハーフエルフだから疎まれてきた、つまり俺と同類だって言いたいのか？

かつて人間の国で女王の座に就いたハーフエルフだっていたんだ。甘い甘い、その程度じゃ俺と同じ低きに降りてはこれないよ。

「こうなったらもう、眠らせてから運んだ方がいいかな」

「ま、待ってよー！」

「まだ何かあるのかい？」

そろそろ食事にしたんだ。

これで本当に最後にしてもらおう。

「——アンタはそれで寂しくないの？」

……なんだ、そんなことか。

「まあ、慣れている」

一呼吸置いてから答えた。

「慣れていても、寂しいことには変わりないでしょ!？」

「それは、だな……」

ずいぶん痛い所を突かれてしまった。

たしかに慣れているとはいえ、一人旅が寂しいことには変わりない。

不死者とはいえ人間だもの。他者と交わって生きるように神様に作られたんだもの。

それに千年もの間寂しかった分を取り戻したいという気持ちもある。

「あたしもずっと寂しかった」

「君には孤児院のみんながいるじゃないか」

「たしかにみんな優しくかったけど、なにか違うの。いつも心のどこかが寂しかったの。ぽっかりと穴が空いたみたいに」

ずいぶんぼんやりとした、曖昧な答えだ。

これが多感な時期ってヤツなのかな。

「とにかく、アンタもあたしも寂しい者同士なのよ! それが理由じゃ、ダメ?」

なんてことはない子供の戯言、わがままのようなものだ。

なのになぜ?

どうしてこうも胸が熱くなるんだ?

どうしてそれがとても重たい言葉に感じられるんだ?

千年間石詰めに使われていたせいで、心が脆くなってしまったのか?

「はあ……」

俺は少し大げさに溜息をついた。

それを見た少女の顔がますます曇る。またしても断られると思っ込んでいるのだ。

「のう、カレンちゃんや」

「やだ、帰りたくない……」

理由がどうであれ、こうも心を動かされた時点で俺の負けだという

のに。

「まずは夕食の支度を手伝ってもらえるかな？」



二人で焚火を挟んで座り、出来立ての温かいスープと川魚の串焼きを手に取った。

「いただきます」

俺がスープを少し啜り、塩で味付けされた焼き魚の腹に齧りついて、対面に座る少女は何も口にしようとはしない。

「どうした？ 食べないのか？」

「これを食べたら、帰されるんじゃないかと思って」

「帰りたければいつでも帰っていいんだよ？ ちゃんと送り届けてあげるから」

「い、いただきます！」

俺が本当に折れたことを示すと勢い良く魚の腹に食いついた。

口いっぱい身を頬ぼった後に、ずずつと音を立ててスープを啜るのは見ていて微笑ましい。

「美味しいかい？」

「うん！」

「それはよかった。ところでカレンちゃんは どうして——待って！」
「ん？」

まだ何も聞いていないのに、軽く睨まれてしまった。

何かおかしいなことも言ってしまったか？

「その、ちゃん付けで呼ぶのはやめて。子供扱いしないでよ」

「……ぶっ、はははっ！」

「なんで笑うのよ!!」

「おっと、これは失礼しました。カレン嬢は立派なレディでしたか」
「そうよ！」

背伸びしてでも大人に見られたい年頃なのだろう。

しかし俺からすれば十歳だろうが百歳だろうがまだまだ子供で、大

人と呼べるようになるのは大体三百を過ぎた辺りからだ。

口の端に食ベカスを付けたままの少女を大人と呼ぶには逆立ちが必要であるがまあ、そういうことにしておいてあげよう。

「それで、カレンはどうして旅をしたいんだ？ どこか行きたい場所でもあるのかい？」

あそこまで強く頼み込むってことは何かしら目的があるに違いない。

かつて俺に同行したい、弟子になりたいなどと押しかけてきた者達には必ず目的があった。

強くなりたい、復讐したい、俺を殺したいといった理由が大半を占めていたのを覚えている。

もしもこれで「自分探し」みたいなぼんやりとした答えが出たのなら、即刻眠らせて送り返すつもりでいるが。

「パパとママを、捜したい」

「君を捨てた両親をかい？」

「……うん」

自分探しではなく親探しか。

普通は自分を見捨てた両親などに会いたくはないものだが、力の籠った良い目をしている。確固たる意志を持つ者の目だ。

ならば手助けをしてあげよう。

「分かった。一緒に捜してあげるよ。両親のことを何か覚えているかい？」

「何も、思い出せないの。顔も分からない」

「とすると赤ん坊の頃に捨てられたのか？」

「ううん。実はあたしは——」

カレンが言うには三年前、十歳の秋に村の近くで倒れていたところをシスターに拾われたらしい。

そして目が覚めたら記憶の大半が消えていて、自分の名前と年齢、それと優しい両親がいたということ以外思い出せなくなっていた、と。

俺としては優しい両親とやらを許せない。

「……カレン、恐らくだが君は親に忘却の魔法をかけられた。だから俺を思いつきり殴ってくれ」

それ以上に俺は俺を許せない。

だって、忘却の魔法を作ったのはこの俺なのだから。

いつ頃だったか二百年ほど重なり続けた苦難に耐えかね、軽い気持ちでそれを作りだしてしまったのだ。

そして今日の前には、人を救うために作った魔法で苦しめられた人がいる。

間接的とは言え、その責任は俺にある。

「手が痛くなるなら蹴りでもいい。やってくれ」

「いきなりどうしたのよ？　なんであたしがアンタを殴る必要があるわけ!？」

「君にかけられた忘却の魔法、それを作り出したのはこの俺だからだ」
「そういうことなら……」

焚火の向こう側にいる少女が立ち上がり、傍にやってくる。そして、

「えいっ」

ポコッと肩に一発、軽すぎる衝撃。

元々の力が弱いのもあるが、それ以前に全く力の籠っていないパンチだった。

……なぜだ？

「君が記憶を無くした一因である俺が憎くないのか？　なんなら俺の股間を蹴ってくれても構わないんだぞ」

「そんなの嫌に決まってるでしょ！　それにアンタのせいだって決まってるじゃないし。あたしが頭をぶつけただけかもしれないし」

「頭をぶつけた程度で十年間の記憶が飛ぶことはまずないと思うが……」

「とにかく！　この話はもうお終い！　だけどあたしを捨てたパパとママを見つけたら、一緒に怒ってよね？」

「……あ、ああ。一緒に殴ってやろう。約束する」

強いな。

とても心の強くて、そして優しい子だ。

だからこそ、この子を捨てた親には五千年の歴史を持つ鉄拳制裁を下してやろう。絶対に。

「そういうアンタはどうして旅をしてるの？」

ついに俺の番がやってきた。

包み隠さず身の上を語ろうと思う。

なぜなら不死者であること以上の秘密はなく、それはすでに知れている。加えてこれはただの自己満足だが、少しでも誠意を示したい。

だから、話そう。

「一言で言えば『取り戻すため』かな」

「取り戻す？ 何を？」

「主に三つある。安住の地での暮らし、何もできずに過ぎ去った時間、そして記憶。歳のせいか、それとも誰かに消されたのかは定かではないが、記憶が抜け落ちているんだ。君と同じように」

実は出会った時から不思議と親近感が湧いていたんだ。

名前といい境遇といい、中々に似通っているからかもしれない。

「歳のせいって、アンタいくつなの？ 二十五くらいじゃないの？」

「惜しいよ、すごく惜しい。俺の実年齢は二十四」

「でしょ？」

「と五千二百歳だよ」

「……………なにそれ。あたしを馬鹿にしてるの？」

四十半ばを過ぎてからだったかな。実年齢を疑われるようになってたのは。

「最初は信じられないだろうけど、その内嫌でも知るようになるさ。年季の差というものをね」

「ふうん……………」

信じ込ませるために五千年の歴史を事細かに語ってもいいのだが、それを語り終えるには最低でも一月はかかるからな。

「まあそれは置いといて。ご婦人、スープのおかわりはいかがですかな？」

「うんー！」

それからしばらくの間、とりとめもない話をしながら温かな食事を楽しんだ。

会話を通じてカレンの扱い方も少しばかり分かるようになった。

「片付けも終わったし、そろそろ寝よう……いや、その前にだな」

危ない危ない。

夕食の後には普通、アレをしなければならなかったな。特に女の子には大切なアレを。

俺自身も千年以上していなかったせいですっかり忘れかけていた。

「なにかあるの?」

「服を脱ぎなさい」

「……………今、なんて?」

「どうした? 服を脱ぎなさいと言ったのだが……どれ、一人じゃできかないのなら手伝って」「——ふんツ!!」

カレンの服を脱がそうと、少し膝を曲げて腰に手をかけた瞬間だった。

衝撃が。

破城鎧に打ちつけられたような衝撃と鈍痛が下腹部に走った。

「な……………ぜ」

あまりの苦痛でその場に倒れてからカレンを見上げると、怒りと侮蔑の眼差しで俺を見下げていた。

「バカッ! ヘンタイツ! 死ねツ!!」

なぜそのような罵詈雑言を吐かれるのかが分からない。

ただお風呂に入れてあげようと思っただけなのに。

心臓を刺された時なんかよりも激しい苦痛が蓄積されてゆく。

……ああ、もう意識が持たない。

どうやら俺はカレンのことを少しも分かっていなかったよう、だ—

第五話 「驚愕と期待」

意識を取り戻した俺はゆっくりと目を見開いた。

目の前には変わらずこちらを見下げている少女の姿が。

「まだピンピンしてる……。もう一度やらなきゃ」

未だ冷静さを欠いているカレンが、またしても俺の息子を潰そうと足を振り上げる。

「ま、待ってくれカレン！ さっきので死んだから！ 本当に死んだから!!」

「……そのまま死んどけばいいのに！ バカ！ ヘンタイ！ ロリコン！」

「それは誤解だ！ 風呂だよ風呂。就寝前に風呂に入らせようとしたんだよ！」

「えっ?」

それから至極丁寧に事情を説明すると、なんとか怒りを収めてくれた。

「ごめんなさい。つい……」

「いや、俺も悪かったよ。カレンが大人の女性だったのをすっかり忘れていたよ」

歳の差考えろよ、五千歳差だぞ。俺からしたら君は赤ん坊、いや、胎児のようなものだ。欲情するわけないだろ。

などと言いたいところではあったが、それを言うと泣かれそうな気がしたのでそっと腹に飲み込んだ。

「それにしても、さっきのとんでもなく鋭い蹴りは一体誰から習ったんだい?」

まさか、こんなか細い少女がアレほどの蹴りを繰り出せるなんて。

確実に睾丸を潰し、ショック死に至らせるほどの殺人技を一体誰が教えたのだろうか。

「分かんない。実はさっきのは身体が勝手に動いて……」

つまり記憶を失う前に、身体に染み込むように教え込まれたというわけだ。

そしてそれを教え込んだのはきつと、名前も顔も知らない両親であろう。

捜し出した暁には、俺がやられた分をきつちり返してやろう。

「それじゃあ、そろそろ風呂に入っておこうかね」

「でも、こんな所にお風呂なんてあるの？」

「すぐそこにあるじゃないか」

俺の視線の先には透き通った水が流れている。

そこで魚を取ったり、スープを作るのにも使った。

今度は風呂として使わせてもらおうと思う。

「これ、お風呂じゃなくて川だよ？ 冷たい水だよ？」

「そうだね。冷たい水だね。じゃあ、これを風呂にするにはどうすると思う？」

「うーん……。このスープみたいに大きな器を作って、そこに水を汲んで燃やすとか？」

「三十点ってところかな。それだと時間がかかってしまう」

「じゃあどうするっていうのよ？」

「こうするんだ。」

「――《堤ツツミタル泥塊デイカイ》」

川辺に寄って手の平を地につけ、一つ魔法の言葉を唱えた。

するとすぐに川の底から粘土質の土が盛り上がり、温泉のように仕切りが作られる。

「そしてこうする。《生命イノチノ地熱チネツ》」

次に冷たい水の中に手を差し込み、また別の魔法を唱えた。

瞬く間に水温が上昇し、土壁で仕切られた中から白い湯気が立ち上る。

「最後に湯加減を調整して……………と。よし、完成だ！」

「わあ…………」

カレンの方を見やると、ものの数分で風呂を作ってしまったのを見て驚きを隠せないでいる。

「どうだい？ 簡単にできただろう？」

「今のは魔法、なのよね？」

「そうだよ。とても便利だろう？ カレンも使ってみたいのなら後々教えてあげよう。君にはエルフの血が流れているから十年も練習すればできるはずだ」

「…………あたし、もしかしたらできるかも」

「なんだって？」

魔法が使える、だと？

「うん、たぶんできると思う」

それは、子供ながらの強がりなんだよな？

幼少期特有の一度見れば自分もできると思い込んでしまう万能感だよな？

…………たしかに俺は簡単にやってみせたが、アレができるまでに五百年もの歳月を捧げたのだ。

才能のない人間は死ぬまでに魔法の一つも使えず、百人に一人の才を持つ人間でも何十年もの修練が必要だというのに。

いくらハーフェルフで魔法適性が高いとはいえ、十歳とそこらの小娘にできるわけがなかりうに。

そんな俺の戸惑いをよそにカレンは川縁でしゃがみ込み、地に手をつけた。そして、

「えつと…………《堤タル泥塊》！」

粘土質の土が川の底より隆起し、水の流れを堰き止める堤となる。

「《生命ノ地熱》!!」

堤で囲まれた水から、湯気が立ち上る。

「できたっー！」

あろうことかカレンは宣言通りに魔法を用い、俺が作ったのと同じものを完成させた。

……いや、まだだ。

「待て！ 手を見せなさい！」
「手？」

その場で飛び跳ねて喜んでいるカレンの手を取る。
たしかに風呂を完成させたとはいえ、完璧な温度調整までできるわけがない。

本人は興奮のあまり気付いていないだけで、水を温める際に火傷をしているかもしれないのだ。

俺だつて完璧な調整ができるようになるまでは何千回も肉を焦がし骨を焼いたのだ。

「大丈夫か？ ヒリヒリしないか？」

「ヒリヒリ？ 何も感じないけど……」

小さな手を押ししたり揉んだりして確かめてみるが、どこにも異常はないし本人も痛がったりはしない。

「それよりもほらっ！ あたしもできたよ！ ちゃんと確かめてよ！」

「あ、ああ」

カレンは大人の女性ゆえに「褒めて褒めて」とは口に出さないが、その姿は初めて作った花の冠や砂の城なんかを親に見せびらかす子供そのものだ。

まあ、火傷するほど熱していないとすれば人の体温程度にぬるいのだろう。それでも魔法を使えるという時点で十分褒めるに値する。

不死者ポイントを贈呈してあげよう。

「どれ……」

カレンが作った風呂に近づき、右手首までを差し込む。

するとすぐに骨の芯まで温かくなる。

それでいて熱すぎることもなく、このまま一気に肩まで浸かりたくなってしまう心地良さだ。

「これは夢、なのか？」

「何言ってるの？」

「いや、カレンが余りにも素晴らしいものを作ってしまったからさ」

「ほんとう？ やったあ！」

「それじゃあ俺は寢床を作っておくから、先に入っておきなさい」
「うん！」

カレンが恥ずかしがらないようにその場を離れると、すぐにバシヤンと飛び込む音と可愛らしい鼻歌が聞こえてきた。

俺はその間に寝心地の良さそうな柔らかい地面を見つけ、大人一人が横になれる大きさの布を敷いておく。

その上に枝で骨組みを作って網を被せれば、簡易型蚊帳の完成だ。寢袋については本人がちゃんと持ってきていたようだ。

ついでに俺が寝る用のハンモックを設置し、後はカレンが風呂からあがるのを待つのみとなった。

「……さて、と」

どすつと腰を下ろし、ぼんやりと揺れる火を眺めながら一人だけの精神世界に入った。

やっと抜け出せたばかりだというのに、今日はあまりにも刺激が多すぎる。想定外な事ばかりが起こる。

ここまで濃厚な一日は数十年に一度しかないだろう。

「ふうー……」

白湯を喉に流し込んでから、大きく息を吐いた。

そもそも何者なんだこの子は。

あの歳で完璧に魔法を使いこなし、いくら油断していたとはいえない俺をショック死させるほどの蹴りを放つ。

控え目に言っても天才、数百年に一人の逸材だ。さらにそれを教え込んだ周りの環境までもが超高水準であったことは容易に想像がつく。

それでいて記憶がないときたもんだ。

もしかしたら十三歳ではなく、千と十三歳ということはないな。あの言動は無邪気な子供そのものだ。

それともまさか、この千年の間に生物が急激な進化と成長を遂げたとしてもいいのか？

それから暫く生物の進化と変化について真剣に考察していたら、薄

汚れたポンチョの端を引っ張られた。

「ねえ。ねえってば」

「ああ、すまない。少し考え事をしていてね」

言いながら振り返ると、胸下まで伸びる髪をしつとりとさせた少女の姿があつた。

やはり何度見てもただの少女にしか見えない。髪の乾かし方すら知らない、無知で無邪気な子供だ。

「どれ、風邪をひかないように髪を乾かしてあげ……………もしかしてだけど、この魔法も使えるかい？」

「どれ？」

「その前に一緒に手を濡らしにいかうか」

「うん？」

二人して川の側に立ち、二人して手を濡らした。

「両手をこちらに向けてくれ」

「うん」

「ではいくよ。《飛沫シヅメヨ昇ノボレ》」

「わあ…………ちゃんど乾いた。これを髪にやればいいんでしょ？」

「まあ待ちなさい」

言うのは簡単だ。

だからこうやって一つずつ教え込んでいくしかない。

「しっかり俺の右手を見ておくんだ。《飛沫シヅメヨ昇ノボレ》」

水に濡れた手に魔法をかけるとすぐにそれは乾いた。

「……………えっ」

だけにとどまらず、体内の水分までをも奪い取ってゆく。

みるみるうちに皺み、萎み、干乾び、右肘から先が骨と皮だけのミイラと化した。

「な、なによこれ!？」

「これは水気を取り去る魔法なんだ。そして失敗すると体内の水分までもが奪われてこうなる……………これで迂闊に魔法を使つてはいけないことが分かっただろう？」

枯れ果てた右手を握つたり開いたりして、それが本物であることを

証明する。

「そんなことよりも大丈夫なの!? ちゃんと戻るのよね!」

「それはこうすれば……」

枯木の枝を折る要領で肘を逆方向に折り、

「ひっ!」

それを捻ってちぎり取り、

「うわ……」

最後にチヨロつと肘先を生やせば、

「これで元通り、つと。どうかな?」

新しく生やした手も握ったり開いたりして、これも本物であることを愕然としている少女に見せつけた。

とはいえ大丈夫だろうか。

カレンの心の強さを信じてワザと見せつけたが、これがトラウマになってしまうような人間は多いからなあ。

「どうって……いい、痛くないの?」

「四肢の欠損には慣れてるさ。親の顔より見たからね。痛いかどうかについてはまあ、痩せ我慢でなんとかなる程度だよ」

「やっぱり痛いんじゃない!」

カレンは人の痛みが分かる善い子であったよう。

「さあ、それらを踏まえてこの濡れている左手を乾かしてみなさい」

もう一度左手を水に浸けてから、カレンの目の前に差し出した。

「いやだ、やりたくない。もしも失敗したら……」

「酷いやカレンちゃん、ボクの犠牲は無駄だったのかい?」

どうせ拒否するのは目に見えていたので、下に落ちている右腕を拾って、その心中を腹話術にて訴えた。

「わ、分かったわよ。やればいいんですよ」

「やりたいようにやりなさい。俺の心配はしなくていい」

「……うん」

するとなんとも見事と言うべきか、酷く顔を強張らせていたのが一転して落ち着いた表情になった。

実は魔法を寸分の狂いなく用いるにあたって、心を落ち着かせるこ

とは最も大事な要素の一つなのだ。

カレンは言わずともそれができている。

やはりこの子に魔法を教えた者は賢者などと呼ばれるような偉大な魔法使いであったことに間違いない。

俺ほどではないだろうがな。

「《飛沫ヨ昇レ》!!」

意を決したカレンがそれを唱える。

最悪体中の水分が奪われるのを覚悟していたが、これは……。

「ねえ、大丈夫なの?」

さて、どうすべきか。

ベタ褒めするか、それとも素っ気なくするか。

魔法学院永世名誉学長の立場としては褒めちぎってやりたい。しかしそうすることで増長し、凶に乗ってしまうかもしれない。

そうした気の乱れや慢心から魔法を誤爆し、身を滅ぼした者達を数多く見てきたのだ。

「成功だ、何も問題はない。だけどこれから思い出した魔法を使う時は、必ず俺に言いなさい。勝手に使ってはいけないよ? いいね?」

「……うん、わかった」

だから認めながらも注意をした。

加えて乾かしてもらった手でぽんと頭を撫でてあげると小恥ずかしそうな顔になり、特に反抗することもなく俺の言葉を受け入れてくれた。

それから先に寝ておくように言いつけてから、消耗した心と体を癒すため風呂に入ることに。

「ふうー」

湯船に浸かってまず一つ、溜め息が零れた。

これだけ気が滅入れば溜め息が出るのは当たり前だ。

「……くくっ!」

しかしながら、次に漏れ出たのは笑いだった。

それも苦笑いなんかじゃない。

純粹にワクワクするのだ。

久方ぶりの広い世界、そして物珍しい少女との二人旅を前にして、
年甲斐もなく胸が躍っている。

「うーん、楽しい旅になりそうだあ……！」

その十数分後、うっかり眠りこけてしまったせいで溺れ死んだこと
は言うまでもない。

第六話 「私がお前の父親だ」

まだ日が頭を出したばかりで薄暗い中、何者かの咽び泣く声が俺を起こした。

当然この辺りには俺とカレンの二人しかいないわけで。

「ぐすつ……。待ってよパパ、ママ。おいてかないで……」

悪い夢を見ているのか。

頭の片隅に残された記憶が再生されているのか。

少女は眠りながらも苦悶の表情を浮かべ、目の端からは涙を流している。

「いやだ、死んじやだよ……」

「……大丈夫だよ。死んでもすぐに蘇るから」

寝言に答えてはいけなとよく言われるが、つい答えてしまった。

しかしこのまま話していけば、カレンの封じられた記憶を少しずつ引き出せるのでは？

「もう朝だぞ。起きろ起きろ」

などと邪な考えが脳裏をよぎったが、『エルフ街の悪夢』と呼ばれて恐れられたのは遠い過去のことだ。

今の俺はいたいけな少女が悲しむのを黙って見過ごせないほどに優しくなってしまった。

「ほーら帰ってこい帰ってこい。悪い夢から帰ってこーい！」

「……んん」

俺が呼びかけてすぐにむくりと起き上がり、目を擦り始める。

「おはよう、カレン」

「……おはよう」

それから二人並んで川で顔を洗ったのち、朝食を摂りはじめた。

「……ねえ」

「ん？」

「もしかしてあたし、泣いてた？」

せつかく何も聞いていないことにしてあげたのに、わざわざそっち

から言い出すなんて。

「そうだな」

「あたし、よく変な寝言を言って泣く癖があるみたいなの。ごめんなさい」

カレンはきつと我慢強い子なのだろう。

それでいてその小さな身には大きすぎる悲しみを背負っているのだ。

そして恥じらいに邪魔されて日中吐き出せない分を眠りながら吐き出す。

何も悪いことではない。

そんな少女に俺ができることは……。

「よし。君の親を見つけるまで、俺が君の父さんだ！」

「……………アンタ何言ってるの？」

「そのアンタ呼びも禁止だ。これからはアレンパパまたはアレンお父様と呼びなさい」

父代わりとなることだ。

「……………実を言うとなカレン、私がお前の父親なのだ！ 遠い国の言葉ではたしか……………アイ、アムユアファザー！」

「そんなの嘘よ！ そんなことあるわけないでしょ!!」

「心を読んでみる、本当だと分かるはずだ」

さすがにそれは冗談だとしてもだ。

いずれにしろ、この子に広い世界を見せてあげるために様々な国や街に寄り、多種多様な人種と出会おうだろう。

その際の身分はどうする？

『俺が五千歳超えの不死者で、こちらは記憶を無くした未成年の少女です』

などと馬鹿正直に言ってみたらどうなるか。

大抵の場合、衛兵に確保されて事情聴取からの投獄をくらう。運が悪けりや死刑、からの研究対象だ。

しかしこれが父と娘だったら何も問題はない。

「はあ……………。やっぱりアンタ、馬鹿なんじゃないの？」

「たしかに人見知りで人嫌いの気があるカレンには大変かもしれないが」

「えっ?」

「人と人は何かしら関わりができてしまうものなんだ。奴らはこちらから行かず、その上近寄るなど言っても力を求めて押し寄せてくる。そしてせっかく与えた力を誇りや大義などというくだらぬもののために使い、アツサリとその命を散らす。……馬鹿者が」

「ちよつと! いきなり何言ってるの? それにあたし、人嫌いでも人見知りでもないわよ!」

おっと。

つい遠い昔の馬鹿弟子達の事を思い出してしまった。

それはそうと人嫌いでも人見知りでもないと言ったか?

「子供達が君のことを人嫌いだと言っていたのだが、違うのかい?」

「それはその、あたしは大人だから子供の相手はしたくないだけよなるほど。」

「そうだなあ……。大人なカレンなら、この先どうすれば都合がいいか分かるはずだよ? それともなにかい、俺の首が刎ね飛ばされるのを見たいのかい?」

君はまだまだ子供だ、と言ってもどうせ頑として否定するのだ。

ならばそれを逆手に取らせてもらおう。

「それは、その」

「さあ言うんだ。アレンパパと」

「……卑怯者」

「老獺と言ってくれ。アレンお父様でも問題ないぞ?」

年の功というものだ。

君のような大人ぶった子供を絡めとるのは慣れているのだよ。

「ア……アレ……」

「年のせいかな耳が遠くてのう……。よく聞こえないなあ?」

「……………アレン!! これでいいでしょ!?! アレンパパはなんかイヤなの!」

「ああそれでいい。……よろしく、カレン」



朝食や寝床の片付けなどの後始末を全て終え、二人並んで歩き出す。

出てきた村とは反対方向に道なりに歩き続けてしばらくすると。

「ねえアレン、あそこに誰かいるよ」

「あれはたぶん行商人だね」

道端に一台の荷馬車が停まっているのが見えた。

そのすぐ近くの木の下では一人の男性が腰を下ろしている。

「おじさん、おはよう！」

近づくと、俺がするより先にカレンが飛び出して元気よく挨拶をした。

それを見る限りたしかに人見知りでも人嫌いでもないようだ。

「よう嬢ちゃん。これから親父さんとピクニックにでも行くのかい？」

「うん、だいたいそんなところ。それでおじさんはギョーショーニンなの？」

「おうそうだ。そこに積んであるものは全部売り物だから好きに見ていってくれ。欲しい物があつたら親父さんが買ってくれるってよ。それに嬢ちゃんはべっぴんさんだから値引きしてやる」

「ほんと!？」

カレンが商人と俺を交互に見て言う。

その「ほんと」は値引き発言と俺への両方に対する確認だった。

しかし値引きと言ってもどうせ、元から銀貨一枚のものを銀貨二枚で売り、それを値引きで半額にしてやるなどというアレだろう。

「おう、全部半額にしてやるぜ」
ほら。

「ねえー！ 全部半額だってよアレン！」

そして子供はそれにまんまと騙される、と。

後でそういう仕組みについても教えてやらないとな。

「……銀貨三枚までだ」

「わあい！」

そして子供を盾にされることで大人は断れなくなる、と。
俺もまだまだ甘いな。

「どれにするかな、どれがいいかなあ」

浮き足立って商品を物色しているカレンをよそに、今のうちに聞き込みをしておこう。

「やあ。銀貨三枚分お聞きしたいことがあるのだけど、よろしいかな？」

「おう、いいぜ」

「まずはこの地図なんですけどね」

村で買っておいた地図を取り出して広げた。

世界は陸地と海の割合が半々で、中央には主に人間の住まう巨大な大陸が一つ。

北東にはその三分の一程度の大陸が。ここは主に魔人が住んでいるので封魔大陸だの魔界だのと呼ばれている。

中央大陸の西にはさらに封魔大陸の三分の一程度の大陸がある……がしかし俺はこの大陸を知らない。俺の記憶が正しければ、千年前の地図にはこんな大陸は無かったはずだ。

「ここにルーフンダという国があります？」

中央大陸の南東部を指差して尋ねる。

この辺りには千年前、海洋貿易と貴金属の採掘で栄えた巨大な商業国家が存在していたはずだ。

「それはもしかして、大昔に滅んだ国のことを言ってるのか？」

「ああ、滅んだんですか。ならここは——」

それから数分ほど聞き込みを続けて、

「——なんだ旦那、まるで千年も眠ってたみてえにズレてんな」「い……いやあ、実は昨日頭を打ってしまいましたね。ハハハ」

俺の知っている国はほとんど滅び失せたか、名前が変わっていた。これがいわゆる世代ズレ、ジエネレーションギャップなのだろう。それと俺の知らない西の大陸は、ちょうど千年ほど前に現れたらし

い。

大陸が急に現れるなんてのは自然ではまずありえないので、何かしら人為的な力が関わっているに違いない。後で観に行かなくては。

「それで世界情勢の方はどんなもんで？ 平和な世界になりましたか？」

「何ボケたこと言ってるんだ？ 北では魔獣が溢れ、西でも東でも戦火は消えず、南では疫病と飢饉が蔓延して酷えことになってるらしいぜ。それこそ平和なのは西の大陸ぐらいだよ」

「そこまでとは……」

予想の斜め上に行く暗黒時代であることに、言葉を失ってしまった。

千年前はせいぜい亜人種の反乱や革命が流行していた程度だったのになあ。

もつとも、俺が見てきた中で完全な世界平和などというものは一度も訪れなかったのだが。

ある場所で平和と幸福を噛み締めている者がいるのなら、必ず別の場所で酸を嚼っている者がいるのがこの世の常というものだ。

それでもこうも酷いとなると、まだ五百年くらいは石の中に入れてよかったかもしれない。

そんなことを考えても割れてしまったものはどうにもならないので、そろそろ行くとするかな。

「どうだカレン、何を買うか決まったか？」

「うん。おじさん、これを二つちようだい！」

「あいよ。まいどあり！」

カレンが三枚の銀貨と引き換えに手に入れたのは笛。昔ながらの小さな石笛だった。

それだけ買うと、カレンは行商人のおじさんに手を振って歩き出す。

そして馬車が見えなくなってからすぐに笛を二つ手に取り、

「はいこれ。アレンの分」

「おお、ありがとう」

片方を俺に手渡してくれた。

本当にいい子だのう。いつそのまま養子にしてしまおうか？

「えーと、こうやって…………。あれ、うまく吹けない」

いくつも穴の空いた石笛に必死に息を吹き込んではいるが、まともな音を出せずに苦戦している。

そんなカレンを見て少しホツとした自分がいる。

魔法や武術の才能だけでなく、音楽の才能まであったらどうしようかと案じていたのだ。

……どれ、見せてやろう。

「いいかカレン。これはこうやって吹くんだ」

いくつかの穴を指先で押さえ、笛に息を吹き込む。

ピーーと、鳥の囀りの如き音が鳴り響く。

「わあ、綺麗な音。もしかして何か曲も吹けたりするの?」

「もちろんだとも。それでは一曲聴かせてあげよう」

カレンの求めに応じて石笛を吹き鳴らす。

思い浮かべるは親しかった者達、行き交った国々、そして様々な理由で死んでいった俺自身。

物悲しい音色が鳴り響き、風に乗って運ばれてゆく。

「……ふう。どうかな」

「なんで、そんなに上手いの?」

「練習したからさ。たしか千歳半ばくらいだったかな。音楽だけで食っていこうとした時期があつてね。百年ほど音楽に打ち込んだんだ」

そして百年かけて判明したのは、やはり俺に才能は無かったという事実だがね。

「へえ……。それにしても今のはなんて曲なの? とても懐かしくて、とても悲しかったの」

「レクイエム、つまり鎮魂歌だよ」

「なにそれ?」

「死んだ者に捧げる曲さ。この曲だけは誰よりも上手に弾ける自信が

あるんだ。不死者だからね」

さらに言えばレクイエムのレパートリーだけは百曲を超えている。

これについても少しずつ教え込んでいこうと思う。

「……へんなの」

第七話 「臨終食」

川沿いの一本道を歩き続け、ついに選択の時間が訪れた。「分かれ道だけど、どうするの?」

少し先を歩いてきたカレンが足を止め、振り返って尋ねてくる。このまま真っ直ぐには川沿いの道が続いている。川の上流へと向かう道だ。

左手には川橋が架かっており、その先には鬱蒼と茂る森の中へと続く道が。

一転して右手の道は低木や草花がまばらに植生するただっ広い草原に伸びている。

「三択だね。どの道に行けばカレンの両親に出会えると思う?」

「んー……わかんないや。なんかそういう魔法はないの?」

「あるにはあるよ。だけどそれには探したい人の持ち物が必要なんだ。お父さんのペンとかお母さんのお飾りとか、何か持っているかい?」

その問いかけに対し、カレンは首を横に振る。

これはもう、仕方のないことだ。

記憶を消すほどに用意周到な奴が所持品を残すわけがない。

なのでこの方法を取るのが一番良いだろう。

「これを持って」

そこら辺に落ちている棒切れを拾い、それをカレンに持たせた。途端に眉をひそませて、不安げな顔になる。

「これってまさか」

「そのまさかだ。それを落とし、倒れた先に君の両親はいる、はずだ」「やっぱり運任せじゃない! はずって何よ、はずって!?!」

「手がかりは何も無く、魔法の類も使えない、となるとこれしかないだろう? 他に何か方法があるのなら教えてくれ」

「それは……」

俺の言葉を受けてバツが悪そうに口籠もる。

だからといって何も悪いことではない、五千歳の知恵者でもお手上

げなのだ。

悪いのは何の手がかりも残さなかった両親と、この世界だ。

「大丈夫だ。君なら上手くいく」

俺のような神々に嫌われた男がそれをやろうとしたら確実に失敗するだろうが、きつとこの子は神々に愛されている。

カレンが求めるものは与えられ、自らの望みを叶えるために運命を捻じ曲げることだってできるだろう。

この先の人生で窮地に陥った際には、必ずや強い味方がカレンに救いの手を差し伸べるだろう。

そう思えるほどに祝福された少女の運任せが外れるだろうか。外れるわけがない。

「もう、分かったわよ。……えいっ！」

カレンが両手をパツと離し、その間に挟まっていた棒切れがストーンと落ちる。

僅かに土を抉った棒切れがパタンと倒れ……………

「倒れない……だど？」

信じられないことに棒切れは奇妙なバランスを保ったまま、完全には倒れずに傾いたままになっているではないか。

その先端は俺の顔を……いや、その背後にある太陽を指している。

「ねえアレン、これは」

「なるほどなるほど、君の親御さんはお天道様に住んでいるんだね……ってなるかバカツ!! ……もう一度やってごらん」

「う、うん」

流星にこの俺でも太陽に達することはまず無理なので、もう一度やらせることにする。

それでも知り合いの天文学者が言うには、二万年ほど時間をかければ辿り着けるらしい。のだが、たった千年間石の中に閉じ込められただけでも気が狂ったので絶対に行く気はない。

「えいっ！」

先ほどと同じようにカレンが棒切れを手放す。

今度こそ棒切れはパタンと倒れ、川に架かる橋と、その先でひしめ

く深緑を指していた。

「怖くはないかい？ 今ならあつちの平原に変えてもいいんだよ」

「怖くなんかないってば！」

カレンはそれを証明するかのようになり、一人走って森の中へ消えていった。

うむ、元気があつて大変よろしい。

◆◆

足の裏に感じるしつとりとした土の感触に、老若様々な草木の香りが鼻腔をくすぐる。

目を閉じれば、どこからともなく虫の声や小さな獣の走り回る音が鮮明に聞こえてくる。

無垢なる生命の集いし所、それが森。

それなのに不思議と静かで、俗世で疲れ切った心を癒してくれる。

やはり森は良いものだ。

「少々頂戴いたす」

垂れ下がった枝に見覚えのある赤い実が無数に成っていたので三粒摘み取った。

そして口に投げ入れると、クセになる甘酸っぱさに満たされる。

「カレンの分も持っていくか」

追加で実を二十ほど摘み取ってから足早に歩く。

すぐに道の端でしゃがみ込んでいる少女が目に入った。

「どうしたカレン、そこに何かいるのか？」

「これ、食べれるかな」

カレンが指で軽くつついているのは、黄色い斑点の入った拳大の白キノコであった。

「これはそうだなあ……。俺が食べていいと言ってから食べるんだ」

「うん？」

「絶対にだよ、いいね？」

「……うん」

「それじゃ、お一つ頂戴して……」

焦がしたバターに似た香りを放つそれを一つもぎ取り、そのまま生で齧り付く。

とても肉厚で噛み締めるたび、ジュワツと濃い汁が溢れ出る。

もしも知らない人が口にしたら、キノコではなく肉だと勘違いしてしまうほど濃厚な旨みが口いっぱいに広がり、半強制的に頬が緩む。

「久しぶりに食べたけど、やっぱり美味しいなあ……。生きてるって素晴らしいねえ」

「ねえー、まだなの？ あたしも早く食べたいのに！」

「まあ待ちなさい。もうすぐ表れるはずだから。それまでこっちの赤い実を食べていなさい」

「むうー……」

カレンが実を頬張るのを眺めながら数分経ち、やっと身体に異変を感じるようになった。

それでは一生忘れることのないように、アレン先生の特別授業にて教えてあげるとしよう。

「このキノコの名前はオカエシダケと言うんだ」

もう一つそれをもぎ取ってカレンによく見せる。

その際に小指が一本抜け落ちたが、気付いてはいないようだ。

「オカエシダケはその美味しさから、死ぬ間際に食べたい『臨終食』の一つに数えられているんだ」

「そんなに美味しいなら早く食べさせてよー！」

「おっと、その前に一つ問題だ。どうしてオカエシダケなんて名前だと思う？ これに答えた後に食べさせてあげよう」

「ううん……」

カレンは目を細め、眉間に皺を寄せ、小さな頭を抱えて模索している。

そのせいか俺の左手が酷く黒ずみ、今にも腐り落ちそうなことから気付いていない。

「――分かった！ 何かお返しをしたくなるほど美味し……。キヤアーツ!!」

「やっと気付いたようだね」

文字通り俺の両目が飛び出てから、ようやく答えを見つけ出したよ
うで。

「なっ、なんなのよそれ!? なんで目も鼻もないの!?!」

「よく見ろ、左手と右足もないぞ」

「うわ、本当に……って、言ってる場合じゃないでしょ! どうするの
よそれ!?!」

「こうする」

なるべく血で服を汚さないために、眼窩の奥に小枝を差し込んで捻
り、一度死ぬことに。

そして目が覚めるといつも通りの身体に。

「アレン! ねえアレン!?! 大丈夫なの!?!」

起き上がるとすぐにカレンが揺さぶってきた。

俺の両肩をぎゅっと掴んで離そうとしない。

そして人形のように整った顔を少し、いやかなり泣き出しそうに歪
ませてくれて大変嬉しく思う。

「ああ、心配してくれてありがとう。ちよつと死んで綺麗な身体に戻
しただけだから大丈夫さ」

「それは大丈夫って言わないわよ!」

どんな死に方をしようが傷一つない体で蘇ることを伝えてはいる
が、やはり定命の者がそう簡単に受け入れることはできないか。

とはいえ子供にしては信じられない耐性を持っている。

普通は腐りゆく人間なんてものを見たら吐いて当たり前、下手すれ
ば一生消えない心の傷を負うかもしれないというのに。

まるでそんなものは何度も見たから慣れていと言わんばかりだ。

俺の死についても、そのうち慣れるのを気長に待つとしよう。

「では気を取り直してさっきの続きだ。カレンの答えはたしか……
『お返しをしたくなるほど美味しいから』だったね?」

「……うん」

「それだと半分正解ってところかな。実はオカエシダケを取って食べ
るとすぐに身体が腐り、崩れ落ちるんだ。そしてそれが土に還り、次

のオカエシダケのための栄養となる」

それはついさつきまで体の一部だったものが証明している。

腐臭を放つそれらは時間をかけて土に溶け込み、新たな生命の糧になるだろう。

森へお還り。

「つまり正解は、『オカエシダケを食べたらその体でお返しをしなきゃならないから』でした！ ……さあカレン、食べていいぞ」

「食べるわけないでしょ!! バカ！」

第八話 「天の肉」

「これはなんて実なの？」

「これはケツシユウの実と言ってね、食べると三時間後に全身から血を嘔き出して死んでしまうんだ」

「うわあ……」

何であれ、カレンの気になったものがあればその場で事細かに教え込み、

「おや？ この種類のキノコは見たことがないな。カレン、これについて分かるかい？」

「わかんない」

「どれ、実食してみよう。……うん、臭みはないしアツサリとしていて美味だね」

「ねえ、大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫……ブフツ！」

「アレン!？」

「どうやら即効性の……猛毒を持って……い——」

「アレン!?! ねえアレンってば！ 起きてよ!!」

千年前には存在しなかった種を見つけるたびに心と臓を激しく動悸させ、

「ツルをこうやって結べば……これで完成だ！」

「わあ、すごい」

「そしてあの木で佇んでいる鳥に狙いを定め、決して動くなよと願いを込めて……はっ！」

「当たった！ ……でも、可哀そうだよ」

「そうだ、その気持ちを忘れてはいけない。もう一つ、感謝の気持ちもだ。そしてその気持ちを表すためには獲物を無駄なく使い切る必要

があるんだ。それじゃあ早速、捌き方を覚えてみようか」
「……うん」

投石具や即席弓の作り方、狩りの仕方、さらには獲物の捌き方なんかを手取り足取り教えているとすぐに腹の音が鳴り出した。

いずれ自立したときのために料理についても教え込んでみるが、やはり筋が良い、良すぎる。

俺は宮廷料理長の座に立つまでに五十年の月日を要したが、この子はたった数年修行するだけで同じ場所に登ってこれるだろう。

「いただきます！」

「召し上がれ。今回は噛み応えのある物が多いから、しっかりとよく噛んで残さずに食べるんだよ」

「うん、わかった！」

道中で見つけた切り株をテーブル代わりにして、出来上がったものから次々乗せていく。

やはりエルフの血が混じっているからか、森の幸づくしの皿に少しばかり昂っているように思える。それに俺が大半を手伝ったものの、自分で作ったからというのもあるだろう。

「どうだい？ 自分で作った料理はおいしいだろう？」

「うん！ すごくおいしいっ！ アレンも早く食べようよ！ アレン鍋だっけ、まだできないの？」

「もう少しだ………よし、これくらいでいいだろう」

土の魔法で造形した釜戸の火を消し、そこで煮ていた片手鍋をそのまま切り株の上に移し、俺自身もカレンの対面に腰を下ろした。

「では俺も、いただきます」

カレンの皿を少しつかせてもらったりもするが、俺の主な食事はこの具沢山アレン鍋である。

この鍋には採取したばかりの新鮮な森の恵みを全て投入しているので、栄養価はすこぶる高い。

もちろん味の方も満足のいくように仕上げている。長年の経験と直感を最大限に生かし、甘味と酸味と苦味と塩味を違和感なく混ぜ合

わせた。

とはいえなぜか世間はこのアレン鍋を闇鍋と評するのだが、俺は絶対に認めない。多少ヘドロに似ていたり、濁った虹色だったりするのを闇と形容するのは如何なものかと思う。

「それ、すごい色をしてるけど、ちゃんと食べられるの?」

「当然だ。……うん! 美味しい!」

今回のアレン鍋は黒ずんだ緑色をしているだけなのに、味の問題以前の問いかけをされるだなんて。

だから鍋ごと持って豪快に啜り、少し大げさに美味しさを表現してやった。

「へえ……。あたしも食べていい?」

「もちろんいいとも! ああそれと、ちゃんと具を確認してから食べなさい。当たり外れがあるからね」

「えっ?」

それだけ忠告してカレンの前に鍋を差し出すと、神妙な面持ちで中身をぐるぐるかき混ぜて、どんな具があるのか、当たり外れとはどういうことなのかを探り始めた。

「これって、もしかして……」

そうして救い上げたのは、黄色い斑点を持つ白キノコ。

死ぬ前に食べたいと言われるほどに美味な食材である。

「もちろんそれはオカエシダケさ。うまく当たりの具を引いたね」

「バカなの!」

カレンはすぐにスプーンを裏返し、それをポチャンと鍋の中に落とした。

「馬鹿とは心外な」

「本当にこれを食べる気だったの!? 猛毒なのよ!? 食べたら死んじゃうのよ!」

「ああそうだ。不味かろうが毒があろうが残さず食べる。腹を満たすために命を刈り取ったからには、責任を持って全て食す。これが不死者の流儀だ」

定命の者にだって毒を食らいはせずとも同じことを大切にする者

はいる。それが不死者だと毒まで含まれるだけのことだ。

「毒を食えとまでは言わないが、自分で獲った物は責任を持って食べなさい。感謝のおじぎもするのだ！ カレン！」

「……はあ、わかったわよ」

決して間違ったことを言っていないと断言できるのだが、やはり他の者達がしたのと同じように呆れた目で見られてしまう。

悲しいかな。

「他にも怪しい具が入ってそう……えっ？」

なおもスプーンでかき混ぜて鍋を探っているカレンだが、また何かを見つけたようだ。

「何か今、ヘンなのが………きやあっ!!」

次いで可愛らしい悲鳴を上げ、驚きの余りスプーンを鍋の中に落としてしまったではないか。

「どうした？」

「ゆっ……ゆゆゆ、指がつ！」

「ああ、これか」

沈んだスプーンを拾い、恐らくカレンが見たであろうものを掬い上げた。

鍋の水分を吸って少し膨らんだ干し指である。

「何よそれ!?!」

「何って、親指だが？」

「親指だが、じゃないわよー」

なんてことはないただの親指だ。

昨日の晩に生産した乾燥腕から切り取り、塩と香草をすり込んだものだ。

これが鍋にはとてもよく合う。

「食べないのか？」

「食べないわよー」

「爪は剥いで食べやすくしてあるし、味付けだってちゃんとしてあるぞ。ああでも、骨は抜かずにそのままだな」

「そういう問題じゃないでしょ!?!」

「小指と薬指も入れてあるから、遠慮せずに食べてくれ」
それを聞いたカレンはより一層顔を曇らせる。

……はあ、そんなに人肉を食べるのが嫌なものかね。

人特有の牛や豚の手足は食べるくせに、人の形をした手足は食えないという習性は、相変わらず勝手にすぎると思う。

元が何であれ、加工してしまえばタダの肉、貴重なタンパク源だというのに。なぜそれが理解できない。

ここは教育者として、しっかりと教え込んでやらねばなるまい。

「ではそうだね、カレンはこんな昔話を知っているかい——」

昔々ある所に、小さな村が二つあった。

ある時その地域を大規模な干ばつが襲い、田畑は枯れ果て、野の獣達も死に失せてしまう。

そうしていよいよ食べるものが底を尽きかけた時、一人の旅人が訪れた。

空腹のために今にも倒れそうな男は両方の村に寄って、「飯を分けてくれ」と頼んだという。

片方の村は残り少ない食料を切り崩してその男に分け与えたが、もう片方の村ではその男をすぐに追い出した。さらにあるうことか男を襲って殺し、僅かな金品すらも奪ってしまったのだ！

「ひどい話……」

最初に食料を与えた親切な村の人達は、変わり果てた男を見つけると嘆き悲しみ、丁重に埋葬してやった。

すると後日、不思議なことが起こったという。

『畑に作物が実っておる！ 天の恵みじゃ！』

『こつちにはいい匂いのする不思議な肉が！ これは天の肉だ！』

昨日までカラカラに干乾びていた田畑に農作物が実り、また別の場所では不思議な形の肉が大量に生えていたのだ。

そして村の人々は気付いた。肉の生えている場所は、あの旅人の男を埋葬した場所だと。

それからすぐに死体を掘り起こそうとしたが、一体どこへ消えたのか骨の一本すら見つからなかった。

『やはりあのお方は神様の使いだったのだ！』

しばらく経って気候は元通りになり、干ばつは収まった。

もちろん親切な村の人々は皆生き残ったが、もう一つの村は人が消え去り廃村と化していた。

「そして今でも世界のどこかで、その親切な村は繁栄しているとき……とまあ、よくある教訓じみた昔話だ」

「ふうん……。でもこの話って、『人に親切にきなさい』ってことを言いたいだけでしょ？ 人肉とは何も関係ないじゃない」

「そう言うだろうと思ったよ。だから予備知識を教えてあげよう」

心温まる昔話が、一転して怪談に変わるかもしれない予備知識を。

「一つ、不思議なことに旅人の名は俺と同じ『アレン』だ。二つ、俺はその村を訪れた経験がある。そして三つ、話の原本には天の肉は人の手足に似た形であると記されている」

「ウソ……」

くくく、狼狽えておる狼狽えておる。

早く受け入れるがいい小童よ、受け入れるしかないのだ。

これこそが世界の真実なのだ。

「ちなみに天の肉はこの話だけではなく、ミギウエ島戦記やスタルバー登山録などといった世界中の伝承・民話にも度々登場する。この意味が分かるね？」

「そんな……」

アレン肉は幾度となく人と土地を救ってきた。

もはや世界三大作物の一つと言っても過言ではない。

「……だからって食べたりしないわよ！ 絶対に！」

しかし少女は俺と鍋から目を背け、自分の料理だけを黙って食べ始めた。

それから食事が終わるまで、カレンが鍋に触れることはなかった。やれやれ、お子様の食わず嫌いには困ったものだ。

第九話 「超へイワ的措施」

「よし、そろそろ出発するぞカレン」
「うん」

まだ日差しがやわらかい早朝。
きちんと後始末をし、荷物をまとめ、森を抜けるべく出発した。

半日も歩けば森を抜けると聞いたので、昨日のうちにと思ってたのだが。

「ねえアレン！ あの鳥はなんて鳥？」

「あの鳥はたしか、ホトトトキって鳥だったかな。クチバシを焼いて塩をふって食べると美味しいよ」

「そこまで聞いてないんだけど……。じゃあ、この実はなんて実？ 食べれる？」

「これはサライブドウと言ってね、食べると……………」

「…………アレン？ ねえアレン!!? もしかして死んだの!?!」

このように度々足や心臓を止めてきたので、丸一日経った今でも景色はほとんど変わらない。

ただ、人里に近いこともあつてか危険な猛獣や魔獣などは一切見当たらなかったのが唯一の救いだ。

俺以外の血の匂いもしなかった。

とはいえ森の中が危険であることには変わりないので、カレンには辛いかもしれないが少しばかり歩を早くしようと思う。

それから黙々と土を踏み続け、曲がりくねった道を辿り続け、大体六時間程度だろうか。

まだ太陽が真上にある内に深緑の終点が現れた……………だけならよかったのだが、ツイてないな。ここまで気配すらなかったというのに。

「あそこに何かいるけど、見える？」

「見えるとも」

森の出口で待ち受けるように子供の背丈ほどの影が三つ、小刻みに

揺れている。

「……あれは犬、だよな？」

「そうだよ。ああ、運が悪いなあ……」

「運が悪い？」

一見オオカミと間違えてしまいそうな大き目の野犬が三匹。

その足元には血に塗れたウサギか何かの小動物の亡骸が一つ。

よく見るとあばら骨が浮き出るほどに痩せ細った野犬がジツと見据えるは、俺とカレンという二人の人間。

以上の事より導き出せる思考は一つ、

「あの犬っころは今『ハラヘツタ、ニンゲンタバタイ』……なんて思っているだろうね」

「……なによそれ。犬の言葉が分かるの？」

獣の言葉など分かるわけがない。

ただ、どの本能が働いているかは経験を元に推測できる。

あの目をした獣には幾度となくハラワタを食されてきたのだから。

それをカレンに話すと、少し引きながらも納得してくれた。

「なら早く逃げようよ！」

「無駄だよ、すぐに追いつかれる。仮に木の上に登ったとしても彼らは死ぬまで待ち続けるだろう」

稀に登ってくる奴もいるし。

「というわけで、だ。今から三つ選択肢を与える。一番マシだと思うものを選びなさい」

「……うん」

「その一、焼いて食べる。昼飯は犬鍋だ」

「やだ！・ かわいそう！」

一方的に狩れる鳥や小動物相手ならともかく、自分を殺しにくる相手に慈悲の心を向けるか。

それが許されるのはある程度の力を持つ強者か、本当に命を捨ててもいい覚悟のある者だけだというのに。

「ではその二、これは平和的な解決法だ」

「うん！」

「俺とカレンが素直に餌になる」

「もつとヤダア!!」

首を左右に激しく振り、カレンは頑としてこれを拒む。

殺すのは嫌、殺されるのも嫌ときたか。

「いつの時代も子供というのはワガママなものだ」

「当たり前でしょ!?! 子供じゃなくても嫌に決まってるわよ!」

もちろん俺が言う子供とは、五千歳の不死者から見た子供だ。

具体的に言うとなん百歳以下の者のことである。

「それじゃ、消去法で三つ目に決まりだな」

「待って! それはどんなやり方なの!?!」

「何、心配することはない。腹を空かせた犬畜生が満足して、我々も幸せな気持ちになる。それでいて誰も死ぬことのない超ヘイワ的措置さ」

「それならいいんだけど……」

想定通りにカレンの同意を得ることができたので、始めるとしよう。

「ではカレン、少しの間俺の手を持っていてくれ」

カレンに向けて左腕を伸ばす。

少し困惑しながらも俺が言った通りに支えてくれた。

これで安心して左肩から先の神経を遮断することができる。

「マト《纏工薄氷》」

「えっ?」

一つ魔法の言葉を唱える。

すると右手の小指の先から手首までにひやりとしたものが纏わり、肉を切り裂く刃へ変わった。

「フウ……。よし、やるか」

「ちよつと待ってよ! それで何を——」

——スパツ、と。

カレンが言うよりも早く、俺は肘関節に刃を落とした。

前腕が切り離され、一人残された上腕がだらりと下を向いて赤い涙を垂れ流す。

「ひっ!? なっ……あ……」

カレンの顔からも、俺の上腕から血が抜けていくのと同じように血の気が引き、口をパクパクとさせている。

そして僅かな時間だけ支えていた俺の左腕を手放した。

「ねえ! ウソでしょ!? まさかこれを餌にするつもりなの!」

「その通り。何本か俺の腕を切り取って彼らに与える。ほら、次も頼むよ」

新しく前腕を生やし、神経を遮断しているために腕を動かせないの
で肩を差し出してサインをするも、カレンはそれを支えてはくれない。
い。

「どうやらこれ以上はアレン肉を生産してほしくないようだ。」

「気に病むことはない。この通り左腕の感覚を無くしてあるのだから、痛みだつて感じやしない」

何も俺の腕を切断しろと強要しているわけじゃない、ただ持つて支えるだけだ。

例えるならそう、薪割り台に薪をセットするだけの仕事と同じだ。

今のところ人肉を切り裂く感覚というものを教えるつもりはないのだから。

「それでも嫌だというのなら、俺が一人で行つて食われてこようか。それともまとめて焼き殺してあげようか?」

ある程度強くなるまで、犬畜生共には少なく見積もつても二千回は食われてきたんだ。

俺も何度か君達を狩つて食したことはあるが、君達の先祖に食わせてやった分はまだまだ清算しきれていないぞ?

望みとあればいつでも借りを返してやろう。

「……わ、わかつたわよ」

俺がそこまで言うとかレンはぎゅつと目を瞑り、それから俺の左手を掴んで引つ張つてくれた。

「はやく、おわらせてよ……」

「善処しよう」

カレンが震える声で懇願する。

俺はそれに応えるために一振りで確実に骨と骨の間に刃を入れる。そうして切り離れた反動が伝わると、これまたカレンは体をビクツと震わせて、アレン肉を足元にドサツと落としていく。

そして新しい腕を生やす。

これらを繰り返すこと早十回。

「……さて、これくらいあれば十分か」

地面に並べられた十本の前腕が、血溜まりを作っている。

「やっと、終わったの……?」

「もう終わりだ。よく我慢したなカレン、えらいぞ」

今のでカレンは大分憔悴してしまったようだ。

だから俺は新品の腕でそっと抱き寄せ、赤毛混じりの黒髪を優しく撫でてやった。

「いやあ、すまないね。昔だったら痛覚だけを遮断して一人で出来ただけで、最近はめつきりやってなくてねえ……。あとで練習しておくから」

「そういう問題じゃない………ばかあ」

俺が抱き寄せたものの、この状態で詰め寄られて囲まれても困るので一旦カレンを引き離す。

そして並べた前腕の断面を炙って止血し、根菜や魚にするのと同じように手首を紐で縛って束ねた。

これで獣用アレン肉の加工は完了だ。

「いいかカレン、絶対に怯えを見せてはいけないよ? 恐れで足を止め、背を向けた瞬間に彼らは襲い掛かってくるからね?」

「……うん、わかった」

決して歩を早めることも緩めることもなく。

通常通りの歩幅で森の出口——飢えた獣が待ち構える場所へ向かう。

「グルルルル……」

あと十歩進めばその鼻先に触れられるところまでやってきた。

獯猛さを強調する唸り声がハッキリと聞こえ、死臭混じりの獣臭さも嗅ぎ取れるほどの距離だ。

そこで俺とカレンが歩みを止めると、二頭の野犬がにじり足で少し広がる。

血に汚れた鋭い牙をむき出しにして、「絶対に逃がさない。必ず両方喰らってやる」という意志の籠った動きを見せてくる。

それだけ追い詰められているのだ、何日もまともな食事にありつけていないのだろう。

「ア……アレ、ン……」

「ふふふ、どうだ怖いか？ 村で飼われていた子犬なんかとは一味違うだろう？」

パパにしがみついてもいいんだよ。

なんて冗談を言ってもあげてもカレンはピクリとも動かない。命無き鉄の人形のように固まって動かない。

それでも野生の殺意を真正面から受けて、気を失わずに立っているだけでも大したものだ。粗相すらしていないとは！

「さーて、餌の時間だぞー！」

このまま野犬が襲い掛かってくるのが先か、カレンの精神が擦切れるのが先かを待ってみるのも一興だが、それをすると終わった後で酷く怒られそうなので、素直に餌やりを済ませることに。

「ほれ、ほれ、ほれっと」

腕束から三本抜き取り、奪い合うことのないようにテンポよく彼らの目の前に投げつけてやる。

しかしすぐには食いつかない。

待ち伏せして囲む程度の知能と警戒心はあるのだから、いくら飢えているとはいえ、突然与えられた餌に即座に食いつきはしない。

「ね……ねえ、アレン。もしかして生きて肉にしか興味がないんじゃないか……」

「おや？ 冗談まで言えるようになるなんて、ずいぶんと余裕じゃないか」

「じよ……冗談じゃないってば」

「まあ黙って見ておきなさい」

そのまま一分程度待つとついに、一番左の野犬がそれに齧りついた。

前腕の一番太い部分を豪快に食い千切り、ほとんど嘔まずに飲み込む。

そうして毒がないことを確かめると仲間の顔を見て軽く吠え、それを受けて残りの二頭もアレン肉を貪り出す。

「今のうちに、逃げるっていうのは」

「できないよ。よく見るんだ」

命を繋ぐ肉をガツガツと貪っているが、夢中になってはいない。

三頭のうちの必ず一頭が俺達をチラチラと見ている。

真ん中のリーダーらしき犬に至っては顎が地面に当たるほどに姿勢を低くして、常にこちらを見上げながら肉を食べている。

まるで川の水を手で掬い、周囲を警戒しながら啜る用心深く優秀な戦士のようだ。

となればそう簡単に逃がしてはくれないに決まっている。

そうして観察しているとアレン肉の骨が少しずつむき出しになり、食べられる部分が少なくなってきた。

「次、カレンもやってみるかい？」

「あ、あたしは別に……」

「カレンが平和を望むならこれを多用することになるのだから、今のうちに慣れておいた方がいい」

などと軽く言いくるめ、半ば強引に食用腕を一本持たせた。

まだ温かさの残る新鮮な腕を手にして、あどけない顔をひどく歪ませている。

「投げるんだ」

「うう……えいつ」

カレンが投げた腕は縦に回転しながら綺麗な弧を描き、見事野犬の目の前に突き刺さった。

「はい次、あと二本！」

二本目三本目と、カレンの狙った通りに腕が突き刺さり、野犬達が

それに食らいつく。

「ねえ、もういいでしょ?」

「ああ……うん、よくやったな。残りは俺がやるよ」

いやはや、当たり前のように投擲の才能を持っているとはな……。全くもつて末恐ろしい子だ。仮に暗殺者として育てても、投げナイフの名手として大成するだろうよ。

などとカレンの成長した姿を想像していたら、二本目の腕も骨だけになっていた。

少し和らいだものの、相変わらず寧猛な目がこちらを睨みつける。

「そう焦らなくても、おかわりはありますからねー」

「アレンっ!」

そこで俺は追加の腕を携え、カレンを置いて彼らに歩み寄った。

突然距離を詰めてきた俺に警戒して低く唸るが、気にせず三本目をそれぞれの前に置いていく。

「さあ、お食べ」

それからしゃがんで目線を合わせ、自分でも吐き気がするほどに慈愛で満ち溢れた表情を作ってみせた。

これでダメなら新しく生産しなくてはならないのだが、俺の計算通りなら……

「すごい……。犬がみんな、森の中に」

彼らは揃って三本目の腕を咥え、ガサガサと音を立てながら深緑の奥へ消えた。

「はああー……」

「おや、どうしたんだい? 大人なレディとやらはどこにいるのかな?」

「……………うるさい」

ここまで耐えただけでも大したものだが、それでもさすがに緊張の糸が切れたらしく、ペタリとへたり込んでしまう。

しかしながら中々に子供らしくなかつたのが鼻だったので、少し意地悪な言葉を投げかけてやった。

「いかがだったかな? 誰もが幸せになれる、とても穏やかでハイワ

的なやり方だったろう?」

「あんなに自分を傷付けて、どこがハイワよ! どこが幸せなのよ!」
「俺の不死者としての力が役立つて、可愛い娘が生きている。それだけで十分幸せだが?」

仮とはいえ俺の娘だ。傷一つ付けさせるつもりはない。

子のためなら腕の一本や十本程度くれてやる、それが親だ。

「……バカ」

「馬鹿で結構。ほら、そろそろいくよ」

カレンの手を引いて立たせ、残った腕肉を食材袋にしまつて歩き出す。

結局あの犬達が戻ってくることはなかったが、森を抜けた直後に一声、アオーンという遠吠えが木霊した。

その遠吠えは、感謝と饞の言葉だと俺は知っている。

「彼らにもきつと、腹をすかせた子供がいたのだろうね」

第十話 「救難信号」

鬱蒼とした森、野犬の検問を抜けたその先には。

「わあ……！」

先程とは打って変わった景色を目にしたカレンが息を飲む。

道の左右、そして地平線の果てまでそれは続く。

刈り入れどきの麦畑、黄金色の絨毯が風によってざあざあと揺れる。

澄み渡る青空の下、陽の光に照らされて輝きを放っている。

「こんにちはーっ!!」

カレンが突然麦畑に向けて声を張り上げ、手を振り出す。それは遠く離れた場所で刈り入れをしている人に対してだった。

男性はかなり離れた場所で作業をしていたが、上手い具合にカレンの声が風に乗って届き、片手に黄金を掴んだまま手を振り返してきた。

少し視力を上げて男性の顔を窺うと、額に汗をにじませながらも涼しげで晴れやかな表情をしているのが分かる。

この時代は中々に苛酷で凄惨なものになっていると聞いていたが、アレはいたずらに盛っていたのだろうか。

「なんかこう、気分がいいわね！」

これまた気持ちを高揚とさせたカレンは、麦穂に手を当てながら前に後ろに駆け回っている。

なので手を切らないように注意だけはしておく。

それにしても、ついさつきまで酷く落ち込み、一步も動けないほどに怖がっていたとは思えんな。

しかしまあ、切り替えが早いのは良いことだ。生きていく上で大変役に立つ。

不死者ポイントを贈呈。

「ああ、懐かしいなあ……」

「懐かしい？」

「遠い昔の、故郷を思い出すよ」

今もあるかどうかは分からないが、南の島の小さな村。

まだ俺が百に満たない頃の灰色の情景が思い起こされる。いや、このような情景を見るたびに思い起こすようにしているのだ。

村のみんなの血はまだ受け継がれているのだろうか。

もつとも、親の顔と名前以外はほとんど忘れてしまったのだが。今では親でさえどんな声だったかも覚えていないし。

「ねえ、アレンの昔話をもつと聞かせてよ！ 結婚したことはあるの？」

「いやあ、最近は何も忘れがひどくてのう……。記憶にはございません」

「それってつまり、五千年間ずっと独身……」

「おつと！ その言い方だとまるで俺が全然モテない男のように聞こえるな。違うぞカレン、これには致し方ない複雑な事情があるのだ」

「聞いてあげるわ」

「まず第一に、俺は先輩方から結婚だけはやめておけと教わってきた」

長命の者と短命の者、寿命の差が大きい二人が苦難の果てに結ばれたとする。

たしかに彼らは何年、何十年かは幸せであろう。

しかし、だ。

あつという間に幸せな時間は過ぎ去り、短命の者は朽ち果てる。老いからは、死からは逃れられない。

自分だけは若さを保ったまま、愛する者の老いる姿を見たい者がどこにいたるだろうか。

「いいかアレン？ お前は千歳以下の小娘とは契るなよ？ 必ず後悔

するからな？ ……これは今は亡き師匠の言葉だ」

「へえ……」

「第二に、子を作るといふ行為が俺には必要ない」

「どうして？」

雄と雌が結びつき、子を作る。

これは何かを後世に残し、受け継がせるための行為だ。

血を、技術を、伝統を、歴史を。

古より受け継がれてきたものを断絶させないために全ての生命は子を成す。

しかし輪廻に還ることのない俺は、いつだって受け継ぐ側の立場なのだ。

「でも、忘れちゃったものはいっぱいあるんでしょ?」

「それは、まあ……。何かの拍子で頭でもぶつけければ思い出すだろう」「ふうーん」

五千歳も年下の少女が、少しばかり馬鹿にしたような顔を俺を向けてくる。

……くそう、絶対に思い出してやるからな。

君が十年分の記憶を思い出す前にこっちは百年分思い出してやるからな。

「まあいいわよ。次の理由は?」

「最後の理由はだな……。笑うなよ?」

「内容によるわ」

「怖いんだ」

「怖い? 何が?」

生まれてきた子が、己と同じ異質な存在であるかもしれないことが。

善を尽くしても疎まれ、悪を行わずとも身を焼かれ、俗世から離れて山に籠っていたとしても、不死者を便利な道具として欲しがる奴らが迎えに来る。

逃げるのは当たり前。逃げた先で裏切られることだって当然ある。そうして力を持たぬうちに捕まってしまえば最後、実験動物のお仲間だ。

そんな死よりも辛い思いをしてほしくない。

だから何かの間違いで子を作ってしまった際には、心身ともに一晩で都市を滅ぼせるくらいには鍛えてやるつもりだ。

それと仮に何の力も持たない普通の人間として生まれたとしても、不死者の子というだけで迫害は免れない。

いつだって大衆は蛙の子は蛙、化け物の子は化け物だと決めつける

のだから。

そして子はいつか両親を含めた、自分以外の全てに憎悪を向けるに違いない。

「それが怖いんだ」

「あたし、それをなんて言うか知ってる。キユウって言うんでしょ?」
「よく知っているな、偉いぞ。だけどこれは杞憂ではなく、実体験に基づく極めて正確な予測なのだ」

俺の知っている長命の者で、闇堕ち経験のない者は数えるほどしかない。

さらに言えば闇堕ち経験のある者の中で、複数回堕ちた者は俺を含めて半数を超える。

「とにかくそういうわけで、俺がモテないわけじゃないんだからな?」
むしろ男女問わず多種多様な組織や人物が、俺を確保・収容・保護しようとするくらいにはモテるんだぞ」

「あっそ、つまんないの」

カレンは馬鹿にするを通り越して、呆れ切った顔を見せってくれた。

……ちくしょう、悔しい。

「で、次の話はさ」

「もう何も話す気はない」

せめてもの報いに、しばらくの間口を閉じてやることにする。

「大人気ないわね。それでもほんとに五千歳なの?」

「……」

もういつそ、村に着くまでは鼓膜も破っておこうか。

「ところでさ、あの煙は何なの?」

「……煙?」

自分の両耳に指を突き刺そうとした瞬間、カレンが妙なことを口走った。

うつむいた顔を上げて前を見ると、村の辺りから蛇のような白煙が一つ、天高く伸びているのが目に入った。

なんだ、ただの救難信号か。

「なんだろう。焼き芋でもやってるのかな」

「あれは狼煙と言つてだね、外敵に攻め込まれたりして助けが欲しい時に上げるものなんだ。覚えておくといい」

「へえー、そうなんだ………えっ!？」

「それでどうしたい？ 急いで助けに行つて焼き芋を食べさせてもらうか、それともゆっくり歩いて村人の焼肉をいただくか」

危険な行動を強制させたくはないし、そもそも赤の他人事なので関与らないという選択肢も与えた。

それは長く生きるためには決して間違つた選択ではない……のだが、この子がどちらを選ぶかは聞かずとも分かりきっている。

「助けに行くに決まつてるでしょ!!」

◆◆

黄金に挟まれたあぜ道をカレンの全力に合わせて走り、粗末な平屋の立ち並ぶ村に到着した。

目に見える範囲に二階建て以上の建築物はないド田舎の農村だ。

そういつた村では普通、日中のこの時間は男達は畑仕事をしに行き、子供達は鼻水を垂らしながらそこら中を走り回り、女達はその様子を見守りながら井戸端会議をしているものだ。

そのはずだが、通りのどこにも人の姿はない。

「誰もいない、よ?」

「……おそらく家の中に隠れているんだろう」

所々炊煙が上っているし洗濯物だつて干されている。

そして完全に戸締りされた家々の格子の隙間や窓の隅より、こちらを覗き見ている住民を何人か確認できた。

もちろん俺と目が合うとすぐに顔を引つ込めたが。

誰も彼も息を止め、じつと身を潜めている。しかしながら子供の泣き声すら漏らさないとは、ずいぶん避難慣れしているようだ。

しばらく人気のない通りを歩いて、村の中央広場らしき場所にやってきた。

平時は市場が開かれ賑わっているはずの場所だが、今は品物だけ置かれた無人の露店が立ち並び、避難時の騒乱の跡が残っている。

その中でただ一つの異質な存在が、店の前で何かを貪っていた。

「ねえ、あれって……」

イビルコング
「魔猿だな」

それが何かを端的に示すならば「猿の化け物」という言葉がしつくりくるだろう。

褐色の剛毛と漆黒の皮膚。

露店の屋根を優に超える背丈。

丸太か何かと見間違えるほどに太い腕が四本。

「ひっ!? ……ば、化け物!」

俺とカレンの気配に気付いたそれがぐると振り向いた。

ギョロつとした三つの赤い眼でこちらを睨みつけてくる。

いかにも小僧っ子の落書きを具現化したようなおどろおどろしい生命体だ。

「カレンは魔獣を見るのは初めてかい?」

「アレが……魔獣なの?」

「そう」

魔獣や魔物などと呼ばれるそれは、人間が飼い慣らしたり共生できるような、一般的な動物と呼べる生き物ではない。

封魔大陸つまり魔界を造り、そこに魔人を住ませた暴虐の神ヴィールタス。魔獣は人間と動物に敵愾心を露わにした彼女の創造物である。

その一つである魔猿はこちらをじつと睨みつけながらも襲ってくるわけでもなく、四つの手に持った野菜をただひたすらに巨大な歯でバリバリと噛み砕いている。

「もしかして、草食なの?」

「いや、アレは雑食だ。コース料理よろしく先に新鮮な野菜を食い散らかしてから、肉を食うのだろう。少なくとも二十回はヤツのメイソ料理にされた覚えがある」

「なら! 早くやつつけようよ!」

「まあ待ちなさい」

いくら凶暴な魔獣とはいえ、何の話も聞かずに殺すというのはよろしくない。教育上よろしくない。

話の分かる奴だつて極稀にいるのだから。

「よう魔獣さんや。お前が食った分は俺が立て替えておくから、そろそろ帰ってくれんかの？」

まずは敵意を見せることなくゆっくりと寄り、きつと人語は通じないだろうが提案した。

怯えて媚びるわけでも、高を括って嘗めるわけでもなく、あくまで対等の立場であることを示して。

そして魔獣は答える――

「――ヴボオオオオオオオオオッ!!」

答える、と言うよりは吠えるところの方が正しいか。

二本の腕で自身の胸を激しく叩き、残りの二本を使つてただでさえ巨大な凶体をより大きく見せて威嚇してきた。

そしてその際に口から吐き出された粘液が、べちよりと嫌な音を立てて俺の愛着するポンチョにへばりついた。

……いい度胸だ。

「答えはいいえ、だな？　ならば……無銭飲食及び器物損壊及び俺に汚いものをぶっつけた罪、その命で払ってもらおうぞ！」

第十一話 「聖呪」

「ヴォアアアアアアアッ!!」

俺の敵意をしかと受け取った魔猿が咆哮し、ぶ厚い胸の筋肉をさらに激しく打ち叩く。

今にも野菜ではなく露店ごと掴んでぶん投げてきそうな勢いだ。

そうなる前に一発で終わらせてやろう。

「カレン、今から見せるのは極めて危険な魔法だ。よく見ておきなさい」

そう言いながら素早くアレン肉を取り出す。先ほど野犬の餌として用意したものの余りだ。

まだ血生臭いその人差し指から小指までを千切り取っていく。

なぜかそれを見たカレンが「げえっ」と踏み潰されたカエルのような声を出した。

「そろそろ肉が欲しいだろう？ 遠慮せずにお食べ」

次に巨猿の大口に千切り取った指をまとめて放り込む。

予想外の出来事に少したじろぐも、構わず俺の指を咀嚼してニタリと笑った。

ああそうだ、よく味わって食べるがいい。

それが最後の晩餐なのだから。

そして魔猿が咀嚼したものをぐくりと飲み込む瞬間、念の込もった言葉を唱える。

「――弾けろ、《シヨウネンバクサイ掌念爆破》！」

パンッ！ と、小気味よい破裂音。

続いて魔猿の巨体が仰向けに倒れ、どさりと音をたてた。

今の今までいきり立っていたソイツは指の一本すら動かさず、騒々しい咆哮も発しなくなっている。

それもそのはず、首から上を消し飛ばしたのだから。

魔猿の亡骸から流れ出る赤黒い血が地面を染めていく。

「うっ……うぷっ」

それを見て理解したカレンは吐き気を催したらしく、苦い顔をして口を抑えた。

まったく、この程度で吐きそうになっては先が思いやられるな。

「ほらカレン、これを嗅ぎなさい。それと右手を出して」

こんなこともあろうかと採取しておいた、気持ちいを落ち着かせる香草をカレンの鼻に押し付ける。それと吐き気を和らげるツボも圧してやった。

「どうだ？ 少しは良くなったか？」

「う、うん……。それで今やったのは魔法、なのよね？」

持前の切り替えの早さで嫌悪感と吐き気を払拭し、俺が使った魔法に興味を示している。

見事だ。

「アレンの投げた指が、爆発……？」

「その通り。あの魔法はだね、自分の所有物を爆発させる魔法なんだ。それが自分にとって大切で思い入れのあるものほど、威力は大きくなる」

「所有物って……」

所有物という単語に疑問を持ったようだが、俺の体は俺の物なので所有物で間違いない。

「全身はもちろん、体の一部だけでも爆発させることができる。いわゆる自爆技としても使えるんだ。カレンも自分の体を再生できるようにになったら試してみるといい」

「試すわけないでしょ!？」

「それならば、そこら辺の小石なんかを適当に拾って、いつでも使えるように大事に持っておきなさい」

つまり、一見何の価値もなさそうな石やガラクタを常に持っている人物は魔法使いの可能性が高い。

そこまで説明したところで、ドタバタと騒がしい足音が聞こえてき

た。

「——そのアンタ！ 大丈夫かーッ!?」

声のした方を振り向くと、鍬や鎌などの農具を携えた十数人の男衆がこちらへ向かってきている。

狼煙を見て即座に畑仕事を放り投げてきたようだ。

「やあ、こんにちは」

「ここで何してんだ！ 早く隠れろ！ 魔獣が襲っ……………て……………?」

言い出してすぐに俺とカレンの後ろで斃れているものに気付き、言葉を失った。

他の男達もそれに気づき、顔を見合ってざわめきだす。

「お、おい。その魔獣はもしかしてアンタが……………」

「ええ、そうです」

今しがた起きた出来事を「自分の指を爆発させて殺した」とは言えないので、少しばかりの嘘を交えて説明する。

その間にも男達は続々と集まってきて総勢三十名程度になり、ますますざわめきが大きくなった。

「…………とまあ、こんな感じになります」

「本当に一人でやっちゃまったのかよ、すげえ……………」

「ああ戦神様、このお方を遣わしてくれて感謝します」

「俺もこの目で見たかったぜ」

「それよりも本当に大丈夫ですか？ 怪我人や行方不明者はいませんか？ 他に魔獣は？」

「魔獣はあの一匹だけだ。それに今、点呼を取らせたが誰一人として欠けていない」

「ならよかった」

「ここまで人の血の匂いはしなかったが、一応。

そしていつの間にか、周囲には老若男女入り乱れた人だかりができていた。

「おいみんな！ 俺達が来る前にこの方が魔獣を退治してくれたんだ!!」

ほぼ全ての村人が集まったあたりで、最初に俺に話かけてきた、村の若長らしき中年の男が改めて告げると歓声が湧き上がった。

次から次へと礼を言われ握手をせがまれ抱擁を受ける。

ああ、少しばかり鬱陶しい。

鬱陶しいけど、やはり悪くはない。

そうしてしばらくの間もみくちやにされ、長が俺とカレンのために今夜宴席を設けると皆に告げたことでやっと解放された。

「魔法使い様！・メーテウス様！」

人々が普段通りの生活に戻っていったので村を見て回ろうと思つた矢先、一人の若い女性が五、六歳程度の小さな男の子を抱えて寄つてきた。

ぐったりとした男の子の右膝と足首には包帯が巻かれていて、膝の方は血で赤く染まつている。

ああ、なるほど。

「どうかしましたか？」

どうせ何を聞かれるかは分かっているが、ちゃんと耳を傾けておく。

「どうかこの子を、魔法で治してはもらえませんか？　先ほど逃げる際に、転んで怪我をしまして……」

「残念ながら、それはできません。私の専門外です」

「……そう、ですか」

そして無駄な期待を持たせないためにも即答する。

分かりやすく落胆する女性が少し気の毒だが、こればかりはどうしようもない。

時間さえかければ誰でも習得できる魔法に、傷や病を直接癒せるものはないのだ。

「ですが診ておきましょう。材料さえあれば塗り薬なんかも渡せませす」

それでも普通の医者と同じことはできるので、診るだけは診ておく。

「……ふむ、かなり深い裂傷と足首の捻挫、全治一ヶ月つてところす

ね。しばらくは無理に動かさずに安静」

「ねえアレン！ 本当に怪我を治す魔法はないの!？」

どうしても我慢できなかつたのか、カレンが俺の診断報告を遮つた。

「嘘じゃない、本当にないんだ。だけどそうだな、おまじないの言葉なら知っている。これを言ってみなさい」

カレンに耳打ちしておまじないの言葉、正確には『豊穰神の聖呪』セイジユを教えてやった。これを使うことができれば傷や病を癒すことはできる。

しかしこの聖呪と呼ばれる神聖な魔法を使うには、魔法の才が必要だけでなく、神を篤く信仰し、神に認められなければならない。

そこんじよそこの神官では、下級の聖呪一つ唱えられない。

当然神々に嫌われている俺にはまず使えないし、

「ところでカレンは六大神が一柱、豊穰神フアテイルをご存知かな？

慈母神などとも呼ばれている神様を」

「名前だけは知ってるけど」

いくらカレンが才ある子とはいえ、信仰がないのでまず無理だ。

それでもまあ、気休め程度にはなるだろうし本人の気も晴れるだろう。

「それでえつと……最初は何だっけ？」

「健やかなるは称えたる、だ」

「健やかなるは称えたる、康らかなるは誉れたる。活ある瞳で星望み、

我らが母を微笑ません——《慈母神ノ息吹》!!」フアテイルスプレス

普通の魔法とは違った、長つたらしい糞くらえな呪文が唱えられたその瞬間だった。

どこからともなく、一陣の風が吹いた気がした。

……そう、気のせい。どうか気のせいであってくれ。

俺はこの、全てを包み込むような柔らかい風を知っている。

フアテイルの聖呪が使用されたときに吹きつける風を。

「なにこれっ!? 手がっ!」

「……カレン、そのままだ」

男の子にかざしたカレンの両手が眩い光を帯び、包帯の巻かれた患部を照らし、カレンの手から男の子の患部に移って溶け込んでゆく。

それは以前見た、豊穰神の信徒である聖呪使いがしたのと同じもので間違いない。

全ての光が男の子の体に消えた後で包帯を取ってみると、そこに痛々しい傷は跡さえあらず、捻挫したはずの足を捻ってみてもなんともなかった。

「ありがとうございます！　ありがとうございますメーテウス様！」

「いえ、私は何もしていません。礼はこの子、カレンにお願いします」
実に悔しいが俺には何もできなかった。

全てはカレンがやってのけたことだ。

「息子の怪我を治していただいて本当に、本当にありがとうございます
すカレンさん！」

「おねえちゃん！　ありがとうー！」

「ど、どういたしまして」

カレンは心からの感謝を受けて、少し恥ずかしそうに俯く。

……まったく。この俺でもどうしようもないことをこんな年端のいかぬ子供に成し遂げられて、羞恥でどうにかなってしまいそうなのはこちらだというのに。

実際こんなことを見せられたら年長者の半分は墮ちてしまうぞ。

「オイ、カレンー！」

「ど、どうしたの？　……なんか、顔が怖いよ？」

親子が去った後で、カレンに体を向ける。

両肩をガツチリと掴んで逃がさないようにして、碧い瞳を睨視する。

それだけで長耳^{エルフ}由来の可愛らしい顔がじわじわと曇っていく。不安を募らせていく。

「もしかして、怒ってる？　あたし、何か悪いことしちやっただ……かな」

「……………よく、やったな」

もちろん怒ってなどいない。

ちよつとした腹いせに、落としてから上げてやっただけだ。

「ほんと……？　本当に怒って、ない？」

「ああそうだ。褒めこそすれ、怒ってなどいない。よくぞ聖呪を使つてみせたな！　高い高いをしてあげようか!?!」

「やつ、やめてよ!!」

カレンを脇の下を持って抱き上げようとすると、必死にジタバタして嫌がるのですぐに下ろした。

……とまあ、おふざけはこれくらいにして、真に問いたたださねばならないことがある。

「それでカレンは本当に、豊穰神フアテイルを名前しか知らないんだな？」

「うん」

「教義の一つも知らないと？」

「本当に何も知らないってば」

「……そうか」

嘘……ではないようだな。

目の前の少女は豊穰神への信仰心を欠片たりとも持っていない。

それなのに聖呪を使える訳があるとすると主^に三つ。

記憶を失う以前に豊穰神の教えに帰していた。

カレンの正体は神の遣いである。

神がカレンを従わせたい、我が物にしたいがために無償で力を与えている。

これらのうちのどれかだ。

親が神官で、記憶を失う前は信心深い子だったというのが一番あり得るだろう。

次点で、世の中の浄化や統一などの天命を魂に背負わされて生まれ落ちた、いわゆる神の遣いというヤツだ。

そして最もあり得ないのが神の欲する質を持ちし者、俗に言う『焦がれ星』^{ジ・ス・テラ}である。

神の遣いなんてのは一時代に何人かはいるものだが、焦がれ星は千

年に一人いるかいなかだ。俺はまだそれと思しき人物を三人しか見知っていない。

「どうしたの？」

だがしかし、カレンがそうであってもおかしくはない。

五千年の歴史の中で、これほどまでの力と才能に満ち溢れた者は両手で数える程度しかいないのだから。

この少女を主役に据えた御伽話は今後いくつも創られるのだと確信している。

もしかしたら親も焦がれ星だつたりしてな。

その後ずつと考え続けたが、結局どれか一つに定めることはできないまま夜を迎え、宴に訪れた。

村一番の広さを誇る集会場にはほぼ全ての成人男性が集まり、俺とカレンをもてなすという名目で大いに飲み食いをしていた。

まだ日が沈んでそれほど経っていないというのに、すでに顔を真っ赤にして出来上がっている者も多々いる。

「メーテウスさん、待ってましたぞ！」

「ささ、飲んで飲んで！」

「どうもどうも」

用意された席についてすぐに木製のジョッキに山吹色のエールが注がれる。

八分目まで注がれた後で、側にいる何人かとジョッキを軽く打ち合わせる。五千年前から全く変わることのない乾杯の作法だ。

それで心から歓迎されていることを確認して、俺は宴の雰囲気に入れ込んだ。

◆◆

「それでメーテウスさんは今、おいくつで？」

「今年で二十四、ですね」

下二桁の数は。

「そりやすげえ！ その若さでアレを倒しちゃったんか！」

「いやむしろ、若いからこそ力があるつてもんだろ！ 羨ましいぜ」
「村の若えモンは皆都会へ行つちまいやして、この通り油臭えモンしか残ってねえんですわ。それでもまだ若え頃は……」

「ハハハ、何言ってるんですか。皆さんはまだまだお若いじゃないですか」

見たところ四、五十代が大半で、一番若く見える男性でも三十半ばといったところだ。

たしかに定命の人間にとっては人生の折り返し地点近くの中年と呼ばれる歳だが、五千二百歳もサバを読んでいる俺に比べたら若いなの。

唯一その事情を知るカレンが、すぐそこでご馳走を頬張りながらも俺にジトつとした視線を向けてくる。

「嬉しいこといってくれるじゃねえか！」

「もつと飲め飲め！」

そうして飲み続けること早二時間。

男達の半数は酔い潰れて、迎えに来た奥さんや家族に無理矢理引つ張られていった。

後一時間も経てば宴はお開きになるだろう。

その前に情報だけは引き出しておかないとな。

「それで、ああいった魔獣の襲撃はよくあるんですか？」

「今年に入ってからすでに五回だ！ それもこの村だけでなく、他の村では死人が出てんだ！ それなのに国は何もしてくんねえ！」

「なんだ！」

村長は酔っ払いながらも怒りを露わにして、空のジョッキをテーブルに叩きつける。

「それは辛いですね……。魔獣の出処なんかは分かっているんですか？」

「分かってる。分かっちゃいるが——」

さらに半刻の時間が過ぎ去り、

「ぐひっ。兄ちゃんにならオレの娘をくれてやっても、ひっぐ……う——」

ついに最後の一人が酔い潰れた。

この集会場で意識を保っているのは俺とカレンと、絶えずご馳走を用意してくれていた数名の奥様方だけである。

その中の一人、村長の奥さんが食器の片付けをしながら申し訳なきように口を開いた。

「メーテウス様をもてなすつもりでしたのに、あの人らの相手をしてもらって……」

「いえ、お気になさらず。私としても久々に楽しく飲めたので、とても気分がいいですよ！」

「ごちそうさまでした!!」

カレンは酒さえ飲めないものの、次から次へと出てくるご馳走を食して大変満足しているようだ。

「それならよかったです。……ところで、今夜はどこで寝泊まりを？」

二人で野宿だと答えると、村長宅の客室を使うように言ってくれたので甘んじて受け入れることに。

何から何までありがたい。

そうして心も身体も温かいままに就寝前の些事を終え、客室に置かれた二段ベッドの下段に横たわった。

「カレン、まだ起きているか？」

「起きてる」

一足先に上段で体を休めていた少女に声を飛ばす。

「宴での話、ちゃんと聞いていたか？」

「うん」

愚痴として吐き出した、彼らにはどうにもできない現実を。

「ご馳走は、美味しかったか？」

「うん」

それでも尚、嫌な顔一つ見せずに俺とカレンという余所者をもてなしてくれた。

心を開いてくれた。

「ならば、キッチリお礼をしないと」

第十二話 「なんて声、出してやがる」

おんどりが鳴き出す前に起き上がり、素早く支度を済ませて村を出た。

早朝から歩き始めて優に二時間は経ったが、まだそれほど地面は温まっておらず、風が涼しい。

そんな心地良い風を受けながら野を越え丘を越え、俺達は辿り着いた。魔獣達が湧き出ているとされる場所の入口に。

「この先に、いるのよね」

「おそろくな」

谷、それも峡谷と言った方がいいだろう。

幅は大人十人が横並びで通れるほどだが、高さは大人を二十人重ねてもなお届かない。一般人が上から生身で落ちた場合、間違いなく肉が弾け骨が砕けるだろう。

まあ今回は底を進むことになるため滑落の心配はないのだが、それでも、

「これは最終確認だが、カレンだけでも来た道を引き返す気はないか？　いくら俺がいるとはいえ、安全は保障できない」

いつ落石や岩肌が剥がれて降りかかってくるか分からない。

足場だつてゴツゴツした岩や石が転がっていて、不慣れな者にはよろしくない。

そして何よりも、退治予定の魔獣についてだ。

「昨日見た魔猿よりも、強大で凶悪な魔獣がいる可能性が高い」

話を聞いた限りでは、魔獣の襲撃は定期的にあるという。

それも毎回同じ魔獣というわけではなく、イビルウルフ 魔狼やロウトロール 小醜鬼など、何種類も確認されているのだ。しかもそのどれもが基本的に群れる習性はなく、脅威度も一爪のものだ。

つまりはその一回り以上強い、二爪三爪の魔獣が統制していると考えるのが妥当……

「ちよつと待って！　その一爪とか二爪って何？」

「ああ、魔獣の脅威度や危険度を表したものだよ」

魔獣を大雑把に分類するために『爪』という階級が用いられている。

一爪の魔獣を倒すには平均的な兵士が五人必要だ。

二爪なら五十、三爪なら五百、四爪なら五千、炎龍などの神話的生物が位置づけられる五爪なら最低でも五万人……いや、五爪に至ってはうん十万分の兵力をもっても討伐できない場合があるのだが。

「ま、今はどう表しているかは分からないけどな。少なくとも千年前はこういう分類をしていたのさ」

「ふうん」

「とにかくそういうわけで、だ」

この先で待ち受けているであろう魔獣はきつと二爪以上のものだ。

二爪は村一つ程度なら単体で壊滅できるほどの力を持っていて、加えて一爪の魔獣を複数従えているときた。

仮に百人の兵隊さんを送り込んだとしても、百基の墓が生えるだけだ。

そこまで強調して再度引き返すかどうかを問うたが、毅然とした顔で「うん、私も行く」と即答されてしまった。

だけにとどまらず、攻撃魔法を教える時までぬかしおった。

「ダメです」

もちろんそれについてはキツパリと拒否する。

「なんでよ!? ちゃんと教えてもらえばすぐに」

「ああ、できるだろうな。カレンならすぐに。だが今はダメだ」

たしかによほど高等な魔法じゃない限りは、俺の言った通りに復唱するだけで放てるだろう。

しかしながら。

「万が一があつたらどうする」

突風が吹きつけた、石が落ちてきた、奇襲を受けた……理由は何でもいいが、魔法を唱えるのに集中している際に予期せぬ出来事に見舞われたらどうする。

全く動揺せずにいられるか? 緊張の糸を張ったままにできるの

か？

答えは否だ。

ほぼ確実に魔法は不発、または誤爆する。

それがさらなる焦燥を生み出し、全ては乱れてゆく。

当然彼らはその隙を見逃さない。一瞬のうちに詰め寄り、喉笛に食らいつく。

「……そんなの、滅多にあるわけ」

「あるんだな、それが。こういう死因は本当に多いんだよ。この俺だって稀によくある」

万が一ってのは結構な確率で起こり得るものなんだ。

それこそ時と場合によっては十が十くらいの頻度で起こる。

「でも！」

「おっと、その先は言わなくても分かるぞ。あたしなら大丈夫、だろ？」

「なん、で……」

その言葉を聞いたカレンは目を丸くして驚嘆の表情を浮かべた。分かるさ。

俺も百度は通った道だからね。

「どうして自分なら大丈夫だと思った？ 根拠は何だい？」

カレンは少し渋い顔をして考え込む。

一応そう思った理由は突き止めているのだろう。

だけどきつと、その理由が「なんとなく」や「直感」などの根拠のない自信であるために言い出せないでいるのだ。

「これは四千年の統計によるものだが、真つ当な根拠無しに『自分なら大丈夫だ』と言って突き進んだ者の八割は悲惨な末路を迎えている」

ある者は四肢を持っていかれ、ある者は親族を皆殺しにされ、またある者は檻の中にぶち込まれて何十年にも渡る拷問と実験を受け続けた。

……もちろん最後は俺のことだ。

まだ二百歳にも満たない糞ガキの頃に、ちよつと不死身だからと調子に乗った結果、見事に確保・収容・保護されたのだ。

「だから今回は何もせずに見ていなさい。いつか必ずカレンの力が必要な時は来るから。……分かってくれるかな？」

うん、と。

長い説得の末、カレンはこくりと頷いてくれた。

ので、その頭頂部に軽く手を置いて撫でてやる。

「よしよし、いい子だいい子だ」

「だから子供扱いはしないでよっ！」

◆◆

谷底を歩き始めて二千歩は超えただろうか。

目に見えるのはほぼ垂直に切り立った灰色の岩肌と、大小さまざまな石の転がる乾いた地面、それと岩肌に挟まれて蛇のように細長くなった空だけである。

そんな代わり映えのない景色が続いている。

「なんか静かねえ……。動物の鳴き声一つしないし村とはえらい違い」

「ああ。魔獣は軒並み出払っているのかもな」

「まっ、そんなのもう関係ないけどね！」

「やけに上機嫌だな」

「そりやそうよ！ 親玉さえ倒せばみんな助かるんだし、アレンも頑張ってるし、あたしも頑張らないと！」

ああ、そうだ。

仮に全て出払っているとしても所詮は一爪共だ。指導者と帰る場所を失えば互いに争い、散り散りになり、自然に淘汰されてゆく。

……しかし、嫌な空気だ。

カレンは谷に入ったらすぐにでも魔獣が出てくると思い込んでいたようで、それでもまだ何も起こらないために油断し始めている。

訓練と称して、実に優れたバランス感覚で地面の石の上だけを渡るなんて遊びまででした。

そういう時が最も――

「——危ないッ！」

咄嗟の判断で地を蹴り、カレンの前に飛び出す。

そしてコンマ一秒と待たずに胸から背中にかけて激痛が。

「えっ……」

「大……丈夫か？ ……なんだよ、結構当たるじゃないか」

「カレンは無事かと首を回して振り返る。

……ああ、よかった。

突然背中から尖った石を突き出し、口からも血を噴き出した俺を見て茫然としているだけで、その華奢な身体のどこにも傷は見当たらない。

「な……なにが、どうなって。それにアレン、あたしを庇って……！」

「なんて声、出してやがる」

「だって……だって……！」

「俺は常闇の一派党首、アレン・メーテウスだぞ。これくらい、なんてことはない。それに娘を守るのは父親の仕事だ」

今にも泣きそうな顔をしたカレンに答えてから、俺の胸に突き刺さったそれを思い切り引っこ抜く。

すると熱を帯びた傷口から、樽の栓を抜いたように血が流れ出てくる。

「いやだ！ 死んじやヤダー！」

「……………だから大丈夫だ、この程度じゃ死にはしない」

「えっ？」

頭か心臓を潰すか、身体を真つ二つにでもしない限りは傷口を塞ぎ、欠損した部分を再生できるので死にはしない。

とはいえこのままで放置したら一分もしないうちに気を失い、じきに死ぬだろう。

そうしたら最低でも五秒は身動き一つできない時間ができてしまう。この状況でそれは不味い、非常に不味い……ので、

次なる攻撃を警戒しながらフウーと、一つ深い呼吸をする。

その間に断線した管を繋ぎ合わせ、抉れた筋繊維を補い、皮と肺に空いた穴を塞ぎ、砕けた骨を真新しくする。

「まさか……大丈夫、なの？」

「ああ、これで元通りだ……だが、うーん……」
千年間もまともに再生していないせいか、だいぶ鈍ってしまったなあ。

昔だったら一秒とかからなかったのに。

それこそ戦さ場に身を置いていた時代なら、斬られながら生やし、風穴を空けられた瞬間に塞げていた。

その再生速度から傷一つ付けられないと錯覚されたほどだった。

どうにかしてあの感覚を取り戻さないとならないが、まあ、今は目先の事に集中しよう。

「カレン、一旦下がっていなさい。……その君！ そろそろ、出てきたらどうかね!？」

カレンを後ろに隠し、前方の暗い岩陰に声を飛ばす。

言われるがままに暗がりから出てきたのは、でつぷりと肥えた無毛の魔獣だった。

「ほう、小醜鬼くんか」

「あれが、トロール……?」

その名の通り、醜い容貌をした二足歩行の魔獣だ。手には木の棍棒を握っている。

一爪の「小」^{ロウ}といっても昨日の魔猿よりは背も高く体も厚い。

見た目からも、どちらかといえば魔獣というよりは魔人と言った方がいいのかもしれないが、おつむが足りず獣（けだもの）となんら変わりないために人扱いはされない哀れな生き物だ。

それでも加工した石を投げ、棍棒を振り回し、ついでに樹皮を腰に巻いて急所を隠す程度の知力はある。

女騎士でも戦いやすいように配慮してくれているのだろうか？

「昨日のより大きい……。大丈夫なの?」

「まあ、見ておきなさい」

今しがた俺の肉を抉り風穴を開けた石を両手で携え、醜い巨体に歩

み寄っていく。

「いやはや、中々に良い投擲物ですねえ」

血に塗れたそれを、貴重な宝剣であるかのように見立ててさすり、褒めちぎる。

これを受けて棍棒を構えた醜鬼が少し後退った。

未発達な脳味噌で「なんだこの人間は!? ワケが分からない！」などと考えているのが容易に想像できる。

おそらく後方にいるカレンも似たようなことを考えているだろうが。

「こちらはアナタがお作りになったんですか？ 素晴らしい殺傷能力を持つこれを！ もう少して死ぬところでしたよ、ええー！」

かまわず、ここが演劇の場であるかのように大仰に、身振り手振りを交えて語り掛ける。

そして頭の内が困惑で満たされた時を見計らって、

「アナタは醜鬼の中でも実に……………あぁッ!？」

唐突に彼方を指差す。

それに釣られて俺から視線と意識を外した、その瞬間。

「——セイツ!!」

投擲した。

回転のかかった穂先の如き石は醜鬼の顔目がけ、一直線に伸びてゆく。

一拍遅れてそれに気付いた彼は、迫りくる投擲物を弾くために棍棒を振り上げようとした……………が。

「オッ……………」

時すでに遅く、眉間には拳大の風穴がぽっかりと空いていた。

第十三話 「二つの琥珀」

生氣を失くした巨躯が、力無く崩れ落ちる。

倒れた際にわずかな地響きを起こし、そのまま静止した肉塊と成った。

「うっ……ぷ……」

「カレン、ほら」

「……ありがとう」

俺が酔い止めの香草を数枚渡すとそれを鼻につけ、昨日教えたツボを自ら押し始めた。

「辛いのならすぐにも燃やすけど、どうする？」

いくら凶悪な魔獣といえど、シルエツトだけなら肥えたヒトと変わらないため無理もない。

ただ、体積が大きい故、流れ出る血の量は人なんかとは比べ物にならないが。

「いい。もう大丈夫」

言い切ってから醜鬼の亡骸に近づき、それを見下ろす。

そして首を傾げた。

「これ、魔法は何も使っていないの？ 石を投げただけでこうなったの？」

「そうだよ。人は高度な投擲力を持つ数少ない生き物だからね」

人間には獣のような膂力や敏捷性が無い代わりに網を張り、投擲を行い、多種多様な道具を作る能力と知能が備わっている。

そして何よりも、鍛錬をする生き物だ。獣は基本的に鍛錬をしない。

狩りの仕方を親に教わることはあるだろうが、狩りのための脚力を走り込みで鍛えたりはしないし、外敵と戦うための腕力を素振り以身に付けたりなどしない。

この、人にも獣にもなりきれない醜鬼というのは、なんとも哀れな生き物であるかな。

「少し話が逸れてしまったが、要は魔法に頼らずとも倒せるということこ

とだ。それも自分よりも大きな相手を」

「でもアレって、不意打ちでしょ？」

「そうだが、何か問題でも？」

「問題っていうか……すごく卑怯」

「なるほど、卑怯か」

これは持論だが、卑怯という言葉は先手を打った者にのみ適用されると考えている。

あの時何の前触れも宣言もなく、不意打ちを先にかましてきたのは醜鬼の方だ。

俺は不意打ちに対して不意打ちで応え、借りたものを返したただけだ。

それに卑怯な手法を取る者は、自分がされた場合の対処法を知っているものだ。

むしろ相手の土俵で戦ってあげたと言っても過言ではない。

「仮に最初から正々堂々と棍棒で振りかかっていたら、それに応えていたさ。しかしヤツは違った」

それとこれは私情だが、初手で俺ではなくカレンを狙ったのが気に食わない。

いくらおつむが足りないとはいえ、俺とカレンのどちらが強いかは分かるはずだ。

両方を殺すつもりなら、まず先に強い方をどうにかすべきだろう？
その後で弱い方を玩具にして弄ぶのが筋というものだ！

俺の知る醜鬼は不意打ちこそすれ、そこまで気弱ではなかったぞ!?

「え。そんな理由なの？」

「ん？ あー……ああ！ もちろん父として、可愛い可愛い娘が危ない目に遭ってムツとしたのもある！」

「……嘘つき」

「……………ほら、いくぞ」

もう少し潔く立ち向かってくれば、俺だけを狙ってくれば、綺麗な顔のまま逝かせてやったというのに。

そんな思いを込めて亡骸を一瞥して、カレンを横に歩みを再開し

た。

何十歩か進んだ後で、

「ああ、そうそう」

「なに？」

石の上だけを渡る遊びを止め、辺りを警戒しながら一歩一歩地を踏みよようになった少女に一つ大事な言いつけをしておくことに。

ちようど、少し先にあるものが目に入ったからだ。

「さつきは死なずに済んだが、もしも頭や心臓を貫かれていたら即死だった」

「……アレで生きてるのもおかしいと思うけど」

「それで、だ」

カレンの些細な疑問を無視して話を進める。

「俺が死んだ時は逃げろ。迷わず逃げろ」

「うん？」

「いくら蘇るといってもな、一度死んでから蘇るまでに少し時間がかかるんだ。少なくとも五秒は」

「へえ……」

さすがの俺でも死んでいる最中は指一つ動かせない。

その間にカレンまで殺されたとなってはたまったもんじゃない。

常人にとつて五秒というのは短い時間に思えるが、種族を問わず、一呼吸あれば幾つもの命を刈り取れる強者というのはやはり存在するのだ。

そんな相手を前にして、俺の死に様に動揺して立ち尽くすなんてのは以ての外だ。

だから、

「決して振り向くことなく、決して止まるんじゃないぞ。もしも止まれば……」

そこで一旦言葉を止め、右前方の岩肌を背にしてひっそりと座り込んでいるものを指差した。

「ああなるぞ」

「え？……っ！」

目を凝らしてそれが何かを理解したカレンが言葉を失う。

そこには全ての肉が削げ落ち、白い骨を剥き出しにした男性が天を仰いでいた。

「死後二年ってところか」

手で触れる距離まで近づき、骨の変色度合に衣類の劣化具合からその判断した。

男はボロボロに崩れた服に、鋏打ちすらされていない安物の革の胸当てだけを身に着けている。それと大量生産されたであろう粗造のショートソードがすぐ傍に置かれていた。金貨一枚で二本は買える、酒よりも安いものが。

装備が全てというわけではないが、実際そんな急拵えの装備でこの場所に来たということは、家族か恋人なんかを魔獣に奪われでもして、憤りに身を任せて一人乗り込んできたのだろう。

周りの制止も聞かずに。

「だからといって復讐を果たせるわけもなく、下手すれば魔獣に傷一つ付けることすら叶わず殺されたのだろうか」

そこまですら憶測で語りカレンを見やると、不快感や忌避を示した目から憐れみの表情に変じていた。

「少し酷な言い方をするが、この男は何の力も持たない故に死んだ。それと同じで今のカレンに魔獣と戦う力はない」

「……うん」

俺の言葉を噛み締めて、こくりと小さく頷く。

「てなわけで、先程のようなことがあれば迷わずカレンを庇って死ぬから。そうしたらなりふり構わず逃げなさい」

「それはだめ」

そして首を大きく横に振った。

一体何なんだ？

実の子を育てた経験がないのでよく分からないが、これが俗に言う反抗期というものでよろしいか？

「だめ……とは？」

「庇って、生きてよ。どうして死ぬこと前提なの」

「そうは言っても、死ぬときは死ぬしなあ……。それにどんな酷い死に方をしても、元通りの姿で蘇れるのは何度も見ただろう?」

「それは分かるけど、だからって死んじゃダメ! だめなものはだめなの!!」

「わ、分かった。善処しよう」

こればかりは譲れないという、強い口調で押し切られてしまった。

「いやはやしかし、カレンは本当によく似ているなあ」

「似ている? 誰に?」

「……あれ、誰だろう?」

全く意識せずに、それこそ半ば反射のように勝手に口が開いたが、一体誰に似ていると思ったのだろうか。

少し記憶を遡ってみても、なにぶん知人友人が多すぎてこれといった者の顔が浮かばない。

まあ、今はどうでもいいか。

「よし、行こうか」

「うん」



道中、醜鬼以外にも複数の魔獣と遭遇した。

奇襲こそされなかったが、どれもこれも一爪の、対話の出来ない肉食獣だったので、仕方なしに指を食わせて爆破した。

話で聞いた通りの魔獣全てを確認し、その全てを爆殺した。住処の戦力を軒並み向こうに回している、なんてことはなかった。

そんな血みどろの道を歩き続けてやっと、峡谷の深奥部に到達――

「ここがそうなの?」

「おそろく、ね」

「でも、何もいないじゃない」

ある地点から岩肌と岩肌の間隔、道幅が少しずつ広がってゆき、それからすぐに余裕のある空間に抜け出た。

抜け出たと言っても、垂直な岩肌にぐるっと囲まれていて、上空以

外には抜け道・出口はない。

「地下の巣穴とそれに通じる穴なんかは……ないな。とすると……」

感覚を研ぎ澄まし、視野を広くして一帯を観察する。

乾いた地面を見回しても地下に続くような穴は見つからない。と
いうよりもこの空間だけ、今までの谷底よりも数段低くなっている。

それと岩肌のある一面が縦に削られており、昔は滝が流れ落ちていたことを示している。数段低くなっているというのは、元は滝壺だったのだろう。

周囲をぐるっと囲む灰色には、滝の跡とは別に幾つか窪んでいる箇所があつて……

「……あつ」

「なに？ 何か見つけたの？」

「ほら、あそこ」

じっくりと観察していて、見つけてしまったものを指した。

「……あつ」

カレンもそれを見つけてしまい、俺と全く同じ反応をする。

岩肌に張り付いて擬態する灰色の影。

鉄杭のように頑強で鋭い鉤爪。

大蛇の如き長くしてしなる尾は酷く刺々しい。

その顎の開け閉めで、羊程度は容易く呑み込む。

一見すると蜥蜴や鱉を巨大化させただけの動物に見えるが、前腕に備わりしは鉄扉の如き分厚い飛膜。

「アレは紛れもなく、三爪に位する魔獣」

ワイルド 亜竜の琥珀がこちらを睨みつけていた。

第十四話 「亜竜狩り専門家」

互いの存在を確認し合ったところで、岩壁に張り付いたままの龍モドキが首を上げて「ガアッ！」と咆哮した。

それは軽い威嚇のようなのだが、今までに見た魔獣より一回り以上大きい巨体からくる迫力と音量に、耐性を持たないカレンがビクツと怯える。

「……もしかしてあたし達、ずっと見られてたの？」

「そりやそうさ」

ここに来るまでに何度も魔獣を破裂させ、断末魔の叫びを上げさせたのだから。

当然それらを取り仕切っているであろう親玉が気付かないはずがない。

「足が震えているじゃないか。怖いのかい？」

「こ、怖いに決まってるでしょ……」

「そうかそうか。さしものカレン婦人も亜竜は怖いか」

実はカレンはここに着くまでに、一爪の魔獣にはほとんど恐怖心を抱かなくなっていたのだ。

大の男でも、魔獣に出遭えば小便漏らして逃げ去るのが普通だというのに。

やはり、その順応力と慣れの早さは歴史に名を残す英傑のそれだ。

会話する余裕があるだけでも素晴らしい。

「……ア、アレンは怖くないの？」

「まあね。一方的に食われていた昔は恐れもしたが、今では貴重なタインパク源さ」

一時期は亜竜殺しなんて異名が付けられる程度には獲って食ったなあ。

そんな俺の力を知ってか知らずか、此度の魔獣は次の一手を打ってこない。

できるならば交戦を避けたい、威嚇だけで帰りたいといった意思を感じられる。

……だが、ダメだ。

「どう調理してあげようか」

複数の魔獣を従え、平和な村々を襲わせたのだ。

掠奪した分の報いと清算を、命を奪ったのなら命をもって清算せねばならない。

貴様の行動に責任を取れ。

そんな俺の殺意を亜竜は感じ取り、岩肌から剥がれてそれを背にして滞空。

羽根無し共を一方的に蹂躪するためのお得意の戦闘態勢をとった。

バサリバサリと翼のはばたきがよく響く。

「あ……あわ……」

その威圧感を前にして、少女はわかりやすく怯え、縮こまる。

「カレン、ちよつといいかい？」

「こ、こんなときになによ」

「アレをだね、手っ取り早く確実に倒す方法が『ワザと食われて腹の中で爆発する』なんだけど、いいかな？」

「その、食われるっていうのはもしかして……」

「そう、指だけじゃなく俺ごとだよ」

三爪ともなると、勘もいし頭も働く。

指や腕を投げ与えても素直に食いつかないし、外側から爆発させたとしても、硬い外皮と鱗に守られているので大した損傷は与えられない。

だから俺が直接胃袋に飛び込んで、そこで爆発四散すればよいのだ。

「そんなのダメに決まってるじゃない！」

しかしやはりと言うべきか、これは禁止されてしまった。

先ほどあれだけ「死ぬな」と強く言われたのだ。今日明日はそう簡単には死なせてくれないな。

とはいえここで強力な魔法を放って崩落などの二次災害を起こすわけにもいかないし、そもそも久しく放っていないものは誤爆の虞が……。

となるとやはり、これだな。

「うえっ！ あんたまさか、それで戦うの!?!」

「そうだとも」

俺がそれを手に持つとカレンの喉から調子の外れた声が飛び出した。

ついついあんた呼びしてしまうくらいには驚いた。本日一番の驚き様だ。

信じられない、冗談でしょといった顔を露わにしている。

これがそんなにおかしいものかね？

「さすがにあたしでもそれは無茶だって分かるわよ！ バカなの!?!」

「それは俺が悪いのか、それともこの子が悪いのか」

右手に握った鉄の剣——白骨の彼が持っていたショートソードの腹を指先で撫でながら尋ねた。

魔獣の血を吸わせて、せめてもの無念を晴らしてあげようと持ってきたのだ。

「どつちもよ！ 魔法も使わずにあんな化け物を倒せるわけないじゃない！ その剣にしたって刃こぼれしてて……ナマクラってやつでしよ!?!」

「なるほど実に常識的な判断だ」

普通に考えて膂力と頑丈さで劣る人間が剣のみ、それもなまくら一本を手にして魔獣に立ち向かうとどうなるか。

一爪魔獣なら、よほど運がよければそこらの農夫でも倒せることはある。

しかしこれが二爪以上の魔獣となると、一生分の幸運をつぎ込んでも虫を踏み潰すかのように殺されるだろう。

百人の兵士が束になっても殺しきれないのだ。

至極当然である。

「なら早く魔法でやってよ!」

「そこまで言うなら……」
《イマジン戒メノ磐牢バンロウ》

それを唱えると、カレンを囲むように何十本もの柱が地より隆起

し、頭上を覆い、閉じ込めた。

「なっ!? なによこれ!」

武骨な檻の中の少女が格子を掴んで必死に訴えかけてくる。

「お望みの魔法だよ」

「こんなのじゃないってば!」

魔法を所望するカレンのために一つだけ唱えてやったのだ。

もつともそれは亜竜を倒すためのものではなく、カレンを収監もとい保護するためのものだが。

「ああ、そうか。檻型よりも鳥籠型の方が外を見やすく良かったかもしれないね、ごめんよ」

「そういうことじゃない! いいから出してよっ!」

「全部終わったら出してあげるから、そこで信じて見ていなさい」

お父さんの背中を。

そう付け加えてから、俺は全ての意識を件の魔獣に向けた。

「——ドーム、亜竜サン。私は亜竜狩り専門家のアレン・メーテウスと申します」

琥珀色の蜥蜴然としたギョロ目に見つめられながら、俺は恭しくおじぎをする。

正々堂々と殺し合いをする相手に敬意を払うのは大切なことなのだ。

……しかし、不可解だ。

「待っていて、感謝するよ」

どうして滞空したままで、行儀よく待っていたのか。

あれほど隙を晒していたのに、攻めも逃げもしないとはどういうことかね?

俺とカレンの会話中を狙って襲いかかった瞬間に、一太刀で斬り捨ててやるつもりだったのに。

かつてはこの方法で君のご先祖様を大量に葬ってきたのだが……まさか、それが君の代まで伝承されてしまったのか?

亜竜狩りをしていた時を思い出せ。

こういう時は何があったか。

こういう時に俺は何をしていたか。

「……そうか、そういうことか」

尚も襲ってこない亜竜の前で落ち着いて記憶を辿り、一つの答えを導き出せた。

たしかにそれならば、納得できる。

「では、いくぞ」

助走をつけ、右の岩肌を駆け上がる。

そして身体を傾けたまま、壁走りの要領で岩肌を横に走り、亜竜の背後にあるものを確認――

「おおっとー」

だけはさせまいと、ついに翼を振り下ろしてはたき落としにきた。

想定が確信に変わった。

「やはりそうか、そうなんだな。だが安心しろ。先にそれをやるつもりはない」

もう一度、今度は左の岩肌を駆け上がり、愚直にそれを見ようと壁を走る――

「いよっと」

と見せかけて、叩き落とそうとしてきたところで跳び、背中 of 突起を掴んでしがみついた。

亜竜の形状的に、自身の背中に手は届かないので、もがくように前後左右、上へ下へと立体的に飛んで振り落とそうとしてくる。

「ワハハ！ その程度で振りほどけると思う……なぶっ！」

「アレんツ!?!」

そしてすぐに飛ぶだけでは振りほどけないと判断され、岩壁に叩きつけられた。

痛い。

骨が二十四本折れた。

臓器が三つ潰れた。

でもなんとか、即死にはならない衝撃なので再生は間に合う。

だからといって亜竜が叩きつけを止めることはない。

潰れて折れて治して潰れて折れて治しての繰り返しが続く。時折カレンの叫び声が入る。

そんな根気比べを何分も続けていると、亜竜の動きが大分鈍くなった。

子供でも乗りこなせる、はさすがに言い過ぎだが、少し鍛えた人間なら乗りこなせるくらいにはキレがない。

「なんだ、もうお疲れか。結局俺を殺しきれなかったな」

度重なる叩きつけにより計五百本は骨を折られたが、死には至らなかった。

次はこちらの番だ。

すぐに楽にしてやろう。

「よっ！ ほっ！」

最も動きが鈍くなった頃合いを見計らって、背中から首の上に飛び移る。

樹木の幹のような首を両脚でガツチリと挟み固定、すぐさま両手で握った剣を右の琥珀に、

「墜ちろー！」

「ギユツ……」

突き立てる。

鉄の刃が眼の奥にある柔らかいものを貫いた、その感覚を受け取った直後に、俺を乗せた魔獣は一切の動きを止めた。

「……墜ちたな」

空中で即死したそれが俺を乗せたまま谷底へ墜ちる。

ズシンという重い衝撃音と振動とがこの狭い空間内で反響した。

「ふうー……。つと、《経ル年劣ル華》」

亜竜から降りて、その確かな死を確認した後で、カレンを保する檻に魔法をかけた。

堅牢な檻が細かな砂に変わってさらさらと崩れてゆく。

「ちよつと！ 何するのよー！」

それで頭から砂をかぶったカレンが声を荒げた。

「はは、ごめんごめん」

すぐに駆け寄って砂を払うのを手伝ってやる。

「んもう。……それで、本当にやったの？」

「もちろんだとも」

足元の小石を拾って亜竜の顔に投げつけ、本当に死んでいることを証明する。

「な？ なまくら一本でどうにかなっただろう？」

「どうにかなっただって……。アレン以外の人間にはあんな真似できないわよ」

魔法も使わずに壁を走るとか、あんなに叩きつけられてピンピンしているのは普通の人間には不可能だとカレンは付け加えた。

叩きつけられても平気なのはともかく、壁走りは訓練すれば誰でもできるようになるのだがな。

後で手取り足取り教えてあげよう。

「とまあ、これで全て終わりだ。けどもう少しやっておくことがあるから先に戻っていてくれ」

「やっておくことって？」

「この死骸の解体やら後始末やらだよ。カレンも最後まで見ていくかい？」

右腕を刃に変え、それを亜竜の首に食い込ませながら問うと。

「うげっ」

苦虫を噛み潰したような顔を見せて、足早に来た道に戻って行った。

そうして亜竜の身体から首と四肢を切り離し終わると、小さな後ろ姿は完全に見えなくなっていた。ので、一旦解体作業を止めて岩肌の前に移動し。

「……やるか」

死体の解体よりも大事なことをやり残してあるのだ。

それは子供には見せられない、いや、正確には見せたくないし見られたくない。

そんな後ろめたい仕事が残っている。

感覚を取り戻す練習がてらほぼ垂直な崖を素手、それも小指のみを

使つてよじ登る。

それで十五メートルほどの高さだろうか。

先ほど亜竜が背にしていた、俺から必死に隠し通そうとしていた場所までくると、やはりそこには大きな窪みがあった。成人男性が複数入る余裕のある穴がぽっかりと空いていた。

「お邪魔します」

やけに薄暗い巣穴と思われるそこに上がり込む。

中の至る所に獣やら人やらの骨が乱雑に転がっているが、生き物の影は見当たらない。

……見当たらないだけで、小さな吐息を、心臓の鼓動を、俺の耳はしっかりと捉えている。

「そこかな？」

左手を切り落として、足元に転がっている細長い骨と組み合わせて点火する。

そんな即席の松明で奥の暗がりを探すと、

「……やあ」

怯えを湛えた琥珀が四つ、こちらを見つめていた。

第十五話 「こんにちは、綺麗な俺」

二つの命がそこに在った。

「はじめまして」

橙色の灯に照らされて、その姿がハッキリと見える。

全体的な大ききさで言えば羊や猪なんかと同程度。

やはり尻尾は長いが刺々しきはなく、硬い外皮や鱗は完成しておらず、どこも柔らかそうだ。

そして空を舞うための飛膜も未発達である。

何の力も持たない亜竜の幼体。

それらを一方的に屠るのだ。

「全く、成体の亜竜と戦うよりもよっぽど嫌な仕事だよ」

奥に行けば行くほど天井が低くなっていくので、腰を曲げながら一歩、また一歩と二頭の幼体に近づいていく。

俺との距離が近くなればなるほど幼子達は身体をきつく寄り合わせて縮こまり、震えを大きくしていく。

そうして手を伸ばせば触れるところまで詰め寄った。

「私はアレン、君達の親を殺した者です」

そこではやがみこみ、手前に灯を置いて端的に自己紹介をした。

対する二頭は澄んだ琥珀で俺を見つめたまま鳴き声一つ、唸り声一つ出さない。いや、恐怖故に出せないと言った方が正しいか。

それでも俺は一方的に話し続けなければならぬ。

「私は今から君達の息の根を止めます。ですがなるべく苦しめないように済みますので、それだけは安心してください」

何が安心してください、だ。それならもとより殺すなど自分自身に言っただけでいいが、そういうわけにもいかない。

仮にこのまま見逃したとして、飢えと渇きに苦しみながら死んでいかか、俺以外の人間に発見されて酷な死に方をするかのどちらかだ。

だから俺が責任を持って一思いに逝かせてやるしかない。

はつきり言っただけはエゴだ。

身勝手な自己満足だ。

「ただ俺は今までもこれが最善だと信じてやってきたし、これからも同じだろう。」

「許してくれとは言わない。恨まないでくれとも言わない」

言葉が通じているかどうかなどお構いなしに、全てを言い終えるまで続ける。

「俺の顔を忘れるな。これが君達親子から全てを奪った者の顔だ」

火が顎先につきそうなほど灯を近づけて照らしてみせた。

「今度生まれ変わった時に前世の記憶を、この顔を覚えていたならいつでも来い。復讐を果たすのもよし、弟子入りだつてさせてやる」

またどこかで会った時は、必ず与えよう。

必ず君達の力になってあげよう。

来世までツケておいてくれ。だから、

「安らかに眠れ。——《胡蝶ノ羽根休メ》」

唱えたのは微睡みを誘う魔法。

これは肉体よりも精神が疲弊して擦り減っている者に効きやすい。

この子達はきつと、俺がやってくるずっと前から息を潜めておくように言われていたのだろう。

もしかしたら悪い人間に敗北するかもしれないと聞かされて、それでも自分の親が勝つことを、悪者を追い払ってくれることを信じて。

そして親の最期の声を聞いてしまった後で、目の前に現れたのが俺だった。

その絶望は計り知れない。

事実、抵抗するそぶりもなく、フツと瞼を閉じて琥珀を隠してしまった。

すぐに安らかな寝息が流れ出てくる。

次こそはその魂が暴虐神ではなく、叡智神の元にでも辿り着くことを願い、

「やようなら」

両の手でそれぞれの胸を貫き、心臓を抜き取った。

胸と口から血を溢した幼子達は呼吸を止め、だらりと力無く崩れ落ちる。

それでも抜き取られた二つの心臓は掌上で三度鼓動し、それからピタリと止まった。

俺はイチジクの実ほどのそれを一つずつ口に入れ、咀嚼し、飲み込んだ。

◆◆

帰り道を進み、ようやくと白骨の彼の元に辿り着いたので、

「よいつ、しよお……！」

とても重量のあった、それこそ岩のようであったものを下ろすことができた。

「嘘でしょ……。本当に持つてくるなんて」

「落とさないように頑張りました。お父さんを優しく労わってね？」

ほっぺにチューでもされたら元気になっちゃうなあ」

額や背中に汗が滲み出ているのが触らずともよく分かる。

多少筋力のリミッターを外したものの、齡五千歳を超える年寄りには中々応えるのだ。

この労苦を可愛い娘が癒してくれたらなと思う今日この頃。

「ゼツタイやだ、汗臭いし。そんなことよりも何でこれを持ってきたの？」

「汗、臭……」

そんな俺の純情はバツサリと一刀両断された汗臭いし。ゼツタイやだ、汗臭い。

俺の気がゼツタイ汗臭い動転しているのも汗臭いお構いなしに、汗臭いし、カレンは汗臭い尋ねるやだ、汗臭いし。

汗臭い汗臭い汗臭い汗臭い汗臭い——

「……………チョット、イッテクル」

「えっ？」

「ココデマツテテ」

身体が勝手に動いていた。

半ば無意識の内に少し離れた岩陰に入り、衣類を全て脱ぎ去って

た。

そして俺は魔法を一つ唱え、五体を破裂させていた。

威力は最小限に、ただこの汗臭い肉体のみを消し去るために。

「さようなら、汗臭い俺。こんにちは、綺麗な俺」

出来る限り小さな肉片から、真つ新で清潔な身体で蘇った。

汗の一滴も出していないことを確認してから素早く衣服を着込み、カレンの元へ戻る。

「おまたせ」

「一体何をしたの？ それにあの音は何？」

怪訝な顔をして、疑るような視線を向けてくる。

「カレンお嬢様のために生まれ変わったのさ。もう汗臭くはないだろう？」

血生臭いだの化け物だのといった罵詈雑言には慣れている。

しかしどういうわけか、カレンに言われると重く深く突き刺さる。

出会って間もないというのに、どうしてだろう。どうしてこの子にこれほどまでの愛着が湧いているのだろうか。

幻術や催眠の類でもかけられているのかな？

「生まれ変わったって、まさか……！」

「まあまあそんなことより、どうしてコレを持ってきたかだけだね」俺が何をしたかを感じられそうだったので、話を強引に引き戻した。

勘の良い子供は嫌いじゃないけど好きでもないよ。

「これをこうして……」

俺が大変な思いをして持ってきたもの、それは亜竜の首である。もちろん先に殺した成体の方だ。

左眼に剣の突き刺さったままのそれを少し押して、白骨死体の真横に配置する。

「こうするためさ」

最後に、生前より白くゴツゴツとした男の右手を取り、亜竜を仕留めた剣の柄を握らせた。

「なんでそんなことするの？ それに何の意味があるのよ？」

「仮にだよ。仮にカレンが初めてこれを見つけた時、何があったと想像できる？ 彼が何をしたと思う？」

「えっ？ ……えっと、この人が頑張つて亜竜を倒して、それから死んじゃった ……と思う」

「その通り」

何も知らない人がこれを発見した場合、熾烈な戦いの末に男が亜竜を討伐し、それでも力尽きてしまったと考えるだろう。

これを見れば、彼が無駄死にしたなどと思ひ至る者は現れない。

それどころかいつの日にか、彼の詩曲なんかが作られるかもしれない。

「男という生き物はな、見栄っ張りなんだ。復讐がなんだ使命がなんだと言つても結局、死ぬ時も死んでからも恰好良くありたいものなんだ」

「なによそれ、バツカじゃない」

男の本質というものをカレンに説くと、心底呆れたように肩をすくめた。

「そうだ。男は基本馬鹿だ」

馬鹿で単純だから、ダサイ死に方をすると大層悔しがる。その悔しさがよくないものを生み出す。

あのまま何もせず放置していたら無念が累積し、魂を失った^{アンデッド}不死者に、人ではない何かに変質していた可能性だつてある。

俺がやったのは、それを阻止するための供養とも言える。

「カレンだつて、お墓に花を手向けるだろう？ それと同じことさ」

「ええ？ ……これが？ ……でも、そう言われると分かるような、分からないような」

「今は理解できなくても、その内分かるようになるよ」

人生は長いからね。

と、一言だけ付け加えてこの話題を終わらせた。

最後にもう一つ、やるべきことがあるからだ。

「それではこれより、レクイエムを一つ伝授する」

「レクイエムってたしか、死んだ人に歌う」

「そう、鎮魂歌だ」

魂を鎮め、穏やかな流転を願う唄。

「俺に合わせて歌うか、歌わずとも合いの手なり笛の音なりを鳴らしてやってほしい」

「わかった」

応えて取り出したのは、少し前に買った灰色の小さな石笛。

さしものカレンも音楽の才能だけは俺と同様に持ち合わせていなかったが、道中や寝る前によく練習していたおかげで、なんとか音を出せる程度には上達していた。

「いつでもいいよ」

カレンが石笛を支えるようにしっかりと持ち、吹き口を咥え込むのを確認してから、俺は息を吐き出す。

「共にゆこう　しがらみ捨てて

夜明けの先へ　まだ見ぬ空へ」

俺が殺した魔獣達、魔獣に殺された人達。

これは種族を問わず、全ての旅立つ者へ贈る唄だ。

全ての命ある生き物に死は平等に訪れる。

そこに貴賤はない。

「明星を　巡り飽きたら再び還ろう

芽吹けよ　芽吹けよ　命よ鮮やかに」

唄の調子を掴んだカレンが笛を吹き鳴らす。

まだまだ稚拙で未熟ながらも、気持ちの籠った音色が風に乗って流れてゆく――

そのまま通しで、二人だけのささやかな演奏もとい弔いを終えた。

これでこの峡谷での目的を全て果たしたので、ただ去るために歩み出す。

「……ああ、そうそう」

しばらく無言で歩いたが、未だになんとも言えない面持ちをしているカレンに告げる。

「予想以上に下手すぎて、笑いを堪えるのに苦労したよ」

「悪かったわね!!」

第十六話 「不死者の見る夢」

谷を抜け出た後、亜竜を討ったことを報せるために村に寄ることはせず、来た道とは別の道を選んだ。

晩になって道を外れて、見晴らしの良い丘の上、無数の煌めく星々の下に寢床を構えることに。

「おやすみ」

「おやすみ、カレン」

少女の寝入りを見届けてから、俺自身も眠りに就いた。

そして目を開いた時、自分であって自分ではないような、不思議な感覚があった。

「はてさてこれは」

起き上ってゆっくりと辺りを見回してみる。

するとどういいうわけか、周囲の景色が明らかに変わっていた。

辺り一帯が見覚えのない枯れ果てた大地となっていて、カレンの姿も寝具も見当たらない。

それで俺は一体どこへ飛ばされてしまったのかと考える間もなく、

——世界が動き出した。

灰色の景色が若々しい緑に塗りつぶされ、若々しい緑が熟した赤茶色へ、そしてまた灰色へ。

赤子が孵り、幼少期を経て大人になり、いつしか腰を曲げて土に溶け還る。

真つ新たな荒れ野に家が建ち、国が興り、そして廃れて元の荒れ野となる。

日が沈んで、再び浮かび上がり。

月が満ち、あつという間に欠けてゆく。

時と景色が目まぐるしく移ろい変わる。

そのどれもに懐かしさがあり、いつか目にしたものであると分かった。

おかげでこの場所が夢の中だと自覚できたが、それならばと、特に齒向かうことなく流れに身を任せることにする。

「さあ、何を見せてくれる。何処へ連れて行ってくれる」

誰に向けてでもなく呟くと、それに答えるかのように青白く光る道がすうっと現れた。

露骨に誘導するような一本道が足元から地平線の向こうまで伸びてゆく。

ので、素直にそれを辿ってゆく。

「懐かしいねえ……」

道の両脇には、俺の記憶と思しきものが絶えず映し出されるようになった。

幾度も訪れた街の景色。

戦友達の駆ける姿。

俺を裏切った者の涙。

湯気の立った郷土料理。

最後まで俺を信じてくれた人の笑み。

初めて殺されたあの日の事。

初めて人を殺した記憶。

良いモノも悪いモノも、その全てが大切に愛おしい、どんな宝石よりも価値のある思い出だ。

「……おやっ」

独り思い出に浸りながら歩いていると、ついに道が途絶えた。

その途絶えた先で、レンガ造りの一戸建てが俺を待っていたかのよう、木々に囲まれて佇んでいた。

それは決して豪邸とは言えないこじんまりとした一軒家だが、玄関先から窓ガラス、煙突の先に至るまで念入りに磨かれている、小綺麗で素敵な家に思える。

俺はこの愛らしい家を知っているような、知らないような。

「んん？」

家の敷地外で立ち止まって考えていたら、知らぬ間に足が上がっていた。

今までは自分の意志で動いていたのに、急に身体が利かなくなつた。

まるで糸で操られているかのように身体が勝手に動きだしたのだ。
「おい、止まれ！ このポンコツが！ 止まれってんだよ！」
おかしい。

普段は夢の中で思い通りに動けるのだが、今はそれができない。
辛うじて動く手で何度脚をぶつ叩いても、膝上に指を突き刺して神経を切断しても、それは止まらない。

止まらずにドアの前まで進み、

「おいおい冗談だろう？」

これがまるで自分の家であるかのように、慣れた手つきで、ノックもせずにシラカバのドアについた銀のノブに手をかけた。

そのせいでチリンと、鈴の音が鳴ってしまう。

俺という不審人物の存在が住民に知られてしまう。

「すみません！ 間違えました！」

ドアが開ききる前に俺は叫んだ。

……しかし、奥から飛んできたのは見当違いの言葉だった。

『パパ！ おかえり！』

『おかえりなさい、あなた』

快活な少女の声と物柔らかな女性の声。

それらがたしかに俺に向けてパパ、あなた、と。

すぐさま下げた頭を持ち上げてその姿を見ようとするも、見れない。
い。

何の因果か、卓について編み物をしている二人の姿が霞みがかって見えないのだ。

「……っ」

どちら様ですかと尋ねようにも、声が出ない。

首根っこを掴まれているわけでもないのに、吐息一つ絞り出せない。
い。

それなのに口が勝手に動いて「ただいま」の言葉を紡いだ。

認めたくはないが、半ば乗っ取られるようにして完全に身体の制御が利かなくなってしまうので、諦めてこの夢の歯車に徹することに
する。

するとこの身体は卓につき、彼女らの編み物を手伝い始めた。

『あのね！ 今日ママに護身術を教えてもらったの！』

『この子だったら相変わらず飲み込みが早くて、教える方が困っちゃう』
凄じやないか、流石は俺達の娘だ。などと褒めながら右手を娘の
頭頂部にぽんと置く。

何てことはない家族の日常に、この身体の持ち主の幸福感と充足感
がヒシヒシと伝わってくる。

それらを得るに至るまで、よほど辛く険しい道のりを歩んできたと
みた。

だからこそ彼は誰よりも強く妻と娘を愛しているのだろう。それ
こそ自分の命よりも。

……そう。

俺には永遠を誓った妻も血のつながった娘もいた覚えはない。

つまりこれは、俺ではなく別の誰かの記憶であり、夢の中のこの肉
体は赤の他人のものである、そう考えるのが妥当だ。

おめでどう。

よく頑張ったな。

末永く幸せに生きるのだぞ。

彼と彼の宝物に、願いと寿ぎを注いだその瞬間に、

——またしても世界が暗転した。

緑の中の一軒家とは違う、都会の只中に俺はいた。

そして今度は半透明で浮遊間の強い、言うならば霊体のようになっ
ていた。

少なくとも乗っ取られても操られてもいない。

「……………何が、起きた？」

場所と身体が変わったことを疑問に思ったのではない。

今感じているものに疑念を抱いているのだ。

夜空の下で紅く燃える街並み。

黒煙と死肉が焼け焦げる臭い。

四方八方から悲痛な叫びが聞こえてくる。
怯え逃げ惑う人々が俺をすり抜けてゆく。

先ほどの長閑な日常とは違う、狂乱に飲まれた街。
それを見てすぐに、引き寄せられるように走り出した。

「間に合え、間に合ってくれ！」

瓦礫の下でもがき苦しむ者や焼け爛れて這いずる者を尻目に走る。
誰よりもこの俺が早急に行かなければならない気がするのだ。

それだけを念頭に走って、走って、必死に走って街の大広場まで
やってきて、やつと目に入った。

「クソッ！」

遅かった。

手遅れだった。

広場の中央に置かれた、礫台の側で妻が涙を流し、抱えている。
ぐったりとした、息のない娘を力強く抱えていた。

髪や目の色さえ分からないほどに霞がかかっていてもそれだけは
ハッキリと分かる。

だのに、どうして、どうしてあの男はいない？

何処をほつつき歩いているんだ？

何の理由があつて妻と娘の隣にいてやれない？

『※※※※※——』

妻が男の名を叫ぶ。

その叫びに覆いかぶさるように後方に見える城、城塞の一つが大爆
発を起こし、凄まじい衝撃と轟音が冷たく重苦しい空気を震わせた。

音を聞くだけでも感じ取れる、恐るべき破壊の力。

常軌を逸した何かによるものだ。

それこそ四、五爪の魔獣が暴れ狂っているとでもいうのか——

「……いいや、アレは」

火に包まれた城塞の方を注視して、見つけてしまった。

紅蓮と漆黒の溶け合った空を飛び回る小さな影を。

それは龍の翼と尾を生やし、虎の牙と爪を光らせ、その他諸々の獣
を取り込み、古今東西の禁忌の術を施し、ヒトとしての貌を殆ど捨て

ていた。

……そして、直感的にそれが、男の変わり果てた姿であると分かった。

『もうやめて！ もう、十分だから！』

妻は娘の亡骸を抱えたまま、破壊と殺戮を止めるよう男に呼びかける。

しかしその声が届いていようがいまいが、男は止まらない。

やっと掴んだ幸せを奪い取られたのだ。

今は目に見えるもの全てを憎んでいるだろう。

そんな光景を見て、俺は悔やむだけで何もできないまま、世界が崩れ落ちる――

「――畜生ッ!!」

「ど、どうしたのアレン!? 大丈夫!？」

「え……?」

目を開けると、柔らかな陽光が差し込んできた。

もう誰の金切り声も聞こえないし、死臭だってしない。

そして隣に、心配そうに俺の顔を覗き込む少女がいる。

「……………あ、ああ。おはようカレン」

「ずっと苦しそうな顔してたけど、イヤな夢でも見たの?」

「いや、大したことじゃ……つウツ!？」

「ちよつと！ほんとに大丈夫なの!？」

突如として酷い頭痛に見舞われた。

罪人を咎め戒めるような激痛が頭の奥深くから生じ、起き上がることを許さない。

それはいくら待っても、和らげるツボを圧しても一向に治まる気配がないので、針状にした指を耳の穴の奥深くまで突き刺して落ち着かせた。

「……………よし、これで大丈夫だ」

「全然大丈夫じゃないわよ！ 今、死んだでしょ!? ねえ!」

「気のせいだって。ほら、朝ご飯にするよ」

カレンの糾弾を軽くやり過ぐし、あの夢の一切を頭から切り離して、朝の雑事に取り掛かることにする。

再度頭痛を引き起こしてこの子を心配させたくはないのでな。

そうして黙々と栄養を摂り、冷や水で顔を引き締め、丘の上に広げたものを仕舞い込んでから道に戻って歩き出した。

「あれはな、イヤな夢どころじゃなかった。何とも後味の悪い夢だった。言うならば食後に腐った泥団子を食べてしまったような」

「うげえ」

「それでも聞いてくれるかい?」

「……うん」

静謐の心を保ちつつ、夢の出来事を思い巡らし。

その一部始終をカレンに打ち明けた。

「……それで最後に、夢の世界がボロボロと崩れていって、目が覚めたってわけさ」

「ふうん……」

誤魔化すことも偽ることもせず語り終えた。

その全てを聞き取ったカレンはというと、への字に唇を結び眉間に皺を寄せて小難しい顔をしている。

そのままの顔で何十歩か進んだ後で、口を開いた。

「助けてあげられなかったの? その男の人を止めて、女の子を蘇らせて、ゼーんぶ元通りに直すの。アレンならできるとでしょ?」

「ハハハ、中々に嬉しいことを言ってくれるじゃないか」

「違うの?」

意外にも俺を買い被ってくれていて、その期待を裏切るのが心苦しい。

「そもそもが、あの場所では何にも触れずにただ見ているだけの幽霊みたいなものだったんだ。仮に触れたとしても、死人を蘇らすことなんてできないがね」

俺が蘇生できるのは俺だけだ。

死んだ女の子をさも生きているように動かすだけなら可能ではあ

るが。

「それにあの男を無理矢理にでも止めるとして、はたして何度死ねばいいか」

あの男からは、そこんじよそこらの武勇持ちを指先一つで消し飛ばせるような強さを感じた。

それは許されざる法に身を浸して手に入れた、死なない限りは元の姿には戻れない代物ではあるが。……いや、下手すれば死んでも戻れはしないか。

そうなつてしまった事情に共感はあるが、同情はしない。

己の弱さと未熟さがもたらした結果なのだから。

「まあとにかく、あの度合いの化け物相手に正面切って戦いたくはないな。アレとやるには——」

——俺自身も醜い怪物となる必要があるゆえ。

第十七話 「流行りの歌を一つ」

カレンと旅を始めてからおよそ一月は経っただろうか。いくつも野を超え、山を越え。

森を抜け、人里に寄り。

時折出会いはぐれ魔獣を処理し。

俺にとつてはいつか過ぎた道、少女にとつては初めての土地を、それなりにゆつたりと歩み続けた。

そうしてまた一つ、涼やかな風を感じながら小山を越えると……ついにそれが目に入った。

「ねえアレン！ あれでしょー！」

カレンが初めて見る景色に目を光らせる。

俺としても千年以上見ていないものだが。

「ああそうだ。いい眺めだろう？」

「うん！」

視界の左半分には、のんびりと散歩したら回り終えるのに半日はかかりそうな湖の、その煌めく湖面が青空を映していた。

最奥にはそれなりの標高を持つ山地が連なっている。

その山地のいくらか手前の平地に、主に赤や茶、稀に青や白などを基調とした色鮮やかな瓦屋根が寄り集まっている。

それも十や二十ではなく、ぱっと見で五千を超える数がひしめき合っていた。

いわゆる都市というものだ。もしくは小さな国とも。

中心部には城らしき白亜の巨大建築もあったので、やはり国と言った方がいいかもしれない。

ほかにも都市全体を分断するように運河が通っているのが見受けられた。流れの開始地点は湖からで、都市を分断した後も東の地平線の向こうまで続いている。

「ねえアレン！ あそこまで走ろうよー！」

「何も逃げるわけじゃないんだからのんびり行こう。到着した後で疲れてもう動けない、なんてことになったら嫌だろう？」

「んん……」

興奮を露わにしたカレンを鎮めて、のんびり進む。

全景が見えた丘の上から街まで半分を過ぎた辺りに、街への道と西へ伸びる道の岐路があり。タイミングよくその岐路で、西道からやってきた男性とがち合った。

平凡な顔つきをした中背栗毛の壮年男性で、やけに身のこなしが軽く、筋骨隆々というわけではないがしつかりと鍛えられた五体を備えている。

………またか。

「こんにちはー!」

やはり真つ先に、調子の良いカレンが挨拶をした。

それに男は作り物の笑みを浮かべて返し、言葉が続ける。

「お二方はあの街へ? 一緒にしてもよろしいですか?」

「うん! いいよー!」

カレンがほとんど俺に喋らせずに勝手に話を進めていく。

人が多い方が賑やかで楽しいよね! などと何も知らない純粹無垢な顔で言う。

はたして同じことを、相手が問者や刺客であると知った後で言えるだろうか?

いやまあ、すぐにそれを教えたりはせずに、眼力を養わせるつもりでいるが。

とりあえずは街の近くまで同行して、カレンに危害を加えないように警戒だけはしておく。

「トミツチです。詩を吟じるのを生業としております」

「あたしはカレン、こっちはお父さんのアレン」

「やあ、はじめまして」

俺が手を差し出すと、拒むことなく握り返してきた。

吟遊詩人にしてはよく使いこまれた手をお持ちで。

さぞやその懐に隠した得物を使うのに役に立つでしょう。

「では何か、流行りの歌を一つ頼むよ」

言いながら銅貨を二枚、俺とカレン二人分の報酬を軽く投げた。

男はそれを溢すことなく掴み取ってから、背中にかけて縦琴を手に持ち、ポロンと弦を鳴らす。

「これより奏でるは、今を生きし英雄譚……」

心してお聞きあれ、と付け加えてから軽快な調べと共に紡ぎ出す。「東の島の生まれにて、幼き頃より武に通ず。十ならずして岩を割り、十五の夏に竜を討つ。

その者の名はケイ、勇者ケイ」

勇者ケイ、か。知らない名前だな。

そしてその称号に恥じぬ力だ。

俺が竜を初めて単独で倒したのはたしか二百半ばの頃だったから、これは凄いことだ。

「弱きを助け、悪しきを穿つ。天真爛漫天衣無縫、真正直なるその性^{さが}で、二人の英傑仲間とす。

暴食の大杖ミロシユ、憤怒の剛拳グリゴール——」

三人の冒険や成し遂げた偉業などがつらつらと、頭に残りやすいように歌われ。

しばらくのちに転調して、歌の山場に。

三年前にあったという、俺の知る限りでは三百八十二回目の魔人との大戦に突入した。

……こいつらいつも戦争してんな。

「北方の魔界より大軍攻め来り、数多のしかばね踏み越えて、勇者ら戦場駆け抜ける。百の魔獣、千の魔人を斬り倒し、将の元へと辿り着く。

笑い顔とも怒り顔とも取れる面構え。魔界の四将が一人、黒騎士アインデイ」

これまた知らない名前だ。

千年前の四将とは代替わりしてしまったか。

「英雄同士向かい合い、手出し無用の一騎打ち。火花飛び散る風裂ける、誰ぞ寄ること許されぬ——」

二人を中心に暴風が逆巻き唸り、砂と塵、血と汗とが舞い散ったという。

そして嵐が過ぎ去った後で相手の首を持っていたのは勇者だった

……がしかし、首だけのそれに呪いをかけられ、戦争終結後に勇者一行は姿を消して行方知らずに。

「ああ、我らは望み続けん。かの者達の帰還を」

最後に優しく弦をつま弾き、譚が結ばれた。

流れるように、ご清聴ありがとうございましたと一礼。

「すごいっ！　すごいよかった！」

カレンが軽く飛び跳ねながら手をパチパチと叩く。

もちろん俺も惜しみなく拍手を送る。

見事に引き込まれた、文句なしの歌いつぶりだ。

君は一人前であると、最古の吟遊詩人が太鼓判を押そう。

「いやあ、こなれてますねえ。詩人大学は卒業されたんですか？」

「はい、十年ほど前に」

「なるほど」

意外にもその言葉には嘘が混じっていないなかった。

実は俺様はその大学の設立者の一人なのだ。だから卒業生が汚れ仕事をしていると聞いてとても悲しいのだ。……などと言えないのがもどかしい。

「生まれはどちらで？　都ではどんなものが流行っているんです？」

実は我々は南の田舎村の生まれで、色々と疎くて」

「そうだったんですか。今の流行りと言えばですね——」

何の変哲もない吟遊詩人という役を固めていて、どうも尻尾を見せる気がないので、現代世界の情勢や流行りなんかを聞き出しながらゆるりと街を目指す。

そうして街の全景を視界に収めきれない距離まで来て、結局カレンはこれっぽっちも気付いた素振りを見せなかった。

まあ無理もない。彼の演技は完璧だったからね。よく頑張っていると思うよ。

八百歳くらいの俺だったら騙せていたんじゃないかな？

……ではそろそろ、楽にしてさしあげよう。

「そういえば、ずっと気になっていたことがありますね」
お聞きしてもよろしいですか、と尋ねると。

ええ、どうしました？ と、あくまで顔色一つ変えずに返してきたので、躊躇いなく一手を打つ。

「懐と、靴の裏に隠した刃物はいつ使うんです？」

「な……」

これまでトミッチ君は俺達と淀みなく言葉を交わしていたが、初めてそれを詰まらせた。

もちろん一秒とせず元通りに直したが、その僅かな時間に見せた焦燥と不安を見逃しはしない。

「おやあ？ どうか、しましたか？」

ぽかんとしたカレンをよそに、俺は畳みかける。

加えて先程彼が見せたのはまた違う作り物の、口角を上げに上げ切ったとびきりの笑顔を見せつけてやる。

「……………」

彼の中では、カレンも俺も完璧に騙せたと思っていたのだろう。

だからこそ、唐突な鎌かけに引っかかるのだ。

テンノたるもの、仕留めるまでは常に看破されているかもしれないという心持ちであれ。

「ではまず、所属を教えてくださいませんか？」

「ふッ！」

俺の質問に答えず、後ろに跳んで距離を取りながら、裾から抜き取ったものをそのまま飛ばしてくる。

投げナイフだ。

俺の顔目がけ真っ直ぐに飛んできたそれを右手の甲で受けると同時に、カレンが小さな悲鳴をあげた。

「まんまと食らうとは、馬鹿め！」

「とするとこれは、毒かい？」

「ああそうさ、すぐに全身に回って死ぬ猛毒さ。まさか使うことになるとは思わなかったがよ」

トミッチ君の口調がぶつきら棒なものに変わり、すでに勝った気であるようだ。

そんな悪い子には、見せてあげよう。

「教えてくれてありがとう……よっ！」

踵で地を蹴つて一瞬で詰め寄り、懐の得物を奪い取る。

「ッ!？」

そしてそれを持ち主の喉元に突き刺す……なんて野蛮な真似はせず、

「ぐっ」

俺自身の右肘関節に刃を食い込ませ、切り落とした。

それを見た彼は驚嘆の表情を浮かべる。

同時にある程度事態を掴んだカレンが後方で「げえっ」と蛙の鳴き声を真似した。

「おー、いてて……」

「お前正気か!？」

「ああ、正気だとも。毒で死なずに済むんだから」

解毒剤や聖呪で治すことのできない、または間に合わないような状況下においてはこれが一番なのだ。

「それに腕の一本や二本斬り落としても、ほら。また生やせるしね」

「こ、こんな化け物が相手だなんて聞いてねえぞ！ あのクソジジイ共が！」

「きやあつー！」

隠すことなく自身を送り込んだ者への愚痴を吐きながら、玉のような何かを真下に投げつけ。

それは地面に触れた瞬間に眩い光を放出し、俺とカレンの視界を奪った。

暗部の者御用達の光り玉で間違いない。

いやはや眩しい眩しい。目の前が真っ白で何も見えないや。

「だから簡単に逃げられるとでも？ ……そこだな、《結ベヨ絡ミ草》」

舌打ちをして跳ね返ってきた音を元にして視る、いわゆる反響定位を用いて男の居場所を特定、捕縛の魔法を唱える。

すぐにどさつと倒れる音がしたので、上手くいったようだ。

なにも視覚が奪われたからといって、聴覚や触覚まで機能しなくなつたわけではないのだ。

そして視力が元通りになり、首から下を繭のように緑で包まれて動けないでいる男の姿が目に入った。

第十八話 「最期の輝き」

何度か瞬きをして視力が回復したのを確かめてから、捕縛したそれに近づいて視線と腰を下ろす。

「ご機嫌はいかがですか？」

「……最悪だよ」

優しく問いかけると、蜘蛛糸に巻かれたような状態のまま、土混じりのツバを吐き捨てた。

特にもがくこともせず、死を受け入れた諦め顔をしている。

「さっさとやれよ」

「まあまあ、そう焦らずに。少しだけお喋りしましょうよ。あなたはどこから送られてきたテンノなんです？」

彼らはテンノやスツパなどと呼ばれていて、主に諜報や暗殺、破壊工作なんかの忍び事を担っている。

普通に生きていれば関わり合うことのない存在だが、五千年も生きているとどうしても避けられない。

今回だって、俺の封印が解かれた事をどこからか嗅ぎつけた国や組織が送り込んできた次第だ。

ちなみにカレンと旅を始めてからはこれで四人目となる。

「簡単には口を割らねえぞ？ 早く殺せ」

「そうしたいのはやまやまなんだけどねえ……」

望み通り土に還してあげるか、それこそ雇い主を殺すように暗示をかけてから送り返すのが最善ではあるのだが、

「……ねえ、ダメだよ？ 酷いことしたらダメだからね？」

カレンが目を擦りながらやってきて、またしてもそれを禁じた。

「目は大丈夫かい？ ちゃんと見える？」

「うん、大丈夫。それよりもこの人、テンノなのよね？ 絶対に殺したりは」

「もちろん分かっていますとも。お嬢様の命令は絶対です」

これまでに三度現れたテンノ達にも、ご丁寧に記憶を消したり、記憶を消した上で別の方向へ逃げたと思込ませた。

だから俺以外は一滴も血を流していない。

この事実を二千年前の俺が知ったら、やれ腕が鈍っただけのやれ腑抜けたかだのと大喧いするだろうな。

「そういうわけで、君に危害は加えられないんだよ。この子に感謝するといい」

「ケツ。んなら今すぐ逃がせよ」

「まあまあ」

身の安全を悟り、より一層ふてぶてしくなった男を宥めつける。

明らかにこちらが優位に立っているはずだというのに、下手に出なければならぬというのには不思議なものだ。

拷問なんかで吐かせようにも、カレンはそれを許してはくれないだろう。

まあ、それならそれで説得の方法はあるのだが。

「何も君の主人にお礼をしたいわけじゃないんだ。ただ名前と所属を知っていれば、少しでも避けることができると思っただけ。教えてくれよ?」

「知らねえな。早くこれを解けよ」

「別に解いてあげてもいいけど、そうしたらまた、俺を狙いに来るだろう?」

聞かずとも分かることだ。

標的に顔を知られ、取り逃がしたので帰ってきました……なんて失敗が許される裏組織などない。多かれ少なかれ、何かしらの罰を受けるのは言うまでもない。良くて指を一本詰められる、悪くて自分を含めた一族郎党葬られる。

それ故、生きている限りは死に物狂いで何度でも襲ってくるのだ。

「しかしながら次襲われた時に機嫌が悪かったら、正当防衛で君を半分にしてしまうかもしれない。だからといって君も手ぶらでは帰れない。そこで、だ」

私にいい考えがある!

と、キツパリ言い切って、食料袋からあるものを取り出した。

それを隣で見ていたカレンがあからさまに嫌な顔をする。

「これが何か、分かるかな？」

形や色合いで言えばイチジクの実やイチゴに似ていて、それらよりも一回り以上大きい目で管の付いたものを、男の眼前にそっと置いた。

「なんだ……これ？ 何かの動物の心臓、か？」

「その通り。それは俺の心臓さ」

「……は？」

複数の疑問を含んだ声を無視して、血の流れていない心臓に向けて唱える。

「——《刻^{キサ}メヨ拍^{ハクドウ}動》！」

するとドクンドクンと、機能を停止したはずの心臓が鼓動を始めた。

事実血の循環などの機能が働いているわけではなく、それは死んでいる。

ただ一定の間隔で伸縮と拡大を繰り返しているだけだ。

それでもカラクリを知らない者の目を欺くには十分である。

「それを持つていけば褒美を与えられこそすれ、罰を受けるなんてことではないだろうよ。俺の肉体については心臓を残して灰になって消えたとしても言っておきなさい」

そのように助言しながら拘束も解いた。

すぐに服についた砂や土を払いながら、こちらを睨みつつ立ち上がる。

それでも流石に力の差というものを理解したのか、襲ってくる気配はない。

「どころか心臓を手を取ったまま停止し、言葉を発することもない。

「ほら、もう行っていいよ」

口を割りそうにないのでさっさと帰ってもらって、次に来るテンノを当てにするつもりだ。

その代わり彼の今後のために、お節介な話でもしてあげよう。

「それと君さ、テンノに向いてないよ。今でも殺した人間の事を覚えていて、後悔しているんだろう？」

「はっ、そんな優しい奴に見えるか？」

俺の言葉は的外れだと、小馬鹿にして笑う。

その際目端をピクツと動かしたのは虚言の色で間違いないので構わず続ける。

「あとはそうさね、幼い頃から苦勞してきたね？ それでふらっと現れた詩人の歌に心動かされ、励まされでもしたんだね」

「……………なんで、そこまで分かんだよ」

「分かるさ。君の顔にそう書いてある」

そこまで言い及ぶと、絞るような声で認めた。

もちろん男の過去が顔に書かれているわけがないので、これは五千年分の統計を基にした推測。早い話が常人の人生何十回分もの長い間、ヒトと関わり合っつていれば嫌でも分かるということだ。

年寄りの標準技能である。

「だからこんな仕事はもうやめてさ、歌と共に生きるという」

一度きりの短い人生を、心に嘘を吐いたままで終えるのはよろしくない。

そう付け加えると、男はどこか遠い目をして黙り込み。

今度は口に手を当てブツブツと、俺の名前を呟きだした。

「メーテウス、メーテウス……………まさか！ 《鏡眼》《モツ抜き》《くさはみ》のメーテウスか!？」

「ご明察。よく知っているねえ」

その二つ名はどれも二千歳半ば辺りのものだったかな。

いやあ懐かしい懐かしい。

「どうりで筒抜けつてわけかよっ！ ……全部作り話だと思つてたんだけどなア」

あははと、清々しい顔をして笑う。

何ものにも囚われず、無邪気な、青臭い笑顔で。

そうしてひとしきり吐き出した後で、ふうーと深呼吸をして呼吸を整えてからこちらを向く。

「ありがとよ、良い思い出になった」

「それはよかった」

なんともすつきりとした、冷や水に打たれたような面構えだ。

その顔をしている内は、己に嘘は吐くことはないだろう。

「んじや、そろそろ行かせてもらうわ。……それとこれは独り言だけだよ、俺の飼い主はゼルベンジヨの元老院だ」

「あー……。悪いんだけどさ、千年前の国名で言ってくれない？」

正直に言ってくれたのは大変ありがたいのだが、どうやら俺が封印されている間に生まれた国のようで、全く聞き覚えがないのだ。

「そこまで知るかよ、あばよ」

そんな事情など知ったことかと、そっけない態度で明後日の方向へ去っていく。

少しずつその背中が小さくなっていき、ふと、まだ声が届く場所で立ち止まって振り向いて――

「――お前の歌がまた増えるぜ」

それだけを言い残し。

今度こそ振り向くことなく、丘の向こうへ消えて行った。

「……あの人、大丈夫かな」

「さあ、どうだろう。サクツと処分される可能性だってある。そうならないようにできる限りのことはしたつもりだけどね」

「そんな！ 酷い！」

「そうは言っても、彼自身がすでに人を殺めているんだから今更だよ。報いを受けるだけでも言える。すぐに死んで償うか、生きて償うかのどちらかさ。ほら、いくよ」

こればかりはもう仕方のないことで、我々にできるのはせいぜい祈るくらいしかない。

彼の選んだ道筋に幸多からんことを。

「それで、カレンや」

「なに？」

再び都市に向かう道歩き出してすぐに、カレンを問い詰める。

「今回もまた、気付かなかったのかな？」

「……きつ、きき気付いてたわよっ？ ただちよつと、いつ言い出すか

迷ってて、その」

苦し紛れの言い訳をしながら、言葉を詰まらせる。

紅い髪のみを指で巻く仕草をする少女の目は泳いでいて、一秒たりとも俺と合わせようとはしない。

「これで四度目」

「つ、つぎは見抜くから!」

一人目のテンノを、昼寝の最中に丁寧に案内してくれたのはカレンである。

それで俺が殺されるのを目の当たりにして、泣きべそをかきながら「次からはちゃんと見抜いて知らせる」と言い出した。

そんな少女の意を汲んで、即刻気付いたとしてもなるべくは知らぬふりをしている次第だ。

あと何十人送り込まれたら気付けるようになるかの成長を見守ろう。

「まあ、十年は待つてあげるよ」

「一年もかからないってば!」



「特にこれといった名物はねえが、ここは平和で良い国さ」

「そのようですね」

俺もカレンも両腕を横に広げ、服の上から軽く触られて危険物の有無を確認されている。

都市の入口手前で荷を置いての検問、入国審査の最中である。

目の前には見張塔付きの立派な都市門がそびえ立っているのだが、そもそも都市回りに防壁や堀などが無く、全方位からの侵入を許すかたちになっている。

来るもの拒まずの無抵抗の姿勢なのか、外敵を作らない国策を取り続けているのかは分からないが、とにかく一定の平和が無ければできないことには違いない。

「……よし、これといって変なモノはねえな。ようこそリボンレイク

へ。ゆっくり観ていってくれ」

「どうも」

その代わりと言うべきか、食料袋の中身までも念入りに調べられた。

昨日のうちにアレン肉を食べきっておいて正解だった。

「お嬢ちゃんも楽しんでいってくれよなー！」

「うん、ありがとー！」

最後に銀貨一枚の入国税を支払うと、少々錆が目立つも重厚な落とし格子が上昇し、最上部でガキンと嵌ってから通行を許された。

異邦人に対する突っかかりや入国税の割り増しなどは一切あらず。カレンが手を振るのを止めるまで、他意の無い笑顔で振り返してくれた。

「うわあ……！」

都市門から視線を外し前を向いて歩き出したカレンが、首と眼球を八の字に回しながら自然と声を出した。

自身がいた村には三軒とない複層建築が立ち並び、道の奥には白塗りの巨大な宮が鎮座し。

目をつぶって石を投げても誰かに当たるほどに人が密集していて。足元には色や形の違った石同士をぴったりとはめ込んで均した石畳が敷かれている。

耳には無数の話し声や鼻歌、商売人が客を呼び込む声が入り込み。

食い物屋台から流れてくる甘酸っぱい匂いや塩辛い香りが鼻腔を刺激し、それは歩くだけでころころと変わってゆく。

「ねえどうしよう。頭がどうにかなりそう」

「ははは」

もちろん城まで続く中央道だからと言うのもあるが、村ではあり得なかつた情報量の多さにお困りのようだ。

この状態で少し手を離したらすぐにふらつと消えてしまいそうなので、そうならないようにぎゅっと握っておく。

「どこを見てもキラキラしてて、すごい」

「それが都というものだよ。これでもまだまだ中の下つてところかな

？ とはいえ少し、不気味だな」

「不気味？ 何が？」

「いやあ、ちよつとね」

目抜き通りを行き交う者は皆、誰も彼も輝いていて。

それこそ明日が来るか分からないから今を精一杯生きている、もつと別の言い方をするなら「星の最期の輝き」のようにも感じられる。

俺が知らないだけで、最近はそういう生き方が流行っているのだろうか？

などとあれこれ考えながら大小様々な通りを小一時間歩き、手頃な宿を見つけ。

そこで食事を、淑女にあるまじき早食いをしたのち表に出て。

「いいかカレン？ 危ない場所には行かないようにするんだぞ」

「分かったつてば！」

「怪しい人に誘われても」

「ついていけないわよ！ はやくはやく！」

「それではこれより——」

餌を目の前にした犬の如くうずうずした少女を、

「好きに回ってきてよしー！」

「行つてきまあーすつ!!」

解き放つた。

第十九話 「超古典的な捨て台詞」

少女は鎖を外された獣の如き勢いをもって走り出す。

「夕暮れ時には帰ってくるんだぞー！」

「分かったー!!」

その小さな体で雑踏の隙間を縫うようにして、瞬く間に紛れて消えてしまった。

「やはり、若さは荒波であるか」

しつかり手を握っておいて正解だったと改めて思わされた。

いつの時代も若人の好奇心と衝動を抑え込むのは骨が折れる。

ちよつと目を離れた隙に暴走してしまうことが多々ある。

「――《キ帰セヨシメ示セヨナシ汝ガアルジ主》」

あらかじめ預かっておいたキキヨウの髪留めに糸を括りつけて人探しの魔法をかけ、その導きに従って歩く。

たしかに自由行動を許可したが、それを監視しないなどは一言も言っていない。

他人の子供を預かっているのだ。

何があっても大丈夫なように見守るのは当然の責任である。



初めにカレンが飛び込んだのは、この国で最も活気づいていて往来の激しい、城まで続く中央通りである。

雑居建築が隙間なく立ち並び、数多の露店や大道芸人が激しく自己主張をする色彩豊かな繁華街を、人の流れに乗りながらも本能と好奇心の赴くままに駆け巡る。

露店に並んで綿菓子を買ひ、宝飾店の煌びやかな装飾品や土産屋の物珍しげな工芸品に目を輝かせ。

また別の露店で油の滴るベーコン串焼きを手にして頬張り、流行りの占いを受けてやけに上機嫌になったと思ったら、今度は甘く香ばしい蜜塗りのパンを両手持ち。

なんともまあ、年相応の女の子らしい金の使い方だ。

……いや、少し食べ過ぎではあるかもしれないが。

「ほらー！ 可愛い嬢ちゃんにはもう一つサービスだ！」

「ほんと!? ありがとうー！」

それに、ほとんどの露店で何かしら買った以上のものを貰うため、腹を破裂させないか心配である。

最大の懸念は、長耳だからと石を投げられたり忌避されたりするということであつたが、今のところはそういつた感情を持つ者は一人もないようだ。

長耳などの異種族は見つけ次第処刑及び晒し首が一般的だった時代や都市をいくつも見てきた。

ここが寛容な国であつてくれて何よりである。

「綺麗……。中も見たいなあ……。……」

都を横断する運河に架かる橋を渡り、最奥に位置する白塗りの巨大建造物——湖面に映る姿が美しいと評判の泡沫城——にしばらく見惚れて。

その後で中央通りから西の二番通りへ、二番通りから三番通りへと順繰りに観ていく。

……全く、大した休憩も取らずに元気なことで。

通りの数字が大きくなつていくにつれ中央通りや二、三番通りほどの活気は無くなり、いよいよ人も疎らになつてゆく。

そこでカレンは逆に人気の無い、路地裏や暗所に刺激を探し始めた。

子供はよく、何の根拠もなしにこういつた場所には誰も見つけていない宝があるのでは、と考えつく。

もちろんあるわけがないのに、あつたとしても大概はよろしくないものだというのに。

そして露店などが一切見当たらない八番通りの、とある路地裏に入り込んだカレンの足が止まった。

「……………」

何かを目にして言葉を失っている。

ほとんど光の差し込まない、薄暗い路地の奥で三人の若者達がしがみこみ、彼らの足元にはぐつたりと蹲っている小猫が一匹。

そのボロ雑巾のようになったものを、なおも男達は棒で小突いたり蹴って裏返したりして愉しんでいる。

今の所は辛うじて息があるが、このままではじきに逝くだろう。

もちろん小猫に同情はするが、我々には無関係の他人事なのでさつさと離れるのが利口な立ち回りであるのだ……が。

「ちよつとアンタ達！ 何やってるのよ!!」

やはりというべきか、カレンはそれを黙って見過ごすなどとは欠片たりとも考えていなかったようで、力強く声を飛ばしてしまった。

……危険な場所に行くなども、危ない人に関わるなども釘を刺したのになあ。

「あー?」

「なんだ嬢ちゃん、オレらと遊びてえのか?」

「よお、こつち来いよお」

田舎者で世間知らずな、可愛らしい少女の存在が認知された。

すぐにおぼつかない足取りの男が近づいて手を差し出したが、カレンはそれをパシリと叩いて三步下がった。

「弱いものいじめなんかして、ダサイって言ってるの！ それと酒臭いから寄らないで!」

ナチュラルに煽っているのか、それとも猫から意識を逸らせるためかは知らないが、おかげで三人の澱んだ目が揃ってカレンを睨みつける。

「ツんだとコイツ……!」

「なあ、俺達が怖くねえのか?」

「この前見た亜竜に比べたら、アンタ達なんか怖くないわよ!」

相手に恐怖を悟らせない声色で啖呵を切っていく。

しかし口でそうは言っても、やはり身体の方は正直で。

視力を上げてカレンの脚部を注視すると、僅かに震えているのが確認できる。

「なら、身体で分かせてやらねえとな?」

「だなア」

三人は顔を見合わせ、それから下卑た笑みを浮かべてカレンに向き直る。

そして男の一人がジリジリとにじり寄り、少女の細腕を掴もうと手を伸ばす――

「――触ら、ないでッ!!」

男の手が柔肌に触れるすんでのところで、しっかりと溜めを作った上での蹴り上げが放たれ、

「おぶっ……」

カレンの並外れたバランス感覚を主軸とした、ブレのない鋭い一撃が男の息子を強襲し、食らった本人も理解できないままに崩れ落ちた。

見事なり。

そして、お大事に。

「は、はやくその人を連れてどっかいったら?」

実戦でアレをしたのは初めてなのだろう。

カレン自身も戸惑いながら残りの二人に立ち去ることを提案する。

……それで「はい分かりました」となるようであれば、世界は極めて平穏なわけで。

「この餓鬼ッ!」

「ゴイツがやられた分も痛めつけて、ひん剥いてやつからなあ!」

二人は余計に殺気立ち、それぞれポケットとベルトから折りたたみ式のナイフを抜き取った。

当然こうなるのは目に見えていたが、やはり不味い状況だ。

ある程度無手での武術を嗜んでいる者が、武器を持ったド素人を相手にあっさり負けるなんて事例は何度も見聞きした。

ただでさえ武器持ちが有利だというのに、二人が相手、さらに体格だって劣っていると、余程腕に覚えがあるか場慣れしていない限りはまず無傷ではすまない。

まだ安物で切れ味が悪く、刃渡りの短いものであっただけマシではあるが。

さあ我が子よ、どうやって切り抜ける？

「ふ、二人まとめて相手してあげるわよ……！」

まあ、虚勢を張り続けるしかないだろうね。

ここで素直に謝るなんて性根ではないし、仮に謝っても許されるわけがない。

今のカレンに残された最善策は所持品をなりふり構わず投げて爆発させることだが、この状況でそれが出来るほど冷静な子なら、そもそもこの場にはいない。

要するに首を突っ込んでしまった時点でほぼ詰んでいたのだ。

「おい、俺達の相手をしてくれるってよ」

「そりゃあいいな、是非ともお手合わせしてもらおうぜえ？」

ようやく二人もカレンの虚勢に気付いたようだ。

これからすぐに組み伏せられて、気の済むまでお相手させられるだろう。

さすがにそれは見過ごせないので、そろそろ介入させてもらおうかね。

彼らを追い払った後で、「あたし一人でなんとかできたもん！」のなんだのと涙目で言い訳する未来が視え——

「——そこまでです!!」

俺が颯爽と間に割り込もうとした、その寸前。

男達の背後、九番通りの方より制止の一声が飛んできた。

この場の雰囲気とは似合わない、凜としていて瑞々しい少年の声だ。

「ここで、何をしていますのですか？」

突然現れた少年が自身よりも頭一つ分は大きく、怒気を露わにした男二人に平然と尋ねながら、カレンを庇うように間に入っていく。

年のころはカレンとそう変わらない、灰色の寂れた外套に半身を包んだ平民……のフリをした高貴な家の子だな。

いかにも庶民然とした装いをしているが、その所作の一つ一つに隠

し切れない品性が見て取れる。暗い服と髪色をしていようがこの俺の目は誤魔化せん。

それこそ顔立ちと眼差しからして、上に立つことを宿命づけられた者特有のそれだ。

「ああ!? てめえには関係ねえだろ、すっこんでろ!」

「男として、僕は黙って見過ごせません。そちらこそ、その刃物をしまっただけじゃありませんか? まずは落ち着いて話し合いましょう」少年は柔らかくも毅然とした態度で男を説得し、カレンを庇うつもりである。

……うん、将来は良き為政者になるだろうね、間違いない。

「男だってんなら、力づくで止めてみせろよッ!」

そうとも知らずに男の片方が距離を詰め、逆手で持ったナイフを少年の頭上に振り下ろす……が、

「セイッ!」

少年はそれを避けながら懐に入り込み、振り下ろしの勢いを利用するように男の肩と肘を掴み、ほとんど力を使わずに自分より一回り以上大きなそれを宙に浮かせた。

よく鍛錬された、綺麗な背負い投げだ。

「ぐっ……」

一瞬の出来事に、受け身も取らずに背中から落ちた男が苦しそうに呻く。

「野郎! よくもやりやがったな!」

起き上がれずに苦しむ仲間の姿を見た男が怒りに身を任せ、ナイフを腰に構えながらの突進を繰り出す。

そしてまたしてもだ。

常人にはまず対処できないそれを、十五に満たないと思われる少年がいつも簡単に足払いで転がしてしまった。

「これでもまだやりますか?」

息一つ上げず、極めて穏やかな声音で退去を勧める。

「クソッ」

「ちく、しょう……」

目の前に立ち塞がる少年は無手であったこと。

転がされたのに追撃の一つもされなかったこと。

そして何よりも、身を感じる痛みでしかと力の差を理解したよう
で。

「今日はこれくらいで勘弁してやらあ！」

「お、覚えてやがれ！」

よろよろと立ち上がった二人は未だ意識が飛んだままの仲間を引
きずり、最低限のプライドだけを守る超古典的な捨て台詞を吐いて逃
げていった。

……流石の俺でも、それを見聞きして笑いを堪えるのに大変苦労し
たのと言うまでもない。

第二十話 「悪たれ小娘」

男達が極めて古典的な台詞と共に去った後、カレンと少年は向き合った。

「怪我はありませんか？」

その年にしては信じられないほど紳士的な態度で尋ねる。対するカレンは少し呆気にとられながらも小さく頷いた。

「ああよかった。それで、僕の名——そんなことより!!」

ハツと何かを思い出し、少年が名乗るのを遮ると。

そのまま路地の壁際に走り寄り、しゃがみ込んでそれを抱き上げた。

自身の危険を顧みずに救おうとした、小さな猫だ。

すぐに少年も寄り、痛めつけられて放置され、鼓動の小さくなった死にかけのそれを憐れみの瞳で見つめた。

「この子が虐められてて……。どうしようこのままじゃ！ 近くに動物のお医者さんは!?!」

カレンの訴えを聞いて申し訳なさそうに首を横にふる。

そして、きつとその子は助からないから、せめて静かに看取ってあげませんかと優しい口調で付け加えた。

うん、ウチの娘とは違ってよく出来たお子さんだこと。

「そんなのイヤー！ この子は何も悪くないのに!」

しかしながら世界の理不尽さをこれっぽっちも理解していない娘が、駄々をこねるように最善の提案を跳ね除けた。

……そのせいで、少年の口から余計な一言が出てしまうことに。

「神様の奇跡でも起こらない限りは……」

「それだわ!」

案の定カレンがそれを考え付いてしまった。

「セイジユで助けられる!」

「セイジユ……とはあの、聖呪のことでしょうか？ まさか、使えるのですか？」

「うん!」

以前、子供の怪我を綺麗さっぱり治したそれを。

それから幾度も安易に使うなど、俺の許可無しに人前では使うなど釘を刺したそれを。

何も意地悪や俺自身が唱えられない妬みからではない。

カレンのためを思つて禁止しているのだ。

「たしか、ええつと……そうだ！」

聖呪なるものは基本、神の許しを受け、その力を行使しているに過ぎない。

借りたものを使ったからには、いつか必ず納め時が訪れる。

それが現世であれ死後であれ、それこそ来世であれ、借りた分は必ず返さなくてはならないのだ。

「健やかなるは称えたる、康らかなるは誉れたる」

それだけじゃない。

九割方、聖呪使いというのは神職に就いている。

そして豊穰神の信徒が聖呪による治療を収入源としているのは、一般によく知られた話だ。

無償で、それも野良猫に施しを行なった者の存在自体が彼らの食い扶持を減らし、権威を失墜させるおそれがある。

そうでなくとも、暴虐神などの敵対する信徒がカレンの行為を見て勘違いしてしまつたら……。

「活ある瞳で星望み、我らが母を微笑ません——」

聖呪ではない魔法についてもだ。

たしかに現代社会での魔法使いへの風当たりは悪くはないとの情報を得ているが、ただの魔法にさえ嫌悪感を示す人間というのはやはり存在する。

逆もまた然りで、カレンの才能に目をつけた国や組織が勧誘もとい誘拐しようとする場合もある。

だから、無闇矢鱈と唱えるなど言っているのに、のにい……

「——《慈母神ノ息吹》!!」

どこからともなく吹き込んだ柔風にカレンの髪が揺れ。

小猫を抱いた手が白く光り輝き、弱き者を優しく照らす。

するとみるみるうちに傷が塞がり、さらには血色も毛並みも良くなっていく。

まさに神の奇跡としか言いようのない所業であった。

そうして快復した猫はカレンの腕から抜けて地に足をつけると、「ナア」と礼をするように鳴いてみせ、それから雨どいをするすると登って屋根伝いに消えた。

「よかったあ……いー」

すっかり元気になった様を見届けたカレンがほっと胸をなで下ろす。

俺の言いつけなどは頭の片隅にもないようだ。

「一体、何処でそのような力を？」

「え？ えつと……ああつ!!」

少年にそれを聞かれ、やっと思い出したようだ。

魔法や聖呪を誰に教わったかを聞かれても、それを隠すように言いつけられたことを。

同時に「極力聖呪は使うな」「極力危険な場所には行くな」と言いつけられたことも芋づる式に思い出したのだろう。

「ちやんと話せば許してくれるよね。そもそもここにはいないしバレたりは……」

流石に不味いと思ったのか、少年を視界から外して顎に手を当て一人ブツブツと呟き出した。

大丈夫だよカレン。

ここにいて、ずっとあなたを見守っていますよ？

誠心誠意包み隠さず話せば許すかもしれませんよ？

「あの？ どうかされましたか？」

「い、今のは違うの、何でもないの！ それで、えつとね……セイジユの事は秘密！ モクヒケンノコウシ、だから！」

「は、はあ」

少々取り乱したものの、すうーと深呼吸した上で改めて少年の眼を真っ直ぐに見て礼をした。

「さつきはその、助けてくれてありがとう。あたしはカレン」

「いえ、当然のことをしたまです。僕はアルベール、気軽にアルと呼んでください」

わざわざ名乗らないだけで家名はきつと大層なものであろうね。

それこそアル君が爵位を持っていてもおかしくはない。

「それで、カレンさんはもしかすると旅行者ですか？」

「うん、そうだよ。それと呼び捨てでいいから」

「やはりそうでしたか。ではカレン、もしよろしければ僕にこの国を案内させてくれませんか？」

早くも少女に心許された少年から、胡散臭いほどに親切な提案が繰り出され。

それはやめておけと俺が念じる間もなく、二つ返事が木霊した。



カレンとアル君は手を繋ぐまではいかずとも肩を並べ、楽しそうに若者話を弾ませながら歩いていく。

アル君は時折立ち止まってはこの店のオムライスが絶品だの、あそこから見る景色は素晴らしいのだのと、よそ者はまず知らない話を熱く語ってくれている。

その振る舞いに他意はなく、純粋にこの街を気に入ってもらいたいという熱意と歓迎の意が感じられる。

——しかしながら、彼らからはまだ歓迎されていないようだ。

「きやつー！」

「あら、ごめんなさいね。急いでたのよ」

野菜かごを片手に歩く一般女性、に扮した者がカレンにぶつかって尻もちをつかせた。

今のは暗器の有無を確認するためのものだろう。

「だ、大丈夫ですか？」

「うん、大丈夫だけど。なんか今日はよくぶつかる気がする」

「……すみません」

そしてなぜか、カレンの手を引いて立たせたアル君が申し訳なさそ

うな顔をする。

「なんでアルが謝るのよ」

「いえ……」

そう。

やはりというべきか、俺がカレンを見守っているのと同じように、アル君を守護する者もまたいるのだ。

ここまで確認できただけでも八人の精鋭が身边を警戒している。

三歩歩けば届く距離を維持する者もいれば、屋根上を渡って不審物はないかと思張る者もいて。

一見ただの子供であるカレンにさえ、三人が交代して当たり前に行っているのだ。

これ程に手厚い警護はたかが貴族の坊ちゃん一人にされるようなものではない。

「それにしてもアルって、なんていうか喋り方とか雰囲気の本で読んだ王子様みたいね」

「いやいやそんな！ す、少しばかり父上より厳しく躰けられただけですよ」

「へえー、そうなんだ」

「そう、そうそうっ。ハハ、アハハハ……」

虚偽の仕草、それも相手に正鵠を射られた際に見られるものだ。

いやー、うちの娘は本当に持っているなあ。

……いやほんと、マジ？

「そ、それはそれとして、カレンの御両親がどういった方かを聞いても!?!」

アル君が何とか注意を逸らそうと捻り出した質問に、俺は深呼吸せざるを得なかった。

それこそ煮えたぎる溶岩の湖を背にして戦う時くらいの覚悟を決めた。

俺としてはなるべく嫌われないように接してきたつもりだが。

もし、

仮に、

万が一に、

明日世界が滅びる程度の確率ではあるが、

実は嫌悪されていたとなれば、この身は塵一つ残さず弾け飛ぶだろう。

「あたし？」

「はい！」

「んー……。あたしのお父さんもね、アルのお父さんと一緒に厳しい人かなー」

くっ、そうだったのか。

全てカレンのためを思うからであって、俺としては厳しくしたつもりはないが、そういうことなら仕方ない。

もつと甘く優しくならねば。

ハニープリンガー
《蜜 虫》と呼ばれていた時代の俺を取り戻さねば。

「一回言えば分かるのに、あたしを小さな子供扱いして何度も同じことをぶうぶう言ってるさー。ヤになっちゃう」

少しばかり肩をすくめて俺への不満点を言い放つ。

すまない、本当にすまない。

同じことを何度も繰り返すのは年寄りの悪い癖だと自覚してはいらんのだ。

「それはきつと、カレンのためを思ってでしょうから。どうか嫌いにならないであげてください」

「別に嫌いってわけじゃないけど……」

おお……。なんという……。ありがとう、ありがとうカレン。

その言葉で一つの命が救われたよ。

「それで、父君はどういったことを生業に？」

「んーとね、あたしが知ってるだけでも料理人に大工に医者に狩人に音楽家に絵描きに曲芸師に——」

俺が就いたことのある職で教えたものを、指を折り曲げながら口に出していく。

「ふふっ、面白い冗談ですね」

あれよこれよと関連性のない職種を挙げていくので、たまらずアル

君が止めに入ったが、

「えっ？ ……あー……………うん」

「冗談……………ですよね？」

まあ、五千年も生きていれば職業の百個や二百個は増えているものさ。

君のパパと同じ職に身を置いたことだってあるのだから。

そしてアル君の困惑を無視してカレンは続ける。

「あたしの知らないことを何でも知ってて、あたしの言いたいことまで分かっけて、すごい人だとは思うんだけど」

そうそう、そんな感じでもっと褒めて褒めて。

「でもやっぱり、頭がおかしいんじゃないかなって思う時が結構あつてさ」

はい？

「頭がおかしい、とは？」

「詳しくは言えないけど、普通の人はまずしないような、信じられないことばかりするの」

なるほど……………。

しかし言わせてもらうが、俺は不死者であること以外は極めて普遍的な人間だ。

長年コツコツと鍛錬を積んだおかげで多種多様な技能を習得し、人間の持つ力のほぼ全てを引き出せるようになっただけであり、時機に応じて使っているだけだ。

誰だって時間をかければ同じことができるし、きつとそれらを躊躇わずに用いるだろう。

よってアレン・メーテウスは普通の人間である。以上、閉廷！

「で、では、母君は」

「ママはね、そんなお父さんのせいで出て行っちゃったの」

何という濡れ衣。

……いや、たしかに、今まで散々濡れ衣を着せられ、ありもしない罪を吹っ掛けられてはきたが。

あの自然災害はアレンが引き起こした。

日照り続きで不作なのはメーテウスの仕業じゃ。

飼い猫が行方不明になったのも例の不死者が取って食ったからだ。賭けで大負けしたのはアイツに運気を奪われたからに決まっている！

などと理不尽や不条理の全てを俺の仕業にされてきたものだ。

それでも今回ばかりは「はいはい、俺のせい俺のせい」などとは言えない。

千年前から一月前まで身動き一つ出来なかったというのに、三年以上前にカレンの両親をどうこう出来るわけがない。流石の俺でも時間を遡るなんて芸当は不可能である。

加えて、だ。

いつの日か妻子ができたとして、彼女らを悲しませて離れ離れにさせはしないと断言できる。

老いて逝くまで絶えることのない幸せをもたらし、最大限の愛を注ぎ続けよう。

文字通りこの身を削ってでも。

「ま、すごく反省したみたいだからあたしはもう許してるけどね。今はママを探して旅をしているの」

「そ、そうだったのですね……」

そういうわけで、澄まし顔でパパの評判を下げる悪たれ小娘には、後でうんと教え込んでやるとしよう。

第二十一話 「蘇りし湖」

「はいよっ、冷めないうちに食ってくれ」

「わあ……」

俺とカレンが挟む丸テーブルの上にごと音を立てて黒光りする土鍋が置かれた。

宿屋の主人がミトンをはめた手で蓋を取ると、もわつとした湯気が立って充満し、塩気のある匂いが鼻腔をくすぐってくる。

「いただきます」

「いただきますっ！」

カレンは食前の挨拶を終えてすぐに、土鍋から自分の器に盛ったものをかき込んでいく。

この国の郷土料理である魚の切り身と根菜を焼き込んだ米飯を、はふはふと熱に苦戦しながら頬張る姿はなんとも愛らしい。

己が淑女であることを全く意識していない、いつか思い出した時に恥ずかしくなる食べ方を後何年見せてくれるだろうか？

「はひ笑っへふの？」

「ふふ、何でもないよ」

答えながら俺も器を手に取り、ホカホカの白米と脂の乗った切り身を重ねて口に運ぶ。

「ンッ!？」

「どうひはの？」

「ちよつと、な……」

それらを噛み締めた瞬間、俺の舌が何か違和感を感じ取った。

硬いとか臭みがあるとかそういうものではなく、成分的な何かだ。

そして少なくとも良いものではなかったので、改めて味覚を極限まで研ぎ澄ませてみるが……

「……間違いない」

——これは毒だ。

「カレン！ 今すぐ食べるのを止め……」

「んー、なに？」

「……いや、やはり何でもない」

カレンの綻んだ顔を見てしまい、それを言い出せなかった。

このまま変わることなく見続けていたいという気持ちが勝ってしまっただのだ。

「どうしたのアレン、食べないの？」

「あ、ああ。今食べるよ」

それに実は毒と言っても微量なもので、何年、何十年と摂取しなければ健康に影響はないと思われる。

ならばわざわざ伝えて不安にさせる必要はなく、むしろその事実を知ったせいで具合を悪くする可能性だってある。

知らぬが何とやらというものだ。

「親父さん、この魚はどこで獲れたもので？」

それでも一応、この料理を出した主人に探りを入れる。

「ん？ どこかってそりゃあ、この国の魚は全部湖で獲れたものだけ。新鮮で美味いだろ!？」

栄養が豊富な湖で育った魚は身もぎつしり詰まっているんだ、と自慢げに語ってくれた。

その話しぶりからして後ろめたさを感じているとは思えないので、一服盛られたわけではないようだ。

それなら明日にでも湖を調べにいくとして、今は頭の隅にでも置いておこう。

「それで、どうだった？ 今日は楽しかったかい？」

「うんっ、すごい楽しかった！ 可愛いお店がずらーって並んでる通りがあったって！ 焼き鳥屋さんの隣にペットの鳥を売ってるお店があったの！ それでえっとな、一階も二階も三階もケーキ屋さんの建物があったって——」

嬉々として、歩き見たものをあれよこれよと取り留めもなく語ってくれる。

俺が全てを知っていると知らずに。

そのまましばらくカレンを乗せてやってから、尋問を行うことに。

「楽しめたようで何よりだよ。……それで、最低限の約束は守ってくれたかな？」

その言葉を聞いた瞬間に、笑顔を張り付けたままでカレンの表情が固まった。

「危ない目には遭っていないね？　揉め事に首を突っ込んではいないだろうね？」

「う……うん」

「確固たる力を持たずに、荒くれ者とひと悶着起こしたりはしてないんだね？」

「もしかして……全部知ってて……」

「何の事かな？　俺は一人寂しくカレンの無事を祈っていたよ？」

ちやんと俺の言いつけを守ってくれているようにと。人前で魔法を、ましてや聖呪なんかは絶対に使ったりはしないようにと」

「ごめん、なさ」どうして謝ろうとするんだい？　君はちやんと言いつけを守ったんだ。何も悪いことはしていないだろう？」

「……」

「ごめんよカレン、どうかパパを嫌いにならないでくれ。」

それでも出来る限りの優しきをもつて咎めているんだ。

「そうそう、友達はできたかい？」

「……うん」

カレンとアル君が「また明日」と言つて別れるまで、絶対に間違いが起こらないようにと目を離さずにいた。

なぜなら王侯貴族が権力を笠に着て、気に入った町娘を半ば強引に拐かす。なんて話をよく聞くし、実際にこの目で何度も見てきたからだ。

しかし、アル君は極めて誠実で、道徳心のある男であった。

よつてそれらは全て杞憂に終わったわけだ。

「カレンが無事に帰つてくれたということ、きつとその友達が良い子なんだろうね。今度紹介しておくれ」

「今度じゃなくて、明日一緒に」

「よせよせ。こんな年寄りのことは忘れて若者同士仲良くやりなさい」

い。そしてカレンに足りないものを学んでくるといい」

「あたしに、足りないもの？」

「そうとも。アル君にあつて、カレンにないものだよ」

「あたしになくてアルに……えっ？　ちよつと待って、どうしてアレ
ンがアルの名前を？　……まさか!？」

おっと。

年のせいかな、ついうっかり口が滑ってしまった。

「それじゃ、パパは明日朝早くから出かけるから、お先に失礼させても
らうよ」

「ちよつと！　逃げないでよー!」

焚き込み飯の残りをカレンに任せ、振り返らずに部屋へ戻って微睡
んだ。

◆◆

「ふうーっ……」

湖の冷や水を掬ってパシヤッと顔面にかける。

そうすることで行くらか熱が引き、爽快感も増した。

「しっかし、何もなかったなあ」

明け方から小一時間ほどかけて湖をぐるつと三周。

距離にして三十キロメートルほどを軽く走り終えたが、これといっ
た悪しきものは見当たらなかった。

魚介だけでなく、水や泥を含めた湖の全てに微量の毒が混じってい
るのは確認済みで。

それでも何者かが意図的に毒を垂れ流したとか、そういった痕跡な
どがどこにもないのだ。

今の俺にできるものでは最大限の調査を、悪意を映す魔法なんかも
使ってはみたが、それで検知されたのは『悪ガキが湖に小便を注いだ』
や『石を投げ入れて水棲生物を驚かした』程度の可愛いものばかりだ。
要するに湖の外からではなく内側、それこそ水底から毒が湧き出て
いるのでは？

……とまあ、流石に今はそこまで拘泥して調べる気にはなれないがな。

とにかくそんなわけで、気分転換に釣りでもすることに。

「んー……」

水面に垂らした白い糸がゆらゆらと揺れるのを、時の流れを考えずにボーっと見つめる。

釣りは良い。

こうやって心が落ち着けるし、釣果でその日の運の良し悪しだって分かる。

ちなみに釣り道具については、わざわざ買いに行くのも面倒だったので自作した。

脚から適当に抜き取った神経で糸を作り、釣り針は踵骨を削ったものだ。

釣り針につける餌は叩きにして細かく刻んだアレン肉。

全て安心安全な自家生産の一品物である。

そうして座り込んで景色の一部になっていると、一人の男がふらつと訪れた。

「隣、よろしいですかの」

「ええ、どうぞ」

後ろに流した白髪を束ねた老齢の男性で、それでも耄碌した痴呆老人といった雰囲気は全く無く、その瞳は力強い光を湛えている。

彼もまた道具一式を地面に下ろしてから、俺と同じように釣り糸を垂らして座り込んだ。

「いい天気ですのう」

「絶好の釣り日和ですねえ」

陽の光によって煌めく湖面を眺めながらお決まりのやり取りをする。

「お兄さんは旅の御仁で？」

「はい、ちょうど昨日この街へ着いたばかりです」

ピチョン、と小魚が飛び跳ねた。

「若き旅人の目に、この国はどのように映ってますかのう」

「良い処だと思えます。人々はとても親切で活気があって、なんとも居心地が良い」

「ほっほっ。それはよかった」

顔をくしゃつと縮めて笑う老人と横並びに語らいながら、昼なかまで釣り糸を垂らし続けた。

そうして話していて、老人はわざわざ身分を明かさないだけで何かの有識者であることが、言葉の選び方や品性から容易に分かった。

平時は教鞭をとつてたりでもするのだろう。

「では、そろそろこれで」

一通り満喫したので、釣果を束ねて立ち去ろうとしたのだが、そこで引き留められた。

「それを持ち帰って食すのはよした方が」

「はて、どうしてです?」

「ちよつと、のお……」

おそらく俺が昨日カレンに対して思ったのと同じ理由で、それを言っているのか分からずに口ごもってしまった。

「もしかして、湖の毒について何かご存知で?」

「なっ!?!」

どうしてそれをと呟くも、そこまで知れているなら隠す必要もないかのうと納得して、残りを教えてくれた。

「知り合いの学者殿が言うには、年々毒の含有量が増加しているのじゃと」

早くて二十年後には魚介を数キロ食しただけで死に至るようになる。

湖の水を飲み水としては活用できなくなるという。

「ところでこれは思い違いかもしれませんかね、この国の人々には毒以外にも何か気がかりがあるのでは?」

「どうしてそうお思いで?」

「余りにも活力に満ち溢れていると思いませんか。言うならば余命宣告を受け入れて、残りの命を激しく燃やそうとしている人間のそれ

だ」

「……こりやたまげた。そこまで見抜いておったとは」

いくら毒で生活がままならなくなるとはいえ、何十年も先のことを酷く思い煩う……なんてのは一般人のすることじゃないからな。

彼らは基本的には目の前の事、近い未来の自分を見据えて生きている。

遠い将来については時折思い出したかのように考える程度で、それに縛られた生き方をする者はそういない。

「周りにいくつも血気盛んな国が、日夜領土を広げんと干戈を交えているようなのがおりました」

「ああ、なるほど」

静かな湖面と山脈のすぐ向こうでは今まさに、無数の陣営が入り乱れて怒号を上げているのかもしれない。

この国はそれらを避けて上手くやっているようだが、いつ宣戦布告、侵攻宣言をされてもおかしくない。

それこそ明日にでもだ。

「仮に外敵が攻め込んできた場合、この国には防壁も堀もない。民を守る術がないと」

「左様」

もしかすると他国が迂闊に攻め込まないような抑止力たる何かがあるのかもしれないが、そんなものはまずないだろう。

「このリボンレイクはいわば砂上の楼閣、風前の灯火」

「首元に死神の鎌をかけられた状態」

近いうちに滅びを迎えることになっている。

「見事に詰んでいますねえ」

俺の言葉に老人は渋い顔をして頷いた。

「それでも、昔にも似たような危機に瀕して、それを乗り越えたのでは？ なんとたつて《蘇りし湖》^{リボンレイク}と名付けられるくらいですし」

「うむ。この地の言い伝えにはの——」

遠い昔、まだ国は出来ておらず、湖の周辺には小さな村落だけが点在していた頃。

何処からか《毒杯の王》と呼ばれる邪悪で醜悪な存在が来りて。彼の者は常にその身から毒と瘴気をまき散らし、肥沃な湖を我が物にして住み着いた。

そのせいで毒に耐性の無い人間は住めなくなり、荒廃し、死んだ土地となつてしまつたのだ。

誰も毒杯の王を討てず、汚染を食い止めることもできずますます荒廃が拡大せんとしていた時だった。

何処からか《掃除屋》を名乗る男が現れたという。

男はこの土地の人々から受けた恩を返しにきたと、借りたものを返すためにやってきたと口にした。

そして何より、愚かな弟子を救うのだと。

「ええつと……。その結末はもしかすると、両者は激しい戦いの末に水底へ沈み、毒が浄化されて土地が生き返つた……。では？」

「まさにその通りじゃが、ご存知であつたか」

「ご存知というか、なんというか……」

当事者です。

湖を浄化して蘇らせたのもわたしです。

などとはさすがに言えないし、言つても信じてもらえないだろう。

「兎にも角にも全て合点がいきまされたので、私はこれで。またいつか語らしましょう」

「うむ、またいつか。それで、これから何処へ？」

俺のような見ず知らずの異邦人に諸々を話してくれたことについて一礼をして、軽く微笑んだ。

「——ちよつくら素潜りをして参ります」

第二十二話 「毒杯の王」

俺を持ち上げようとする浮遊感と押さえつけようとする圧を受けながら仄暗い水底を歩む。

唯一耳に入ってくるのは、ドクンドクンと脈打つ心臓の音色だけ。まるで死んでいるかのように静かな、しんとした世界だ。

そんな世界の何処かで、命を絶やす毒が湧き出ているのだ。

さらにその一因は俺にあるときた。

だから責任を持って止めねばならない。

(しかし本当に、この湖だったかな?)

あの戦いの残滓はどこにも見つからない。

たしか山の二つ三つを丘に変えたような激しいものであったのだが。

いやまあ、二千年近くも昔のこととなれば残ってはいないか。

当時の事を覚えている者などいるはずもなし、嘘や誇張でべたべたに脚色された言い伝えなんかが残っているだけだ。

それでも俺は忘れない。

《毒杯の王》と呼ばれる存在に成り果ててしまった、しかし我が弟子の一人であった者を――



ある土砂降りの日のことだった。

敗戦後に全てを略奪され、打ち壊された名も知らぬ街の一角の、瓦礫の山の前で一人泣いていた少年を見つけ、それを拾って弟子とした。

もちろん同情したからというのもあるが、大成する素質を見出したから育ててみようというのが大きかった。

後者のような思いが芽生えたのは、この魂に混じったモノのせいでもある。

そんなわけで、俺は哀れな少年を丹精込めて育てた。

「お師匠様！」

「おうアルビンや、もう出来たのかい」

名はアルビン。

灰色の暗い髪に灰の目と、見た目からして薄幸な少年だった。

「どうですか!？」

「おお、見事じゃないか！ 流石だな！」

「えへへ」

そして俺が見込んだ通りの才ある子だった。

飲み込みが早く、大抵のことを難なくこなし、我慢強くもあつたのだ。

真つ当な道を進めば大成するのは間違いなかった。

そうして力を汲み続け、齡が二十に達した際に彼の憧れであつた騎士団へ入隊させた。

「お師匠……様っ。……その、僕……なんて言えばいいか……」

様々な感情が混ざり合い、目を潤ませて言葉と鼻水を詰まらせる弟子に別れを告げて。

「それでは最後の課題を与える。いいかアルビン？ ……幸せになれ！」

「……………はい!!」

もう教えることはない、後は君自身の力で生きていくのだと伝え、俺はまた一人旅を始めた。

何年か経ってから、不殺を信条とした心優しき騎士様がいるという噂話を聞いたので、こつそり立ち寄ってみることにした。

そこにはたしかに噂通りの優しそうな騎士様がいて、老若男女問わずの民に好かれていた。

さらに騎士様の側には、お腹を大きくした美人の奥さんがいた。

……ので、俺は何も言わずに満足して帰った。決して「弟子のクセに師匠を越えおつたな畜生め」などは欠片たりとも思っていない。

それからまた何年か経った後、彼の国へ立ち寄ってみたのだが、そこに国は無かった。

いや、あるにはあつた。

アルビンの故郷と同じように崩れた街並みが。

「そう、か……」

言葉が出なかった。

アルビンにはいくつも強大な力とその使い方を教えて、それを使って試しに俺を殺してみると百度言おうが、決して首を縦に振らなかった。

そんな彼が何百何千も無差別に殺したと聞いた日には、言葉が出ないのも当然だ。

生き残った者から話を聞くには、心優しき副長様は妻子を殺され、自身も杯に毒を盛られたのだそうだ。それも親友と呼べるほどに信じていた仲間によって。

そして毒を盛られたというのに強靱な精神と肉体で耐えた後、殺戮を始めたという。

なぜそのような事態に陥ってしまったかは、すぐに分かった。

我が愛弟子はとて優秀で、誰よりも純粹で綺麗な心を持っていて、それゆえに裏切られたのだ。

「俺の失態……だな」

人の醜さ汚さ卑しさを飽きるほど教え込んでおけばよかった。

しかしながら、この子の清らかな心を濁らせたくないなどという身勝手な我儘がそれをさせなかった。

僅かな濁りすらも許さなかったせいで、毒沼に溺れてしまった。

後はもう、言い伝えの通りだ。

俺は変わり果てた弟子の住まう湖へ赴き、力行使した。

「おシショウ様も、ボクを裏切ル……ノ？」

「俺はお前を裏切らない。ただ、責任を取りに来ただけだよ」

いくつも禁忌の術を用いたのだろう。

髪は全て抜け落ち、皮膚は爛れ、体中の穴から毒の体液を垂れ流し、辛うじて以前のままだった灰色の双眸は絶望を湛えていた。

ついでに背中から四本の触腕が生えていた。

「グふうッ!? ……知らぬ間にずいぶんと強く、なったな！」

「だけド、おシショウ様、死なない。ずるイ」

「それだけが取り柄、なんでなッ！」

流星は我が弟子というべきか。

上等な化け物に成り果てていて、まあ強かった。

どうにかヒトに戻そうと試みたり、いくらか躊躇したからというものもあるが、八回は殺されてしまったな。

そうして戦っているうちに、毒杯の王としての肉体が自壊を始めて。

「ボク、どうして……こんなアク人に」

「君は悪人なんかじゃない。悪しきはこの、理不尽で混沌とした世界だ」

俺は戦意を喪失した愛弟子をきつく抱きしめ。

「次こそは、幸せになろうな。次こそは、必ず助けに行くから」

「ごめん、なさい……。おシシヨウ、様」

あぶく立つ毒湖へ墜落し、沈んだ。



(それがたしか、この辺に………あった)

息継ぎのための六度の浮上と一度の心臓抜き、時間にして一時間程水底を渡り歩いてようやく発見した。

愚かな弟子が遺したモノを。

水底から生えているかのように突き刺さっているは、透き通った水晶らしきもの。

その中に封じられているは、心臓大の禍々しく毒々しい色合いの霞みがかった球体。

これは毒杯の王の肉体が崩壊すると共に生み出されたもので、見た目通りの傍迷惑な代物である。

やはり封じ込めの水晶に深い亀裂が出来ていて、そこから毒が漏れ出していたのだ。

おそらく誰かが意図的に手を加えたなどではなく、経年劣化によるものだろう。

いやあ、よかったよかった。

あと百年シャバに出るのが遅れていたら、間違いなくこの湖はかつてのあぶく立つ毒湖になっていただろうよ。

そういうわけで、ささっと修理及び補強をして上がることにするかな――。

「――終わっ、たあーっ!!」

水面に浮かび上がってそれを叫んだ。

ささっと終わらせて上がるはずが、とつくに日は暮れていて半円の月が湖面に映っているではないか!

俺の血肉を塗り込んで魔力の籠った水晶に変えて亀裂を塞ぎ、塞いだ後は全体にべたべた塗って水晶に変えて分厚くするという単純作業を繰り返し。

ついでに意匠も凝らしていたらこんなに晩くなってしまったのだ。

「まずい!」

急いで帰らねば。

お腹を空かせた娘が一人寂しく待っている。

パパの帰りを待っている!

このままでは父親失格だ!!

そう思い、脚の筋繊維がブチブチと音を立てて断裂するのも厭わずに、人間の限界速度で走り出した。

おかけでももの数分もしないうちに宿へたどり着いたのだが、

「おそい! ずっと待ってたんだから!」

カレンは一人、宿屋の食堂の片隅に座して待っていた。

最大限に頬を膨らませてご立腹であることを示しながら待っていた。

「本当に申し訳ない」

「どこで何してたの!?!」

「湖の底で像を彫っていました」

「なにそれ、わけわかんない! もういい!」

迷わず正直に答えた結果、余計に怒らせてしまった。

他のお客さんの視線がちくちくと刺さる。

「ごめんよカレン。お詫びに何でも好きなものを食べていいから」

「ほんとっ!？」

「本当だとも。好きなだけ食べなさい」

「やったあ!!」

ので、怒りの感情を全て喜びの感情へと変換させる。

俺自身もまさかここまで通用するとは予想していなかったが、何はともあれだ。

そうしてカレンがふざけた数の注文を、具体的にはお品書きに書かれた十種類全ての料理を頼んで、それらの一つ目が届いてから親子の会話を始められた。

「そういえばね！ あたしずっとアレンに聞きたいことがあったの！」

「うん、なんだい?」

とろけるチーズの乗ったグラタンを一口入れて、さらに機嫌を良くしたカレンが問いかけてきた。

「えっとね、前世の記憶を持つてる人って本当にいるの?」

「あー、うん。本当にいるよ。稀にだけどね」

「へえー、本当なんだあ」

全く予想だにしていけない質問だったが、とりあえず答えてから蘊蓄を垂れ流しておく。

「今もエルフの間で語り継がれる偉人の一人もそうだよ。たしか名前は……ああそうそう、フリートといってね——」

その者の前世はエルフではないただの人間、人族であった。

人族であった時は平凡な町の平凡な家庭に生まれ、他人より学に秀でていたという。

それでそのまま学者の道を志したものの、三十半ばで流行り病に倒れてしまった。

エルフなどの長寿な種族は基本、急がず焦らずの心でゆったりと時間を浪費するものだが、フリートには人族として時間感覚があった。

だから他のエルフがのんびりと暮らしている間も、一秒たりとも無駄にせんと必死こいて鍛錬と研究に励み、強大な力を得ることができたのだ。

彼とは二十年ほど一緒に旅をした憶えがある。

どこぞの秘境へ潜って、新種の薬草を見つけたりしたものだ。

そして彼は寿命で八百二十九歳の人生を終える際に、次はもっと長生きする生き物に生まれ変わりたいと言っていた。

「そんなわけで、今はもしかしたら龍にでも生まれ変わっているんじゃないかな？」

「ほへえ……」

本当にそんなことがあるんだあとカレンが感心する。

「ところで、どうして急にそんなことを聞きたくなっただんない？」

「あたしの友達が言っただけだし、前世の記憶があるんだって」

「ほう、それは珍しい」

なるほどアル君がか。

それなりの地位や才をもって生まれる者には、それなりの由縁があつたりするものだが、そうか。

「その子の前世は何だった？」

「それがさー、詳しくは言いたくないらしいんだけど、とびつきり悪いヒトなんだって。あたしの友達……アルっていうんだけど、すごく優しい人なんだよ？ おかしいでしょ？」

「なら、それはカレンをからかっているだけなんだろうよ」

「アルはそんなことしないもん！」

だろうね。

そんなよく分からない嘘を吐く理由もないだろうし、おそらく本当であろう。前世の記憶があると勝手に思い込んでいる、なんて可能性もあるが。

しかしあの、誠実で純粋で優しさに溢れたアル君が極悪人とな？

一体どんな大罪を犯したのか見当もつかないなあ。

「アレンは今日何を……って、そういえばさつきワケわかんないこと言ってたわね」

「心休まる一日だったよ。軽く三十キロほど走って気持ちいい汗をかいて、ぽかぽか陽気の下でのんびりと釣りをして、それから冷たい湖の底で半日かけて騎士様の像を彫ってさ。色々な種類の魚が寄ってきてさ、俺の腹の肉を齧り取っていくんだよ」

「あー、えつと……うん。アレンが何を言ってるのか、あたしにはまだ分からないや」

カレンはそれ以上何も聞こうとはしなかった。

やれやれ、お子様にはまだ早い話だったかな？

第二十三話 「ママに話してちょうだいな？」

再び流れ出した毒を封じることには成功した。

街に滞在している間は日に一度点検と整備をすることで、それ以外に俺のすべき仕事は残っていない。

戦争を未然に防ぐなんてのは一個人がやることではないからな。

「ねえアル、今日はどこを案内してくれるの？」

そう。

仮とはいえ一児の父となった俺の仕事は、大切な娘を護ることの他にない。

娘に悪い虫がつかないようにするのだ。

「今日は街の南東部を見て回りますよう！」

「わーい！」

カレンの隣を歩くは、一見すると親切で誠実で純朴そうな灰目の少年。

その正体はこの国リボンレイクの王子様である。

そして何やら前世の記憶、それも自分は大罪人だったという記憶を持っているらしい。

「実は今日は、こんなものを持ってきました」

「なにこれ、この街の地図？　もしかしてアルが作ってくれたの？」

「はい、ちよつと夜遅くまでかかってしまいましたけど」

「だから目にクマが……。ありがとう！　大事にするね！」

今のところは極めて善良な人間のように思えるが、いつ馬脚をあらわしてもおかしくない。

カレンからの絶対的な信頼を勝ち得てから巣穴へ引き込んで牙を剥くやもしれぬし、俺自身もそういう者に騙された経験がいくつもあ

る。
幸せな他人を絶望の底へ叩き落とすのが大好きなんだという、捻じ曲がった人間は稀によくいるのだ。個人的統計では三十人に一人程度の割合で存在する。

だからアル君が絶対にそのような人間ではないと言えるまで、こう

やって二人を見守ることに決めた。

しかし、全くと言っていいほど汚点を見せない。

「よう、アル坊や。大きくなったのお」

「やだなあビルお爺さん、先週会ったばかりじゃないですか」

「おはようございますアルベル様。その子は彼女さんですか？」

「ちつ、違いますよカーラおばさん！ それとアルでいいですつてもう！」

民草の名を一人一人しっかりと覚えていて。

彼らから直接話を聞いても、

「アルベル様かい？　ありやあ善い人だ。俺が女だったら惚れちまうね」

「ああ、父上である国王が逝ってしまわれて間もないというのに、気丈に振る舞っておられる」

「俺達がちゃんと働いて支えてやらないとな！　命の一つくらいはくれてやるぜ！」

出てくるのはアルベル様の善人具合を底上げする噂話や逸話の数々。

結果として、悪評の一つも聞き出せなかった。

そうして七日ほど二人を見守り続けて、分かったことがいくつか。

アル君ことアルベル・リボンレイク国王陛下はまさしく善良な人間であり、——カレンに惚れている。

「今日ですね……。僕の家に来てみませんか？　そこで話したいこともあるので」

「うん！　いくいく！」

相手の父親が全てを見聞きしていることを知らない少年は、大胆にも自宅へと連れ込むつもりだ。

そして何も知らないカレンと共に街の中央通りを突き進み、とある建物の門前で止まった。

「はいです」

「どれ？　どれがアルの家なの？」

当然ながら、目の前にそびえ立つ白亜の巨大建造物が友達の家だと

は思ってもいないカレンは、首を左に右に後ろに振ってどこにあるのかと見回す。

「目の前です」

「何言ってるの？ これはお城じゃない」

「はい。この城が僕の家です」

誰でも知っている。

絵本しか読めない子供ですら知っている。

城の家主はそれすなわち王様であることを。

「うそ……でしょ？」

「嘘ではありません」

「だって、そしたらアルは本当に王子様ってことに……」

「とりあえずは中に入ってから、話しましょう？」

何かを決意した目の少年が、カレンの手を少し強引に引っ張っている。

この街で最も厳かな門の脇に立つ二人の門衛が、自身より一回りも小さい少年に深く一礼して敬意を示し、当たり前のようにそれが開かれた。

「僕の家へようこそカレン。お菓子も用意してありますよ」

「……」

にんまり顔の国王と物言わぬ少女が入城した後、それはゆつくりと閉じられた。



屈強な門衛に面と向かって「国王の隣にいた女の子の父親なんです。入れてもらえませんか？」などとと言えるわけがないし、仮に言っても即却下及び拘束されてしまうだろう。

だからといって行政の要、国の象徴である城に正面切って殴り込むわけにもいかない。

いや、何もそれが不可能というわけではない。

中小国家の城塞など、多少命を削れば簡単に陥落できる。

できるのだが、それをやってカレンに嫌われたくはないし、刺客を増やしたくもないので、こつそりと侵入することに。

加えて、入れ替わる相手を探して城の周りを張り付いているのだが、

「うん、彼なら良さそうだ」

城の三階部分に張り付いて、影に紛れながら中を覗いてようやく見つけた。

陽の差さぬ部屋で一人、山積みになされた書類と向き合っている若い文官様の姿を。

「一枚、二枚、三枚……。ああ、減らない、減らないよう……。しかしやらねば、私がやらねば……」

風の入らないように閉め切った窓に耳を付けてみると、そんな呻き声じみた独り言が聞こえてくる。

ああ、哀れだ。

助けてあげよう。

「——《知^シレヨ示^{シメ}セヨ汝^{ナニジ}ガ渴^{カワ}キ》」

虚ろな瞳の文官様に向けて一つ魔法をかけてから、静かに窓をこじ開けて中に入った。

「進捗、どうですか?」

「はは、終わる気がしませんよ。……っ!? だ、誰だ!? 何処から入ってきた!?!」

可哀想に。

部外者の侵入に全く気付かないほどにまいつていたとは。すぐに楽にしてあげるからな。

「ワタシは湖の妖精です。アナタを助けに来たのです」

「湖の妖精だって? それが私を、助けに……?」

正常だったらずまず信じないような話も、相当疲れているのとかけられた魔法で判断能力が鈍っているのもあって半信半疑でいる。

「アナタが民のため国のために命を削って働いてくれているのを知っ

ています。ですから、今日くらいはワタシが休みを与えましょう」

「休み……ですか？ ……ですが、私にはやるべき仕事か」

「よいのです」

「へっ？」

「辛くて、苦しくて、壊れそうになったら、後先考えずに逃げてよいのです」

分かる、分かるよ。

少しでも不精を見られてしまうと民草に猛烈な勢いで追い立てられ、そうでなくとも数ある伝承や逸話、先人達の失敗が多すぎるゆえに偏見の目で見られてしまう。

俺も何度かお役人様になったことがあるからよく分かるさ。

革命を受けて礫にされた経験だつてあるのだから。

そうならないためにも責任を持って業務をこなすべきだが、滅入ってしまつてはだめだろうよ。

「人の子よ、おいきなさい。後のことはワタシに任せて、己が道を征くのです」

「で、ですが……」

「真昼間から仕事をほつたらかして飲む酒はいいぞお？ 女の子だつて選り取り見取りだあ……」

その瞬間、気だるげな瞳がカツと見開き、決意の炎が灯された。

「ありがとうございます!!」

「うむ、楽しんでくるのだぞ」

そこに押し潰されそうになつていた文官様の影は無く、かわりに自由を手にした一人の漢の羽ばたきがあつた。

ちなみにあの魔法の効果は『己の欲望に忠実になる』というもので、全ては自らの意思で選んだものである。

心を無理矢理捻じ曲げたりするような非人道的なやり方ではない。羽根休めしたいと望んでいたから促してあげただけなので、湖の妖精は一切の責任を取りません。

「さて、と」

予備として置いてあつた制服をお借りして、まだ彼の顔と声が鮮明

に頭の中に残っているうちに変装することに。

「(うきうきうき)……つとな」

鏡の前で顔の骨を折ったり曲げたり縮めたりして変形させ、肉もい感じに切り取ったり張り付けたりを繰り返して整形する。

「あー、あー。……よし、こんなものか」

長年の暇つぶしで培った声真似技術を用い、それでも足りない部分を埋めるため、喉を裂いて声帯を直接削る。

長生きしていると他人や動物、さらには風や波に成りすまさなければならぬ場面がしばしばあるのだ。

あとでカレンにもやり方を教えてあげよう。もちろん両方共だ。

そうして出来る限りの変装をした後で、「探さないでください」と書かれた一切れの紙を山積み書類の横に置いて部屋を後にした。

「うん、悪くない」

時々すれ違う文官や使用人を横目に、内装を覗いて回る。

国が滅亡寸前の末期の城なんかは、所々に蜘蛛の巣が張られていたり、塵埃が積もっているものだが、この城においてはそのようなものは一切ない。

何をモチーフにしたのかよく分からない高級な石像や、名高い画家の絵などといった悪趣味なものを探そうとしても見当たらない。

無駄に金をかけず、最低限の象徴としての体を保っているのみ。

爽やかで良き城だ。

「——ねえアル！ アレは何!?!」

「ま、待ってくださいカレン！」

そんな素敵な城内で、きやあきやあ言いながら駆け回る少女の姿をすぐに見つけることができた。ので、少し離れて付いていくことに。

「ここに飾ってあるものって!?!」

「これはですね、祖父が趣味で集めていたもので」

「何あれカッコいい！ 触ってもいい!?!」

「え、ええどうぞ。壊れたら危ないので優しくお願いします」

カレンは目を光らせ、次から次へと好奇心を掻き立てるものに飛びついていく。

しかしそうやって周りへの注意がおろそかになるものだから……

「きやあつ！」

「カレンツ！」

盆に乗せたティーポットとカップを運んでいる使用人にぶつかり、盛大に服に溢してしまった。

「申し訳ありません！ 怪我はございませんか!？」

「火傷はしていませんか!？」

「だ、大丈夫。こつちこそ、ごめんなさい……」

「至急彼女に新品の服を与えてください。それから僕の部屋へ」

「はっ！ 仰せのままに！」

国王陛下の命を受け、言われるがままにカレンは連行されていた。

その姿が消えてから陛下は自室へ赴いたので、俺はそちらに付いていくことに。

無言で陛下の自室へご同行し、部屋の隅で待機する。

流石は国王の居室なだけあって豪華な部屋だ。

決してごちやついてはいないが、寝台にソファに敷き物、鏡台から照明に至るまで、全てが超高級品であると誰が見ても分かるだろう。

家具の一つや二つで素朴な一軒家と同等の価値があるだろう。

どれもこれも千歳未満のガキンチョには贅沢すぎる代物だ。

「……ところであの、どうしてあなたはそんなところに？ 僕に何か話でも？」

「ハッ！ 私は陛下と御友人との間に間違いがあらぬよう見守れとの命を受けた次第です！」

「まっ、間違いなんてありませんよっ！」

ホントかなあ？

君が今日カレンを招待したのは、思いを告げるためであるとおおよそ見当はついているのだ。

かつて《愛の渡し橋》と持て囃された俺の目を誤魔化せると思うなよ。

絶対に我が娘に手出しはさせないからな。

「どうか、私のことはいないものとお考えください」

「……そうさせてもらいます」

それから国王陛下の落ち着かない様子をじっと観察していたら、二十分と経たないうちに王家の意匠が凝らされた両開きの戸が叩かれた。

「陛下、御友人をお連れしました」

「どうぞ」

先程ティーポットを運んでいたのはまた別の使用人が入室し、その数歩後ろから現れたのは、

「うう、なんか落ち着かないなあ……」

「貴女は、カレン……なのですよね？」

「……うん」

その容貌を端的に言うならば、麗しの姫または令嬢といったところか。

普段は乾かして梳かす以外に一切手入れのされていない髪は、首筋が露わになるように上げて纏められ。

スリットの入った淡く優しい水色のドレスが華奢な身を包んでいる。

さらには軽く香水もふりかけられ、薄く化粧もされているようだ。

天真爛漫な田舎娘が一変、誰もが羨む高貴な淑女へ。

「ゼツタイこんな姿、お父さんに見せられない」

「どうしてですか？ 今のカレンを見ればきつと喜ばれると思いますか。とてもお似合いですよ？」

「そうかなあ……？ たぶん『クハハ、誰に脅されてそんな恰好をしているのだ？』って笑われると思う」

アル君は俺が喜ぶと予想し、カレンは声を変えて俺の嘲る姿を真似した。かなり特徴を掴んでいる。

そして、そのどちらも正解だ。

娘の晴れ姿を見て喜ばない親などいない。

俺だったらあらゆる角度から見た肖像画を描き、金の全身像を作るだろう。

そしてカレンの本質を知っているから「似合わないな、それと顔に米粒がついているぞ」と重ねて笑うだろう。

兎にも角にも、俺がどんなに頼み込んでも、このような恰好はしてくれないことだけは分かる。

だから決して忘れることがないように頭の奥底に深く刻んでおこう。

「まあ、腰を下ろしてください」

「うん……あつ！　このお菓子あたしが好きなやつ！　食べていいの!?!」

「はい、どうぞぞ」

そうして二人はいつものように仲睦まじく談笑を続けて、時折ボードゲームなんかもして。

いつ思いを告げようかとアル君が迷っていたのを、不意にカレンがこじ開けた。

「そういえばさ、話があるって言ってなかったっけ？　あれは何だったの？」

片手にクツキーを掴んだままで、アル君の好意に一切気づいていない愚かな娘が尋ねた。

「話というのは、その……」

「その？」

「……カレンは、この国が好きですか？　気に入りましたか？」

「うん、好きだよ？　すごくいいところだと思う」

それを聞いてアル君は立ち上がり、街を一望できるベランダへ出ると。

涼し気な顔で景色を眺めてから振り返り、心意を語った。

「僕もこの国と、この国の人々が大好きです。遠い昔に、とある大罪人のせいで一度は滅ぶも蘇ったこの土地を。心から愛し、守ることが僕の努めであり、贖罪なのだと思います」

「しよく、ぎん……っ？」

間の抜けた顔をするカレンに構わず、アル君は話を続ける。

「そんな僕に、もう一つ大切なものができました。それはカレン、あな

たです」

そして躊躇うことなく思いを告げた。

……が、どうしたものか。

ウチの馬鹿娘はその言葉を友情の表明として受け取ったようだ。

「あたし？ あたしもアルのことは大切だよ？」

「はい、えっと、その……。分かりました、単刀直入に申しませう」

はあ、と溜息を吐き。

それからふう、と深く呼吸をして。

より一層覚悟を決めた目をして口を開けた。

「カレン、僕と結ご——陛下ッ!!」

無情かな。

アル君の一世一代の告白は、ノックすることなく部屋へ押し入ってきた臣下によって妨げられた。

「お取込み中のところ申し訳ございません！ ですがこれを！」

「はあ……」

酷く苦い顔をした陛下に、どうか目を通してくださいと一つの書状を差し出した。

陛下は受け取ったその場でパツと広げて目を通し、そしてピタリと固まった。

さらにそれが一分近くも続くものだからついにカレンが声をかけた。

「どうしたのアル？ 誰からの手紙？ それとさっき何て言いたかったの？ ケツコ……だっけ？」

「……………すみません、カレン。さっきのことは忘れてください。それと——」

明日からはもう会えません。

三日以内にこの国を立ち去って下さい、と。

有無を言わさぬ強い眼差しで言い放ち、臣下と共に部屋を出て行った。



夕食の席になってもカレンの表情は重苦しいままだった。

湯気立つ食事が目の前にあるというのに、両手は膝の上に置いたまま。

「あらあらどしたのカレンちゃん、そんな顔しちや折角の美貌が台無しよおん？ ママに話してちょうだいな？」

カレンの頭の中に渦巻くものは全て見えているが、それでも何も知らない体で尋ねる。

ちなみにこういう時はオネエ口調が効果的なのだ。

「……うん」

そして特にツツコまれることなく、カレンは全てを吐き出してくれた。

友達の家招待されて、昨日よりも仲良くなったはずなのに、突然絶交を言い渡された。

やはりというべきか、アル君からの好意には気付いていなかったが。

「あたし、酷いことしちゃったかな……」

今にも泣き出しそうな顔で「どうして？ 分からないよ？」と小さく呟く。

わけもわからず自分を責めて、目に涙を滲ませている。

俺様の愛しい愛しい娘を泣かせおつて、許さんぞ小童が。

せめて理由くらいは言っておくのだ……

——君を巻き込みたくない、とな。

「これは全く関係のない話なんだけどね、近々この国は攻め落とされるんだとき。ちょうど三日後にね」

「戦争……するの？」

「そうさ。それもまず勝てるわけがない戦力差でね。だから巻き込まれないように三日以内にはこの国を出るからね」

俺の話聞いて、少し考えてからハツとした表情を浮かべて声を荒

げ、懇願しだした。

「待つて！ それじゃあたしの友達が死んじやう！」

「そりゃあ死ぬき。どちらかが生きる代わりにどちらかが死ぬ。それが戦争だもの」

「でも！ アレンなら死なない、アレンなら助けられるでしょ!？」

さすがのカレンでも自力で戦争を止めるのは無理だとわきまえているようで。

だから俺を頼るという判断は、正しくもあるし間違ってもいる。

「たしかに助けることはできるが、本当にいいのかな？」

「いいって……?」

「テンノの数が倍になるぞ。カレンの命だって狙われるようになるかもしれない」

どういうわけか封印が解けたことがバレてテンノが送り込まれているというのに、一人で大軍を止めたという話が広がればより一層増えるに決まっている。

カレンはもう何人とテンノを見てきたのでその恐ろしさを知っている。

今の自分では撃退することも見抜くことさえもできないと理解している。

そのことについて俯いて自問自答してから、

「……………それでも、いいよ」

「そうか」

あたしも頑張るからこの国を、友達を助けて、と。力の籠った瞳で言葉を発した。

しかし俺はそれに了承することなく、無言で飯を食い続け。

「ふうー、ぐちそうさまでした。……さて、と」

酷く落ち込んだ顔をしている娘に、キツパリと告げる。

「これ以上こんなところにいられるか！ 俺は街を出るぞ！」

「……………」

「それで、だ。戦争を止めるにあたり、いくつかカレンにも手伝ってもらうが、よろしいかな？」

「!!」

第二十四話 「おじぎをするのだ!!」

都市の中央通りを軍馬と歩兵の隊列が流れていく。

「バンザーイー！ バンザーイッ!!」

「戦神の加護のあらんことをーッ!!」

「あなたあ！ 必ず生きて帰って来て!!」

見送る民草からの声援を身に受け、力強い足取りは止まらない。

その先頭で凜とした笑顔を振りまきながら隊列を率いるは、国王アルベール・リボンレイク。

彼は十二という若さで王座に就き、それでも弱音を一切見せずに尽力してきた故に、国の誰からも愛されている。

その背中を笑顔で見送る者もいれば、涙を流す者もいた。

なぜなら今日の夜にでも、敵将が国王陛下の首級を掲げて都市へと踏み入れる姿がありありと想像できたからだ。

リボンレイク王国の総人口は五万弱。

そして志願制が用いられているため、抱える兵士の数はその百分の一にも満たない。

対して敵軍の総数は判明しているだけでも四千強。

勝敗は火を見るよりも明らかである。

それでも行かなければならない。

愛と誇りのために、

僅かでも希望がある限り、

この命を捨てたつてかまわない。

各々が戦士としての決意を強め、振り向くことなく都市を後にした。

……そのすぐ先で立ちはだかるは一つの小さな影。

「——止まって!!」

長く尖った耳を持つ少女は精一杯両手を横に伸ばし、たった一人で通せんぼの構えをとった。

「何だ貴様は!? そこをどかぬか!」

お前のような子供の相手をしている暇はないのだと、臣下の一人が馬上より怒鳴りつける。

しかしアルベールがスツと右手を上げ、それを制止した。

「カレン? どうしてここに?」

「アル! 何であたしにちゃんと教えてくれなかったのよ! ううん、今はそんなことはいいの。とにかくみんな戦場には行かないで!」

「僕達が行かないで、誰が行ってくれるというのです?」

「あたしのお父さんが行ってくれているの!」

何処の馬の骨とも知れぬ男が一人で戦っていると聞いて、いよいよざわめきが大きくなる。

そして、仮にそれが本当であれば尚の事加勢せねば名が折れる、我々から戦士としての誇りを奪うのか辱めるのか、といった文言が次々と投げつけられた。

しかし少女はケロッとした顔で言葉を返す。

「それも言ってたよ! すぐに名折れだの誇りだのとバカなことを言い出すって!」

「なんだと!」

「我らを愚弄するか!」

「陛下! 捕縛の許可を!」

いよいよ臣下の一人くらいは制止を振り切って飛び掛かりそうな空気が充満してきた。

そんな中で少女には無数の怒気と殺気が当てられているというのに、極めて冷静な表情を崩さない。

そして、ふああとあくびをついてから、父親より言いつけられた通りの言葉を唱えた。

「——《胡蝶ノ羽根休メ》!!」

少女の身体から目には見えない波動、魔力が流れ出し。

それは隊列の先頭から最後尾までをすっぽりと包んだ。

するとばたりばたりと兵士どもはその場で倒れて寝息を立てるよ

うになり、ついには声を発する者が居なくなつた。

ただ一人を除いては。

「……な、なんで!? どうしてアルだけ眠つてくれないの!？」

アルベールだけが、何食わぬ顔で馬上に居座つたままであった。

「精神を擦り減らした者を微睡みに誘う魔法、ですか……。前世で飽きるほど同じものをかけられた僕には通用しませんよ? そう簡単には擦り減らないように鍛えられましたので」

師匠と朝から晩まで組み合いをして、へろへろになってからかけられるんですよ? ほんとまいっちゃいますよね。

などと懐かしそうに思い出を語るアルベールをカレンは注視する。その顔にはアルベールとは対照的に、焦りの色がありありと浮かんでいた。

一番戦場に行かせたくない相手を眠らせて留まらせることができなかつたからだ。

そしてアルベールの目から、自分一人だけでも戦地へ赴くという強い意志を感じ取れたからだ。

しかし、一つだけ勘違いをしていた。

「ところでカレン、あなたの父君の名前は？」

「名前? お父さんの名前はアレン。アレン・メーテウス、だけど……」

「それならばきつと、僕が戦う必要はありません。それでも一緒にあの人の姿を拝みに行きましょう。さあ乗って!」

その名と武勇を知るアルベールには、戦う気など無かつたのだ。

それを伝えた後、カレンを馬上に引っ張り上げて馬を走らせた。



リボンレイクからそう遠くない平原にて、カーロモンテ公国の軍勢は陣を敷いて待っていた。

布告した通りの日時と場所で、はたして敵の兵どもは逃げずに現れるのだろうか、静かに待っていた。

リボンレイクの軍勢はどれほど多く見積もっても千、対して我々の軍勢は四千を超えるのだから、都市にて籠城の構えをとつても仕方のないことだ。

そのようなことを仲間同士で話し合っていた。

いつでも戦えるように陣を敷いてから小一時間ほどが経ち、予定の時間となった。

たとえ敵の総数が五百程度でも、無駄死にしないよう必死に戦おう。

同胞を誰一人失うことなく勝利を収めて、大いに酒を飲み交そう。そのように互いを鼓舞しあっていたのに、丘陵の向こうより現れたのは――

「……は？ 何だあいつらは？」

「リボンレイクの奴ら、なんだよな？」

「それにしても少なすぎる。和平の使者ではないのか？」

一人の男と、その背後に立ち並ぶ覆面の者共。

合わせてわずか二十一の人影であった。

当然その姿を見て公国軍の誰もが疑問に思い、軽い混乱に陥った。

敵の王や将にしては装備が貧相すぎる。

それどころか武器と呼べるような道具を何も持ち合わせていない。

では何か、和平の使者か？ たまた自殺志願者かと、そのような話がすぐに持ちあがった。

そんなによめきをよそに唯一顔を隠していない、二十人を率いてきた男が一步出て声高に叫んだ。

「我は湖の精なり！ 我が主は争いを望まぬ！ この土地が血で汚れることを望まぬ！！」

自らを湖の精と名乗ると誰が想像できただろうか。

「ゆえに貴様らは即刻兵を退き、故郷へ帰るのだ！！」

ましてや大軍を相手に無血で撤退しろと呼びかけるとは。

四千を超える大軍がいつときはその言葉の強さに気圧されるも、すぐに嘲笑が起こった。

「——静まれイッ!!」

しかしすぐに陣の前列中央より号令が下り、全軍静止をした。野太い声の主はカーロモンテ公国軍が大將軍、ボルナ・ルブレフ。百人隊長の家に生まれ育ち、この戦乱の世で次々と戦果を挙げて成り上がってきた剛の者である。

「湖の精とやら! 難しいことは言わぬ。……我らが侵攻を止めたくば、力づくで止めてみせよッ!!」

ゆけ! と号令一下、前列より二百の兵が我先にと駆け出した。

同時に二十の顔隠し共も均等に分かれて駆け出した。

つまりは一人につき十人が相手をするということになる。

「悪く思ふなよ。これは戦争だ」

多勢で無勢を黷るというやり方にボルナは少しばかりの罪悪感を感じながらも、自らに言い聞かせて払拭した。

そして二十と二百が接触し、

一分と経たぬうちに二百の兵が皆のされた。

「どうなっている……ッ!?!」

まともな防具を装着しておらず、目に見える武器も持っていないからといって、暗器などを隠し持っている可能性はある。

のされた二百人もそのことを承知で剣を振り下ろした。

やはり多少の罪悪感を感じながらも、武功と話のタネ欲しさに我先にと全力で殺しにいった。

その結果、一人残らず意識を奪われた。

斬り込みや突きは全て避けられるか指先で逸らされるなどしてかすり傷さえつけられず、盾は奪われて真っ二つに折られるか、構えた盾もろとも蹴り飛ばされた。中には奪われた盾で殴られる者も。

密集しているときは味方同士で頭をぶつけるように誘導され、軽い足かけでドミノ倒しのように転ばされた。

そのようにしてあつという間に二百の先鋒隊が地面と平行になった。

なにも彼らが舐めてかかっていたとか調子が悪かった、根本的に弱かったからというわけではない。

彼らはこの戦乱の時代を生き抜いてきた、どこに出しても恥ずかしくない兵であることに間違いはないのだ。

……ただ、その程度の実力では《戦地に招かれざる》と呼ばれた男と、彼の魂無き死体を相手取ることなどできない。

それだけのことだ。

公国軍に少しの考える時間を与えてから、二十体の傷一つない屍と一人の不死者が前進を始めた。

「笛を鳴らせ!! 全軍展開! 包囲し殲滅せよ!! 特にあの湖の精を名乗る男を打ち倒した者には百人隊長の地位が授けられん!!」

百単位で攻めて逐一撃破されてはすぐに兵が逃げてしまう虞があるため、今からでも全軍でかかるべきとの判断が下された。

アレンとその死体はいえば、特に逃げるそぶりもなく、むしろ自らその包囲の只中へと潜り込んだ。

雑兵と戦うことを避け、将とそれに次ぐ位の者のみを狙って指揮系統を崩し敗走させるという手もある。

……が、一人残らず恐怖を刻み込んで、二度とリボンレイクへ攻めることなどできないようにするために、アレンはそれをしなかった。

幾重にも包囲されたので、それらを渦のように飲み込んでやろうと決めたのだ。

「いい連携だ! だが遅い!」

四方から同時に突き立てられた槍を纏めて奪い取り、木の枝を折るかのようには膝で全て折っていく。

「お前ら! 一旦引け!」

「ハリネズミにしてやる!」

背後からの呼びかけに応じて槍兵達がアレンと距離を取ると、すぐさま八方から矢が放たれた。

長弓による弧を描いた曲射と、弩による高威力の直射が一人の人間に対して逃げ場のないように襲い掛かる。

しかし、アレンは逃げなかった。

降り注ぐ無数の矢をその場で躲し、躲しきれないものは叩き落とすか指の間で挟み取った。

「ど、どうなってんだよありやあ……」

「放て！」

「止まることなく放ち続けるんだ！」

際どく狙っても躲かれるのだから数で押せばよいと、矢をつがえるのと放つ速度が増した。

「フハハ、そんな小手先の技術が俺に通じ……痛ツたア!!」

それが功を奏したのか、ついにアレンの足の甲に鏃が突き刺さり、悲鳴が上がった。

「ただでさえ身体が鈍っているというのに……。年寄りを、労わらんかあっ!!」

叫びながら一瞬うずくまって刺さった矢を無理矢理抜き、刹那、獣の如き瞬発で追撃の矢を潜り抜けた。

時速にして六十キロメートルを超える速度で駆け出したアレンが狙うは、休むことなく矢を放ち続ける者共であった。

「ひいっ!?!」

「く、くるな！　くるなーッ!!」

「止まれエ!!」

それを守ろうとする兵士達を、怒り任せの悪質タックルで吹き飛ばしてゆく。

「よこせー」

矢を放った者を一人残らずギロリと睨みつけて飛び掛かり、

「こんな物騒なものを使うんじゃない！」

奪い取った長弓をことごとく真つ二つに折り捨て、奪い取った弩も同様に使用不可能な状態に。

そんな光景を見てしまったがゆえに百を超える兵士、特に弓を扱う者が命欲しさに逃げ出した。

二十体の覆面死体についても四肢の一つとして失うことなく、五百弱を転がしていた。

「これ程とは……」

馬上より見渡し、ボルナは顎肉をつねりながら唸り声をあげた。

あと千もやられたら間違いなく他の全ての兵士が逃げ出し瓦解す

る。

それまでにどうにかしてアレを打ち倒さねばならんと考え、指でクイとして背後に控える者達を呼びつけた。

「旦那ア、やっとオレらの出番つすか？」

「うっわ、こりやひでえや。俺達がいなかつたらどうするつもりだったんで？」

「無駄口を叩くな。それよりもあの男をやれるのだな？ そのために貴様らには法外な賃金を……」

「へいへい、任せときなつて。いくぞテメエら！」

將軍の立場にある者に向かって馴れ馴れしく振る舞ったのは、半年前より雇われた流れの傭兵部隊である。

彼らは皆が戦場での戦い方を知る魔導士であり、リボンレイクに攻め込む契機となったここ数度の戦勝は、その神秘の力によるものも大きい。

「オラア！ どけや雑魚共！」

「オレたちが助けてやつから邪魔すんじゃねーぞ！」

魔導士らがアレンの下へやって来ると同時に、今まで死に物狂いで立ち向かっていた兵共がさつと身を引いた。

「いよう、初めましてだな。ずっと見てたけどよ、あんたつえーなア」

「やあこんにちは。君達を見たところ、魔法が使えるようだね？」

「そこまで分かってんなら話は早えな……」レツエンホウテン《烈炎咆唸》

《逆氷柱》サカツラ

《踊レヤ石童》オド
インワラベ

ある者は口から灼熱を放射し、ある者は複数個の礫を操り、またある者は地面より貫かんと凍てつく大棘を生やし。その他諸々の神秘の力が用いられた。

生身の人間が喰らえば原型が残らないような、それこそ魔獣を殺すために用いられる魔法が、たった一人の武器すら持たぬ男に向けて唱えられる。

しかしアレンはその全てに笑みを浮かべ、まるで子供の遊びに付き合っているかのような穏やかな顔をして避ける、避ける、また避ける。

「なめやがって！ 《結ベヨ絡ミ草》ア！」

どんなに威力のある技だろうと、当たらなければどうということはない。当たらなければカエルの小便、子犬の砂かけと同じである。

そのようになめられていていると思ひ込んだ魔導士の一人が束縛の魔法を放つも、冷静さを欠いたためにそれは乱れた。

しかし偶然にも、その乱れによってアレンの意識外より緑が絡まり、右足をガツチリと捕らえた。

「ありやりや、これはまずい」

「今だ！ やれ!!」

二度とない好機である。

魔導士は皆、全身全霊を注いで各々の有する最大火力の魔法を唱えた。

甲冑を丸ごと焼き焦がす火炎の大玉、牛を真つ二つに裂く風の刃、大岩を貫く鋼の槍、触れたそばから肉を溶かす毒の息吹。

極めて殺傷力の高い魔法が四方八方より放たれ——

「《風刃一閃》《紫電ヨ駆ケロ》《業炎憎魂》《仇ヲ啄メ巖ノ鳥ヨ》」

——全て相殺された。

それも八人が放つたのと全く同じものがぶつけられた。

彼の者は一切嘯まずに四つを高速詠唱し、口頭での詠唱が間に合わない四つは両手の親指と人差し指にて綴り、計八つを同時に放つていたので。

「ふうー……。なんとか誤爆せずに済んだわい」

「う……うそだ……」

「一体なんなんだよ temeエ!?」

「人間じゃねえ！」

「失敬な。俺はれつきとした人げ……。うむ、我は湖の精なるぞ」

自称湖の精は、茫然自失とした魔導士達がこれ以上何も仕掛けてこないのを見て、荒縄よりも強度のある束縛から力づくで抜け出した。

「まあいい。君達の実力は十分把握した。ハッキリ言おう、君達は三

流だ」

「オレらが三流……だとオ!？」

「まず理由の一つとして、礼儀がなくなっておらん。魔法使い同士の殺し合いは礼に始まり礼に終わるのだ。格式ある儀式は守らねばならぬ」
アレンは持論を展開しながら右手を天に伸ばし、とある言葉を綴ってから腕を振り下ろし、そして命令した。

「——おじぎをするのだ!!」

その言葉が耳へ入ると同時に、魔導士らに指一本動かさないほどの圧力がのしかかり、無理矢理にお辞儀の体勢に曲げられた。

そのまま一切抵抗できずに地面に押しつけられ、揃って失神した。

「君達が雑魚と愚弄した兵卒共はこの程度で落ちはしないぞ?」

……って、聞こえちやいないか」

アレンは魔導士らを三流と評するも、彼らは決して無能ではなく、軍にとっては貴重な戦力に違いない。

たった八人ながら、三爪の魔獣を屠った経験だってある。

ただ、今回ばかりは相手が悪かった。

たった一人ながら、五爪の魔獣を捕食した経験がある男に挑んだのがそもそも間違いであったのだ。

第二十五話 「愛娘と愛弟子」

いやあ危ない危ない。

死なないどころか誤爆の一つもせずにはいられて本当によかった。

それと俺が知らない魔法、つまり封印されていた千年の間に生み出された魔法を使う者がいなくて助かった。

「うーん、そろそろ敗走してもいい頃なんだけどなあ」

俺と二十人の俺達で、軽く千と五百を転がした。

敵軍の決戦兵器である魔導士達も全て沈黙させた。

それでもまだ、彼らは立ち向かってくる。

「オオオーツ!!」

「ぬあアツ！」

「よっ、いよっ。はいおやすみ」

客観的に見れば勝てる要素などないのに、大岩に砂をかけて割ろうとするようなものなのに、声を張り上げて斬りかかってくる。

足の震えを武者震いだと自らに言い聞かせて決死の覚悟で突っ込んでくる。

彼らがどれほど士気を高めようと後れを取る気はないが、厄介で骨の折れることには変わりない。

なぜなら俺を戦場へ遣わした主人が、敵であれ味方であれ人が死ぬのを見たくない甘ちゃんであり、不殺の命令を下されやがったのだ。

そのせいで敵に戦意のある内はご丁寧に相手をして、殺さずに絶望と恐怖と植え込んであげるしかなかった。

それでもあと一つ、劇的な何かがあれば一気に崩せると思うのだけど、そう都合よくはいかないか。

……まさにそんな事を考えた時だ。

——ブオオオオン、と。

何の前触れもなく敵陣中央より法螺が吹かれ、俺を囲む兵が大きく距離を取って退いた。

そして敵兵らは整列して道を作り、その間を通って都合のいい者がやってきてくれた。

その男は色黒で毛深く、兜の分を差し引いても背丈は優に二メートルを超えている。

「貴殿の武勇、しかと拝見させてもらった！」

そして俺と十歩の距離で止まると、馬をも切れそうな幅広の大剣を背から抜き取って、それを頭上でぐるんぐるんと回してから地面に突き刺した。

「それがしはカーロモンテ公国軍が副将軍、アンドレアス・ロベスなり！湖の精を名乗る者よ、貴殿に一騎打ちを申し込む!!」

「いいだろう。お相手しよう」

もちろん相手の気が変わる前に即答しておく。

これ以上ないありがたい申し出だからな。

「感謝する。とはいえ手が寂しい者とは戦えん。何か望みはないか？
槍でも弓でも構わぬ」

「なら君の、腰のそれを貸してもらえるかな？」

副将軍殿が腰にかけた剣を指差して言うのと、すぐに鞘ごと投げ渡してくれた。

握りと鏢に大鷲の意匠が凝らされていて、鞘から抜きとって現れた剣身は細かな凹凸なく鍛えられた鋼であり、たしかに上物であった。なんら不足はない。

「それじゃあ、始めようか」

「いざ……、参る——！」

オオと雄叫びを上げ、大剣を胸の前で横一文字に構えながら突進してきた。

この型の場合は、十中八九間合いに入ってから薙ぎ払いだろう。類まれなる巨軀と膂力を生かしての横薙ぎは、受ければ体ごと吹き飛ばされるか骨が折れる。

生半可な避け方をすれば相手より大きな隙を作りそこを突かれるだろう。

「実に理にかなっている」

もちろん隙を全く作らない完璧な避け方をして、それから足をひっかけて転ばせることはできる。

できるが、それをしては伝わらない。小さき者が卑怯な戦い方で勝利したと微塵たりとも思わせてはならぬのだ。

絶対に敵わないと分からせるためには、力で押し返さなくては。

「ガアッ!!」

「フッ!」

副将軍の大剣と俺の剣が接するその瞬間に握りに力を籠め、全ての筋力を行使する。

重く鈍い金属音が鳴り、踏ん張った成人男性五人をまとめて吹き飛ばせる程度の衝撃を感じたが、その結果よろめいたのは副将軍の方だった。

「っ!?!」

副将軍が目を丸くして飛び退いた。

まあ、理解できないだろうね。

下手すれば自身の半分の体積しかない男が、全力の一撃を受け止めたというのだから。

「心配しなくてもちやんと伝わったさ。生まれつきの体躯に驕らず、人より鍛錬していることがね。さあ、次はどうする?」

「次は、こうだッ!」

肩への突き、斜め下への振り下ろし、足払い、右腰から左肩への斬り上げ、などと連続した剣撃が繰り出される。

なるべく早く離脱できるように七割程度の力を籠めているようだが、それでも並の兵士に与えられる選択肢は避けるか逸らすかのどちらかしかない。

しかし俺はその全てを受け止めた。

すると副将軍はまたしても雄叫びを上げて大剣を振り上げ、俺の頭蓋を砕こうと振り下ろし。

なのでやむなく左膝をつきながら、柄と刃先をしかと握って振り下ろされた刃を受け止めると、刃と刃の接触部からバチツと火花が散り、右足が少しばかり地に沈んだ。
なるほど。

剣技は通用しないと理解して、純粋な力をもって押し潰すつもり

か。

「これならば、どうだアツ……!」

諦めずに剣技だけで戦っていれば方に一つくらいは傷を付けられたかもしれないだろうに。

「くくつ、絶対に力を緩めるなよ?」

「何が可笑しい! ……なあつ!」

まずは地についた左膝を上げ、両膝を伸ばして立ち上がり、鏢と鏢とで押し合う。

さらに力を籠め、今度は俺が彼の膝を曲げさせ、地に足を沈ませた。そうしてさつきまで俺がしていたのと同じ体勢を副将軍がとることに。

「……な、なぜだ?! 一体どんな手品を」

「手品も魔法も使っていないさ。純粋な力、つまりはこういうことだ」

剣の握りから右手を離して腰に置いて、半身の構えで押さえつけた。

それでも副将軍の剣が持ち上がることはない。

「たしかに君の筋肉量は俺よりも多い。男としてもその肉体は羨ましい限りだ。だが、その全てを使えていないだろう?」

普遍的で正常な人間には制限がかかっている。

普段は筋肉や骨が壊れることのないように、二、三割程度しか力を出せないようにタガがはめられているのだ。それこそ命の危険が迫った時や火事場くらいにしか外れないように。

それらを意図的に外すことができるのは、特殊な訓練をした者、身体が壊れても困らないまたはそもそも壊れない者、頭のイカれている者のいずれかである。

その中の二つである、特殊な訓練をして、身体が壊れても困らないに該当する俺は自由自在にタガを外すことができる。

人の肉体に許されし力の全てを用いることができるのだ。

「この俺に力比べを挑むにはまだ早かったな」

ごく一部の例外として、聖呪で臂力を増す者や、巨人の魂を持つな

どと謳われる異常な筋密度の者もいるが。

まあ、彼は今のところちよつとばかり身体が大きいだけの、極めて普遍的な人間だ。

「……………ひと思いに、やれ」

「殺しはせん。力の半分でも出せるようになってから、出直してまいれ」

戯言を吐く副将軍の大剣を弾き飛ばし、借りた剣の腹で意識だけを奪うように額を打った。

副将軍の巨体が力無く崩れ落ちると共に、悲鳴混じりのどよめきが起こった。

「あのロボス様を一騎打ちでねじ伏せるだなんて…………」

「ば、化け物!!」

「うわあああああああつ!!」

ようやく望み通りの展開になってくれた。

命の大切さを悟った下級兵達が、上官らの制止を無視して一斉に逃げ出してくれた。なんならその上官でさえ逃げ出した者もいる。

そうしてあつという間に戦場から軍勢が消え去り、残るは将軍らを含めた複数人の上官と、それらを守る五十弱の精鋭のみとなった。

ので、一旦二十人の俺達を一か所に集めて待機させ、俺一人で將軍の下へ歩を進めた。

「止まれ!」

「止まらんかッ!」

「お断りします」

精鋭と思しき忠実な戦士達が上官を守るべく槍と剣を突き立ててくるが、無視無視。

風と共に彼らの間をすり抜け、すでに馬上より降りていた將軍と顔を合わせた。

その様を見て武器を落とすし、唾然とする彼らとは違い、大將軍ボルナ・ルブレフだけが平静な顔をしていた。

「うん、君は間違いなく將軍の器だね。大成するよ」

「……………貴殿のような偉大な戦士からの御言葉、恐悦至極に存じます」

「ハハハ、そんな堅くならなくていいって」

「ふはは、そうであるか。では、名をお伺いしても？」

「あんまし人に言っちゃダメよ？」

「この俺はあくまで湖の精であるので、こっそりと耳打ちで名を教え
た。」

「……まさか、あの!？」

「あ、知ってる? いや、本当にその人かは分からないけど」

「最期の戦でお会いできるとは思ってもみなかった」

「最期? 何言ってるの? 死んで責任を取ろうと思ってるの?」
いけませんよ。

それは最低の逃げです。

自分勝手に縁を断ち切り、悲しみをばら撒く行為を俺は絶対に許し
ません。

「そもそも今回は相手が悪すぎただけだから、誰も君のせいにする者
なんていないよ。頭でつかちな貴族様が葡萄酒片手に文句を申され
たのなら、ぶん殴って冠を奪い取ってさしあげろ」

「それはなんとも豪気な」

大將軍はひどく感心したように顎肉をつねり、うなづいた。

そして瞳の中に、生への執着が見られるようになった。

「そんなわけでこれから頑張ってるね。でも、ここには攻めてこない
ですよ? 次はないからね?」

「承知」

整然とおじぎをしたのち、背を向けて馬上へ飛び乗り。

「では、またいつかの戦場で」

「俺が忘れてなければね。それトリボンレイクはいいところだから、
今度は武器を持たずに観光に来てねー!」

国へと引き返す彼らに街の宣伝をして、その姿が消えるまで手を振
り続けた。

「……んーっ! 終わったあーっ!!」

雲に手を伸ばし、肩を回し、ぐぐつと脱力する。
ようやく終わったのだ。

久方ぶりの戦場だったが、誰も死なせずに済んでよかった。
きつとカレンは褒めてくれるだろう。お父さんカッコいい！と
俺の胸に抱きついて、ほっぺにチューをしてくれるかもしれない。

そんな妄想をしながら振り向くと、最初に俺が現れた丘上でカレン
とアル君がこちらを見ていた。

「おーい！ カレンやーい!!」

愛する娘の名を呼びながら、小走りで駆け寄る。

それを大喜びで迎えてくれるものだとばかり思っていたが、少々不
満げな顔をしていて。

「あの、何かご不満でしたか？ 我が主の望み通り、不殺を貫きました
が」

「……なんで。なんであんな危ないやり方なの？ アレンならみんな
を眠らせることだってできるでしょ？」

なるほど。

俺の身を案じてくれたというわけか。

「あー、えーつと、そんなぬるいやり方をするとなまたすぐに攻められる
というか」

「カレン、あなたの父君は出来る限りこの地で戦争が起きないように、あ
えてそうしたのです」

「そう！ その通り！ さすがアル君、分かっているな！」

アル君のフォローの甲斐あって、渋々納得してくれた。

「本当に大丈夫なの？ 怪我してない？ 一度も死んでない？」

「うん、死んでない死んでない」

足の甲に矢が刺さるなんていう、ちよつとした怪我はしたけどね。
パパは元気です。

そもそも二十の抜け殻を製造するために、自殺して小指一本から蘇
るのを二十回も繰り返したじゃないか。今更だとは思うがね。

「とにかくこれで俺とカレンはこの国には居られなくなってしまうた
から、行くとするよ。そうそうアル君や。あの日言えなかつた続きを

今、言うべきではないのかな？」

「……ありがとうございます」

何の後腐れも後悔も無いようにと、それを提案して俺は一步引いた。

カレンとアル君だけの、若き者同士の空間を作ってやることに。

「言えなかった続き？ 何の事？」

「三日前、カレンが僕の家に来てくれた時、本当はこれを言うつもりでした。……僕と結婚して妃に、僕のお嫁さんになってくれませんか？」

「えっ……っ？」

本人だけが予想していなかった突然の告白を受けて石のように固まり。

しばらくして「つまりそういうことなんだよね？」と、確認するよ
うな目でこちらを見てきたので、ゆっくりを首を縦に振ってあげた。

「僕ではいけませんか？」

「えっと……そのお……」

カレンはまさしく恐慌に陥り、それでもなんとか言葉を絞り出した。

「あたしはママとパパを探さなきゃいけないし……それに、アルには
あたしなんかよりも素敵な人が似合うと思うの！」

「父君なら、そちらにいますか？」

「い、いまのはやっぱナシ！ と、とにかくあたしは友達としてアルを
応援してる！ そういうことだからっ、あたしもう行くからっ！

じゃあねッ!!」

顔を耳まで真っ赤にしながらも、それだけを一方的に告げ。

それからぴゅーつと風のように向こうへ消えてしまった。

大方予想通りの結果であった。

「はは、フられてしまったな」

「ふふ、そうみたいですな」

思春期の少年は玉砕したというのに特にショックを受けた様子も
なく、さも当然であるかのようにくすくすと笑っていた。

大丈夫だよ。

君にはいつかきつと素晴らしい女性が見つかるさ。

「ところで、俺にも何か言いたいことがあるんじゃないかな？ アルベール国王陛下……いいや、——我が弟子、アルビンよ」

「お久しぶりです、——お師匠様」

姿形は違えどその灰色の瞳だけは、たしかに俺の知るものであった。

そしてニコリと笑みを浮かべながらふらつと寄ってきて、流れるように体重を預けてきた。

「おいおい、前世の分も合わせたらもう立派な中年だろうが」

「お師匠様からしたらまだまだ赤ん坊ですよ。だから、しばらくこうさせてください」

「……やれやれ、仕方ないな」

俺がそれを許すと、背中に両腕を回してギュツと力を籠めてきた。

まさか、愛娘ではなく愛弟子に抱きつかれるとは微塵たりとも想定していなかったなあ。

「アルビン、約束は守れているか？ 俺は約束通り、君を助けに来たぞ」

「はい、僕は幸せです。ああでも、いつ裏切られるか分からないので今のところは、ですけど」

「ここから、笑えない冗談を言うんじゃない」

前世のことを謝罪され、俺はそれを許し、こうして再び出会えたことを喜び笑いあった。

誰もが幸せになるように国を治めるのはとても難しいが、それでもやりがいを感じていると言うアルビンにいくつか助言を与え、それから俺の現状についても隠さず語った。

「……それで、どんな理由で俺が封印されたか知らないか？ 些細な手がかりだけでもいい」

「生まれてこの方古い書物を漁り、各地を旅する吟遊詩人の歌からもお師匠様の足跡を探しました。それで分かったのは、お師匠様のものと思しき逸話や伝承が千年前から途切れているということ……」

「一体何があつたのかと……」

「ううむ……」

特に隠している様子もなく、本当にアルビンは何も知らないみたいだ。

だからそう簡単にいくわけもないかと、自分に言い聞かせることに。

「それじゃあ、カレンとカレンの両親のことは何か分からないか？」

強大な力を持った人族とエルフの夫婦を知らないか？」

「聞いたこともないですね……。ただ、一つ言えることがあります。

……ふふふ」

「なんだ？」

ええ、きつと喜びますよ。ともつたいぶつてから、その口を開いた。

「この時代には、お師匠様が気に入るような強者がうようよいるといふことです……」

「……ほう!？」

「お師匠様のように一人で大軍をどうにかしたり、それこそ毒杯の王と呼ばれた時の僕を殺せるような剛の者が、話に聞くだけでも両の手と両の足で数え切れないほどいます……」

「それは真か!」

「はい!」

また世界中を旅するのならきつと出会うでしょうから、今度この国に来た時に土産話を聞かせてくださいね。と、ワクワクした顔で言うてくれた。

やはり男の子は何度生まれ変わろうがいくつ歳を重ねようが男の子である。

もちろん俺も興奮したので男の子に違いない。

「では、そろそろ行かないと我が娘がへソを曲げそうなのでな。いくとするよ」

「何かあったら、いつでも僕を頼ってくださいね?」

「馬鹿者、それはこちらのセリフだ」

《第一章：不死者の帰還 完》

第二章 通りすがりの革命家

第一話 「いつもの景色」

——何かあつたら、いつでも僕を頼ってくださいね？

ついこの間耳にした、心優しき愛弟子の甘言が思い起こされた。

これは俺の脳味噌が、この状況で最も役に立つ人物を勝手に導き出しただけのことだ。

だから決して心が弱っているわけではないし、あのように言い返して百年も経たないうちに「不甲斐ない師匠を助けてくれ」などと言えるわけがない。

……まあ、どちらにせよ今は何も言葉を発せはしないのだが。

「これより！ 罪人アレン・メーテウスの処刑を執り行おう！」

なぜなら今現在猿轡をかまされ、手足をきつく縛られ、断頭台に体を押さえつけられているのだから。

そして目に映る台上からの景色と見物に集まった群衆のたしかな熱気が、これが夢ではなく現実であることを教えてくれている。

「執行するにあたり、この者の罪状及び清めの言を読み上げる！」

「そんなもんはいいからはやく首を切り落とせーッ！」

「こーろーせー！ こーろーせー！」

罪人の魂を清めてから六大神の御前に送ってあげようという、大変ありがたいご厚意を邪険にするとはなんたることか。

だからといって彼らのような一般市民を責めてはいけない。悪趣味とはいえ、こういった見世物で心を落ち着かせ、辛く苦しいことばかりの生活で溜まったモノを少しでも吐き出さなければならぬのだ。

それに少数ではあれど「可哀そうに、きつと濡れ衣を着せられたのだな」「来世では幸せに生きられますように」などとといった憐憫や祈りの声もちらほら聞こえてくる。

それだけで満足できる。

いいでしょう。

俺の命の一つや二つはくれてあげましょう。

だがしかし、

「また、この者の娘カレン・メーテウスに対しても同様に刑を執行するものとする！」

娘の命だけは絶対に渡さん。

「オイ！　じつとしていろー！」

「んーっ！　んーっ!!！」

今は背中に目をつけていないので見えはしないが、俺同様に拘束されたカレンが必死に声を出そうとして、執行人と群衆に目で訴えながらすぐ後ろに立たされていることだけは分かる。

幸いこの場に断頭台は一つしかないのです、俺の首が落とされるまでは命を保証されているということも。

まったく、どうしてこうなってしまったのか。

真心の籠っていない清めの言を聞きながら、もう二度と変えることのできない過去に思いを馳せた――



一国の主生まれ変わっていた弟子と別れ、北の高原地帯の青草と土を踏み続けて早一月、また一つの国が見えてきた。

堅牢な城壁と深い堀に囲まれたその都市の規模はリボンレイクよりも明らかに大きく、城壁に囲まれた中にはざっと見積もっただけでも軽く十万を超える命がひしめいているだろう。郊外に住む人々を含めれば二十万に届くやもしれぬ。

「カレンお嬢様、寄っていかれますか？」

「うん。……あとその呼び方はやめてよね」

「この国でもさぞ良縁にありつけるでしょうな。なんたってカレン嬢はあのアルベール王を惚れさせた方なのですから」

「……」

あの日からしばらく経った今でも、カレンは思い出すだけで耳まで

紅潮させている。

それを観るために三日に一度はこうやってからかうことが習慣となりつつある。

「アレンなんて嫌い！ あたし先に行ってるからー！」

「ほっほっほ。転ばないように気を付けるのだぞ」

紅蓮と漆黒の髪を激しく揺らしながら風と共に駆け、みるみるうちに小さくなっていく。

そうして豆粒程度になるまで距離が空いた。ので、平静を装うのをやめることに。

「ぐっ……ふ、ふうー………」

本気の言葉ではないとはいえ、あの子に嫌いと言われると中々に来るものがある。

重いボディブローを受けた後のようにジワジワと効いてくるのだ。

五千年の人生でこのようなことは記憶にない。やはり俺は弱くなってしまうた。

「うーん、歳をとると涙もろくなる定命の者を馬鹿にはできないなあ……」

どうしたものかと多少真剣に考えつつ、常に豆粒大のカレンを視界に収めつつ小走りゆくと、いつの間にか足元が若緑から石畳に変わっていた。

タタタと軽やかな音を立てて石畳の上を走るカレンの真後ろを、一切音を立てずにぴたりと張り付きながら長閑な田園地帯を抜け、城壁内への架け橋を渡る際に「いつからそこにいたの!？」と驚かれ。

軽く走っただけですでに機嫌を良くしてくれていたので共に橋の向こうへ踏み入った。

行き交う人のうねりや街並みを注意深く観察しつつ、カレンが口を開く。

「うん、うんうん……。まあまあー、かなあ」

俺の仕草を真似て顎に小さな手を当て、まるで世界各地を巡り歩いてきた放浪者のごとき言葉を平然と放った。

街というものを初めて見知ったのはひと月前だというのに。

今まさにリボンレイクに訪れた時と同じように目を光らせながら口の両端を上げて、長い耳をぴくぴく震わせ、さらには心拍数まで増加させているというのに。

「正直に言うとう？」

「すごい！ ワクワクする!!」

「素直でよろしい」

「……だから、一人で見に行っちゃダメ？」

「ダメです」

「なんで!？」 とカレンの口から飛び出てくる前に、今一度じっくりと目に映るものを観察するように言いつけ、それから一つの問いを与えた。

「リボンレイクと何が違う？」

「何が違うって……」

「例えば建築物はどうだ？ 店では特異な何かを売っているか？」

「あんまり、変わらないと思うけど」

色彩などに差はあれど、大本に変わりはない。城も一つだけ、都市の中心にどっしりと鎮座しているだけだ。

店だってその土地の名産や伝統品以外はどこでも似たり寄ったり
のモノを扱っている。

「なら、ヒトはどうだ？ リボンレイクでは殆どの人間が輝いていた
だろう？ ここではどう見える？」

「えーつと………。暗い顔の人が多い……かな」

「そうだ。では、笑っている人間だけを探してくれ。それはどういう
人間だ？」

またいくばくか時間を与え、探させた。

「たぶんだけど、偉かったりお金持ちだったりする人。それと子供」
「その通り」

笑っているのは何も知らない無邪気な子供と、一部の力ある者だけ
だ。

リボンレイクとは真逆で行き交う人々の多くが無表情か仏頂面で

いる。

豪華な装いの貴婦人が歩く道端に物乞いを行う者が座っていて、笑顔で駆けまわる子供を懐かしそうな目で見ている。

「どうか店の物を買ってくれ、そうでないとやっていけないんだ」と、冷やかし相手にも必死で頭を下げる店主のやつれた姿。

そのような情景が散見される。

「力ある者の多くが平民以下の人間と働き蟻の違いを説明することができないだろう。……この国に限らずではないがね」

彼らの多くは当然の権利のように下々の者を虐げるし、虐げられ続けた者はいつか耐えられなくなって暴発する。

あらゆる土地から人と物が行き来する交易都市を除き、上下の格差が露骨な国は良きとは言えないのだ。

「難しい……だけど、なんとなくわかるかも」

「これは滅多にないのだが、力ある者が皆アルビ……アルベールのような国もあるにはある」

「……？」

「王侯諸侯らが、休日の昼は広場で見ず知らずの子供の相手をし、夜は下町の酒場で漁師と飲み交わす」

外から攻め入れられる以外に瓦解することがなく、その際は民自らが共に滅びることを選択する。

「いつか自立して定住するのなら、そのような国を探すといい」

「ふんふん、なるほどなるほど……。そういうことね」

「本当に理解できたのかい？」

「半分はわかったってば！」

俺がカレンを見くびるようにあしらうと、多少ムキになって応えをぶつけてきた。

うん、半分も理解できれば十分だろう。

「……とまあ話が逸れてしまったが、目を見れば人が分かる。人を見れば国が分かる」

故にこの国はあまりよろしくない。油断のできない処だ。

少なくとも世間知らずな一人娘を放しておくなんて愚かな選択は

できないくらいに。

「だから俺はカレンの手を離さない。分かってくれるね？」

膝について目線を合わせ、カレンの小さな手を俺の両手で包み込むように握り、心からの理解を求めた。

「……うん」

それに対しカレンは嘘偽りのない目でこたえてくれた。

ああ、よかった。

これでまたあの時のようにカレンが危険に晒されることはないだろう。

きつと、きつと心休まる穏やかで素晴らしい逗留となるだろう。

……いや、そのようにするのだ。

「よし、それじゃあ行こう。何か食べたい物でもあれば遠慮なく言うといい。予算の範囲内であればいくらでも好きなものを買ってあげよう」

「あたし今すぐく蜂蜜パンが食べたい！ そこらへんの屋台に売ってるかな!? 三十個は食べたい！」

「カレンが良い子にしていればきつと売っているだろうよ。それと三十個はもちろん予算の範囲外だ」

「じゃあ二十一！」

「多くて十個まで。それ以上はいけません」

「けちんぼ！」

「ケチじゃない！」

それでも結局は、少し前に教え込んだ交渉術を用いられて十五個も買わされてしまった。

こんなことのために仕込んだんじゃないんだけどなあ……。

だらだらと食べ歩きつつ、竜と虎の飴細工で両手が塞がった状態のカレンに「常に身の回りに注意を払いなさい。おのずと十秒先の未来が視えるようになるのだ」などと説いていると、大通りからちよつとした広場に出た。

交差点の意味合いも兼ねてであろうその開けた場所で、行き違う人々の後ろからあるものが見えて俺の足を止めた。

「どうしたの？ ……ねえねえそれとさ、アレは何なの？ ほら、真ん中にあるアレよ」

「なんだと思う？」

「うーん……。何かの台だと思うけど、わかんない」

広場の中心に噴水や樹木などは生やされておらず、代わりに置かれているそれは俺にとっても縁のある物だ。

それを見ただけで心臓の鼓動が三拍早くなり、身体が少々疼き出す。特に首筋のあたりがヒリヒリする。

「そう、台だ。お父さんは昔、あの台の上でいつも殺されたものさ」「へえ、そうなんだ。殺され……。へえっ!？」

「アレは断頭台と言ってるね、悪い人の首をあの上で斬るんだ。こう、スパツとね」

首に手を当てて横一文字に斬る仕草をしながら言うと、毎度おなじみの苦虫を噛み潰したような表情を見せてくれた。

「ああ、懐かしいなあ。お父さんの昔話を聞きたいかい？ これに関しては一昨日では到底話しきれないくらいにネタがあるよ」

「いや……。今はちよつと、いいかな……」

「それは残念だ」

遠まわしに聞きたくないと言われてしまったので、一人頭の中で思い起こして浸かる事に。

ある程度行政が発達し、法と規律のある地域で何かやらかした際にはしばしばあの場所へ連行されたものだ。……。まあ、公開処刑などという野蛮で非生産的な罰則のあること自体が未発達ではないのかという問いはおいといて、だ。

過去五千年に渡り、盗みを働いた、殺人を犯した、殺されたのに生きていく、お偉いさんに歯向かった、国家転覆を目論んだ、世界の半分を陥れた、テンノである、魔人の王である、余所者である、顔が気に入らない、などなど様々な理由——紛れもない事実の場合もあれば、全くのでっち上げの場合もある——で頭と胴体を切り離された。

断頭台の上では基本身体を固定され、他人に命を握られ、衆目に晒される。

熱い視線で処刑を見守る民衆らは多くの場合熱狂していて、石や卵、トマトや生ゴミなんかを投げつけてくる日もある。その際は執行人にもいくらか飛び火するので大変申し訳なく思う。

それにトマトなどの赤い野菜や果物で汚れると、血を出す前から血で汚れたように見えて処刑前後での対比が――

「ふ……ふふふ……」

「ちよつと、何笑ってるの？ 気味が悪いんだけど……」

「おつと、すまない。とにかくこれで分かっただろう？ 断頭台がこのような場所に設置されているということは、この国では頻繁に処刑が行われているということの証明に他ならない。力無き者が日夜――あッ!! ちよつとこれ持ってて!」

突然のことだった。

カレンが俺の両手に竜と虎の飴細工を掴ませ、右前方へ一直線に駆け出した。

「ん……あアッ!!」

カレンの行く手にはいかにも高貴なる者が乗ってそうな黒塗りの馬車が走っており、さらに馬車の進行先にはゆるく転がるボールとそれを拾いにいく二人の童が。

馬車の前に見えない壁ができるかボールに突風でも吹きつけるかしない限り、五秒後には童が馬に踏まれ車に轢かれるだろう。

カレンは俺が言った「未来が視えるように注意を払え」の言葉通りそれを助けに行ったのだ。

違う！ たしかに正しいが、違うのだ!!

「カレンーッ!!」

不特定多数に見られているのも構わずに肉体を酷使し、すでに子供達を庇う体勢のカレンと馬車の間に飛び込んで、

「ハアッ!」

両手に持った小さな竜と虎と、俺の瞳とをもって二頭の馬を急停止させる。具体的には『止まらなければ馬刺しにする』という明確な殺意をお馬さんに感じ取らせた。

そのおかげで背後にいるカレンと子供らには傷一つ付かなかった

が……

「くおらあ！ 我を誰と心得ておるのだあ！ 我こそは第四王子ネルク・ラトロンであるぞ!!」

威厳ある凝った衣装を身に着け、齢も三十を過ぎているはずなのに、ひどく幼い顔つきと甲高い声をした人物。

恐らく急停止した反動で頭かどこかをぶつけ、激しい怒りに駆られた第四王子その人が自己紹介と共に馬車より降り立った。

……しかしまたしても王子様と邂逅するとは、さすがカレンとしか言いようがない。まあ、今回の王子様はアルビンとは違い、見てくれも中身もあまりよろしくはないがね。

「おいお前！ 何があったのだー!」

「へ、へい……」

俺達が逃げ出さないで陛下の姿をまじまじと見ている間に、ことの顛末を御者に聞き出し。

それから今度は余裕の表情で薄ら笑いを浮かべ、こう言い放った。「つまり貴様らは我を暗殺し、あまつさえ国家転覆まで目論んだに違いない！ よって死罪!!」

全くの冤罪である。

全くの冤罪ではあるが、この言葉を聞いて呆れはするものの拍子抜けする者は周りを見回してもカレンの他にいなかった。

つまりはこの国ではこれがまかり通っているということだ。

「……ちよつと！ 何言ってるのよ!? 頭おかしいんじゃないの!!」

当然すぐにカレンが異議を立てた。

「あたしにだって王様の友達はいるけどこんなバカげたことは絶対に言わないわよ！ 第四王子だかなんだか知らないけど、バカなこと言ってるんじゃないわよ!」

カレンが猛烈な勢いでまくしたてるので、民衆に紛れたネルク陛下の護衛達が酷く殺気立つ。

それでもバカバカ言われている当の本人は、怒りを見せず余裕しゃくしゃくの表情を崩さない。

何かしらの名案を持っているようだ。

「亜人のわりに面白いことをいいよる。……ならばいいだろう、貴様らはどこへでも好きに行くがいい」

「当然よ！……ほら、一緒にいこう？ お父さんとお母さんはどこにいるの？」

カレンが二人の子供に手を差し伸べて引つ張り上げた直後、ネルクが詰めの一手を打った。

「おい、何をしている！……その二匹のガキは断頭台送りだぞ？」

「はあー!?」

「元はと言えばこやつらが馬車の前でうろろしていたのが悪いのだろうが。馬車は急には止まれないのだ！ そんなことも分らないのか!？」

「こればかりは正しい。何度正式に裁判をしようとも、子供らに非があるという判決が下るだろう。」

ただ、その場合は賠償金をいくらか払う程度が当たり前で、檻にぶち込まれたりそれこそ死罪に当たるなんてことはまずありえない。

「それともなんだ。哀れなガキ共の代わりに貴様らがあそこへ上るか？ ん？」

ネルクはニタニタと邪な笑みを浮かべて返答を待つ。

俺と並んで子供達を隠すように隣に来ていたカレンを見ると、それはまあなんとも悔しさともどかしさを上手い具合に配合した顔をしていた。

「カレン、こればかりは両方は取れないぞ」

「……わかってる」

子供達を見捨てて去るか、俺とカレンが仲良く処刑されるかの二つに一つだ。

前者を選んだ場合は酷く後悔して自己嫌悪に陥るだろうから、すぐにこの都市に滞在していた記憶すらも消し去ってあげよう。

………実はヘイワ的手段とボウリョク的手段のどちらを使っても切り抜けられるのは秘密だ。それをしてしまっただけはカレンの成長を阻害することになる。何でもかんでも人に頼るような生き方をし

てほしくない。

そして、長いようで短い潜考を終えてカレンの下した決断は、

「わかったわ！ あたしたちが代わりになるわよ！」

俺が予想していたものと一言一句違わなかった。

宣言した後でこちらを見て『アレンならどうにかできるよね？』と目で語ってきたところまでも予想の範囲内であった。

第二話 「忘れられない鋭い蹴り」

「さすれば、この者の魂に救いと安らぎのあらんことを——。……構え！」

清めの言が読み終わり、すぐに執行人が斧を振り上げて型をつくる。

後はもうそのまま振り下ろすか、斧を手放すかすれば俺の首が切断されるだろう。

「んんーッ!!」

それを見てカレンが何かを必死に叫ぼうとしている。

『アレンならどうにかできるよね?』の問いに対してニツコリと笑って返したのに、俺がいまだ無抵抗のまま何も行動を起こさなために多少不安になっているようだ。

うん、ちよつとばかり貴重な体験をさせてあげようと思ってね。

罪人として断頭台上り、普段は味わえない異様な熱気と雰囲気を感じ、斬首というものを間近で観るなんていうのは常人の人生では多くて一度あるかないかだ。それを若いうちに経験しておけば、後の人生できつと役に立つだろう。

なに、心配せずとも首を斬られる感覚までを経験させるつもりはないさ。

俺が新しい頭を生やしたらすぐに拘束を解いて、それから派手に逃げようじゃないか。

十分後には第四王子をぶん殴って、こんな国からはおさらばさ。

「——振り下ろせ！」

小さな風切り音が聞こえて重く冷たい刃がうなじに食い込んだ、まさにその瞬間だった。

俺の頭上で何かが弾けるような音が鳴り、瞬時に辺り一面が眩い光に包まれた。



目を見開いて最初に見えたものは、目を見開いたままの俺の生首だった。

首受けかごの中で生温かい血を滴らせているそれは、俺がたしかに処刑され、いつものように新品の頭を生やしたという事実を述べていた。

「きやああああーっ！」

「なんだよ！ どうなってるんだよこれえ!!」

そして何やら群衆がひどく騒がしい。

斬首という見世物による熱狂とは違う、怒声と悲鳴が飛び交うまじく恐慌や混乱と呼ばれるようなものであった。

やれやれ、またしても定命の者に恐怖を植え付けてしまったかなと申し訳なく思いつつ、関節を外し骨を折って拘束から抜け出して見るも、やはり何かがおかしい。

「目が、目がああああっ！」

「何も見えねえよおー!!」

皆一様に目を抑えたり擦ったり、先の見えない暗闇の中にいるかのように周囲に手を伸ばしている。

どうやら俺が蘇ったことに驚いているのではなく、突然視力を奪われたことについて慌てふためいているようだ。

そういえば先ほど、まさに俺の命が断たれる瞬間に原因不明の閃光が起こった気がするが、そのせいだろうか。

とにかく、だ。

誰が助けてくれたかは知らないが、無血で逃げるチャンスは今しかない。さつきとカレンを連れてこんな野蛮な国からおさらばだ。ほとぼりが冷めた後で助けてくれた何者かにお礼とお辞儀をしにくればよいのだ。

「よしカレン！ 逃げるぞー！ ……つて、あれ？」

言いながらバツと振り返ったが、そこに拘束されていたはずの少女がいない。

姿はもちろん、声も臭いも知覚できない。

(くそっ！ やられた！)

思わず歯を食いしばりつつ、いまだ視力の戻らない群衆の間をすり抜けてこの場を抜け出した。

すぐに背後から「首はあります！ ですが体がどこにもありません！」などという不思議な叫びが聞こえてきたが、それは私には関係のないことだ。

「どこだどこだどこだ」

何者かに誘拐されたカレンを探すため、薄暗く埃っぽい路地裏に入り込む。

この辺りにいるであろう動物をすぐに見つけ出さねばならないのだ。

六大神が一柱、契約と調和を司る神バランスシンオベロの聖呪に『他の生物に変化できる』というものがある。

当然のことながら俺は今も昔もその術を用いることはできない。……がしかし齢が千に達したあの日、右も左も分からないクソガキだった頃の俺に不滅の魂を押し付けたアイツがまた別の貌で現れ、そして新たに異質な力を押し付けてきやがったのだ。

「……すまない、いただきます」

台所の換気口から投げ捨てられた生ゴミを漁るネズミの尻尾を掴み上げ、それを噛み殺して飲み込んだ。

「——《我々ト同化セヨ》」

久方ぶりに強い念を籠めてその言葉を唱えると、やはり黒い靄が俺を覆うように立ち込め。

そしてそれが消えた時、世界が巨大化していた。

「チウ」

正確には巨大化ではなく、俺自身が小さくなっただけである。ずんぐりむっくりした身体と短い手足、人間とは異なった視野角、そして尻尾を自由自在に動かせる感覚。

間違はなく俺はついさつき食したネズミに成り変わった。

軽く跳躍したり壁を登ったりして体を慣らし、それから踏まれない

ように人の波を掻い潜りながら急いで断頭台まで戻った。

軽い混乱が起こった後の広場にあの時ほどの人口密度と熱気はな
く。

処刑の事後処理がほぼ完了し、ちょうど俺の首が粗布に包まれているところだった。

「しっかし、どうなってんだか。突然光ったと思ったら片方は消えて
るわ、もう片方は頭を残して消えてるわだよ。もう十年はこの仕事を
してつけど、こんなことは初めてだぜ」

「もしかしたら……ヒトじゃない、何か恐ろしいものを殺してしまっ
たのかもしれない……。呪われるかも……」

「おいやめろよ！ 寝れなくなったらどうするんだよ！」

処刑に携わった者達は皆、首を残して消えた本人がすぐそこにネズ
ミの姿でいるとは思わず、重い足取りで去っていった。

心配しなくても呪わないし枕元にも現れないさ。

俺はそのような些末事で人を呪ったりはしない。

小便をかけられた仕返しに寿命を減らす呪いを、十とそこらの子供
相手にかけるようなことはいたしません。

「チウ……」

野生動物としての神経を研ぎ澄ませ、世界の見方を変える。

人間の目では見えもしないし感じ取れもしないものが細かな粒子
となって周囲に浮かびあがってくる。

そこに誰かがいた証、残り香がしるべとなって方々へ伸びていく。

そうして老若男女入り混じった中から唯一エルフ混じりの、純粋な
人族とは異なつた臭いを見つけ出すことに成功した。

「チユー」

そのしるべを辿ってゆけばきつとカレンを見つけることができる
だろう。

そう。人の嗅覚で追えないのならば、動物の嗅覚で追えばいいだけ
のことだ。

しばらく辿り続けたが、路地へ入って通りへ出てすぐに別の路地へ
入るといふ、追手を撒くような移動をしているようだ。

それに加えやはりというべきか、カレン以外の何者かの臭いが纏わりついていた。

ここで終わりが
「チチユー……？？」

ようやく臭いの途切れる場所へ来たが、ここには火災か何かで焼け落ちたままの廃屋がいくつも立ち並び、人の気配というものは微塵たりとも感じられない。

何か特徴的な物があるとすれば、地元の人でも存在を忘れていないかと思えるほどに寂れてコケむした祠——鎚と火を象った彫り物を見るに、鍛造と建築を司る工匠神アーチカルゴを祀っている——があるだけだ。

祠の周りをぐるぐる回りながら辺りを観察していた時、足音が聞こえた。それは下、つまり地下からだった。

コツンコツンという足音が真下まで近づいてきて止まり、それから今度はコンコンという梯子か何かを登る音が聞こえ。

それから十秒と待たずして、目の前で地面が蓋のように開き、見知らぬ男の頭がひよつこりと生えた。

「……うし、誰もいねえな」

尖った顔の男は目を細めて首を回し、最後に俺と目を合わせてからひとり呟いて地上に出てきた。

……見知らぬ男とは言ったが、その臭いだけは知っている。男の臭いはまさしくカレンを誘拐した者の臭いと同じである。

だから俺は男が今開いたものを閉める前に穴の中へ飛び込んだ。

なんとか一度きりの変化を解かずに入力でき、ホッと一鳴きしつつ嗅覚と視覚とで周囲を確認する。

地上からの深さが五メートルはくだらないこの空間には壁があり道がある。

石組みの壁には等間隔で灯りが掛けられ、薄暗い中で転ばないように地面も平らにならされている。

ちなみに下水道ではないようだ。下水道は音からしてこの空間の上を流れているはずだ。

ならばこの場所は何のためにあるのだ？

「……まあ、いいか。カレンを探しながら答えを出すとしよう」
発声器官だけを人間のものに戻し、改めてカレンの跡を追う。
侵入者を惑わすために何本にも枝分かれした複雑な道を進んでいくと、寝室があり、酒蔵があり、食事処があり、風呂があり、多目的の広い空間がいくつもあつたりと、とにかく生活に必要なものはほぼ全て揃っていて。

その全てが古いながらも頑丈な造りで、そしてドゥーマンによる建築であると判断できた。

「なるほどなるほど」

それこそ儀式か何かで使う王座らしきものもあつたので、この地下空間にはかつてドゥーマンの国があつたのだろう。道理で地上にアーチカルゴを祀る祠があるわけだ。

ここが当時から秘密裏にあつたのか、それとも地上に住む人間と開放的な交流をしていたのかまでは推測できないがな。

あれやこれやと思い巡らしながらもついに、一つ扉の向こうに人の気配がするところまでやってきた。

この小さな身体では木製の扉を開けることができないので、

「そこに誰がいるのかい？ いるなら開けておくれ」

「アレン!? その声はアレンよね!？」

人の声で呼びかけるとすぐに駆け寄ってくる音が聞こえ、扉が開かれた。

もちろん扉を開けた人物は断頭台で生き別れた義理の娘であつた。

傷の一つも付いていないようでよかつたよかつた。

「誰も……いない？ 天井にも張り付いていないし……。もしかして勘違いだったのかな」

カレンは扉を開けてくまなく見まわした後、肩を落としながら席へ戻り、はああと大きな溜息を吐いた。

「アレンなら大丈夫、だよ。死んでない……。いや、死んじゃったけど、ちゃんと逃げてるはず。……でも、もしかしたら前言ってたみたいに捕まってるんじゃないかな」

どうしようどうしよう、全部あたしのせいだ。などと深刻な顔で両

耳を押さえて自分を責めているのがとても可哀そうに思えた。ので、一ネズミとして慰めてあげよう。

「チウチウ」

天井に張り付いたままの状態からテーブルの上に飛び降り、娘の前に出て一鳴き。

「……あら！ ネズミさん、こんにちは！」

最悪泣き叫ばれて叩き飛ばされるのも覚悟していたが、さっきまでゴミを漁っていたネズミを全く汚いものだとは思わず、子犬や小猫を見つけたときと同じように喜んでくれた。

「あたしと遊んでくれるの？」

「チウ」

お望みのとおりカレンの手の上で跳ねたり転がったり踊ったり逆立ちしたり、右腕を伝って右肩へ、右肩を伝って左肩から左腕へ。

中身が俺であると疑われない程度に戯れてやると、少しずつ笑顔を取り戻してくれて。

「あははっ！ なにそれーっ！」

ようやくいつもの花のような笑顔が見られるようになった。

うん、年若い少女は笑っている方が良い。特にカレンの無邪気な笑顔は鼻眉目無しに、それを見ている周りの人間すらも自然と軽やかな気持ちにさせる素晴らしいものなのだから。

そうしているうちに複数人の足音が近づいてきて、三度扉を叩かれた後にそれは開かれた。

「やあ、待たせてしまつてすまない」

この椅子とテーブルだけが置かれた何の変哲もない部屋に二人の男と一人の女が入り込んできた。

先頭で扉を開けて入ってきた男は先程も目にした、カレンをこの場所まで運んできた尖った輪郭を持つ男だ。年のころは三十を過ぎた辺りくらいで、ほぼ間違いなくテンノだろう。

カレンを一人きりで待たせたことを軽く謝りつつ二番目に入ってきたのは、こげ茶色の毛をピシつとなでつけ、モサつとした顎髭を蓄えた気品ある装いの中年男性。……なのだが、カレンとそう変わらな

いほどに背丈が低く、巖のようなゴツゴツして濃い顔をしている。

最後に入ってきて扉を閉めたのは、金髪ですらりとした体型の女だ。鋭い目つきの彼女もこの岩髭の護衛であり、腕利きのテンノであると思われる。

「はじめまして、私はトラスア・ダルボだ。気軽にトラスアと呼んでほしい」

トラスアは部下を自身の左右に立たせてカレンの対面に座った。

「……あたしはカレン」

「カレンか、良い名前だ。……おや、そのネズミは君のお友達かな？」

少しでもカレンの気をよくしようと、わざとらしくおどけた話し方で尋ねた。

「うん、さつき友達になったの」

「それは羨ましい。私もその子と友達になれるだろうか」

「トラスア様、ネズミは疫病をもたらすおそれが」

「よいよい」

不潔だから触るのはよした方がいいと提言する部下を退け、カレンの右肩に乗ったままの俺に手を伸ばしてくる。

皮膚が硬くざらざらとした手の平でしばらく撫でられたが、嫌悪感と危機感から噛みつきたいという野生の本能をなんとか抑えられた。

「ほほ、どうやら私も認めてもらえたようだ」

認めてはいないがな。

どこの馬の骨とも知らぬ男に娘を拉致監禁されて認めるわけがない。

そしてトラスアはしばらくの間、カレンの心をこじ開けるべく取り留めもない会話を弾ませ、俺の警戒した視線には気付かないままだった。

「それで、どうしてあたしを助けてくれたの？」

根は善い人物なのだろうが、さすがにカレンも胡散臭いと感じたよう。

手放しで懐くことはせず、疑問をぶつけた。

「質問に質問を返すようで悪いが、どうしてカレンは助けてくれたん

だ?」

「あたしが、助けた?」

「子供を二人助けたのだろうか? マニックからそのように聞いている」

フランスとした顔で右に立つ男を親指で指して言った。

「どうしてって……。助けなきゃいけないと思ったから」

「そう、それが答えだ。私の信条は助け合いだね」

上手い具合にカレンを納得させ、話を続ける。

「カレンのお父さんを助けることができなくて誠に申し訳ないと思っている」

「えっ。あつ、うん……」

テーブルに両手をつけて深々と頭を下げるトラスアを前にしてカレンが少しばかりたじろぐ。

「もう分かっているかもしれないけど、ここはあまり良い国じゃないんだ。非常に多くの人々が昼夜問わず苦しんでいる」

「……うん」

「私は少しでもそのような苦痛を無くそうと仲間たちと一緒に色々やっているんだ。カレン、どうか君も私の仲間になってくれないか?」

君のような心の持ち主が必要なんだ。住む家と食べ物はずべて私が用意しよう」

トラスアは立ち上がって右手を前に出し、友好の証として握手を求めた。

このままではきつとカレンはその手を握り返してしまおうだろう。

どこまでが嘘でどこまでが本当か分からない勧誘に乗ってしまうだろう。

だから俺はカレンの肩を飛び降りて伸ばされた手の前に二足で立ち塞がり、

「未成年を相手にして、保護者の同意無しに話を進められては困りますな」

ぷつくりと丸いネズミの身体できつぱりと言いつつ放った。

「なっ!?!」

「アレン!？」

カレンは少しばかり嬉しそうに驚き、トラスアは目を丸くし、トラスアの二人の護衛は驚きつつも瞬時に隠し持っていた武器を抜いて構えた。

「そう殺気立たないで。武器を収めてくださいな。ただ娘を連れ戻しに来ただけですから」

言いながらテーブルから降りて変化を解くように念じると、すぐに黒い靄が何処からともなく湧き出て俺の身を包み隠し。

それが消えた時、いつも通りの人間の身体に戻っていた。

「うん」

熱い視線を無視しつつ、両手を握って開いてを数度繰り返して特に異常がないかを確認し。

「さあカレン、一緒に行こう」

我が娘へ向き直って、右手を伸ばした。

しかし。

どういうわけか。

カレンがピクリたりとも動かない。

俺の限りなく無駄のない、人間として生きてゆく上での完成形である肉体を凝視したまま、顔を引きつらせている。

「どうした？ 引つ張ってほしいのかい？」

椅子から立たせてほしいのだなと思い、一步前に出た瞬間――

「――やだア!! こっち来ないでッ!」

「ヴっ」

カレンと初めて出会った日に受けた、決して忘れられない鋭い蹴りが我が息子に撃ち込まれた。

第三話 「内なる魅力」

内臓を酸の針で刺されたような激痛によつて軽く飛んだ意識を取り戻した時、俺の身体は肩を外さない限り抜け出せないように組み伏せられていて、そして首元には冷たい刃がピタリと突き付けられていた。

「動くな」

頭の後ろから冷徹な声が発される。任務とあれば殺人も厭わないテンノの声だ。

少しでも妙な動きをしたら即座に喉を掻っ切られるだろう。

「質問に答えろ。お前は何者だ？」

「何者って、さつきも言ったじゃないか。俺はそこにいるカレンの父親さ」

「トラスアの旦那」

マニックは俺から答えを聞き出して、その判断を主人に委ねた。

「カレン、この男は本当に君の父親で間違いないのかい？」

「……………うん」

その流れでトラスアが尋ね、しばらく溜めてからカレンは頷いた。

「これで分かっただろう？ ほら、拘束を解いてくれ」

「もう一つ質問だ。どうしてお前は生きている？」

「ああ、君は俺が処刑されるのを直接見ていたんだったね。一番納得できる答えはそうだねえ、俺も君と同じテンノだからさ。それも腕利きのね」

「……………なるほどな」

もう尋ねることも無く、トラスアからも放してやれと下されたので俺の拘束は解かれた。

それで立って見回すとカレンだけが俺から目を背けたままで、どうしてみんなその答えで納得できるの!? という疑問が横顔に表れていた。

テンノは個々人に差はあれど古今東西多種多様な技能や秘術を修

得している。

殺すことに精通した者もいれば、医者以上に生かすことと生きることが得意な者だっているのだ。

そのおかげでカレン以外の三人は、俺が殺されたのに生きている理由を幻術か何かを用いて脱出し、そもそも殺されていないと勝手に思い込んでくれたようだ。誰一人として本当に一度死んで蘇ったなどという発想には至っていない。

「ところでその、あれだな。そのままでは娘と顔を合わせられないだろうから、先に服を着た方がいい。マニック、案内を頼む」

言われるがままにマニックが扉を開けてこっちを向き、

「おい、ついてこい」

人差し指も用いて俺に告げると、すぐに背を向けて部屋を出て行った。

「では、しばし失礼」

いまだこちらを見てくれないカレンを一瞥し、優しく扉を閉めた。薄暗い地下通路をマニックの三歩後ろをついて歩く。

こちらに背を向けてはいるものの、最低限の警戒心だけは取り払っていいようだ。

「わりいな。けっこう強く押さえちまった」

「なに、慣れているさ」

それでまさか、最初に謝罪をされるとは思ってもいなかったの少し驚いた。

多少顔の輪郭が尖っていて目つきが悪いだけで、この男も根は善人なのかもしれない。

「この国へは何かの任務で来たのか？」

「いいや、ただの観光だよ。旅の途中でね」

「そうか」

おそらく俺の言葉を心の底からは信じていないだろうが、それ以上は深く詮索をしてこなかった。

「しかし何度思い出してもアレは首をバツサリやられたとしか考えられねえんだが、一体どんな術を使ったんだ？　魔法か？」

「それはちよつと教えられないかな。一子相伝の術としか」「じゃあいつか、あの子に伝授するのか?」

「いいや、娘をテンノに仕立て上げるつもりはないよ。カレンには真つ当で平穩な人生を歩んでほしいからね。本当に今はただ、見聞を広めさせるために旅をしているだけさ」

「平穩な人生を歩んでほしいなら、断頭台に乗せたりはしねえと思うけどな」

「……………それも見聞の一つになればと思っっている」

「たいした父親だぜ。ずいぶんと教育熱心なようで」

皮肉たつぷりの褒め言葉を受け取り、後ろ頭を搔いて苦笑いを浮かべる。

そうして忍ぶ者同士の他愛もない会話を重ねていくうち、俺が悪意や邪心の一つも抱いていないことを感じ取ってもらえ、ある程度は打ち解けることができた。

「……だ。適当に持つていってくれ」

いくつもの部屋と通路を通り、目的の部屋へ着いた。

入口が一つしかないこの部屋には外から運び入れたのか、それとも地下で作って設置したのかどうか分からないクローゼットが三十を超える数あり、それらが書庫の本棚のように隙間なく並べられていた。

そしてそのどれを開けてもきちんとサイズ分けされた衣類が収まっていた。

「百姓のボロに貴婦人のドレス、さらには近衛の軍服まであるときたか。一体君達は何をしようとしているんだか。演劇をするつもりではないんだろう?」

「ま、そういう話は戻ってからトラスアの旦那に聞いてくれや」



マニックが扉を三度叩き、ただいま戻りましたと扉の向こうに告げる。

すぐに入れと答えが返ってきて、扉を開けた。

「ただいまカレン、そろそろ俺と目を合わせてくれないかな」

俺が部屋に入る前からそっぽを向いたままのカレンに呼びかける。

「本当に服を着たの？」

「着たとも着たとも」

「あたし以外にだけ服を着ているように見せる魔法か何かを使っている？ 嘘だったらずっと口をきかないから」

「むむ……」

そこまで言われるといくらか不安がこみ上げてくる。

最愛の娘にずっと口をきいてもらえない未来を想像したらわずかに吐き気もこみ上げてくる。

「マニツク、俺以外には見えなくなる魔法がこの服にかけられていたりは……」

「あるわけねえだろ」

「だそうだ」

やっとこさカレンがこちらを振り向き、疑るような視線で足元から頭の先までを見上げて、それからようやく元通りの顔を取り戻してくれた。

「ただいま、カレン」

「……………おかえり」

その言葉を交わした瞬間、長らく離れ離れになっていた時間は終わりを迎えた。

断頭台で頭部と同じように引き離されてから一時間も経っていないはずだが、俺にはとても長く感じたのだ。

「では、無事に感動の再会も済ませたところで、そろそろ本題に入ろうじゃないか」

カレンが『無事』という言葉に若干の違和感を感じたのを横目で見つつ、用意された椅子に座ろうとした瞬間だった。

「お待ちください」

透き通って聴き取りやすい、比較的低音な女性の声が俺の着席を止めた。

「どうした？ コウヒ君」

「トラスア様、今一度彼の身体を調べてもよろしいでしょうか？ マニツクの雑なやり方だけでは不安ですので」

「雑で悪かったな」

「アレンさん、よろしいですか？」

「ええ、構いません」

主人と俺の兩人からの許可を得た瞬間、コウヒの眼の奥が喜びの感情で輝き、心拍数も大いに上昇した。

実は彼女は、俺が人の姿に戻ったその時からずっとうずうずしていたのだ。

それから一時たりとも俺の身体から目を離すことはなかった。

「……では、失礼します」

ささっと目の前にきて服の上から俺の肩に触れた瞬間、コウヒの心拍数がさらに二十上昇した。

無表情の面をほとんど崩さずにはいるが、多少息が荒くなった。

「ふむ……ふむ……」

まずは肩から腕を、俺がカレンにやっただとしたら嫌悪感を持たれてしまうほどにねっとり鼻息荒く触って揉んでゆく。

塗装屋が隙間なくペンキを塗っていくように、暗器の仕込ませようのない部位まで満遍なく『検査』しやうみしてゆく。

それを見たマニツクが同情の目をこちらに向けてくれた。

目の前で昂ぶる女性の話しぐりと態度からして、普段はトラスアの秘書でもしているのだろう。

それで周りからは氷の仮面などに例えられる冷静沈着でお堅い人間なはずだ。……普段は、だが。

「信じられない。まるで何百、いえ、何千年と研磨したような……」

その氷の仮面も半分以上溶けつつある中で、ますます自分一人の世界へ潜り込んでゆく。

「これこそまさに人体の極致に他ならないわ。一体、どのような鍛錬を積み重ねればここまで……。もっと、もっとしっかりと触っておかないと……」

さすがに歯止めが効かなくなり、このままでは身包みを剥がされてカレンに本格的に嫌われてしまうかもしれない。

そしてついに上着のボタンに手をかけたところでトラスアが大きく咳払いをし、暴走気味の部下を制しに入った。

「コウヒ君？ 大丈夫かね？」

「……………ハッ！ 申し訳ございませんっ！ つい検査に没頭してしまい」

「それで何か異常は？ ないなら戻りなさい」

強めの口調で諫められて半ば飛び退るように元の立ち位置に戻り、そして一呼吸で平静と氷の仮面を取り戻した。

スツと切り替えができるあたりさすがはよく訓練されたテンノであると言わざるを得まい。

しかしながら、だ。

『あの、アレン様？ もしよければ今夜、私と食事でも』

まだ諦めてはいないらしく、テンノの間でしばしば用いられる瞬きによる言葉で誘われた。

恋愛感情とは少し違うが、惚れられたということの間違いないだろう。もっと俗な言い方をするなら、身体目当てというものだ。

『あはは…………… 考えておきます』

ちなみに少し前にこの会話方法を修得したカレンも見ていて。

自身に向けられる好意には疎い子であるがこれには気付いたようで、口を半開きにして啞然とした表情をしていた。

嘘でしょ、信じられない。といった言葉が顔に浮き出ている。

『どうだカレン、これが内なる魅力だ。お父さんは脱いだらすごいだよ』

第四話 「ごくありきたりな勧誘」

「どうぞ」

「うむ、ごくろう」

トラスアに指示されて一旦部屋を出たコウヒが一分とせずに磁器のティーポットとコップを携えてきて、俺とカレンとトラスアのそれぞれに丁寧に紅茶を注いだ。

「今度こそ始めようか」

トラスアは湯気立つ紅茶を一口啜って喉を潤した後、口を開いた。

先程のアレはあくまで身体検査であり、何一つおかしいことはなかったということに触れずに進めることに。

「まずは改めて自己紹介からですな。私はトラスア・ダルボ。地上の国テレストで商いを生業としております。加えてダルボ家は国から爵位を貰い受けているため、君達が嫌いなお偉い貴族で違くない」
自虐気味の自己紹介をかましたので、それに笑って相槌を打つ。

「別に嫌いなんかじゃないよ。偉い人にも良い人がいるのは知ってるから」

「おお、それはまこと嬉しい言葉だ！ ありがとう！」

ちよつとした冗談に大真面目に返したカレンに、トラスアは大口を開けて笑って礼を申した。

「ではこちらも自己紹介を。俺はしががないテンノのアレン。今はどこにも所属していないので、娘のカレンと当てのない旅をしています。それで娘の意向に従ってこちらの国へ寄ったところ、運悪く処刑されかけてしまいましたね。なあ、カレン？」

「あたしが悪かったってば。でも、ああするしかなかったんだもん……」

だんだん声が小さくなっていくカレンをそれ以上責めはしなかった。

あの時の自身の言動を、他にやり方はなかったのかと反省しているのを見て取れたからだ。

たしかにカレンがしたことは正しかった。ただ、純粋な力量が伴っ

ていなかったただけのことである。俺一人であれば間に入って庇う以外に一瞬のうちに子供を二人連れ去って消えるか、馬車を彼方へ吹き飛ばすということもできたが、まだまだ力の足りないカレンにはその選択肢すらなかったということだ。

兎にも角にも、自己犠牲の心意気は大変素晴らしく憎らしいものであったので、不死者ポイントを贈呈。

「とまあ、気にせず話を進めてください」

カレンの様子を見て何も口を出さずにいたトラスアに次に進むよう促す。

「ああ、そうですね。……では、単刀直入に言うでしょう」

トラスアはそこでもう一度茶を啜り、力の籠った眼差しをもって訴えた。

「——我々は革命を起こすつもりでいる」

それは現存する体制を根本的に覆し、住む世界を己が良いと思えるものに変える行為。

政治に、経済に、社会に、新たな光を注ぎ込む。

そして多くの場合、流血の上にそれは成り立つ。

命を賭してでも革めるのだ。

その口はたしかに『革命』の言葉を紡いだ。

「革命、ねえ。よくもまあ、どこの馬の骨とも知らぬ我々に話せたものですね。あなたの叛意を密告しないとは限らないのに」

「君達親子は名も知らぬ子供を二人助けた、それも自らを犠牲にして。そのような善良なる心の持ち主が一人でも多く必要なのです。それに、熟達したテンノは嘘を簡単に見抜けると聞いたことがあるゆえ」
ならばもう全て曝け出すほかあるまい、と密林のような顎髭をさすりながら述べた。

「ねえアレン、カクメイって?」

横にいるカレンが袖を引っ張ってきて、単純な疑問をぶつけてきた。

「きつとカレンも革命を知っていると思うよ。童話や御伽話の中で一度は見聞きしたことがあるはずだ」

「そうなの?」

「主人公や国民をいじめる悪い王様が出てくるお話があるだろう? そういう話は大抵、主人公と仲間達が協力して王様を懲らしめて、最後は仲直りするか王様をどこか遠いところへ追い出す、なんて流れのはずだ。それが革命だよ」

「あー、なるほどね」

まあ、俺の知る現実の革命は八割方王様の首を斬るか吊るすかして終わるがな。後の二割は流刑か一生責め苦に遭わされるからだ。

仲直りなんて甘つちよろい話はまずありえない。

「それで、予定日はいつ頃に?」

未定、それか一年後などと言われたら即刻断ろう。

こんな物騒な国に一月以上留まるつもりはない。

そもそもまだ仲間入りと決めただけでもないのだから。

「ちようど一月後が建国記念日で盛大な祭りがあり、その日を予定しております。つまりはこの時期に君達が現れたのも何かの縁でしょうな。それこそアーチカルゴ神が我々のために遣わしてくれたのではないかと信じている」

「はは、ぐ冗談を」

カレンはともかく俺は絶対にありえない。

……いや、カレンもありえない。この子は神の遣いなどというものに収まる器ではない。

「だからどうか、少しの間で構わない。我々に力を貸してくれないだろうか? 無論、タダでは言いません。君達親子を我が家で正式に雇い、革命が成功した暁には特別報酬も支払います。こう言っただけなんだが、金に困っているのならいくらでも力になりますよぞ」

「左様でござるか」

正直金に困ってはいない。

カレンと出会った日に金貸しの親分から頂戴した貴金属や宝石類を全て売れば、五年は遊んで暮らせるほどの大金が手に入るからだ。

……まあ、それらは今現在路地裏のゴミ溜めに埋もれているのだが。

「親心に従うなら、見ず知らずの土地で娘を荒事に巻き込みたいわけがなく、それでいて若いこの時期はとにかく経験をさせておきたくもある」

革命や仇討ちを手助けして欲しいというのは、幾度となく受けてきたごくありきたりな勧誘だ。

これが一人旅の最中であれば二つ返事で了承し、ちよちよいと革命のお手伝いをして報酬を受け取り去ったことだろう。

だがしかし、今は二人旅の最中だ。それも責任を持って他人の子供を預かっているのだ。

俺の一存で決めることはできない。

「だからカレン、協力するかどうかは君が決め」——やる！　あたしは協力するよ！」

まだ言い終わらないうちにカレンは了承した。

聞かずとも分かっていたことではあるが。

「おお！　それは本当かね!？」

「ねえトラスア、カクメイを成功させればみんな笑顔になれるんではない？」

「そうだとも。カレンがこの国で見てきたような悲しい顔をする人はきつといなくなる」

それは素晴らしいことだわ！　と、トラスアの言葉を鵜呑みにしたカレンがニカつと歯を出して笑う。

そりやあたしかに悲しい顔をする人はいなくなるだろうな。革命が起ると悲しむ人間は残らず消せばいいだけの話なのだから。

「アレンさんはどうですか？」

「ええ、やりますよ。やるしかないでしょう。……ですが、娘の身の安全は保障してもらいますよ？　決して危険な目に遭わせたりは」

「もちろんですとも。ではさつそく、コウヒ君」

言われてコウヒがテーブルの上に出したのは、一本のペンと一枚の契約書だった。

そこには短期間トラスアの元で働きますとの旨が書かれていた。

職務内容、日当はいくら、休日はいつか、保障の有無なども書かれ

ている。

「こちらにサインを」

「契約神の聖呪がかけられていたりはないでしょうね」

「まさか。単なる形式上のものですよ。なんの強制力も持ち合わせてはいないため、嫌になっただらいつ逃げてもらっても構いませんぞ」

「ここに名前を書けばいいのね!？」

真つ先にカレンがペンを取り『カレン・メーテウス』と、半分は偽名である自身の名を書いた。

一息ついて俺もペンを取り、カレンの下に名を記し。さらにその下に小さく「カレンの身に何かあればこの国の人間を半分減らす」と念を籠めて記入した。

「では、ほんのわずかな間ですが親子ともども世直しのお手伝いをさせていただきますしよう」

「うむ、よろしく頼む!」

立ち上がってガツチリと握手を交わし、互いの眼に誓い合う。

そして再度座りなおして、時間の許す限り話を聞き出そうとしたその時であった。

「——た、大変だア!」

ドタドタという忙しない足音が近づいてきたと思ったらすぐにノックもされずに扉が開かれ、見知らぬ男が血相を変えて飛び込んできた。

その男は一息もつかずに必死の形相で言葉を続ける。

「緊急事態だマニック! とにかく助けに来てくれ! それとコウヒさんはトラスア様を連れて地上の安全な場所へ!」

その言葉を聞くや否やコウヒがトラスアを連れて別の扉から出て行く。

「おい新入り、さっそく仕事だぜ」

「了解。カレンは危ないからトラスア様について……」

その場で足踏みなんかしてすでにやる気満々でいるカレンを見て、安全な方へ行けと言うだけ時間の無駄だと思ひ諦めた。

「……俺の後ろからは出るんじゃないぞ?」

「わかった！」

「おい、早くいくぞ！ こっちだ！」

両腕を横に広げた程度の幅しかない通路を駆ける。

報せにきた男もマニック同様テンノであり、この地下通路の構造を熟知しているため流水のように進んでいく。

俺は二人の背後をピツタリと追従していく。

そしてカレンはいえば、不慣れな場所でテンノの速度についてゆくことなどできず、明らかに遅れていた。

「カレン、乗れ」

「……うん」

「しつかり掴まってるよ。舌を噛まないように気を付けるんだぞ」

さすがに迷宮のような地下通路で置いてけぼりにされて泣かれてしまつては胸が痛いので、今だけは背負って連れて行くことに。

それを見てマニックが呆れたような苦笑いをする。

「おいおい、本当に同じ人間かよ。どうしてそれでついてこれんだ」

「これはとある地方に伝わる運び屋の走法でね。ある程度の重りを背負えばむしろ速度が増すんだ。ちなみにカレンは人の何倍も食べる子なのだが、不思議と標準的な重さでね」

「せ、成長期なの！ アレンのバカ！」

「ハハッ」

俺とカレンのやりとりを聞いて、一月の間俺の先輩となる尖り顔の角刈り男が目を細めて笑う。

一見すると彼は気の良い兄ちゃんではないかと思えるが、れっきとした暗部者であり、少なく見積もっても任務のために三人は殺しているはずの血生臭い人間だ。

「楽しくやっているとこ悪いが、そろそろだぞ。気を引き締めておけよ、マニック」

「……おう」

同僚に軽くたしなめられて即座にマニックの眼に力が入る。

いつ命を捨てても構わないという覚悟の心に一呼吸で切り替える

あたり、腕利きであることは間違いない。

「んで、何があつたんだ？ 敵襲か？」

「信じられないかもしれないが、遺物が動き出した」

「……………マジかよ。というか動くのかよアレ」

マニツクの反応からして、地下でこそそこそやってるのがバレて襲撃されることなんかよりもよほど想定外の出来事であるようだ。

遺物とやらが一体何であるかは新入りである俺とカレンには知る由もない……………が、ドゥーマンの創りし地下王国に眠る遺物となると、やはりアレだろうか。

「ねえ、遺物って何なの？ 何が動いてるの？」

「まあ、言葉で説明するよりは見た方が早い。それにもうついたぞ。ここだ」

やけに長く急な階段を下っている途中でカレンが尋ね、それから間もなく目的の場所へ到着した。

マニツクが階段を下り終えた先にある両開きの扉を開け、そこから地上に出たのかと思えるほどに強めの光が溢れてくる。

「……………うおっ、本当に動いてら」

一足先に入って確認したマニツクが呟いた。

俺とカレンも目を擦りながら扉の先へ行くと、そこには直方体の空間があつた。それも歩いて一周するのに五分はかかつてしまいそうな相間に広いものが。

天井までの高さも軽く五メートルは超えており、それを支えるように計算された極太の円柱が何本も生やさされている。

それでも多くの人間はこの空間にいたら崩落して生き埋めにならないかと不安に思うことだろう。

「アレん！ 何あの大きいの！」

「……………ああ、あれはだね」

カレンが指差す先、この空間の中央には頭頂が天井近い巨大なものが存在していた。

何百年もの間座していた台座を離れて歩き回っているそれは人型で、岩のような体つきをしている。ようなとは言うが、実際に半分以

上は岩や粘土で構成されているはずだ。

創り主亡き今も自身に施された命令を遂行するため、赤く光る一つ目をぎよろぎよろと回し、ズシンズシンと地を踏みならして徘徊する。

そう、あれこそはドゥーマンが丹精込めて作り上げた自動人形。

「ゴーレムだよ」

第五話 「悪辣なる不死者」

——ドゥーマン、地域によってはドワーフとも呼ばれる種族が存在する。

それは遙か昔の神話の時代、俺が生まれた日よりも二千年以上前のことだ。

大陸の中心に人族が集まって国を作り始め、未開の土地を開拓し文明を拡大していたころ、遅れて六大神が一柱工匠神アーチカルゴによつてドゥーマンは創造された。

神話では神々に武器を作り神殿を建てたりするアーチカルゴの特性を持つ彼らは、皆一様に背が低く筋肉質であり、そして手先が器用な職人である。

しばしばドゥーマンは鉱山に籠りきりで、ツルハシを振るしか能のない種族だというイメージが浸透しているが、それは大きな誤りだ。

ドゥーマンの特性の一つに、道具に命を吹き込むことができるというものがある。

アーチカルゴに授けられたその力を用いて錆びない剣を作り、振動するツルハシを作り、そのうちにゴーレムと呼ばれる自動人形を作り上げて自身らの仕事を手伝わせた。

加えて高度な数学の知識も持ち合わせており、それらを用いてより効率的で高性能なゴーレムも作られるようになっていった。

俺の知る限り高度に発展したドゥーマンの国家では、採掘や農作業などの単純労働はほぼ全てゴーレムに任せきりなのだ。そして好きな時に家を建て、好きな時に鉄を打ち、好きな時に喧嘩をし、常に酒を飲んでいるといふ、酷く自堕落な生活を送っているものだ。

だから彼らが採掘中毒者であるというのは、全く的外れな思い込みである。むしろ鉱山ではなく家に引き籠つて好きな事ばかりしている労働嫌いな怠け者種族と言つても差し支えない。

「うわっ！ こっちに来るよアレン！」

どういうわけか俺達の方へ向かってくるゴーレムもほぼ間違いないくドゥーマンが作り上げたものである。

「カレン、ちょっとアレを止めてくるから隠れていなさい」

「うん、わかった」

「いい子だ。よし、いくぞマニック！」

「……やるしかねえか」

背中から下ろしたカレンを案内人の彼に任せ、ゴーレムを挟むようにマニックと散開する。

するとゴーレムは俺を目で追い、体の正面をこちらに向けて人の十数倍もの歩幅で歩いてくる。

なので一応、この場で止まってそれを待つことに。

「おい！ 何してんだ!?!」

「いや、もしかしたら俺と仲良くなりたくないんじゃないかと思ってね」

発声器官を持たず感情もうかがい知れないそれは俺の眼の前で止まった。

魔法の力で赤く光る一つ目がじっと睨んでくる。

「どうも、はじめまして」

俺が挨拶とおじぎをして握手をせんと見上げて右手を差し出すと、あちらも肥満児ほどの大きさの右手を差し出してきて、

「ぐえっ」

目障りな虫を弾くかのように俺を叩き飛ばした。

それでけっこうな速さで緩い弧を描いて飛ぶ俺を、地面に落ちる前に硬い円柱が優しく受け止めてくれた。

合わせてテンノ的受け身をとったおかげで骨が八本折れて臍臓が破裂しただけですんだ。

「おい!! 何やってんだ!! 生きてんのか!?!」

「アレンーっ!!」

「おー、いてて………あー、大丈夫だからー！ 心配してくれてありがとうーっ！」

それらをバレないように治し、口から血が噴き出さないように飲み込み、あくまで無傷であると手を振ってお答えする。

「避けるー」

立ち上がった時にはすぐそこにゴーレムがきていて、今度は直線的

な握り拳が頭を砕かんと迫ってくる。

「おおっ」

岩のような拳は左耳のすぐ側を通り過ぎて空気を押し出した。

拳速はそこまで速くはないものの、やはり拳の表面積が大きいために慣れていないと避けるのは困難であろう。

そしてさすがにこれほどまでに巨大だと、筋力を限界まで行使しても受け止めるのもまた困難である。

だからひたすらに避けて避けて、避け続ける。

「マニツク！ こいつが俺に夢中な間になんとかしてくれ！」

少し離れた柱の裏から様子見しているマニツクに支援を求める。

「わーっただよー！ あとどれくらい耐えれそうだ!?!」

「そう長くは持たん、次に一発でも当たればおしまいだ！」

もちろんそんなことはない。

やろうと思えばゴーレムを粉々にすることもできるし、飢えて死ぬまで避け続けることだって不可能ではない。だが、それをやっては後々面倒なことになる。

あくまで今は少々腕の良い、世界全体で見ればそこまで飛び抜けてはいないいちテンノを演じきる必要があるのだ。

だけでなく、テンノ養成機関の永世名誉首長として現代テンノの力のほどを見届ける必要もある。

「任せろ！」

俺がいた場所の地面に巨大な拳が突き刺さり、岩石人形のバランスがわずかに崩れて隙が出来た。

その隙をマニツクは見逃さず、ゴーレムの背後から肩に飛びついて小さな鎚を手に取り、瞬時に青緑に錆びついた釘を二本打ち込んだ。

その姿はまるで熟練したとび職人のように思える。

「アレン！ 離れろ！」

マニツクは釘を打つとすぐに飛び降りて距離を取り、俺に向けて叫んだ。

警告に従って大きく後ろへ飛び退るとすぐに、ゴーレムの右肩から聞きなれた音が生じた――

——ドドンツ!

俺の親指を最大威力で爆発させた時と同程度の衝撃が空気が揺らした。

マニックが打ち込んだ釘が連続して爆発し、ゴーレムの右肩が抉れ、成人男性の背丈よりも長く妊婦の腹回りよりも太い腕が千切れ落ちた。

「ふうー、まずは一本つと。あと三回これをやるから頼むぞ新入りー」なるほど。これをあと三度繰り返して四肢をもぎ取ってしまおうと考えているのか。

しかし、はたしてそう上手くいくだろうか。

いやなにも彼の技量が足りないだとか頼りないと思っっているわけではない。

マニックは自身の持てる限りの力を用い、実にいい仕事をしてくれている。

「ん……。おい、まさか……」

道具であるゴーレムには様々な種類があり、当然質の良し悪しもある。

何十何百年と手入れをせずとも働き続けるものもあれば、たった一月で故障してしまうものもある。

一度与えた命令が時間をかけて歪み、誤作動を起こす場合だってある。

最初期のゴーレムは製作費と収益が見合わないポンコツであったと聞く。

それでも古代のドゥーマン達はどうしても楽をしたいがために改良を重ね、高価で力ある鉱物を用いて核を作り、そこに命令を書き込み、力を注ぎこむ技術を編み出してしまった。

核持ちのゴーレムは刻まれた命令を忘れることはなく、体が壊れたとしても自力で治すつまり再生する。

「嘘だろ!? 腕が生えやがったー!」

ゴーレムは千切れ落ちた腕を吸収し、それでも足りない量は地面から吸収して元の姿を取り戻した。

遠い昔にこのゴーレムを作った職人もまたいい仕事をしており、マニツクの策は画餅に帰したのだ。

「この釘結構高えんだぞー！ 金返せ！」

マニツクは再度柱の裏へ隠れ、そこから悔しそうに文句を垂れる。そして尚もゴーレムは自身を傷付けたマニツクではなく、俺だけを標的にして動き続ける。

「こいつは核有りだ！ 核を壊すか取り出さない限りは止まらない！」

「その核つてのはどこにあんだよ?！」

「頭か心臓か下腹部のどこかにあるはずだ！」

目を瞑ってでも避けられる拳をあえてすれすれで避けながら、知恵を授けてゆく。

「クソツ、三択かよ！」

「頭から体が生えれば頭に核が、胸から四肢が生えれば心臓に核がある！ つまり三つ同時に切り分けて、再生し始めた部位を破壊すれば一択だ！」

「できるわけねえだろ！」

そして再度、ゴーレムの間を見計らってマニツクが飛びついた。

今度は背部の中心に、計五本もの釘を打ち込んだ。

「当たってくれ当たってくれ当たってくれ！ 頼む神様！」

釘を打ち込んでからすぐに離れ、マニツクはうわごとのように繰り返し念じて唱える。

あの骨董品染みた釘もまたドゥーマンが作った道具で、家屋の取り壊しや採掘、井戸や泉を掘り当てるのに用いられていたのを大昔に見たことがある。

千年前にはもうほとんど使われておらず生産もされていなかったはずなので、現在残っているものは一本につき銀貨五枚はくだらないんじゃないだろうか。

釘一本で安酒を十本は買えるのだ。それは神に祈りたくもなる。

そして、その祈りが聞き届けられたのかは定かではないが――

――ドドドドドンッ!!

日常生活ではまず見ることも聞くこともない連続した爆発によって、ゴーレムの分厚い胸に大きな風穴が空けられ、

「……おっ」

砂煙が収まっていく様を棒立ちで眺めていたら、何か球のようなものがコロコロと転がってきて俺のつま先に当たった。

海の深みにも似た色で半透明のそれを拾い上げると同時に、ゴーレムの眼から光が消え、保っていた形を忘れて崩れ落ちた。

「やった、のか……？」

マニツクが柱の陰から顔だけを出して半信半疑で睨視する。

関節部の結合が外れてただの岩と粘土に分かれたそれは、どれほど待とうが人型を形成し立ち上がることはなかった。

「ウオオオオツ!! やった! やったぞオオオオオツ!!」

しかと倒したことを確信したマニツクが真っ先に両の拳を握りしめ、雄叫びをあげた。

それからカレンと連絡係の彼も大手を振りながら走ってきて。

さらに全方位から、この空間にいくつもある扉の隙間や物陰、さらには天井に張り付いてじつと見守っていた者達が姿を現して駆け寄って来た。

「うええっ!?!」

彼らが最初からいたことを全く察知できずに驚き焦るカレンを追い越し、俺とマニツクを大勢で囲んでもみくちやにし、宙へ放り投げた。

彼らの気の済むまで俺もマニツクも胴上げをされ、軽く三十回は宙を舞ってから地に下ろされた。

「やるじゃねえかマニツク!」

「見直したわよ!」

「お前すげえよ! 顔尖ってるのに!」

「顔尖ってるくせによくやれたな! ちびらなかつたか!」

「チビってねえよ! それと顔が尖ってるのは関係ねえだろ!」

まず先に全員、数にして優に百人を超える人々がマニツクを囲んで称賛の言葉をかけた。……やはり顔が尖っているのが彼の魅力のよ

うだ。

一通りそれが終わると、集団はまるで一つの生き物であるかのように蠢いて今度は俺を取り囲んだ。

「あなた凄いわね！」

「すげえ度胸してんな！ どうやったらあんなのをずっと避けられるんだ?！」

「私に手取り足取り教えてくれないかしら?！」

「アンタみたいな凄腕が仲間になってくれて嬉ションしそうだ！」

「正直な話、ここその後ろから攻撃してた尖り顔よりずっといい仕事をしてくれてたぜ！」

「おい！ 誰だ今俺の悪口言った奴！ その口に釘打ち込んでやっから出てこい！」

次々と浴びせられるお褒めの言葉を聞いて、いつの間にか俺の真横に立っていたカレンがまるで自分の手柄のように自慢げな顔をする。女の子らしくない腕組みをしながら「あたしが育てたのよ」とでも言いたげな顔だ。

そうしてマニックがされた時間の倍以上ちやほやされていると、マニックがパンパンと大きく手を打ち鳴らして声をあげた。

「お前らまだ休憩の時間じゃねえだろ！ 各自持ち場に戻れ！ 散れ、散れー！ ……それとラトー、お前はそのゴーレムの後片付けをしとけよ」

「はあ!? 何で俺が！」

「嫌ならその締まりのワリイ口に釘を打ち込んでやってもいいんだぞ」

一応は指導する立場にあるマニックの命令を受けて「やっぱ見損なったわ」「褒めて損した」「ちびったくせによ」などと皆一様にぶつくさ言いながら散ってゆく。

ついでに俺を褒めつつマニックを貶した彼には、総重量が五トンはくだらないゴーレムの亡骸の清掃が言いつけられた。

案外大人げない部分もあるものだ。

「いきなり囲んじまってすまねえな。アレが俺達流の歓迎なんだ。悪

く思わないでくれ」

各々が扉を開けて出て行ったり、この広い空間でゴーレムが動き出す前に行っていた訓練が再開されたのを確認してから尖り顔をこちらに向けた。

「なに、慣れているさ。ところで怪我人はいないのか？」

「おーいレクスー、怪我人はいねえのかー!？」

自身の訓練に戻っていた連絡役の彼、レクスに問いが投げつけられた。

それに対して、ゴーレムが動き出して皆即座に避難したから怪我人は一人もいないとの答えが返ってきた。

「それにあのゴーレム、もしかしたらだけど誰も襲う気はなかったよ
うな……。いや、新入りが襲われているからそれはないか。勘違い
だ、気にしないでくれー!」

……。どうか、どうか勘違いでありますように。

「だそうだ。他に何か気がかりはあるか？」

「いや、他は何も。……。ああそうだな、これをあげるからこの地下王国
の成り立ちを教えてほしい。いつ頃どうやって出来たのかだけでも
構わない」

青藍の核を軽く放り投げながら頼んだ。

マニツクは驚きの表情を浮かべながらもしつかりと核を掴み取っ
た。

「本当にいいのかよ!? あれはどう見てもお前の手柄だろ。正直俺一
人じゃ何もできなかった。それにお前、手を抜いて全く力を出して
……」

「おっと、それ以上は言わなくていい。なに、今のところ金には困って
いなくてね。酒と釘代の足しにでもしてくれ」

ふらふらと歩いて訓練の様子を見学しつつ、なんてことはない
と伝える。

俺が高価な核に執着心のかけらも持ち合わせていないことを感じ
取ったマニツクは、それ以上何も言わずに核を懐にしまい、それから
語り始めた。

「ゴーレムに詳しいくらいだからすでに分かっているかもしれないが、この地下王国は俺達が作ったわけじゃねえ。この土地へ逃げてきたドゥーマン達を作ったものだ」

「逃げてきた？」

「そう、逃げてきた。元々は西にドゥーマンの大国があつてそこで暮らしていたらしいんだが、千年ほど昔に突如として恐ろしい征服者が攻め込んできてな。そいつと三日三晩戦った末に結局は攻め落とされたんだとよ。しかもそいつはエルフでも魔人でもない、ただの一人の人族なんだと。信じられるか？」

そんなことが本当にあつたのかよと、首を小さく横に振る。

とはいえ、よかつたよかつた。

ここ二千年はドゥーマンとやり合つた覚えはないので、俺ではない何者かの仕業だろう。

しかしそのような猛者が本当にいたとして、一体誰なのか。

俺の知人・友人でないことを祈るばかりである。

「んで、完全敗北したドゥーマンの生き残りは国を捨てていくつもの氏族に別れ。その内の一派がこの国へやってきて、地下に王国を再建したんだ。今は地下にこんな空間が存在していることすら知らない人間がほとんどだが、昔は地上の国とも仲良くやってたらしいぜ。……ああ、思い出した。征服者の名前はたしか、アレン・メーテウスだ」

「ブフウッ！」

さも当たり前のようにマニツクの口から出た名前を聞いて、吹き出さずにはいられなかった。

……いやほんと、全く記憶にないんですが。

「……そういや、お前もそんな名前だったな」

「あーハイハイ、アレン・メーテウスさんね。よく言われるんだよねーそれ。ちよつと名前が同じだからってさー、ほんといい迷惑だよハハ。……な、カレン？」

「う、うん。そうそう！　メーワクメーワク！」

「ま、そりゃそうだよな」

カレンに素早く目配せをして、どうにか上手く誤魔化すことができた。

「もしもお前がその征服者だったら今何歳だよ？ 人間じゃねえだろ？ って話になるしな。釘を打ち込んで頭を吹き飛ばさなきゃならねえもんな。それにそんな化け物が大人しく断頭台に連れて行かれるわけもねえわな」

「アハハ……」

今ここで頭を吹き飛ばされては困るので、なるべくマニツクの顔を見ないようにしてゴーレムが乗っていた台座に近づく。

そして台座の周りをぐるっと一周して、千年前に彫られたであろう文字列を見つけた。

それは古いドゥーマンの言葉で、たしかにこう書かれていた。

『悪辣なる不死者アレン・メーテウス来たる日に、必ずや我らを守護するであろう』

一度目を瞑ったまま深呼吸をし、そうしてもう一度刻まれている言葉が一言一句変わっていないことを確認したのち、黙ってその部分を抉り取った。

器物損壊罪？ 遺産への冒瀆？

そんなもの知ったことか。

後世の人間が見て気分を害すような言葉を彫ってあるのが悪い。

「……ねえー、パパ？」

「うっ」

悪い顔をしたカレンが詰め寄ってきて、俺の耳元でささやいた。

それはまるで袋小路にネズミを追い詰めた猫が勝利を確信し、楽に殺してあげるからと降伏を呼び掛けたような甘い声音だった。

実に悔しいが、俺に逃げ場はない。完敗だ。

「蜂蜜。パン、三十個でいいなっ。」

「やったあー！」

第六話 「次やったらゼツエンだから」

勝利をもぎ取ったカレンがご機嫌に口ずさむ。

「はっちみつつパンっ！ はっちみつつパンっ！ はっちみつつパンが三十個！」

過去の俺がしてしまったことのせいで、今を生きる俺が口止め料を払わなければならなくなった。

一体俺が何をしたというんだ。

ドゥーマンの国に攻め入った記憶などかけらたりともないのだ。

そのような大きな事をしでかしてどうして覚えていない。

「アレン、約束だからね!? 忘れないでよね!？」

「忘れたくても忘れられないよ」

「んふふっ！」

若者というのはいっだって気楽で羨ましい。

過去のことで悩む必要も怯える必要もない。輝かしい未来だけを望んでいればよいのだから。

とはいえよくも、父親に恐喝まがいのことをしてそのような笑顔でいられるものだ。

しばらくの間ゴーレムが乗っていた台座に腰を掛けて、各々が革命に向けて訓練する様子をぼーっと眺めて。

軽口の彼が残骸の一割程度を片付け終わったところでマニツクが戻ってきた。

「大型新人のお二人さん、そろそろ案内してやるよ」

この地下王国の案内をしてくれるようだ。

「いくか、カレン」

「うん！」

「新人さん、行ってらっしゃーい！ リーダー、ごゆっくりー！」

「おうラトー。お前それ、誰にも手伝ってもらうんじゃないぞ。全部一人で終わらせろよな」

「げえっ」

笑顔で見送ってくれた彼には、しつかりと言葉で釘が刺された。

哀れ、ラトー。頑張れ、ラトー。強く生きろ、ラトー。



マニツクの後について次から次へと用途別に分かれた施設に顔を出していく。

「おーい、新入りを連れてきたぞー！」

マニツクが呼びかけながら次なる扉が開けられると、真っ先に魚醬と油の香ばしい匂いが鼻をついた。

中々広い空間には丸椅子と長方形のテーブルがいくつも並べられていて、奥には厨房があるので食堂で間違いない。

「あらあー！ 可愛いお嬢ちゃんだこと！」

食堂の隅のテーブルでだべっていた老若問わずの女性陣が、俺とカレンを見てすぐに駆け寄ってきた。

新顔が来たからというのもあるが、皆とても明るく、活気に溢れた目をしている。

「めんこいねえ。出来立てじゃなくて悪いけど、お食べお食べ。お兄さんも」

「これはどうも」

「おいしーっ！」

そしてその内の一人が皿を持ってきて、有無を言わさず俺とカレンに菓子を掴ませた。

平たい揚げ餅に魚醬を塗った、噛むとサクサクと音の鳴るものだ。

「やいマニツク、この子らを拐かしてきたんじゃないだろうね?！」

「そうだよ！ これ以上罪を重ねたら飯を作ってやらないよ！」

「だから新入りって言ってるだろ！ おいアレン、なんとか言ってるれ！」

「ええ、そうなんです……。実は彼に殺されかけて脅されて親子ともども無理矢理……」

「おい！ 本当だけと言いつてもんがあんだろ！ いつ、いででッ！」

少しぼつちやりとした貫禄のあるおば様に脛を蹴られ古株のばあ様に耳を引っ張られ、一目でマニツクの立場というものを理解できた。

この光景をラトロー君にも見せてあげたい。

「まあ、無理矢理というのは半分冗談です。革命を終えるまでの間ですがお世話になります、アレンです。よろしくお願いします。こちらは娘のカレン」

「よろしくお願いしますっ!」

「よくできた娘さんねえ、こちらこそよろしくお願いするわ! ……それでマニツク! アンタも同じくらいの歳なんだから、女の一人も作りなさいよ! コウヒちゃんとまだ付き合っていないの!」

「俺のことはいいだろ! それにあいつとはそんな関係じゃねえよ! ただの仕事仲間だ! ……おい! 違いからな! コウヒに変なこと言うんじゃない?」

俺とカレンからの優しく生温かい目線に気付いたマニツクが声を荒げる。

激しく否定すればするほど真であると自白しているようなものだ。

「ああ! もう次いくぞ次! こんなクソババア共の巣窟からはおさらばだ!」

「なんですつてえ!」

「コウヒちゃんに言いつけてやるわよ!」

たまらずマニツクは後ろから何か言われても足を止めずにさっさと食堂を出て行った。

俺はおば様方に一礼してマニツクを追うように出て行き、それから少し遅れて両手に揚げ餅を三枚ずつ持ったカレンが隣にきた。

「とにかくどうしようもなく腹が減ったらあそこだ。いつも必ず誰かしらいて何かしら食わせてくれるからよ」

「それはありがたい。それで一応言っておくがカレン、いつでもいくらでも食べてよいというわけではないからな?」

「……………わ、わかってるって!」

カレンは特に歯向かうこともなく、比較的素直に言いつけを受け入

れてくれた。

ではどうしても寂しそうな瞳をしているのか、答えるまでの大きな溜めはなんだったのかとは聞かないであげよう。

今後指定された場所が分からず困ることがないように、余すことなくほぼ全ての施設を見てゆくと。

工房があり、書庫に劇場に病院に埋葬所に、現在では使われておらず物置と化した市場と銀行などもあり。ここには確かに町と呼べる程度の小規模ながらも国があったことを再確認できた。

なんでも最盛期には、この地下王国に三千人ものドゥーマンが住んでいたという。

「すげーすげーすげー」

俺のちよつとした技や魔法を見た時のようにカレンが手を叩いて驚き喜ぶ。

だが、この程度では俺を驚かすことはできないぞ。

このような住まいと施設は五千年の半生でいくつも見てきたし、地下で家畜を養い野菜を栽培して自給自足をこなしていた国に訪れたことだってある。そこには生まれてから一度も空を見たことのない人々だっていたのだ。

地上のどの国よりも栄えていた地下帝国に住んだことだってある。

そういった国々と比べると、ここはまだまだ中の上で停滞していると言わざるを得ない。

そして、特に行き詰まることなく人の出入りのある全てに顔を出し終えた。

「ま、こんくらいで十分だろ。また何かあつたら遠慮せずに聞いてくれよ。とにかく俺の仕事はここまでだ——」

マニツクが言い終えたちようどその時だ。天井の一部が丸い蓋のようにパカリと開いた。

そこから生ぬるい外気が入り込んでくる。

「メーテウスさん、こちらです」

さらにマニツクの想い人である女性の頭が氷柱のように生え出た。



「よっ、と」

マニツクが見ている手前、コウヒが差し出した手を遠慮して自力で地上へ這い出た。

「掴まれカレン」

「んーっ！」

それからカレンを引っ張り出した。

あれだけ栄養を摂っているのに軽いなのなの。

「あ！ これって何の神様なの？」

「これはアーチカルゴといって、家を作るのが上手い神様だよ」

地下から出たこの場所は四隅に灯のかけられた小屋の中で、中央にはぽつんと子供の背丈ほどの石像が置かれていた。

それは右手に鎚を握り、左手で火を踊らせ、もっさりといげを蓄えた筋骨隆々の神像である。

他の神々が基本若く瑞々しい姿で描写されるのに対して、一人だけ中年の容顔で描かれることが多い哀れな神である。この像も例外ではなく、しつかりと皺まで刻まれていた。

「ご苦労様です、マニツク」

「おう」

俺とカレンが這い出た後、コウヒが地下王国への秘密の蓋を閉じた。

下にいる彼をねぎらう声音と表情には一切のブレがならず。仲間以上の感情は持ち合わせていないか、上手く心を閉じているだけのどちらかはまだ断定できない。

(……ねえ、わかった?)

(まだ分からないなあ)

いつものように俺が他人の心を読み取ったと考えたカレンが期待を膨らませて耳打ちしてくるが、しばらくは応えられそうにない。

感情の制御に長けたテンノの心を読むのは骨が折れるのだ。

「どうかされましたか？」

「な、なんでもないよ！」

「では、こちらへ」

ギィと音の鳴る古びた木製のドアを開けて先に出て行き、俺とカレンもすぐ後に続いて野外へ出た。

「まぶしっ………わぁー！」

しばらく薄暗い地下にいたせいでカレンがギョツと目を瞑る。

そしてゆっくりと瞼を上げて見えた景色にときめいた。

「大きな家！　大きな庭！　すごいすっごいっ！」

「ああ」

カレンは見たままのものを思ったままに声に出して喜び跳ねる。

ついでに反応の薄い俺の右腕を掴んでぶんぶんと振ってくる。

門から玄関までの道がやけに長く、これといった派手さはないものの職人の手によって繊細に手入れのされた庭園に挟まれている。池付き社付きのしっとりとしたお庭だ。

そして道の奥に佇む建築物は、二階中央に広いバルコニーを持つ由緒正しき貴族のお屋敷である。

「そうだねえ、すごいねえ」

まだ俺が百歳未満の頃ならカレンのように嬉々として飛び跳ねていただろうが、今となっては何百年と見慣れた風景の一つでしかない。

正直これといって心を動かされるものはないのだ、許しておくれ。

「この庭園の設計はトラスア様がされたのです」

「そうなの!?!」

「はい」

カレンの喜ぶ姿を見て、こちらを振り向いてわずかに口角を上げたコウヒが付け加えた。

「ちなみに先ほどの社にあったアーチカルゴ神像、あれもトラスア様が造られました」

さすがはドゥーマンを先祖に持つだけはある。

あの神像に身を屈めるつもりは一切ないが、たしかに巧く造られて

はいた。

などと感心していたら、あつという間に扉の前に立っていた。

「では、どうぞお入りください。今日からこちらがあなた方の住居兼職場となります」

何のためらいもなくコウヒが両開きの扉を開け、我々はお屋敷の中へと足を踏み入れた。

「いいなあ……い！」

そしてまたしても、小屋から出た時と同じようにカレンが目を輝かせた。

広々としたエントランスにはちよつとした一軒家なら納まりそう
だ。

この場でまず目に入るものは二階への大階段と、落下させたら大人十人をまとめて圧殺できそうな巨大なシャンデリアがドウマスク柄の天井から吊り下げられている。

そして他の空間へと通じるドアを一階と二階合わせて二十も数えられた。頻繁にこの家を訪れているのに間違ったドアを開けてしま
う人間もいるだろう。

「全部開けていいの!?!」

半ば興奮状態のカレンが、勝手に一番近くのドアに走り寄って手を
かける。

「は、はいどうぞ。カレンさんの見たい場所から案内させていただきます」

「……ウチの娘がすいません。あとでよく言い聞かせておきますの
で」

この子は相も変わらず好奇心が人の形をとったような存在であると再認識できた。

どんな人間の血を受け継いで育てられてきたのか、親の顔をしかと
見てみたいものだ。

それから時間をかけて、この屋敷で働く人々に挨拶して回りながら案内をもらい。

常用の部屋だけでなく地下の酒蔵から屋根裏の物置、本棚の裏の隠

し部屋と金庫に至るまでの全てを包み隠さず見せられたので、革命が終わった後で口封じに殺されるのではという不安も生まれた。

そして最後に通された部屋は俺とカレンが一月の間寝て起きるための私室であるのだが、

「本当にこんなステキな部屋に住んでいいの!？」

「はい、どうぞご自由にお使いください」

そう、本当に良い部屋なのだ。

主人の寝室の二つ隣にある部屋の場所といい内装といい、それこそ大事な来客が泊まるために不自由のないよう設計された洒落た部屋で間違いない。

それほどのものを客人ではなく契約の元で雇われの身である我々が用いて大丈夫なのか？

長い間この屋敷で仕えている先輩方に生意気な他所者として悪感情を抱かれないだろうか？

俺だけが嫌われて卵を投げつけられるのはいい。だけどカレンにまでその被害が及んでしまつては……。

「他の住み込みで働いている方々全てに、これと大差ない私室が与えられています。ですのでご心配なく」

俺の懸念を感じ取ってくれたのか、ベッドの上で転がるカレンを尻目に優しい言葉をかけてくれた。

「それでは準備ができ次第仕事に取り掛かってもらうとして。アレンさん、何ができますか？」

「何ができるかと言われましても……。そうですね、できるかできないかで答えますのでこの屋敷で行われている業務を教えてくださいだければ」

「掃除、洗濯、皿洗い」

「できます、できます、何千枚でも洗います」

「裁縫、調理、警備」

「できます、できます、命を懸けても守ります」

「馬丁、庭師、家屋の点検」

「できます、できます、点検と合わせて修繕・塗装もさせていただきます」

す」

「秘書業……は私の仕事ですし」

コウヒが切れ長の瞳を細めてどうしたものかと思案する。

加えて今言ったことは全て本当なのかという疑心も生じているようだ。

「テンノとしてどこにでも潜入できるよう、そして引退した後で困ることのないようにあらゆる事を叩き込まれましたので。師匠曰く『優れたテンノは万に通ず』とのことでした」

先にそれを言っておくと手をポンと叩いて納得してもらえた。

「ところで……つかぬことをお聞きしますが、年齢は」

「くふふ、ようやく聞いてくれましたか……。漢アレン・メーテウス、ピッチピチの三十四歳子持ちオステンノでえすつ！ キャピピピーンっ！」

場を盛り上げ少しでも不信感を取り除き信頼を勝ち得るため、三秒でパンツ一枚を残して衣服を脱ぎ去り、煌めく笑顔と関節を外してくねらせたポーズで筋肉を膨らませてそれを答えた。

もちろん五千百九十歳ほど鯖を読んでいるのは秘密だ。

「……………あの、コウヒさん？」

だのに、どういうわけか、空気がずしりと重く氷のように固まった。コウヒは俺と目線を合わせつつもどこか遠くを見て何も発さない。

これは異常事態だ。千五百年前は仲間内で爆笑必至だったネタが通用していない。ならばさらに時代を逆行して二千年前に流行したあのネタでいこう！ 流行は巡るというからきつと通用するはず――

「――ねえ、お父さん」

背後から聞こえてきた声は、恋人を刺し殺して心中する覚悟を決めた女の如き重い声で。

俺は錆びついた歯車染みたぎこちない動作で首を回し、愛する娘の瞳を覗いてみたが……。そこに年相応の純然たる光はなく、魔人の将が持つような……。いや、それ以上、人族の最大の敵である魔人の王、魔王と称される者が湛える鈍重な闇が宿っていた。

「次やったらゼツエンだから」

第七話 「傷心」

「絶え……どこでそんな言葉を覚えたんだカレン!？」

「そんなことはいいいから、二度としないで」

有無を言わさぬ強い物言いと、常人が直視したら精神を壊してもおかしくないほどの圧を放つ碧い瞳。

無論俺を含めてこれと同等の圧を放てる人物を何人も知ってはいが、そのほとんどが優に百歳千歳を超える力持ちし者で、ごくまれに四十そこらの才ある若造に見られるだけだ。

つまるところ、成人の儀すら終えていないお子様の出していいものではない。

「わかった?」

俺の心を縛って握り潰すような眼には圧倒的なまでの強制力が。

からかおう逆らおうという気さえ起らなかった。

「はい! 二度といたしません! ……コウヒさん、わたくしめは外壁の点検と修繕に努めてまいりますのでどうかカレンをよろしくお願いいたします」

「あ……はい、分かりました」

部屋を出てからも、木製のドアを貫通してうなじと背中になにかゾツとするような視線を感じた気がした。



ちよつとした恐怖体験をしてからはや五日、外壁を余程の事が無い限りは長持ちするように修繕・塗装を終え、今度は屋根の上で鎚を振る始めた。

鼻歌を奏でながら屋根瓦を叩いて嵌めつつ思い出す。

カレンに恐怖したその日は、食事中も労働後も何一つ言葉を交わしてはくれず、俺が何を呼び掛けても返ってくることはなかった。無視を決め込まれただけでも胃の中身を残らず吐瀉しかねなかったというのに、よもやそれ以上の悲劇が降りかかるとは思ってもいなかった

し想像すらしたくなかった。

それはついに夜も更け、一つしかないベッドで横たわるカレンの隣に潜り込もうとした時のこと。

『ねえ、今日は側で寝てほしくないからその床で寝てくれない？』

……あー、やっぱりいいや。コウヒちゃんの部屋で寝るからベッド使っていいよ』

酷く冷めた目で一方的に告げられ、本当に部屋を出て行ってしまった。

そのまま朝まで戻ってくる事のなかったカレンは知らないだろうが、その夜は一度も寝付けず、あまりのショックとストレスから何度も心不全と発作を起こし、実際に四度死んだのだ。

生きた心地がしなかった。

鷲に肝臓を食われ続けている方がマシだった。

忘却の魔法をかけてしまおうかと何度悩んだことか。

「うう……。思い出すだけでも辛い」

朝にはいつも通りの笑顔に……。とはなっておらず、きつとコウヒさんが諭してくれたのもあつてか同じベッドで寝るのを許してくれたし挨拶だけならしてくれるようになったが、それまでだ。まともに会話をしてくれないという気まずい状態が今の今まで続いている。

ああ、時の流れがカレンを元通りにするまでの間、誰か俺を再び封印してはくれないだろうか。

不意に背後から、俺以外の何者かが屋根の上に登ってきたのが分かった。

梯子をかけず、音を殺して生身でよじ登ってきたのでよく訓練された暗殺者か何かだろう。

生きる意味を失いつつある俺を殺しにきたんだな。

「好きにやってくれ。抵抗はしない……。なんだ、マニツクか」
「なんだとはなんだ」

振り向くとそこには角刈り尖り顔で悪人面の男が立っていたが、味方である。

肩から腰に三十枚ほど重ねた瓦を紐でかけ、手には鎚を持っている

ので俺と同じ仕事をしに來ただけのようだ。

「おいおいどうしたんだよ今にも死にそうな顔してよ。俺でよければ力になるぜ、兄弟」

「俺と君の血は繋がってはいないはずだが」

「トラスアの旦那の下で革命を成功させようってやつは皆、血は繋がってなくとも家族と変わりねえよ。何なら特別に相棒って呼んだ方がいいか?」

「一日金貨三枚で相棒契約をしてやろう」

「勘弁してくれ。釘が買えなくなっちまう」

そこでちよつとした軽口を交わしてマニツクの機嫌の良いことを確認して、

「聞いてくれるか、相棒?」

「おうよ、相棒」

多少なりとも気が楽になることを願って苦悩を打ち明けた。

「……と、いうわけだ」

「そりやどう考えても相棒がワリい」

瓦を張り替えながら長々と語った上で即答された。

いつそ清々しいくらいにバツサリと斬られた。

「さつさと地に頭つけて謝ってこいよ……つってもそうか、避けられるから謝らせてさえくれねえか」

「そう、その通りなんだよ。ああマニツク、俺はどうしたらいいんだ。心臓を鉛で固められたように苦しいんだ……」

昔拷問でドロドロに溶かした鉛を飲まされたことがあるが、それと似たような苦しみを感じている。

もしこれが親離れだとしたら、俺はこの先永遠に苦しみ喘ぎながら生きてゆかなければならないのか?」

「まさか、ゴーレムを手玉にとるような腕利きのテンノ様にこんな弱点があったとはなあ」

全てを無かったことにして石の中に戻りたいとすら考えだした俺に憐れむような呆れたような目を向けつつ、何か閃いたように手をポ

ンと叩いた。

「そんな状態じゃ仕事に身が入らねえだろうし、ちよつくら運動でもして頭をスッキリさせようぜ」

「運動？　しかしまだ仕事が」

「いいから来い。後で何か言われたら俺のせいにしとけ」

俺は言われるがままに仕事道具をその場に置き去りにし、逆三角形の頭と背を追った。

◆◆

「つーわけで、これよりアレン・メーテウス様が直々にご指導してくださいさるー！」

マニツクの軽はずみな言葉を聞いた同志らが揃って感嘆の声を上げた。

地下訓練場の中央に集められた二百を超える人々の視線が全て俺に突き刺さる。

「何がつーわけでだよ、オイ」

当然俺は軽薄な表情をした尖り顔を横目で睨んだ。

「なんだ？　俺は何も嘘は吐いてないぜ？　こいつら全員とキツチリ運動してもらうんだからな」

「はー」

まんまと騙された。

運動をするというのに、屋外ではなく地下へ潜った時からおかしいとは思ってはいた。

しかしここまで来てしまったからには後戻りはできない。まだ要人の暗殺ではないだけよしとしよう。

それでも後ほど仕返しに、爆破釘を五本普通の釘とすり替えておいてやろうと思う。

「……えー、それでは、僭越ながら指導させていただきます」

件のゴーレムが鎮座していた、過去の俺を非難する忌むべき文言が刻まれていた台座に上り、そこで指導を始めることに。

「どうした相棒、そこで娘を怒らせたアレを見せてくれるのか？」

「黙らっしゃい」

さらに五本追加ですり替えてやるからな。

「さて、今から皆さんに行ってもらうことは簡単です。俺をこの台座から追い出してもらいます。最初に成し遂げた者には金貨十枚を差し上げましょう」

淡々と小手調べの内容を告げていくと、またたく間にどよめきが広がった。

「金貨十枚だつて!？」

「そこから出すだけでいいんですか!？」

「はい、それだけです。真剣以外であれば何を用いても何人同時にかかってきても構いません。まずは皆さんの力量を見せていただきませ

す」
彼ら自身には何の悪条件もないことを聞いてますますどよめきが大きくなる。

「そうですね、制限時間は一時間としましょう」

まだほとんど全員の理解が追いついていないのを気にせず「始め!」の合図を発した、その瞬間、後方より強く地を蹴る音が耳に入っ

た——
「——死ねオラッ!」

聞き覚えのある声に耳を澄ませながら振り返ると視界の中央に靴の裏が二つ現れ、それがぐんぐん大きくなる。

この飛び蹴りを避けたとしたら後ろにいる同志達が巻き添えになるやもしれず、避けずに台座から弾き出されないよう本気で受け止めたら確実にマニツクの脚が壊れる。

きつとマニツクの中では、俺が避けずに背後の仲間達を庇って場外へはじき出されると思っているのだろう。さすがテンノ、汚いやり口だ。

「もらったアーツ!!」

だが、それは半分正解で半分不正解だ。

俺は右脚を軸に最小限の動きで回り込んで跳び蹴りの軌道から外

れ、

「どっせいッ！」

「ぐアッ!？」

そのまま目の前を通過せんとする男の腹に肘を落とし、石の台座に叩きつけた。

仲間達を庇うし金貨もやらん、ついでにお前の脚も壊さないでおく。

「うあ……相棒。よく、も……」

「貴様の行動に責任を取れ」

「うっ、ぐッ! ……ガハッ!」

並の男であれば悶絶して泣き出すほどの衝撃を受けて、苦痛に顔を歪めながらもすぐに喋れることを感心しつつ、三度踵で踏みつけて眠らせ、それから場外へ蹴り落とした。

もちろん指導の邪魔になるからどかしたただけであって、決して仕返しのためにはない。ないっただけだ。

五千歳を超す不死者ともなると、そのような矮小な情を抱きはしないのだ。

第八話 「哀しみを背負いし漢」

「さあ皆さんも、どうぞ遠慮せずにかかってくるってください」

両腕を広げ、同志たちに歓迎の意を表す。

しかし、一人として台座に上がってはこない。

誰でも俺が目を合わせるやすぐに背けてしまう。

「……なあ、どうするよ。誰から行く？」

「俺は嫌だぜ。ああはなりたくねえ……」

「お前行ってこいよ。女だから手加減してもらえらるだろ」

「それを言うならあんたこそ男なんだから先に行きなさいよ」

現役テンノであり、普段は彼らに戦術を教えているはずのマニツクが紙くずのように捨てられたのを目の当たりにして、誰しも怖気に囚われてしまった。

無理もないことだ。だが、無理をしてもらわなくては困る。

「国という強大な敵を討ち倒さんとしているのに、たった一人の人間に怯えている場合ですか？」

王権に絶対の忠誠を誓う兵士達との戦いを避けることはできないのだ。

その中には俺ほどとはいかずとも、マニツクよりも戦闘能力の高い者は必ずいる。魔法使いだって何人もいるはずだ。

自分より幾段強い相手だから、いくつも武勇を知っているからといって怖気づいては、傷の一つすらつけられずに殺されるだろう。後続に何も残せずに死んでゆくのだ。……いや、足止め程度にはなるかもしれないな。

契約の上で短期間とはいえ、目に映る命は皆家族である。すでに全員の名前と顔を覚え込んだし、それぞれの内情や生い立ちも調べてある。

だから無駄死になどしてほしくはない。

「心配せずともあの尖り顔以外には優しく指導させていただきますよ。……ですが、承諾なしに家族を囮に使うような真似をした者は容赦なくマニツクの上に積みます」

かようなことはするなと軽く脅しつけてから再度一人一人と目を合わせていく、が。

先ほどまでと同じように怯えた表情をする者はおらず、皆一様に真剣な目をしていた。

そうだ、それが見たかったのだ。

「では、改めて申し上げます。……全員まとめてかかってこい!!」

「やったらアアアア!!」

「舐めた口利いてんじゃねえぞ新入りてめえツ！」

「金貨なんかいらねえ！ マニツクの敵討ちじゃい！」

発破をかけると喚声があがり、まずは第一波と言わんばかりに腕に自信のある八人が上がってきて俺を囲んだ。

揃いも揃ってぎらついた瞳で俺を睨みつけながらにじり寄ってくる。

「——ハアッ！」

俺を投げ飛ばそうと正面から迷わず掴みかかってきた二人の手を引っぱたき。

同時に左右と背後からも掴みかかってきたのを後方宙返りで飛び越え、包囲から脱する。

「な、なんちゆう身体能力してんだ……」

「今こつちを見てないのに避けられたよな!？」

「おや、新入り相手だからかすいぶんとお優しいんですね？ ……いや、腑抜けと言った方がよろしいでしょうか？」

「ンの野郎ツ……!」

「もう手加減してやれねえからなア」

「御託をいいから、さっさと拳を固めてきな——」

——ブンツ、と。

俺が手招きをしようとした瞬間、左頬を風切り音と共に拳が掠めた。

危ない危ない、首が固まっていたら一発喰らっていたかもしれない。

「ほほう」

「チッ」

男は手ごたえがなく追撃も与えられそうにないと分かるや即座に跳び退った。

上手い具合に悟らせずに急接近して拳を放ったこの男はたしか……道場で師範をしていたんだった。道場があつた場所は今、国の酒蔵となっているらしいが。

「まさか縮地術を使いこなす人間がいるとは思わなかったよ。たしかアンキロスくん、だったかな。君、ステゴロならマニツクよりも強いね」

「……どうも」

寡黙な男だ。

ならば言葉ではなく拳に思いを乗せて返そう。

「それじゃあ……」

アンキロスの肺が萎んだのと瞬きの重なる瞬間、彼からは距離感の掴めない錯覚を起こす構えを保ちながら、最大限の筋力で地を蹴る。

純粹な肉体のみを頼りにした縮地術にて距離を詰め、

「お返しだ」

彼の多くを語らない眼がぎよつと見開いた時にはすでに、鳩尾に拳が打ち込まれていた。

「シッ」

「フッ」

仲間の犠牲を無駄にはしまいと、アンキロスが前のめりに倒れ込むのに重なって二つの蹴り上げが俺の顔めがけて襲ってくる。

「いいねえ、そうこなくては」

寸前で避けたからいいものの、当たればまず無事では済まない威力のものだった。

アンキロスを倒したことでいよいよ情け容赦のない、喧嘩などで軽々しく使つてはならないような技が繰り出されるようになった。

危険だからと真剣の使用を禁じた意味がないような気もしてきたが、まあいいだろう。

「この！ 化け物め！ 当たれってんだよ!!」

「遅い！ それでは牛にすら避けられるぞ！ 次！」

「新入りの分際、でえっ！」

「キレはある、けれどズレが大きい。もつと腰回りの筋肉を意識しろ！ 以上だ！ 次イ！」

もちろん優しくはするが、時間内に全員を指導することができなくては困るので、一通り動きを見終えた者から順に顎か腹を打って意識を奪っていく。

「よおし！ リユカにパール、ジエレミーとマナリノも上がってこい！ もちろん他の奴も好きにしろ！」

それで次に上がってきた者達の内、半数が木製の短剣を手にしていた。

「いくら腕つぶしが強えつつても、さすがに得物持ちには勝てねえだろ？」

「覚悟決めろよ新入り！」

拳の届く範囲に入るとまずいことを学習した彼らは、俺との距離を一定以上開けながら突きと斬り払いを連発してくる。

そうして避けていたらいつの間にか、後一步下がったら場外というところまで追いつめられていた。

「どうしたどうした!? 逃げてばっかじゃ指導にならねえぞ！」

「これで金貨十枚は山分けだな」

「ちよろいもんだぜ！」

揃って俺に木剣を突きつけながら、すでに勝った気でいらっしやる。

場外から見守る仲間達も「さすがにそうなるよな」「もう終わるかあ」「いいなああいつら」などと完全に諦めていた。

よろしい、ならば見せてあげよう。

「ふんッ！」

ビリリと小気味いい音を立てて上着の一部を破りとり。

一枚の細長い布切れとなったそれをひらひらと振るってみせた。

「なんだ新入り？ 白旗のつもりか？」

「これが真剣だったら赤旗を振ることになってたぜ」

「上手いこと言うじやねえか！」

当然布一枚が蛇に見える催眠術をかけているわけでもないので怯えるわけがなく、さらに油断の色が濃くなる。

「真剣だったら、ね。たしかにその通りだ」

油断の色が褪せないうちに、布の一振りにて俺に突き付けられていた全ての木剣を巻き取った。

「ひゃ？」

「へっ？ ……いでっ！」

例外なく手元から武器が消えたことによつて、皆同じ顔で茫然自失となり。

そんな彼らの眉間に奪い取った木剣を突き刺すように投げつけてやった。

「これが真剣でなくてよかつたなあ？」

「ま、まいった……」

「降参だ！」

「舐めた口利いてすいませんっしたあ!!」

意識を奪われる前に皆そそくさと台座から降りていった。

布を持った相手に怯えて逃げるのを情けないなどと思つてはならない。実際に布は高い殺傷能力を持つ武器の一つであるのだ。布使いに何度も殺された俺が言うのだから間違いない。

指導を続けていくと、^{スリング}投石器や麻痺毒の塗られた吹き矢などの飛び道具を持ち出す者もちらほら出てきて。

しかも彼らは台座に上らず、場外や天井に張り付いて、うまい具合に仲間達の間を通して狙い撃ちしてくるので、ますます攻撃の密度が大きくなり逃げ場が狭まっていく。

「ひゅうつ。冷や冷やするねえ」

「おいっ！ そろそろ誰か当ててくれよ！ どうして一発も当てられねえんだよ！」

「撃つてるところがちが知りてえよ！ 一体新入りには何が視えてるっつうんだ!？」

それでも巨大な魔獣に飲み込まれて、四方八方上下左右から刺し殺

そうとしてくる猛毒の触手を捌いた時よりかはまだまだ容易いものよ。

さらに加えて、現在俺は誰よりも深い哀しみを背負っている。

そのおかげか東斗八星の隣に寄り添う死の兆したる青白い星、酷い時には年がら年中視えるそれが今は視えないのだ。

地下にいるせいで空を望むことができなくとも、それだけは確信できる。

「アレノ布拳究極奥義——フソウテンセイ布想転生！」

第九話 「ささやかな願い」

結局、傷一つ付けられることなく終わらせた。

やはりというべきか、終了した直後はゴーレムを倒した時よりも激しい質問攻めにあつた。

たつた数十年であるような動きができるものなのか、本当に我々と同じ定命の人間なのかなどといった核心をついた問いかけもあつたが、それについては一子相伝の技術なので教えることはできません、と笑つて誤魔化した。

さすがに終盤になつて、女性が相手だからといつて目隠しをして手足を縛つた状態で戦つたのはやりすぎだったかもしれない。

「そう、そこで息を吐いて内腿に力を籠めて」

「セイっ！……ほ、本当にできました！」

「後はその感覚を忘れないように反復練習をしておいてね。では次の方——」

十年もこの地下施設で鍛錬してきた者もいれば、革命組織に入つて一年と経たない者もいる。

元からテンノや兵役に就いていた者もいれば、商工業者や農民として戦いとは無縁の生活をしてきた者も。

半日かけて各々にとつて不足しているものとさらに磨くべきものが何かを助言し、それらについての適切な鍛錬の仕方を教え、悪癖があればそれを矯正するように努めた。

能力にバラつきの多い大勢を相手にして教え込むのはやはり骨が折れる。だからといつて食事を除いて一秒たりとも休むわけにはいかなかった。

革命当日まで一月もないとはいえ、教えられることは多々ある。

一つでも多く飲み込んでもらつて、一人でも多く無事に生き残つてほしい。

欲を言えば、俺以外の誰にも死んでほしくはない。

「はい皆さん！ 最後にまたアレをやりたいと思いまーす!!」

稽古終わりに例の台座に上ってから皆を集合させた。

見回すと誰も彼もサボることなく熱心に鍛錬を行っていたせいで、最初の頃より明らかに疲れの色が表れている。

「うーん、また金貨十枚じゃあ割に合わないねえ。……よし、もしも俺を場外へ出すことが出来た者には何でも一つ、願いを叶えてあげようじゃないか！ 君達のへっぴり腰を治療してあげてもいいし、虫けらのような強さから人並みにしてさしあげることもできようぞー！」
だから少しばかり挑発すると、

「おいおい、さすがにそれは言い過ぎなんじゃねえか先生よお！」

「神にでもなつたつもりかあ!？」

「ああん!? 舐めてんじゃねえぞセンコーてめえ!」

「俺達に稽古をつけたこと後悔させてやんぞ!」

馬鹿正直に乗ってくれた。

これで今日は皆ぐっすり眠れるだろう。

一定のペースで四分の三程度をのして追い出したが、未だ俺にかすり傷を付ける者は現れない。

それでも個人差はあるものの、皆がそれぞれ半日前の自身よりは良くなっている実感できているはずだ。

むしろちよつと教えたばかりで俺に傷を付けられるくらいに急成長するような人材がいれば、すぐにでも勧誘もとい洗脳して攫っていくつもりなのでご遠慮いただきたい。

「ちつくしよオオオオッ!」

「このバケモンがああああッ!!」

「よっ、と」

最後の悪あがきをする三人をまとめて足払いで転ばし、これ以上はむしろ身体を痛めてしまうので場外へ蹴り落とした。息も絶え絶えに寝転がるそれらを、先に挑んで脱落した仲間達が引きずって台座から少し離れた場所へ移動させる。

やりきった者から好きに帰れと言ってあるのに、一人たりともこの訓練場から出て行くこうとはしない。少しでも俺の動きを目に焼き付

けて吸収できるものはないかと探している。

「くっそー……。惜しかったなあ」

「ああ、よくやったと思うぜ。俺も何の準備も無しでは相棒には敵わねえ」

「他の誰かがやってくれるのを信じよう」

脱落者同士の励まし合いもとい傷のなめ合いが度々行われるが、実際にひやりとする場面が幾度もあった。哀しみを背負っておらず油断している俺だったら、少なくとも一撃は食らっていたに違いない。

かつてはマニツクかコウヒさんを倒すのに最低四人は必要だったらしいが、今なら三人同時にかかれば抑え込めるレベルには成長してしまった。

教え込んだ甲斐もあるが、どいつもこいつも俺より才能があり飲み込みが早いので少々腹が立つ。

「さあ、次は誰が来るのかな？ そろそろハンデを付けた方がよろしいかな？」

彼らの闘争心を掻き立てるよう小馬鹿にして見回していると、バタンと鉄扉を閉じる音が聞こえ――

「――次はあたしが相手よー」

聞き覚えのある明朗で愛しい声が訓練場内に木霊した。

声のした方を咄嗟に振り返り、カレンとそのすぐ後ろに立つ金髪の女性をたしかに認識する。

「カレン!? どうしてここに……まさか、コウヒさんが」

「はい、そこにいるマニツクから話を聞きました」

コウヒさんの指差す方を見ると、感謝しろよと言わんばかりのニタニタした表情の相棒と目が合った。

この野郎、一体どういうつもりだ？ ことと場合によっては釘を全て砂塵に変えて顔の形を四角形にしてやるからな？

「それでアレン、やるのやらないの？」

「ははは、何を言うかカレン。君のようなお子様にはまだまだ早い。さあほら、コウヒさんと帰って寝なさい」

皆が見ている手前、あからさまな接待はできない。どれほどダラダ

ラやっても最終的には俺がカレンに勝つ。

するとカレンはおそらく悔しさで泣き、そのせいで親子関係がさらに悪化する。

させてたまるか。

「ふうん……。ねえおじさん、それちよつと貸して？ 玉はもらっていい？」

「お、おう。好きなだけ持って行っていいけど、使えるのか嬢ちゃん？」

「うん、使い方は知ってる」

カレンは俺の言葉にはいともいいえとも答えずに、座り込んでいる仲間の一人から投石器を借りて手にした。

そしてぶんぶんと綺麗なフォームで振り回し、最高速度で投射した。

「ひゃあ……」

石を磨いて作られた玉は俺の大切な玉の下スレスレを通過。

それで思わず俺を含めた野郎共の多数が上ずった声を出してしまった。

「あたしが怖いならやらなくてもいいよ。その代わりこれから名前じゃなくて臆病者って呼ばせてもらうけど」

どうする？ と大人を挑発する瞳はとても楽しげに笑っていて。

一体どこの誰に似てしまったんだか。

して、ここまですれて断るわけにはいかぬな。

「碎よ、後悔するでないぞ。……参れ！」

直後、石が三つ立て続けに飛来したが、当然俺はそれを全て掴み取ってまとめて砕いた。

「そのようなオモチャが通用しないことは知っているだろう？」

「……」

それでもカレンは周囲を走りながら投射し、ようやく残弾が切れたところで台座に上ってきて。

そしてペコリとおじぎをしてから拳を繰り出してきた。

「ふッー」

上段突き、
足掛け、
裏拳。
肘打ち、
右後ろ回し蹴り、
左回し蹴り。
右フック、
フエイント、
右ストレート。

カレンには何かあった時のために最低限の格闘術を数種類教えたが、その全てを余すことなく吸収して、織り交ぜて活用している。なんなら俺が教えた覚えのない高度な技まで用いてくる。

「これで、どうよっ!!」

「善きかな善きかな。しかしだカレン、君に戦い方を教えたのが誰であるかを忘れてはいないだろうね?」

だが、所詮は子供の遊戯だ。

今のカレンならちよつと格闘術をかじった程度の男は倒せても、俺やアンキロスのような達人の域にいる者には傷一つ付けられない。

何度も俺の息子を葬ってきた蹴り上げだって小指一本で押さえてみせた。

しばらくカレンの技を受け止め避け続けていると、諦めたのか俺から距離を取り。

「やっぱりそう簡単にはいかないわね……」

「百年後……いや、カレンならあと五十年も鍛えれば俺と対等に戦えるだろうね。さあ次はどうする? またオモチヤを使うか? それとも魔法でも放つのかな? だけど君はまだ、人を殺すような魔法は知らないはずだ」

「……でも、これなら! —— 《疾^{ハジ}レ風^{カゼ}ヨ怒^{イカ}リニ答^{コタ}エヨ!!》」

カレンがぴんと伸ばした両手をこちらにかざしながら唱えると、それは掌より発動した。

初めに柔らかいそよ風が吹きつけ、

それが層をなして鬱陶しい向かい風となり、
幾重にも重なって目も開けていられぬ疾風となり、

ついには大木を薙ぎ倒す暴風となった。

明確な殺傷能力のある魔法はまず教えないでいたが、高所で証拠を残さずに人を突き落とせる魔法は教えてしまった。

一月前の俺にそれだけはまだ教えるなと警告できないものか。

「ぐうっ……い！」

暴風に押されてじわじわと端に追い詰められ、さすがにこのままではまずいと秘密裏に踵から杭を生やし地面に突き刺した。

これで筋肉と骨とをもつて我が身を鉄柱とすれば、どれほどの圧が来ようと立ち続けることができ——

「——《シヨウネンバクサイ掌念爆碎》！」

「んなっ!？」

俺の背後で何かが弾けてすぐに足元がぐらついた。

咄嗟に真下を見ると台座の端、俺の乗っている部分がパンケーキのように切り離され、今まさにずり落ちていく。

爆発と長い年月により劣化しているのも相まって崩れたのだ。

「なんの、これしきー！」

即座に杭を抜いてから落下中の台座の端を蹴り、場外に足を付けずに戻ろうと前を見た時には、

「やあっ——」

——カレンの頭が鼻の下に迫っていた。



気絶しない程度ではあるが、背中と胸から下腹部に大きな衝撃が走った。

「……やった」

復帰中の俺に飛び込んで弾き出し、そのまま覆いかぶさってきたカレンが顔を上げてほつりと呟いた。

それから幾秒かの間自然と沈黙に包まれてから、息を飲んで見守つ

ていた同志達の歓声が湧き上がる。

男女構わず抱き合って、肩を組んで踊って歌つての軽いお祭り騒ぎとなった。

「すげえ！ すげえよ嬢ちゃん！」

「俺は信じてたぜ!!」

「カレンちゃん何か食べたいものある!? お姉さんが何でも奢っちゃうわよ！」

カレンは俺の前から連れていかれ、集団に取り囲まれて何度も宙へ打ち上げられる。

それを横目に冷静になって闘いの跡を観察すると、台座の周りにはカレンが当て損なつた玉が転がっていた。

そうか、これを爆発させたのか。何度かの外れな場所を撃つていたのは、失敗していたのではなく初めから狙っていたわけだ。

「あーあ……」

全てを理解して、俺は仰向けに寝転んだ。

完敗だ、悔しい、情けないといった思いがまず駆け巡るが、それらはすぐに絶望と諦めの二つの感情に塗りつぶされた。

だって、俺は言ってしまった。

勝つことができたなら何でも願いを一つ叶えると。

今なお俺とカレンとの間には底無し峡谷の如き深い溝があり、そこには俺がカレンの元へ飛び立とうとするのを妨げるように暴風が吹き荒れ翼焦がす炎の雨が降り注いでいる。

嫌いな相手への要求なんておおよそ決まっている。

「アレン。……ねえアレン、起きてっつてば」

「……」

「何でも一つ願いを叶えてくれるんでしょ？ ほら、起きてよ」

「ああ……」

小さな手に引つ張られて体を起こす。

もう、覚悟は決まった。

どうせ俺は一人になる定めなのだ。

「願いは、何だ。二度と顔を見せるな、か？ それとも今から千年間石

の中に閉じこもった方がいいか？」

「何言ってるの？ バカなの？」

「そうだ、俺は愚かな人間だ。」

五千年も生きているくせに娘の育て方さえ知らないのだから。

「あたしね、アレンが皆に教えてるの見てたよ」

「そうか、俺の厳しい指導を見ていたのか。」

「これはますます嫌われてしまったな。」

「アレンが真面目に教えてて、アレンに教わったみんなはすごい嬉しそうな顔してて、見てるこっちまで嬉しくなっちゃった」

「何だそれは？ 皮肉のつもりか？」

「ヒニク？ どういうこと？ ……まあいいけど。それでね、アレンに叶えてほしい願いはね——」

俺は反射的に唾を飲み込んだ。

「——あたしと仲直りして」

そして反射的に目を見開いた。

「カレン……？ 今、何と」

「もう言わないから！」

「は、はは……。そうか、からかっているんだな？ そうなんだろう！？」

聞き間違いでなければそういうことだ。

上げてから、どん底へ叩き落とす。

俺がまだ幼い弱者であった時も、ある程度力を蓄えてからも幾度となく受けた仕打ちだ。

「本気で言ってるの……？」

しかしどういいうわけか、カレンは卑しい笑みを浮かべない。

「それどころか少し悲しげな表情をしていて。」

「……アレンさん、さすがにそれはどうかと」

「相棒、その冗談はさすがに笑えねえよ」

「冗談？ 俺は至って真面目に……」

そこまで言ってようやく気付いた。

カレンのどこを見ても害意の欠片も感じ取れないことを。

そうだとしたら己がどれだけ愚かなことを口走ってしまったのかを。

「まさか、本当に」

俺を見つめ続ける碧い瞳にはうつすらと涙が浮かんでいて。

「カレン!!」

俺はその顔を他人から隠すように胸に抱きしめた。

「ごめん、ごめんよカレン。俺はなんてことを」

「まってアレン、苦しい……」

「ああっ！ すまない!」

抱きしめる腕をほどいて両肩に手を置き、最愛の娘だけを視界に入れて向かい合う。

「もう。謝ってばっかないですよ」

カレンが涙を流すのを防げはしなかった。

それでも、顔を赤くしながら屈託のない笑みを浮かべてくれていて。

救われたような気がした。

地面の奥底に埋められて身動きの取れない俺を、カレンがたしかに掘り起こしてくれた。

「それで……どうなの?」

「今すぐ仲直りしよう! 今すぐ美味しいものを食べに行こう!」

緒に来てくれるかい!?

「うん!!」

自分でも信じられないほどに心が震えて。

俺は千何百年かぶりに感情による涙を溢した。

第十話 「娘をください」

「聞いたところによると、賃金に見合わない働きをしてくれているそうじゃないか」

千切れかけた親子の絆を修復してからちようど十日経った日の夜、俺とカレンは食後に雇い主の私室へ呼び出された。

大机を挟んで座る髭もじやお館様が苦味の強いコーヒーを啜り、俺とカレンに一方的に話を続ける。

隣には腹心の二人が屹立し、トラスアの言葉を一言一句聞き漏らさないようにしている。

「なんでもアレン君は短期間で皆の実力を飛躍的に向上させ、カレンも皆の士気を大いに高めていると耳にしたのだが。これは全て事実かね、コウヒ君」

「間違いありません」

「私の部下の中で最も実力の高いマニックが手酷くやられているとも」

「……その通りです旦那。百度やろうが相棒には勝てる気がしません」

俺とカレンが涙したあの日以降、屋敷での仕事のノルマを早めに終わらせ、それから地下に潜って仲間達を鍛え上げるといふ日々が続いている。

遅れてカレンもきて皆を励まし自身も稽古に参加し、もはやそこにいるだけで周囲の人間が力を得られるような存在と化していた。

「ずいぶんと同志らの信頼を勝ち取ったそうじゃないか」

「いやあー」

「それほどでもおー」

「ねー、えへへ」

「ねー、ぐひひ」

俺がカレンと息を合わせて笑うと、なぜか相棒が気持ち悪いモノを見る目でこちらを睨んでくるが気にしない。

「私の目に狂いはなかったようだ。君達は本当に素晴らしい人材だ」

！」

俺の経験上、仕事のことでは褒めされた後は「用済みだ、消えろ」か「ではもつと大変な仕事を請け負ってもらおう」のどちらかを言い渡される場合が多いのだが、どうやら今回は後者のようだ。

口角が常に十度上がっているトラスアの顔からは、商人特有の打算と期待の感情が見て取れた。

「だからこそ屋敷仕事をさせておくには勿体ないと思ってね。これからは私の側で働いてもらいたい」

ずいぶんと我々を買ってくれているようだ。お目が高い。

「しかし、我々のような新入りがトラスア様の側付きになってもよいので？ 他の仲間の反感を買うなんてことは」

俺とカレンの大抜擢に嫉妬し不快感を抱き、その腹いせに革命の計画を国に垂れ込むなんてことをする者が出てくる可能性がある。

感情だけで動いて全てを台無しにする人間というのは、いつの時代も少なからず存在するのだ。

「なに、心配は無用だ。同志達は全て私が直接人となりを見た上で引き入れた。であるからして、つまらん文句を吐いたりましてや裏切るような者はおらんよ。もし仮にいたとしたら此度の私は笑い者として無様に死に、来世にまた試みるとしよう」

「トラスア様、縁起でもないことを……」

諫めるコウヒさんを尻目にわははと笑う。

その気質にはたしかに人を惹きつけるものがあつた。

この男が選んだ人間ならばきつと問題はないだろう。

「それで明日から早速だが、私とコウヒ君と共に来てもらうよ」

「あれ？ マニツクは来ないの？」

「彼は……コウヒ君と同様に最も信頼してはいるが、見た目が少々厳つくてね。表立った仕事には連れていきづらいのだよ」

「ああ、たしかに。貴族と商人は評判第一ですからねえ」

俺がニヤニヤとしてマニツクを見ると、お前絶対許さねえからな、というめらめら燃える怨念が生じたのが分かった。

「それと、もう一つ頼みたいことがある」

不意にトラスアは神妙な顔をしてゴツゴツとした両手を机の上につき、

「お義父様！ あなたの娘を、カレンを私にください！」

とんでもないことを口走って頭を下げた。

「トラスア様!?!」

「旦那!? いきなり何を!?!」

「え? あたしをくださいって、それってつまり……ええっ!?!」

突然のトチ狂った発言に場は一瞬で混乱に飲まれた。

それでも俺は真意が何か分かっているので、あえて乗ってみることに。

「この子を幸せにする覚悟があるのかね?」

「はい！ 命に代えても!」

「……うむ、いいだろう。持っていくがよい。カレンも、父のことは忘れて新たな人生を歩むのだぞ」

「ちよつとアレン!? 何言ってるの!? また毒キノコでも食べたの!?!」

カレンの心配を無視して、理解してもらえないようにさらに言葉を続ける。

「それでは、短い間ですが娘をお貸しします。カレン、俺はもう君の家族ではないんだ」

「カレン、これから革命が終わるまでの間だけでいい。私を父親だと思ってくれ」

そこまで言うともマニツクとコウヒが理解し、狼狽え続けるカレンにゆつくりと説明を始めた。

それを最後まで聞いたカレンが不安げにつぐんでいた口を開く。

「……つまり、あたしはトラスアの娘のフリをすればいいってこと?」
「そういうこと」

「なるほどなるほど。……うん、わかった! あたしやるよ!」

そのお札にと、トラスアがティーカップの隣に置かれた自身の菓子をカレンに渡した。

カレンはそれを喜んで受け取り、義理の親子関係が成立。

……いや、俺とて血のつながった親ではないので、義理の義理の親子ということになるか。

「つたく、旦那も人が悪い。相棒はもつと悪い、最悪な野郎だ」

「いやはや、一度言ってみたかったのだよ。ふはは」

「演技だと分かかっていても中々にくるものがありますねえ」

このままカレンの本当の親が見つからず俺が親を続けるとしても、いつか誰かと結ばれて俺の元を発つ日は必ずやってくる。

送り出すその時、笑って手を振れるだろうか。

俺はついてゆけるだろうか、カレンのいない世界のスピードに。



「こちらは娘のカレンです。先日留学を終えて帰ったばかりでして、本日は私の跡継ぎとしての目を養わせるため連れて参りました」

「はじめまして、カレンと申します」

「おお！ ダルボ殿にこのような可愛らしい御息女がいらしたとは——」

取引先や支援者、友好関係にある貴族の元へ赴いて毎度似たような辞令のやり取りをする。

革命に必要な資材や道具の調達、そして援軍。王権側が籠城したり長期戦に及んだ場合の補給のあてなど、我々の助けとなる者との関係を確認し強めることはとても大切なのだ。

「……ねえトラスア。あたし本当に何もなくていいの？ どこに行ってもただ座ってお菓子を食べてるだけで」

七軒目に向かう馬車の中で、隣のカレンが珍しく殊勝な言葉を発した。

「ほう、ただ座ってお菓子を食べていることが悪いという自覚があったのか。君は本当にカレンなのかい？」

「うっ、うるさいわね！ 悪いの!？」

「いえいえ。滅相もございません、カレンお嬢様」

また絶交宣言をされても困るので、教育係としてこれ以上のからか

いもとい進言はしないことに。

そう、今の俺はカレンの父親ではなく教育係だ。

淑女のしの字も知らないカレンを立派、とまではいかないがボロを出さない程度に仕上げる役目を承った。

「ああ愉快愉快。君達には一月と言わず、革命が終わってから私の下で働いてもらいたいものだね。それでカレン、何もなくていいのかと言っていたね」

「うん」

「そう、何もしなくていいのだよ。ただ私というだけで大いに役に立ってくれている。本当だ」

カレンが場にいるだけで空気が暖かいものになり、商談がトラスアに有利に傾き、融通が利くようになる。

早い話が可愛い子の前では無理をしたくなる、恰好を付けたくなるということだ。

中にはいつかカレンを自分か息子の嫁にと企んでいる者もいるだろうな。

しかし我々は後一月も滞在しないので、求婚するならお早めに。……まあ、最低でもアルビン以上の男でないと見合いですらせるつもりはないがね。

「ついでにトラスア様が言いにくい事を代わりに言うと、何かされても困るのさ」

急遽教育係となった俺は、カレンに淑女のなんたるかを暇さえあれば叩き込んでいいるのだが、なにぶん時間が足りない。

なので突貫工事で本当に重要な点だけを抑え、表面を塗りたくって誤魔化すことに決めた。当然貴族令嬢らしい作法などは一割も身につけていないので、余計なことをされると確実に不信感を抱かれる。特にカレンは致命的な粗相をしかねない。

それならば何もせずにじっと座って、いつもの半分以下の速さでお菓子を啄んでもらう方が断然良い。

「はいはい、どうせあたしは問題児ですよーだ」

ふんっ、と鼻を鳴らして外の景色を眺めるカレンを大人達は微笑ま

しく見ていた。

「そういえばアレン君、ここまではどうだったかね？」

緩んだ空気の中で緩んだ表情のままトラスアが俺に尋ねた。

「はい、今のところは問題ありません。……が、デリエン卿は叛意とまではないかとも、トラスア様に対して少なからずの不満を溜め込んでいるようです」

カレンの教育係である俺が雇い主の側に立つてする仕事は、読心術を用いて協力者を見極めることだ。

もしも裏切りやそれに通ずる後ろめたいものを読み取れた場合には詳しく問いただし、屋敷か地下へ御案内して軟禁するだけの簡単なお仕事でもある。

「そうか……」

すぐに緩んだ表情から眉をひそめて少し残念そうな顔に変容した。どこで間違ってしまったのかと思いつらしてもいるようだ。

「しかし彼は良くも悪くも物質主義者であるため、多少高価な贈り物でもしておけば裏切るようなことはないかと。それで次回対面した際に変わらないようであれば屋敷へお連れします」

「うむ、ありがとう。ではコウヒ君、明日にでも二百年物の火酒を三本ほど見繕って贈り届けてくれ」

「かしこまりました」

トラスアはこれでよしと呟いてドウマスク柄のハンカチーフで額を拭いた。

いやあ、難儀なものだ。

当然協力を求める側は生きるか死ぬかの覚悟を決めて臨むが、協力を持ちかけられる側としても二つの選択と四つの結果を迫られることになる。

革命に協力して見事成功した暁には権力と富を増す。

協力したが失敗に終われば、諸共どん底に落ちる。

協力しなかったが革命は成功してしまった場合には、自身の地位をいくらか低くされる。

協力せず革命も完了せず、現状を維持。

最後まで現状を維持とはいえず、逆恨みで殺される可能性が生まれてしまう。

俺が革命を起こすのであれば王を洗脳するか力で脅すかして、誰の協力もなしにヘイワ的に遂行できる。

カレンがトラスアの立場であったのなら類まれなる輝きで皆を惚れ従わせ、そして御伽話の主人公の如き巡り合わせをもつて完遂する。というか革命などせずとも大国の一つや二つは建てられるだろう。

しかし、そうでない普遍なる者達は、いついかなる時も悪手を打つてはいけないという重圧で神経をすり減らし、裏切られたりはしないだろうかという不安に怯え、ついには神々にもすがる。

一般庶民からすれば余裕綽々の表情で涼風を受けているように見えるだろうが、その心には嵐が吹き荒れている。日に一度しか食事のとれない貧者よりも困窮しているのだ。

「ねえトラスア、大丈夫？ 具合でも悪いの？」

「大丈夫だ、どこも悪くはない。私はいたって健康である。……ただ、寿命がちと擦り減ってしまったようだ」

「それ全然大丈夫じゃないよ!」

「冗談だよ冗談、貴族ジョークさ。わはは」

実に難儀である。

第十一話 「魚の餌」

「さあカレン、まずはこれを読むのだ。好きなものからでいい」
ベッドに腰掛けて外を眺めるカレンの隣に、何冊も積んだ本をどんと置いた。

「えーと、『エイ・ケイをちようだいな』『幕天と交換しましょう』『ナザシカエーイ』『マタピネダンの侍女』……」

専属の司書までいる書庫より持ってきたのはどれも貴族についての記述がある本だ。特に貴族の妻や令嬢が活躍するような物語を多く選んできた。

カレンにはそれらを読み込んでもらい、貴族の在り方というものを知る事から始めてもらう。

作法なんかは滅茶苦茶でも、自分が高貴なる者であるという心持ちさえしつかりしていれば案外バレないものだ。

「うーん、どれにしよう……」

「直感で選ぶといい。心配せずともカレンが立派な令嬢になりきれるところは俺を含めて誰も期待していない。元から立場も中身も正反對なのだからね。言うならば猿が人間の真似をするようなものさ。気楽にやりなさい」

「言ったわね?! 絶対になりきってやるんだから!」

カレンを軽く焚きつけてから、俺は仕事へ向かった。

それで昼過ぎには帰ってきてきて部屋に入ると、そこではカレンが全く同じ位置、同じ姿勢で本にのめり込んでいた。

「一応聞けど昼飯は食べたのかい?」

「あつ、食べてないや」

あのカレンが食事もとっていないとは……。

これはさうとう熱が入っているとみえる。

だから俺も做うように本を借りて戻ってきて、それから鍛錬を始めた。

「フンツ……フンツ……フンツ……なるほど、賢者の石というものができたのか……何っ?! 無限の力だど!」

「ねえ、気が散るんだけど」

「おやすまない、どうも歳をとると独り言が出てしまうものでねえ。静かにしよう」

魔法で二百キロ程度に重くした歴史書を素振りしながら読んでいたら文句を言われてしまった。

「独り言もそうだけど動きの方が」

「……だめかな?」

カレンが必死に読み込んで新たな人格を練り上げている手前、ただぼうつとしているわけにもいくまい。

それにやはり、千年という空白は大きすぎた。

頭の中で過去の闘いを浮かべていただけで、指の一本も動かせず魔法の一つも使えなかったのだから当然鈍り錆びつくというものだ。

具体的にどの程度鈍ってしまったのかというと、一秒に二十発打てた必殺の拳が十八発しか打てなくなり。十キロ先にある針の穴を射抜いた魔法の矢も、今では九キロ先のそれを射抜けるかどうかにまで精度を落としてしまった。

それでもまともな感性の人間なら「十分すごい、すごすぎる」「それ以上何を望むというんだ」「お前頭おかしいよ」と言うだろう。実際、五百歳未満の俺も同じことを言うはずだ。

だが、肉体の限界を引き出した上で武を極めた魔人、雲の中を飛ぶ鳥を射落とすエルフ、たった一人たった一夜で城を建て千のゴーレムを製造するドゥーマン、そのようなまともじゃない世界を見てきたからにはそうは言えない。

強者の世界ではコンマ一秒遅れた、たった一ミリのぶれが生じた、などという僅かな甘さと衰えが命取りになるのだ。

かつては俺様に敵う者無しと確信していた時期もあったが、今では五指に入るかどうか。

だって、千年の間に新たな技術や魔法が編み出されていないわけがない。今読んでいる書物にすら、眉唾ものではあるが莫大なエネルギーの秘められた賢者の石とやらの記述がある。

とにかく、だ。この先それらとまみえた時、無傷で対処できるとは

思えない。

ゆえに鍛錬を積む。己を高める。人間の限界点を目指し続ける。すべては来たるべき未来でカレンと笑っていられるために。

「だからって指一本で逆立ち腕立て伏せ歩きしながら足で本を持って読んだり、天井に張り付いてカサカサ動き回りながら本を読むのはどうかと思うけど……」

◆◆

夕暮れの涼しい風に吹かれて、次第に灯が灯され賑やかな夜の街へと変貌しつつある中に行く。

隣におわすご機嫌な少女の歩幅に合わせてはいるが、いつものように手を繋いではない。

「ねえ下僕、今は何がおいしいのかしら」

「はいお嬢様、この時期のこの地域では株野菜が旬でございます。とくに黒カブなんかは美容にも良いとされています」

各々が本を読み続けていたらあつという間に時が過ぎてしまったので、気分転換にとカレンを外食へ誘ったのだ。

そして嫌がるカレンにこれも練習だと言い聞かせて、お嬢様用の華やかなドレスを着せて外を歩かせることに。後押しで好きなものを好きなだけ食べさせてあげると約束したのが功を奏した。

カレンが貴族令嬢をつとめている間は、俺も倣って従者をつとめる。

ここに気兼ねない親子というものはなく、代わりに目上の者と目下の者という厳格な関係だけがある。

「見なさい下僕。あの男はまともな食事もとらずに安酒で酔い、あの女は甘いケーキを食べずに堅そうなパンを食べている。下民を見ているだけで笑いがこみ上げてきますわ！ おーほっほっ！」

「……………カレン？」

「冗談に決まってるでしょ」

もしかしたら読ませる本を間違えたのかもしれない。

中年女性の司書に貴族令嬢の本はないかと聞いて、勧められたものをそのまま借りてきたのだが、あれにはかなり本人の趣味が入っていたのだろう。

「……こほん。夕食にはまだ早いですし、しばらく庶民の街を遊覧しますわよ。ついてきなさい、下僕！」

「お嬢様の命とあらばどこまでも」

それから腹を空かすのも兼ねてしばらくの間遊覧した。

遊覧といってもやることはいつもと何ら変わらない。

カレンの興味と好奇心の赴くままに練り歩き、疑問が湧いたのなら自分で考えさせてからヒントを与え答えを教え、高頻度で何か食べ物を幸せそうに頬張るさまを優しい目で見つめる。

普段なら親子の立場でそれを、大貴族の令嬢とその下僕である教育係という役になりきってしているだけだ。

「下僕、これを割りなさい」

「ああ、大クルミですか。屋敷に帰れば専用の器具があるのでそれまで我慢を」

「ワタクシは我慢をいたしませんの」

やはり読ませる本を間違えた。

実際にお嬢様にはワガママな子の比率が高いので間違っではないのだが、間違えた。

もう少し清廉潔白でお淑やかな人物が主役の本を読ませるべきだった。

「人様の手本になってください、とまでは言いませんからせめて人並みには……」

「小言はいいから早くやりなさいってば！ アレンなら素手で割れるでしょ!？」

「はいはいかしこまりましたお嬢様。それと素が出ているぞますよ」
もう止められそうにないと確信した。

この状態のカレンがいつものように厄介事を見つけて飛び込んでしまう前に、さっさと夕食をとって連れ帰ろうと思索した。

その時であった。

「ちよつと下僕、アレをござらんさい」

「あー……」

カレンが顎先で指す方を見る。

日中ほどは多くない人混みの向こうで、二人の子供が路地裏へ無理矢理連れて行かれるのを目撃してしまった。

「見間違えではないでしょうか？」

「下僕ほどじゃないけど、ワタクシの視力もよろしくてよ」

どうして叡智神はエルフに高い視力を与えたもうたのか。

「アレはきつと、我々と同じように演技をしているだけでしょう。ええ、きつとそうですよ」

「そんなわけないでしょ！ 早くいくわよー」

どうして人族よりも強き心を与えたもうたのか。

そのせいでカレンに危険が迫っているのだ。

全て貴様のせいだ。

いつか俺様が神にでもなった暁には、ぶん殴る回数を一追加してやる。

そう決意して、カレンを見失わないように走り出した。



街路から路地裏へ曲がるとそれが目に入った。

「おめえよお、どうしてくれんだよこれよお」

二人の成人男性がカレンよりも小さい子供二人を隅に追い込んで威圧している。

口ぶりからするに何か子供達が二人に対してやらかしてしまったそうさ。

「ちやんと弁償しやがれ。親も呼んでこい」

「おい待て、まずは一発殴ってからだ。気が済まねえ」

「お止めなさい、愚民」

男の片方が子供の胸倉を掴みいよいよ殴ろうとするところで、カレンがいつもよりも丁寧な口調で止めに入った。

「ああん？ 何だよおめえ」

「そこで何をしているのかしら？」

「このガキ共がいきなりぶつかってきて俺の酒を全部溢しやがったんだよ」

「だからよ、今から弁償してもらうんだよ。邪魔すんじやねえよ」

半分酔っている様子の男が多少ふらつきながらこちらを向いて、空の酒瓶を逆さまにして振る。

その後ろで壁を背に逃げられない子供二人のうち、片方の手には遊びで使うボールがあり、酷く怯えた目で助けを乞う……つて、またこの二人か。

俺の記憶が正しければ、あの日馬車に轢かれそうになっていた子達で間違いない。

この子達はそういう不幸な星の下にでも生まれたのだろうか。

むしろ今日までよく無事で生きてこれたなとつくづく思う。

「見世物じゃねえんだ。さっさと失せな」

「そうはいきませんわ。あなた方のような愚民こそ目障りですもの。その子達を放して消えなさい」

「んだと!？」

「どこの嬢様だか知らねえが、調子に乗ってんじやねえぞ！」

「あら怖い。まさか、ダルボ家の一人娘であるワタクシに逆らうおつもりかしら？」

キツと男達を睨みつけて権力という切り札を切った。

「ああ!? 俺は機嫌が悪いんだ！ 貴族だろうが王様だろうがぶん殴ってやるよ！」

しかし二人がカレンの言葉に怖気ることはない。

酔って正常な判断ができないというのもあるが、良くも悪くも権力に屈しない人間はいる。

こういう輩には直接力で叩くか、本能に恐怖を感じさせるほかない。

「……よろしいですわ。口でわからないようでしたらワタクシが相手になつてあげましてよ」

カレンの唇が怒りでわなわなと震え、両手で握りこぶしを作る。

「お嬢様、暴力はいけませんよ。もちろん魔法も。ご主人様に迷惑が掛かります」

「……………はあ、わかったわよ」

そして動きやすいようにドレスの裾を捲って縛ろうとした寸前に制止した。

たしかに今のカレンならば酔った暴漢の二人や三人を軽々転がせるくらいなんてことはないが、それをしてはいけない。

今はカレン・メーテウスではなく、カレン・ダルボという貴族の一人なのだから。

カレン本人は気にせずとも「野蠻で粗暴な娘がいる」「一体どういう教育をしているのだ」という悪評がトラスアに降りかかる。トラスアに敵対者がいればそれに与することになってしまう。

だから暴力はダメだ。

あくまで賢く温和に、貴族的な解決策を。

『でも、どうすればいいの?』

『さつき買った大クルミを一つくれ』

次の一手が何も考え付かないカレンに瞬きで告げると、すぐに閃いた顔をしてくれた。

「なんだ? やっぱりビビってんのかあ? お嬢様よお!」

「ワタクシの手を汚したくはありませんもの。だから下僕、やっておしまいなさい。ご褒美はそうね、これをあげるわ」

「かしこまりました」

カレンがぼいっと投げた大クルミを掴み取って、それを何度か軽く握る。

「そこのお子様達。今からとても恐ろしい事が起こるから、目を瞑って耳を塞ぎなさい」

「あー? そんなハツタリで俺達がビビると思ってるのか?」

子供達がちゃんと言われた通りにしてから、俺はカレンを背後に隠して男達の目の前に出た。

「おおん? やんのか兄ちゃん?」

「オラ、こいよオラ」

「……お嬢様、本当にやってしまつてよいのですね？」

二人の挑発を無視し、カレンに確認する。

「やりなさい」

俺は許可を受けてすぐに、手の平に乗せた拳大のクルミを顔の前まで持ち上げ。

狼でも噛み砕けないとされる堅い殻を、親指と人差し指と中指で挟んで砕いた。

それをしかと見せつけられた二人からは、魂を抜かれたように威勢が消えて固まつた。

「どうかしら？ 実を言うとワタクシの下僕は人間ではないのよ」

「い……いや、そんなはずはねえ！ ただ怪力なだけで……」

「オジョウサマ。クルミ、タベテモヨロシイデスカ？」

「いいわよ」

動揺する二人を尻目に一度カレンの方を振り返り、そこで耳の下から耳の下まで横一直線に口を裂き。

「ひいつ!」

「あ……うあ……」

再度正面を向いて砕いたクルミを殻ごと口に放り込み。

顎をカパカパと外し入れしながら何度も見せつけるように咀嚼し、飲み込んだ。

「いい食べっぷりでしよう？」

腰を抜かしてへたり込んだ二人にカレンが尋ねる。

しかし彼らはうんともすんとも言わず震えたままだ。

「オジョウサマ、クルミモウナイ？」

「ないわよ。……ああでも、そこに美味しそうな人間がいるじゃない。クルミがなければ人間を食べればいいじゃない」

「タベテイイノ？」

「骨まで食べてしまいなさい。残った肉は池の魚の餌にしてさしあげますわ」

カレンの嗜虐的な視線と俺の餌を見る目に当てられた二人は大粒

の涙を溢しながらも勇気を振り絞り、二手に分かれて俺とカレンの横をすり抜け声も出さずに逃げて行った。

子供の頃にしか信じていなかったような化け物を直に見てしまったのだ。さぞや忘れられない思い出となるだろう。

「ほらあなた達、もうよろしくてよ」

「え……あれ……？」

「ぼくたち、助かったの……？」

ぎゅつと瞑っていた目を開いた子供達は、あの二人が消えたのかと半信半疑できよろきよると見回す。

それで本当に危機が去ったと分かるやカレンに何度も頭を下げ始めた。

「あの、えと……。ぼくたちお金とかぜんぜんなくて」

「お礼とか、その」

「ワタクシが好きにやっただけだから構いませんわ。早く帰りなさい」

「でも……」

「下僕、やりなさい」

「ハイ」

ばあつ、と。

今度は縦に切り込みを入れて四つに裂けた口を顎を外して大きく開いてみせる。

頭から丸かじりしてやろうかという意志を持って見つめると、子供達は叫び声を上げながら一目散に逃げていった。

「おーほっほっほっ!!」

そして最後には、カレンお嬢様の愉快的な笑い声だけが路地裏に響き渡った。

ひと段落ついてから俺は顔を元通りに治してカレンと目を合わせ、パシツとハイタッチ。

そしてカレンが小さく笑い、つられて俺も小さく笑い、すぐに二人揃って腹の底からアハハと大笑いした。

「くくつ！ 完璧だったぞカレン！」

「でしょ!?! アレンこそ何よあれは! 最初見た時あたしも泣きそうになったんだけど! あの子供達、絶対今日の夜寝れなくなるわよ!」

「アレは怪物六十号だ。カレンもやりたいのなら顎の外し方から教えてあげよう」

「ぜったいにイヤ!」

カレンが否定するのに被さるように腹の音が大きく鳴った。

ので、二人で深呼吸してから路地裏を出てついに夕食を食べに向かう。

きつといつにもまして飯が美味しく感じられるだろう。

「……ところでカレンや。さっき『残った肉は池の魚の餌にする』と言っていたが、もしかして見たのか?」

「えっ? 見たって何を?」

「屋敷で飼っている魚に俺の手足を食わせているところを」

「えっ」

「えっ」

第十二話 「愚かで臆病な生き物」

革命予定日まで七日を切ったその日の夜、俺とカレンそしてトラスアは城内の大ホールに立っていた。

大理の壁と天井に囲まれたホールは屋敷のエントランスの十数倍も広く。

金色の輝きを放つシャンデリアがいくつもぶら下げられ。

ホールの端ではオーケストラが舞踏曲を奏で。

いくつも配置された巨大なテーブルの上には色とりどりの料理や果物があり、所作からして品のある人々が談笑しながらそれらを時折つついていく。

つまるところパーティーである。

我々にとつて七日後は歴史が変わる革命の日であるが、そうでない者にとつては毎年定期的に催されてきた建国祭の日だ。

今日は例年通りその成功を願って、国中の貴き者がパーティーに招かれてきた。

もちろん大貴族ダルボ家として入城したのはトラスアとその娘のカレンだけであり、使用人の俺は呼ばれていない。

だからいつも通りに城働きの給仕に自由を与えて夜の街へ放流し、俺が代わりに働いてやることに。

「お嬢様、どうかなさいましたか？」

自ら人口密度の少ない場所に行き、そこでスリのように人の目を盗んで一口サイズの食べ物を啄む少女に声をかけた。

他にも同じ歳くらいの子は何人もいれど、あのような行動をする長耳の子は一人しかいない。

「いえ、えっとその、なにも……………つて、その声はアレンね。驚かせないでくださるかしら」

「いくら仮面を付けているからとはいえ、バレないようにやってくださいよ」

「……………ねえ、この仮面鬱陶しいんだけど外しちやダメ？」

「いけません」

客人だけでなく給仕や奏者を含め、この場にいる全ての人間は仮面で目を隠している。

なんでもこの場だけは普段の上下関係やしがらみを取っ払って無礼講で楽しもうという、代々続く伝統に乗っ取っているらしい。

……まあ、ある程度見知っている相手や有名人であれば誰が誰だか判別できるだろうがね。

「ご覧くださいお嬢様。あちらが第一王子、あちらが第二王子、あちらが第三王子、そしてあちらが」

「第四王子ね。あの屈辱、決して忘れはしませんわ」

次から次へと国の重要人物達を指差してゆく。

今が男盛りの彼らは全て、七日後に殺すことになるかもしれない人物だ。

「さらにあそこでトラスア様と談笑しておられる方が」

「あの感じ……もしかして王様かしら？」

「その通りでございます」

隣に立つトラスアを半分に割った程度に細い彼は、俺がテンノとして最も調べ尽くした男だ。

このパーティーの主催者であり国の統治者であるフリス・ラトロンその人である。

「国王様は今年で五十八歳、身長百七十五センチメートル、体重六十キログラム、足の長さは二十六センチメートル」

「へえ……、そこまで調べたのね。褒めてつかわすわ」

「背中にほくろが四つ、趣味は乗馬、好物は白身魚、好きな女性のタイプは情熱的なひと」

「うわ……、どこまで調べたのよ。というかどうやって」

「寝姿勢は基本右向き時々うつ伏せ、最近の悩みは白髪が目立つようになってきたこと。そして——」

——トラスアの実の兄である。

「……本当、なの？　だって二人は全然似てないし、そもそもトラスアは王族じゃないし」

衝撃の事実にも動揺したカレンが役を忘れ素に戻る。

「この国の歴史についてはすでにご存知ですね？」

元々は地上にのみ国があつた千年ほど昔のこと。ドゥーマンの一族が俺と同姓同名の何者かのせいで故郷から逃げ込んできて地下に国を作り住みついた。

地上の国も成立してからまだ百年と経っておらず発展途上であり、ドゥーマンはこの地に住まわせてくれた人族に対して恩があるので、快く発展の手助けをした。

人族のために優れた道具を作り与え、頑丈な防壁や城を建て、他所からの征服者に抗うためにゴーレムまで製造した。

人族もドゥーマンに作物を分け与え、同じ国民として認めて手厚く保護し酒を振るつた。

そうして持ちつ持たれつの友好関係が形成され、二百年近く平和で穏やかな時代が続いたという。

だが、どこからか亀裂が入つた。

原因は不明だが、突如として関係が悪化の一途をたどり始める。

何か疫病が流行したのを元は部外者であるドゥーマンが持ち込んだことにしたのか、毎度毎度喧嘩で負けて酒を奢らされるのに嫌気がさしたか、はたまたドゥーマンの技術力としもべであるゴーレムに恐怖したのか。

もしかしたら裏で糸を引く者がいたのかもしれない。

そしてついには地上の国民感情が「このままではドゥーマンに国を乗っ取られてしまう」でまとまつた。

そうなつたらもう早いものだ。

ドゥーマンを締め付ける法律ができ、そのうち純粋な人族以外が地上を歩くことはなくなり、物流も遮断されて地下の国からも出て行かざるを得なくなった。

地上の人々は目先の不安が消えたと思つて喜んだが、それはすぐに後悔に変わった。

老朽化していく建築物を元通りにはできず、発展が止まるどころか後退し、他国に攻められてもドゥーマン製の上質な武器はほとんど残っておらずゴーレムを出陣させることも当然できない。

全盛期は十倍もの版図を持つていたのだが、今となってはその中心部だけが辛うじて残っているのみ。

愚か者らは元の小国と変わらないまでに縮小してようやく、自分達の首を絞めていたことに気付いたのだ。

「で、それとどう関係あるわけ？ ドゥーマンはみんな出て行っちゃったんでしょ？」

「一言で申しますと、先祖返りでございます」

人族とドゥーマンの権力が平等で関係も良好であった時代、多少の貌の違いはあれどヒトである両者が惹かれ合い結ばれることは当然であった。そしてそれは王族だろうと例外ではなかった。

そのせいで世代が進むにつれて薄くなつてはいるものの、王族であれば体のどこかにドゥーマンの血が流れている。

わずかにでもドゥーマンの血が流れていれば、その特徴を多く発現する可能性がある。

トラスアはまさにそれなのだ。

「なるほどね。でも、それなら」

「それならどうして王族ではないのかについてもお話します」

トラスアが十歳になって明らかに背丈や骨格、筋肉の付き方が人族のそれとは違うことに自身も周囲の人間も気付いてしまった。

しかもそれは誰が見ても人族ではなくドゥーマンだと断言するほど濃く発現した。

さすればどうなるか。

それはもう盛大に疎まれる。

……いや、庶民であれば疎まれたり虐められる程度で済むだろうが、こと位の高い一族においては命に危険が及ぶ。

存在するだけで家名に傷をつけてしまう者を放っておくわけがないのだ。

事実、過去に王族でドゥーマンの血が濃く顕れた者のほとんどが、

若くして不審死を遂げるか消息が途絶えている。

トラスアもそうなってしまう前に先王である父親によって、信頼ある家つまりダルボ家に養子に出された。

「……ばっかじゃないの」

「その通りです。人族は愚かで、そして臆病な生き物なのです」

「あたしもう、いくね」

カレンはまるで自分が味方になってあげるからと言わんばかりにトラスアの側につき、屈託のない笑顔で務めを果たした。

◆◆

まだまだ宴は終わらない。

カレンとトラスアはあまり自ら動かず、次から次へとやってくる上流階級の方々と軽い社交辞令を交わしてゆく。

最初は誰しもカレンの髪色と耳の形に奇異の目を向けるが、仮面上からでも分かる可憐さとうわべだけは完璧に取り繕っているのもあって、それはすぐさま好意的な感情に転換される。

「なんとまあ！ よくできた娘さんですことー！」

「さすがはハーフェルフ、噂にたがわぬ美貌ですな」

「私の息子をもらってくださらない？」

「いやいや、どうかワシの孫と」

賞賛と求婚、見合いの誘いが降りかかる。

息子や孫の嫁にどうかと言うだけならまだしも、中には歳が三十以上離れているのに自ら結婚前提のお付き合いを申し出る者も。

カレンはそれらの誘いを「まあ！ それはなんて素敵なお言葉でしょう！ ……ですがワタクシはまだまだ未熟な身でございませのでお受けすることはできません」の定型文でやんわりと断っていく。

それでも粘る相手には「次回お会いした際に心変わりされていけないのであれば、必ずやお受けいたしますわ」と期待させて受け流す。

まるで行列のできる屋台のように次から次へと人が流れてゆく。しかしながら、その流れを堰き止める者が現れてしまった。

その者は三度お受けできないと言われてるのに一向に諦めない。
「ですから、今すぐにといいのは」

「私の妻となれば一生遊んでくらせるのだぞ!? なんとって我は王子なのだから!」

「そう言われましても……」

そう、第四王子ネルクだ。

地位や身分を明かさないために仮面をしているというのに、構わず自分の権威をだしに使う。

身体は大人のそれながら、だだをこねる子供にしか見えない諦めの悪さ。

なんでも第一第二第三王子を厳しく育てた国王が後悔し、反動で溺れるほど甘やかしてしまったという。

そして苦勞の一つも知らないままに成長を続け、自由気ままに権威を振り回す怪物が完成した。

「のうトラスア! 我に娘をくれぬか!? もちろんお前には褒美をとらすぞ!」

「私は娘の意志を尊重します。どうぞお好きに口説き落としてください」

「だそうだ! なんならまずは互いを知るまでの間、式をあげずに付き合ってから始めるといいのはどうだ!?!」

なんともまあ図太いものだ。

それに自ら死刑宣告した相手に求婚しているとは欠片も気付いていない。

周りでカレンとネルクのやり取りを見ている人々も酷く呆れているが、誰も我関せずの姿勢で止めに入ろうとはしない。

止めようものならどうなるかを知っているからだ。赤子の頃からほとんど成長しない癩癩とワガママによって壊された者達を見てきたからだ。

だが、それもじき終わる。

同志達の中には、もし革命が失敗しようとも第四王子だけは必ず殺すと息巻いている者が数多くいるのだ。

たとえ自分が許しても、他の誰かが許さない。

たとえ他の誰かが許しても、自分だけは許さない。

己の粗末な欲望を満たすために罪のない他人を傷つけてきたのだから、その報いは当然受けることになる。

地の果てまで逃げても必ず誰かが復讐を果たす。

だからあと少しだけ、好き勝手にするのを見逃してやろう。

「ならダンスはどうだ!? 我と踊ろうではないか! きつと楽しいぞお! なあ! なあ!」

「……わかりましたわ」

そこまで言うならと、ついにカレンが根負けした。

しかし俺は気付いてしまった。

淑女らしい柔和な笑みを浮かべているものの、瞳の奥では怒りの炎が燃え上がっていることに。

第十三話 「皮肉」

楽団が優美な舞曲を奏で、その前の開けた場所で男女がペアを組んで各々楽しそうに踊る。

その中へネルクがカレンの手を引いて強引に入っていくと、まるで潮が引いていくように周りで踊る人々が離れていく。

それもそのはず、ダンス中にぶつかるとして無礼講の通じない男の気分をわずかなりとも損ねてしまったら、どんな手酷い仕打ちを受けるか分からない。だから一切の邪魔にならないように退くのだ。

「存分に楽しもうぞ！」

当の本人は否定されることなく育ったので、そんなことなど知る由もなく乗り気で踊り始める。

片手でカレンの手を握り、もう片手は背中に回し、ご機嫌に踊る。

一二三、一二三と教科書通りの丁寧なステップを踏む。

ネルクは自分から誘うだけあって一応は嗜んでいると言えるレベルのものを持っていた。

時折小技を決めると、周りの人間が大仰に拍手を送る。

それをお世辞だとは全く思わず、ますます機嫌が良くなってゆく。

後はこの調子で満足するまで躍らせればいいのだが、そう簡単にはいかないよなあ……。

「どうだ！ 楽しかろうー！」

「……ええ、そうですわね」

カレンはたとえ嫌悪する相手でも良いものには良い、すごいものにはすごいと素直に喜び称える子なのだが、今はそのような思いが欠片たりとも湧き上がっていない。これっぽっちも楽しめていない。

ネルクがパートナーのことを考えず身勝手な、自分だけが気持ちよくなるためのダンスをしているせいだ。

相手の事を考えられない、いや、考えようともしないお子様そのものである。

ただでさえ自分は大人だから子供の相手をしたくないと公言するカレンにとって、これはとても苛酷で鬱憤の溜まる試練に違いない。

事実目端をぴくぴくさせ、油断したら口から嘔き出てしまいそうな罵声をぐつと抑えている。

ああ、見てもらえない。

よいのだカレン、吐き出してもよいのだ。

俺はトラスアに雇われてはいるが、それ以前にカレンの味方だ。

君がどのような選択をしようとも責めはしない。

ようやく曲がゆったりとしたものから転じて速く軽やかなものになり、そこでついにカレンが自らの意志を解き放たんとする。

「そういえばワタクシ、遠方での留学で特に舞踊を学んでまいりましたの」

獯猛な笑みをうつすらと浮かべて話す。

「実はこの緩い踊りには飽き飽きしてまして、あなたもそうでしょう？」

「う……うむう……」

ネルクの幼いのだか幼くないのだか分からない顔が少し歪む。

「もしもワタクシについてくることができたら、すぐにでも婚約いたしますわ。建国祭の日には式をあげましょう！」

「よし！ 乗った！」

婚約という言葉聞いて、不安や迷いを一瞬のうちに消し飛ばして了承した。

……さて、何分持つだろうか？

「では、いきますわよー」

カレンがまずは小手調べと言わんばかりの素早いステップを繰り出した。

今までネルク主導で繰り出していたものがトン、トン、トン、という欠伸のでそうな速さだったのに対し、カレンのそれはトトトン、トトトン、トトトン、と三倍も速いものだ。

普通なら足がもつれて転んでしまいそうなものを、婚約がかかっているネルクは多少姿勢を崩しながらもなんとか食らいつく。

「うふふ、楽しいですわね」

「そ……そう、だな」

それはまるで蜜を吸うために花の周りを艶やかに舞う蝶や蜂のよう
うで。

フワフワと飛んでいるのを手を伸ばして捕まえようとすると、途端
に機敏な動きで逃げ出してしまふ。そのように形容できる緩急も織
り交ぜている。

「おお、なんと美しい」

「それでいて小気味いい」

カレンについていくのに精一杯で次第に苦しい顔になっていくネ
ルクに反比例し、周りで観ている人々の顔は穏やかでうつとりしたも
のになってゆく。

誰もが魅了されている。

「どうです、ご主人様？」

「……ああ、アレン君か。よくもこの短期間であそこまで仕上げたも
のだ。また君達の給料を上げなくてはなるまい」

「いえいえ、誰が教えてもこうなりますよ。あの子は天才ですから」

実は一週間前にトラスアからパーティーがあると告げられ、その日
からカレンに淑女修行の一環としてダンスの手解きを始めた。しか
しそれに割く時間が特段大きいというわけではなく、むしろ息抜きに
行う程度のものでしかなかった。

だというのに、基本の型を教えたそばから使いこなし、さらには自
己流のアレンジまで加えるようになってしまった。

そのせいで秘境に住む声を捨てた部族の友愛の踊りに、エルフや
ドウーマンに伝わる祭事の舞。はては『トンチラ』と呼ばれる、魔人
が戦いの前に行う演舞まで教えることに。

カレンは俺のような粗末な人間とは違って才能に満ち溢れた子で
あるが、芸術面の才能に関しては俺と同様にこれっぽっちも持ってい
ない。

楽器の扱いは下手、口笛もまともに吹けない、人の似顔絵を描かせ
たら化け物が生まれる、おまけに村一番の音痴である。それなのに、
踊りの才能だけは俺が今まで見てきた者の中でも間違いない三本指
に入る。

「まだまだこれからですわよっ!」

曲調が変わりダンスの内容も変わる。

蝶の舞いと評せる雅なものから、今度は青空の下で野原を駆け回る子犬を彷彿とさせるような、すばしこく活力に満ちた動きでネルクを振り回す。

緩急の緩のないダンスで溜まったモノを放出し続けるカレンは今、とても爽やかで嬉々とした表情をしている。

踊りというのは意思伝達・自己表現の手段でもある。

たとえ言葉の通じない相手でも、踊る事によつて分かり合え、自分の気持ちを伝えることはできる。

もちろん歌や絵でもそれは同じ事だが、やはり身体を動かすという点でカレンには相性がいいのだろうか。

そしてついに。

カレンが己を解き放つて五分と経たずして、その瞬間が訪れた。

「うおっとうとと………へぶっ!!」

意外にも根性を見せて粘っていたネルクだが、さすがにカレンの動きに追いつけず、足をもつれさせて前のめりに転んだ。

それはもうどすんと音がなるくらい盛大に転んだ。

「うぐ、ぐ………」

「あらあら、お怪我はございませんか?」

カレンがしゃがんで手を差し伸べると、ネルクはそれを弾いて立ち上がった。

酷く不機嫌な表情を浮かべたまま無言で直立し、その周りをカレンが一周ぐるつと回る。

「どこも怪我はなさそうでしたですわ。……というわけで今日は婚約することはできませんが、また次回お誘いくださいませ。それではワタクシ、しばらくお花を摘んで参りますのでこれでシツレイ」

カレンは最後まで淑女然とした足取りを保ったままホールを出ていった。

どうやら興奮やら緊張やらで激しく鼓動する心臓を鎮めにいったようだ。

「……」

一人残されたネルクは転んだせいでデコを赤くしたままで、ぷるぷると唇を震わせながらも何も言わない。

まさかあのネルクが大人になったのかと周りの人々がざわつき出したあたりで、ついに怒声を発した。

「トラスアアーツ!! これはどういうことだ!!」

それはもう親を殺されたような形相をして、足を痛めそうなほどにどすどすと音を出してトラスアに歩み寄り、両手でその胸倉を掴んで揺らした。

「トラスアーツ!! 貴様ツ!! 自分が何をしたか分かっているのだろうなツ!? 我に大恥をかかせおつてエ!!」

王子である自分のために娘を差し出さず、あまつさえ恥をかかせるということとはつまり王権に逆らうつもりなのだなど、いつも用いていた方法で恫喝する。

しかし七日後には生きるか死ぬかの革命を起こすつもりでトラスアは全く動じず、それどころかすつとぼけた口調で言葉を返した。

「はて、トラスアとはどちら様のことでしょう? 此度は身分の上も下もない無礼講の場であれば、一体どのだれがすつてんころりんしてしまったか見当もつきませぬ。もちろん、自分から名乗っていなければの話ですが」

「なにをう……!」

「そういえばあなた様は先ほどご自分を王子だと名乗っておりましたな。もしやあの、第四王子のネルク様でございますかな!? ……いえ失礼、それはあり得ませんな。ネルク様はダンスが大変お得意だという話ですので、年若い娘っ子にいいように遊ばれはしないでしよう」トラスアの皮肉を聞いてしまった人々は皆、ネルク相手にそこまで言うのはまずいのではと案じながらもやはり堪えることはできずに、クスクスと抑えるように笑い始めた。

小さな笑いは伝播し、他の者達が笑っているなら自分ももう少し大きく笑っても大丈夫だなど各々判断し、すぐに面白可笑しい大笑いに発展した。

「貴様らあ……！」

笑ってはいけないと分かっているでもそう簡単には止められない。当然それらがネルクの怒りの炎に油を注ぎ、より一層激しく燃やす。

「静まれ！ 黙れッ！ 笑うなアアッ!!」

さすがにそろそろ、壁に飾ってある剣を手にとって斬りかかってもおかしくないの、いつでも止められるようにしておく。

……が、どうやら俺がどうこうする必要はなさそうだ。

「——ネルクよ」

細身の男が背後に歩み寄り、諫めつけるように肩にそつと手を置いた。

この国でネルクより地位の高い唯一の人物だ。

「ち、父上！」

「……ふむ、やはり顔色が悪いな。今日はもう帰って休むといい」

「ですが！ 奴らは我に歯向かい嘲笑したのです！ それはすなわち父上と国にも叛意を抱いているということに他ならない！」

「皆がお前を嘲笑したというのはきつと思いだ息子よ。酔いが回って別の物が見えてしまったのだろう」

あくまで酒のせいにするのでネルクのプライドを傷つけないようにして。

決して「貴様は王家の恥だ、さっさと消え失せろ」などと吐き捨てないあたり甘さが滲み出ている。

「しかし！ 父上……え……」

なおもネルクが継ろうとするのを、フリスが冷たい目で睨みつけて突き放した。

これ以上は庇えない。ここまで甘やかしてきた私も悪いが、お前もそろそろ大人になる時間だ。そんな目をしていた。

「分かり、ました……」

それで完全に威勢を削がれ、肩を落として誰にも目もくれず会場を出て行く。

しかし、俺はその様を見てたしかに感じ取った。

沈黙したネルクの腹の底で、怒りなどという粹組みには収まらない
怨恨の情が生まれてしまったのを。

それを幾度も目にしてきたし、俺自身も復讐に溺れたことが多々あ
るからよく分かる。

きつともう、誰にも止められない。

第十四話 「猜疑」

「では、夜も更けてまいりましたので我々はこれで」

「大変たのしゅうございましたわ」

今が夜であることを忘れさせるほどに煌びやかで賑やかなホールには招待客の半数以上が残っているが、ダルボ家は日付の変わる前に別れを告げて後にした。

「トラスア様、カレン様、こちらです」

俺は給仕服のまま二人を馬車置き場まで案内する。

「はああー……！ つつかれたあー……っ！」

「いけませんカレン様、誰かに見られたらどうするのです。仮面もまだ外してはなりません」

「えー、もういいでしょ」

「いけません、ダメです、よしてください」

「もおー」

「牛の鳴き真似もよしてください」

「牛じゃないもん！」

外気に触れてすぐに、ふああと大口を開けて両手を伸ばして豪快に欠伸をするカレンをたしなめる。

家に帰るまでは遠足、革命が終わるまでは令嬢だ。

「ハハハッ！ まあまあアレン君、今ぐらいは勘弁してやってくれたまえ。カレンは非常によく頑張ってくれた、大いに私を笑顔にしてくれたのだから。君も見ただろう？ ネルクのあの痴態を」

「ええ、アレは傑作でした。……が、少しやりすぎにも思えますね。第四王子には確実に逆恨みをされていると思いますので、くれぐれも夜道はお気を付けください」

「なに、革命が終われば何もできなくなるさ」

「だと、いいのですけどね」

それ以上は何も言わず、カレンが星空を眺めるのを眺めながら同行した。

道中は風が冷たく人氣もない静かな、やけに静かな夜であった。

しばらくすると城外にある馬車置き場が見えてきて、ダルボ家の馬車の御者台に姿勢よく座るコウヒさんと、馬に寄りかかりながらこちらにひらひらと手を振るマニツクの姿が確認できた。

「お疲れ様ですトラスア様、カレン様」

「よお相棒ー、しつかりやれたかー?」

労わりの言葉と共に迎えてくれる二人のもとへゆき、トラスアとカレンを任せようとした一歩手前で何か違和感を感じて足を止めた。

「アレン?」

「どうした相棒?」

「ちよつと静かに」

神経を研ぎ澄まし、夜の闇に紛れるものを探る。

それでマニツクとコウヒさん以外の知らない気配、三十メートルほど離れた場所から発せられる複数の潜めた息遣いを知覚。

いずれ恨みを晴らしにくることは確信していたが、まさかここまで行動が早いとは思ってもみなかった。……いや、これが第四王子の送りつけた刺客だと決まったわけではないが。

「……ああ、何でもない。ただの勘違いだったよ」

すぐさま同僚のテンノ二人に狙われていることを合図し、平静を装いつつトラスアとカレンを馬車の中に押し込む。

カレンに「夜更かししないで先に寝ていなさい」と告げてからドアをしつかりと閉じ。

「よし行けー!」

「後は俺達に任せとけ!」

馬車をコウヒさんに任せて全速力で走らせた。

それで機をうがかっていた者達が出ざるを得ず、暗がりから次々と現れて襲ってくる。

数にして九人といったところか。

「ほいつ、ほいつ、ほいつとな!」

まず先にコウヒさんと馬の首、それと馬車の車輪を狙って投射される無数のシューリ剣に対し、もしものために持てるだけかつぱらっておいた銀の矢ならぬ銀のスプーンを投げて全て落としていく。

その間にマニツクは俺を信じて煙幕を用いて闇に紛れ、刺客達の懐に入って乱戦に持ち込んでいるようだ。

元々腕利きであったのをさらに特別指導で鍛えてやったので、彼らが余程の実力者でなければかすり傷の一つや二つ負う程度で済むだろう。

よし、あと十秒と耐えれば馬車が夜の街へ消える――

「邪魔をするな！――《青キ火灯レ》！」

などと油断していたらこれまた想定外な。

まさか魔法を使える者がいたとは。

「相棒ッ！」

「――《追エヨ貪レ蛇蒼炎》」

すんでのところでこちらも蒼い炎を走らせ、青い種火が馬車に着弾する前に飲み込ませた。

それでついに俺を直接殺して馬車を追おうとする者が三人同時にかかってきたが、マニツクに助太刀したいのもあったのであまり時間をかけずにサクツと意識を奪い取った。もちろん俺の得物は二丁持ちした銀のスプーンだ。

「なっ、なっ、なんでそんなデタラメな武器でっ!？」

「世界最強のコックだからさ。料理の腕は未だ世界で百位にも入れないがね」

ついでに動揺している魔法使いも一発殴って落として相棒の下に駆け付けたが、特に手痛い反撃を受けることなくすでに鎮圧を完了していた。

「わりい、全員やつちまった。そっちは？」

「みんな気を失ってはいるが生きているよ」

「さすがだな。……っーか相棒、お前魔法まで使えたのかよ。どうして教えてくれなかった？」

「いやいや！ 使えるといってもアレだけさ。あの魔法だけを偶然大昔に教わったんだよ。だから本当に運が良かった」

「……そりやすげえな」



近場にある廃屋に気絶している四人を運んで縛り、側には五つの死体を並べて。

今一度きちんと拘束したかを確認してから頬を叩いて目を覚まさせた。

「ん……、ヒイツ!? し、ししし死んでるツ!! ……ああ! そうだ私は!」

全てを受け入れたテンノ達が静かに諦観しているのに対して、改めて現状を認識した魔導士だけが命欲しさに騒ぎ立てる。

「頼む見逃してくれ! 私は宮廷魔導士だ! 金ならいくらでも払う! だから!!」

「はいはい、君には最後に聞くから今は黙っててくれるかな? 夜だし近所迷惑になるだろう? それともこの先ずっと喋れなくした方がいいかい?」

人気がない場所を選んだとはいえあまりうるさくされても困るので、脅しつけて一旦静める。

「というわけで、ぼちぼち話してもらおうかな?」

「全部話してくれたら十日後には生きたまま家に帰してやるよ。俺も鬼じゃねえ」

「鬼じゃねえだ? ハッ! 五人も殺したくせによく言うぜ!」
至極真つ当な意見である。

「まったく、どうしてくれるんだい相棒?」

「し、仕方ねえだろ!? やるかやられるかだつたんだからよ! ……
んでよ、話す気はねえか? 拷問も何もしねえから」

マニツクは男の前でしゃがみこみ、目線を合わせて問いかける。

「こんなところでネズミとウジに喰われながら死にたくはねえだろ? あと三分待つから言う気があったら言ってくれ。口裏合わせができねえように一人ずつ別室で聞くからよ」

「誰が言うかよ! てめえもくたばれツ!!」

そのままペツと吐き出された唾をマニツクは首の動き一つで避け

る。

「あぶねえな、何すんだよてめ——」

マニツクの意識が一人のテンノに向いたその瞬間、残りの二人がそれぞれすぼめた口から何かを射出した。

「おっとー」

俺は咄嗟にその内の一つ、マニツクの首筋を狙って飛ばされたものを二指で掴み取る。

針だ。

それをポキッと折ると唾液ではないものが滴り落ち、わずかに触れていた指が痒くなった。

「……含み針か」

「クソツ……化け物…………め」

最初からすでに覚悟はできていたのだ。

自身も服毒し、俺を虚ろな瞳で見つめながらすうつと眠るように灯火を消し。

残りの二人もすぐに後を追って事切れた。……だけではすまなかった。

「あ……が……っ。くる、し……。いやだ、死にたく……ない……」

たった一人残された宮廷魔導士様も口封じに毒の含み針を刺されていた。

マニツクとは逆方向の彼に向けて放たれるのが見えてはいたが、俺の未熟さゆえに守ることができなかった。

「相棒、得物を貸してくれ。今はスプーンしか持っていないんだ」

「ああ……」

だからせめてもの詫びに、何分と苦しませずに楽に逝かしてやらねば。

「すまない」

「う……」

一言の謝罪を添え、魔導士の目を手で覆い隠しながらその心臓を貫いた。

その直後に口から弱々しい息と血を吐き出し、そして静止した。

結局、誰一人として口を割らすこともできずに死なれてしまった。
「俺が殺した五人はきつちり処理しとくわ。残りは任せた。終わったら飲みにいこうぜ」

「……そうだな」

腕の立つテンノであるマニツクは、その手で五人を殺し残りも目の前で死なれてしまったというのに特に落ち込むこともなく手短に告げる。

それから五つの死体を二度に分けてどこかへ持ち運んでいった。

完全に辺り一帯から人の気配が消えるのを待つてから、あまり世間様には見せられない俺なりの後片付けを始めることに。

「ふうー……。失敗しませんように……」

まずはマニツクに唾を吐いた男の亡骸に、切に憐れみながら一つの魔法を唱える。

「――《憎ニクキヲ離ハナスナ穴底深クへ》」

これは一般には禁術に指定されている、どころか存在すらもほとんど知られていないものだ。

死人の強く恨む相手を死人自身に報復させるという、卑劣で重苦しく倫理観に欠けた魔法の法である。二千と三百年前にこの魔法を編み出した俺自身もつくづくそう思う。

しかしながら製作当初はそうは思わなかった。

当人以外にまで伝染する、殺し殺されの復讐の連鎖というものをこれ以上見たくないが故に編み出したのだから。

「……そうか。君は誇り高いテンノとして生き、誇り高く死んだか。その顔を覚えておこう」

一人目は不発……。いや、発動はした。服毒して死んだはずの人間が一度目を開きはしたが、起き上がりはせずすぐに目を閉じた。

二人目と三人目も同様であった。

どうしてそうなったかって？

それは誰も恨んでいないからさ。

自分を殺した相手も、自分を殺した相手の下へ送り込んだ主人も恨んでいない。幼い頃から己はただの道具であり、余計な私情を全て捨

てるようにと教育されてきたのだろうかよ。

「でも、君は違うよな？　魔法の才能ある人間として生き、夢も希望もあつたはずだ。それを愚かな主人のせいで吹き飛ばされたのだから強く恨んでいるはずだ」

哀れな魔導士の手にテンノの一人が所持していた短剣を握らせ、立ち上がるよう強い念をこめて唱える。

すると彼はぱちりと両目を開き、生前と変わらぬ姿と動作で立ち上がり、自分の手に剣があることを確認するやいなやこちらを向き、

「ぐっ……………カハッ！」

何も言わず俺の左胸に深く刃を突き立てた。

「そう、だ…………。それで、いい」

薄れゆく意識の中で、彼がテンノの死体から新たに剣を取って出ていくのを見届けることができた。

◆◆

再び目を覚ますと魔導士の死体はやはり消えていて、俺の胸に刺さった短剣も柄だけが残っていた。

「君達も次はもう少し長く生き、幸せな死に方をするのだぞ」

三つの死体から全ての水分を奪い取ってカラカラにし、肉も骨も全て砕いてさらさらの粉にして、それらを夜風に運ばせた。

さらにこの近辺に訪れた人間が不気味に思うことのないよう、死臭を消しておく。

全ての処理を終えた後で、約束しておいた場所と時間にマニツクと再び顔を合わせた。

相棒からはちよつと鼻の良い人間なら気付くくらいのも、濃い血と泥の匂いがする。血抜きして埋めたのだろうか？

「そつちも全部終わったか？」

「おう、バツチリだぜ…………って、どうしてそんな酷えツラしてんだよ」

「俺はそんなに酷い顔をしているか？」

「相棒でもそんなに悔しそうで悲しそうな顔をするんだな」

「ああ……。死んでいった者達のことを思うと、やはり哀れに思えてな」

「おいおい！ 相棒がいなかったら俺は今頃死体の山に積まれてるぜ？ むしろ笑って喜ぶところじゃねえのか？」

「だが、俺があと少し速く動いて俺の手足があと少し長ければ、魔導士の彼ぐらいは救えただろう」

俺が少々欲張りな発言をしたせいで、二人して黙りこくることに。いくばくかの間を空けて、再びマニックが口を開いた。

「そうそう。さつき飲みにくつつたけどよ、ちよつとやることできちまって今夜はいけねえわ。とにかくあの礼は後で必ずすつからよ。期待して待ってろ」

俺に疑問を投げかける隙も与えず一方的に告げると、屋敷とは逆の方向へ走って闇の中へと消えていった。

「忙しないやつだな。……。しかしあれは、そういうことなのか？」

一流のテンノである彼は平静を装っていながらも。

あの日俺を組み伏せた時と同じ、得体のしれないものへの不信感と警戒心を抱いていたように見て取れた。

「……ダメだ、心当たりが多すぎる」

どうしてそのように感じてしまったのかは次会った時に直接聞いてみるとしよう。

俺としては良好な関係を築いてきたつもりだが、一体いつどうして亀裂が入ってしまったのかは全く見当がつかない。まだ綻びに気付けただけよしとしよう。

五千年生き続けたおかげである程度は他人を見透かすことができようにはなったが、いつでも正確に読み取れるというわけではないのだ。それができたら俺の死亡率はぐつと減るだろうに。

翌朝になってネルクが魔導士に刺殺されたという報せを耳にし、それを肴にして飲むとマニックが嬉々として誘いに来るものだと思っていたのだが、彼は来なかった。

どころかそれから三日三晩、一度もあの尖った悪人面を見ることは

な
か
っ
た。
。

第十五話 「大人ってほんと汚い」

マニツクが行方知らずとなってから二日が経った日の朝。

革命の準備はほとんど完了しているので、カレンと街をぶらぶらして親子の休日を満喫しようかと思いついた時だった。

逆にカレンから「今日は一日中あたしに付き合って！」と誘われた。それもなんだかとてもワクワクしている様子で。

きつと素晴らしいプランがあるのだろう。

「して、どこへ何をしに行くんだい？」

「地下を探検するわ！ お宝があたしを呼んでいるの！」

「はい、解散」

「なんでよっ!？」

俺は深く溜息を吐いた。

「昨日読み終えた冒険活劇を、夢の中でも見たかね？」

「なんでわかるのよ!？」

「お子様の考えることなど手に取るように分かるわい」

カレンは年不相応に賢く大人勝りなチカラを持ってはいるが、年相応に愚かで夢見がちで馬鹿げたことが大好きである。

それが良いことか悪いことかはともかくとして。

毎度毎度振り回されるこちらの身が持たない。というか実際カレンの思いつきが原因となって何度も死んでいる。

「ならいいもん！ あたし一人で行くから！」

「——《タカラ資ウツモ産イモ凍ムステ結ベ》」

「ちよっと!? ドアを凍らせないでよ！ 出してっばー！」

「こんな天気の良い日には部屋でゆっくりするのが一番さ。お父さんの昔話ならいくらでもしてあげるからな！ 聞いているだけでワクワクドキドキして心臓の鼓動が速くなること間違いなしだ！」

「それはワクワクドキドキじゃなくて血生臭い実体験を想像して怖くなるからでしょ!?! ……とにかく! 今日部屋でじっとしてるといって冒険がしたいのっ! あたしやることやってるじゃん! 頑張ってお嬢様してるじゃん! だからいいでしょ!?!」

止めようとするればするほどカレンは加熱していく。

「はぁー……」

俺は先ほどよりもさらに深く長く溜息を吐いた。

「どうやら父親初心者の俺には、思春期と反抗期真っ盛りな娘の説得は不可能みたいだ。」

「なら、いつもみたいじゃんけんして勝てたら付き合っただけよ。」

「やだー。アレンが絶対勝つもん！ あたしの筋肉の動きを見て何を
出すか読めるんでしょ!? マニツクに教えてもらったんだから！」

相棒め……。よくも、よくもやってくれたな。

カレンを抑える大切な手段の一つをよくも奪ってくれたな。

後で貴様の大切な何かを奪ってやるからな。

「わかったわかった。それならコイントスはどうか？ 三回連続で表
を出せたら地の底でも世界の果てでもついていこう」

「それならいいけど……」

カレンの了承を得たので財布から硬貨を一枚出して渡した。

「ちよつと待って。絶対にコインが裏返る魔法とか、かけてないよね
？」

「……………よくぞ見抜いたな賢き娘よ。不死者ポイントを贈呈だ」

「大人ってほんと汚い」

「カレンを試したのさ。……ほら、こっちはちゃんとしたやつだ。た
めに投げてみるといい」

今度こそと別のコインを投げ渡す。

当然まだ俺の事を疑っているカレンはすぐに試した。

それで四回投げて、裏を三連続で出してからようやく表を出した。

「おやおや、ずいぶんと出目が悪いようだが？ 今日珍しくツイて
いない日なのかな？」

「まだ練習だからー」

何もカレンの運勢が悪いというわけではなく、誰だっけこうなる。

実は四回投げたら三回は裏が出る具合にコインの一部を重くした
のだ。

絶対に表が出ない魔法はかけないと約束したが、表が出にくい魔法

をかけていないとは一言たりとも言っていない。

「くくく、自信がないのならじゃんけんにしてもいいんだぞ?」

「やるわけないでしょ!」

とにかくこれで三回連続表が出るようなことはまずないだろう。

単純計算で六十四分の一の確率しかないのだから。

「さて、そろそろ練習はいいんじゃないか?」

俺が促すとカレンは両手でコインをぎゅっと包み、それから人差し指の上に乗せて二度深呼吸をし。

「えいっ!」

掛け声と共に親指でピンと弾いた。

手前に着地したコインがくるくると回る様を二人でジッと眺める。

次第に回転が弱まって倒れ、豊穰神フアテイルの柔らかく微笑む肖像が描かれた面が上を向いた。

「やった!」

「むむ……」

まだ、まだ焦る必要はない。

たかが四分の一を当てただけだ。

「いけっ!」

カレンが先ほどと同じ仕方で念じてコインを飛ばす。

今度は接地したその場で回転せず、走行中に外れた車輪のように転がっていったベッドの足に当たって倒れた。

そしてまたしても、女神が笑っていた。

「よしっ! もう一回!」

「ぐ……」

練習では二連続で表を出していないのに、まさか本番で成功させるとは思わなかった。

だが、さすがに三連続は六十四分の一だ。俺だったら百度やってもきつと成功しないと自信を持って言える確率だ。例をあげるなら腹を刺されても臓器と臓器の隙間を通って軽傷で済むくらいのものだ。

だから次で失敗する、失敗してくれ!

当たり前が当たり前に起こってくれ!

「いくよ?」

「……うむ」

ピンツという澄んだ音を出してそれは弾かれた。

コインは先ほどのように転がりはずにその場で回転を始める。

無音で、しかし命を吹き込まれたかのようにやけに粘り強く回り続ける。

「……っ」

俺もカレンも固唾を飲んで見守る。

時間は一投目とさして変わらないはずだが、一秒一秒がとても長く感じる。

それでもついに回転が弱々しくなって止まり、傾いた。

微笑む女神は地に向かってキスをしようとしている。

「——きてー!」

俺が勝ちを確信して口角を上げた、その瞬間だった。

カレンの呼びかけに答えるようにヒユウツと音がした。

そよ風が気持ちいいからと開けていた窓から、はやてが吹き込んできたのだ。

「待っ……」

俺が反射で声を出した時にはすでに、床を舐めるはずだった女神が心地よさそうに天を見上げて寝そべっていた。

「……………た……………」

「いやったあああーっ!!」

落胆する俺をよそにカレンが狂喜乱舞する。

「やったやった! あたしの勝ちっ!」

「なぜ…………。一体どうして…………」

カレンが魔法で風を吹かせた? ……いや、そんなことはない。人より顔に出やすく嘘を一度も隠し通せたことのないカレンに、ズルをしたという後ろめたい感情は浮き出ていない。そもそもこの子は不正を好まない。

つまり、紛れもなく偶然によるものだ。

「ふふん! 正義は勝つのだよ!」

俺がコインに細工をして悪に堕ちた瞬間から、敗北は確定していた。

それともなんだ、これも神罰とやらか？

貴様らが祝福する小娘に俺がちつとばかり汚い手を用いただけで大変お怒りであられるか？

さんざ貴様らの息のかかった者共に苦汁を飲まされてきたというのに、こんなところでまで俺を苦しめるというのか？

「次も何かあったらこれで決めよーね！」

次からは「やだ！ カレンが絶対勝つもん！ 幸運を引き寄せて何でも思い通りにするんでしょ！」と断固拒否してやる。

いつか六大神をぶん殴る際の回数を追加すると共に、固く心に誓った。



「というわけでコウヒさん、よろしくお願いします誠申し訳ありません心よりお詫びいたします」

「よろしくね！」

「こちらカレン！ ちゃんとおじぎをするのだ！ コウヒさんは我々と違って忙しいのに付き合ってくれるんだぞ！」

「いえいえ、お二人には返しきれない恩がありますので。私に出来ることであればいくらでも力添えさせていただきます」

地下を探検するにあたって、ほぼ全ての構造を把握しているコウヒさんに案内役を頼むことにした。

二人でカレンを見守ればより確実であるし、立ち入り禁止の場所に踏み入れてしまいそうな際に止めてもらうためでもある。

「それじゃ、しゅっぱつしんこーっ!!」

よく寝てよく食べたおかげで疲労の欠片もないカレンが薄暗い中を速足で歩き、そこから十数歩下がったところで俺とコウヒさんが並んで見守る形となった。

(本当にすいませんねコウヒさん。俺の身体でよければ後でいくらで

もお貸ししますので)

(……………よろしいのですか?)

(はい。調べるなり型を取るなり好きにしてください。なんなら秘伝の鍛錬法も教えますよ)

(そんなことまで……………！ それでは私も、カレンさんに満足してもらえるように誠心誠意務めさせていただきます！)

ちよつとした密約を交わすと、すぐにコウヒさんは小走りでカレンの隣について任務に取りかかる。

「ねえコウヒちゃん、お宝の眠ってそうな場所を知らない？」

「古の住民が遺した貴重品などはほとんど回収されているはずですが、もしかしたらまだどこかに隠されているかもしれせん」

「ほんと!?!」

「はい！ 必ずや見つけましょう！」

本人のいないところではしばしば《氷の仮面》などと称されるお堅い人だが、今は年頃の女性らしい穏やかでかつ活力に満ちた笑みを浮かべている。

コウヒさんは同性だからというのもあるがカレンとは比較的仲が良く、ある面に関しては俺よりも信用されているところもある。これが存外くやしいのだ。

彼女との会話は事務的なものが大半であつたのでそこまで深く分析できてはいないが、一般的に言う「素敵なひと」で間違いない。肉体のこととなると多少おかしくなる部分もあるが、それでもマニツクが惚れるのは理解できる。

俺の見立てが正しければ、コウヒさんは悪い人ではない。

実直で冷静で優秀なテンノで、それでいて情もある。

「この階層は隅から隅まで調べ尽くされているので、さらに下に行きましようか」

「うんー」

人となりが見えにくいようでも近い二人が仄暗い地下に明るさをばら撒いてゆく――。

「……うーん、この階はもうないかなあ」

「ん？　なんだこれは？」

何の収穫もなく二層での探索を終えて三層へと降りる際、階段の壁に手を差し込めそうな窪みを見つけた。

手に持ったランタンでよく照らしてみると、その窪みを長方形に囲んだ部分だけ微妙に感触と色彩が周りの壁と違う。窪みに手をかけて少し押すと、向こう側が空洞で窪みの周りを押して開けられそうな感覚が返ってきた。

隠し扉で間違いない。

「なにこれ！　アレンすごい！　よく気付いたね！」

「フフフ」

二人が俺の存在を半分忘れて探索に没頭しているをただ見守っていたわけじゃない。

宝を見つけて少しでもカレンの好意を得るために、実は二人よりも注意深く調べていたのだ。

「コウヒさん、これは開けてもよろしいものですか？」

「ええっと、この先はたしか墓室ですね。どうしますかカレンさん？」

「墓室って……」

「もしかしたら、高価な指輪や装飾を着けたままの遺体は残っているかもしれません」

「それをとつたら泥棒じゃない！　次いくよ次！」

なるべく早くこの場から離れようと、カレンはさっさと階段を降りていった。

……しかし、こんなところに墓所……ねえ？

それにどういうわけか、コウヒさんからは何かを隠し通そうという意志を感じ取れた。

「まあ、気にすることでもないか」

一抹の不安を振り払い。

俺は少しずれた隠し扉を引いて元通りにしてから、やはり間を空けて二人の後を追った。

第十六話 「開かずの扉」

「あらあ！ カレンちゃんいらっしやい！ コウヒちゃんも珍しいわね！」

「おばさん！ あたしは親子丼二つ！」

結局、三層での調査を何の収穫もないままに終えて、ひとまず地下一層にある食堂で腹ごしらえをすることに。

先に厨房のおばさま方に注文をして、テーブルに着いた途端にカレンが文句を言い始めた。

「んもー！ 何が七不思議よ！ デタラメばっかじゃん！」

もしかしたら宝に関連するものが見つかるかもと、この地下王国でまごとしやかに噂されている七不思議も解明していったのだ。

「ネズミの足音を別の何かと聞き間違えたってのはわかるけどさー。のぼりとくだりで階段の数が違うって言いだした人はバカなんじゃないの!? そもそも皆から聞いたのを合わせたら七不思議どころか九不思議もあるし！」

「ハハハ、七不思議なんてそんなものだよ」

「申し訳ありませんカレンさん、私の下調べが足りないばかりに」

「コウヒちゃんはどこも悪くないよ！ でたらめなことを言った人はみんな覚えてるから、あたしが後で仕返しにおどかしておくから！」

どこぞの尖り顔とは違って誰に対しても生真面目なコウヒさんが自身を責め、それをカレンが必死に慰める。

それでこの後はどうしようかと話し込んでいると。

「はいおまち、親子丼の二人前大盛りだよ。それとさっき聞いたよカレンちゃん、宝探しをしているんだってねえ。何か見つけられたかい？」

おばさまが大盛りの二人前とおまけの焼き菓子のカレンの手前に置いてくれて、そのまま話に入ってきた。

「ぜんぜんだめ。何か知らない？」

「そうねえー……。最下層に開かずの扉があるっていう七不思議は聞いたことあるけど、詳しくは知らないわねえ。ごめんさいね」

「ううん大丈夫、おばさんありがとう！」

おばさまが厨房に戻つてすぐに、カレンはいただきますも言わずに山を切り崩して大きな一口をふくんだ。

そして五回と嘸まずにごくんと飲み込んでから神妙な面持ちで呟いた。

「これで十不思議……」

「この分だと二十はいくんじゃないか？」

「冗談でもやめてよ。それはそうとコウヒちゃん、本当に開かずの扉はあるの？ 扉の先に何があるの？」

「私もトラスア様も中を見たことはありませんがたしかにあります。それに一応鍵も持ってきます」

ジャランと音を鳴らして黒塗りの鍵束をテーブルの上に置き、それをカレンに渡した。

ひいふうみいと、ぱつと見ただけでも黒い鍵は二十本以上ある。

「……鍵、多くない？」

「何を隠しているのかは知りませんが、開かずの扉は複数ありますので」

「よかったなカレン！ これで二十不思議は超えたぞ！」

「よくない！」



すたすたすたと、三人分の足音だけが延々と木霊する。

「ほんと誰もいないわねー」

三層までは居住区域があるので五分に一度は誰かしらと出会ったが、最下層の四層には重要な施設がなく物置同然なので本当に人がいない。

そのせいでより一層寂しい場所に思える。

なおかつ作られて千年近く経っていて当時の修繕技術を持つ者もいないので、いくらドゥーマン製の建築物であるといっても老朽化が著しい。もつとも圧力のかかるこの層は特にだ。

昼夜問わず薄暗くて空気が重く、ひび割れて今にも崩れそうな壁や天井の多い最下層を歩くだけでもちよつとした肝試しになるだろう。「怖いのならパパにしがみついてくるといい。それか抱っこしてあげようか？」

「いらない」

「であればお嬢様、明るく歌でも歌ってさしあげましょうか？ 鎮魂歌などはいかがでしょう」

「うん、よそでやって」

カレンは今、極めて真剣に探検している。

そのせいか、まるでコウヒさんの淡々とした仕事ぶりに倣うかのように最低限の言葉で断られてしまった。空気がひんやりとしているのもあつて余計に冷たく感じてしまう。

「……はい」

普段ならばもう少しからかっているところだが、今はこれ以上しつこくしたら酷く嫌われてしまう可能性があるのでさつと身を引く。

俺にとつて崩落や幽霊なんかよりよほど恐ろしいことなのだ。

我々は地図が頭に入っているコウヒさんの案内にしたがつて、寄り道をせずに扉から扉への最短距離を歩き続けた。

「カレンさん、あそこを曲がった先に最後の開かずの扉があります」

「どーせ、今回も何も無いよ」

これまでに全部で二十四本ある鍵のうち二十三本を使い二十三枚の扉を開けた。

そしてその全てがハズレだった。どれもこれも扉を開けた先に空間はなく、ただ堅い壁があつたのみ。

それでもまだ開けた瞬間に毒矢が飛んできたり、落ちたら骨折してそこで飢え死ぬような返し付きの落とし穴がないだけマシではある。

「あーあ、人生はとても短いっていうのにムダな時間を過ごしちゃつたナー」

十連続でハズレを引いたあたりから、カレンは拗ねてやけっぱちになつていた。

もしかしたら二十四枚の扉全てが誰かがイタズラで作つた偽の扉

ではないかと、使える鍵が一本ずつ減っていくたびに強く疑うようになり、今ではほとんど確信に変わっているようだ。

この経験を糧に、カレンは良くも悪くも大人に一步近づくだらう。「宝はあったと思うよ。宝はあったけど、先に誰かが取っていつてしまったのさ」

こんなこともあるさとカレンを慰め、今日はもうやめにしてみんなで美味しいものでも食べに行こうと提案した。

「そうする。これを開けたら今日はもう帰っ……」

しかし、いざ扉の前に立つとカレンの様子が変わった。

鍵穴に挿し込んだ鍵を回さずに固まっている。

「どうしたカレン?」

「……ねえ、なんか寒くない?」

「寒いだと? コウヒさん、寒いですか?」

「いえ、特には」

コウヒさんもそうだし、環境の些細な変化に気付けるように鍛えた俺の肉体に問いかけても異常はないと答えている。

となるとカレンの頭が疲労でやられてしまったのだろうか。

「カレン、大丈夫か? 具合が悪いなら無理せず言いなさい」

「そうじゃない。この扉の向こうから、なんて言ったらいいかわからないんだけど……すごく、よくない感じがするの」

「ああ、そういうことか」

このような反応をする者を数多く見てきたのですぐにわかった。それはしばしば感受性が豊かな人物で、女性によく見受けられた。

いわゆる「嫌な予感がする」とはまた別の「何かいる気がする」というものに違いない。

「もしかしたら開けた瞬間にバァーって出てくるかもしれないねえ」

「変なこと言わないでよ」

「どれ、そういうことならお父さんが開けてあげよう」

怯えるカレンをさがらせて鉄の扉を勢いよく開けた。

今度こそ目に入ってきたのは石の壁ではなくがらりとした部屋とその奥に佇む祭壇、そして――

「——アレンさんッ!!」

部屋の最奥より三本の矢が視界に飛び込んできた。

「おっと、危ないなあ」

俺は当然、ぐんぐんと大きくなるそれらが肉を裂いて食い込んでしまふ前に全て掴み取った。

それらはちようど俺の胸の高さつまりはカレンの顔あたりにきたので、やはり嫌な予感とやらは当たっていたのだ。一歩間違えれば可愛い娘の顔に穴が空くところだった。

「だ、大丈夫ですかアレンさん!?!」

「ええ、なんとか」

コウヒさんは俺の無事を確認するとホツと息を吐いた。

その直後に背後からカレンに袖を引つ張られ。

「……ありがとう」

時折見せる申し訳なさそうな顔で礼を言われた。

きつと冷静になって自分自身を情けないと責めているのだろう。

「なに、カレンが予感してくれたおかげさ。俺一人だったらどうなっていたことやら」

年代にもよるが、多少力をつけたからと傲岸不遜でいた頃の俺であれば対処しきれなかったかもしれない。

誰にも見られていない場所で矢が膝に刺さろうが心臓に刺さろうが特に問題はないことは置いといて、だが。

「……ところで、この部屋は一体?」

まだどんな罠があるのか分からないので、我々は皆あくまで外から見える範囲を覗くだけにとどめていた。

「私は今初めてこの部屋の存在を知りましたし、おそらくトラスア様もこの部屋についてはご存知ないかと思われます」

本当に長い間循環されていない空気が漂っているし、それに何十何百年と人の出入りした痕跡が一切ない。

あの祭壇が何に使われていたのかは知る由もない。

それでもただ一つだけ、分かることはある。

「ねえアレン、あれって……」

「純度のほどは分からないけど、あの輝きは間違いなく金だね。高価な宝石ばかり嵌め込まれているし造りも精巧だ」

祭壇の上で一際目を惹く黄金の冠が輝いていた。

それはまるで峰から顔を出す太陽のようであった。

誰も使っていない今では宝と形容するほかない。

つまり宝探しというカレンの目的が果たされたのだ。

「……よし、取ってこよう。カレンはここでコウヒさんと待っていないかい。何が起こるか分からないからね」

「うん、わかった。……でもあれ、取っていいの？」

「誰にも知られず愛でられてもいない宝なんて死んでいるようなものさ。近所の子供が作った花の冠の方がよっぽど価値がある」

そうカレンに断言して、部屋に足を踏み入れる。

石橋を叩くように、床に落とし穴はないか体重を乗せると作動する仕掛けはないかを足で念入りに探り。

矢の射出されそうな怪しい穴はないかと部屋の全ての面の隅から隅までを視て。

嗅覚を鋭くしてどこからか毒気が漏れ出ていないかを感じ取り続ける。

魔法の類は一切使わずに最大限の用心をして、祭壇までの一步一步を踏みしめる。

もっともここまでせずとも一番安全で手っ取り早い方法はある。それは宝の冠だけを残して部屋を賈ごと粉微塵に破壊するというものだが、コウヒさんがいる手前できはしない。

それで結局、十メートルほど進むのに何分も時間をかけて祭壇の前にやってきた。

「ふーむなるほど……下弦造りに薄羽叩き、千波彫りまで施してあるか」

触れずに至近距離で冠をまじまじと鑑賞して、それが紛れもなく本物の宝であると。

ドゥーマンの優れた金細工職人の手による逸品物であることを確信できた。

「ではそろそろ、いただこうかな……いや」

宝の置かれた祭壇に何の仕掛けもないことを確認して持ち上げようとする前に、カレンの方を向き直って再度尋ねる。

「そういえば、まだこの部屋には『何かがある』のかい？」

「……うん」

カレンは少し躊躇ってから、さらに言葉を続けた。

「……さつきよりも嫌な感じがする。とても、怒ってるような」

「ああ、それはまづいねえ」

命が絶える瞬間を看取り続け、そもそも俺自身も数え切れないほど死を経験し、誰よりも死と密接に過ごしてきた。だというのに、未だにそういった感覚が全くと言っていいほど培われない。

ある場所で人が死んだかどうかなんて、死臭や骨なんかの物理的な痕跡からでしか知り得ない。

なのであくまで推測でしかないが、この国で迫害されながら朽ちていったドゥーマンの怨霊か何かが住み着いているのだろう。

「ま、怨霊なんぞせいぜいものをずらすくらいのことしかできないさ」
生身の人や獣の方が何十倍も恐ろしい。

肉を持たぬ怨霊なんぞにできることなどそよ風を吹かせたり枯れた小枝を折ったり、肩を軽く押すくらいしかないのだから。

……だが、それだけで十分だとしたら？

ほんの僅かな衝撃を与えるだけで精巧に動く仕掛けがあつたとしたら？

「というわけでカレン、お父さんはちよつと話をつけてくるから。心配しないで待ってなさい」

「え？ それってどういう——」

——ズシン、という質量の大きな音。

ひとときの別れを告げた直後、突然天井から下ろされた壁によって二人の姿が視界から消えた。

第十七話 「終の秘拳」

煌々と輝く冠を手にとった瞬間、部屋の入り口に分厚い石の壁が現れて中と外が完全に隔てられた。

つまるところ、俺は閉じ込められた。

「はいはい！ 大丈夫です！」

耳を澄ませば壁の向こうから必死に俺を呼んで心配する声が聞こえてきたので返答する。

もつとも、俺の声は届いていないだろうけど。

「やして……」

冠を動かしたら作動するという仕掛けはなかった。

つまりは俺ではない何者かが作動させたということだ。

カレンの言葉を信じていないわけではなかったが、これでこちらに敵意を向ける何かがいるのだと言い切れる。

『何度目だ、愚かなヒトの子め』

そして俺にもようやく、その声が聴こえるようになった。

耳を通して聴こえるというよりは頭の中に直接語りかけられているといった方が正しいのかもしれない。

『今すぐそれを元通りに戻せ』

「いやだと言ったら？」

冠を被ってから返答すると、またしても何かの仕掛けが作動し。

大きな振動と共に入り口から祭壇までの細い足場を残して床が消え、底にあるものが目に入った。

『お前のような貪欲で卑しい人間が何人もやってきたが、皆悉くそうだった』

所狭しと生やさされた鉄の杭と、それに突き刺さって息絶えたであろう無数の人骨。

「おお、こわいこわい。これを返したら許してくれるのかい？」

『考えてやらんでもない』

『ダメだ、今すぐ殺せ。汚らわしい手で我々の傑作に触れただけでも許されない』

『いいや、飢えと渴きで死に晒すのを待て』

『それも違う、自ら死にたいと乞うまで痛めつけろ。殺すのはそれからだ』

途中から他の怨霊も自分の意見を主張するようになった。

しかし生前が頑固なドウーマンだからか、全くと言っていいほど協調性がない。

唯一合致している点と言えば、最終的には俺を殺すということだけ。

「あの一。外で娘が待っているんで早く決めてもらっていいですかね？ ……うおつと!？」

部屋の左右に無数の穴が開き、そこから矢が次々と放たれる。

どこにこれほどの矢を貯めておいたのか、軽く二千は超える数が射出された。

どうやら俺の軽口が聞くに堪えないようだ。

だからといってそう易々とタマを取らせるつもりはない。

『これは驚いた』

『アレを受けて生き延びた人間は初めてだ』

『お前は本当に人間なのか』

俺に襲い来る全ての矢を避け、叩き、掴みきると、生者がすると同じようにあらぬ疑いをかけられた。

「あれだけやったんだ。もう一本も残っていないだろうか？ さあ、俺を出してくれ」

『まだだ』

またしても振動する音が鳴り出し、今度は残っている細い足場と祭壇さえもが収納されてゆく。

そしてついに指先一つ置ける足場すらなくなってしまったので、仕方なく天井に張り付いた。

『こやつ、脆弱な人族とは思えない身体能力を持つておる』

『まるで獣だ』

『だが、いつまで耐えられるか見物だな』

すぐに限界がきて死にかけの虫のように落ちると思っっているのだ

ろう。

だからその期待を裏切るように、目いっぱい天井を動き回ってやった。ついでに掃除もしてやった。

『馬鹿な！ もう十分は経つぞ！』

『それにその動き、一体どんな魔法を使っているのだ!?!』

何百年と同じ場所に漂っているだけで大した刺激を味わってこなかったのもあるせいかな、怨霊共は驚きを隠さない。

「後はそうだな、手品でも見せてあげようか。タネを見破るのに二百年はかかるはずさ。どうだ？」

退屈を吹き飛ばすのを提案すると、例の振動音と共に収納された床と祭壇が現れて、再び元通りの状態に。

やれやれ、ようやく諦めてくれたか。

しかしどういうわけか、俺が降り立ってしばらくしても入口を塞ぐ壁が動く気配はない。

「さあ早く、入口も開けておくれ」

『最後に、我々の最高傑作をもう一つ紹介してやろう』

『お前を逃がすのはそれからだ』

『せいぜい足掻くがいい』

「かあー……っ」

俺が大きな溜息を吐いている間に再び祭壇が壁に収納され、代わりにあるものが現れた。

靴を履き、

鎧を身につけ、

剣を手に持ち、

後ろ髪を結った、

六本腕と一つ目のつちくれ人形。

「あらら、よくできていますこと。作るの大変だったでしょ？」

『大変なんてものではない』

『二十年の年月を要したのだ』

『完成を待たずに一人二人と死に絶え』

『最後はワシ一人で作り終えた』

「ほーん……」

そういうことなら、折角だし相手をしてあげよう。

死んだ時から成長が止まったままの、ガキのお人形遊びに付き合っ
てやろうじゃあないか。

「しっかしこれ、本当に動くのかい?」

こちらが構えていても何もしてこないの、ゴーレムの核でもある
瞳に触れようとした寸前、

「ぬオツ!」

蒼い瞳に赤い光が灯り、六本の名剣が閃いた。

それをなんとか、俺の身体に傷が付く間一髪のところ、なんとか避
けることができた。

「これはちよつと、遊べそうにないかなア……」

そう、避けざるを得なかった。

普段なら刃物など避けずに筋肉を固めて受け止めたり折ったりす
るのだが、今回はそれが通じそうにないのだ。

怨霊共の最高傑作は、生半可な戦士の剣を折り盾を割り鎧ごと骨を
断つ力と技を有している。

『どうだ!』

『恐れ入ったか!』

「ああ、恐れ入ったよ。無傷では済まなそうだ。一体どうやってこん
なものを?」

『幾人もの名のある剣士に協力してもらい、彼らの剣技を写してある』

『与えた命令はただ一つ、目の前の人族を殺せ、だ』

『そして初めに斬り捨てたのは、これに剣技を写させた愚か者らよ』

「道理でねえ」

上等な教育を受けたゴーレムは僅かにでも間合いに入った瞬間に
反応する。

それも防御用の腕を最低二本は残して斬りつけてくるのだ。

二足歩行二本腕の知的生物が望む「もつと腕があればなあ」という
馬鹿げた願いを叶えてしまった結果がこれだ。

さすればどうなるか。

「うーむ……隙の一つもありやしない」

それはもうめっちゃ強い。

まだ「背中に目があればなあ」という願いが叶わなかっただけマシンと言えるかも。

『どうしてまた天井に張り付いている?』

『さっさと降りて戦え、そして死ね』

「いやあ、ちよつと作戦会議を」

これがまだ肉と魂を持った相手であればなんとかできる。

視線で誘導する、錯覚を見せる、フェイントをかける、無理な体勢に持ち込ませる、などして一本ずつ着実に腕をもぎ取ることが可能だ。

だが、焦りも緊張もないゴーレムには駆け引きが通じない。

間合いに入った抹殺対象を仕込まれた動作で斬る、ただそれだけを何ものにも惑わされずに忠実に実行してくるのだ。

そも、腕を何本もぎ取ろうが核が残っている限りは何度でも再生する。

ついでに言えば関節も三百六十度回る。

「素手で戦うのは無理があるのでは?」

正直な話、この部屋には魔封じの類は一切施されていないので、魔法を使えば簡単にゴーレムと壁を壊すことができる。

だけどそれは最後の手段だ。

俺と同じように何百年とこの部屋で待っていたのだから思いにこたえてあげたいし。

第一に、台無しにしたせいで逆恨みされてこの先しばらく纏わりつかれる、なんてことにはなりたくない。

『早く降りてきて戦わぬか!』

『いつまでそうやって逃げるのだ!?!』

「はいはいごめんよ、もうちよつと考えさせておくれ」

『もう五分と考えているではないか』

『そうやって逃げ続けるというのなら我々にも考えがある』

『お前を殺すより先に扉の向こうで待っている者共に仕向けてやる

う』

その言葉の通り、入口の方から壁が現れた時と同じあの振動音が聞こえた。

俺が何度頼んでも開けなかったくせに。

「分かった分かった！ 戦いながら考えるよ！」

なので仕方なく降り立ち、再び無数の剣撃を避け続けることに。

『そろそろお前からも繰り出したらどうなんだ？』

『結局そうやって同じ事の繰り返しか』

丸腰でゴーレムを停止させる方法はまだ一つしか考え付いていない。

しかしそれをせざるを得ないようだ。

『退屈だ』

『ああ、いい加減飽きた』

『もう扉を開けてしま「黙って見ている。次で終わりにする」

覚悟を決め、ゴーレムから最も離れた場所へ飛び退り、構えを取る。

「シユー、コオー……シユー、コオー……」

特殊な呼吸法を用い、必要な部位へ血液と酸素を送り込む。

九割を脚に、そして残りの一割を頭に。

「さあ……来い」

無機質な殺人兵器が一步、また一步と寸分違わぬ歩幅で近づいてくる。

そして躊躇なく間合いに踏み入れると、真ん中の二本腕が俺の胴を真つ二つにせんと剣を振るう、

「ダァッ!!」

より先に地を蹴り懐へ飛び込む。

疾風よりも速く。

それに対してゴーレムは凄まじい反応速度を見せた。

下の二本腕を振るい上げて俺の両腕を斬り落とし、上の二本腕で自らの核を守ろうとしたのだ。

……だが、もう遅い。

とくと見よ、アレン真拳奥義――

『馬鹿なッ!?!』

両目をギョツと瞑り奥歯が割れるほどに食いしばるのと同時に、意識が飛びそうなほどの強い衝撃が額から後頭部へ流れていく。

苦痛に堪えてその場に立ち続けたが、また別の痛みが襲ってくることも、体が切り離されて軽く感じることもない。

それで全てを確信し、ゆっくりと瞼を上げて。

「――終つひの秘拳、星砕ほしくだき」

核である一つ目が割れて崩れゆくゴーレムを看とりつつ、技の名を告げた。

『信じられん……!?!』

『我らの、最高傑作が……』

『終の秘拳だ?!? 今のはただの頭突きだろうが!』

「その通りさ」

五千年もの月日をかけて硬化した頭蓋ただの頭突きによる星砕ほしくだきは鋼も砕く。

長命の者達の世界では常識だ。

「さて……と」

どすりと、残骸の前に腰を下ろして胡坐をかく。

床に手をつかずに、というよりも手を生やしていないのでつけられないまま語り掛ける。

「これで、全部……だね? 君達に残っている手はもうないはずだ」

『……そうだ』

「そろそろ、輪廻の船に乗るべきじゃあないか? もう、満足しただろう」

『まさしくその通りだ』

『我々の負けだ、ヒトの子よ』

「俺もそう長くは持ちそうにないんだ。折角勝ったんだから、情けない死に顔は見せたくないなあ」

『最後に一つ、名を聞かせてくれ』

『あちら側で同胞達に自慢できるように』

『お前がドゥーマンとして生まれ変わるよう、アーチカルゴ様に進言するために』

「……アレン。ミリベ島のアレン……だ……」

彼らが口をそろえて『またどこかで会おう』と言うのを聞きながら、目の前が黒く染まってゆく――

「――うう……ん」

失血で時間をかけて死ぬよりも、心臓を破裂させて死んだ方が早いのでそうした。

それで元通りに生えていた手について起き上がり、

「怨霊の皆さーん！ もういませんかー!? ……:……:……よし」

彼らが本当に旅立ったことを確認。

どうにか俺が不死者であることを隠し通せた。

もしもバレていたら今頃は何人もの口うるさい怨霊に纏わりつかれていたかと思うとぞつとする。

「これで一段落つと……んん!?」

また、何かの仕掛けが作動したようだ。

今までに何度も聞いたズズズという振動音とは違う、ゴゴゴという音が部屋の奥から聞こえてきた。

それはまるで雪崩のような音だなあとと思った矢先、崩落が始まった。

ああ、なるほどなるほど。

俺の亡骸を誰の手にも渡らないように部屋ごと埋葬してくれるというわけか。

お気遣い感謝いたしますテメエらまとめて蛆虫に生まれ変われ。

「クソツたれがアアアツ！ シュー、コオー……:……:……シュー、コオー……:」

生き埋めになるのが先か、扉を開くのが先か。

生き埋めはイヤだ生き埋めはイヤだ生き埋めはイヤだ。

「ヌオオオオオツ!! 星砕き星砕き星砕き星砕き星砕きイーツ!!」

もう二度とあのような思いはしたくないと、無我夢中で入口を塞ぐ壁に頭を打ちつける。

俺が確実に壁を砕き抉っている間にも部屋は狭くなっていく。

「……よっしー！」

ついに壁が崩れて鉄の扉に手が届き。

俺はそのまま扉に体当たりして飛び出した。

「はあ……はあ……っ」

「アレンさん!!」

「アレン！ 大丈夫なの!？」

膝に手をつけて汗と血を顎から垂らしていると、すぐ側から俺を呼ぶ声がした。

「ただいま、戻り……ました」

「アレンどうしたのそれ！ 頭から血が出てるよ!! 中で何があったの!？」

「そのままじっとしててください！ すぐに手当てしますから!!」

「い……いえ大丈夫です。ちよつと転んでしまっただけですので」

俺は呪われた部屋から無事に帰還したのだ。

部屋から出る直前に、天井から崩れてきた瓦礫で右足を持っていかれただけなので極めて無事だ。

「それよりもほら！ カレンにプレゼントだ！」

深く問い詰められる前に持ち帰ってきた宝をカレンの頭にかぶせた。

「おお！ やはりカレンにはピッタリだ！」

カレンが小顔なせいであちつとばかりサイズは合っていないが、とてもよく似合っている。

この子が大人になって、いつか国を治めている姿がより一層ありありと想像できる。

「……ほんと？ 似合ってるかな？」

「はい！ 大変お似合いですよ！」

俺とコウヒさんに褒められて、偽の扉を開け続ける苦行をしていたことなど忘れて上機嫌になってくれた。

「それはそうとアレン」

「ん？」

カレンが一瞬だけ鋭い目つきをみせて。

そして俺をコウヒさんから離れたところへ連れてきて、小声で問い詰めてくる。

(これを持ってきてくれたのはうれしいけど。本当に、ほんつとうに危ないことはなかったんだよね?)

(……ああ、大丈夫だよ。転んで頭を怪我しただけさ。何も心配することはない)

(へえ、そうなんだ。……じゃあなんで、袖がきれいに無くなってるの?)

なるほどそうきたか。それを指摘するか。

これは参ったなど、ふうと息を吐いてからはに cand 答えた。

(………転んで両腕取れちゃった)

(取れるわけないでしょ!)

第十八話 「特別稽古」

隅の見えない暗い部屋。

強めの夜風が窓をガタガタと鳴らしている。

それでベッドに横たわる少女が怯えることがないように、枕元に置かれたランプが小さく優しい橙色を放つ。

「アワレ！ 無数の感染体に囲まれたトリニティが『私を見捨てて逃げて！』と涙を堪えながら叫び声を上げ、周囲の感染体を巻き込んで爆散！ それでも大した数を減らせず、なおも地を覆いつくす感染体を前に誰もが諦めかけたその時、不思議なことが起こった！」

そして俺は本当の親が子供にしてあげるのと同じように、良い夢を見れそうな物語を朗読する。

「ナンテコツタ！ 三節棍を握りしめてただ絶望していたノヴァの身には、はちきれんばかりのボイドエネルギーが宿ったのだ！ 第四の力で感染体を爆発四散させ続けるノヴァは、何かに憑りつかれたかのように『ループを潰えよ』と虚ろな瞳で唱え続け………おや、これからが山場だというのに」

読み聞かせて十分と経たずに寝息を立て始めた。

なのでそつと毛布をかけて、カレンの目に入ってしまいそうな前髪をかきわけてから、小声でおやすみを告げて静かに部屋を出た。

極力音を立てずに廊下を歩き、がらりとしたエントランスを通って正面玄関から屋敷を出る。

屋敷を出て真っ先に目に入ったものは歪んで揺れる月を映す池と、しゃがみ込んで池を覗き込む尖り顔の男だった。

「すまん、待たせた」

「おう」

マニツクは両膝に手をつけて立ち上がり、こちらを見ることなく歩き出した。

三日三晩顔を見せなかったと思ったら、昼にやってきて半ば強引に約束を取り付けられたのだ。

「んじや、いくか」

テンノらしい素早い足取りでアーチカルゴの像が祀られている小屋へ入っていく。

そして像の後ろにある地下へと続く蓋を開けてさっさと降りてしまった。

「おい、地下で飲むのか？」

「ああ、とっておきの場所があるんだよ」

とっておきという言葉に多少引っかけかりを覚えたが、折角用意してくれているのだからあれこれ聞かずに黙ってついていくことに。

地下一層から二層へ降り、そして二層から三層へ降りる階段の途中で足を止めた。

そこはまさしく昨日見つけた隠し扉の場所で間違いなかった。

「ここだ。よく見とけよ」

やはりマニツクは窪みに手をかけ、それを押し開いた。

「ほおー……おん？」

「なんだ、その妙な反応は？」

「いやあ、昨日この隠し扉を見つけたんだけどね。コウヒさんがこの先は墓所だよ」

しかし隠し部屋の中に棺ましてや骸などはどこにも見当たらない。

「あー、そんなことを言ってたのか。……いやまあ、間違いじゃねえけどな。昔ここに住んでいたヤツの棺はあったわけだし。……ま、座って待ってろ」

入れ入れと隠し部屋に押し込められ、座れ座れと部屋の中央にある丸テーブルの席につかせられた。

マニツクは俺を固定すると、さらに奥の隠し扉を開けて酒を取りに行った。

「ふうーん……」

テーブルの端に頬杖をついて見回す。

部屋にはマニツクの仕事道具や空の酒瓶が置いてある以外に私物らしきものは見当たらない。

年季の入った作業台や工具、壁に所せましと貼られている設計図やらは元いた住人の物だろう。

いかにもドウーマンの職人らしい部屋だ。

「色々考えてあるなあ」

設計図には動く床や壁などの仕掛けや、対人用の効率的な罨であったりが記されている。

もちろん多種多様なゴーレムの設計もあった。

「ずいぶんと開発熱心なこと……でエ……」

その中から見つけてしまった。目に留めてしまった。

どこかで見た覚えのある六本腕の、できることなら今は思い出したくないゴーレムの画を。

「いや、きつと見間違えだ。そういうことにしておこう」

それでも一応、二度とあんなものが作られることのないように、後で設計図を取って焼いてしまおう。

あれは中々に恐ろしい代物だった。

場合によってはあのゴーレム一つで国が滅ぼせるくらいの恐ろしいものだった。

「しっかし、遅いなあ」

早く酔って忘れてしまいたいことばかりなのに、マニックは中々帰ってこない。それに、

「なんだか急に、眠くなってきたなあ……」

知らず知らずのうちに疲れが溜まっていたのだろうか？

俺は不意に襲い掛かってきた猛烈な眠気によってテーブルに顔を押し付けられ、瞼を下ろされた――

◆◆

「……さすがに眠ったか」

ほつと一安心したのか、足音を立てず酒の一本も持たずに戻ってきたマニックの心拍数が下がっていく。

「わりいな相棒、せめて楽に殺してやるからよ。恨まないでくれよ」

それだけを告げて、ただ一度の逡巡なく、酒瓶の代わりに握ったナイフを俺の首筋に突き立てる――

「――残念でした」

もちろん、こんな簡単に勝ち星を献上する気はないのでそれを掴み取った。

「ッ!? はアッ!?」

俺が掴み取ったナイフを部屋の隅に放り投げてから立ち上がると、すでにマニツクは距離をとって別のナイフを構えていた。

それでも動揺だけは全く隠せていない。

心拍数も先ほどの二倍以上に膨れ上がっている。

「やあやあ、どうしたんだい相棒? そんなにサツバツとしてさ。悩みがあればいつでも相談に乗ってあげるよ?」

「……なんで、起きてやがる。象でも一息吸えば眠るつつうのに」

「とうとうやっぱり、君の仕業だったか。おかしいと思っただよ」

一度身体を休めれば、一週間は睡眠を取らずとも普段と変わりなく動き続けることができる。そのように鍛えてあるのだ。

大方無色無臭のとおきおきの眠り香でも焚かれたのだろう。

「それでどうして眠っていないかって? それは慣れっこだからさ。対処法を誰よりも知っているんだ」

俺のことを財宝を守る龍か何かだと勘違いしているのか、麻痺させるなり眠らせるなりして動きを封じようと試みる輩が非常に多い。

しかもそれらは実際有効な手段である。

俺を眠らせてぐるぐる巻きに縛ってセメントに浸し、それに魔封じを施して海の底か地の底にでも沈めれば数十年は容易に封印できる。

ほとんど同じ方法で千年間も封印されたのだから間違いない。

一体全体千年前に何があって封印されてしまったのかは知らないが、それ以外で眠らされそうな時には頬をつまんで肉を千切り取るなり血を抜くなりして対処してきた。

そして眠気を感じたら死ねばいいという最適解にも辿り着いて。

わずかでも不自然な眠気や痺れを感じたら、すぐさま脳みそか心臓を爆破してきたのだ。

今回も眠りに落ちる前に心臓を破裂させた。

「小細工は通用しねえってか、バケモンがよ」

「ふふふ、そういうことだ。となればあとは……分かるだろう?」
マニツクの震える脚を一瞥してから尖り顔をじっと見つめる。
それで分かったのは、言葉での和解が通じそうにないということだ
け。

今すぐに逃げろと本能が警告するのに抗って、刺し違えても俺を殺
す覚悟を決めているようだ。

「特別稽古の時間だ。さあ、拳で語り合おう」

第十九話 「化けの皮」

拳で語り合おうと告げた矢先、マニックが前傾して腰を落とす。

タツクルでもしてくるのかなと予測する間もなく、彼の顔のあつた高さから二本の矢が飛んできた。

「うおうっ！」

パツと掴み取って見ると、二本とも矢尻にたつぷりと毒を塗られていた。

「おいおい、こんなものかもしも当たったら本当に死んでしまうじゃないか」

「だからとっておき……つったろツ！」

言うだけはある。

マニックの攻撃に合わせて、まるで魔法のように次から次へと多方向から矢が飛んでくる。

もちろんそれらは魔法ではなく、からくりだ。

「その内絶対当てつから、そのまま避け続けてくれよ！」

「とするとここらへんに落とし穴……だね？」

マニックと矢の追い込みによって目星をつけた場所を軽く踏むと、あつさりと穴が空いて真新しい鉄の杭が顔を出した。

「クソツ！」

ドゥーマン達が置いていった設計図を参考にして仕掛けたのだろう。

相棒のことだからだれにも頼らずたった一人で、三日という短い時間でやれるだけやったに違いない。

どうすればアレン・メーテウスという世界最高峰のテンノを殺せるか傷を付けられるか、熱が出るほど考え抜いたに違いない。

「及第点をあげよう」

だけどこちらは昨日ほとんど同じものを経験したばかりだね。

万が一にも傷を付けられる気はしないんだ。

「一応聞いておくが、どうして俺に殺意を向ける？ 何か気に障るようなことでもしてしまったかな？ それとも誤解でもしていたりは」

「ああ!? この期に及んでふざけたことぬかしてんじやねえよ! ……でもそうか。分かった、一度だけ聞いてやる。アレン、お前は何者だ?」

それは初めて出会った時の、俺を組み伏せた時にした質問と同じものだ。

いや、あの時の方が冷徹ながらも幾分か優しい声色と瞳をしていた。

「またそれかい?」

「答えるよ」

「俺はアレン・メーテウス。南の島出身の子連れテンノさ」

「……それだけ、じゃねえだろ!」

マニツクのナイフを強く握る手が怒りでわなわなと震える。

それでも精彩を欠いたりはずせず、急所目がけて鋭い一撃を放ち続けてくる。

「お前の気の良さにみんな騙されてたし、俺自身もお前に何度か助けられたから相棒だなんて呼んでたけどよ、それでもずっと疑ってたんだよ! それこそお前を処刑台で見た瞬間からな!」

そうか。

そうだよなあ。

たしかに首を切断されたのを、誤魔化せはしないよなあ。

「俺はお前の首が切り落とされるのをこの目で見たんだよ。だけどお前は生きていて、ネズミの姿で現れやがった」

「それは一子相伝の秘術ってことには」

「なるわけねえだろ! ネルクの刺客に襲撃された時もそうだ。お前は偶然青い火を打ち消す魔法を知っていた。でも本当に偶然か?」

偶然にしちや出来過ぎじゃねえか? お前が刺客と内通してたか、実は隠しているだけで無数の魔法を使えるんじやねえのか?」

はい、その通りでございます。

「他にも疑う理由はまだまだあるけどよ。この大事な時期に馬鹿みてえに有能なテンノがふらつとやってきて、気前よく手助けをしてくれるなんて都合良すぎると思わねえか!」

言われてみればたしかに怪しすぎる。
しかしそれだけは本当に偶然なのだ。

事実は小説よりも奇なり、とはよくいったものよ。

「そろそろ化けの皮をはがしたらどうだ？ きつちり退治してやっからよ！」

「そう、だな……。相棒には俺のことが、得体の知れない化け物が人の皮を被っているようにでも見えるか？」

それ以外何がある、と。

嫌悪感に顔を歪ませて斬りかかってくる。

常人の人生何十回分もの年月を生き続けて、嫌になるほどその表情を見てきた。

だからといって完全に慣れたわけでもないし、いつだって心苦しいし悲しくなる。

俺はお前と同じ人間だ！ その言葉を声と涙が枯れるまで叫び続けたこともある。

「でも、そうだよなあ」

「何ブツブツ言ってるやがる」

「言葉だけで分かり合えたら、苦労しないよなあ……」
「ぶグッ!？」

初めて反撃した。

今までずっと避けるか逸らすかしていたが、懐に詰め寄ってきたところを掌で押し飛ばした。

水平に飛ばされたマニツクが背を石壁にぶつけ、こひゅうと苦しもうに息を吐き出す。

俺はその間に意識を研ぎ澄まして一つの言葉を唱える。

「――《我々ト同化セヨ》」

黒い靄が立ち込めて視界を覆う。

そして俺の身体が変化を終えて靄が消え去ると同時に、マニツクの啞然とした面が目映った。

「……やっぱし、バケモノだったじゃねえか」

今回は全身ではなく頭と手と足を変え、そして尻尾を生やした。

「覚悟はしてた……けどよ。なんだよ、それ。竜……だよな……？」
室内なので人間大の大ききで、飛膜も生やさずにしておいたが、マニツクはそれが何かを理解した。

あの日飲み込んだ亜竜の心臓が、未だ血肉となって残っていたおかげで変化できた。

「そうだと言ったら？」

「なおさら……で、てめえを殺……」

殺意と使命感を激しく燃やすマニツクが振るうナイフを避けも逸らしもせず竜の手で受け止める。

するとそれはポキリと容易く折れてしまった。

「罨でも何でも、使ってみるといい」

「言われなくても、そうするに決まってるんだろ！」

無数の矢を全て受け、マニツクが投げってくるシュウリ剣や工具も全て受け、さらには自ら落とし穴にも落ちた。

しかし亜竜の鱗にはせいぜいかすり傷しかつかず、踏みつけた鉄の杭はぐにやりと曲がってしまった。

相棒は俺なんぞよりよっぽど物覚えがよく優秀な人間だ。

同年であったならば俺の勝てる部分など頭の形の良さくらいしかない。

けれど、そんな優秀な人間が必死になって編んだものを意に介さず、尾の一振りでも壊し尽くせるくらいに竜たる存在は脅威である。

龍モドキや二流などと揶揄される亜竜といえど、一般人からすれば竜や龍などとそう変わらない。

「いやあ、せっかく俺のために準備してくれたというのに悪いね。脆過ぎたんだ。雷撃なら効くだろうから、手を擦って静電気でも起こしてみなよ。十分くらいなら待ってあげるぜ？」

「は………こりゃ、どうにもならねえ……」

歪んだ顔、

竦んだ足腰、

闘争心の欠落、

怖けた臭いの汗、

筋肉のこわばり、
制御できない鼓動、

そして、諦めの声色。

人間の何倍も高性能な五感を得たおかげでより鮮明に感じ取れる。
もう彼は、俺に勝とうとも勝てるとも思っていない。

「……………しゃあねえな」

フツと、マニツクの緊張が解れた。

俺はその緩み方をよく知っている。

生への執着を捨てた愚か者が幾度となく見せてきた腹立たしいものだから。

こちらを見てニヤリと笑ったマニツクが素早く金槌を手に持ち、躊躇いなく自身の腹を打つ――

「ぐアッ！」

それだけはさせまいと、俺は竜の尾を振って手から金槌を叩き落としました。

そのまま尾を上半身に巻きつけて拘束し、動きを止める。

「何ッ、すんだてめえ！ 離せ！」

「それはこっちの台詞だ。お前は今、――命を捨てようとしたな？」

マニツクの服の腹部を裂いて取ると、裏側にはやはり大量の釘が張り付けられていた。

俺を巻き込んで自爆するつもりだったのだろうか。

「そうだよ！ ワリイかよッ!！」

「ああ悪い。そんなことをされると俺の目覚めが悪くなる。なによりそれは俺の専売特許だ。他のいかなる者にも許されない」

命を捨てることだけは禁じ、俺はマニツクを拘束から解き竜の変化を解いた。

「なんのつもりだよ。さっさと俺を殺すなり食うなりしろよ」

「そんな物騒なことをするわけがないだろう？ それよりもほら、俺が最初に言ったことを思い出してみろ」

もうこの場には使える武器も罫も残っていない。

残っているのはそれぞれの肉体のみ。

「拳で語り合——なめんなッ!!」

俺が言いきるまでもなく、本気の拳が右頬に叩き込まれた。

それでわずかに硬化するタイミングがずれたが、まあ、少し痛いくらいで問題はない。

「ツてえ! 鉄柱とすり替わったんじゃねえのか!？」

「クク……悪くはなかったぞ。次は俺の番だ」

痛めた右拳をさすっているマニツクに縮地術で間合いを詰め、想定外の一撃をがら空きの横っ腹に打ち込む。

「……………ぐ……………あ……………ッ」

防御もできずモロに受けたしまった相棒は口をパクパクさせてその場に崩れ込む。

貫いたり殺したりしてしまうことのないように二割以下の力で殴ったが、現代人には少々辛かったかもしれない。

「んじゃ、しばらく反撃しないであげるから、気の済むまで好きにやってみな」

軽く挑発してマニツクのやる気を引き出す。

おかげで常人ならあと五分は身動き一つできないであろうものを、床に拳を打ちつけながら立ち上がった。

「ごんのッ……………バケモン、がアッ!!」

奮い立つマニツクに先ほどまでの冷静さはない。

ただがむしやらに、意地になって、俺の顔と腹を蹴りを混ぜつつ殴り続ける。

そのように好き勝手に打たせ続けて、合計で拳を六十六発、蹴りを八発打ち込んでから、相棒は大層悔しそうな顔をして仰向けに倒れた。

「なんであんなに殴られて、ピンピンしてんだよ。お前の身体は何で出来てんだよ」

「何って、君と同じもので出来ているさ。それで、満足してくれたかい？」

「……………ああ、何も思い残すことはねえ。コウヒとトラスア様にも、俺が革命前日に戻らなかつたら延期するように伝えてあるからよ。お前

の思い通りにはさせねえぞ。……そういえば、一つやり残したことがあった。コウヒに思いを告げてねえや」

「ほう、ようやく本音を」

「最期なんだ、嘘は吐かねえよ。あークソ、普通に結婚して、普通に死にたかったなアー！　チクシヨウ！　もつと旨い酒を飲みたかったーッ！　コウヒー！　ガキの頃からお前が好きだったーッ!!」

俺としては何一つ、殺したりましてや美味しくいただくなどは言っていないのだけれど、勝手に死を悟って心の声をぶちまけている。

これはこれで面白いのでそのままにしておこう。

それにそろそろ来るはずだし。

トットトットと、駆け足で階段を下りる音が聞こえてくる。

それはだんだんと大きくなって止まり、次いで隠し扉が開かれ。

「マニツク！　アレンさん！」

「ンなッ!？」

あの冷静なコウヒさんが血相を変えて部屋に飛び込んできた。

「アレンさん！　マニツクの身に何が」

「逃げるコウヒ！　コイツは人間じゃ「いやあ、こんな時間に呼び出してすみませんねコウヒさん」

ピイピイうるさい男の口を塞いでコウヒと話す。

「なんか彼、さつきからずっと俺のことを化け物だのどって食われるだのと狂ってしまったみたいで」

「は、はあ……う？」

「そこでコウヒさんの愛の力があれば治るかな……なんてね、《組ミ換
エ石子》」

「はい？　えっ!？」

魔法で部屋の壁や床、天井に至るまでの石材たるものを思うがままに操る。

即席で作った石の座席に抵抗する術を知らない二人を座らせて、逃げ出せないように手首足首を石で縛り付けた。

「やっぱり、魔法も自由に使えるんじゃないやねえかよ……!」

「アレンさん、これは一体……?」

「おいアレン！ 俺のことはどうしてくれたっていいから！ 魂だつてくれてやる！ だからコウヒには何もしないでくれ!!」

「魂ってそんな、死神じゃないんだからさあ」

現状を全く理解できていないコウヒと、どうにかしてコウヒだけは助けてもらおうと、マニックが無駄にもがいたりはずせに言葉だけで必死に訴える。

もちろん俺は不平等なことはしたくないので、二人一緒に味わってもらうつもりでいるがね。

「コウヒさんもこの尖り顔に何かしら吹き込まれたせいで俺を怪しんでいるでしょう? だから二人には特別に正体をバラしちやおうと思いまーす！ 本番当日までわだかまりがあつてはいけないしね！」
さて、どこから見せてあげようか。

初っ端から刺激の強い場面はやめておいた方がいいかな。

「さあ身体力を抜いて。心を落ち着かせて。今から見る全てを受け入れる覚悟を決めて。そうでないと、本当に狂ってしまうかもしれないから」

少しでも怯えが和らぐように安らぐツボを圧して優しく忠告して。身じろぎもできない二人の額にそつと手を置く。

「どうぞゆるりとご覧あれ、不死者アレンの過ぎし日を——」

第二十話 「起源」

うだるような夏の日だったのを覚えている。

まだ十二かそこらになったばかりの鼻たれ小僧達が、畑仕事の手伝いをサボって村の外へ冒険に出かけた。当然俺もその中の一人だった。

まともな教育機関がなく文字も読めないような田舎の子供は皆そうやって大人になっていく。

昼飯も取らずに子供特有の無尽蔵の体力で野を越え川を渡り山に潜り、最後に川で汗と泥を落としてから陽が沈んでしまう前に家路につく。

いつまでもこんな日が続けばいいなあと、焼けた空にうつすらと浮かぶ星と月を見上げながらなるべくゆつくりと歩く。

そしていつものように子供の浅知恵を集めて「家に帰った時になんて言い訳すればいいだろうか。次はいつ集まろうか」などと相談している。

——ふと、背後から名前を呼ばれた。

それはここにいる誰のものでもない、聞き覚えのない声だった。

しかし俺以外の誰もそれに気づいた様子はない。

「ん？ どしたアレン？」

「あー、ちよつと忘れ物。先行ってて」

気付いたら体が勝手に後ろを向いていて。

まるで催眠術にかかったように、声のした方へ引き寄せられていた。

その際、大人たちがよく言い聞かせる言葉が脳裏をよぎった。

『昼と夜の境目が曖昧になるこの時間は逢魔が時と言って《よくないもの》が跋扈する。だから外に出てはいけない』

もちろんそれは子供を明るい内に家に帰すための方便で、夜になればなつたで『悪い獣に食べられてしまうから家を出てはいけない』などと脅しつけるのを子供ながらに知っていた。

「ただ俺が木の陰で出会ったものは、善い悪いの枠組みに収められない相手だった。」

「やあアレン君、よく来てくれたね」

それは優しそうな雰囲気若くスツとした顔立ちの男であった。

「あんた見ない顔だけど、どこから来た人？」

「あっち」

男は斜め上を指して答えた。

その時は北の方角から来たのだなと思っていたが、今となっては空の向こう、世界の果てのその先を指していたのだと分かる。

「つーか何で俺の名前を知ってるの？ あんただ……うえっ!？」

向き直って男を足元から見上げると、顔が変わっていた。

先ほどの優しそうな美青年とは別の、冷淡そうな中年になっていたのだ。

「は!? はあ!? なんだそれッ!? なんだよお前!？」

「ボクはねえ、一番簡単に答えるならそう、——カミサマだよ」

こんなところで神様を自称するなんて詐欺師に決まっている。いくら俺が子供だからといってそんな嘘を信じてたまるか。当然口に出さないながらもそう考え付いた。

しかしそのような考えはどういうわけか凝り固まる前にかき消されて、自然と納得させられてしまった。

「……もしかして、ボルトイカスピード様?」

神様と聞いて真っ先に戦神を想像したが、目の前の皺だらけの老婆は首を振って違うと答えた。

「じゃあ……何?」

「ワシはこの世界のカミサマじゃあない。ワタシは人であって木でもあり、真砂であって海でもあり、空であって星でもある」

「へ……?」

コイツの話を真剣に聞いていたら自分という存在が消えてしまいそうな気がして、早く逃げ出そうと決心した。

でも、俺の足は動かなかった。

いいや、動かなかったのは足だけじゃない。世界の全てだ。

沈む太陽も崩れる雲も、空を飛ぶ鳥も揺れる草木も、風さえもピタリと止まっていた。

「ごめんごめん。今の君じゃあまだ、無駄話を聞いているだけでおかしくなっちゃうもんね。よし、本題に入ろうか」

カミサマを名乗る近くて遠い存在は、一方的に話を続けた。

「オレの魂のカケラと君の魂のカケラを交換してくれないか？」

魂を？

どうして？

何で俺なんかと？

「アタシがこの世界で自由に動き回るために必要なのさ。君が特別だから選んだんじゃない。むしろその逆で、君が何も特別じゃないから選んだ」

妙齢の姉貴然とした美女がくくつと妖しく笑う。

「おまけもつけるからさ。どうだい？」

「……うん、いいよ」

「アレン君ならそう言ってくれろと信じていたよ！」

人ではない何か、人である誰よりも綺麗に笑う。

人知を超えた得体の知れないものだとなんか分かっていなのに、抗えなかった。

俺の好みを詰め込んだ貌で頼まれたせいか、無理矢理口の形を変えられたのかは今となっては分からない。

ただ一つだけ、そこで普通の人生という足場を踏み外してしまったことだけは分かる。

「ほら、このポンチヨをあげよう。カツコイイだろう？ 次会う時まで大切にしてくれよ？」

黒よりでも白よりでもない、ちょうど中間といえる灰色のポンチヨを虚空より取り出して。

ガバツと勢いよく被せてきた。

「うわっ！ いきなり何すんだ……よ………？」

反射的に瞑った目を開けた時にはどこにもおらず、世界も何事もなかったかのように動き出していた。

「夢……じゃない」

顔を両手で叩いたらちゃん痛みはあつたし。

何より買ったものでも拾ったものでもない新品のポンチョをさも当然のように着ていた。

「……っ！」

もうこの場によからぬものがないのは分かっているはずなのに、それでも逃げるように走り出した。

一分と走らずに仲間たちに追いつき、俺の身に起きたことを二度舌を噛みながらも全て話した。

整頓して話す余裕はなかった。

「大丈夫かよアレン。もちろん頭の方」

「毒ヘビにでも噛まれたんじゃないのか？」

「本当だって！　ちゃんとポンチョだってあるだろ!？」

「だってお前さつき、忘れ物を取りに行くって言ってたじゃんか」

「それは無駄に心配されたくないからウソをついただけで」

「じゃあ今の話もウソってことで」

「どうして信じてくれないのキツ!!」

俺はあれほど怖い思いをしたのに、大切な友達だと思っていたみんなは誰一人として信じてくれなくて。

つい、カツとなつてしまった。

「……じゃあお前、何かすげー力でも使えるのか？　雨でも降らしてみてくれよ。神様なんだろう？」

「それは……」

魂の一部を交換しただけで、具体的には何ができるようになったのか分からない。もしかしたらこれまでと何も変わらないのかもしれない。

そもそも実は交換すらもしていないんじゃないかと冷静になつて疑い始めて。

この場ではこれ以上話すのをやめた。

それでも家に帰ってからはもちろん、最も信頼する人間に吐き出した。

「母ちゃん！ 父ちゃん！ 聞いてくれよ!!」

今度は内容を整理して順を追って話した。

村の若者が「島を出て大陸へ旅立つ」と告白する時くらい本気で話した。だというのに、

「面白い夢を見たのねえ、ステキだわ。……でも、歌人になるなんて言わないわよね?」

「だから夢じゃないんだって!」

「誰にでもおかしな妄想をしたくなる時期はあるものさ。お父さんもお前くらいの頃はだな——」

両親共々まともに取り合ってくれなかった。

翌日からはカミサマカミサマとみんなにからかわれるようになったので、自分からは二度と話さなくなった。

奇妙な体験から二十数年を経て。

大した怪我なく歳を重ね、畑仕事においては一人前と呼ばれるくらいにはなった頃。

あの出来事は記憶の海の底で錆びつつあったというのに変化が現れた。この場合は不変と称した方がいいのかもしれないが。

「アレンお前、全然老けねえな」

「そうか?」

昔からの知り合いが揃って同じことを口にするようになったのだ。

それで井戸を覗いてみると、水面に映る自分の顔はたしかに瑞々しく若者のそれとなら変わりない。

だからといってその時はまだ、たいして深刻には考えていなかった。

しかし五十歳六十歳と生きながらえ、周りの者が年々白髪と皺を増やしていく中で俺だけは萎まずに漲らせていて。若人と同じようにどんな疲労も一晩寝るだけで取れてしまう。

さすがに不信感と警戒心を抱かれるようになり、島にはいられなくなった。

大陸では何年も同じ場所に留まったりはせず、せいぜい長くても半年ほど逗留するだけして好きなように旅をした。

そして大陸に渡ってから二十年後、齢は八十三の時についてその瞬間は訪れた。

「——誰か助けてえ!!」

滞在中の村のはずれにある森でキノコでも探していると、助けを求めめる声が聞こえて。

すぐに声のした方へ駆けつけると、木の上で村の子供が泣き叫んでいて、その下では二頭の野犬が唸り声を上げていた。得物を見る目をしてしていた。

「俺が囹になる! その間に君は早く逃げろ!!」

助けを呼んでくる余裕はなかったので、俺が囹になって子供を逃がすことに。

「ほらどうした! かかってこいよ!」

二頭とも中型の犬ではあったが、その頃の俺は追い払う手段も力も持っていないかった。

一応収穫用に持っていた鎌で牽制したり抵抗しようとはしたのだが、血に飢えた獣二匹を止めることなどできず、

「あ……」

飛び掛かられて喉を噛み千切られた。

激痛と共に血が急激に抜けていって、ぐわんぐわんと頭の中が揺さぶられて、自分の身体が鉛のように重く感じて動けなくなっていく。

叫び声すら発せないし周りの音も遠くなってほとんど聞こえないのに、腿や二の腕、腹を食られる感触だけはハッキリと分かる。筆舌に尽くし難い痛みだった。

(俺、ここに死ぬんだな)

充分生きたいし、もういいか。

俺のような年寄りが死ぬ代わりに未来ある子供が生き残るんだ、万々歳じゃないか。

これで先に逝った両親やみんなに自慢できる。

そうやって幸せな気持ちで痛みを紛らわしながら人生の幕を閉じ

「——ハッ!？」

何か暗闇の中で青白く光るものに触れた瞬間に目が覚めた。

「青い空、雲、そして森。……俺、死んだんだよな?」

しかし視界に入り込んできたものは全て、この世界のものだった。

「傷が……ない」

上体を起こして喉から腹の下までをさすってみたが、たしかに噛み千切られたはずなのに傷痕すら残っていない。身体はどこにも痛みを感じない。

しかし周りには、俺のものとしか考えられない臓物が散らばっている。

さらには服だってポンチョ以外ボロボロに破けていて、ほとんど裸同然だった。

「どういうことだ。全く意味が分からん。まだ夢を見ているのか?」

しばらく混乱して自問自答を続けた。

そして冷静になって導き出した答えが。

「アイツの魂……」

カミサマの魂が混ざったことで不老不死になったのだと認めざるを得なかった。

「……マジか。……マジかよ! うおお! すげえええつ!!」

やりたいことを好きにだけできる!

世界の隅から隅までを冒険できる!

子供の時に見た夢を全て叶えられる!

などと年甲斐もなく狂喜乱舞した。

俺の人生を歪めたアイツに初めて感謝を奉げた。

そのまた十年後、泣き叫んで恨むことになるとも知らずに——

第二十一話 「苦痛」

一度死を経験し、己が不老不死であると自覚したからといって、そう劇的に生き方が変わったわけではない。

まだ百年も生きていない青二才であっても、不死者というものが普通の人には気味悪がられ疎まれることを知っている。

だから極力普通の人間であることを装い、他人を俺の命と引き換えに助けられる時以外は極力危険を避けて行動していた。

そのように平穩に暮っていたのだが、突如としてツキに見放された。

「シンーツ!!?」

どこぞの国に滞在して、酒場で飲み比べでもして眠りこけて、そして尋常ではない激痛で目を覚ました。

目を覚ました時に俺の身体は台座に縛り付けられていて、猿轡をかまされていた。

見覚えのない部屋にあるのは物々しい実験器具や薬品の数々。

そして心臓に刃が刺さっていることに気付くのと共に意識が遠のいた。

「——おお！ 話は本当だったのですね！ おはようございます！」

全ての痛みが消えさって自分は今まさに死んだのだと自覚し、同時に喜び舞い上がる見知らぬ男を視認。いや、正確にはついさつき酒場で一度は目を合わせていた。

「いつかあなたのようなヒトが来てくれるんじゃないかとずっと夢に見ていました！ これからよろしくお願いしますね！」

男は知的な容貌で子供のように目を輝かせて語る。

彼の話とおぼろげな記憶を頼りにどうしてこうなってしまったかはすぐに結びついた。

『酔っぱらって不死者であることをゲロってしまい、たまたまその場に国のお抱え研究者様がいた』

最も明かしてはいけない秘密を漏らしてしまったこと、たまたまそ

れを研究者に聞かれてしまったこと、その研究者が倫理観の欠けた人間であったこと、三つの不幸が完璧に噛み合った。

要するに五千年の人生で間違いなく五本指に入る大事故である。

「では早速、実験を始めましょう」

地獄の日々が始まった。

一日の始まりは決まって解剖からだ。それも生きてままで行われる。

一応は消毒されてあるナイフで腹を搔っ捌いて、一度俺が死ぬまで時間をかけてゆっくりとまさぐるのだ。研究者である男はまるで宝の山を漁るかのように嬉々として人の腹の中をいじくりまわす。俺が想定より早く死んで身体が修復された時は、だいたいもう一度腹を裂かれる。

それが終われば今度は器具や薬品を使った実験が始まる。

無理な体勢を何時間続けていたら身体に異常をきたすか。

どれほどの強度で引っ張れば腕や脚、首と身体を引き離せるか。

新作の毒薬を飲ませたらどのような効果が出るか、致死量はどのくらいか。

そして一日の終わりには、もう一度解剖される。

基本起きている間は痛いか苦しいか、あるいはその二つが同時にのしかかる。

唯一安らげるのは眠っている時間だけ。……ううん、眠っている間だってイヤな夢を見ることが多くなった。

「我が国は他と比べて小さく、当然科学力も技術力も他より劣っている。ですが、あなたが来てからその差がぐんぐんと縮まっています！私の評価もうなぎ上りですよ！何か食べたいものでもありますか？」

「……やめてくれ。たのむよ、なあ。もう痛いのはいやだ。あんたも同じ人間なら分かる……だろ？」

「同じ人間だって？」
「冗談を」

この頃はまだ痛みの和らげ方や痛覚を完全に遮断する術を持ち合わせていなかった。

今とは違つて経験もほとんどなく、百度死のうが千度死のうが慣れることはなかった。

早く死なせてくれ。

二度と蘇らないで死んだまままでいさせてくれ。

もう不老不死の力なんていららない。

なあカミサマ、俺の声が聞こえてるだろ？

そのような願いは全て血と涙と一緒に排水溝に流れていった。

そしてそれは三年が経ち、この苦痛は永遠に続くのだなと諦めかけた頃だった。

「……なんか、上が騒がしいな」

地下にある研究室からでも分かるくらいに、老若問わずの悲鳴が聞こえてくる。

「戦争ですよ戦争。敵軍がもう都市に攻め入ってきているんです」

「負けたのか？」

「そのようですね」

地上では今まさに国が蹂躪されているというのに、男は何食わぬ顔で身支度を整えて出立の準備をする。

「あなたを連れて行けないのが心残りですが私は隠し通路で逃げます。今まで楽しかったですよ。あなたのことは忘れませ」——どこに逃げるっていうんだ？」

何の前触れもなく、研究者の胸から刃が飛び出し血が噴き出した。

いや、俺だけは音を消してこつそりと近づいてきた別の男の存在に気づいていた。

よほどの確に急所を刺されたのか、俺と同じ目に合わせてから殺したいほど憎かった男は一言も発することなく絶命した。

「よう兄ちゃん、ひでえ顔してるけど大丈夫か？」

研究者の死体を踏み越えてこちらに近づくと男の身なりからして兵士だということはすぐに分かった。

俺が一度逃げ出した時に捕まえにきた兵士のと違う紋章が描かれてもいた。

「俺はヤンコつつうんだ。そっちは？」

「アレン……です。あなたはもしかして敵国の」

「そ。お前さんの敵の敵、つまりは味方ってことだ」

ヤンコは俺にかけられた拘束をガチャガチャと手際よく解いていく。

「これでよし、と。自力で立てるか?」

味方という言葉の通り労わってくれる。

「ありがとうございます。ヤンコさん」

「そんな堅くならなくていいって。歳もほとんど変わらないだろう?」

二ハハと、歯を見せびらかして笑う男を俺は信じてみようと思っ

た。

できるなら恩返しをしようとも。

「アレンさ、家族は? 故郷は?」

「家族は全員死にました。故郷に戻るつもりもありません」

「そっか。……じゃあ、ウチくる?」

だから、まんまとついて行ってしまった。

「ようヤンコ、弱そうな奴隷捕まえたもんだな」

「おめえそっちの気があったのかよ。もう近寄るんじゃねえぞ」

「ちげーよバーカ、こいつは俺の大切な客人だ」

戦争が終結して国に帰るまでの間、ヤンコは俺を戦利品の奴隷としてではなく、一人の人間として扱ってくれた。

国に着くまでに二日もかからなかったが、昼も夜も目を離さずに守ってくれていた。

俺が不死者であるという馬鹿げた話も、疑うことなく親身になって聞いてくれたのだ。

「着いたぜ、ここだ」

それは軍事演習場に隣接した、家というには大きめで彩りのない角ばった建物で。

しかし俺は恩人に言われるがまま、疑問の一つも持たずに入ってしまった。

「おおい! いるかジジイ共! 連れてきたぞ!」

ヤンコが俺の肩に手を置いた状態で奥に呼びかけると、家族にして

は似ていない顔の男共がゾロゾロと出てくる。

「おお！ やつと来たか」

「まさか本当に持つてくるとはな」

「その男で間違いないな？」

「コイツで間違いねえよ。俺が嘘は嫌いなのは知ってんだろ？ いい

から早く金をよこせ」

本当に持つてくる？ 俺で間違いない？ 金をよこせ？

男達とヤンコの会話が何を意味しているのかが、全く理解できなかった。

盲信が頭の回転をほとんど停止させていた。

「先に確認してからだ。やってみろ」

「……はあ」

ヤンコが溜息を吐き、間髪を入れずに俺の身体に激痛が走った。

あの男が殺された時と同じように、胸から刃が生え出ていた。背後から刺されたのだ。そして今それが出来る人間はただ一人。

「なん……で……。信じて……たの……に」

「騙しちまつて悪いな。だけど俺は嘘は吐いてねえぜ？ んじゃ、元気でな。たまに顔出す——」

裏切り者の言葉を最後まで聞くことはかなわずに意識が途絶えた。

そして次に目が覚めた時、三日前と同じように実験台の上に拘束されていた。

「おお！ 噂は本当だったか！」

「これから長い間よろしくアレン君！」

「一秒たりとも無駄にせずに研究させてもらうよ！」

「ああ……そうですか。やめてください、と言ってもするんでしょうね。知っていますよ」

絶望と失望、諦観やら悲痛やら憎悪やらがないませの負の感情に見舞われた。これを下回るものはそうそうないだろう。

犬に食われて初めて死んだ時も絶望と諦観はあったが、同時に幸福感や達成感を感じていたのだから。

「嘘は吐いていない……か」

裏切り者は最後にそう言った。

暗い闇の底で冷静になって考えてみるとたしかにそうだった。

俺は彼に大金をもたらし、研究によって国を発展させることから国民にとつては味方でもある。だから大切に扱ってくれたのだ。

「はっはーっ！ こりや傑作だ！ これ以上の馬鹿はいねえ!! ハハハッ！ アアーハッハッハッ!!」

そこでついに精神を狂わせてしまったが、次蘇った時にはやはり元通りになっていた。

◆◆

新天地で始まった被験者生活は、それはもうあの三年間が生易しいと思えるくらいの凄絶なものだった。

うん、あまり深く思い出すのはやめよう。マニックとコウヒさんに記憶を見せているだけとはいえ、さすがに耐えられなさそうだ。

その代わり端的に言えばこうだ。

『なまじ国が大きいだけに、技術力も高く研究者の数も多い』

『豊富な薬品や器具の使用はもちろんのこと、新造兵器や魔法の試行にも俺の身体が用いられた』

『少しでも時間を無駄にしないように昼と夜で人が代わり休みなく実験が行われ』

『睡眠薬の投薬以外で夢の世界へ逃げることをすら許されない』

『週に一度は演習場に駆り出され、そこで新兵を育成するために何度殴つても何度殺しても許される人形として扱われる』

『それが三十年間続いた』

もしも物語の主人公のように、非道な実験の産物で魔導の力を覚醒させたり、何度も殺されるうちに相手の技を盗んで強くなれたならと何度も夢に見た。

アイツの魂を持っているのだから、不老不死以外の何か特別な力があるんじゃないかと模索した。

十年もかけずにそんなものは何一つないのだと把握し、全てを諦め

た。

演習場で抵抗しても、新兵の一人として引退させることはできなかったさ。

俺は何のためにこの世界で息をしているのだろう。

六大神とアイツは遠くから俺の姿を見て何を思っているのだろう。

アイツが来たという、世界の向こう側には何かがあるのだろう。

耐え切れない苦痛に泣き叫びながらも、そのような哲学染みた問答を頭の中にする余裕が生まれた頃だった。

——ズドン!!

堅牢な研究所内にズドンという豪快な音が響き渡った。

それは極めて質量の大きい何か衝突したと思わせる轟音で。

新しい兵器の実験でもしているのかなと思っただが、そのような考えはすぐにかき消された。

「おい……」

「なんだアレ……」

研究者達の手が一斉に止まっていた。

彼らは皆揃って俺ではなく別の一点を集中して見ている。

(何があったんだ?)

辛うじて動かせる首だけを回して同じ場所を見ると。

分厚いコンクリートの壁が割れて大穴ができ、人為的な光しかなかった実験室に陽の光が入り込んでいた。

パラパラと剥がれ落ちる壁と、煙のように舞い上がった砂埃で向こう側がよく見えないあと、ぼうつと眺め始めた刹那——

「イヤッハアーツ!」

大きな黒い影が雄叫びを上げて室内に飛び込んできた。

「しゅ、襲撃だツ!!」

「兵士共、我々を守……れ……」

それはとても強く、気付いたら警備兵を全て打ちのめしていた。獣のような動きを止めてようやく人の形をしていると分かった。

ただ、普通の人間とは違って二本の角が生えていた。

「——《結ベヨ絡ミ草》」

穴の向こうからまた別の者の声がすると、床を突き破って生えてきた緑に逃げようとしていた全ての研究者が足の先から頭の上まで拘束された。

それから流麗な金髪を肩まで伸ばした美青年が大穴を通ってやってきた。

彼も人族とは違い、長い耳を持っていた。

「なーアイヴアラ。こいつらもやつとくべきじゃね？」

「そうだな」

角のある方に言われてアイヴアラが背中から短弓を取り出し、何の躊躇いもなく緑に包まれた研究者達の心臓に次々と矢を命中させていく。三つ数えるよりも速かった。

それを目の当たりにした俺が言葉を失っていると、二人してこちらに寄ってきて、ニツと笑ってみせた。

「童^{わっぱ}、もう大丈夫だ」

「助けに来たぜ！」

第二十二話 「弟子入り」

突然壁を突き破って現れた二人が瞬く間にこの場を制圧してしまった。

控え目にいつて気が動転した。

「助けに来たぜ！ 大丈夫か？ 自分の名前と性別と年齢言えるか？」

「……………あ……………えっ……………」

「愚か者、そんな暇はないと何度も言っただろうが。早く拘束を解いてやれ。もたもたしているとすぐに囲まれるぞ」

偉そうで堅物そうなエルフが角の生えたデカイ男に指図する。

「へいへい、分かりましたよつと。……………あー、めんどくせえ！ これごと持っていくしかねえ！」

「……………えっ……………えっ!?!」

この場で拘束を解くのを断念した男は、とてつもない怪力で実験台の上部を引き剥がし。

それを藁束でも担ぐかのようにひよいと担いで走り出した。俺が酔いそうになっていることなど気にせず、全速力でだ。

何が起こっているのか理解が追いつかなかった。

それでしばらく吐き気に耐え続けていると、いつの間にかあの施設が米粒程度にみえるくらいには離れていた。

「追手も来てねえし、この辺りでいいだろ」

「ヴっ……………」

「おい、優しく下ろしてやれ。……………遅かったか」

「オエエエエーッ！」

「おわッ！ きったねえ！」

下ろすではなくほとんど落とすに近いやり方で接地して衝撃を受けたのがトドメとなった。

それはもう耐え切れずに全て吐き出した。

「わりーわりー、ほら水だ」

「……………どうも」

ひとしきり吐いた後で、デカイ方が俺の拘束を力づくで外して水筒を差し出した。

不快感の残る口の中をどうにかしたかったので、それが水ではなく毒かもしれないと疑いながらも受け取って飲んだ。

「……………普通の水だ」

毒も薬も入っていない水を飲んだのは何年ぶりだろうか。

思わず言葉に出てしまった。

「わっはっは！ おもしれえこと言うなあ！」

「笑うなライノ。この童は水すらまともに飲ませてもらえなかったのだらう」

「あの、あなたたちは一体…………」

意を決して尋ねる。

「ん、ああ。自己紹介がまだだったな。どっちが先にやつか」

「お前からでいい」

二人は腰を下ろして胡坐をかいた。

知的で神秘的な翠色の瞳と燃えるような赤い瞳がじつとこちらを見つめる。

俺は思わず息を飲んだ。

あつという間に研究所を制圧してしまったのはともかく、普通の人間にとつての全速力を軽々超える速度で走り続けていたというのに、疲れた表情を微塵も見せない。

それだけで二人が只者じゃないことは分かった。

だから逃げることはまず不可能だなと諦めて全てを受け入れることに。

「んじゃ、俺からいくぜ！ さっきも言ったけどライノだ、ライノ・ローストンプ。とーちゃんが人族でかーちゃんが魔人、だからこんな見た目してんだけど…………怖い？」

ライノは側頭部から生える黒い角を隠すように握った。

俺はその問いかけに小さく首を振って答える。

「いや、そんな。むしろちよつと、カッコいいと思います…………ます」

男は百歳になってもカブトムシやクワガタムシが好きなのだ。

そもそもこの時の俺からしたら角が生えていようがなかるうが、強
そうなヤツはみんな怖い。

「お前っ！ いいやつだなっ！ 気に入ったっ!!」
「ぐえっ！」

ライノは俺の答えを聞いた途端に目を輝かせ、角から手を離してき
つく抱きしめてきた。

死ぬほど苦しかった。
背骨を折られるかと。

「やめろ馬鹿者、殺す気か」
「いてっ。あー、ごめんごめん！」

エルフの彼がライノの頭に石を投げつけて止めてくれた。

だけど解放されるのが少し遅く、確実にどこかしらの骨にヒビが
入っていた。

「気を取り直して……俺がライノだ、よろしくな！ んで、こっちの偉
そうなのがアイヴアラ」

「偉そうなのではない、お前と違って誇りを持って生きているのだ。
私の古里は静謐サイレントグリーンなる大森林にして狩人ルビコの子、アイヴアラだ」

口の端を少し上げて「よろしく頼む」と凛々しく付け加え、そのま
ま俺の自己紹介を促してきた。

「えっと、アレン・メーテウスです。出身はミリベ島っていう南の島で
す。それで、あの……」

どうせ酷い扱いを受けることは分かっていたので、思い切って聞い
てみることに。

「俺は二人の奴隷か生贄……それとも非常食にされるんでしょうか
？」

その問いかけに二人は黙って答えない。俺も黙って答えを待つ。

そして一番最初に沈黙を破ったのは、ライノが堪え切れずに出した
笑い声だった。

「ぶあっはっはっ！ あーひゃっひゃっ!!」

「くっ……。ダメだ、笑うなライノ……!! くくっ！」

「……は？」

冷静な態度を保っていたアイヴアラも釣られて笑いだした。

二人を見て絶対に勝てない相手だとは分かっても少し苛立ってきた。

俺を弔り殺した兵士達の嘲笑う顔が浮かんできて余計に腹が立つてくる。

勝つことも逃げることもできなくても、思い切り頭突きをしてやろうか、その綺麗な顔に傷跡が残るように噛みついてやろうか。

「笑い過ぎて腹いてえ！」

「だからどうなんですか?! 早く答えてくださいよ!!」

俺が声を荒げると、ようやく二人は静かになってくれた。

次いで悪い悪いと謝ってから優しい目を俺に向けてくる。

「さつきも言ったけどよ、俺たちは噂を聞いてお前を助けに来たんだ。敵じゃねえ」

「誰も信じられなくなっているのだ、無理もない。だがこれだけは言わせてくれ、我らはお前の味方だ」

「みか……た……?」

だいぶ前にも似たようなことを耳にした。

それでまんまと騙されて、どん底に叩き落とされた。

二度と同じ轍を踏んでやるものか。

「それで俺は味方として何をすればいいんですか? 新鮮な肉を提供し続ければいいんですか? それとも弓の的になればいいんですか?」

「だーかーらあ! そんなんじゃないやねえって! そもそも俺は人間なんか食わねーよ!」

「私は矢の無駄遣いなどはしない」

その頃の俺は読心術など身につけてはいなかったが、なんとなくウソじゃないことは分かった。

だから困惑して、口を開けたままで何も言えなくなってしまうた。

「アレンお前、不死者だろ?」

「……そうですけど」

「歳はいくつだ?」

「百二十六……だと思えます」

いきなり何をと思ったが、聞かれるがままに答えた。

「俺は三百ちよつとで、アイヴアラが」

「四百七十三歳だ」

「つまり、お前はこんなかで一番年下つてことだ」

だから何だと言うのだ。

「話が見えないんですけど」

「よーするにだな！ えーつと……アイヴアラ、後は任せた！」

「お前はこの先何百年も何千年も生きるかもしれないが、今は生まれただばかりの赤子同然。まだ世界の一分も知らないだろう？ しかし我々は一割くらいなら知っている」

そりやあそうでしょうねと受け答える。

やはりまだ何を言わんとしているのか分からない。

「世界の広さを教えてやろう。我々の弟子となり共に来い、アレン」

アイヴアラが目力を籠めて告げ、その横でライノがうんうんと頷いた。

「……弟子、ですか？」

「そーそー、弟子弟子。俺達がお前を立派な男に鍛え上げてやるよ！」

「このままではどうせまた捕まって同じ事の繰り返しだろう？」

「だから一人前になるまで俺達が守つてやるぜ！」

「………わからない」

二人が俺に何の他意もなくよくしてくれることだけは分かる。

でも、どうして？

「だって、あなたたちは、噂で俺の話聞いただけでしょ？」

それなのにわざわざ危険を冒すか？

国に喧嘩を売つてまで俺なんかを助けるのか？

不老不死以外に能の無い人間だというのに。

「俺が二人の何の役に立つつていうんですか!? 教えてくださいよ！」

「うーん、なんだろう……。荷物運びくらいか？」

「馬鹿者、そのような誰にでもこなせる仕事は全てお前のだ。馬鹿者

が

「バカって二回も言うなよ！ 弟子の前だぞ！」

「とりあえずこの馬鹿は置いといて、だ。今のお前が役に立てることなど何一つない」

「へ……？」

頭の中が真っ白になった。

不老不死の力を一切求められていない。

悪意も策謀も何一つ見えてこないのがむしろ怖い。

「じゃあ、どうして」

「どうして助けたか、だろう？」

「え!? お前ずつとそんなこと気にしてたの!?!」

心の内を読まれ、ぶんぶんと首を縦に素早く振った。

アイヴアラはフツと鼻を鳴らして横を向く。

「誰かを助けるのに理由があるか？」

「いらねーな……。……あでも、強いて言うならアレだ、困ってる奴を見捨てるとメシがまずくなる」

「そういうことだ。こちらからも問うが、お前は後先考えずに人助けをしたことがないのか？ いくら強欲で利己的な人族とはいえ、心の底から悪に染まっていなければ一度はあるはずだ。胸に手を当ててみる」

言われた通りにして、記憶の糸を辿る。

捕まって人体実験をされるよりも前のことだから三十年以上は昔になるが、たしかにそれは何度かあった。

考えるより先に体が動いていたという感覚だ。

見返りなどは何も考えずに助けた記憶がいくつか。

後先どころか誰かのために命を投げうったこともある。

「はい、ありました……。……あれ？ なんで……。、涙が……。」

両の目からボロボロと零れ出て、足元に落ちてゆく。

痛いから泣いているんじゃない。

怖いから泣いているんじゃない。

悔しいから泣いているんじゃない。

嬉しかったんだ。

初めて俺を理解してくれる人達に出会えて。

俺のしてきたことは間違いじゃなかったんだって教えてくれて。

「びいびい泣いて……お前は本当に赤子か？ あやしてやろうか？」

「泣きたくなったらいつでも胸を貸すぜ？」

涙を拭って顔を上げる。

俺の門出を祝ってくれるかのように心地よい追い風が吹きつけた。

「……はい！ 師匠っ！」

三十年に及ぶ苦痛の日々が消え去ったわけじゃないのに。

こうやって簡単に泣かされて絆されて、どこまでもついていくと決めてしまって、自分はなんて単純で愚かな人間なのだろう。

でも、今回ばかりは間違いじゃないと確信できた。

こんなに温かい気持ちで満たされたのは久しぶりだろう。

「そうそう。アイツが言わなかったから俺が代わりに教えてやるけどよ、アイヴアラはただのエルフじゃねえ。エルフ達を治める者として稀に生まれるハイエルフだ。だから怒らせたら怖えぞお、永遠に森の養分にされちまうぞお」

「お前こそかつては魔界の四将の一人だったではないか。アレン、常に警戒している。いつ気が触れて襲いかかってくるか分からんからな。あまり近寄らない方がいい。さあ、そろそろいくぞ」

「はい、師匠……」

それを聞いて肝が冷えたのは言うまでもない。

第二十三話 「歪んだ決意」

訳ありな師匠の訳ありな弟子としての旅が始まった。

「見よアレン。これこそが東の果ての醍醐味、世界で最も早い夜明けだ」

「はええ……」

大きな背中を追って世界の端から端まで旅して。

「見ろよアレン、アレが魔界名物《竜哭き峰》だぜ。あそこに張り付いてんのは全部竜か亜竜だ、すげえだろ!？」

「すっげえ……!？」

約束してくれた通り、二人は広い世界を見せてくれた。

普通の人間が七度生まれ変わっても知ることのないようなものとの出会い続けた。

もちろん、お客様気分で遊覧していただけではない。

偉大な二人の弟子として、心身ともに一人前になれるよう鍛え上げられた。

「ほんとお前は弱っちいなあ! そんなんじゃまたすぐに捕まっちゃうぞ?」

「師匠が、強すぎるん……です、よ……」

「おい馬鹿者、死なない程度にやれと言っただろうが」

ライノには主に武というものが何たるかを骨身に叩き込まれた。

彼はかつて魔界の四将にまで上り詰めた戦士であり、めっぽう強かった。

しかし力加減が致命的に下手くそで、何度余計に殺されたことか。

「いいかアレン? 自分を守るためにやる喧嘩はガキの喧嘩だ。自分以外を守るためにやる喧嘩がオトナの喧嘩ってもんよ!」

「なるほどなるほど……」

「フツ、誰彼構わず相手を見つけては殴り掛かっていたお前が言うようになったものだ」

「ああ!?! 喧嘩売ってんなら相手になるぞアイヴアラ! かかってこいや! 魔法は使うんじゃねえぞ!」

「ちよつと師匠！ やめてくださいってば！」

力を与えてもらったただけではなく、その正しい使い方も教えられた。

ライノは基本的に見本にはしたくないダメな男ではあるが、不思議とついていきたくなるようなカツコいい漢でもあった。

対してアイヴアラは非の打ちどころのない人物であり、指導者としても申し分ない。

唯一の欠点を挙げるとすれば、三人の中で飛び抜けて頑固だということくらい。

「師匠、俺にはやっぱり無理ですって」

「無理なことなどない、風を読め。具体的にはそうだな、的の向こうにあるあの枝が揺れた時に少し上を狙ってみるといい。……今だ」

「……………当たった！ できましたよ師匠！」

彼には弓の扱いや魔法についてはもちろんのこと、長命の者に必要な処世術を教授された。

となるとアイヴアラにだけ師事していればよいのではとなるが、そういうわけでもない。

「なーアイヴアラ、それはさすがにやりすぎなんじゃねえか？」

「馬鹿者、今やらないでいつやるというのだ。明日我々が生きている保証はないのだぞ?! アレン、できるな？」

「……………はい、やれます。やらせて、ください！」

「どう見たってこれ以上はできねえって顔してんじやねえかよー」

そう、死んだ方がマシだと思えるほどアイヴアラの稽古は辛く厳しいのだ。

その時点で俺に出来ることと出来ないことを正確に見極めているため、常に限界ギリギリを要求される。

アイヴアラの過失で死んだことは一度としてなかったが、三十年間の苦痛を経験しておらず不死者でもなければとつくに逃げ出していた。

「また私の教え方が間違っているとでも言いたいのか？ お前は弟子の力を信じていないのか？」

「お前のやり方は間違つてねえけど間違つてんだよバカ野郎！」

涼しげな瞳の奥にはいつだって己を焼き焦がすような情熱が潜んでおり、それが時折表に出る。

もちろんそこに悪意はなく、俺の将来を本気で考えてくれてはいるのだ。

そのせいで俺が断れないのをいつもライノが止めてくれた。

アイヴアラが厳格で妥協を許さない父親だとしたら、ライノは逃げ道を用意してくれる氣の良い叔父であった。

そんな二人の元で四百年もの時を重ね、二人に出会う前に形成されたものは大いに塗り替えられた。

根っこの部分を取り換えられたわけではないが、幼い頃に持ち合わせていなかった価値観や生き方を手に入れた。

幸せだった。

この旅が永遠に続くようにと星に願った。

三十年間の地獄の日々と裏切り者に感謝さえした。

だけどついに、別れの日が訪れた。

「でっかくなつたなあアレン……。昔はちよつと抱きしめただけで死にかけてたつつうのに……ううっ！」

「ははは、師匠に鍛えられたおかげですよ」

わんわんと泣いて涙と鼻水を垂れ流す大男にきつく抱きしめられて、俺が泣くわけにはいかないと思った。

「まったく、こんなどうしようもない男に四百年も師事して大変だったろうに」

「それは自分のことを言ってるのか？ 泣きてえならすぐに泣かしてやるぞ」

「どうしたライノ、顔が赤いぞ？ 悪い血が溜まっているようだな。今すぐに抜いてやろう」

「ちよつとちよつと師匠！ 最後なんですから仲良く、ね！」

何百何千回と繰り返してきたやり取りも今日限りでおしまになる。

「ではアレンよ、最後に一つ言わせてもらおう」

「どーせいいつものあんまためにならねえ長ばな」――《資モ産モ凍テ結ベ》

アイヴアラはライノを氷漬けにして黙らせ、それからいつも通りの真剣な目でこちらを向いた。

「押し潰され引き伸ばされ引き抜かれ縮められ捻じ曲げられ吊るされ折られ、刺され斬られ裂かれ打たれ焼かれ溺れ食られ食らされ毒され飢えさせられ唾われそして、裏切られて。お前は痛みをよく知っているはずだ」

「はー、よく噛まずに言えるもんだなあ」

「我々に絞り上げられたのも含め、この世界にお前より辛い目に遭った人間はいない」

すぐに抜け出したライノが茶化すのを構わずに言葉を続ける。

そこからいつものように長々と話が続いたが、最後にこう言った。

「お前の気が向いたらでいい。我々がしたように、自分がされたように、苦しみ喘いでいる者がいたら助けてやってほしい」

「それは、弟子への命令ですか？」

「いいや、命令ではない。対等な立場の者に対する頼みだ」

「……いいでしょう、承りました」

俺の答えを聞いて二人は満足気な顔をする。

「さらだば」

「じゃあなアレンーッ！ お前はもう一人前だぜーッ！」

気の済むまで手を振ってから二人の進む方向とは逆に進み、三度目に振り返った時にはその姿は消えていた。

だからようやく涙を流せた。

弟子入りを決意したときと同じようにびびいと泣いて。

泣いて泣いて泣き尽くしてから、自分だけの道を歩き出した。

「さて、どこに行こうかなあ」

再び師匠達と会うのはそれから二百年以上も後になる。

二人は侵入者として、俺はそれを迎え撃つ魔人の王として。



新たな希望と共に一人旅が始まった。といつても三人で旅していた頃とそう変わりはない。

己を鍛えつつ自由気ままに幸福と興奮を求めて世界を巡り、遠くで泣き叫んでいる誰かを助けることはできなくとも目の前で苦しんでいる者がいれば手を差し伸べる。そして美味しい飯をいただく。

世界は広く未知に満ち溢れているので、十年百年とそうしても飽きなど来ない。

しかし、またしてもツキが離れる時期がやってきた。

何をやっても失敗が続くようになり、巡り合わせが悪くなり、裏切られる頻度も高くなったのだ。ついでに言えば頭に隕石が当たりもした。

そんな日が続いて、狂ってしまうことさえなかったが、少しずつ擦り減っていく。

誰よりも痛みを知っているからといって、誰よりも頑強な心を持っているわけではない。

ほとほと疲れてしまったので、休息を取るためにほどの村を見つけてそこに住み着いた。

アイヴアラから教わった技術を用いて老けることによって怪しまれずにも済んだ。

我ながら上手くやっていたと思う。

さらなる不運に塗りつぶされるまでは。

「――また殺されたのか!？」

俺が住み着いてから二十年ほどして、村人が死ぬ事件が短期間に何度も起こった。

それら一つ一つは獣に食われただけの病気で急死したただの、魔が差し殺してしまったただのぼけた老人が村の外で飢えて死んだのだといった、なんてことはない不幸である。

しかし人々はそれを祟りかはたまた村人の中に化け物が紛れ込んでいると言うようになり、疑心暗鬼に陥ってしまう。

「やはりあの男の仕業ではないのか?」

「ああ、よそ者のアレンか」

「たしかにアイツは怪しすぎる」

誓って俺は何もしていない。

何か悪いものを呼び寄せたわけでもない。

しかし人々はよそ者というだけで俺をやり玉に挙げた。

公衆の面前で縛り上げられて、申し開きをさせられた。

「俺は化け物なんかじゃない！　そもそも元からそんなものはいない

！　どうか冷静になってくれ！」

「……と言っているが、みんなはどう思う？」

「そいつのせいに決まっている」

「お前がやったんだろ！　正直に言ったらどうだ！」

「ためしに心臓に杭を打ってみればいい。それで生きていたら化け物で、死ねば潔白だ」

二十年間という、普通の人間にとっては長い時間をかけて関係を築いてきた者達に揃って裏切られた。少し前まで笑いあっていたのに、誰一人として擁護してくれる者はいなかった。

そうなったのは俺の関わり方が悪かったからではない。

裏切った者が悪いというわけでもない。

強いて言うなら人族を臆病な生き物として創造したボルトイカス
ピードが悪い。

『アレン、お前はこの先どれほど善いことをしようとも十人に裏切られるだろう。百人に裏切られるだろう。だけでもし百人の中に一人、千人の中に一人でもお前を信じてくれる者がいるのなら、その者のために許してやってほしい』

師匠の頼みごとが脳裏を過ぎった。

「……分かりました。もう好きにしてください」

どうせもう覆すことは無理だなど諦めて、殺されてからすぐ逃げることに決めた。

「だけど最後に一つだけいいですか？」

ずっと後ろの方で黙っていた者を呼び寄せ、一つ尋ねる。

「君だけは俺が化け物じゃないって。何も悪いことをしていないっ

て、信じてくれるよな？」

今年子供をこさえたばかりの彼は、村の中で最も仲の良かった人物だ。

なんたつて二十年前に命を捨てて救い、そのせいで俺が不死者であることを唯一知っているが今の今まで誰にも漏らしていない。

だから信じてくれるという確信があった。

百人の中の一人、千人の中の一人であると信じていた。

彼のために他の者全てを許してあげようと考えていた。

だけど世界はそう甘くなかった。

「あんたは………化け物だよ」

「え………」

言葉に出してハッキリと拒絶され、そこから先はよく覚えていない。

心臓に杭を刺されて意識が切れる前に別の何かがぷつりと音を立って切れて。

冷静になった時には村の人間は一人残らず死んでいた。

「………そっかあ」

これまで俺を裏切ったのは全て悪人だった。

だけど今回は、善人と称せるような相手に裏切られた。

「そういうことかアー。……うん」

周りには誰も考えを修正してくれる者がいないので、それはもう捻じ曲がったまま固まっていく。

悪人だろうが善人だろうが人族は皆臆病だ。

自分を傷つけないために平気で他人を傷つける。

このような卑劣な種族が増え広がってしまえば他種族に害をなし、いずれ世界を壊してしまう。

そうなってしまう前に俺が責任を持って減らさなければ、いいや、

「滅ぼそう」

新たな決意をした次の行動は早かった。

一人では時間もかかるし滅ぼしきれないかもしれないので、配下を得るために一直線に魔界へ向かった。

途中で出会う人間を殺し、通り道にある村も町も国も滅ぼし、最後に北端の防衛地を半壊させてから封魔大陸へ渡った。

毒の煮えたぎる沼を越え荒れ狂う嵐を抜け、魔界で最も堅牢な城の門を破って、襲い掛かってくる魔人を全て叩きのめして進み。

そしてついに全ての魔人を統べる王、人間が魔王と呼ぶ者の元へ辿り着いた。

「その目は……人族の勇者などではない、見捨てた者の目だな。我に何の用だ？」

「いやあ、ちよつとね？ 君が人間を滅らすペースが遅いから、俺が代わりにやってあげようと思つてサ。——《シヨウネンバクサイ掌念爆碎》」

これを百度の自爆を以って打ち倒し、俺は晴れて魔王となった。

第二十四話 「雪解け」

それはもう晴れやかな日々が始まった。

魔王としての責務はともやりがいのあるものだった。

配下の魔人達は気のいいやつばかりで、俺が人族だからと拒絶されることはほとんどなかった。人族は大抵の場合魔人の特徴を持つ者を蔑み拒絶するというのだ。

中には姿形が醜い者もいれど、薄汚い人間などよりはよほど綺麗に見えた。

俺がしたように下剋上を試みる魔人もいたが、彼らは敗北すると潔く死ぬか忠誠を誓い。懐に潜ってからの裏切りなどは在りえなかった。

力が全ての世界に生きる種族はなんて美しいのだろう。

だから俺は彼らに報いるため、戦場では常に最前線に立って戦った。

「魔王アレン！ 世界の裏切り者め！ その首貫い受ける!!」

「ああ、獲れるものなら好きだけ獲っていくといい。それとな、世界は人間のものじゃあないんだよ」

当然ながら戦場で相まみえたり、城に侵入してくる者の中には英雄や勇者と呼ばれるような誉れ高き者がいる。

それらは俺に傷をつけるだけでなく、一度や二度は殺してきたこともある……が、最後には一人残らず死に絶えた。

どうしてかって？

それは殺意以外何も携えずに立ち向かってきたから。

絆して和解しようとは欠片たりとも考えていなかったから。

十や百殺されたくらいで俺の心は折れないことを知らなかったからだ。

それでたしか、三十年ほど時間をかけて世界に巢食う人間の三割を浄化した辺りだったか。

「申し訳ございませぬ魔王様！ エルフと半魔の侵入者二名、こちらへ向かってます！ 奴らは『バカな弟子を叱りに来た』などと言って

おり、城内の兵を総動員して当たらせていますが抑えきれそうにありません!!」

「あー……うん、アレは無理だろうねえ……。誰も死なないうちに通してあげて。命は大事だからね」

ちやうど四将が出払っている際にやってきてしまった。

すぐに轟音と共に扉が吹き飛ばされ、勇士達の死臭が残る謁見の間に見知った二人がずかずかと足を踏み入れる。

「うひよーっ！　ほんとに魔王になってやがるよアイツ！　さすがは俺らの弟子だな！」

「馬鹿者、ふざけている場合ではない」

ライノはやはり朗らかで馬鹿げたことを言い、それをアイヴアラが冷静にたしなめる。二人は何ら変わりなかった。

ただ、その瞳の奥ははつきりとは読めない。

怒っているようにも見えたり悲しんでいるようにも見えた。

「これはこれはお師匠様、お身体の調子はよろしいですか？」

「おう！　俺はいつだって元氣ピンピンだぜ！」

「お前こそどうだ、無理をしていないのか？」

「無理なんてそんな！　ここでの生活はとても幸せなものですよ！」

「そのようだな。先ほども誰一人として逃げなかった故、骨が折れたぞ。ここではえらく慕われているようだな」

「そうなんです！　彼らはですね——」

少々棘のある言い方ではあったが気にせず、いかに魔人が人族とは違って素晴らしいかを熱弁した。

「というわけで！　師匠達も俺と一緒に戦いましょう！　二人には四将の座を与えますよ！　どうですか？」

しかし二人は答えない。

「心配せずとも人族以外には手を出しませんよ！　やつらの土地を全て奪い取って、それをみんなで分けるんです！　ね？　素晴らしいでしょう!?!」

再度答えを求めると、ライノが頭をかきながら先に口を開いた。

「あー、わり。今はそんな気分じゃねえんだ」

「言わなくても分かっているだろうが、お前を止めに来た」

「へえ、止めに……。どうやって止めるんです？ 俺を殺してもしま
すか？」

「どうせお前は何度殺したって止まんねーだろ。その目を見りやわか
るぜ」

「だからまずは説得する。……アレン、愚かで愛しい弟子よ。我々と
共に罪を償おう」

魔王になって初めてのことだった。殺意や害意を持たずに俺をど
うしようよという言葉を聞いたのは。

やはり師匠達は短絡的で思慮の欠けた人間とは違う。

だからなおさら人間なんぞに肩入れさせたくはない。

「アイヴアラ、聡明で廉直たる我が師よ。……ええ、知っていました
よ。師匠ならそうやって手を差し伸べてくれると。ですがそれは無
理な相談です」

「実は私もお前がそう言うことを知っていた。言葉で分からないのな
らやはり、身体で分からせるしかないな。……やるぞライノ」

「遅めの反抗期ってヤツだな！ 腕がなるぜ！」

そして始まった。

二百年ぶりの手合わせだ。

「お手柔らかにお願いしますよ……つとオー！」

瞬時に距離を詰めてきた黒い巨躯、繰り出される剛拳をストレスで
避ける。

そのかわりに皆から意見をもらって手作りした玉座が砕け散った。

勇士達の血を塗りたくり、鉄よりも硬い鉱石でできているのにだ。

「馬鹿者、しっかり当てろ」

「当てたと思っただけだなー」

「ライノは相変わらずの馬鹿力ですね。すでにおと「衰えたなんて言
わせねーぜ！」

言葉の通り、すぐにこちらを向き直って止まらぬ連撃を繰り出して
くる。

力と速さ、そして精度が桁外れの殴り蹴り頭突きが無数に放たれ

て、

俺はそれを全て捌いた。

「にやろう……! 師匠からのプレゼントだぞ!? 一つくらいもらえってんだ!」

「嫌ですよ。一発でも食らえば死んでしまいますから」

「おいアイヴアラ!」

「しようのない奴め」

見ていられないなど、アイヴアラも加勢に入る。

一息で十の矢を放ち、それらはまるで意思を持っているかのようにライノの背後から俺目がけて飛んでくる。ライノはライノで後ろに目がついているかのように避け続ける。

もちろん意思を持っているわけではなく後ろに目がついているわけでもない。

ライノならどうするか、アイヴアラならどうするかをお互いに分かっているからできる、二人の信頼関係の上に成り立つ奥義だ。

「——《舞エヨ欺ケ煙人》《資モ産モ凍テ結ベ》《結ベヨ絡ミ草》」

むろんアイヴアラは矢を放ち時折ナイフを投げるだけでなく、魔法を誤爆の一つもせず極めて冷静に行使する。

八百年と生きて最も敵に回したくないと願った相手だ。

いざ相手にするとこちらも頭をフルに回転させ全力を出さねばならず、大変骨の折れることこの上ない。

「《疾レ風ヨ怒リニ答エヨ》《噴骨碎芯》《食ンテ散ラカセ蝗火ヨ》」

「……これまた達者になったものだ」

「師匠の教え方が上手かったからですよ」

言い方を変えれば、全力を出せば対処できるということ。

どんな酷い目に遭おうと抵抗できずに泣き叫んでいた頃の俺はもういない。

小指一本しか使わなかったライノに喧嘩で負けたのも。

アイヴアラの稽古から逃げ出した三秒後にぐるぐる巻きにされたのも。

みな遠い過去のことだ。

「オイオイどうすんだよアイヴアラ！ あいつめっちゃ強くなったんぞ!」

「やり方はどうであれ先代の魔王を打ち倒したのだから、強いに決まっているだろうが」

「知り尽くしていますから」

ライノがアイヴアラを、アイヴアラがライノを知り尽くしているように、俺だって二人のことを知り尽くしている。

二人の戦う姿を誰よりも近くで誰よりも長く見てきたのだ。

それがこんな形で役に立つとは思ってもいなかったが。

「このままやっても勝てはしないと薄々気付いているでしょう？ 二人が俺を強くしたからですよ。今日はこの辺りで帰って休んだらどうですか？」

それともこの城に泊まってはどうかと提案しても、二人が手を止めることはなかった。

二人の相手をするのは一瞬たりとも気の抜けないものであったが、それでも少しずつ楽になってきた。

「おやおや、少々鈍ってきましたねえ」

ライノは衰えていないと言いながらも、やはり精彩を欠いた動きが目立ってきたのだ。

千年は優に生きると言われているハイエルフのアイヴアラはともかく、彼はただの魔人と人間のハーフである。

いつ死んでもおかしくはないお歳には違いない。

「アイヴアラ、アレでいくから頼むわ」

「分かった」

するとライノが拳を止めて一旦距離を取り、ぽつりと告げた。次いで深く空気を吸い込み、

「——うオアアアアアアあああああああッ!!」

耳をつんざくような声で咆哮。

「何ですか……その姿は……」

ライノは初めて見る姿に変容していた。
漆黒の巨躯が少し縮み、黄金色に輝く鎧のようなものが全身を覆っている。

「いくぜえ……」

大きく右足を振り上げ、床を踏みつける。

それで床が砕けて埃と破片が舞い上がる。

音と衝撃からして先ほどより膂力が数段上がっているのが分かった。

さらにその衝撃でバランスを崩さないようにと気を取られた刹那、彼は目と鼻の先に。

「速っ——」

避けようとした時にはすでに両腕を掴まれていて。

そのまま流れるように羽交い絞めにされた。

同時にライノは俺の口を塞ぎ、アイヴアラに目線を飛ばす。

「——《結ベヨ絡ミ草》《資モ産モ凍テ結ベ》《戒^{イマシ}メノ磐^{バンロウ}牢》!!」

アイヴアラが全身全霊でそれらを唱え、俺はライノと共に嚴重に拘束された。首から下をがちりと固められた。

やられた。

多少侮つてはいたが油断していたわけではない。

それでも対処できなかった。

「魔王様を助け出せ！」

「おおッ!!」

「すぐにお助けしますー!」

影で見えていた魔人達が一斉に飛び出す。

「やめろお前達!! このような拘束すぐに解く! 何も手を出すな!」

情けない真似はしたくなかった。

何より二人に皆を傷付けさせたくなかったし、二人を傷付けてほしくもなかった。

「ひゅー、さすがは魔王様だぜ。かつくいー」

「……師匠、さっきのは何です」

冷やかしを無視して問う。

首を回して後ろを見ると、ライノはすでに黄金色の鎧を纏ってはいなかった。

しかしあれは見間違えではない。

「へへ、お前にはまだ一回も見せたことはなかったな。アレはじーちゃんに教わったんだけどな、使うとめっちゃ強くなれんだ。んで、めっちゃ命を削る。反動がでけえんだ。……実は今もクツソ身体が痛え」

「何を馬鹿なことを!!」

「私もそれを見るのはまだ二度目だ。一か八かの窮地に陥った時にしか見たことはない。それほどお前が強くなっていたということだ」

アイヴアラが弓をしまつてゆっくりと寄ってきた。

「この程度の拘束で俺をどうこうできるとでも?」

「もちろん」

「俺が自爆すれば全て吹き飛びますよ?」

「そうか。ならやってみるといい」

拘束から逃れるために二人を巻き込んで自爆。

そして俺だけが無傷な状態で蘇る。

そんなこと、できるわけがない。

「……………卑怯ですよ」

「これが最善手なのだから仕方ない。氷も根も取つてやろうか? そんなものなどなくとも後ろの馬鹿一人で十分だろうしな」

「どんなに衰えてもお前を締め続けるくらいはできるぜ!」

「……ハッ! 俺は不死者だから大丈夫ですけど、二人はいつまでそうやっているつもりで?」

「お前が頭を冷やすか、それか我々が死ぬまでだな。ハイエルフの執念深さをなめるなよ?」

「我慢比べといこうぜ?」

二人は死ぬまでこうしていると言い切った。

俺がそんな死に方をさせないことを知ってて。

全部見抜かれていた。

だから俺は最後の足掻きに二人を説得しようとした。

決して話に乗らないことは分かっていたいながらも。

「師匠達も人間の醜悪さを知っているでしょう!? それこそ裏切られたことだって何度もあるはずだ」

「まあ、あるわな」

「違うない」

「じゃあなおさら、奴らが世界を食い散らかして壊してしまう未来だって想像に難くないでしょう!? 全ての人間が団結すれば魔界を攻め落とすことだってできるのに。世界から同族の三割が消え去ることはなかったのに。いつだって分裂が融和を上回っている。人族というのは戦神の創造物であって、本質的には争いを望んでいるからだ。そしていつか世界全土に戦火が燃え広がる時がくる。ならいっそ、今の内に全て消し去ってしまえばいいんだ!!」

俺は息を荒げて心の内を解き放った。

溜め込んできた憂いや哀しみ、腹の底から湧いてくる怒りと憎悪、

誰にも委ねられない責任感。

その全てを理解してくれると信じて。

「お前の考えはよく分かった」

「つーか話なげーよ。そこまでアイヴアラを見做わなくていいんだぞ」

「なんだと!?!」

「それで、どうなんです!?!」

理解した上で否定されることが目に見えていたから答えを急かした。

「どうってまあ、お前の言うことはだいたい正しいよ。あいつらって俺の次に馬鹿だし」

「概ね間違っていないな」

しかし二人は否定しなかった。

「……だ、だったら!」

「しかしそれはまだ先のことだ。いつかきつと滅びに向かうだろうが、今ではない未来のことだ。どうするかはその時になってから考えればよい」

「そんなときに俺とアイヴアラがまだ生きてたら一緒に懲らしめてやるよ！ な？」

「うむ。愚か者らに熱い灸を据えてやろう」

「だから今はまだ、そんな張り詰めた顔してねえでよ。笑ってようぜ」

「ああ……そう……」

ふつと身体力が抜けた。

一人で先走るなど諭されて、肩にのしかかっていたものがどこかに消えた。

師匠達が最初に宣言した通りに説得されてしまったのだ。

それらを自覚した途端に涙と鼻水が吹き出てくる。

「う……ぐつ、俺はまだ……全然、弱かったんですね……うあ……」

「あーあー、またアイヴアラが泣かしやがった」

「お前の締める力が強すぎるせいだろうか」

俺は少し落ち着いてから、二人にちよつとした頼みごとをした。

もう一度師匠になってくれませんか？

罪滅ぼしの旅に同行してもらえませんか？

といった情けないものだ。

さつき卑怯な手で嵌められた仕返しに、二人が断れないようにほとんど泣き落としに近いやり方で頼んでやった。

「まあ、全部合わせて二千万人は殺してしまったので、二人が死ぬまでには終わらないと思いますけど」

「……つたく、しよーがねーな」

「いいだろう。我々が死ぬまでの間、性根から鍛え治してやる」

そうと決まれば早かった。

俺はすぐさま中央大陸に送った魔人達を帰還させ、いつかここでの恩は必ず返すことを全軍の前で約束して魔王の座を降りた。

その際文句を言う者は一人もおらず、中には寂しくなるなど泣いてくれる者も。

そのせいで俺もまた泣いてしまつて、「こんな泣き虫は魔王にはふさわしくねえな」「さつさと行つちまえ」などと皆に笑われながら魔界を後にすることに。

「あー……結局全部無駄だったなあ……。ほんと何してたんだろ」

「いや、無駄じゃねえぞ。お前はようやく頼れる仲間を見つけたんだ」「我々が死んだあとで何か耐え切れないことがあれば魔界に逃げ込んで、彼らに手を貸してもらえばいい」

「そんなもんですかね」

「そんなものさ」

師匠達が死んだ後も当然旅を続け、二千万人殺した償いに同じ数を救った。

償いを終えてからは、また訳あつて魔王になったり俺と同じ境遇の者に手を差し伸べたり、新たな師を見つけたり今度は俺が弟子を作つて連れまわしたり、とにかく気の向くままに世界を巡つた。

それら全てを見せると何十日もかかつてしまうので、詳細は省くでしょう――

「――そして今まで生きながらえてきましたとき。……大丈夫かい二人とも?」

二人の額に置いていた手を離す。

先にマニツクが目を開き、次いでコウヒさんが赤く腫らした目を開いた。あまりにも辛く凄惨な場面を見たせいで泣いてしまったのだろう。申し訳ないことをした。

「ひでえもん見せやがつて。アレ全部本当にあつたことかよ……?」

「もちろんだとも」

石の座席に拘束した二人を解放して。

それから俺が不死者であることの証明にと、足元に落ちている毒矢を拾つて心臓に刺し入れた。

「……………ね?」

「俺の三日間を返せこの野郎」

マニツクが立ち上がつて固まつた手足をぶらぶらと振りながら悪

態をつく。

コウヒさんは俺を凝視したままピクリとも動かない。

「というわけで、これが俺の正体さ。裏切るのも裏切られるのも大嫌いな臆病者だよ。信じてくれるかい？ ああそれと、何か質問があれば好きにどうぞ」

二人はちらつと視線を交わし、少々黙り込む。

十数秒してマニックがうん、うん、と。ひとりうなづいて口を開いた。

「ま、お前が味方だつてことを信じるしかねえわな。その気になればいつでもこの国を滅ぼせるんだしよ。それと質問……つてのはねえけど、言いたいことはある」

「ほう？」

「お前の過去を観ながらずっと思つてたんだけどよ、ありえねえくらい馬鹿だなんて」

「私もマニックと同意見です。あなたは呆れるくらいお人好しだと思います」

「ええつとそれは……。褒めているのか、それとも貶しているのか」

どっちだ？ どっちでしょう？ と二人は各々疑問を浮かべ、結局答えを出さずに流した。

「ま、とにかくアレだ。俺がお前だつたらもつと上手く生きてるつての」

つまりお前は不器用な人間だなと貶されてる気がして釈然としなかったが、表も裏も全て見せあつて信用してくれたことだけは分かった。俺という存在を受け入れてくれたことも。

なので、本来は専行するはずであつた計画を二人に打ち明けることにした。

「……というわけなんだ。協力してくれるかい？ 俺のため、いいや、カレンのために。……つまりは俺のためなんだけど」

「嫌だと言ったら？」

「君達の記憶を消して帰すか、革命が終わるまでこの部屋に閉じ込めることになるね。好きな方を選んでくれたまえ」

「つたく、素直に協力してやつから一杯奢れよ」

「私も手伝わせていただきます」

「ありがとう！　ありがとう！　んふふっ！」

思わず頬が緩んでしまう。

しかしそれではまずいと、パンパンと顔を叩いて締め取り戻す。

「さあ、我が友よ！　とにかく今は時間が惜しい、さっそく準備に取りかかるう！　皆が笑っていられる未来のために！」

締め言葉の言葉を述べてから。

俺は二人に、それも片方は先程殺しかかってきた者に背を向けて石の隠し扉を開けた。

「……ん？　どうした？」

どういうわけか二人はその場から一步も進まない。

それでいて何か言いたげな顔をしている。

「マニツク？　コウヒさん？　俺の顔に何かついていませんか？」

「……いえ、顔ではなくて、その」

「あー、カツコよく決めてくれたところわりいが……ケツ、丸出しだぜ」

「ケツ？　……あつ」

尾てい骨の辺りを触れると、そこに布はなかった。

そういえば、身体の一部を竜に変化させた時にぶっとい尻尾を生やしたんだった。

それで服に大穴が空いてから、俺は気にもせずにな……

「誠に申し訳ございません、死んで詫びます」

「わ、私は好きですよ！　惚れ惚れするような大臀筋だと思います！」

「それはどうも……」

なんとも締まりの悪い終わり方になってしまった。

第二十五話 「末永く幸せにねーっ！」

ついにその日がやってきた。

まだ夜が明けてから二時間と経っていないのに、耳を澄まさずとも無数の声が風に乗って聞こえてくる。

窓の外を見れば街のほうぼうで国旗がはためき、目に入る人間は皆笑っている。

今日だけは富める者も貧しき者も皆ひとしく笑顔になる日なのだ。

「段取りは覚えているね？」

「うん、大丈夫」

カレンが鏡に映る自身を真剣な目で見つめながら答える。

「これが失敗すれば大勢の人間が死ぬ。もつとも、それが本来のやり方なんだけどね。カレンはそういうのは嫌いだろうか？」

「うん、誰にも死んでほしくない。ううん、絶対に死なせない」

「ワガママなお嬢様ですこと」

鏡台の前でじつと座る娘の赤と黒が織り混ざった髪を梳かして結い、輝きと瑞々しさを際立たせるように薄く化粧を施す。

なんたつてカレンはこれから国家を、いいや世界を脅かす大役を演じるのだから。

うんと可愛くしてあげないと。

カレンのおめかしをしてから一時間ほどして、扉が叩かれることな
く開かれた。

トラスアとカレンを中心に、屋敷で働くすべての使用人が並んで
深々と礼をする。

「ようこそお運びくださいました、陛下」

もじやもじやの髭を切りそろえ、ピシツと礼服を着こなしたトラス
アが、その者を兄とは呼ばずに迎える。

前日に急遽組み込まれた予定だというのに、動揺の色はない。

「さよ、うちらへどござ」

すぐに朝食の席へと案内する。

神々への感謝の祈りを短く済ませてから大テーブルに三人だけの食事が始まった。

フリスとトラスアが軽い世間話をしながら草を食む。

カレンは真つ先にパンや肉にかじりつきたいのを我慢して、二人のペースに合わせて品よく野菜を咀嚼する。

「して、どうしてこのような大事な日にこちらへ？」

パンをひとかじりしたトラスアが、最も気になっていた質問をした。

それもそのはず、正午過ぎには国民の前で殺す相手が急に来訪したのだから。

もしかしたら革命のことがバレているのでは？ そのように疑うのは自然なことだ。

「どういうわけか今日ここに来なければならぬと思つてな。天のお告げというものだろうか。気まぐれとも」

「……さようでございますか」

それをフリスがあっけらかんと答える。

もちろんそんな気まぐれがあるわけがなく。

俺はマニツクとコウヒさんに計画を打ち明けた直後、城へ侵入してフリスの寝室に忍び込み。気持ちよさそうに寝息を立てる国王陛下に夢を見せたのだ。

建国祭の日に弟の家に行かないと国が減ぶという夢を。

「うむ、馳走になった」

結局何事もなく食事が終わり。

「それでは陛下、トラスア様、カレン様。こちらへどうぞ」

俺は皆を城と街並みが一望できるバルコニーへ。

いわゆる兄弟の思い出の場所へと案内した。

「おお、懐かしい。私達はここでよく遊んだものだ。覚えているか？

あのボードゲームを」

「昔は全く陛下に勝てませんでしたなあ」

「ここでは兄上でよい。それとその言い方は今ならば勝てるということだな？」

「いえいえそのような」

「では、確かめてみてはいかがでしょうか？　ちょうどこちらにございます、どうぞ」

二人が幼い頃によくやっていたというボードゲームを取り出す。ちなみに自腹で購入してきたものだ。

さすがにトラスアがこれらは全て俺が用意したものだど気付いて「どういうつもりだ？」と訝しんだ目を向けてくる。

それに対して俺は何も言わずにニツコリと笑った。

◆?◆?◆?

「かあーっ！　また負けたあ！　トラスアよ、少しは手加減せよ」

「いやはや、手を抜くなど言ったのは兄上でございせんか」

それは貴族同士が争って一つしかない王の駒を奪い合うというボードゲームであったが、トラスアが三戦三勝した。

俺は微動だにせず、カレンはお菓子を貪りながら二人が没頭する様子を見ていた。

「クソッ！　もう一回だ！　……と、その前に尿意が」

「あ、あたしも」

「ではカレン、兄上を案内してやってくれ」

フリスとカレンが用を足しにいき、ちょうどこの場には俺とトラスアだけになった。

「それでアレン君、これはどういうことか説明してもらおうか？」

「革命が成功するにしても失敗するにしても、最後の思い出をと思いまして」

「余計なお世話だ、この後兄上を殺せなくなったらどう責任を取ってくれる」

「殺さなくてもいいのでは？　心の底から憎んでいますか？　違うでしょう？」

トラスアが目を伏せて黙る。

二人の態度を見た限り、心の底からいがみ合っているとは到底思え

ない。むしろ立場を捨てられるのなら、今すぐにも一緒に暮らしたいと顔に出ていた。

「実の兄を殺す覚悟がお有りですか？」

「……………あるさ。私は同胞達の命を背負っているのだ。勝手な真似はやめてくれ」

「では、俺はもう何も口出ししませんよ」

ああもう、馬鹿だなあ。

そんな中途半端な覚悟で臨んだら、一生後悔するということのに。

そこで会話を止めたトラスアはどこか遠くを眺めていたが、二人が戻ってくるやうに現実に帰ってきた。

「やるぞトラスア！ 次こそは私が勝つ！」

「これで最後にしましょう兄上。式典の準備もあるのですから」

「おお、もうそんな時間だったか」

本音を言うならば兄も弟も時間を忘れて共に過ごしたいはずなのに、自身の立場というものがそれを許さない。

だからせめて今だけは立場を忘れて楽しもうと遊戯に興じ、あんなことがあったなあこんなことがありましたなあと幼い頃の話を楽しませる。

そう、遠い昔の話ばかりを。

「——ねえ、今の話はしないの？」

そこをカレンが容赦なく切り込んだ。

時間が止まったかのように二人の動きがピタリと止まる。

「そんな昔のことなんかより、今話さなきゃならないことがいっぱいあるでしょ？ 悩みとかないの？」

「も、申し訳ありません兄上！ 娘は難しい年頃でして」

「……………そうか、今の話か」

焦るトラスアと口ごもるフリスを見て、カレンは軽く溜息を吐いてなおも続ける。

「全部バラしちゃうけどね、あたしはトラスアの娘じゃないの」

「カレン!? いきなり何を言い出すんだ！」

「トラスアはね、アンタが悪い王様だからって革命を起こして殺そう

としてるんだよ？ でもあたし、アンタがそこまで悪い人だとは思えないなー」

「なっ……」

トラスアが絶句する。

まさかこんなところで全てを曝露されるとは思ってもいなかったようだ。

彼の兄はというと、まるでそれを知っていたかのように大して驚きもしない。

「兄上！ 実は娘は妖魔に憑りつかれておりまして！ 今のは全て出鱈目で……！」

「いつか、そんな日が来るとは思っていた」

フリスは近場に控えている護衛に助けを求めもせず、そつと自身が持つ王の駒をトラスアの前に差し出した。

やれと言わんばかりに。

「お前になら安心して任せられる」

「兄上……」

「んー、それだとなんか違うんだよねー」

そしてまたしても、兄弟の感動的な場面をカレンが遮った。

「これをこーやって……アレン、ちよつとやって」

「はい」

王の駒をひよいと取り、それを折ろうとしたができずに俺に手渡した。

俺が綺麗に真つ二つに割って返すと、トラスアとフリスの前に一つずつ置いた。

「どっちか一つに決めなくてもいいじゃん。二人で一緒に王様をやれば？」

それは今まで誰も申し上げなかったであろう言葉だ。

兄弟で手を取り合って政務を執る。

極めて簡単なことだが極めて難しくもある。

「仲良いんだからできるでしょ？」

「そう簡単に出来るわけがないだろう。カレン、これ以上余計なこと

を言うのはやめてくれ」

「ああ、私も王位に就いたばかりの頃は何度か考えたさ。思えばその時に無理にでも実行していればよかった。時が経てば経つほどしがらみが増え、背負うものが重くのしかかり、自由に身動きが取れなくなる」

「ふーん、バツカみたい」

いつものようにカレンが吐き捨てる。

うちの娘は大人のこじれた関係というものが大嫌いなのだ。

今は理解できないし、大人になったからといって理解したくもないと仰っている。

あくまでみんなで仲良くしろという自分の信念を押し通すつもりだ。

「カレンといったか。なぜ我々の仲を取り持とうとする？ お前はトラスアの部下ではないのか？ 一体どちらの味方なのだ？」

では、ここからが本題だ。

どうすれば対立する二人を説得以外の方法で繋ぎ合わせることができるか。

「どっちの味方でもないし、そもそも敵だよ？ あたしはこの国を乗っ取るためにきたんだもん」

答えは簡単、共通の敵を作ればいい。

「……はっ、あっはっは！ 面白いことを言う娘だ！」

「アレン君？ カレンに何か悪い物でも食べさせたのかね？」

当然二人はそれを冗談か何かだと思っている。

この世界のほとんどの生き物は目で見たものしか信じないのだ。

「アレン、やりなさい」

「仰せのままに」

カレンの命令を受け、助走をつけてバルコニーから飛び出して例の言葉を唱える。

「——《我々ト同化セヨ》」

どこからともなく湧いてきた黒い霧が俺の全てを包み込む。

何も視えない闇の中で肉と骨が混ぜられ引き延ばされ、全く別のも

のに変えられていく。

蛹などとはまた違った、この世のものとは思えない奇妙な感覚だ。その全てが終わって靄が消え去った時、俺の身体は著しく巨大化している。

腹の底では炎が燃え滾っていた。

「……ま、まさかその姿は」

「ワイバーン 亜竜……いや、ドラゴン 竜……!?!」

今回は亜竜ではなく、最低でもその三倍もの体格と質量を誇る四爪の魔物となった。

いつの時代も人々を恐れおののかしてきた正真正銘の怪物、竜である。

昨晚ちよろつと音速を越える速さで魔界の《竜哭き峰》まで飛んで、心臓を一つ取ってきたのだ。

実に骨が折れた。もちろん二重の意味で。

「ねえどう? これがアレンの正体よ」

足の一踏みでアーチカルゴ像の置かれた小屋を潰し、尾の一振りです屋敷の屋根が瓦解する。そして極めつけに――

「――ゴアアツ!!」

体内の火袋で生み出した火球を大顎を開けて放射し、城の尖塔の一つ――ちようどフリスの寝室がある部分――を消し飛ばした。

「ト、トラスアあつー!」

「あ、兄上えー!」

次の瞬間に自分は死んでいるかもしれないという恐怖に駆られ、お互いの身体を抱き合って震える初老の兄弟。

そこにカレンがさらなる追い打ちをかける。

「それじゃあ、あたしもやろっかな」

カレンが二人に不敵な笑みを浮かべ、パチンと指を鳴らす。

それから少しして、街の至る所で連続して爆発が起きたではないか。

もちろんそれは城でも起こり、全ての尖塔が破壊されてしまった。

「おーほっほっほっ!!」

菓子をつまみながら四方八方より聞こえてくる悲鳴を嗜み、怯えて身動き一つ取れない兄弟を尻目にあくまで上品に高笑いする。

「我が主よ、いかがですか？」

「んー、最高の気分ね！ あーでも、ちよつと物足りないかなー。こんな弱つちい国、乗っ取る意味ある？」

「では、今回は見逃してあげましょうか」

俺はそこで大きく息を吸い、ヒトのものより幾分も大きい発声器官で強い言葉を発する。

「脆弱な人族よ、聞け！ 貴様ら下等な種族でも理解できるように我が主の言葉を意識するところだ。『かような小国を落としてもつまらん。故に此度は見逃してやるが我々は必ず戻ってくる。それまでに少しでも国力を高めておけ。私をもっと楽しませろ』」

「なんと……」

二人はまるでこの世の終わりのような顔をして、俺の言葉を噛み締めて聞く。

「しかし我が主は一方的な虐殺を望まない方であるから特別に教えてやろう。万一にもこの国が我々に抗う術があるとしたら、貴様ら兄弟が力を合わせる以外にあるまい。それでもくだらぬ内輪揉めをしていたらどうなるか、分かっているだろうな？ せいぜい励むのだな！」

「またねー！」

言いたいことを全て言ってからバルコニーに竜の手を差し出して主を乗せ、飛翔した。



火を吹きながら都市の上空を飛び回り、全国民に竜の存在を知らしめてから小山の向こうへ降り立って変化を解いた。

すぐさま付近にある小屋からあらかじめ用意しておいた荷物や服を引っ張り出す。

「大成功だカレン！ いえーいー！」

「いえーいつ!」

いつでも出立できるように準備を整えてからカレンとハイタッチをして踊り、喜びあう。

しばらくそうやってしていると街の方から早馬がこちらに向かってきた。

騎乗しているのはマニツクとコウヒさんだ。

「お疲れ様ですアレンさん、カレンさん」

「今しがた、フリスとトラスアの旦那は共同統治を決断したってよ」

「ほんど!? いえーいつ! コウヒちゃんも!」

「い、いえーい」

馬から降りた二人にカレンが駆け寄ってハイタッチをする。

「しっかしこうもすんなりいくとはな。さすがは元魔王様とその娘つてところか」

「何を言う、君達の協力があったからこそさ」

マニツクとコウヒさんが仲間達に呼びかけて説得し、爆破による人的被害が出ないように人払いや適切な爆破地点を指定してくれて。

混乱した人々の避難や誘導なども皆で引き受けてくれた。

彼らがいなかったら多少なりとも死傷者が出ているはずだ。

「ではそろそろ、追手が来てしまう前に行こうかな」

あまり多くを語る必要もないし、語らずとも分かっている。

腹の底を見せあった仲なのだから。

「そんじゃ、これとこれな」

マニツクが金で膨らんだ麻袋と高そうな酒を手を持った。

「何だこれは?」

「報酬に決まってるだろうが。酒は俺からの餞別だ」

「残念だが、俺にそんなものを受け取る資格はない。雇用主に逆らうという契約違反を犯したのだからな。……ま、こっちはもらっておこうかな」

酒だけを受け取って荷袋にしまい、

「そうそうカレン、アレを」

「はいこれ、あとでトラスアにあげてね」

今度は逆にカレンがあるものを取り出してコウヒさんにそつと手渡した。

俺が命をかけてもぎ取った冠だ。

「……よろしいのですか？」

「うん、あたしにはまだ大きすぎるかな」

それにこのような上の下程度の冠はカレンにふさわしくない。

来たる日に俺が最上級の冠を作って載せてあげると決めている。

「それとコウヒさんにはその小屋に色々置いてあります。筋肉を収縮させた状態の型と肥大化させた状態の型を一つずつ。防腐処理済みの死体も氷漬けにしておりますのでお早めどうぞ」

「本当ですか!? ありがとうございます!! 一生大事にさせていただきます!!」

「そ、それは何よりです……」

コウヒさんの微笑む様は何度か見てきたが、まさかここまで純粋に大喜びができるとは思っていなかった。

まるで親にオモチャを買ってもらった子供のようだ。

「マニツクには……。技術をいくつも教えてやったのだから無しだ」

「へいへい、ありがとうございましたよつと」

ではまたいつか、と。

次なる地を求めて歩き出す。

それでも百歩ほど進んでから振り返り、やはりこちらに手を振り続けている二人にさよならを送る。

「マニツクー！ 思い切りが大事だよーつ！ コウヒちゃんはちよつと鈍感なところがあるからハツキリ言わないとダメだよー！ 末永く幸せにねーつ！」

「そうだぞマニツク！ 次来たときには子供の顔を見せるのだ！ 大いに励んで増やすのだーつ!!」

「うるせえーつ！ さっさと行っちゃまえ!! 二度と来るんじやねえーつ!!」

遠くからでも分かるくらい尖り顔が赤く染まる。

だからまだ相棒が決心できていなさそうな三年後にもこつそり

来て、カレンと一緒にからかってやろう。
そう決意して背を向けた。

《第二章・通りすがりの革命家 完》

第三章 因果応報の不文律 前編

第一話 「第二の故郷」

少女の親探しを主目的とした旅を始めてから、早いもので半年の月日が流れた。

ひたすら西へ西へと、あの日カレンが棒を倒して決めた方角へ進んではいるが、未だに手がかりの一つも掴めない。ついでに言えば俺が石の中に封じ込められたワケも。

道中どれほど聞き込みをしても、活字に目を通して、カレンの両親と思しき人物の噂話や俺が千年前にやらかしてしまった何かについての言い伝えなどは欠片たりとも出てこない。

だからといって諦めて歩みを止めることはなかった。

そうこうして、とある辺境の地までやってきた。

ここ三百キロメートルは山を越えて山を越えて森を抜けたらまた山を越えてきて、その間には人つ子一人いなかった。

一応舗装されていない道だけが途切れそうに途切れずに続いてはいるが、さすがに飽きがきたカレンがぶつくさと言うように。

「誰かいらないのー？ もうこの際アレンを殺しに来たテンノでもいいからさー」

「この丘を越えたらきつというさ」

そして丘を越えた先で目に入ったものは、一面の濃い緑色だった。

「はあー……また森じゃん」

「エルフにとって森は故郷のようなものだろう？」

「だってあたし、半分は人族だし。それにこの森、なーんかヤな感じがするもん……」

カレンの予感当たっていた。

いざ道なりに森の入口へといくと、そこには『危険、引き返せ』と血のような赤い字で殴り書きされた看板が立てかけられており、森の中へと続く道は何本もの倒された大木によって封鎖されていたのだ。

念のため木々の倍の高さまで飛び跳ねて見渡すも、青い空との境目は濃い緑色で、終わりの見えない深い森であることを視認できた。

「ほらあー、引き返そうよ。ゼツタイいいことないって」

「……そうだな、うん」

「ねえ!? あたしの話聞いてた!? 何で入っていくのよ!!」

声を荒げる娘を無視して、倒された木々を踏み越えて進んでいく。

カレンは俺の姿が緑に飲み込まれてしまう前にしぶしぶついてきた。

「なかなかひんやりして気持ちがいいだろう?」

「どんよりともしてるけど……」

今一度言うがカレンの予感当たっている。

俺はこの土地をよく知っていて、この森には彼らが住んでいることも知っている。彼らは今も昔も多くの種族から恐れられる者達だ。

それを知ってか知らずか、はたまたこの鬱蒼とした森にはほとんど陽が差し込まず仄暗いせいも、カレンは少しばかり不安げな面持ちをしている。

「ではでは、何か話をしてあげよう。怖い話かパパの昔話、どっちがいい?」

「明るい話がいい」

「分かった、両方だね」

「もしかして人語が通じない? それともまた新種の毒キノコでも食べたの?」

「アレは昔々、今から二千五百年ほど前のことだ——」

その時代は大陸全土を巻き込んだ大戦などはなく魔界とも長らく停戦中であり、世界は比較的平和であった。

しかしある時、これまで防衛戦争しか行なっていなかった狂信的な平和主義国家である北の大国が侵略戦争を起こしたのだ。さらには大陸全土を支配するとまで布告した。

その言葉通り、これまで自ら牙を見せたことのない彼の国は瞬く間に周辺諸国を飲み込んでゆき、急速に拡大していく。

どういうわけか兵士達が揃いも揃って異様に強靱で、戦では負ける

ことがないという。話によればまるでタガが外れているように戦うのだと。

ついには中央大陸の三分の一を手中に収めてしまったため、世界が破滅に至らないよう月の裏側からもこっそり支える会、略して《滅至月会》が五十年ぶりに招集された。

『というわけで、我こそはという方ー？』

『すまないが、私は封魔大陸での生態異常を調査しなければならぬので辞退させていただきます』

『僕は最近脱皮したばかりで弱いから力になれそうにないや。ごめんね』

『あーしもパス。ちょっと前に人間のがきんちよを拾っちゃってさー、イケメンに育てなきゃなんだよねー。アレンあんたさ、どーせヒマっしょ？ パパッと行ってきたよ』

『ワシも曾孫に稽古をつける約束があつてのお……』

『わりーアレン！ ここんとこちよつとやらかしが続いてて嫁さんがピリピリしてんだ！ 今怒らすと世界の終わりよりおつかねーからオレもいけねえ！ ほんとわりッ！』

『うん、俺一応年長者ね？ どうか君ら何でここにきたの？』

事態を重く見た面々は、全てを一人の年寄りに押し付けた上で介入することを決定。

俺は次こそは押し付けられないように常に弟子でも取っておこうと考えながら北の大国に潜入し、裏で操る存在を突き詰めた。

『その国は魔界からやってきた吸血鬼に支配されていたんだ』

『吸血鬼って、人の血を吸って化け物に変えちゃうっていうあの吸血鬼？』

『そう、その吸血鬼だ』

吸血鬼とはヴィールタスが創造した魔人の一種であり、血を与えた他種族を吸血鬼に変化させる力を持っている。……が、血を分け与えられた者のほとんどは変化に耐えきれずに死ぬか、理性を失くした化け物に成り果ててしまう。

揃いも揃って強くなったという兵士達は人間と化け物の中間にさ

れていた。知性を多少失くした操り人形にされてしまった代わりに二人力を得たといったところか。

『さあ、洗いざらい吐いてもらおうかな』

俺はとりあえず最前線の砦に赴いて、そこを指揮していた吸血鬼の四肢を斬り落としてから優しく尋ねた。

『君達の頭は誰だい？ 今はどこに潜んでいるのかな？』

『教えてやってもいいがどうせ無駄だぜ？ 王が死んでも次に強い奴が王を引き継ぐだけだ。俺達を止めてえなら世界中の吸血鬼を殺すつもりでやらねえと』

『ではそうしよう』

その時はまだ夏に入ったばかりであったが、年を越すまでには帰れるだろうと高を括っついていて。

『……………おかしいなあ』

いつのまにやら五年の月日が流れていた。

俺は北の地を駆け回って奪われた国を取り戻し、人々を吸血鬼の支配から解放していった。

しかし、状況が悪化することはなかったが良化することもなかった。

ある地域を解放すれば別の地域が支配され、別の地域を解放すればまたある地域が支配される。完全にいたちごっこの様相を呈していた。

『早く誰か来てくれないかなあ』

あと何十年すれば滅至月会の誰かが応援に駆けつけてくれるのだろうか、淡い期待を抱きながら淡々と吸血鬼狩りをしていた。

そんなある日、俺は運命の出会いを果たす。

『人間にしてはしぶとい奴め。何者だ』

『通りすがりの吸血鬼ハンターさ』

ちよつとしたヘマをしてしまい、魔界の四将ほどに強い吸血鬼と何の準備もしていないまま正面から戦うはめに。

これは徹夜と二桁死亡確定かなあと腹をくくったその時、吸血鬼の後方で輝く月に黒い影が重なり――

『吸血鬼ハンターだと？　すぐに目玉を抉り取って命乞いをさせてや……りよ……？』

——吸血鬼が縦に真つ二つに裂け。

そいつは己が等分されたことすら分からないままに灯火を消した。

『新手か!？』

さすがに気を引き締めて構える。

最低でも四将以上の實力を持つ相手によって、次の瞬間には俺も真つ二つにされているかもしれないからだ。

いつでも自爆して広範囲に肉片を巻き散らかせるように意識を高めて、吸血鬼の亡骸を踏み越える男から目を離さないでいると。

『俺はお前の敵じゃない』

男がスツと右手をかざして発言した。

『敵じゃないだと？　その匂い、お前も吸血鬼だろう?』

『確かにそうなんだが、こいつらと違って昔からこの大陸にいた穏健派だ。とにかくまずは話を聞いてくれ』

力ある吸血鬼が今までに狩ってきた吸血鬼達とは全く違うことを口走った。

もちろん信じてはいなかったが、難敵を倒してくれた礼もあるので黙って聞くことに。

『——というわけで、お前とは同業者だ』

『なるほどな』

話によれば男は元々魔界に住んでいて、魔王より吸血鬼の統治を任されていたという。

男は四将の座に就いたこともあるほどに強く、強い故に長く生き、長く生きた故に愛する仲間達が死ぬ様を嫌になるほど見てきた。

死んだ友の元へ逝こうにも、自分を殺してくれる強者が都合よくは現れず、自ら死ぬ勇気もなかった。

いつまで戦えばいい。

いつになったら休める。

人族との意味のない戦いが終わる気配はない。

それならばもう逃げてしまおう。

ついには自身と同じく血みどろの戦いに嫌気がさした者達を引き連れて中央大陸へ逃げ込み、人里離れた森の中に吸血鬼の国を作って平和に暮らし始めた。

そして時が流れて、今回の事件が起こってしまい。

男は責任を感じ、平和に暮らす仲間達を守るためにも同族殺しを決意する。

『……ま、そう簡単に信じてはもらえないだろうが』
『信じるよ』

話の途中でいつでも俺を殺せるようにわざと油断してみせたが、結局この男は何一つ手を出さずに身の上を話し終えた。

その行為こそが信頼に値する。

『俺はアレン、どこにでもいる平凡な不死者さ。よろしく』

『……吸血鬼の王、ガエルだ』

その日俺は吸血鬼と戦うため、吸血鬼と手を結んだ。

それから二年かけ、今度こそ魔界から攻めてきた全ての吸血鬼を狩りつくし、支配されていた全地域を解放することに成功した。

ついでに魔界にも行き、管理能力のない魔王を一発ぶん殴って叱った。

『んーっ！ ようやく終わったなあーっ！』

『ああ、ようやくな』

『……ん？ なんだその顔は？ まだ何かやり残したことであったか？』

万事うまくいったというのに、ガエルが何やら覚悟を決めた表情をしていたのだ。

『アレでも同族には違いない。ならば俺が責任を、けじめをつけねばなるまい』

『ああーうんうん、けじめねけじめ。——《白銀蛇縛》《資^{ウツ}毛産^イ毛凍^テ結^{ムス}ベ》《威封^{イフ}蕩^{ウト}々》』

『ッ!? おいアレン！ どういうことだ!?!』

吸血鬼の王として、人間に詫びて命を明け渡そうなどと考える愚か

者を封じ込め。

『責任だなんだと千年も生きていないお子様が口にするんじゃない。そういうのは専門家に任せなさいっての。それとちよつくら血をもらっていくぜ』

ガエルの血を飲んで吸血鬼に変貌し、我こそが吸血鬼の王であると人前で声高に叫び、そして捕まった。

「そこから先はいつものだね。まずは七年間、秒数にして約二億秒磔にされて炙られ焼かれ続けたよ。吸血鬼の再生力というのはすごいぞカレン！ 生半可な火力で焼き続けても皮が溶けて赤身が剥き出しになるだけで骨まではそうそう達しないのだ！ それにももちろんただ焼くだけじゃあない。磔台の前には槍や剣、鞭や棍棒などが何本も置かれていてな。各地からやってきた遺族や被害者達が心からの憎しみを込めて」

「そこは詳しく話さなくていいから！ 次行ってよ次！」

「はいはい」

責任の肩代わりを一通り終えて、今度こそ後腐れの無い状態で笑い合えましたとき。

その後も助け助けられを何度も繰り返して心の底から通じ合うようになった。

俺もガエルも本質的には臆病者で似た者同士だったからか、とても気が合った。一度も仲違いしたことはなかった。

彼は五千年の半生で出会った最も信頼できる者の一人だ。

「へえー……。吸血鬼の王様と、一応だけど人間が仲良くなれるなんておとぎ話だと思ってた」

「血の繋がりよりも強い絆っていうのかな」

実際に血の飲ませ合いをしたので僅かなりとも俺の血はガエルの中に流れているのだが。

「今度あたしも会わせてね」

「今度どころか今から会えるさ。ほら、ついたよ」

「えっ？ つい……たあ……!?!」

森の中の代わり映えしない景色に飽き飽きして、小枝を蹴りながら

歩いていたカレンが顔を上げてピタリと止まる。

「なんで、こんなところに」

驚くのも無理はない。

人工物など何もないと思われた深い森に、突如として存在感のある黒い壁と鉄の大扉が現れたのだ。

しかも壁は木々の三倍は優に高く、左右に遠く続いている。

「なにこれ、わけわかんない。この先に国でもあるの?」

「そうだとも」

俺はこの土地をよく知っている。

第二の故郷と呼べるくらいには入り浸ったのだから。

「吸血鬼の国へようこそ」

第二話 「歓迎」

そびえたつ黒い壁に触れるとやはりひんやりしている。

巨大な鉄の扉にも吸血鬼の紋章——心臓に牙と翼を生やした凶柄——が描かれていた。

うん、間違いない。

「ようこそカレン。ここはお父さんの第二の故郷、吸血鬼の国さ」

「ようこそって……」

しかしカレンはまだ半信半疑でいる。

頬や唇をつねって幻か何かを見ているのだと思いついでいる。

「だって、さつきまで何もなかったし。遠くから見た時もこんな壁なかったじゃん」

「隠蔽の魔法を施してあるからね。近寄らないと見えないんだ」

「そう、なんだ……」

「まあまあ、入ればわかるさ」

いつもならば俺を置いて一人で街へ入って行こうとするのに、今回ばかりは気が引けている。

か細い腕を引っ張っても岩のように固まって動かない。

「おやおや？ おやおやおやおやおや？」

「……なによ」

「まさか、まさかあの偉大で勇敢なカレン様に限ってありえないとは思いますが………怖いのかな？」

「こ、怖くなんかないもん!! すいませーん! 開けてくださーん!!!」

吹っ切れたカレンがドンドンと大きく音が鳴るように扉を叩き出した。

しかしどれほど叩いて呼びかけようとも、向こうから声が返ってくることも扉が開くこともなかった。

「ほ、ほら、やっぱりこれは幻だって! それかみんな引越しちゃったんだよ! だから戻ろ! ね!?!」

「ううむ……」

このまま待つていても仕方がないので地を手をつき、

「――『ドロスマ泥沼ノソウワン双腕』」

扉の向こう側に泥土を固めた腕を生やし、中からかんぬきを抜くことに。

それから多少力を出して扉を押すとなんの突つかかりもなく開いた。

「よし」

「ねえ、全然よしじゃないんだけど……。いいのこれ？ フホーシン ニューってやつじゃないの？」

「いいのいいの。俺にとつては地元みたいなものだから」

今度こそカレンの手を引っ張って踏み入れると見慣れた街並みが目に入った。

「へえ、吸血鬼の国って言っても普通の街と変わらないんだね。フツーに家があつてお店があつてお城が……。なにあのお城。なんであれで倒れないの？」

「すごいだろう？」

人間の国とそう変わらない街の景色の中で、一つだけ異彩を放つものをカレンが指さした。

それは真っ赤に染められているのと、今にも倒れそうな柳や蛇、あるいは手招きのような形をしていることから血招き城と呼ばれている。

人間牧場も搾血場もない国の中で唯一の、他種族がイメージする『吸血鬼らしい』建物だ。

元々は何の変哲もないどころか城ですらない一軒家であつたのだが、最も偉大な吸血鬼の住処にはふさわしくないと国民が一致団結し、ガエルがいくら遠慮しても勝手に増築されていったのだ。

もちろん俺も、腕のいいドゥーマンの大工を大量に引き連れて増築に携わつた。

「あとで案内してあげるよ」

それ以外は特に説明するものもないので、しんと静まり返つた街中を無言で歩く。

三分とせずにカレンが耐え切れなくなって口を開いた。

「ところでさ」

「うん」

「誰もいないね。やっぱりみんな引つ越しちやったんじゃないの？」

「そんなことはない。なんなら後ろにずっといるぞ？」

その言葉を聞いたカレンが「えっ」と疑問の声を出したのは、首筋に刃を突きつけられた後のことだった。

「動くな」

カレンの背後に立ってサーベルの刃先を突きつける男が言った。

カレンは言われるがままに静止し、同じく俺の背後に立つ者を瞬きもせずに見つめている。

「名乗れ」

今度は俺の背後に立つ男が尋ねた。

「最近の吸血鬼は礼儀がなくなっていないなあ。人に名を尋ねる時はイタイタイツ！」

言い終える前に首筋に刃が食い込んだ。

「次はない」

「アレン、アレン・メーテウスです。こっちは一人娘の」

「……カレン」

「人族ヒューマンと半長耳族ハーフエルフが何の用だ？」

二人は人の名前を聞いたのに名乗りもせず、再びカレンの命を握る男が尋ねた。

「帰省でーす」

「笑わせるな。この国に我々以外の種族は住んでいない」

「本当だって。城のあの辺りに俺の部屋がちゃんとあるんだって！

もしかして君達お若い？ 今何歳？ 名前を教えてくださいませんか
らそれくらいは教えてよ」

「二百十五」

「四百八だ、若造め」

「あらあらごめんなさい、お子様だったのね。ねえ坊や、千歳以上の人を呼んできてくださる？ ガエルはいるかしら？」

「なんだと貴様!?!」

「ふざけるのも大概にしろ!!」

刃がより一層深く食い込んだ。

どういうわけが二人が怒気を露わにしたのだ。

「分からないなら仕方ないね。お子様は昼寝の時間だ」

「どうい……」

「なッ……」

「――《戒^{イマン}メノ磐^{バンロウ}牢》」

このままではカレンの綺麗な肌に傷が付きかねないので、二人を素早く寝かしつけて投獄。

すると街の至る所に隠れていた吸血鬼達が続々と姿を現した。

ある者は牙を剥きだして剣を構え、ある者はこちらをクロスボウで狙い、またある者は蝙蝠のような翼を生やして滞空し、揃いも揃って敵意丸出した。

「やあやあみんな。俺の顔を覚えていない?」

ぐるつと首を回しても誰も俺の顔にピンときた者はおらず、こちらとしても見知った顔は一人も見当たらなかった。

彼らとしてもまだ俺の力が測りきれておらず、二人の吸血鬼を軽くあしらってしまったこともあつてか、誰も飛び掛かつてはこない。

そうしてしばらく膠着したまましていると、城の方より援軍がやってきた。

「お前達さがれさがれ!」

「フロリアン様に来てくれたぞ!」

包囲網を敷いていた吸血鬼達が五歩下がりに、代わりに執事服を着た吸血鬼が両手にサーベルを握って前に出る。……が、俺と目を合わせるなり二本とも品よく鞘に納めた。

彼はガエルの右腕と呼べる人物で、昔から城の管理を任されている。当然歳も二千を超えているので俺のことをよく知っている。

「おひさー」

「報告を受けた時にまさかとは思いましたが、やはりあなた様でしたか!」

俺とフロリアンは互いに近寄って軽く抱擁した。

そのやりとりを見て周囲がひどくざわつく。

「皆の物、武器を収めよ！ この方は敵ではない!! 総員持ち場に戻れ！」

そのざわつきをかき消すようにフロリアンが声を張り上げる。

沈黙した吸血鬼達は皆疑問を顔に浮かべながらも素直に従った。

「ではアレン様、城へ案内いたします」

周りにいた吸血鬼達が散ってから、翻って歩き出した彼についていく。

城へと続く道をフロリアンは俺達と一定の距離を空けて先行する。

考えすぎかもしれないが、今は話しかけないでほしいと背中に書いてあるように見えた。

「ねえねえフロリアン、ガエルってどんな人なの？」

そこをカレンが躊躇いなく話しかける。

「…………ガエル様は素晴らしいお方です。我々吸血鬼にとっては闇夜を照らす月のような。あのお方は決して約束を違えません」

「へえ、ゼツタイに約束を守るんだ。アレンとは大違い」

「こら」

「そうなのですか？ アグリメントキーパー《契約の守り人》とまで呼ばれ、引き受けたからにはどのような無理難題でも成し遂げてきたアレン様が？」

「いやいや！ 正式な約束はいつだって守るさ！ ただ、勢いに負けて聞き入ってしまったワガママは…………ね？ それに年のせいで物忘れが激しくて」

「ああ、それはいけませんね」

などと言葉を交わしているとすぐに城に到着した。

「うわあ…………。下から見るとすごいぐわんとくるねこれ…………。本当になんで倒れないのよ」

血招き城はまさしく柳や稲穂のように垂れて傾いているのだ。

隠蔽や幻影を見せる魔術が施されているわけでもない。

人によつては近くにいるだけでも、倒壊して押し潰されいか不安になつて過呼吸になるだろう。

「頑丈に作ってあるからね。それこそ植物が根を張るように地下から固めてあるのさ。ついでに柱や壁に俺の死体を埋め込んであるし」

「冗談だよな?」

「ははは、冗談だよ冗談。……………たぶん」

城の中に入ってからカレンはしばらく「たぶんって何!? ちゃんと答えてよ!」などとしつこく迫ってきた。

しかし俺が何も答えないでいると諦めて、そこら辺の柱や壁から腕や脚がはみ出ているんじゃないかと、ずっと目を細めてなるべく見ないようにしていた。

初見の者はまず迷うように何本にも枝分かれしていて、さらには蛇の体内にいますと思わせるようなぐねぐねとした通路を歩く。

しばらくして広げた空間に出てからフロリアンが足を止めた。

「カレン、もう目を開けていいぞ」

目の前には城壁の扉よりも大きく、繊細な装飾の施された黒檀の扉がそびえている。

俺の記憶が正しければ向こう側には謁見の間が存在しているはずだ。

「大丈夫だよな? 血を吸い尽くして干からびた人間とかをたくさん飾ってあったりしないよな?」

「ないない」

もしかしたら俺の剥製や干し首はいくつか置いてあるかもしれないが、それを言うといよいよ逃げ出しかねないので黙っておこう。

「ではお二人とも、開けてよろしいですか?」

フロリアンが扉に両手をつけてすぐに、カレンが「待って!」と妨げる。

それから一人でゆっくりと深く息を吸って吐いた。

「ふうー、緊張する……………」

「おや珍しい。いつものは目上の者だからと物おじしないのに」

「だってほら、アレンより強いかもしれないでしょ?」

「そうだね」

「大丈夫かな…………。開けた瞬間にガバツと跳んできて、気づいたら血

を全部吸い取られてたり「よし、開けてくれ」
フロリアンが吸血鬼特有の怪力で両開きの大扉を軽々と押し開ける。

「やあガエ……え……？」

その名を呼びかけて固まった。

最奥の玉座に座していたのは筋骨隆々の男性吸血鬼ではなく、漆黒のドレスを身に纏った瑞々しい少女だったからだ。

「ねえアレン、あの女の人がガエルなの？」

「いや……えーつと……」

おそらく吸血鬼なので正確な年齢は分からないが、見かけの年齢は十七か八くらい。

病的なまでに透き通った白い肌と白銀の髪が備えられ、眼窩には紫水晶のように輝く神秘的な瞳が嵌め込まれている。

さらにはあどけなさや色気の両立した面構え、健全さと艶かしさの共生した肢体までも有していた。

しばしば傾国の美女などと謳われるが、少女には国を傾けるどころか軽々転覆させるくらい的美貌があった。

(カレンも成長したら、ああなるのかなあ……)

なんて考えていると。

少女が少し顎を引いてフロリアンとカレンを見て、最後に俺と目を合わせるや否や立ち上がってくすりと妖しく笑い――

「おじ様あっ!!」

――ガバツと跳んできた。

第三話 「コーネンキってヤツじやない?」

(迅ツ——)

並の吸血鬼の三倍は速い。

時速にして三百六十キロメートルはある。

「グウっ!」

油断していたのもあって避けきれず、両腕を開いて飛び込んだ少女をこちらにも両腕を開いて受け止めるしかなかった。

少女の質量は見た目相応だが、速度も相まってとてつもない衝撃を受けた。

正直言つて倒れないように立っているだけで精一杯だった。

「この匂いは間違いないんですけど! んふふ!」

少女は吸血鬼特有の怪力で俺の背中に腕を回して抱きしめ……いや締めあげ、さらには胸に顔をうずめて激しく呼吸する。

バツとフロリアンの方を見ると、彼は煙のように消えていた。

これは一体どういうことだ?

新手の美人局か?

だとしたら一秒触れるだけで金貨十枚は請求されてしまうのでは?

「ちよつと君、離れて離れて。誰だか知らないが自分の身体は大切にしない」

筋力の八割を行使して引き剥がすと、少女は愕然として固まった。

口を大きく開け、くりつとした目を何度もパチパチして、驚きを露わにしている。

そして開いたままの口から絞り出すように声を漏らした。

「私のことを、忘れてしまいましたの……? 私は一日たりとも、おじ様のことを忘れはしませんでしたのに……」

「おじ……様……?」

果てしなく続く記憶の糸を辿り、そのような呼び方をする者を探す。辿って辿って手繰り寄せて……少女の特徴と一致する人物を見つ

けた。

「……まさか、サリイか!？」

「はい!・サリイでございますわ!」

アメジストのような瞳を輝かせ、もう一度飛び込んできたサリイを昔と同じように受け止める。

「大きくなったなあ! 見違えたぞ! 今いくつだ!？」

「もう、女性に向かって失礼ですわよおじ様。千百と九歳になりました」

気付けなかったのも無理はない。

最後にこの国に来たのがサリイが十歳になるかならないかくらいで。

それから色々忙しくて、気付いたら千年間封印されていたのだから。

「ねえアレン、その人知り合いなの?」

ここまで黙って見ていたカレンがついに尋ねた。

「そうだ。サリイはガエルの娘で「——おじ様の妻ですよ!」

そして再び黙った。

もちろんカレンだけではない、俺もだ。

すぐにカレンが目線で「そうなの?」と問うてくる。

しかしその問いかけに「はい」とも「いいえ」とも答えることができない。

「本当に申し訳ないんだけど、最近物忘れが激しくてね。俺はいつごろ君の夫になったのか教えてもらえる? もしかして、結婚式なんかも済ませちゃってる感じかな……?」

何しろ二百年は記憶が抜け落ちている。

その間にサリイと結ばれたのかもしれない。

「いえ、式はまだ挙げておりません。ですが、千百年前に約束しましたでしょう? 正確には千百年と八十三日前ですわ」

ギョツと眉間を押さえて遡る——

……千百年前の約束とやらは、たしかにあった。

『わたし、大人になったらおじさまとケツコンしますの!』

『おやおや、嬉しいねえ。でもなあ、おじさんは歳の離れた相手とは』
『おい、アレン』

娘を悲しませないでくれとガエルに目で訴えられ。

『よーし分かった！ サリイが立派な大人になったら結婚しようじゃないか！』

『本当!? おじさま、大好きですわ!!』

そういえば、サリイの喜ぶ様を見てガエルは笑っていたが、瞳の奥は同族殺しをしていたあの時と同じものをしていた。

俺もカレンという娘を持った今では、その気持ちがよく分かる。

「私、立派な大人になりましたわ！ 明日にでも婚姻の儀を執り行いましょう?」

「ううん……。たしかに成長したけど、まだまだ半人前ってところかなあ……。だからまた今度、ね?」

「……………分かりました」

サリイは食い下がらず、素直に引き下がった。そしてさらに精進して立派な大人になりますと、前向きに宣言されてしまった。

あの約束は半強制的なものだからノーカンドと、正直に言っておいた方がよかったかもしれない。

「ところでおじ様、その生意気そうな長耳の娘は誰ですか？ 奴隷? それとも非常食? どういうわけか見ているだけでムカムカしてきますわ」

「はあ!? オトコの趣味悪いおばあちゃんに言われたくないんだけど? コーネンキってヤツじゃない?」

「なっ……!?! 私のことはともかく、おじ様を侮辱するなんて! 二度とその汚い口を利けなくしてさしあげますわよ!?!」

「ちよつと待った待った! えつとなサリイ、この子はカレンと言つてな——」

種族柄やはり反発し合う二人を抑え、事の成り行きを語った。

「……………というわけなんだ」
「まあ、そんなことが……。助けに行けなくて本当に申し訳ありませんわ」

「いいよいいよ、誰一人として助けに来てくれなかったからさ……ハハ……」

千年待っていたのに知り合いはだーれも来なかったからね。仕方のないことよ。

みんな俺のような些末な存在なんて忘れていたんだろう。

「あなたも幸運ですわね、下賤の身でおじ様の寵愛を受けられて。日に一万回は地に頭をつけて感謝なさい」

「何、やる気？ さつきアレンに吸血鬼の殺し方を教えてもらったからやつてもいいよ？」

「はいはいはい！ やめやめやめ！ どうどう！ それで、だ。ガエルはどこにいるんだ？」

こうやって俺が慌てふためている様を陰から覗いて、ひとり笑っているような気がしてならない。

さあ早く出てこい。

一発デカいのをぶち込んでやる。

しかし、サリイの口から出た言葉は予想外のものだった。

「お父様はちよつとした長旅に出ています。いつ戻ってくるかは分かりません」

「あの野郎、折角親友が来てやったというのに……。ならエリナ夫人にだけでもご挨拶を」

「……お母様は三百年前、お父様の出張っている隙を見計らって来た刺客に殺されました」

今度こそ、場が完全に沈黙に包まれた。

「すまない」

「いえ、おじ様に非はございません。私達は生きている限り、誰も死からは逃れられませんもの。それが早いか、遅いかの違いですわ。そうでしょう？」

「……ああ、そうだな」

その言葉はたしか、俺が少しの間サリイの教育係をしていた時に教えたものだ。

「暗い過去は明るい今で塗りつぶしてしまうのがいいとも言っており

ましたね」

だから今は外に遊びに行きましょう、と。
昔よりも垢抜けて落ち着いた笑顔で手を引かれた。

◆?◆?◆?

サリイに右腕を、それに対抗したカレンに左腕を掴まれて市井を回る。

あんな湿っぽい話をした後だというのに、千年生きて立派に育ったサリイと常人離れたカレンはすぐに切り替えて爽やかな顔をしていた。

情けないことに、この中で一番切り替えられていないのは年長者の俺である。

「こちらから見て参りましょう!」

「あたしはあつちを見に行きたいの!」

「ちよつと千切れるからやめて! いくら俺でも分裂はできないの!」

そうやって一日中連れまわされて、人も空気も昔とそれほど変わっていないことがよく分かった。

「おじ様、この国にはどれくらいいてくださりますの? 十年? 百年?」

「さすがにそんなに長くはいれないさ」

「ねえアレン、明日には出ていこうよ」

「おや、カレンもここが気に入ったんだろう? 昼も『吸血鬼の伝統料理美味しい! 毎日食べたい!』なんて言っていたじゃないか」

「それはそうだけど……。ずっといたらそのうち血を全部吸い取られそうじゃん」

「長耳混じりの穢れた血を吸おうなんて物好きはおりません」

「喧嘩売ってるの!? チェセロで今度こそ白黒つけるわよ!」

「コテンパンにしてさしあげますわ!」

いつの間にもやら仲良くなったものだ。

正直なところ、この居心地のいい国には十年百年といわず、千年は滞在したい。

しかし俺にはやるべきことが山ほど残っている。ここでまったりするのは一通り片付いてからだ。

「ところでサリイ、地下の貯血槽はどれくらい満たされている？」

「五分の一もありませんわね」

パチリと黒い駒を打ってからサリイは答えた。

「なら、一ヶ月つてところかな」

吸血鬼にとって他種族の血は必要不可欠なものである。

血を飲まずに普通の食事だけ摂っていても死ぬことはないが、その場合吸血鬼としての力は少しずつ失われていく。

仮に血を飲み続けられないでいると、いつかは人族とそう変わらない身体になってしまう。

彼らにとって血は金に等しく、貯血槽はいわば国庫だ。

それを俺の血で満たしてから出ていくとしよう。

何度も俺を匿ってくれた大恩ある国に、千年間何もしてやれなかったのだ。

それくらいはしないとな。

「王手！……これで十勝九敗、私の勝ちですわね」

「先に千回勝った方の勝ちだから！ 次よ次！」

第四話 「隠し事」

月が欠けて満ちるのはあつという間で、別れの時がやってきた。

「アレンきーん！ またきてくれよなー！」

「あんたの血、すげえ旨かったぜ!!」

「カレンちゃんも元気でねー！」

城の手前から国の出口まで、俺とカレンを見送ろうという人が列をなしていた。

あまり人里に出ることがない彼らに世界各地で仕入れてきた土産話を語ったり、腕肉の配給をしたり血を好きだけ吸わせていたら、昔と同じように受け入れてもらえたのだ。

一人ずつハグやら握手やらをやって、蟻の行進するような速度でようやく壁の外に出ると。

「楽しかったよサリイ、フロリアン」

美の擬人化とも言える吸血姫と彼女を支える紳士然とした吸血鬼。

最も俺とカレンをもてなしてくれた二人が待っていた。

「本当に行ってしまったわけですの？ ううっ、寂しいです寂しいです。寂しすぎて死んでしまいます」

「ごらごら、千歳にもなつてウソ泣きをするんじゃない」

やはりガバつと胸に飛び込んできたサリイを最後だからと好きにさせる。

気の済むまで抱きしめさせてからそつと離れた。

「おじ様ささえよければ、好きなかだけいてくれて構いませんのよ？ カレンはそうね……私の下僕になるというのなら置いてあげてもよろしいですわよ？」

「これでさよならだし、本気でケンカする？」

「指二本でぎつちよんぎつちよんにしてさしあげますわー！」

カレンとサリイの仲睦まじいやり取りもしばらくお預けとなる。

一月の滞在とはいえ、とても良い羽根休めになった。

これで思い残すことなく嵐の中へ突入できる。

「じゃあそろそろ、行くとするかな。十年もしないうちにまた寄らせ

てもらおうよ」

「はい、いつでも待つておりますわ」

「良き旅を。お身体にも気を付けてください」

「ああ、そうそう。最後に一つだけ聞いておきたいんだけどさ——」

おおよそ見当はついていないが、誤魔化すことのできないように不意を突いて尋ねる。

「——ガエルに何があった？」

サリイの身体の軸が一度後ろに傾き、フロリアンの目が毛の太さほど細まる。

何か隠し事があるようだ。

「……やはり、おじ様に隠し事なんて出来ませんわね。いつから気付いておりましたの？」

すぐにサリイが白状した。

「んー、夫人が殺されたって聞いた時からかな。ガエルは人一倍責任感の強い男だからねえ」

自身の不在時に最愛の妻を殺されたとなっては千年間は引き摺るはずだ。

極力サリイを一人にしたりなどせず、この国の守護者としての責を全うしようとするはず。

たった数日の外出も躊躇うに違いない。長旅などもってのほかだ。

「それに俺がガエルの名を出した時の周りの反応も考えれば、何かあったんじゃないかとね。君達だけではどうにもならないようなことが。話してくれるかい？」

サリイはこくりと頷いたが、すぐには言葉を紡がない。

よほど辛い話なのだろう。

今度こそ嘘泣きではなく、本当にえづき涙ぐんでいる。

「私がお話しいたします」

見かねてフロリアンが口を開いた。

「あれは三年前のことでした——」

フロリアンは感情を抑えながらも、まるで昨日の出来事であるかのようにつらつらと語る。

それは勇者ケイが四将の一人、黒騎士アンデイを討ち果たして消えたという詩が流行り出した頃だ。

この国に魔界からの使者が訪れた。

『お初にお目にかかります、吸血鬼の王よ。私は四将が一人、ノヴァク・グルテムムリーでございます』

その者は悪い噂の絶えない魔人で、知的さと不気味さを兼ね備えていた。

もつとも、人族の宿敵である魔王とその重臣たる四将に良い噂のある者などいないのだが。

『何の用だ？ 亡命したいのなら力になるが』

『いえ。すでに存じ上げていると思われるが、四将であり我が友でもあるアンデイが敗れてしまい、空席が生じました。そこでどうか助力を願いたい』

『四百年前にも断つたが、記録に残ってはいないのか？ 人族の土地に住まわせてもらっている身でそのような勝手はできません。せつかく来てくれたところ悪いが、話がそれだけなら帰ってくれ』

魔人側についたことよって人族の恨みを買い、同胞たちを危険に晒すことなどできはしないと当然ながら断つた。

『では、また』

意外にもノヴァクはしつこくより頼みはせず、むしろ不気味なくらいあつさりと言ひ返した。

彼が踏み歩いた場所にあった草花は、足の裏に口がついているかの如く食られていたという。

そして事件が起こった。

ノヴァクが去ってから七日間、毎朝一人ずつ吸血鬼が死体で発見されたのだ。

それも必ず体の一部が欠損していた。

一人目は両脚が無く。

二人目は両腕。

三人目は胴体。

四人目は首から上が。

五人目は全身の皮を剥ぎ取られていて。

六人目は皮と骨は残っていたが肉が無く。

七人目の犠牲者はガエルとフロリアンに次ぐ力を持った二千歳の警備隊長であり、二百本以上ある骨を全て抜き取られた状態で発見された。

彼には一枚の手紙が持たされていて、そこには「封魔大陸でお待ちしています。なるべく早く、お一人でいらしてください。他の者は必要ありませんので」といったことが書かれていた。

『では、参るとしよう』

『ガエル様！ これは罨です！ 行つてはなりません！』

『お父様にもしものことがあれば私は、私は……』

罨以外のなものでもない誰かが止めようとした。

しかしガエルは止まらない。

一人目が殺されてから警備を強化したにも関わらず、第二第三と犠牲者が出てしまったのだ。

ここで無視すればどのような手を打ってくるか容易に予想がつく。

ガエルは俺に似て臆病者で寂しがりで、これ以上愛する人達に死んでほしくはないのだ。

『サリイ、いい子にしているんだぞ』

『……はい、お父様』

『フロリアン、サリイを頼む』

『は、命に代えましても』

『他の者も注意を怠らずに……ってオイオイ、みんなしてそんな深刻な顔をしないでくれ。三日もすれば戻ってくるさ』

そして一人旅立った。

『フロリアン……』

『信じて祈りましょう。もっとも、私達は魔界を捨てた身ですから祈る神はいませんが』

『そう、ですわね。でも……とても、とても嫌な予感がしますの——』

サリイの嫌な予感は見事的中し、三日どころか三年経った今でもガエルは帰ってこない……と。

「なるほどねえ」

これは困ったことになった。

「勝手なお願いだとは分かっております。ですが、私にはおじ様しか頼れる人がいませんの！……どうか！……どうかお父様と私を助けてください!!」

サリイは恥も外聞もかなぐり捨てて、その綺麗な顔をぐしゃぐしゃにして懇願する。

俺の手を取りぎゅっと強く握りしめる。

「もちろんだとも。ガエルには話したいことが沢山ある。誰に頼まれなくとも行くつもりだ。必ず行くつもりではあるのだけど……」

サリイを視界から外し、ずっと黙って聞いていたカレンの方を向く。

「あー……。悪いがカレン、君の親探しより先にサリイの親探しをしても……いいかい？　それで、魔界に行くからにはちよつとばかり拳を使った話し合いもしなきゃで、とても危険だからここに残ってもらうことになるけど……」

「両方はダメ」

「というっ？」

「あたしを置いていくなら先にあたしのパパとママを見つけてきて。あたしを連れていくならその泣き虫のパパを探してもいいよ」

二択を迫っているようで一択しか残されていない。

サリイとずつとボードゲームに興じていたせい、詰める技術が上達してしまった。

「しかしなあ」

これから向かうのは悪名高き魔界だ。とても恐ろしくて危険な場所なのだ。

それこそ三度の飯より戦いが好きで、枕の上で死ぬより血の海と屍の上で死にたいとほざくような魔人と凶暴な魔獣が跋扈しているのだ。

自然環境だつて中央大陸と比べて劣悪で、弱者を殺しにかかつてきているようなものが多い。

俺一人では君を守ることはできないかもしれない。
などと言おうとしたが……

「ふふんっー」

腰に手を当て準備万端覚悟完了魔獣でも魔人でもなんでもかかってこいという、活力に溢れた目で見つめられては何も言い出せなかった。

「というわけで、俺とカレンで魔界観光をしてくるよ」

「これ、一つ貸しだからね！」

「おじ様……カレン……」

サリイは両袖でごしごしと涙を拭い、それから紅潮した顔で微笑んだ。

「待っていてくれるね？ さすがに千年はかからないからさ」

昔してあげたのと同じように、乱れた前髪を手櫛で梳いてからぽんと頭を撫でる。

「はい！ いつまでもお待ちしておりますわ！」

「それではこちらをどうぞ。もしものことがあればとガエル様が用意していたものになります」

必要に応じてご使用くださいと、頭の大きさほどの水筒を渡された。

ポンツと栓を抜けば水ではない鉄臭さが鼻につき、陽で照らすと赤黒い液体が満たされていた。

あらためて嗅覚を研ぎ澄ませるとそれがガエルの血であると確信できた。

「お守り、というわけにはいきませんが役に立つかと」

「たしかに、どんなお守りよりも効力があるよ。ありがとう」

「なにになにー？ ……うげえ」

横から覗いてきたカレンがとても嫌そうな顔をする。

そしてじりじりと、天敵と出会った野生動物のように後退りしていく。

「ほ、ほら！ 早く行こうよ！ こんな不気味なところからおさらばしよう！」

「それじゃあ、行ってくるよ。またね」

「おじ様もカレンも、どうか無事に帰ってきてください。……まあ、カレンは魔獣に食べられてしまっても構いませんけど」

「サリイの泣き顔ちゃんど覚えたから！ あとで絵を描いて送るからね！ 楽しみにしててよ！ ベえーっ！」

第五話 「用法用量は守るのだぞ」

吸血鬼の国を発ってしばらく無言で森の中を歩き、座りやすそうな木の根を見つけたので休憩をとることに。

「三年かあ……。まあ、死んでいるだろうな」

腰をかけた時について、小さなため息と共に心の声が漏れてしまった。

「えっ？　今、なんて!?!」

冗談だよねとばかりに、カレンが聞き返す。

「今から探しに行こうとしている人物はほぼ確実に死んでいる。骨の一本すら持ち帰れないかもしれない」

「なんでそうだって決めつけるの!?!　ほら、迷子になっているだけかもしれないじゃん!」

「吸血鬼というのは暴虐神が対エルフ用に創造した優秀な魔人で、背中から蝙蝠のような翼を生やして飛ぶことができるんだ。それにもちろん視力もいい。他の感覚もね。だからそう簡単に迷いはしないよ」

特にガエルは仲間に余計な心配をさせるのを嫌う。何かあれば必ず一報を入れ、それから責任を果たして戻ってくる。

三年間も時間があつたのに何一つ連絡がないということとはつまり、そういうことだ。

「だからせめて、我が友がどういう生涯を歩んできたかだけでも聞いてほしい。彼は国を守護していただけではなく、秩序を守るためにも尽力してくれていた。世界のバランスを保つために力を奮い、時には抑止力として働いていた者の損失は、多大な影響を……。何だ?」

じつとこちらを見つめる物言いたげな碧い瞳と目が合った。

「なんで、なんでそんなに平気でいられるのよ。悲しくないの?　大事な友達だったんでしょ?」

「悲しいし悔しいさ。実を言うと心の底から怒っている、腸が煮えくり返っている、憤懣やるかたない。嘘じゃない、本当だとも。しかしそれを表に出したところで死人が帰ってくるわけでもなく、年長者と

しての威厳を損なうわけにもいかないのだ」

「イゲンだかなんだか知らないけど、こんな時くらい吐き出してもいいんじゃないの?」

「……………では、お言葉に甘えさせてもらおうよ。すぐに終わらせてくるから」

カレンを置いて先に進み、偶然あつた獣道に入る。

しばらくして少し開けた場所を見つけ、そこで服を全て脱いで小指を切り落とし、心臓に穴を空ける。

そして切り取っておいた小指から蘇生して服を着る。

「ノヴァク・グルテンムリ……………」

たった今生産した新鮮な死体の胸にその名を刻んで、手頃な木に吊るす。

準備は整った。

「森にお住まいの皆様すみません、今から少しだけ騒ぎます」

あらかじめお詫びをして深呼吸。

心と体に許しを与える。

何重にもかけた理性の錠前を外す。

ブクブクと煮え立つものが蓋を吹き飛ばし、生き物の醜い暗黒面を曝け出す。

「ああああああああああああアアアアアアアアアアアッ!!」

吊るした肉に拳を叩き込む。

何度も何度も、必殺の拳を打ち込む。蹴りと頭突きも入れる。

しかし肉を弾け散らさず、少しずつ押し潰すように加減して。

「ノヴァク! ノヴァク! ノヴァク! ノヴァク! ノヴァク! ノヴァク! ノヴァク! ノヴァク! ノヴァク! ノヴァク!」

忌むべき者の名を決して忘れることのないように叫び散らす。

手を刃に変え、無数に切り刻み刺し通す。

「あんたが…………ツ! あんたが憎い!!」

俺はガエルを、頼れる親友であり可愛い弟だと思っていた。愛していた。

「必ず貴様の行動に責任を取らせる!!」

俺の親友を奪っただけでなく、親友の愛する者達の命さえ奪うという大罪。

ついでにサリイを泣かせたことも含めて、絶対に許さん。

空の果てのそのまた向こう、はるか彼方の銀河系まで逃げようと追いかけて償わせる。

「骨の一本、血の一滴すらも残さず消し去ってやる！——

《シヨウネンバクサイ掌念爆碎》!!」

ほとんど原型の残っていない肉塊を締め、爆破。

騒いでお詫びに血と肉の栄養分をこの土地にプレゼントだ。

「……ふうっ！ スッキリした……ア……」

来た道に戻ろうと振り返ると、酷く引きつった顔の少女と目が合った。

例えるなら、思春期の子供が夜中に起きて両親の営みを目撃してしまった時のような顔をしている。

「……もしかしなくても、見てた？」

恐る恐る尋ねると、少し間を置いてからこくりと首を縦に振った。

「どこら辺から？」

「……木に吊るすところから」

「うん、ほとんど最初からだね」

いやまあ、こっそり見に来ていたカレンに気付かなかった己が悪いのだ。

普段なら気付くものにも気付かなかった。

憎悪と憤怒に飲まれるのはやはり恐ろしいものだ。

「このように暗黒面に浸ると視野が狭くなり、感覚を鈍らせてしまうので、用法用量は守るのだぞ。若さゆえに怒りっぽいカレンは特にだ」

「いくらなんでも、アレンみたいな怒り方はしないかな……」

◆?◆?◆?

三日かけて森を抜けるとちよつとした山脈が立ちふさがり。

さらに三日かけて山脈を越えた、その先にあったものは。

「あれってさ……村、だよな？」

「ああ、村だねえ」

「なんか、焼けてない？」

「ああ、焦土だねえ」

田畑は全て焼け焦げ、家々は瓦礫となり黒色と灰色で埋め尽くされた暗い景色が広がっている。

……あ、人骨見つけ。

「火事でもあったのかな」

「火事はあっただろうけど、自然に起きたのか人為的に起きたのかは行ってみないと分からないな。もちろん父としては寄らずに迂回をオススメするがね。人骨もあつ「うん、早く行こう！」

そういうわけで山を下って廃村にきてしまった。

何の臭いもしない村の中をこれといったものを探すわけでもなく見て回る。

ほぼ全ての家が倒壊しているが、この村で一番大きな建造物である礼拝堂だけは外壁を残して建っていた。

火災で屋根の抜け落ちた礼拝堂に、さらなる崩落の危険があるからとカレンを外に残して入っていく。

「……どう？ 何かあつた？」

二十分ほど礼拝堂の中を調べていたが、カレンは入口前でじっと待っていた。

先ほど道端に転がっていた人骨を見てしまった手前、不安そうに尋ねてくる。

「いいや、何もなかった」

本当はあつた。

老若問わず、ひとまとめにされた何十人もの人骨が戦神像の前に転がっていた。

死んでから燃やされたのか、燃やされて死んだのかは分からないが、殴打されたり剣で貫かれたような穴が骨に空いていたので他殺であることだけは間違いない。

ボルトイカスピードは彼らを助けてはくれなかったようだ。

「あまり長居する意味はないだろうし、そろそろ行くこうか？」

「あつ。あたし、もうちよつとだけ見てきていい？」

「あまり遠くには行くんじゃないぞ。こわーいアンデッドに遭って絞め殺されてしまうかもしれないからね」

まあ、いくら他殺されたとはいえある程度の魔法の才があるか、または明確な意志と並外れた執念がないとそうそうアンデッドに成り果てはしないので大丈夫だとは思うが。

「さて、と……」

それでもやっぱり心配なので、一呼吸ついてからこつそりといっていく。

カレンは生存者がいないことは分かっているながらも探し回り、ほつたらかしの骨を見つけてしまった時はその都度穴を掘って埋めていた。

そんな様を陰から見守っているとカレンの動きがピタツと止まった。

(まさか、気付かれたのか……!?)

しかしカレンはこちらを向きはしない。

かわりにまるで友達に呼ばれたかのように、軽い足取りで村の外へ出ていく。

今はスツカスカで緑一つないものの、かつては草木の生い茂る林だったところへ踏み込んでいき、一本の大木の前で止まった。

さすがに様子がおかしいので急いでカレンの元に駆け寄る。

「どうしたカレン？」

「なんかね、この木に呼ばれたの」

「なんだと？」

不思議そうに首を傾げるカレンを横目にぺたぺたと樹皮に触れ、少し皮を剥いて調べる。

一帯の木々はもれなく焼け死んで炭と灰と化している中で、この大木も半分以上炭となって枝葉を残していないながらも辛うじて生きていた。

「まだ声は聞こえる？ 自分を何者だと名乗ってた？」

「ううん、もう何も聞こえない。けど妖精って言ってたよ」

「ああ……そういうことか」

「おおよそのことを理解した。」

「はあ、と少し大げさに溜息を吐いて。」

「すう、と深く息を吸い込む。」

「おいゴルア!! 出てこい! 許可取ってんのか!？」

「死にかけの大木に前蹴りを打ち込んで揺らした。」

「しかし何も反応はない。」

「カレンはビクツと震えてから固まった。」

「うちの娘に何用だア!？」

「だから少々出力を上げて、百度も蹴れば大木が折れて倒れるくらいの力でスジモンキツクを続けることにした。」

「宿主と共にくたばるか、それが嫌ならばさっさと姿を現せ寄生虫^{妖精}め。」

「この俺様を通さずにカレンとお話をするなんて勝手は許さんぞ。」

「そして――。」

「木の根っこが何本か千切れ、幹に足の形の凹みができ、ミシミシと軋む音が鳴り出した辺りでソイツは姿を現した。」

「分かつタ! 分かつたカラ! もうやめてくれヨオツ!!」

「情けない叫びと共に目の前に現れたのは半透明の浮遊体。」

「みすぼらしい葉のような服を纏った羽つきの小人。」

「間違いない、妖精だ。」

第六話 「寄生契約」

——妖精やら妖魔などと呼ばれる寄生虫が世界中に住み着いている。

滅多に人前に姿を現さないため存在自体がしばしば疑問視されるが、それはたしかに存在する。

妖精は豊穰神ファテイルの兄である契約神バランスシンオベロによつて創造された。

そのおかげでファテイルの創造物である動植物との繋がりが強く、意思疎通が可能である。なんてことはない獣や草花と会話ができるのだ。

彼らは契約と調和を司る神の眷属として、絶滅の危機に瀕している動物や植物がいれば契約に基づいて力を貸して再興させ、逆に増えすぎて他を圧迫する種があれば滅らしにかかる。

ちなみに人族は世界全体で見ればまだまだ少ないらしいのだが、一部の地域で栄えすぎて環境を顧みず他種族を圧迫するようになった時はよく土地由来の生物達と戦争になる。もちろん軍を率いて指揮しているのは妖精だ。エルフと同盟を組むことも稀によくある。

ところで、妖精はしばしば『大量の魔力を生み出し、強力な魔法を用いる』などと言われるが、これには大きな語弊がある。

たしかに彼らは大量の魔力を蓄えて無数の魔法を用い、他人に魔力を分け与えることもできる。しかし、自ら魔力を生み出すことは一切できない。

ではどうやって魔力を蓄えているのかというと、契約を結んで住まわせてもらっている相手からいただいている。つまりは宿主から吸い取っているのだ。

これを寄生虫と言わずになんと言うか。

ついでに言えば賢い。

契約に精通しているだけあって抜け道も知っている。自身に極めて有利な契約を結ぶのを得意としている。

なので初めて妖精と契約を結ぶ際には第三者と書面を用意して慎

重にどうぞ。

「ふむふむ、なるほどねえー」

「差別と偏見に塗れた解説どうもありがとヨ……」

「それで寄生虫くん、俺様の愛する娘に何用だね？　まずは父親に話を通すのがスジというものだろう？」

あくまで毅然とした態度で、娘を狙う害虫を牽制する。

「カレンを呼びだして何をしようとしたか正直に話せ。さもなければその木を蹴り倒す」

「何って、話し相手が欲しかっただけサ。ついでにちよつとばかし魔力を分けてもらえればト」

自分は何も悪いことはしていませんよと、へらへらと語った。

ついでの方が本命だな。

「ねえアレン、分けてあげてもいいんじゃない？」

「そうだな、考えてやらんでもない。とりあえずはお望みの話し相手になってやろうじゃないか。この村に何があったのか詳しく話してもらおう」

「あれは三年前のことサ——」

ご存知の通り今は戦乱の世の中なので、この村を治める国ももれなく他国と戦争をしている。

そしてこの村は規模も小さく、兵士が一人も駐留していないくらいには重要度の低い土地ではあったが、運悪く攻め込まれてしまった。

ろくに抵抗もできずに占領され、弄ばれ搾りつくされたあとで全てを焼かれた。

奴隷にでもされれば死なずには済んだが、皆殺しの命が下されていたという。

大方想像通りだった。

「もつと詳しく話すか？　オレは全部見てたからヨ」

「やめろ、これ以上カレンを苦しめるな」

妖精の話を黙って聞いていたカレンは今、とても酷い顔をしている。悲哀と義憤に塗りつぶされた顔だ。

己が三年前にその場にいたわけでもないのに感情を震わせている。

「カレン、あまり気に病むな。仕方のないことだった」

「仕方のないことって何よ！ アレンは何も思わないわけ!？」

慰めるはずが逆鱗を軽くつついてしまったようだ。

「おや、そんなに憎いか？ 悔しいか？」

「そうに決まってるでしょ！」

「では君は何がしたい？ その悔しきで何ができる？ 時間を戻して

死んだ人々を救うことができるのか？」

「時間は戻せないけど、この先で助けを呼んでる人がいたら助ける！」

「つまりあの話は、仕方のないことではないのか？」

「それは……そうだけど………ううう！」

少し頭を冷やして気付いたようだ。

自分の頭の中で認めたくないものをどうにか認めようとしている。

「何も感情を捨てると言っているわけではない。カレンが最初に抱いた感情はヒトとして大切なものだ」

俯いて静かに飲み込んでいる。

「似たような話も、数段酷な話もある。今こうしている間にだって無慈悲な扱いを受けている者が世界中にいる。一人を助けている内にもう一人が殺されているだろう。それらは全て仕方のない、どうしようもないことだ。分かるね？」

「……うん」

「助けられるものは助ける、助けられなかったものは割り切る。それだけでいいんだよ。悔やんで止まる時間があるならその間に別の誰かを救えるはずだ。そうは思わないか？」

俺の話はまだ全ては受け入れられない様子だったが、ゆっくりと頷いて真っ直ぐな目でこちらを見上げた。

不死者ポイントを贈呈。

「……とはいっても、実はひとつだけ全てを救う方法があつてな」

「えっ!? なに!?」

「国境を無くし、種族・民族間の柵を取っ払い、世界を一つにまとめあげて管理する。ようは世界征服だよ」

それから悪に属する者を問引いていけばいいのだ。実は昔に何度か試みて、全て失敗に終わったがな。

俺一人ではせいぜい世界の半分しか救えない。裏側にいる者は見捨てることになる。

しかし今は違う。カレンがいる。この子がいればきつと成功する。世界のもう半分を任せることができる。

「カレン、お前に暗黒のパワーの素晴らしさを教えてやる。ワシとお前、親子で力を合わせて銀河系を支配しようではないか！」

握り拳を作り熱意を籠めて勧誘したが、カレンは目を細めて心底嫌そうな苦い顔で応えた。

やはり時期尚早であったか。

だがいずれは……。

「それで妖精さん、どうして魔力が必要なの？」

カレンはいいえと答えることすらせず、俺を無視して何事もなかったかのように本題へと戻った。

「この木を生かすために必要なんだ。このままだと死んじゃまウ」

妖精は自分の宿主にペタリと手をつけて、悲しそうな顔で同情を誘う。

「ここら一帯が燃やされたとき、どうにかしてこの木だけは守ろうとしたんだ。オレが生まれてからずっと、もう五百年は一緒にいるからヨ。だけどご覧の通りサ。今はオレが持つてる魔力を分け与えて延命しているだけなんだ」

「で、三年間も分け与え続けているせいで長らく溜め込んできた魔力も底をつきそうなのか。揃って明日までにくたばるのなら供養はしてやろう」

「え!?! 死んじゃうの!?!」

「そうとも」

妖精の消滅つまり死の条件は一つ、全ての魔力を失うことだ。

「宿主と共に死を受け入れるか、それが嫌なら新しい宿主を探しに行けばいい。三年間も延命したんだ。そいつも文句は言っていないだろう?。」

「まーそうだな。新しい宿主……ナ」

その言葉を聞いた妖精はじつと、潤んだ瞳でカレンを見つめる。

野郎、元よりそのつもりだったか。

「あたし？ うん、いいよ。宿主になっても」

「ダメだカレン！ 魔力どころか生命力を全て吸い取られるぞ!!」

「んなことしねーヨ」

「とにかくダメだダメだダメだ!」

断じて許さんと、カレンを庇うように前に出る。

「だってアレン言ってたじゃん、助けられるものは助けるって。これがそうだよ」

「それは、そうだけどさあ……」

ほんと、なんでそんなことを言ってしまったんだろう。

もう少し言い方を変えればよかった。

ただしヒトに限るとも言っておけばよかった。

時を戻す魔法はまだ開発されないのか？

「おい寄生虫、お前は死を受け入れたくはないんだな？」

「ああ、オレは外の世界を見たい。五百年生きて人間や獣達から話を聞いたことはあっても、まだなーんも見ちゃいねえんだ。だから……死にたくねえ」

これは嘘偽りのない本心だろう。

「つたく、仕方ないなあ。それじゃ、さっさと契約するぞ。最初から娘に寄生させたくはない。しばらくは俺の魔力をくれてやる」

「いや、お前さんののはちよつと腐臭が酷くて食えねえヨ。まともな人間じゃないのは分かってたけど、何年生きてるんだ？」

「……五千年だよ。おいカレン、生ゴミを見るような目をやめてくれ。鼻もつまむんじゃない。臭くないから。ほらー!」

前にも寄生虫共に言われたことはあったが、やはりこう、心が斬り刻まれる。

珍味だとか濃厚な味があって好きだとか言ってくれるヤツも稀にいるんだけどなあ……。

「というわけでカレン、君に契約神の聖呪を教えてしんぜよう。だか

らほら、こつちきてよ」

とても嫌そうな顔をして五歩下がっていたカレンが半歩だけ寄ってきた。

正直妖精殺しの方法を教えてやろうかとも思った。

よく耐えた俺。偉いぞ俺。

「今から教える聖呪は交わしたら簡単には破れない契約の魔法だ」

「ひゃっ!？」

「悪用するんじゃないぞ」

なおも長槍の間合いを取るカレンに縮地術でピタリと詰め寄り、逃げられないようにがっしりと肩を掴んで聖呪の文言を数度耳打ちした。

「覚えたな？」

「うん」

「お、覚えたってオイ！ お前さんじゃなくてその子が聖呪を使うの力!? 本当に大丈夫なのかヨ！」

不発はともかく、誤発で異形になったり歪んだ契約を結んでしまうのは勘弁してくれよと、先程木を蹴って出てきた時よりも動揺する。

俺はうんともすんとも答えずにニヤリと笑ってみせて、カレンと妖精から距離を取った。

「た、頼むぜ嬢ちゃん……信じるからナ……」

「任せて！」

分かる、分かるよその気持ち。

俺もカレンと出会ったばかりの頃は信じられなかったし信じたくなかった。

しかしどんな魔法を教えてもその場で習得するか、「あたしこの魔法知ってるかも」などと宣うのを目の当たりにしてきた。

だからこの子にとって魔法を覚えるのは、二桁の足し算引き算を解くくらい簡単なことなんだと受け入れた。

「……よおし」

カレンは背筋をしゃんと伸ばして妖精と向かい合い、深呼吸。

碧い瞳がきらきらと輝いていた。

揺るぎない自信に満ち溢れていた。

事実それは魔法を使用するにおいては大事なことである。

カレンはいつも、知らず知らずのうちに正解の道を選んでいるのだ。

「いくよー！」

「……お、おう！」

「——光在るゆえ影が差し、影の差すゆえ光在る。草木無くして土肥えず、土肥えずして草木無し。ゆえに汝——我が働き手となりて、ゆえに我——汝が抛り所となる」

そこで詠唱を止め、額と額を合わせる。

こうすることで契約内容を話し合って最終決定をするのだ。

かつて見届け人として契約に立ち会った際には、当事者間で話がまとまらなかったのか丸一日額を合わせ続けて結局中断したこともあった。……が、そんな心配をよそに二人は百秒とせずに額を離れた。

カレンが妖精に支払う日給は一日に生産する魔力の二十分の一まで。

妖精はカレンの幸福を最優先にすること。

これら二つは絶対で、あとは好きにしろと言っておいたのだが、どうせ仲良くしてねくらの甘っちょろい契約しか交わさなかったのだろう。

「かたや地の底かたや宇宙^{ポイド}の亀裂にしようとも、我らの縦糸断ち切れん。……わっ!？」

カレンと妖精の胸から握り拳ほどの球が現れ出て、頭上へ移動した。

ふわふわと浮かぶそれらはどちらも光を放っており、輪郭のぼやけたものだ。

妖精のものは緑色で淡い光を放ち、カレンのものはつい目を細めてしまうくらいに眩しくて力強い黄金の輝き……小さな太陽とでもいうべきものだった。

「……流石だな」

契約神の聖呪においてしばしば現れるこの光る球は契魂シムラオーブと言い、持ち主の本質や秘められし力を表すとされている。

五千年生きて数多くの契魂を見てきたが、ここまで強烈なものは未だかつて見たことも聞いたこともない。

「ねえアレン！ このまま続けていいの!?!」

「ああ問題ない、締めなさい」

予想外の事態にカレンは一時動揺するもすぐに平静を取り戻す。

己がどれほど強大で未恐ろしい存在なのかをいつ自覚するのだろうか。

「……汝、同意するか」

「同意する」

「——《バランスシンリヌスアル契約神ノ刻印》！」

その言葉により二つの契魂は混ざり合って、というよりはカレンの契魂が妖精の契魂を飲み込んでさらに強い光を放った。

それから二つに分かれ、再び二人の胸の中に戻っていく。

まさしく契約は結ばれた。

「まさか、本当にできちまうとはナ……。嬢ちゃんからとんでもねえ量の魔力が流れ込んでくるぜ……。これで二十分の一ってどうなっ
てんだヨ」

カレンから魔力を、つまりは生命力を供給されたことにより、半透明で消えかかっていた体がはつきりと見えるようになった。

ついでにみすぼらしかった葉の服が、どこぞの部族の長が祭事に着るような派手やかで仰々しい衣装に変わっていく。

贅沢だな。

「当然だ。我が娘は千年に一人の選ばれし者なのだ。お辞儀をするのだ。それでカレン、話し合いの時間が余りにも短かったがこいつと何を結んだ？ どうせ私と仲良くしてねとかなんとかではないのか？」
「ううん、違うよ。あたしだけじゃなくて、アレンとも仲良くしてねって約束したの」

「……フン、甘ちゃんめ」

やれやれと呆れていると目の前に来てスツと右手を差し出してき

た。……ので、好きにしろとこちらも右手を放り出す。

小さな手で小指だけを掴まれた。

「オレはラクサつつうんだ、よろしく頼むぜ大先輩。仲良くしてくれよナ？」

「カレンの味方にいるうちは仲良くしてやらんでもない」

こうして旅の道連れが増えた。

賑やかになるだろう。

第七話 「よければ目玉も」

「——さてラクサ君、我々と行動を共にするからにはルールを守ってもらう」

新人を受け入れて早速、真面目な話に切り替える。

「現在の最優先目標は魔界へ赴いてガエルを見つけ出すこと。そして最終目標はカレンの両親を見つけ出すことだ」

極めて困難で何年かかるか分からない、それこそうん百年とかかるかもしれない課題だ。

「俺はカレンを安全に両親の元へ送り届けると約束した。旅の危険を少しでも取り除くには、むやみやたらと目立たない方がいい。もちろん、余計なことに首を突っ込むのもだ」

まあ、この子に波風の立たない生活を送れというのは酷なものであるが。どうせどこに行こうと何かしらやらかすし、仮にカレンが何もせずとも向こうからやってくる。

そんな俺の目を受けて当の本人はぼつの悪そうな顔をする。

「当たり前のように妖精を連れて歩く少女がいたらどうなるか、分かるだろう?」

「ああ、オレ達を敵視する人間ってのは多いからナ。それなら人前ではこうやって嬢ちゃんの中に隠れて「それだけは認めない」

カレンの方へパタパタと羽ばたくのを摘んで止めた。

「いきなり何すんだヨ! オレはトンボじゃねーゾ!」

「まだ完全に信用したわけじゃない」

妖精というのは不思議な生き物で、触れることはできるが重さを持たない。

さらに相手が受け入れさえすれば中に入る、つまり憑りつくことができる。

そうして内側から語りかけられ惑わされ、破滅するか操り人形に成り果てた者を何人も見てきた。寄生虫と揶揄されるだけあつて悪霊なんぞよりよほどタチが悪いのだ。

カレンはまだ幼く柔らかかで、見聞きしたものの影響を受けやすい時

期にある。

賢しい者の手にかかればいとも簡単に白にも黒にも染められてしまう。

「だからダメだ。よほどのことがない限りカレンの中に入ってはならん」

「へいへい、わかりましたヨ。それで、どーすんダ？」

「器を作ってやろう。仲の良かった動物なんかはいないのか？ もちらん人間でも構わない」

「そうだな……」

俺よりは短いがそれでも五百年はある記憶を探り始めた。

すぐに思い付いたらしく手をポンと叩いた。

「もう十年も昔になるかな。村の子供でこつちから出ずともオレに気付ける子がいてヨ。いい話し相手だった」

「どんな子だったの？ 男の子？ 女の子？」

「名はルダ、女の子だ。嬢ちゃんほどじゃねえけど魔法の才があったナ。オレが魔法を教えてやると、一年間で三つも修得したんだぜ！」
「ほう、それはすごいな」

間違いなく天才だ、十年に一人の才能だ。

是非とも我が魔法学院に入学してもらいたい。

今も生きていければの話ではあるが。

「……ま、そのせいで軍服共がやって来て連れてかれちゃったんだけどヨ」

「そうだろうな。ではその子そっくりの器を作ろう。記憶を見せてくれ」

「いや、それはいい。ルダがまだ死んだと決まったわけじゃないからナ。代わりにその木の根元を掘り起こしてくれ」

言われるがまま掘り起こすと鳥の骨が見つかった。

頭蓋骨と首の骨は切り離されているが、ほぼ全身の骨が残っている。

「ルダには人間の友達ほとんどいなかったが、オレみたいな妖精に好かれるだけあって動物の友達が多かったヨ。中でもその鳥が一番

ルダに懐いていて、連れていかせはしまいと軍服に引っ付いて殺されちまったんだ」

「可哀そう……」

「ああ、哀れだな。もう少し後先考えられることのできる脳みそがあれば生き長らえたのに。小ぶりだったばかりに……」

「なんでそんな言い方するの!」

「……それで先輩、いけるか?」

「これだけ骨が残っていれば問題ない。すぐに作ろう」

腰を下ろし、地面に粗布を敷き、そこに骨を置いて。

「二本もあれば十分か」

右脚を切って生やし、もう一度切って生やす。

それと胆のうを五つほど抜き取っておく。

「なあ嬢ちゃん。この男はいつもこんなことをしてるの力?」

「……そうだよ」

「こんなのと一緒にいて、頭がおかしくならぬのか?」

「……もうおかしいかも。少しずつ慣れてきてるし」

「カレン、暇ならば葉っぱをたくさんとつてきてくれないか? 鳥の

羽根のような細長い奴をね。もちろん一から最後まで見ていたいのならここにいてもいいが」

すぐに取ってくるー! と、この場から逃げるように走って行った。

「さーてと、いっちょやりますか」

一呼吸して職人時代を思い出しつつ作業を始める。

脚肉から切り取った肉をそれぞれ鳥の部位になるように加工して、親指と小指のやすりでなめらかに。

二本指の彫刻刀で溝を彫り、薬指の錐で穴を空け、そこに骨を組み合わせて縫合。

この隙間なくグチュッと組み合わせる瞬間がたまらなく気持ちいいのだ。

「いやいやいや、ちょっと待てヨ! どうなってんだその手!? 魔法とは違うよナ!」

鳥の骨にムネとモモ肉を付けた辺りで、工具と化した俺の手についてつっこまれた。

「ああ、これは貰い物だな」

「貰い物だつて？」

「遠い昔の話サ——」

二千歳を迎えてすぐ、千年前に約束した通りにアイツが現れた。

その時の俺は絵を描き楽器を爪弾き、筆を振るい喉を震わせ、いわゆる芸術たるものに没頭していた。

そして何か欲しいものはあるかいと聞かれ、少し迷ってから答えた。

『器用になりたい』

ヤツは微笑んで頷き、前にもやったように黒い煙で俺を包み込んだ。

そして煙が消えた後で芸術的な発想や閃きが起きることはなかったが、指がおかしなことになっていた。

具体的に言えば左手の小指から右手の小指にかけて、小さな筆から段々と大きな筆になっていた。

『何だこれは？』

『手を好きな道具に変える力を君に与えた。練習すれば足でもできるよになるよ。試しにやってみよう』

言われた通りにやってみると、思うがままに手が道具に変化した。しかしあくまで芸術用の道具だけで武器には変化できなかった。

『たしかにこれはいいものだ、感謝する。それでもう一度聞くんが、何だこれは？』

俺は器用になりたいと言ったはずだが。

道具を上手く扱えるようになりたいと言ったのだ。

道具が欲しいとも道具になりたいとも言ったわけではない。

『その力があればいつでもどこでも練習ができるだろう？ 努力は裏切らない、アレン君が好きな言葉の一つだ』

『才能をくれと言えよよかったか？』

『才能があつたら君じゃない』

ではまた千年後に会おう、と。

高笑いを木霊させながらどこか遠い場所へ去って行った。

二度と来るなど叫んだ声はたぶん届かなかった。

「……というわけだ。ほらこの通り、弦にもバチにもブラシにもなる」
「お……おお、すげーナ……」

血も涙も流さない妖精が、いたく同情した目を向けてくれた。

骨に肉をつけ終えたら、脚肉から剥ぎ取った皮で包んで縫合。

眼窩には圧縮した俺の目玉を嵌めて、クチバシをやすりがけして。

羽根を挿し入れるための穴をいくつも開けているとカレンが帰ってきた。

両手で葉の山を持ち、ズボンの両ポケットもパンパンに膨らんでいる。
る。

「これくらいでいい？」

「うん、ありがとう」

バサーっと持ち前の葉をまとめて粗布の上に落とす。

ポケットの中に詰めたものも全て。

「うわ、本当に鳥の形になってる……」

「丸焼きにして食べるかい？」

「ゼツタイにヤダ!! そもそも鳥肉じゃないし! それよりもこの葉っぱはどうするの? 羽根代わりにするにしても毛がないしバレるよ……」

「毛ならあるじゃないか。ここに」

「あ……」

指をカミソリに変えて頭髮を全て剃り落としていく。

一度剃っただけでは足りなさそうなので、すぐに伸ばしてまた剃り落とす。葉の山より大きな山ができるまで繰り返した。

「あとは葉の色が隠れるくらいに髪を貼り付けて羽根を作り、それを穴に挿していくだけだが……カレン、手伝ってもらおうぞ。ラクサ君もだ」

「……うげえ」

「仕方ねえナ……」

なぜだろう。

俺はカレンに嫌われないようにいつだって清潔にしているし、そもそもほとんどが生えたてほやほやで新鮮な髪なのに、二人は汚いものを触るような顔をする。

なぜだろう。

しかし結局それがどうしてもしてかは解明できないまま、カラスのように真っ黒い鳥が完成した。

「これで終わり？」

「最後の仕上げだ。真っ黒な鳥は不気味であまり良い印象を与えないからな」

絵具代わりに用意していた胆のうをまとめてしぼり、黄褐色の液体を鳥にかけていく。

満遍なく着色するために追加で胆のうを五つもぎ取り、鳥を裏返しにしてかける。

「うん、これだけやればいいかな」

「こつちの方がイヤな色してるんだけど」

「大丈夫さ、時間が経てば黄緑色になる」

何はともあれ、これで今度こそ完成だ。

「ああ、なんということでしょう！ あれほどみすぼらしかった鳥の骨が、匠の手によって生前と変わらない美しい姿に！」

「元々は青かったし、人間と同じ部位なんてなかったけどナ」

「生前と変わらない美しい姿に！」

「……ありがとヨ」

これ以上付き合ってもらえるかと、ラクサが鳥の器に入り込む。

まずその場で何度か羽翼が可動するかを確かめて、それから勢いよく飛び立った。

あつという間に木の高さを超え、上空をぐるぐると旋回。

カレンは大口を開けてその様を見上げていた。

「強度はどうだった？ どこかポロリしそうなところはある？」

ゆるやかに下降して着地を成功させたラクサに問う。

「普通に飛ぶ限りは壊れる心配はなさそうダ」

「それはよかった。乗り心地の方はどうだね？」

「乗り心地も悪くねーが……ただ……」

「ただ？」

「すげえ臭エ。先輩の魔力が残っているせいでもあるが、この中にいると何年も野晒しにして乾かした腐肉を牛乳に浸けて、それを半日煮込んだようなような臭いが……」

「そのあたりはしばらく我慢してくれ。少しずつ本物の鳥の部位と取り替えてあげるから。それか……」

すでに大きく距離を取っていたカレンの方を向いて。

拒絶されることは分かっているが聞くだけ聞く。

「カレンの両脚と髪の毛を分けてくれないか？ よければ目玉も」

「ゼッツツツタイにヤダーツ!!」

第八話 「希望の花」

ヒトの悪意が生み出した炎が葉の一枚も残さず焼き尽くすことがある。

気まぐれな天の嵐が根こそぎ吹き飛ばすことがある。

何年何十年、何百年と命を育んできた緑の土地が一夜にして滅びるのを目の当たりにしてきた。

灰と土砂、それと死骸が積み重なっているのを見れば誰しも打ちひしがれる。

もう二度と元通りにはならないだろうと考える。

誰だってそうだ。千歳の不死者でもそうだった。

しかしそれは杞憂であり過小評価だ。もつと強い言い方をするなら舐め腐って愚弄しているのだ。

土地にとって地上の緑が死に絶えるのは羊の毛を刈るようなものに過ぎない。

地中深くまで毒素を注入されたわけでも、岩盤までえぐり取られたわけでもない。

灰も死骸も糧にして、次なる居住者を待っている。

そう簡単に死にはしない。

「ここも同じだ。たとえば種がなくなるとも、鳥と風が運んできてくれる。土地が生きている限りいつかまた芽吹き花が咲く。専門家の意見も

聞いておこう。ラクサ君、この土地はもう死んでいるか？」

「いいや、ちゃんと生きてるヨ」

「だそうだ。それなら、彼はもう楽にしてあげてもいいだろう？」

「……うん」

カレンの同意を得て、ラクサの宿主であった大木を切り倒して細切れに。

長年住んでいたラクサよりもカレンが強く反対したので長い説明を要した。

俺は博愛主義者なのでしばしば奇異の目で見られるが、カレンも負けず劣らずの博愛主義者である。

誰にどのように育てられたのだろうか？

「そのうち、元通りになるんだよね……」

頭では分かっているけど目に見えているのは寂しい景色で、それはもう分かりやすくしゅんとしている。

妻に家を出て行かれた中年男性と同程度の哀愁を漂わせている……は言い過ぎか。

どれ、ここは一肌脱いでやるかな。

「ラクサ君の出立祝いだ。ちよつとした食事を振る舞ってあげようじゃないか」

「食事？ ……えっ、ちよつと、何してるの？ ねえ!？」

上着を脱いで、右腕と左腕を交互に切り落す。

血液の生成が間に合って失血死しない速度、一分間に十二本のペー
スで腕肉を生産していく。

「お、おい嬢ちゃん！ 一体全体先輩はどうしちゃったんだ!? 発作
か？ それとも頭がイカれちゃったのか？」

「わ、わかんない！ たぶんどつちもだと思っけどー！」

俺を心配してくれる二人を意識外に置き、生産に集中。

それでざつと二百本の腕肉を作り終えた。

「ふうー。これくらいあれば十分かな」

「ねえ、どうしたのアレん？ 大丈夫？」

「もちろん頭の方だぜ？」

カレンとラクサは腕肉の山とその下に広がる血溜まりの外に避難
していた。

「何を失礼な。これをこうやって間隔を空けてだな……」

田植えと同じように腰を曲げて植えていく。

もつとも、植えているのはイネではなく腕肉もとい栄養剤だ。

「土地を肥えさせて再生を早めるのだ」

カレンも同じようにしなさいと目で促す。

もちろん領きはしなかったし俺から目を背けたが、ラクサに「やり
方をおかしいが、間違っつてはいねーぜ」と教えられてしゅしゅ腕植え
を始めた。

しばらくの間親子で農作業に従事して、腕肉を満遍なく植えきつた。

「いやあ、いい景色だねえー。心が安らぐよ」

「どこが？　なんで？」

緑を失ってしまった土地に等間隔で腕が植えられ、平等に栄養が供給されている。これはとても良いものだ。

しかし俗人共は大抵これを見ると呪われそうだの夢に出るのだとほざく。

親鳥がたくさんの雛鳥に餌を与える画と何が違うというのだ。

そんな言葉で言いくるめたい衝動を抑えて、見せたいものがあるとカレンを呼びつける。

「こつちこつち」

「変なものじゃないよね？」

「ほら、これだよ」

しゃがみ込んで灰色の地面から生え出ているものを指差す。

そこには誰が種を運んできたのか、小さな小さな赤い花が咲いていた。

紛れもない命だ。

「えっ！　うそ!?!　アレンが植えたんじゃないよね!?!」

「ないない」

すごいすごいと、直接触れはせずに花の周りを犬のようにぐるぐる回って観察する。

「ほー、すげーナ。イツカソウだよナ？」

「そう、五日草だ。この花はだな、新しい土地や再生する土地に早い段階から生えているため希望の花とも呼ばれているのだ」

これがあれば最低限の植生ができる環境ではあるということ。

この地はまさに蘇ろうとしているのだ。

「これで分かっただろう？　思い残すことはないね？」

「うん！　また来よう！　ね、二人とも！」

「おうヨ」

この場所が命で溢れる未来を確信したカレンは、晴れやかな顔で別

れを告げて歩き出した。

「今度来るときは急速に成長させる薬を持ってこよう。また燃やされて絶えることのないように魔界から人食い植物も持ってきて植えよう」

「そういうのはダメに決まってるでしょ！」

◆?◆?◆?

ラクサを雇用してから三日後の夜のこと。

どうも胸騒ぎがして落ち着かず、ぼうっとカレンの寝顔と焚火を見ているも気が休まらなかった。

ので、睡眠を取る必要のない妖精にカレンを任せて独りで釣りをしに。

「……………かからんなあ」

三時間は同じ場所で糸を垂らしているのだが、ピクリともしない。基本的に評判のいいハラワタを使っているので餌が悪いわけではない。

きつと皆さんおねむで、食欲よりも睡眠欲が勝っているのだろう。だとしてもここまで反応がないのは稀なことだ。夜行性の魚だっているはずなのに魚影の一つもまだ見ていない。

「何か恐ろしいものを察知して逃げてしまったり……………なんてな」

あまりの静けさと孤独に耐えきれなくなって呟いた、まさにその時だ。

「——お隣、よろしいですか?」

背後から女性の声がして俺の身体は固まった。

間合いにいるものがヒトでないことは容易に分かった。

もちろん人里離れた野外といえど、すぐそこには整備された公道が敷かれているので誰かと出遭う可能性もあるにはある。しかし、だ。

今は草木も眠る真夜中で。

呼ばれるまで土を踏む音も息を吐く音も聞こえず気配さえも感じ取れず。

ついでに風がピタリと止み、川のせせらぎすら聞こえなくなった。とどめに、背後に佇むそれには全ての動物が発する鼓動の音が無い。

十中八九イツだろうかと、脱力して振り向いた。

「……その貌は何だア？　どこの誰の物真似だア？」

「さあ？　誰だろうか？」

振り向いた先にいたのは、カレンよりも長く尖った耳を持つ純正の長耳族^{エルフ}だった。

月光に照らされて煌めくのは、燃えるような赤い髪と涼しげな碧い瞳。

白い寝巻きの下には俺と同様に極限まで鍛え抜かれた完璧かつ調和のとれた肢体が。

ああ、悔しいかな悔しいかな。

アイツが化けた姿だと分かっているのに息子が飛び起きてしまった。

「好みのど真ん中を持ってきやがって、詫びのつもりか？　今度会ったらぶん殴ろうと決めていたのにこれじゃあ殴れん。千年間も石の中で一人ぼっちは寂しかったぜ？　封印を解いてくれとまでは言わないが、百年に一度くらいは話し相手になってくれてもよかったんじゃないやねえか？　どうせずっと観てはいたんだろ？」

俺を不死者にした自称カミサマに、長年溜め込んできた思いをぶちまけた。

ヤツはそれを聞いて悪びれもせず隣に腰を下ろし、楽しませてもらったよと他人から借りた笑顔を用いて答えた。

「二千年ぶりか？」

「いいや、千年ぶりさ。君が封印される前に会っているよ」

残念ながら当時の記憶は抜け落ちている。

その時に何を押し付けられたか、どうして俺は封印されたのか、ついでにカレンの素性と両親について聞いて聞いても、時間はいくらでもある

のだから自力で辿り着いてくれたまえと軽くあしらわれた。

「ならもう、いつものようにゴミでも何でも押し付けてさつさと失せろ。お前のせいで魚が寄ってこないんだよ」

「君は相も変わらず不遜だねえ、私一応カミサマだよ？ 六大神よりも上の次元のね。それで何か欲しいものある？ 心臓とか増やしとく？ あと一応言っておくけど、魚が釣れないのは残念ながら私のせいではないよ」

「いらん。強いて言うならお前ら神々を抹殺する力が欲しい」

俺の切実な願いは無視され、「これでいいか」と黒い靄を頭の上からぶっかけられた。

靄が全て消えて視界が晴れた時、特に身体に変化はなかった。

「今回は何を押し付けた？」

「もー、子供じゃないんだからさー、何でも人に聞いてないで自分で考えなよー？」

「この野郎……っ」

「そもそもお前は人じゃねえだろうが！」と逆上して綺麗な面を殴りたかったが、深夜なのでどうにかして抑え込んだ。

そろそろ本当にお引き取り頂こう。

「それにしても、ずいぶんと楽しそうに旅をしているね。君の魂が喜んでるのが分かるよ。私も旅に同行していいかな？ ぜひとも皆と仲良くしたいんだ」

「ダメに決まってるだろ。というかちよつと待て。ラクサはどうでもいいが、カレンに手を出してはいないだろうな。あの子に何も与えていないだろうな」

「与えるだなんてとんでもない！ あの子は全てを持っていたよ！

流石は君の子だ！」

「ふふ、そうだろそうだろ。カレンは本当に凄い子なんだ！ ……あくまで義理の娘、だけどな」

相手は邪なカミサマなので、矮小な種族にしてはやるじゃんと煽てられているのは分かっている。

それでもカレンを褒められるとついつい口角が上がってしまう。

「未来ある若者を大事に育てておくれよ。もちろん君自身も含めて」
「いつまで俺を若者扱いする気だ？」

「孫ができるまで、かな？」

そして「また今度」と黒い霧に包まれて消えてから、再び風が吹き
川の音が鳴るようになった。

今回はうまく煽てられたせいで、二度と来るなを言いそびれてし
まった。

それと結局アイツが去ってから、もうどういわけか魚が釣れること
はなかった。夜が明けてもだ。

「俺のせいじゃない。今度会ったら文句を言ってやる」

第九話 「ルール」

魔界を目指して北東へ歩き続けて、中央大陸の半分は越えた辺りでもた一つ大きな都市国家が見えてきた。

城壁の中には少なくとも五十万人は暮らしているであろう上の下規模の国だ。

「先にいつちやダメ？」

「じゃんけんで勝てたら行ってもいいよ」

いつも通りにカレンをたしなめていると、都市を背にして男がやってきた。

それは見るからにやんちゃをしてそうな凶相で体格の良い男であつたが、ひどく足取りが重く口角が垂れ下がっていて覇気がない。

もちろんカレンはそんなことなど気にせず、いや、もしかしたら元氣付けようとしているのかもしれないが挨拶をした。

「こんにちは！」

「……ああ」

「おじさん、あの国に行ってきたの？ 元氣ないけど大丈夫？」

「あそこは俺には合わなくてよ。……ダチを失くしちゃった」

「こちらが立ち止まっても男は止まらず、通り過ぎていく。

「あんたらもあそこへ行くんならせいぜい氣をつけな。俺みたいになるなよ」

「う………ん？」

男はこちらに背を向けたまま、謎の忠告をして小さくなつていった。

「あれは何だったんだ？」

「ねー？」

カレンとその肩に乗る鳥は疑問を浮かべているが、俺はおおよそ予想ができている。

見た目通りのやんちゃをして、その代償を支払ってきたのだろう。

男とすれ違つてから休憩もせず、早歩きで向かつて、門から少し離れたところにある赤いレンガ造りの出入国管理所についた。

「メロウへようこそ！ 短期間の滞在ですか？ 長期間の滞在ですか？」

「一週間ほどで。愛玩動物の持ち込みは大丈夫ですか？」

「はい、問題ありません」

きちんと氏名年齢職業その他諸々を登録して、鑑札を発行してもらう。

ちよつとした理由から偽名——今の俺はアレン・メーテウスではなくアクライン・ランドランナーである——を使わせていただいた。

もちろんちよつとだけサバも読ませていただいた。

ありとあらゆる職業をしてきたので有職とだけ書かせていただいた。

本当に申し訳ない。

「つかぬことをお聞きしますが、この国は以前ボジヤノイという名前でしたよね？」

「よくそんな古い名前をご存知で。実は学者様だったりしますか？」

「いえいえそんな、ちよつと昔に住んでいただけですよ」

「では、この国のルールについてもご存知ですね」

「ルールう？ ねえアレ……じゃなくてアクライン、ルールって「ええ、説明はいりません」

よくご存知です。

なんたつてこの俺が作ったのですから。

「では、楽しんできてください」

俺が五千歳の不死者であることも、愛玩動物は妖精であることも知らない管理官に笑顔で見送られて少しばかり心が痛んだ。

できる限り、できる限り騒ぎは起こさないようにしよう。

「それにしてもラクサ君、鳥の真似が中々板についてきたじゃないか」

「だ口？ 先輩もよくもあんな涼しい顔で嘘を貫き通せるナ。妖精よりよっぽど妖精らしいぜ」

「ねえねえ、ちよつと昔つてどれくらい昔に住んだの？」

「えーとたしか……千と七百年くらい昔かな」

「それはちよつとなの？」

ちよつとだよ。

十五歳の人間にとつては五年くらい前のことだよ。

「あと『ルール』って何?」

「さあ? そんなこと言つてたっけ?」

それは直接教える気がないので、殴りたくなるような露骨などぼけ顔をした。俺がカレンを教育したい時にしばしば見せる顔だ。

カレンはハアと溜息を吐いて諦めた。

そして溜息と同時に腹の音も鳴ったので、宿をとつて観光するよりも先に食事を取ることに。

大通りに面した賑わいのある大衆食堂に踏み入り、強盗が押し入ってきたりテンノに襲われても対処できるように店内を一望できる角の席を選んだ。

カレンは朝から歩きっぱなしでとても腹が減つていると言うので、十品まで注文するのを許可した。

すぐにお品書きを手にとって目をきらきらさせる。

「どれにするかなどれにするかなー」

「えー、カレンには素早い判断力を培ってもらいたいので、十秒ごとに注文できる品を一つずつ減らします」

「んなつ!? ねえねえそこのおじさん達! このお店で一番美味しいのって何!?!」

お品書きには少なくとも百品は記載されているので、自分で考えることを即座に捨てて他人を頼った。

最善の判断だ。

「あー、この店で一番うめえもんといやあアルフォー丼だな。父ちやんに腹一杯食わせてもらえよ」

「は? 何言つてんだてめえ、この店のイチオシはタキノコの丘に決まつてんだろうが。悪いな嬢ちゃん。コイツ女の趣味悪いからよ、舌も馬鹿なんだ」

「んだとコラ!? お前こそロクでもねえ女ばかり引っかけやがって。なんだよあのロータスとかいう女。鼻フツクじゃねえか」

「ああ!?! やんのかてめえ!」

「上等だコラー！」

二人は拳をテーブルに叩きつけて立ち上がり、律儀に店の真ん中にあるステージに上がってから殴り合いを始めた。

カレンはたしかに最善の判断をしたが、それがいつも良い結果をもたらすとは限らない。

「ええ……」

些細なすれ違いから喧嘩に発展した二人に対し、碧い瞳は侮蔑を通り越して呆れていた。

「すまないカレン、雄というのはこういう生き物なのだ。全世界の雄を代表して謝罪する。止めてこようか？」

「好きにやらせとけば？　もうどうでもいい」

カレンは基本争いごとを仲裁しようとするのだが、今回ばかりは付き合っていられないとお品書きとにらめっこをする。

どちらが最後まで立っているかという客同士の賭けもおおよそ確定し、いよいよ盛り上がってきたところで、二人は赤く腫らした拳を納めてついに剣を抜いた。

いいぞ、やつちまえというヤジがいつそう大きくなり、店の外から覗くものも増えてきた。

「ラクサ君はどちらが勝つと予想するかね？」

「そうだな……。女の趣味が悪い方にしとくぜ」

「ちよつとアレン！　さすがにアレは止めないと！」

どうでもいいと言いながらも、なんだかんだ視界の端に入れて観戦していたカレンが慌てて立ち上がる。

「まあまあ落ち着いて。大丈夫だから」

「どこが!？」

二人の間に飛び込みかねない馬鹿娘の腕を掴んで止める。

抜け出そうと必死にぶんぶん振るのを横目に二人に目を向けた。

「てめえは前からいけ好かねえ野郎だと思ってたんだ」

「その言葉そっくりそのまま返すぜクソ野郎」

二匹の雄は剣を構えて睨み合い。

一歩下がって睨み合い。

一歩進んで睨み合い。

二歩下がって剣を納めた。

「ケツ、バカバカしい。飯が冷めちまう」

「ま、今日はこんくらいで許したらア」

そして何事もなかったかのようにカレンの前を通って元の席に戻り、フォークとスプーンを手に取った。

なんともおかしな展開だが、この国ではこれが普通なのだ。

「えっ、これってどういう……。だってさっきまで喧嘩してて……」

「なあ先輩、この国のルール……っつーよりも特色つてのはまさか、そういうことか?」

「そういうことだ」

ラクサはなんだかんだ五百年も生きているだけあって、この国の他とは違う何かを導き出せたようだ。

「ラクサは分かったの? 早く教えて?」

「ダメだぞラクサ君、それはカレンのためにならない。契約違反だ」

「っわけでわりいな嬢ちゃん、契約は絶対だからヨ」

ラクサが鳥のくせに肩を竦めた。

「それでカレン、注文はしないのかい? もう八十秒経っているから二品までだが」

「……………じゃあ、さつき二人が言ってたやつで」



「……………はえっ?」

食後に一週間寝泊まりする部屋をとって旅の荷物を床に下ろし、あることを告げた途端にカレンがこれまた素っ頓狂な声をあげた。

「もう一回言ってくれろ?」

「うん、好きに遊んできていいよ」

「うん、なんで?」

なんでとはなんでだろうか。

大喜びすると思っていたのだけど。

「だって、いつもなら危ないからダメだとか、あたしがまだ子供だからダメだとか言って止めるじゃん」

「それは何を隠そう、ここは治安が良くて極めて平和な国だからさ！」

「お子様が一人で遊んでいても安心なのさ」

治安が良いと聞いたカレンは目を細めた。

先程殺し合いに発展しかけた喧嘩を見たばかりなので仕方ないことではあるか。

「どうしてこの国は平和なのか、どんなルールがあるのかを滞在中に見つけてきなさい。なに、もしもの時はラクサ君がいるから心配はないさ。……なあ？」

千年二千年とまではいかずとも、そこそこの時間を生きてお子様とは呼べない君を信用し、我が最愛の一人娘であるカレンを預けよう。しかし万が一、決してあつてはならないことであるがカレンが損なわれてしまったら、生かさず殺さずの状態で地の奥底に閉じ込めてやる。

永遠に思える永い時間をかけて己が何者であつたのかを忘れさせてやる。

二度と戻れなくなる方法をいくつも知っているんだ。

だから死ぬ気でその子を守り抜け。

そんな念を籠めて鳥の目玉の奥深くを覗みつけた。

「ま、任せとけ……」

「本当に行つていいの？ こっそりついてきたりしない？」

「しないしない。それともまさか、パパにずっと見守ってもらいたいのかな？ 望みとあらばどこまでもぴったりと「いつてきまーすっ！！」

カレンは人の話を最後まで聞かずにラクサを肩に乗せて勢いよく出ていった。

うんうん、元気があるのはいいことだ。

二人が市街へ繰り出してから少しして、俺も財布一つを手の外へ出た。

気が変わってやっぱりカレンを尾行することに決めたとか、そうい

うことではない。

普通に食べて歩いて、遊んで、のんびりして、ちよつとだけ空気が綺麗になるように掃除をして、この国で暮らす人々の笑顔を見に行く。

建国者として当然のことをするだけだ。

「ここも変わらないなあ」

まだあの家は残っているだろうか、あの店は営業しているのだろうか、覚えている限りのものを探しながらゆく。

しばらく歩き回っていたら小腹が空いたので、馬車などの立ち入りが禁止されている生鮮市場へ入った。

「ほー……ずいぶんと鮮やかだこと。んん！　なんだあれは……ブドウなのか？」

初めて見る色の食材が脳を活性化させ、嗅いだことのない匂いが鼻をくすぐる。

「すいません、このリンゴ……ですよね？　一つください」

「お目が高いねお兄さん、それはつい最近入荷し始めたものだよ」

青果売り場で黄みがかった白リンゴを一つ買い、その場で齧った。

やはりそれは値段不相応に美味しかった。

野菜や果物、食肉というのは時を重ねて新種が発見されたり品種改良が進むので、昔と今を比べた場合は基本的に今流通しているものの方が美味しい。

つまり俺はしばらくの間、何を食べても赤子のように新鮮な感動を味わえる。

これは千年間封印されていたことの数少ない利点だ。

どれくらい買っていかうかと、カレンの土産の分も考慮して選んでいると、すぐ隣の店にあからさまに粗暴な男二人組がやってきた。

「おいジジイ、今日も来てやったぜ。痛い目見たくなかつたら食いもんをよこしな」

「……好きなものを持っていけ」

「へっ！　マジでここは良い国だな！　何をしても許されるなんてな！」

「永住しちまおうか！」

そしてなんと、店主から商品を脅し取ったではないか。

二人がイカついせいとか、周りの者は見て見ぬ振りで誰も齒向かおうとはしない。

もちろん俺もその中の一人だ。

「どけッ！」

次はどうするのだろうかと思っただけなら、二人はこちらの店に流れてきて拳を繰り出した。

「ぶははっ！ なんだアイツ、軽すぎだろ！ 殴った気がしなかったぜ！」

とてもとてもつよくなぐられたので、ぼくはせいだいにぶつとばされてしまった。

「ようおっさん、今日も一番いいやつをもらってくぜ。どれだ？」

「売上金の三割もだしな」

俺のことなど気にもせず、前の店でやったのと同じように恐喝する。

お客様は神様だと言わんばかりに自由気ままに振る舞うが、それは罪ではない。この国では許されているのだ。

「おい何黙ってんだ。早くしろや！」

男の片方がリングを取って握り潰そうとしたが出来なかつたので、代わりに桃をぐちゃりと握り潰して店主に投げつけた。

上着に果肉と甘い汁が付着した店主は臆して売上金を取ってくる

……なんてことはせず、

「おいアンタ、ウチの品物に触る前にそのお客さんを起こして謝りな」毅然とした態度で「否」を返した。

ノリと勢いで殺人を犯しそうな二人が帯剣しているにも関わらずだ。

「……あ？」

当然ながら悪漢二匹の頭に血が上り、こめかみがぴくりと動く。

揃って気軽に剣を抜いて構えた。

この手の人種にとって、自分より弱いと思っっている相手を思い通り

に動かせないのは一番腹の立つことなのだ。

「今なんつった？ まさか俺達が北帰りだつてのを知らねえで言つてんのか!？」

「舐めた口聞いてつとブチ殺すぞ!? 侮辱罪で罰金だ！ 店の売り上げ全部出せ！」

「ブチ殺す、ねえ」

「……………はっ?」

店主は奥から売上金ではないあるものを持ち出してきた。

店主の手にするものが何であるかを認識した二人の思考と肉体が停止する。

それはあらかじめ弦を引き絞られ矢の装填をされたクロスボウであつた。

「果物の一つや二つ持つていくくらいなら大目に見てやってたが、お客さんを殴るような害虫は駆除しねえとな」

照準は俺を殴り飛ばし桃を投げた男の首を捉え、

「オ、オイ……………冗談だよな……………」

「北帰りだろうがなんだろうがブチ殺してやるよ!!」

「よせッ——」

——小さな、風を切る音が鳴った。

第十話 「心治国家」

叶えたい夢というのがいくつもある。

天上の神々をぶん殴るといふくだらないものから五重のシヤボン玉を作るといった壮大なものまで、長い年月をかけて新しく生まれたり実現して消えたりしている。

まだ一度たりとも叶えていない夢の一つが『誰もが笑顔でいられる世界を作ること』で、これは四千年も昔からずっと夢見ている。

もちろんただ夢見ているだけでは決して実現することはないので、自ずと行動してきた。

即座に世界全土を幸福で包むのは無理があるので、最小単位の村から町、町から都市、都市から国へと、順を追って着手していくことに。村と町までは比較的容易に実現することができたのだが、それ以上の規模となるとなかなか難しいのだ。

人口と土地が大きくなると今までのやり方が通じなくなる。

そこで最適解を探すためにいくつも試験的に国を建て、それぞれ異なった規則や制度を取り入れた。

ここボジャノイ——現在はメロウと改名されている——も我々が建てた実験都市の一つである。

俺がこの国に設けた制度は誰もが縛られることなく自由でいられるものだ。

言葉にすると矛盾しているが『制度がないのが制度』だ。

この国には法が無ければ罪もない。強いて言うならば個々人の良心が法であり、法や制度で他人を縛ろうとすることだけが罪である。要するにここは法が治める国ではなく互いを思いやる心が治める国、世にも珍しい心治国家なのだ。

そして、思いやりの精神が著しく欠けた人間はどうなるかという

「はっ……あ……そんな、こんなこと……」

風切り音のあとに悪漢の片方は硬直し、もう片方は声も出さずに倒れた。

「……おいッ！ おいッ!!」

クロスボウを視認してから急激に心拍数を上昇させ、滝のような汗をかきながらも自力で硬直を解き、仰向けになった相方を起きろ起きろと揺さぶる。しかし反応はない。

鉄の矢尻は易々と頭蓋を貫いていた。

「ふざけんてめえ!!」

生き残った彼は燃え上がった。

元々短気な性格ではあるだろうが、これまでの人生でもこれから先の人生でも今日以上に激しい怒りを燃やすことはないだろう。

「ぜってえ許さ……ね……」

そして二秒で鎮火した。

店主がクロスボウを構えていたとしても怒りに任せて飛び掛かったはずだ。

しかし隣店の主人も同じものを構え、さらには見物人も皆武器を手にとって自分を冷めた目で見ていることに気付いてしまった。

その瞬間、怒りよりも恐怖と生存本能が上回ったのだ。

「な……なにか自由の国だよ……! 騙しやがって! とんだ魔境じゃねえか!!」

「たしかに……ここは自由の国だが、自由気まま自分勝手にやっついていいわけじゃねえ」

「お前が俺達を殺す自由があるなら、俺達にだってお前を殺す自由がある。違うか?」

反論したら自分も殺されると思ったのか、なにも言葉が出てこなかったのかは定かではないが、彼は何も言い返せなかった。

「お前さんにこの国は合ってねえよ。殺されないうちに早いところ出て行きな」

情けで投げ渡されたりリングを反射的にキャッチし、苦悶の表情を浮かべたまま逃げるように去っていった。

おそらく彼は二度と戻ってくることも、しばらくは他人に危害を加えることもないだろう。

そして故郷への帰路でこの国への旅行者とすれ違って「あそこはど

んな国でしたか、何かあったのですか」と聞かれたらこう答えるのだ

——俺みたいになるなよ、と。

◆◆

「……でね！　があってね！」

「うんうん」

宿屋で夕食をつつきながら日中仕入れた土産話に花を咲かせる。

都市の規模はこれまで旅をしてきた中で最も大きいので、いくらカレンが無尽蔵の体力で歩き回ったといっても一日二日で全て知ることはできない。

それとラクサが神経を張り詰めて守っていてくれたので、危ない目にも遭わなかったようだ。

後で上等な羽根を買いこんで付け替えてあげよう。

「この国のルールは分かっていたかい？」

「ううん、全然分かんない。ラクサも教えてくれないし」

カレンは自分の右肩に乗る鳥を恨めしそうに見つめる。

「嬢ちゃんのためを思ってやってるんだぜ？」

「アレンみたいなこと言わないでよ」

「……ま、一週間はここにいるんだ。そのうち分かるさ。それじゃあパパはちよつと出かけてくるから、夜更かししないでちゃんと寝ておくんだぞ。いいね？」

「わかった」

カレンが食べ終わるまで見ていたいのを我慢して宿を出た。

まだまだやるべきことがある。

責任がある。

この国の家主として、毎度毎度留守中に湧いて巢食う害虫を追い出さねばならないのだ。

「いらっしやませ」

しばらく歩いて、大通りにある酒場に立ち入った。
そこは内装に金がかかっている広々としており、酒棚には高い酒ばかりを取り揃えていた。

しかし客が一人もおらずがらんとしていて、一体どうやって経営しているのだろうか？ 本当に酒を売るだけでやっていけるのだろうか？

なんて考えながら店のど真ん中のテーブル席に座ると、ウェイターが水とメニューを持ってきた。

「こちらをどうぞ。お客様、この店がどういった店かはお存知ですね？」

「ええ、もちろん」

俺はメニューを開かずに返してひとつだけ注文を。

「一番高いのを」

それを聞いた瞬間、ウェイターは目を見開いて大急ぎで店の裏側へ人を呼びに行き。

すぐさま一人の女性を連れてきて対面に座らせた。

「ボス、こちらがそのお客様です」

「……へえ、イイ男じゃない」

ゆったりとした黒いドレスの上に毛皮のショートコート羽織るという、いくらでも物を隠せそうな装いの美人さんだ。

頬に深い切り傷の跡が一本走ってはいるが、いかにも夜の蝶といった言葉が似合う色気がある。

しかし大事なのはそこではない。

彼女は一目で俺が強者であることを見抜いたのだ。

流石が一番高いだけある。

「アンタ、見れば見るほどイイ男だねえ。私の男にならないかい？」
「謹んでお断りいたします。小さな娘がいるものでして」

俺が答えると残念そうな顔をして、ウェイターに注がれたワインをグイッと飲み干した。

もちろんここはお嬢さんと楽しくおしゃべりをして飲むようなお店ではない。

「私はコウマク、コウマク・セドナだ。アンタは？」

「アクライン・ランドランナーと申します。ところで本題に入る前にひとつお聞きしたいのですが、人は皆平等だと思えますか？」

「なんだいその質問は。平等なわけないだろう。だから私達がいるんだ」

「ですよね」

その通り、この世の中に平等というものはない。

皆が皆上も下もなく平等であれば俺の望む平和で優しい世界になっっているだろうが、誰にだって生まれつき個体差がある。

だから富める者と貧しき者、強き者と弱き者に分かれてしまうのは仕方のないことだ、そこまでは許容する。

であればせめて弱者が自由でいられるように——例えば主人が奴隷をどれほど手酷く扱っても構わないが、奴隷も不服とあれば主人の寝首を搔いても罪に問われない——俺は法のない国を建てたのだ。

ゆえに他の自由を奪い取るような強大な力がこの国にはあつてはならない。

「それじゃあ本題に入ろうか。私に依頼するくらいだ、大物狙いだらう？」

金さえ払えばどんな依頼でも受ける何でも屋、包み隠さず言うなら殺し屋の斡旋所。

ここはそういう店だ。

こんな店があると富んだ者には誰も逆らえなくなる。王侯貴族となんら変わらない彼らの元で法が生まれてしまう。

弱者の自由が制限されてしまう。

そういうのは、ダメだ。

屋根裏に潜むネズミは追い出さなくちゃならない。

「依頼、というよりも提案なんですけどね。この店を畳むか一新しませんか？ 子供でも来れるような店にね」

「……それは、どういう意味だい？」

「そのままの意味ですよ？ 従業員の皆さんの食い扶持がなくなつて心配だというなら、仕事を見つつけるまでの間は手当てを支給させてい

たきます」

金ならそこら中に隠してありますので。

特にここは我輩が建設した国だ。

小国の一つや二つ買い取れるくらいの財産を地下や壁に隠してある。

「本気で言っているんだね？」

「もちろんですとも」

「そうかいそうかい」

コウマクに目で指示されたウェイターが店の奥へ行くと、次から次へと従業員の皆さんが湧き出てきた。

そして店の外には営業終了の看板を立てて扉を固く閉じられ、窓も錠戸で覆われて外の光が見えなくなつた。

おや困つた、これでは帰れないじゃないか。

「復讐……つてところかい？　うちの誰かに身内をやられたか」

「恨みを晴らしに来たわけでも成敗しに来たわけでもありませんよ。あなた方がこれまでに何人殺しているかがそれを咎めるつもりはありません。ここは罪のない国ですから」

「復讐でもないってんなら競合相手……アンヨ商会あたりの差し金か。ファッシュンセンスのイカれた狸親父め」

「だからそういうのもありませんつて。もー、余の顔を見忘れちゃいました？　それともご存知ない？」

ぐるっと見回して周りを囲む皆さんと目を合わせて見るも、全員殺意をもって睨み返してきただけだった。

コウマクが「やれ」と指をかざした瞬間にとびかかってくるだろう。

「あんたが憎い！　罪を償え！　とは言いません。誰も逆らえない為政者を生み出すような行いはやめてくださいと言っているんです。報酬を受け取らないか私情による殺しなら好きにやってくれて構いませんから」

わざわざここまで言わずとも、ちよちよいと頭をいじってやめさせるのは簡単だ。

しかしそれは自由を奪う行為に他ならない。彼らも俺の大切な民に変わりはないのだ。

だから一人でも改心することを信じて選択の自由を与えた。

「残念だよ。……アンタはいい男だけど、いい人でもあったなんてさ」
彼女は俺のグラスを取って飲み干し、席を立てて手下をかき分けていった。

そして手下の陰に隠れて見えなくなってから低いトーンで一声、
「やりな」

全員武器を抜いた。

天井裏と床下に隠れているのも含めて全部で六十人いるのだから一人くらいはと思ったが……残念だよ。

揃いも揃って血に飢えた獣だったなんてさ。

「――《シヨウネンバクサイ掌念爆碎》」

第十一話 「誓って人は殺してないさ」

気配を消して忍び足で歩いて、音を立てないようにドアの蝶番に油代わりの血を差して開ける。

「よう先輩、遅かったナ」

娘の枕元に立つ鳥が小声で迎えてくれた。

「あの後、カレンは何時まで外に出ていた？ どうせ俺が行ってから寝ずに遊んでいたのだろう？」

カレンの横たわる側に腰を下ろし、俺が何をしてたかを聞かれるより先にずっと気になっていたことを尋ねた。

「そりゃナ。日が変わる前には帰らせたヨ」

「何か危険な目には？」

その質問にラクサはなかなか答えようとはしない。

「まずいことでもあったのか？ 言ってみろ。……そう怯えるな。見たところカレンに傷の一つも付いていないのだから責めはしない」

そこまで言うとうまくやく重いクチバシを開いた。

「知らず知らずのうちに色街に迷い込んでしまったヨ。花売りの勧誘が五回と痴漢目的で寄ってきたのが八人」

「……………顔は、覚えているな？」

「おう待て待て、そんな国一つ滅ぼしそうな顔をするなツテ。嬢ちゃんには指一本たりとも触れさせちゃいけないから安心してくれ」

「不届き者らに処罰は？」

「しばらくおいたができねえように指の皮を剥いでおいたヨ」

「……甘い、最低でも腕一本は斬り落とせ」

不覚にも、ガエルがやられたのを知らされた時と同程度の怒りがこみあげてきた。

もしもラクサが何も罰を与えていなかったなら、この都市に住まう男を一人残らず不能にして回ったかもしれない。

「それで、何人殺したんだ？ 血の臭いが隠しきれてねーゼ」

「誓って人は殺してないさ。ネズミを八十九匹。それと毒の粉を撒き散らす蛾を一匹駆除しただけだよ」

「……明日もやるのか？」

「調べたところ大きな巣が七つあるらしくてね。今日一つ潰したから残りは六つだ。ちょうど滞在日数と合うね」

「オイオイまさか、嬢ちゃんのことはずっとオレに任せつきりか!?」
ただでさえあの子の手綱を握るのは大変なんだ。

今日だけで十年歳をとった気がするのにヨと妖精は嘆く。
そこにさらに追い討ちを。

「もしかしたら俺の素性を調べられて、人質か報復にカレンが狙われるかもしれないから、その時はよろしく頼むよラクサ君」

カレンとの契約を解消したくなってきたゼと愚痴りながらも諦めて受け入れた。

全てが無事に終わったら君付けはやめて、もう少しだけ信用してあげよう。

それからしばらくの間睡眠時間を削り、食事の時くらいしか休みのない奉仕作業に勤しんだ――。

滞在二日目。

貧民街と下水道に居座り、弱者を食い物にしていた汚物を焼却。

合計で百三十匹のドブネズミを灰も残さず駆除。

三日目。

巣は素早く焼却できたものの、ネズミ共は散り散りになっていたので一匹ずつ探すのに苦労した。

合計で五十四匹のネズミを駆除。

四日目。

なぜかネズミ達が大集合していたおかげで午前中に巣を一つ潰すことができ、その日のうちにもう一つの巣を潰滅。

合計で二百六十三匹のネズミと一匹のコウモリを駆除。

喜ばしいことに二匹の賢いネズミが心を入れ替え、人の姿に戻った。

五日目及び六日目。

メロウの富の五分の一を所有していると噂されるアンヨ商会を二日かけて壊滅。この巣にはネズミが多く、前日に二つ取り潰しておい

て正解だった。

アンヨ商会は奴隷や債務者を猛獣・魔獣と戦わせる地下闘技場をいくつも運営していたので、一つ残らず取り壊し公衆浴場に改装。

合計で千二十三匹のネズミと、ファツシヨンセンスの壊滅的な薄汚い狸一匹を駆除。

残念ながら賢いネズミは現れなかった。

こうして滞在最終日となり、

「あたし分かったよ」

夕食の席でカレンが自信ありげに口を開いた。

「この国では何をしてもいいんでしょ？」

「正解だ。不死者ポイントを贈呈しよう」

「何をしてもいいからつてき、悪いことしてない？」

「悪いことなんて千年間はしていないよ」

ここでは人の形をした害獣を狩猟しているだけさ。

憎しみに駆られて二足歩行の生物を無差別に殺し回った時期もあるのだから、それに比べたら大して悪いことではないだろう？

などと言って理解してもらえるのはたして何年後になるか。

少なくとも今のカレンに言った場合ダメダメヤダヤダと押し切られるのは確定しているので、黙って夜の街に溶け込んだ。

「よお兄ちゃん！俺らと一緒に飲んでいかねえか!? 仲間が一山当ててよ、今日は奢りなんだぜ！」

「それは素晴らしいですね！しかし実は今から大事な仕事があります」

「そりゃ悪かった」

「頑張れよ！」

「ありがとうございます」

目的地に向かう途中で全く見知らぬ人々に幾度も誘われた。

なんというかメロウの人々の気質は魔界の住民と似通っている。あちらは力こそが全てで法であるが、本質的には似ているのだ。

基本的に開放的で気の良い人間が多い。

だからといって争いごとが起こらない日はないし、些細なすれ違い

から殺し殺されに発展することもある。

それは人間が不完全で脆い生物なので仕方のないことだ。見過ごすしかない。

しかし、金の力や権力によって理不尽に圧殺されるのは見過ごせない。

「……つたく、一体いくらかけたんだか」

人の生き血を啜って得た金で国土の十分の一の敷地に建てられた、ネズミ共の根城に到着した。

まだ営業時間内だというのに門が固く閉じられていたので蹴り飛ばし、競馬場がまるまる一つ入るほどの広大な庭園に踏み入れる。

一步踏み入れた瞬間辺り一面に明かりが点き、俺自身も強い光を照射された。

「——お前が件の掃除屋だな？」

強い光源の方からドスの利いた女性の声が響いた。

「これはこれは、ケラ社長直々に迎えてくださるとは」
「待っていたよ。よくも妹をやってくれたね」

大勢の完全武装した部下を引き連れて現れたのは、両腕両脚をカラクリの義肢に変えた身長二メートルを軽々と越す大柄の女性。

彼女こそが《鉄屑処刑人》の異名を轟かせる女傑社長ケラ・セドナ。総勢八百二十四匹のネズミを従える辣腕であり、初日に殺したコウマク・セドナの姉でもある。

「ひいふうみ……おや、それで全員ですか？ この国で一、二を争う組織だと聞いていましたが、ずいぶんと数が少ないようで」

俺が来ることを知っていて召集をかけているはずなのだが。

木と像の陰、土と池の中に潜む暗殺者、遠距離に伏せる狙撃手と魔法使いも含めて二百匹も感知できない。

「同業者を皆殺しにして回る誰かさんにビビって大半が足を洗っちゃまったよ。大損害だ」

「いったい誰がそんなことを……」

「お前の首は必ずここに置いていつてもらおう。だけど感謝もしているんだ。あのアンヨ商会を潰してくれたんだろう？ 他にも邪魔な同業者を全て。つまりはお前さえ消せばワタシ達がこの国の支配者つてことになる。お礼に妹が受けた苦しみの十倍で済ませてやるよ」

「それならば苦痛は無いですね。妹さんは苦しませずに逝かせてあげましたから。私のことをイイ男だと褒めてくれたのでね」

「やれッ!!」

これ以上の会話は無意味だと、翻つてネズミ達を解き放った。

話し合いの始まりだ――。

「……何じつとしてんだよテメエ」

「死ぬ準備がまだ出来てねえのか？ さつさと抜け」

すでに囲まれてはいるのだが、一匹として襲いかからず遠距離からの狙撃もない。

礼儀正しく待っていてくれる。

よほどのことがないかぎりはカラテで心臓を抜き取るか首をへし折っていくつもりでいたのだが、

「こちらも抜かねば、無作法というものか……」

念のためにアンヨ商会の宝物庫から取っておいた赤い刀をすらりと抜いた。

なんとこの刀、人族に対する憎しみが深ければ深いほど切れ味が増すエンチャンテッドブレードドゥーマン製の魔法刀なので、千年以上口々に刀剣を使っておらず腕の鈍ってしまった方でもご安心！

防具ごとスパスパと野菜のように斬れるんです！

ただしこちらの商品、いわゆる邪剣や妖刀と呼ばれる類のもので「人族を殺せ、人族の血を吸わせろ」としつこく脳内に語りかけてきます。

心の弱い方は使用をお控えください。

「死ねオラッ！」

「お前を殺せば大出世なんだよ！」

「コイツは俺の得物だア！」

「待つてくれたのは感謝する……が」

やはり現代人は礼儀がなっていないな。

まずはおじぎをするのだ。

アレン 一刀流奥義――

「おじぎ結び」

赤刀の一振りにて七匹の身体が上下に別れ、切断された上部がおじぎをするように滑り落ちた。

うち二匹は盾を構えていて鉄製の防具も装着していたのだ。

やはりこれは危険な代物に違いない。

あとで処分しておかなければ。

「ウオオオオツ!! くたばりゅエっ!!」

「おい! しつかりしろ! クソツ、すぐにすり潰してやりやりよ……ぼっ……」

さすがは最大手の所属で且つ逃げ出さずに残った精鋭だけあって、五匹に一匹は一振りで仕留めきれないのがある。

それでも俺に歯形をつけられるようなネズミはおらず、せいぜい単独で二爪魔獣を倒せる程度のが八匹。

奇襲も狙撃も全て掻い潜りながら淡々と駆除していき、あらかた片付けてから遠くの狙撃手と魔法使いに「すぐに愛を届けに行くよ」と目線を送ると皆逃げ出した。

そして残ったのはケラと四匹の護衛だけ。

彼らは戦いに参加せず護衛に徹していたということはあるなりに信用されていて、それなりの忠誠があるのだろう。

「あんなのと相手したら命がいくつあっても足りねえ!」

がしかし、今回ばかりは一步先に迫る死の恐怖が忠誠を上回った。

一匹が逃げ出したのを皮切りに他の三匹も逃げ出し、

「こんなところで死ぬるかよ! ……ぐアアアツ!!」

「社ちよ……う、なに……ヲ」

「お前達は今日でクビだよ」

ケラの義手から鉄の礫が射出され、四匹の胸に風穴が開けられた。

「さてと……。ワタシの隠し玉を見ちまったからにはますます生かし

「しておけなくなった」

手駒の屍を踏み越えて、ついに総大将来たり。

「誰かさんのせいですっぴかり静かになっちまったな。ワタシは賑やかな方が好きなのに」

「最後のアレは私のせいではありませんよ？」

安定した鼓動が二つだけの静かな空間が生まれた。

……そう、とても静かなのだ。

俺がたった一人で血の海を作り、ケラもその一部始終を見ていたはずなのだが、怯えの音一つ聞こえない。極めて平静で冷静、冷や汗の一つもかいていない。

それはなぜか？

考えられる理由は二つ。

『すべてを諦めた』または『自分が勝てる」と確信している』。

このどちらかだ。

「そういえば知ってます？ アンヨ商会が地下で人間と魔獣を戦わせていたんですって。魔獣ですよ魔獣！ 竜とか見たことあります？」

「竜は見たことすらないが、亜竜なら何年か昔に縊り殺したさ。思ったより柔かったのを覚えているよ」

それは真の言葉。

五百人の兵士に相当する亜竜を難なく殺せるということは、二百匹のネズミを相手にすることができるといえる。つまりは俺が今しがたやったのを再現できるということ。

ああ、間違いない。

この女は強い。

第十二話 「愛を力に変える魔法」

「ドーモ、アクライン・ランドランナーと申します」
まずはおじぎだ。

五歩の距離を取り、数秒間腰を曲げて頭を下げる。
五歩の距離と言っても飛び道具持ちの彼女にとっては必殺の距離だが、こちらが隙を晒している間にかかっては来なかった。

だからといって、おじぎを返してくれたわけでもない。

「悪いね。ワタシの生まれた国じゃあ、それをするのは敗北を認めた時だけでね。……いつでもかかってきな」

負けるまでは頭を下げる気はないと、仁王立ちでこちらの全体像を静かに見据えていた。

ならば無理矢理にでもさせてやろう。

アレン一刀流奥義、おじぎ結び――

初手で決めるつもりで踏み込んだ。

脚の筋力を解放し、縮地術も用い、横薙ぎ。

――結果として、刃は脇腹に届く前に義手に弾かれ、ケラの口角が上がった。

「フフ……」

ケラが歯を見せて笑うのと同時に、折れた刃先が地面に突き刺さる。

「……なるほど」

おじぎをした位置よりも後ろに飛び退いて刀身を見るも、新しく刃先が生えていたりしなかった。

「これでも一応、達人なんですけどね」

自分で言うのもなんだが、俺は達人の中の達人だ。

長年かけて培った技術により鉄で鉄を斬るのは当然のこと、木の剣で岩を割り、鉄の剣で鋼を斬ることができる。

だからあの硬そうな義肢に守られようと、この切れ味抜群な鋼鉄の刀でまるごと斬っておじぎをさせるつもりでいた。

しかしそれは叶わなかった。となると……

「その義肢はまさか、オロキンセル希奇鉱で作られているのでは？」

「ご名答。作られていると言うよりは貼り付けられていると言った方が正しいがね」

希奇鉱は世界各地で見つかる希少な鉱物だ。

鉱山で掘り出せることもあれば、畑に農作物と共に生えていることもあり、朝起きたら枕の隣に置いてあったなんて話もある。

ちなみに以前叡智神に問い掛ける聖呪を使わせて調べたところ、この世界とは別の遠い星々のものだとの答えが返ってきた。

とにかく硬くて希少な鉱物なのだ。

これを斬るには最低でも飽魔銀ミースリルの刃を持つ剣が必要だが、誰も持つてはいなかった。

「ほらどうした!? かかってこないのならこっちからいくよ！」

本人の性能かそれとも義足に仕掛けがあるのか、あの巨体で並の吸血鬼よりも素早い踏み込み。そして乱舞。

三分の一が無くなった刀でなんとか受け流してはいるが、質量の大きな拳と足にかすっただけでも肉が抉れ、もろに当たればミンチになってしまいそうだ。

それだけじゃない。

「……馬鹿な。今のを弾くだと？」

もちろんこちらにも守りに徹するだけではなく、僅かな隙を見出して刀を振るう。

それらは人間にとって見てからでは反応できない速度であり、予備動作も全く見せていないというのに、ケラはまるで未来予知をしていると言わんばかりに弾くのだ。

フェイントだって通じない。

少しずつ刀身が短くなっていく。

「君は本当に人間か？ 人の思考を読む妖魔か何かでは？」

「そんなんじゃないさ。実は昔雷に打たれたことがあってね。それからはこう、ビビッとくるんだよ」

「そういうことだったのか」

雷に打たれて生き残った者が電気にまつわる不思議な力を手に入

れたという話を、ごくごく稀に耳にすることがある。

さらに知り合いの学者から聞いた話では、人の体内には魔力と共に電気が流れているという。ゴーレムが魔力で動くのと同じように、人間は電気で動くのだと。

まず初めに電気が流れ、後に筋肉が収縮・拡大し、最後に身体が動く。

俺は筋肉の動きを見て先読み染みだすことができるが、ケラは電気の流れを感じ取って予測ができる。

「だからお前の動きは丸見えさ」

しかしいくら丸見えだとはいえ、しっかりと反応して的確な動きができるのは本人の才能と修練によるものだ。

「これはもう、認めるしかないな。君はいい女だ」

「お前こそ。ここまでワタシを昂らせたヤツは他にいないよ」

少なくとも俺の身体一つで勝てる相手じゃあない。

正確には、この女のスタミナと精神力が続く限り、不死者の力や魔法に頼らないで倒すのは不可能に近い。

見事なり。

「じゃ、そろそろ決着を付けようか。それと先に謝罪しておくよ。俺は今から卑怯な手を使う」

「殺し合いに卑怯もクソもないさ！　ワタシを殺せるものなら何でもやってみな！」

「――《万^{ヨロス}ニ有^アリシハ^{チナ}因^{チカラ}ミノ力ヨ》」

刀身のほとんど残っていない魔法刀を捨てて駆け。

そこら中に落ちている所有権の無くなった武器を手当たり次第に引き寄せ、手に持ったそばから投擲してゆく。

「卑怯な手っていうのはそれかい!？」

毎秒二つの武器を投げつけ距離を取って駆け回る。

「それがお前の飛び道具ってことだね」

ケラはまるで子供の遊びに付き合っただけかのように笑みを浮かべ。

希奇鉱の張り付けられた義肢で飛んでくる武器を全て弾きながら、

少しずつ俺との距離を詰めてくる。

そして、とうとう終わりはやってきた。

「ふんっぬあッ！……クソッ！」

重さが二十キロ近い戦鎧を全力で投擲しても弾かれ、次に引き寄せた二つの武器は柄しか残っていなかった。その次も、そのまた次もだ。

ケラは弾いた際にほとんどの武器を壊していたのだ。

逃げるように駆けずり回ってなんとかまだ使えそうな剣を見つけ、手を伸ばした刹那、彼女が獐猛な牙をチラリと覗かせ、それが畏だと気付いた時にはすでに指先が触れていた。

「ぎゃっっ！」

バチリという弾けるような痛みが手から全身に奔った。

思考が途切れ、筋肉が硬直。

よって生まれたのは一秒にも満たない隙だったが、強者には十分すぎる時間だ。

「ワタシの勝ちだー！」

ケラは全義肢から礫を放って俺の脚に無数の空洞を作り、義足に仕込んであるバネか何かで瞬発。

一瞬下ろした瞼を上げた時には目の前に。

「つ・か・ま・え・た」

「イギイイイイイツツ!!」

子供を抱え上げるように俺の脇を掴んで同じ目線に持ち上げ、放電。

先ほど剣に触れてしまった時より数段強い痛みが全身を蝕んでいく。

「頭がスツキリしただろう？」

「あ……ぐっ……」

意識を保っているのがやっとだった。

下は蜂の巣のように穴を空けられ、ほとんど感覚すらも残ってはおらず。

上は内側を電撃でズタズタにされてろくに拳も握れない。

これを満身創痍という。

「ワタシをこんなにも楽しませてくれた礼だ、楽に逝かせてやるよ。最後に言い残すことは？」

バチバチバチツツと、毛の逆立つイヤな音を義手から鳴らし。

己こそが勝者であると決定付けて悦に浸る。

「……実に、見事。俺の求める世界……には、君のような力ある者が……。一人でも多く必要、なんだ……。今からでも、遅くは……。ない。心を入れ替えて、共に……。歩もう……」

息も絶え絶えに、心からの勧誘を行った。

しかし彼女はそれを聞いて心底つまらなそうな顔で首を横に振るう。

「それが遺言でいいんだな？」

奇跡の一つでも起こって改心してくれないかと願ったが、やはりダメだったか。

ならばもう、妹の元へ行ってもらおうしかない。

「……じゃあ、もう一つ……だけ」

ケラのへその前にゆっくりと手を伸ばし、ぽつりと呟く。

「——《万二有リシハ因ミノ力ヨ》」

「それはどういうつもり……ウツ!?」

再び彼の魔法を唱えて三秒とせず。

俺を持ち上げていたケラの腕がだらんと落ち、それから仰向けにばたきと倒れた。

「な……何をした!? どうして、ワタシの腹に穴が!」

ケラは歯を喰いしばって起き上がるとうとするが首が動くのみで、それより下は死んだように固まっている。

「これだよ」

今度こそ勝負は決したため、不死者の力を用いて体を修復して立ち上がり。

そして、ケラを背後から貫いて俺の手のひらに突き刺さったものを月光に照らした。

「それは……ワタシが最初に折った刀の!」

「そう、引き寄せるついでに君の脊椎を貫かせてもらった。これが卑怯な手さ」

「それにお前、どうして立っていられる!? 脚に空けた穴がどうして塞がっているんだ!？」

「ああ、それはね」

俺が毎度おなじみの実演をすると、ケラは喰いしばっていた歯を緩めて脱力した。

「所詮ワタシは、この国で威張っていただけか」

「君なら魔界でもやれたさ。一度たりとも俺の心臓に手の届く人間はそういない。いてたまるか」

「……そうかい」

「さて、君はもうじき死ぬだろう。しかし、遺言を残しておじぎをする時間は十分にあるよ」

悔い改めるも改めないも勝手だが、潔くおじぎをするのだと提案すると。

どういうわけかケラは不敵な笑みを浮かべた。

それは根拠のない自信や意地っ張りとは違う、確信を持った笑いで。

「この後に及んで敗北を認めないのは、負けず嫌いを通り越して見苦しいと思うんだがね」

「ワタシの敗北だって? ……いいや、引き分けだよ」

二度と起き上がることでできない状態で何訳の分からぬことを言っているのだと、俺は極限まで眉を寄せてみせた。

まだ何か秘策があるのかもしれないと油断せずに。

「上を見な」

言われた通りに夜空を見上げると、星々の間で赤い光が妖しく点滅していた。

視力を上げて目を凝らし、雲よりも上空にあるそれが直径五メートルほどの無機質な球体であると分かった。

「アレは何だい?」

「オービタルストライク
超空魔導爆撃さ。ワタシが死んだ後に一発デカイのを撃って死体を

消してくれる優しい子だよ」

「君の死体だけを消してくれるのかい？」

「この国の半分……とまではいかないが、三分の一は道連れにしてくれるだろうさ。なんだって動力はあの賢者の石なんだから」

五感のほとんどを遮断して魔力だけを感知するために研ぎ澄まし。はるか上空に浮かぶ球体からとつともない魔力を感じ取れた。

「どうやらこの国の三分の一を消し飛ばすという言葉はハツタリではないようだ。」

「うーん、久々だけど届くかなあ……《射貫ケヨ煌鮫牙》」

右腕に魔法の矢をつがえ、視力を最大まで上げ、夜空に発射。

照明や狼煙代わりにも用いられる光輝く矢が闇を切り裂き天高く昇ってゆく。

そしてついに、球体を平面的とすれば十点満点中八点の位置に命中し、

「えー、ダメなのアレ？」

鉄を軽々貫く魔法の矢は、大量殺戮兵器をドーナツに変えることなく霧散した。

「無駄だよ。アレはワタシの義肢を作った魔導帝国から大枚叩いて買ったものさ。ちよつとやそつとの魔法じゃ通用しない。直接ハンマーで殴りでもしないと傷一つ付けられないだろうよ」

「ほお……ん」

お前こそ遺言を残したらどうだ？

そのように返してきたケラに目を向けながら、俺の脳内大議会は一つの決定を下した。

「……おい！ どうして服を脱ぐ!？」

まずは着ているものを全て脱ぎ捨て、

「まさか、こんな時にこんな死にかけのデカイ女を慰み者にするつもりか!？」

ケラの穴空き腹に跨がる。

ここで初めて彼女が恐怖の感情を露わにした。

「君の大切なもの、俺にくれるかい？」

「気狂いめ！ ……………だが、好きにしろ。お前になら何をされてもいい」

「それじゃ、もらっていくよ」

「なっ…………ぐあアツ!」

覚悟を決めたケラから大切なもの、つまり機械仕掛けの両腕を抜き取った。

泣き叫ぶ女性の声を無視しながら、俺も両腕を切り落として装着する。

「一体……何、をッ!」

「ありがとう。君の腕、よく馴染むぜ」

ケラから少し離れ、ただ一言礼をして深呼吸。

極めて正確に魔法を用いるため集中。

世界から自分以外消えてしまった。

自分の吐息と鼓動の音すらも。

「——《シヨウネンバクサイ掌念爆碎》」

唱えたのは最も慣れ親しんだ言葉。

これは思い入れの強さに応じて所有物を爆発させる、ロマンティックな言い方をするならば『愛を力に変える魔法』だ。

ヒトの皮の内側には複数の臓器、そして二百を超える骨と六百を超える筋肉が内包されている。

その全てに役割があり、一つとして欠かせないものだ。

俺は彼らと五千年もの間付き添ってきたので、一つ一つにあだ名をつけるくらいには愛している。

小指の一本で家を倒壊させ、この身を残らず捧げることによって城の三つ四つを更地にできる。

その爆発力をもって真上に飛翔。

足の裏から順繰りにへその下まで爆破し、足まで生やしてからまた繰り返す。

遠い世界にはロケットやジェットなどといったものがあり、俺がし

ているのと似たような方法で音より速く飛ぶのだとアイツが話していた。

ならばこの技はロケットタツクル……いや、ロケットパンチとでも名付けようか。

技の名前を決定した時にはすでに音を追い抜いて、三つ数える間もなく接触する距離に。

(……頼むぜ)

鋼よりも硬い義手が音よりも速く衝突するその瞬間、

目の前が真っ白になり、

たしかな熱を感じた。

第十三話 「合言葉」

メロウを発ってしばらくしたのち、カレンが思い出したように口を開いた。

「そういえばさ、昨日の花火見た!？」

「うん、何だったんだろうねえアレは。……しかしその時間は夜中だったはずだがまさかカレン、夜更かししていたのかい？ 成長期の夜更かしは発育に悪いと「最後の日くらい夜更かししてもいいじゃん！ アレンこそいつも何してたのよ!？」 あたしが寝てから帰ってきたんでしょ？ ネズミの退治がそんなに大事なの!？」

「……ごめん」

もつと私を構ってよと年相応の子供らしいことを言ってくれて嬉しいと思う反面。

七日間といえど俺がしたことはほとんど育児放棄に変わりなく、申し訳なさで返す言葉がない。

「まーまー、そこまでにやってくれヨ。先輩はみんなのために夜遅くまでずっと働いていたんだ。嬢ちゃんも知ってるだろ？ 悪いネズミやシロアリを放っておくと大変なことになるっテ」

「それは分かってるけどさー……」

お仕事の詳細を知っているラクサが助け船を出してくれた。

「むしろ先輩がいらないおかげで夜遊びができて良かっただろ？ 先輩と一緒にいたら飯食ってすぐ風呂に入れられて、それからあつという間に布団をかけられてるぜ。ジジイは早寝早起きが好きだからナ」

「……そうかも」

彼は治安が良いとも悪いとも言えない国で昼夜カレンを守り抜くという責務を果たした。この子が突っ走らないよう紐を握って制御するのは一筋縄ではいかない重労働だ。何百年も教師経験のある俺が言うのだから間違いない。

なれば前よりもう少しだけ信用してあげようと思う。

「じゃあこれ以上は何も言わないけどさー」

カレンは何か言いたげに口をへの字にして、こちらの目の奥を刺す

ように見つめてきた。

「はい、何でもございませうか」

「次からはちゃんと手伝わせてよね！　ネズミの退治くらいあたしにだってできるんだから！」



この不可思議な少女と出会ってから早くも一年の月日が経過した。我々はたびたび街や村に逗留しながらも、ほとんど最短の経路を進み続けて北東の地へ辿り着いた。

この地域は昔から人魔大戦の主戦場となることが多く、足元を少し掘れば骨が見つかるほど夥しい数の命が絶えている。

「おー、やってるやってる」

「話には聞いていたが、初めてみるナ」

現にここから一キロも遠くない平原でも今まさに小規模の戦が発生しており、人族と魔人が火煙と血煙を上げている。

「ラクサ君はどっちにする？」

「オレは魔人の方に賭けるぜ。五百と五十ならまだ人族に勝機があるだろうが、あそこにいる魔人は百近イ。あと一時間もしないうちに人族の全滅だろうナ」

「手堅いな。だが、あの赤塗りの槍を持った男を見てみる。中々良い動きをしているだろう？　彼の働き如何で逆転するかもしれない」

「たしかにやるナ」

「ねえ！　二人して何ぼーっと眺めてるのよ!？」

「おっと」

俺とラクサが観戦を決め込んでいる中、カレンが一人で行こうとしたので腕を掴んで止めた。

「ちよっと！　離してよ！　早く助けに行こうよ！」

「助ける？　なぜ？」

「えっ？　なんでってそれは……」

「助けるにしてもどっちを？」

とち狂ったことを言う娘に単純な疑問を投げつけると、すぐ返すことができずに硬直した。

「ふむ、カレンは長耳族と人族の子であるから人族を助けるとしよう。しかし人族を助けるために魔人を殺してもいいのか？ 彼らにだつて家族がいるぞ？ 無事に帰ってきてほしいと願う妻や子がいるだろう。俺がそれらを不幸にしてもいいのか？」

「……だめ」

「人族でも魔人でも、戦さ場に来ているからには理由がある。富や栄誉を目的に来る者もいれば、死に場所を求めている者だっている。中には強制的に戦わされる者もいるだろうがな」

俯く娘に「それとな」と付け加え、トドメの言葉を告げる。

「何か勘違いしているようだから改めて教えてあげよう。いいかいカレン？ 俺は人族の味方でも魔人の味方でも、ましてや正義の味方様でもない。俺は俺の愛する者と愛する世界の味方だ」

それでも行くのなら止めはしない、とまで言わずともカレンは諦め、戦地から目を背けてとぼとぼと歩き出した。

「ま、いつも言っているように世界征服を果たしてしまえば無駄な戦争はほとんど無くすることができるさ。さあ、親子で手を取り合つて銀河系を支配しようではないか！」

少しでも元気を取り戻して欲しかったので、これまでに何度もしてきた情熱的な勧誘を。

……がしかし例によって何も答えず見向きもしてくれなかったので、慰めはラクサに任せてしばらくの間斜め後ろを歩いた。

血生臭い戦場を迂回して緑の中を歩き、まだ空が焼けている内に抜け出ると。

そこには石造りの建物が立ち並ぶ町があった。

「よしカレン、すっかり掴まつてろよ。それと俺がいいと言うまで目を瞑っているんだ」

「うん？」

森林浴によって調子を取り戻したカレンを背負つて町で一番高い建物の屋根に上り。

「もういいよ、開けてごらん」

風の流れてくる方を向くと――

「うわぁーっ!!」

そこには赤く焼けた、どこまでも続く大海原があった。

そこには色鮮やかに染められた帆船が何十隻も並んでいた。

ここでは少しひんやりとした風を嗅ぐと潮の香りが鼻腔に広がる。

「ねえっ!! アレが海なの!? アレ全部船だよね!! 全部本物だよねっ!!」

「ああそうだよ」

「ほー、すっげえナ。オレも海を見るのは初めてだヨ!」

内地に住んでいて海という存在を知ってはいても見たことのない二人が激しく興奮する。

俺は二人に何度も言葉で説明し、絵に描いて見せもしたが、やはり海だけは本物を見るにかぎる。

南の島の生まれなので子供の頃は海を見てもなんとも思わなかったが、ある程度力をつけてから再び目の当たりにした時は感慨深いものがあつた。

それなりの力を用いてちよつとした湖を蒸発させるか埋め立てるのは容易いが、海だけはそう易々と消し去れないなど感動したものだ。五千歳を超えた今でも一人で海を消すには十年以上の月日が必要だろう。

「いいなあー、すごいなあー、海」

「とても強い生命力を感じるぜ」

「ねえ、今から遊びに行ってもいい?」

「だーめ。それは明日になってから。夜の海は危ないんだから」

しばらく二人に鑑賞させて、カレンが我慢できずに予定通りの言葉を発したところで本日の鑑賞を強制終了。

駄々をこねる娘を無理矢理背負って屋根から降りて、夕飯を食べるに。

立ち入ったのは海に面した大衆食堂兼宿屋兼船大工という、港町らしき溢れるお店。

客の顔ぶれは土地柄か漁師と戦士が大半を占めていて、皆一樣に俺とカレンを見るやなんだガキかと視線を外す。

それでもこちらを見続けたのはただ一人、
「いらつしやいませえーっ！ こちらにどうぞお！」

カレンくらいの子でも恥ずかしがって着ないようなフリフリの制服。それを極上の体に重ねた女給さんがすぐに来て席まで案内してくれた。

「かわいいお子さんとアタイ好みのお兄さんをご案内いーん！」

本人がその気なのであくまで女給と称しておくが、べつとりと紅を引いた女給さんはこの店にいる誰よりも筋肉モリモリマッチョの大男である。

ちなみに極上の体とは、気が狂うような鍛錬によって練り上げられた肉体のことである。

あの拳はきつと岩をも通すことができるだろう。

「はいこれがメニューね。特別オプションでアタイがあーんをしてあげるサービスもあるんだけど、どうかしら？ お兄さんみたいな素敵なヒトならタダでいいわよおん？」

「……………ぜひともお願いしたいのですが、妻がいつどこで見ているか分からないので遠慮しておきます」

「あらそお？」

そんな彼…………いや、彼女が俺の中身を見抜きやがってくねくねぐいぐいくるものだから、恐怖やら不安やらで脂汗がだらだらと染み出てくる。

「グーちゃん、次の皿持つて行つて」

「はあいミーちゃん！ 今行くわよおん！」

決して揉め事を起こさないよう極力失礼のないように対応し、苔のように無心で過ぎ去るのを待った。

「なんかすごい人だったね。人…………だよね？」

「…………それは何も言うな」

食事中も常に視線を向けられているのは分かっていたが。

カレンはずっと料理だけを見て。

俺はずっとカレンだけを見て。

それで通し続けることによって、俺の身体は通されずに済んだ。

一時も油断のできない食事を終えて席を立ち、

「あなたがこの店の主人ですか？」

「いえ。主人はまだ帰ってきておりませんが、宿泊なされるのであれば私が受け付けます」

「それじゃあ一泊だけお願いします」

眼鏡をかけた物静かで賢そうな子。

先ほど乙女のグーちゃんにミーちゃんと呼ばれていた女性が対応してくれた。

彼女はおそらく魔法使いだろう。それもかなり熟達した。

「その階段を上がって、鍵に合う部屋を使ってください」

「どうも。それと主人に言伝を一つ頼みます」

「言伝ですか？ かしこまりました」

受け取った鍵の埃を二指で払ってから顔を上げ。

「父になった」

古き合言葉を伝えた。

第十四話 「元海賊」

「今回ののはちょっと長いぞ。眠くなったら無理しないでいいからな」
「はやくはやく！」

窓を開け、夜風と波の音を背景に読み聞かせる。
記憶の海に沈む、懐かしい物語の一つを引っ張り上げて。

「あれはむかーしむかし、今から二千と三百年ほど昔のことだ——」
魔界内部での戦乱につき人族と魔人は長らく停戦中であつたころ、中央大陸では中央部の大国が崩壊したことにより混乱と戦火が広がっていった。

そのため争いを好まない人々は平和な大陸沿岸部に逃げるように
移り住み、さらなる交流や未発見の島々を求めて海運が発達。

海図にいくつもの点と線が追加される、いわゆる大航海時代などと呼ばれる時代へと突入した。

俺も時勢に乗じて北東の海で手頃な島を見つけ、そこに別荘を建ててのんびりと暮らしていた。

一日中鍛錬に励むこともあれば、ぼーっと寝ぼけ眼で釣りをしたり海の景色を描いたり。時折知り合いが遊びに来たり。

刺激は大してないが楽しく過ごしていた。

やはりというべきか海の時代が莫大な富を生むようになると、次第に邪な方法で富を獲得しようと海賊行為が流行するようになった。

度が過ぎればやがて本格的に駆除されるだろうし、海は俺の所有物ではないので目の前で悪行を見てしまわない限りは構わず放っておくことに。

そんなある日のことだ。

「ピヤッハー！ オレたちや海賊だアーツ！」

「サメの餌にされたくないや金目ののもと酒を全部出しな！」

「にしてもさびれたシマだなあオイ！ 倉庫代わりには使えつかない？」

「……君達、入島許可証は？ それとも誰かの紹介かい？」

髑髏の旗を掲げた流行りの海賊船がいにうちの島にもやってき

た。

「ずびばせん、でじだ……」

「もうぎまぜんので、いのちだけば」

「じゃあこれ、許可証ね。次からは忘れずに持ってきてね」

うちの島は一見さんお断りで、歓迎の準備もしていなかった。今回は丁重にお引き取りいただいた。

そして、五年とせずにもまた同じ船がやってきて……。

しかしどういいうわけか前回と比べて船には無数の穴が空き、三本あるマストのうち二本は折れていて、帆も自慢の海賊旗もボロボロに破けていた。どうにかしてこの島まで辿り着けたといった具合だ。

何よりも二十人はいた乗組員が船長ただ一人を除いて見当たらない。

「許可証は？」

ガリガリに痩せ細り、今にも倒れそうな船長が震えながら懐より取り出して見せた。

俺が丹精込めて作った許可証には何度も踏みつけられたような跡や血やらが付着して汚れていた。

「頼みが……ある……」

船長は内容を語る前に限界が来てしまい、砂浜で前のめりに倒れた。

ただ気絶しただけのようでもまだ息はある。

海賊といえどこのまま島で死なれても困るので、しっかりと栄養を取らせて休ませ。

三日かけて回復してから話を聞いた。

「元はといえば、俺の責任だ。俺が全部悪い」

口髭を生やし、色気があるも悪ガキを成長させたような顔の男フアビオは開口一番に己を責めた。

なんでもフアビオと彼の船員達は同じ港町の出身で『大した刺激もなく人並みに老いて死んでいくんだな』と誰もが鬱屈していたころ、

『海賊でもやって一発デカイのを当てようぜ！』

などと酒の勢いでファビオが提案したのである。

誰しも今の生活に飽きが出ていて、年長者で皆のまとめ役である彼が言ってしまったこともあり。

ファビオとしては半分冗談のつもりだったが、三日後には皆が自分の船や仕事道具を売り払った金をまとめて持つてきた。

そこまでされて今さらやめようなどとは言い出せず、流されるままに海賊業を始めることに。

海賊といっても元はただの漁師や船大工なので、金目の物や食料を奪うだけで無用な殺生はせず、本当に血の気の多い同業者とは極力接触を避けていたという。運悪く凶暴な海獣に襲われるなんてこともなかったそう。

彼らの七年間の歴史で二番目に運が悪かったのは不死者の住む島に上陸してしまったこと。

そして一月前に起きてしまった最も手酷い不運というのが、

「油断していた。……いや、調子に乗っていたんだ」

どこぞの無人島で宴に興じ飲めや歌えやのどんちゃん騒ぎをして。

どうせ誰も来ないだろうと見張りもつけずに寝てしまい。

朝になって目が覚めると、全員ひとまとめに縛り付けられた状態で四方から槍を突きつけられていた。

『お前ら、何て名前の海賊団だ?』

『真夜中のシーフードパスタ海賊団』

『聞いたこともねえ名前だな。とすると賞金首はいねえか』

彼らは賞金稼ぎを生業とする集団だった。

ファビオの海賊船に賞金首が一人もいないことを知ると、まとめて知り合いの奴隷商に売ると決定して一人ずつ船に乗せた。

まだ殺されるよりはマシかと諦めて従う者がほとんどであったが、年が一番下で弟のように可愛がられていた船員が抵抗して『船長だけは解放してくれ』と必死に声をあげた。殴られても蹴られても同じことを繰り返した。

その姿を見て二人三人と声をあげる者が増えていき、『船長だけは解放してくれ』という言葉が次第に『船長だけは解放してくれ。いや、

解放した方がいい。船長はスゴイ男だ。必ず大金を稼いで戻ってくる』に変化していった。

『分かった分かった。コイツだけは解放してやる』

それで静かになるならと、ファビオだけが解放され。

『お前がもし、こいつらの言う通り大金を稼げるっていうなら、しばらく売らないで置いてやるがよ。どうする?』

まず無理だと高を括って、賞金稼ぎのリーダーがファビオをからかう。

ファビオ自身も到底不可能だと、大金を稼げるのならそもそも海賊なんかやっていないと心の中で叫びながらも、本気で期待してくれている仲間の前で啖呵を切った。切るしかなかった。

『稼げるに決まってるんだろ! 絶対に一人も売るんじやねえぞ!!』

『おいおい、本気で言ってるのか? あてはあんのかよつ!』

『これを見ろ!』

『何だあこりやあ?』

取り出して見せたのは入島許可証と記された一枚のプレート。

『それで入れる島にはなあ、人の皮を被った恐ろしい化け物が住んでんだ。ヤツは絶対大金を隠してやがる。それを奪い取ってきてやる』
『ケツ、バカバカしい。……ま、約束は約束だ。一年だけ待ってやるよ』

男はファビオから許可証を奪い取って捨て、ぐりぐりと踵で踏みつけてから自分達の船に乗った。

去り際に『仲間を見捨ててもいいんだぜ?』と、甘い匂いのする種火を心に投げ入れられるもそれはすでに燃え上がっていた覚悟の炎に飲み込まれた。

ファビオはすぐさま錨を巻き上げ、一人では船を押せないで潮が満ちるまで待ち。

出航してからは朝も夜も、ほとんど寝ずに舵を取り続けた。

休む時間もましてや後悔する暇もありはしない。

「……で、命からがらここまで来たど? 観光ではなく金目的で」
俺の問いに対し申し訳なさそうに頷いた。

「金なら腐るほどあるが、俺を倒して奪っていくかい？」

「奪っていくなんてとんでもねえ！ 五年前の悪夢を忘れたことはねえよー！」

「まあ、事情はよく分かったよ。それで君の大切なお仲間を買い戻すのにいくら必要なんだ？」

「……金貨二千枚。一人につき、金貨百枚で売ってくれると」「そりやまたずいぶんとふっかけられたな」

金貨百枚というのは上玉で年若い女奴隷の適正価格だ。

労働目的の男奴隷であれば三人買ってお釣りがくる。

どうあがいても魚臭い男一人につけられていい値段ではない。

「頼むツ!! 金を貸してくれ！ 人殺しでも何でもやる！ 俺だけは死ぬまであんたの奴隷になったっていい！ 二度と陸に上がれなくても構わねえ！ だからツ！」

「別に何もしなくていいけど、ちゃんと返してくれる？」

「海賊は約束を必ず守る」

「そうだねえー」

嘘はついていなかった。

金を借りて逃げようという考えは片隅にも湧いていないようだ。

たとえ死ぬまで返済に追われることになってもやり遂げる目をしていた。

どんな手段を使っても、金をかき集めるつもりでいた。

「んー、やっぱやーめた」

「え……どうして……」

だから金は貸さない。

「そもそも俺は海賊が嫌いなんだよ。人の物を奪って弄ぶようなゴミ野郎が大嫌い。いくら君達がカタギを殺していないと言っても犯罪者には変わりがない」

「それは、その……」

「君は賞金稼ぎ達を悪者のように話すけどね、彼らは世のため人のために正しいことをしたと思うよ。違う？」

俺が正論で殴り、ファビオは沈黙で答えた。

それでしばらく俯いて押し黙っていたが、顔を上げずに背を向け、邪な覚悟を決めてボロ船へ向かった。

だから俺はそこで「あつ！」と声をあげ。

そのままでは一月の間命が持つかどうか分からない、危うい足取りの男を止めた。

「……何すか？」

「いやあ実はね、知り合いに頼まれて貿易業を始めようと思っさ。海の男が必要なんだけど……。もちろん現役 of 犯罪者はお断りだ」

薄汚い海賊なんぞに金は貸さない。

金を貸しはしないが、汗水たらして真面目に働く者に給金を支払うのは別だ。

途端に髭面の男の目が少年のように希望で満ち溢れ輝いた。

「ファビオ・サンニーニ、三十二歳！ 好物は母ちゃんの作るトマト Pasta！ さっきまで海賊やってましたがもう二度としません！ だからあんたの下で働かせてください!!」

一応は荒くれ者を率いる船長ともあろう男がプライドを捨て去り、地に頭を押しつけての懇願。

俺がしばらく無言で見ている、岩のようにピクリとも動かず同じ姿勢でいた。

「君の覚悟、たしかに受け取ったよ。頭を上げて。明日から早速出発だ」

「……あつ、ありがとうございますッ!!」

「だけど本当にいいのかい？ けっこう大変な航路なんだよ？ それに国家間のいざこざもあって半ば密輸みたいな形になるんだけど。命の保証はないからやめるなら今の内だよ？」

「へえ、それはそれは。大陸の北から南までぐるっと回ればいいんすか？ 任せてくださいよ、これでもさっきまで海賊してたんですから。一周だろうが百周だろうが回ってやりますよー」

「うーん、ちよつと違うかな。中央大陸から封魔大陸、つまり魔界まで行き来するのさ」

「へえ？」



「社長オ！ 前方に黒龍嵐が！ 後ろからも海狼の群れがあつ!!」

「嵐を読んで進みなさい。一時間後にこの船がみなもに浮かんでいるか水底に沈んでいるかは君にかかっている」

数多の陸なる命を飲み込んできた——さる大国が派遣した百隻の艦隊が一夜にして壊滅したなんて記録もある——魔の海を何度も航海するという命懸けの商売。

たしかに実入りは良いが、正常な人間であれば一度の取引で引退を決意するものだ。

「あつ……あの、これ……。ご注文の品……つす……」

「ぐっへっへっ、いつもご苦労さんよ」

「おーいアレン、この旨そうな人間はいくらだ？ 腕一本味見してもいいか？」

「うあ……あああ……」

「ちよつとちよつと、あんまり怖がらせるなつての。ウチの社員は売り物じゃありません」

しかしファビオは常に死ぬ気の覚悟で恐怖に立ち向かい。

十分に、いいや十二分に水夫としての務めを果たした。

俺はその働きに対する正当な報酬を支払い続け、

「船長おおおおー！」

「死んじまつたかと思つたよお!!」

「バツカ、俺が死ぬわけねえだろ！」

金が溜まるたびにファビオの仲間達を買い戻し、社員を増やしていった。

賞金稼ぎの方々は毎度鳩が豆鉄砲を食らつたような顔をしていたが、それでもきちんとして引き渡してくれた。

貿易会社の社員が増えて仕事の効率も上がったことにより、ついに、約束の期限まで一ヶ月も時間を残して最後の一人を買い戻す金が

溜まった。

魔界からの土産の品もいくつか携え、社員総出で賞金稼ぎ達の拠点に立ち入った。

最年少の彼が入れられた檻と、その前に立ち塞がる賞金稼ぎのリーダー。

そしてどういうわけか、いつもとは打って変わって百人近い武装集団が我々を囲んだ。これは我々に労いと祝福を述べるために集ってくれたのだろう。きつとそうに違いない。

「ほら、これで最後だ」

魔界でもっと恐ろしいものを見てきたファビオがものおじせずの前に出て、ずっしりと重い袋を差し出す。

それを受け取った者は袋の中身をちらつと覗いて、そのまま突き返した。

「全然足りねえな」

「んだと!?! ふざけてねえでちゃんと確認しろ! きつちり金貨百枚入ってんぞ」

「百枚? 何言ってるんだ? こいつの値段は金貨二千枚だ」

「はあッ!!」

ファビオが袋を地面に叩きつけるのと同時に、周りで囲んでいた者達が武器を抜いた。

よってそれ以上は誰も何も言えなくなってしまった。

……やれやれ。

「なるほどねえー。一人につき金貨百枚という話ではなかったのかい?」

どうしようもなく俯くファビオの肩に手を置き、後ろに下がらせた。

君はよく頑張ってくれた。

あとは社長に任せなさい。

「んな口約束が通用するわけねえだろ。まあ、今回はちゃんと契約書を作ってやるよ」

「それはつまり俺の目の前で不正を、悪事を働くというんだね?」

「悪事だあ？ ……だったらどうする？」

もちろん俺は許さない。

捻くれた子供のワガママを放っておく大人はいない。
矯正してやろう。

「納得のいくまで話し合いをしようか——」

◆◆

話し合いといっても時間にして十分足らず。

なぜか人の話を聞いてくれない子供達ばかりだったので、お仕置き
の拳骨で大人しくさせてからひとまとめに縛り。

約束通り金貨百枚入りの袋を持たせてから檻をこじ開けた。

「社長……あんた本当に俺らと同じ人間なんすか？ 魔人の血が流
れてませんか？」

「真正正銘人間だよ。南の島の出だ。……さてと、どうする？」

あの日我が社員達が奴隷にされた時と立場が逆転した。

賞金稼ぎ達は諦めと拳骨された箇所が痛むのとで何も発さない。

「サメの餌にするもよし、奴隷として売り払うのもよしだ。君達に任
せよう」

判決を委ねると皆で寄り集まって小声で話し合い、それから揃って
こちらを向いて。

爽やかな顔で答えた。

「俺達はもう、海賊じゃねえっすよ。解放してやってください」

「……成長したな」

いつのまにか真人間に戻っていた社員達はその日のうちに全員退
職し、地元に戻って再び身の丈に合った仕事に就いた。

しばらくのちファビオが元々の生業であった船大工と平行して、食
事処を開いたと風の便りに聞いたので、立ち寄って昔話に花を咲かせ
た。

「そういえばあの日君はなんでもすると言っていたな」

「そうっすね。今でも死ぬと殺せ以外なら何でもしますよ。一生返し

きれない恩がありますから」

「ではそうだな。君の子々孫々には俺と俺の友人と、ひいては子孫達の専属船頭になつてもらおうかな」

「子供がいるんすか？」

「いつか作る予定だ。それで船頭を頼みたい時の合言葉はだな——」

波の音に合わせてすうすうと小さな呼吸が聞こえてきたので目を開けると、カレンの瞼は下ろされていた。

「やれやれ、もう終わりだというのに」

「オレはちゃんと聞いてるぜ。合言葉っていうのはアレか、さつき眼鏡の嬢ちゃんに伝えタ」

「そうだ」

今でも受け継がれているだろうか。

最後にこの地を訪れてから千年以上経っているんだ。

忘れられていると考えるのが妥当か。

「ま、明日になれば分かることさ」

淡い期待を胸に眠りについた。

「おう旦那！ もうちつとだけ待っててくれ！」

「何か手伝いましょうか？」

「いやいや、大切な客人に手伝わせるなんていけねえ。部屋で楽しんでいてくれ」

本当に残りは点検だけだからと言われたので、お言葉に甘えて客室で荷を下ろした。

「ほらアレ、女の人が働いてるよー！」

「ほう、珍しい」

三人で客室の窓から眺めていると、黒髪を短く切りそろえた中性的な子が金槌片手に甲板をくまなく点検していたので目で追った。

彼女が何かに気付いて町の方へ手を振ると、食事処で働いていたミーちゃんとグーちゃんがやってきて船に乗り込んだ。どういわけかグーちゃんはフリフリの給仕服を着ている。

さらに野生の勘ともいうべき何かでグーちゃんがこちらに気付き、目をギラギラと輝かせて投げキッスを飛ばしてきた。

「……アレは獣だナ。背後を取られたらやられるぜ」

「だろうな……」

今からでも鋼鉄のパンツを買いに行くべきだろうか。

しばらく景色から目を離して荷袋の中身を整理していると、出航の準備が整ったので一度甲板に集合してくれとドア越しに呼ばれ。

すぐに手に持っていたものを置いて出ると第二マストの根本で四人が並んでいた。

「早くても半月はかかる船旅になるからな。互いに名前くらいは覚えておかねえと。俺はシモーネ・サンニーニ。キングパスタ号の六十三代目船長だ！ そんで今回命を張ってくれる船員達が」

「ケーちゃんです！」

「ミーちゃん」

「グーちゃんよおん！」

大おじぎ小おじぎ投げキッスと続いたのでこちらも一人ずつおじぎで返していく。

「ケーちゃんは整備士でミーちゃんは航海士。グーちゃんは料理人だ

が頼めば何でもしてくれる。……正直な話、俺がいなくてもこの三人がいりやあ航海は成り立つくらいに優秀だ」

「んもう褒め過ぎよおっ！ 後で身体を癒してア・ゲ・ル」

バシンバシンと、かなり大きな音を鳴らしてグーちゃんが船長の背中を叩く。骨にひびが入ってないだろうか。

（なあ先輩、この三人普通の人間じゃねえゾ）

（ああ、分かっている）

不思議なこともあるものだ。

グーちゃんミーちゃんだけでなく、ケーちゃんからもただならぬ力を感じる。

三人の素性についてはおいおい聞いてみるとしよう。

「アレンです。この度はどうぞよろしく」

「カレンです！ よろしくね！」

こちらも名前だけの自己紹介を簡潔に済ませ、それじゃあまたと客室に戻ろうとするのをミーちゃんが止めた。

「待つて。それは何？」

彼女はカレンの肩に乗っている鳥を指差して言った。

ラクサの部品は全て本物の鳥のものと交換してあるのだが、まさか気付いたのか？

「この鳥はね、あたしのペットで」

「ペット？ 妖精が？」

あのカレンが上手く嘘を吐いたのも虚しく、最初から見破られていたようだ。

どう取り繕えばいいのか分からず、石のように固まって目で助けを求めてきた。

そこでこりや仕方ねえナと、俺が何か言うより先にラクサが鳥の身体から飛び出て答えた。

「そうさ、オレはカレンと契約した妖精だヨ。名はラクサつつうんだ。五百年以上生きる大妖精様だぞ敬え小娘」

「あらやだ妖精ちゃんだったの!? かんわいいっ！」

グーちゃんが豪腕を伸ばして捕まえようとするのを避けながらラ

クサはさらに続ける。

「次は嬢ちゃん番だ。お前さんが只者じゃねえのは分かってんだ。あだ名じゃなくてちゃんとした名前と生い立ちを話しな」

「教えない。個人情報だから」

「ナツ!？」

「ミーちゃんも意地悪ねえ。教えてあげたっていいじゃない。ねえケーちゃん?」

「うん、わたしの本当の名前はケ——」ナツジヤ《汝蛇ナレバトグロ蜷局ヲ卷ケヨ》
余計なことは言わんでいいとばかりに二人の口を魔法で塞いだ。

あの流れるような口封じは相当慣れている、つまりは何度もやるはめになったということだ。彼女が三人の中で一番の苦勞人だろう。

計らずとも彼女達の関係性が垣間見れた。

「あー……それじゃ、お互いのことをよく知れたようなんで出航するぞ。してもいいよな? ……いくぞ野郎共オ! 覚悟は出来てるかアーツ!!」

「お……おー」

「んーっ!」

「……」

口を塞がれていたり動揺していたり興味がなかったりできちんと返事をする者はいなかったが、船は魔界へ向けてたしかに進み出した。



八方から聞こえる波のさざめき、船首が掻き分ける水の音、潮風に吹かれて帆がバタバタと歌う。

それと時折聞こえる海鳥の鳴き声と魚の跳ねる音。

無風状態でもなければ海の上というのはほどほどに騒がしいのだ。目を瞑っていようが飽きることはない。

「飽きた」

「どうしてそんなこと言うの? まだ出航して十分も経ってないよ

？」

しかし残念なことに子供というのは飽きやすく、小さな変化というものを好き好みはしない。

一つとして同じもののない波のうねりや雲の満ち欠けを眺めているより、一度見てしまえばそれで終わりの構造物なんかをマジマジと観察している方がよっぽど好きなのだ。

だからさつきから袖をぐいぐいと引っ張って船を探検しよう探検しようと言ってくる。

「ほら、あの帆の皺が笑ったり泣いたりしている人の顔に見えないかい？ あそこの海面も」

「……そうかなあ？」

「ならそうだ、景色を切り取って絵を描いてあげよう。どこにしようか？」

「別にいいよ。アレンの絵って上手いけどさー。なんかこう、心にくるものがないっていうかさー？」

「……どうしてそんなこと言うの？」

俺の純粋な心が大きく抉られて崩れたので、これ以上の説得を諦めて探検とやらに同伴することに。

「アレン早く！ こっちこっちー！」

「……元気だしてくれヨ。オレは先輩の絵、いいと思うぜ」

瑞々しい黄緑色の鳥が涙を流さずとも憐れみ深く励ましてくれた。

信頼度を上昇。

不死者ポイントも贈呈。

第十六話 「芸術点」

「とっつげきーっ！」

カレンが勢いよく開けたドアは客室の隣、船長室のものだった。深々と椅子に腰かけて食い入るように本を読んでいたシモーネが突然の来訪者にびくりと驚く。

そしてすぐさま本を閉じて立ち上がった。

「ど、どうかしたか!? まさか、うちの船員が何かやらかしたんじゃ」「いえ、娘が船を探検したいと言ってきかないものでして……。見学してもよろしいですか?」

「ああ、そういうことならどこでも好きに見ていってくれ。どれ、今はやることもねえしちよつくら案内でも」

「大丈夫です、お気になさらず。この子は俺が責任を持って見張るので休んでいてください」

「ねえねえ、それ何の本?」

邪魔はしませんのでと言った矢先に馬鹿娘がたずねた。

シモーネは今しがた読んでいた分厚い本をそつとカレンに手渡した。

「重たっ! えーと……キングパスタ号とサンニー二家の歴史?」

「その本には二千年も前から航海の知識と経験が書き足されているんだ。……まあ、ボロくなるたびに写本しているから本の素材自体はまだ新しいんだけどな」

「ほー、こりやすつけえナ」

「どのページもすごい細かく書いてあるね! へえー、女の船長さんもいたんだ! ……えっ? 二十三代目の船長さんはパスタの食べ過ぎで死んだ? 二十四代目は魚の毒抜きを忘れて。二十五代目はパスタを喉に「そこまでにしておきなさい」

これ以上親愛なるサンニー二家の名誉が損なわれないようにカレンから本を取り上げてシモーネに返す。

カレンはあれこれ質問をしながら船長室を一通り物色して、それから満足した様子でドアを開けた。

「また来るねー！」

「おう！」

「大つ変お邪魔しました！　こら、待ちなさいカレン！」

阿呆は船長室を出て逃げるように甲板に駆け下り、そして一切の躊躇なくマスト上の見張り台を目指してロープはしごを登り出した。

「待てカレン！　一人で行くと危ないぞ！」

「あたしより遅かったら罰ゲームねー！」

大の大人でも脚が竦みそうなものを猿のようにするすると登っていく。

俺が追いつくまでに見張り台のすぐ下まで登り、手すりに手をかけようとしたちようどその時、カレンにしては運悪く突風が吹きつけ――

「きゃ」

俺の血や解体ショーを見る時とはまた違う、普通の女の子らしい悲鳴を出して宙に放り出された。

いくらカレンが子供相応の体重であると言えど、あの高さから落ちたら卵のように割れて中身が飛び出てしまう。

それだけは阻止せんと筋力の制限を解いて跳躍――

「――《汝蛇ナレバ蝮局ヲ卷ケヨ》」

そこに頭上からの声。

俺の両手がカレンに届くより早く魔法の言葉が唱えられ、ロープが生き物のように動いてカレンを巻き取った。

「先輩！」

そして空中には自ら飛び出たアホ一人が取り残された。

急な弧を描いて海面に向かう軌道を今更変えることはできない。

では俺は何をすればいいか。

答えは簡単、芸術点を稼ぎに行くのだ。

「ふっ……」

前方五回ひねりを決めて頭から華麗に着水。

しかし身体がなまっていたせいかな。

水面に対して垂直になりきれず、ボチャンと無駄な水飛沫が上がっ

てしまった。二点減点。

海の住民にご挨拶してから浮上、フナムシの如く船の側面から這上がり帰還。

船べりで真っ先に出迎えてくれたラクサが風の魔法で乾かしてくれた。

「……いい飛び込みだったと思うぜ」

「いや、あれじゃダメだ。せいぜい七点つてところだ。……さて」

チラリと見上げると、見張り台からこちらを覗いていたカレンがさつと顔を隠した。

どうやら調子に乗りすぎたことを自覚できているらしい。

なればちよつとしたお話と夕食を三品抜く程度で勘弁してやろう。

「オレの主様をあんまりいじめないでくれヨ」

「カレン次第だ」

カレンと同じことをしては面目が立たないため、絶対に落ちないよう一つ一つガツシリとロープを掴んで登っていく。

そして今度こそ見張り台に到達した。

「ミーちゃんさん、ありがとうございます。あの間抜けを助けてくださって」

「……大したことはしてない」

まずはカレンの命を救ってくれた恩人に深々とおじぎを。

しかしミーちゃんに食事処で会計をしていた時のような営業スマイルは無く、どこ吹く風とこちらを見向きもせず前方の海を観測していた。

あとで何かしらのお礼をしよう。

「さあ、私の愛しい娘よ。隠れていないで出てきなさい」

まさかバレないとも思っていたのか。

ミーちゃんの後ろで毛布に包まれている何かに声をかける。

もぞりと動いて、それから顔を出さずに返答した。

「……怒らない？」

「怒ってないよ。いつものことじゃないか」

カレンの不注意や突飛な行動によって、俺の首が取れたり全身がバ

ラバラになったりするのは慣れたものだ。

その程度で怒っていきりがない。年中怒り続けることになる。

「ごめんなさい」

「うんうん、いい子いい子」

素直に毛布を脱ぎ捨てて謝った賢い子をそばに寄せ。

俺の右手首からカレンの左手首にロープを結び付けた。

「えっ……なにこれ。許してくれたんじゃない……」

「もちろん許しているとも。許しているから牢屋には入れずに、俺から三メートル離れた場所までは好きに行かせてあげるさ」

別に俺の命が何度絶えようが目減りするものではないし構わないが、カレン自身に危険が及ぶような行いは見過ごせない。

「う……」

「それと魔界に着くまで食事は一日三食、おかわりは日に一度まで」

「嘘つきいいいいっ!!」

悲痛な嘆きが響き渡り、この船で羽休めをしていたラクサ以外の全ての鳥が飛び立った。



ミーちゃんに「うるさい。親子喧嘩なら下でやって」と、魔法のロープでぐるぐる巻きにして吊り降ろされてから早五分。

船上での探索をざっと終えて、我々は船内へ潜り込んだ。

日中なので灯りをろくに点けず、しかも外から差し込む光は無いに等しいので船内の廊下は薄暗い。それが宝の隠された迷宮なんぞを彷彿させるようで、カレンの心拍数が上昇した。

「いいかカレン? 心が飛び跳ねようとも決して身体は飛び跳ねず、落ち着いて、静かに、安らかに見学するのだ」

「うん」

「いいな? 絶対に走り回ったりするんじゃないぞ?」

「分かってるって!」

「これはもしもの、まずありえないような話だが。」

はしやいだカレンが船内を駆け回りそのままの勢いで火薬庫に突入し、運悪く滑って転んで火花が飛び散って火薬に引火、大爆発を起こして船が海の藻屑となってしまう。

なんてことがあるかもしれない。残念ながら絶対には言い切れない。

だから念押しして言いつけた。

「あとはそうだな、足音も消しておこうか」

「足音も？」

「ずいぶん大げさだな。まあ、ワケはだいたいわかるけどヨ」

それから消音の魔法をかけて足音が鳴らないようにした。

これはドタドタと足音を立てて仕事の邪魔をしないためにするのが半分で、もう半分はグーちゃん対策である。

どういうわけか俺はあの大柄な乙女に目を付けられている。

できることなら一度も遭遇せずに探検を終わらせたい。

(これは試験だ)

(試験?)

壁に張り付いてコソコソと移動しながら、子供をその気にさせる口上を囁く。

(そう、一人前の立派なテンノになるための試験だ。俺が今まで教えてきた技術を用いて、絶対にバレないようにするのだ)

(りょーかい！)

(へー、二人はテンノだったんだ)

不意に続いた第三の声。

それはラクサのものではなかった。

ぐるっと首を一周回したが前にも後ろにも、右にも左にも声の主は見当たらない。

ましてや足元に寝転がっているわけでもなく、消去法で残った選択肢はというと……

「ひびき！」

声の主を発見したカレンはまるで魔獣にでも出会ったかのようにびくりと身を震わせ、俺の右手首をギュツと握ってきた。

しかし天井に張り付いているそれは魔獣ではなく生身の人間である。

グーちゃんほどではないが、女の身で恐ろしく鍛えられている。

「ケーちゃんさん……ですよね?」

「はい、ケーちゃんです!」

黒い瞳を輝かせ天真爛漫な笑顔をのせて答えた彼女は、三人組の中で最も普通の女の子らしい明るい子だ。

いや、天井に張り付いている時点で普通の女の子という範疇から外れてはいるが。

「そ、そんなところで何してるの?」

「何って、掃除だよ? それよりも二人共、魔界に行くんだよね!? テンノだっていうからには何かの任務!? どの国に頼まれたの!? もしかして前にも魔界に行ったことあるの!? ……あつ、ごめん! そういうの聞いちやダメなんだよね。わたしもミーちゃんに個人情報話すなって言われてるし」

天井から木の葉のように音も立てずに着地し、我々にぐいつと詰め寄って嵐のようにまくしたてて勝手に反省した。

この子はなんといかとても純粹でまばゆく輝いて見える。

強いて言うなら……カレンの同類だ。

「それで結局、二人は何してるの?」

「実はカレンが船の中を見学したいと」

「見学じゃなくて探検!」

「そうだったんだ。じゃあ、わたしが案内してあげるよ!」

「いいの!」

「いやいやそんな、仕事の邪魔をするわけには」

「いいのいいの、ほとんど終わってるから」

ケーちゃんは手に持っていた雑巾を懐にしまい、代わりに灯りを手に取った。

「カレンちゃん! この船にはこわーい魔獣が住み着いているかもしれないから、お姉さんにちゃんとしてきてね? それじゃあしゅっぱーっ!」

「しんこー！」

もしもカレンに姉がいるとしたらケーちゃんのような子なのだろう。

横並びになって歩く二人は歩幅といい体の揺れ方といい、顔つきは違えど仕草や雰囲気は不思議と似通っていた。

二人の姿は大変微笑ましく思えた。たしかに微笑ましく思えたのだが……

(まさか、妬いてるのか?)

(少し……な)

(先輩のような面倒くさい親を持ってしまった子は大変だな)

(我ながらそう思うよ)

第十七話 「恋敵の頭を踏み潰すくらい感覚」

「ここが食糧庫であそこが火薬庫」

「こんなに食べ物を積んでたんだ！ 火薬庫も見えていいの!？」

「火薬庫は危ないからちよつとだけだよー」

親切なケーちゃんに船内のほとんどを案内してもらった。

今のところ恐ろしい魔獣などは住み着いていなかった。しかしこの船には恐ろしい乙女が乗っている。

そして残るはあと一部屋のみ。

何かあったら骨くらいは拾ってやるヨと、ラクサが頭の中に語りかけてきた。

「次が最後の部屋だよね！ お宝とかあるかなあ!？ 開けていい!？」

すっかり彼女の存在を忘れているカレンが躊躇いなしにドアを開け、部屋の奥で佇んでいる人物に気付いた途端にサアッと血の気を引かせた。

姿勢正しく読書をしていたのは、相も変わらずフリフリの給仕服を着て厚化粧を施した筋骨隆々の大男である。

乙女を自称する彼女の名はグーちゃん。ちなみに読んでいる本の題名は『恋愛教本第三巻：妻帯者の落とし方編』とある。背中に嫌な汗が滲んだ。

「あらあー！ 皆そろってどうしたの？ お腹でもすいたかしら?..」

「カレンちゃんと一緒に船を探検してたんだー。あとはこの部屋だけだからグーちゃんに任せるよ」

「そういうことね、任されたわあん」

「ちよつ」

カレンの口から「待って」の一言が出る前にケーちゃんはドアを閉めて出て行った。

「ほらほらそんなところに立ってないで、こっちに座って座って。お菓子もあるわよお。コーヒーは飲める?..」

「ひゃ.....はい.....」

逃げ場を失ったカレンは蛇に睨まれたカエルという言葉をまさし

く体現していた。

されるがままグーちゃんの前に置かれた木製の丸椅子に座らされ、甘く香ばしい焼き菓子とコーヒーを渡されたにもかかわらず口へ運ぼうとしない。

毒入りを疑っているわけではないだろうが、グーちゃんへの本能的な恐れから氷漬けにされたように停止した。

わかるよわかる。俺だって得体の知れないものは怖い。

普通のオカマ相手なら何も問題はないけど、この人からは普通ではない強さを感じ取れる。下手な発言をすれば即座に組み伏せられて、しばらくの間忘れられないやり方でねっとりじっくり吸い尽くされて殺されるかもしれない。

だから怖い。

「……カレン、おじぎを忘れてるぞ」

「あ、ありがと。グーちゃん……さん」

だからといって二人揃って静止してはそれこそグーちゃんの機嫌を損ねてしまう。

人生には幾度も、その先にどんな怪物が潜んでいるやもしれぬ闇の中を突き進まなければならぬ時がある。それが今だ。

「んーもう、そんなに改まらないでちょうだい！ 楽しくおしやべりするわよ！ カレンちゃんがしてきた旅の話、ぜひとも聞きたいわあー。もちろん、話せることだけでいいわよおん？ 秘密は乙女を魅力的にするものだから」

「えつと、じゃあ……リボンレイクって国の話から——」

見目麗しい乙女と野獣の貌をした乙女のお茶会が開かれた。

傍から見れば水と油のような組み合わせだが、油の方が実は清水であつたため二人はすぐに打ち解けて話を弾ませた。

「ロマンチックねえ……。アタイもそんな体験してみたいわあ！」

「グーちゃんも今度一緒に行こうよ！」

カレンの中では当初の印象であつた触れてはいけない不気味な化け物から、よく遊んでくれる親戚のお姉ちゃんくらいには変わっているだろう。俺もそのように考え直した方がいいのかもしれない。

しかし、だ。

グーちゃんとカレンが仲良くお花を摘みに行つた隙に恋愛教本とやらを開き、葉の挟んであつたページに「父親を籠絡するにはまずは子供と仲良くなること」などと書かれているのを見てしまったばかりに警戒を解くことができないう。

どうか冗談であつてくれ。

直接聞くわけにもいかず、どうしてもグーちゃんに対する疑念が晴れないままできると。

「あら、なにかしら」

カンカンカン、と。

壁から突き出たラツパのような鉄の管より金属を叩く音が鳴り出した。

「はい、ミーちゃん、どうしたのー?」

グーちゃんがすぐに寄つて管の蓋を開け、そこに声を送り返す。

どうやらそれは伝声管で、マスト上の見張り台に繋がっているようだ。

『風が止んだ。しばらく漕いで』

「りよーかあい」

仕事の時間がやってきたわと自身の菓子とコーヒーを片付け、それから床板の一部を取り外した。

そして床下から現れたのは座席と手持ち部分とあぶみのような足掛け、それに車輪のついたカラクリだ。物好きなドゥーマンが稀に開発する一輪車や自転車といった乗り物に形がよく似ている。

「なにそれ?」

「これはねえ、アタイも詳しくは分からないんだけど……船の尻尾に水車みたいなのがついてて、こうやって漕ぐと水車が回つて船を動かせるのかなんとか。やってみるう?」

「面白そう!」

まずはお手本にとグーちゃんが何回か漕いで、それからカレンに場所を譲つた。

「えーっと、ここに足をのせて……アレ? 動かない? もしか

して壊れちゃった?」

「たぶん力が足りてないわね。体重をかけて思いつきり漕がないとダメよ。思いつきりよ思いつきり。恋敵の頭を踏み潰すくらいの感覚よおん!」

「ふんっ!! んぐぐぐ!」

カレンは言われた通り、手持ちをギュツと握って踏み潰すように立って漕いだ。

歯を喰いしばり顔を真っ赤にしてできる限りの力を籠めてはいるのだが……残念ながら車輪はピクリとも動かず。

「カレンちゃんならできるわよおん!」

「嬢ちゃん、今こそ意地の見せどころだぜー!」

「頑張れ頑張れカーレーンツ!」

「……あアツ!! もう無理いッ! 選手交代! アレンの番!」

「えー、俺がやるの?」

相当の脚力を使ったふらふらになったカレンは、カラクリから離れて女の子らしく背中から大の字に倒れて。

早くやってよ、お父さんらしいところを見せてよ、と口を開けて寝ながら視線を送ってきた。

「……どれ」

ここでいっちょ頼りになる父親だということを再認識させよう。

しかし汗の一つも出さずに漕いでみせては色々とマズい。マズいので、

「これは中々……キツイ……なっ」

急速に体温を上昇及び発汗、ひーひー声を出しながらゆっくりと漕いでみせた。

いくら辛そうでも、いくら緩やかでも、漕げさえすればそれでいいのだ。

カレンのような娘っ子は当然のこと、そこらの力自慢の男でも一時間かけて十回漕げれば大したものなんだから。

だから俺はあと十回ほどゆっくりと漕いで終わりにしよう。

そのような考えはたった一言で消し飛ばされた。

「あら？ そんなもんだったのお？」

「……………はい？」

「おつかしいわねえ。アタイの見立て違いだったかしら？ それともその身体はただの飾り？」

挑発。

大袈裟なため息を交えたあからさまな挑発。

乗るべきか乗らないべきかでいえば、普通は乗らずに無視すべきもの。

ただしそれを選択した場合、年長者としての威厳と娘から信頼を少々失う。さらに言えば、かつて俺の常勝を心から願ってくれた者達を裏切ることになる。

「……………いいでしょう」

その挑発に全力で乗ってやろうじゃないか。

筋力を解放できる人間なんて探せば意外と見つかるものだ。

この程度バレたところでなんてことはない。

五千年の研鑽を見せてやる。

「んふっ。アタイの目に狂いはなかったようねえん」

グーちゃんがなぜか投げキッスをしてから床板を外すともう一台同じものが現れた。

ずつしりと岩のように威圧感のある肉体が真横に並ぶ。

「これは見ものだナ」

「競争するんでしょ!? 先に何回漕いだ方が勝ちなの？ 十回くらい？」

「十回じゃあ差がつかないわよ」

「百……………いや——」

「——千回」

完成された肉体を持つ者同士、考えることは同じだった。

◆? ◆? ◆?

結論から言ってしまうえば、勝敗は曖昧なものとなった——。

「それじゃあ第一回早漕ぎ対決よーい……始めっ！」

使っているのは長い年月をかけて磨き上げてきた肉体と筋力の制限を解除する技術、あくまで人間ならば誰でもできることのみだ。

だから常に限界の力を出し続け、不死者の再生力で壊れたそばから骨と筋線維を修復することはできない。

つまりは長距離走と同じようにペース配分を考え勝負所を見極める必要がある。

まずは様子見だ。

「あらあ、アタイについてこれるなんてなかなかやるじゃない」

「温存して行くせによく言うよ」

「それはおあいこ様でしよお？」

開始三分、グーちゃんは一秒一漕ぎ以上のペースで漕ぎ続け、俺が百五十に達した時には二百を超えていた。

どの程度かは分からないがこの者も枷を外せるのだろう。

しかも純粋な体格と筋肉量に関しては圧倒的に俺が不利だ。

当たり前のように負けている未来がよぎった。

五割の力を解放。

「おっ、先輩の出力が上がったナ」

「どっちも頑張れーっ！」

「やっぱりまだまだ温存してたじゃない。アタイもあげちやうわよおん！」

「……そう簡単には引き離せないか」

俺もグーちゃんもペースを全く落とすことなく漕ぎ続け、両者共に五百回を超えたあたりで。

カンカンカんと、伝声管が鳴り出した。

「カレンちゃん、蓋開けてくれるう？」

カレンが一旦我々から視線を離して伝声管の蓋を開けて「はあいミーちゃん」と、誰かさんの声真似をして届けた。

『もう十分速度が出てる。止めていい』

通話の相手がグーちゃん本人ではないと気付いているだろうが、そ

た。

「……あれえ？」

「……あらあ？」

船が鯨と衝突したり座礁したわけでもないようだが……。

薄々嫌な予感を感じながらも再び足掛けに足を乗せて力を籠める。

「あつ」

「あらやだ」

今までの牛や象にでも頼りたい重さはどこへやら、全く力を入れずとも漕げるようになっていた。

競争相手の方も同様である。

「ねえどうしたの？ それよりも今の音何？」

「ちよつと漕いでみるといい」

まだ現状を飲み込めていないカレンに席を譲り一漕ぎさせる。

「あつ」

何が起こったのかを理解して、表情が固まった。

「……これ、大丈夫なの？ 直せるの？」

「んー、たぶん大丈夫よおん。前にもケーちゃんが漕ぎ過ぎて壊したから」

「ならないが………何？ ケーちゃんが壊しただと!？」

「本当よ？」

俺とグーちゃんが本気になって壊せたものを彼女が一人で壊したというのは、ここ数週間で最も衝撃的で信じがたい話だ。

しかしそれを詳しく問い詰める前にドアが音もなく静かに開かれ。

ほとんど無表情ながらも、怒りの感情を身体の端々から発する女性が現れた。

「……は、はあいミーちゃん」

「こ、これはこれはミーちゃん様。先ほどは娘を助けていただき誠にありがとうございますございます」

「み、見張り台にいないの……？」

「――《資^{タカラ}モ産^{ウツ}モ凍^イテ結^{ムス}ベ》」

どこにも逃がさないと、我々は問答無用で首から下をまとめて氷漬
けにされ。

「私を無視して何をしていたか、全部話してもらおうから。……あとそ
れ、また壊した？」

めちやくちや怒られた。

第十八話 「吐きたい？ 吐きたくない？」

陸から離れて早いもので七日が経った。

そろそろ緑色が恋しくなってきたが、封魔大陸までこれでようやく半分といった具合だ。

「よおしお前らア！ 今日の日頃には魔の海域に突入だ！ 気を引き締めてかかれエツ！」

「はあい船長！」

「楽しみだねカレンちゃん！ ミーちゃん！」

「うん！ すごい楽しみ！」

「……ん」

乗船者の半数がまるでハイキングにでもいくような気分にいるが、とても心配だ。

船で魔海を航る時は必ずといつていいほど何かあるのだ。これは何百何千回と実際に航海して、ほぼ毎回大なり小なり死んだり死にかれたりした上で発見できた経験則だ。

……ではこの七日間は何事もなかったかというところ、そういうわけでもない。

「おいカレン。浮かれるなどは言わないが、少しくらいは警戒心を持っておくんだぞ」

「大丈夫だってー。おとといも海賊に襲われたけどなんとかなったじゃん」

そう、実はこれまでに三回ほど海賊に出会っている。

初回は修理が完了した漕ぎ機の推進と、ミーちゃん・ラクサが共同で大風を起こしてくれたので逃げおおせた。

二回目は島の陰に潜んでいたのに気付かず接触してしまったのだが、まず最初に船の名前と目的地を尋ねられたので答えると襲ってはこなかった。海賊達の中にキングパスタ号の伝説を知っていて縁起を気にする者が何人かいたのだろう。

そして一昨日の三回目。

『クソツ、待ち伏せされてたか!』

いくつも島々の散在する海域を抜けたところで四隻の海賊船に囲まれてしまった。

『俺らは虹色のウミウシ海賊団だ。船長はどうだ?』

『俺がキングパスタ号船長、シモーネだ。大したもんは積んじやないが大切な客人を運んでるんだ。どうか邪魔をしないでほしい』

四方から大砲を向けられた状況で、サンニー二家の魂を受け継いだシモーネがものおじせず、しかし穏便に済ませようと交渉する。

『どこに行くつもりだ?』

『……魔界だ』

『魔界だあ? 寝ぼけてんのか?』

『せ、船長! この船は本当にあの伝説の……』

急いで駆け寄って来た船員から詳しく話を聞き、海賊団の船長は驚きの表情を浮かべた。そして、

『俺あの話が子供の頃から好きなんだよ! シモーネさん、握手してくれ!』

『あ、ああ』

わざわざ梯子をかけて直々に乗り込んできて、憧れの人に握手だけして満足した様子で自分の船に戻った。

なんだ話の分かるやつでよかったと、シモーネがホツと胸をなで下ろしたのもつかの間、

『よし! それじゃあ気も済んだし………金目のもんと女を全部よこしな。それで通してやる』

交渉が決裂した。

(……すまないアレクさん、お前達)

(いえいえ、あの手の輩は元より略奪しか頭がないですから。お気になさらず)

(女が欲しいようだしアタイが行ってくるわあん! ケーちゃんは右のをお願いね)

(右ね、分かった!)

(……私は左)

(アレンちゃん、後ろの船を頼めるかしらあ?)

一応客人なのだが勝手に戦闘員に組み込まれていたもので、諦めて領いた。

『おーい、何こそ話してんだ早くしろー! あー、そのでけえオカマはいらねえぞ』

『細かく切つて鮫の餌にしてやれ!』

『海に投げ入れちまえー!』

刹那、グーちゃんの頭部からブチリという音。

『オイオイ、だからお前は呼んでねえつて! 帰れ帰れ!』

麗しの乙女は梯子を使わずに正面の船に飛び移り、咆哮。第一マストに蹴りを入れた。

よつて巨木から作られたマストが飴細工のようにポキリと折れ、少しの間を置いて悲鳴と怒声が各所から沸き起こる。

それが開戦の合図となった――。

「あたしも見たかったなあ……。みんな凄かったんでしょ?」

「ああ……」

カレンはラクサに任せて船内に隠していたので彼らの戦いぶりを知らないが、アレは中々に人外じみていた。

怒り狂うグーちゃんは自分を噛つた者を片っ端から殴り飛ばし。

ケーちゃんもモツプ片手に単身乗り込み、掃除の片手間に戦闘を行つてゴミと海賊をまとめて海に掃き捨て。

ミーちゃんはその場でキングパスタ号に向けられている大砲を全て詰まらせ、それから波を操つて海賊船をまるごと一隻沈めてしまった。

俺がダラダラと話し合いをしている間にさくつと終わらせていたのだ。

「一番遅かったせいで三人にまじまじと見られながら応援されてね。けっこう恥ずかしかったよ」

「アレンよりも早く倒しちゃうなんて……ケーちゃん達つて絶対に普通の人じゃないよね。なんでこの船にいるんだろ」

「さあね」

カレンだつて明らかに普通の側ではないよとは言わずに流した。いったい彼女達が何者なのか、これまでの言動から薄々見当はついている。

しかしそれを直接聞いて確定させ、さらにこちらの身の上を知られてしまったら敵対することになるやもしれぬ。

お互いに知らないまま別れた方がいい。

「おおい旦那ーっ！」

今日付けでしばらくお預けとなる平凡な海をぼおーつと眺めていたら、朝礼の後に船長室へ戻ったシモーネが海図とあの分厚い本を携えてやってきた。

「どうしました？」

「これからの道順を決めてもらおうと思つてな。今はこの辺りにいるんだが、魔海に入つてからの道順が三つあるんだ。右回りとかのまま真つ直ぐ行くのと左回りの三つだ」

「おまかせしますよ。あなたの腕の良さは知っていますから」

「いや、こればかりは俺の一存じゃ決められねえ」

シモーネは海図を丸めて脇に挟んで、航海の知識が詰まった本をペラペラとめくり始めた。

そしてとあるページを開けて俺とカレンに見せた。

「一つは『船の墓場』と呼ばれる、海生の魔獣がうじゃうじゃいる路。

一つは『船の大墓場』と呼ばれる、魔獣はほとんどいないが暴風が吹き荒れ雷が降り注ぎ年中大しけの路。そして最後の海路では濃い霧が発生しやすい」

「なるほど」

なるほどと言いつつ先の二つは知っている。

ただ、最後の霧が出る海路とやらは見た覚えも聞いた覚えもない。記憶が正しければその海路は普通に海の魔獣が生息していたはずだ。

「その中なら最後のが一番安全じゃないの？」

「オレも嬢ちゃんに賛成だ。羅針盤があるしずっと霧の中でも大丈夫だロ？」

「実はその霧が曲者でな……。霧の中にいる間は羅針盤が狂って方角が分からない。しかも、だ。霧はまるで生き物のように船を捕食、正確にはやすりのように木材を削り取っていくらしい。そして最後には部品一つ残らないから墓場にすらならない。言うならば『船の調理場』ってどこか」

「なにそれ……。ゼツタイ自然現象じゃないでしょ」

カレンの言う通りどう考えても自然現象ではないし、四千年の見聞にもそのようなものはない。

大方俺が封印されている間に創られた魔獣か魔法の類だろう。

あとで一人きりで観に行くとしよう。

「なら二つしかないな。カレン、どっちがいい？ とんでもない悪天候か魔獣か。ちなみに個人的には魔獣の方がオススメだ。うじゃうじゃいるといつても三爪以上の魔獣は滅多に出ないからな。ですよね船長？」

「あ、ああ。そう書いてあるな」

「悪天候の方は運が悪ければ落雷が直撃して海の上なのに炎上するか、大しけによってパンケーキのように船をひっくり返される。もつと運が悪ければ黒龍嵐に飲み込まれて船もろとも砕け散る。それとたぶん船酔いして何度も吐くぞ。……って、書いてありますよね？」

「その通りだが、妙に詳しくないか？ まるで実際に見てきたように」

「いやいやそんな！ 祖父の受け売りですよアツハツハツ」

それもそうかと、シモーネは納得して口をつぐんだ。

「それでカレン、どっちにするかはもう決まっているな？ 吐きたい

？ 吐きたくない？」

「……吐きたくない」

我々は比較的安全な『船の墓場』へ向けて舵を切った。

第十九話 「アタイはタコ」

魔界と呼ばれる封魔大陸に等しく、近辺の魔海も老若問わずに恐れられている。

魔海から最も遠い中央大陸中部の山岳地帯でさえ、いつの時代もワガママを言う子供に対して『魔海に放り投げちまうよ』なんて脅し文句が常用されているのだ。

当然そのような場所に住む人々のほとんどは魔海に行くどころか、死ぬまで海を目にすることだってない。陸生の魔獣を見る機会もまぶないだろう。

だけど誰しも知っている。

子供の頃は絵本を読んで、大人になってからは歴史書を読んで。

親の親のそのまた親の代から語り継がれる話を聞いて。

はたまた記憶の螺旋に刻まれた恐怖が悪夢を見せて。

世界が創始されてからの長い歴史で幾度も魔界征伐軍やら世界統一連合軍やらが編制され、その多くが土を踏めずに散ったこともまた周知の事実だ。

兎にも角にも魔海は恐ろしや。

それでも渡るといふのなら、矢雨の中を駆け抜けるのと同等の覚悟がいる――。

「なんか、平和だねー」

「そうだなあ」

「魔獣、いないねー」

「いないなあ」

魔の海域へ進入してから六日経った。

あと半日もしないうちに封魔大陸へ到着するという。

……そう、六日も経過しているのだ。いくら海が広いといえど「船の墓場」で海賊一人魔獣一匹見当たらないのはおかしい。

だからといって悪天候に見舞われているわけでも未知の霧に包まれているわけでもないの、船長が海路を間違えたなんてことでもない。

ただただ静かで平和。

遊覧船をいかせても問題ないほどに大人しい海が続いている。「しっかしこうも静かだと逆に薄気味悪いぜ……。海竜の群れでも出たらどうするヨ?」

「そういうのは出てから考えればいいんじゃない? ねえアレー、なんか面白い話してよおー」

「いいぞおー」

船旅を満喫するカレンに合わせて表情を緩めながらも、神経だけは常に尖らせてある。

しかしいつまでたつても魔獣の群れどころか影一つ視えない。

食い散らかした魚の肉片だとか脱皮した後の抜け殻だとか、そういった痕跡すらどこにもない。

この海域からは完全に撤退したと言わんばかりの……。

「ナア、先輩は過去に同じような状況にあったことがないの力?」

「もちろんあるさ」

動植物にしる魔獣にしるヒトにしる、生息地から消え去る理由は基本的に二つ。

住めなくなるか、滅びるか。このどちらかだ。

災害などによる環境変化によって移住を余儀なくされるか、移住をする暇もなく死に絶えるか。

もっともそれはヒトや弱い動植物の話であって魔獣はちよつとした環境変化など気にも留めない。

「きやつらが住処から消え去るのは共食いでましたか、強者に狩り尽くされたか」

「なるほどナ」

「強者つてのはまあ……。俺とか、四爪五爪の怪物」——ねえちよつと!

何よアレ!?!」

話の途中で何かに気付いたカレンが強く袖を引っ張ってきた。

あれあれと指さす船の前方、視力を極限まで上げてようやく見える遠方に、うごめく影が一つ。

「あれは島……。じゃねーよナ」

「少なくとも生きてはいるな」

「もしかして下の方にあるのって口なの……?」

「カレン！ 今すぐ船長に知らせてきてくれ」

「わかった！」

当代の魔王が穏健派なのか、もしくは魔界内部がごたついているのかは知る由もないが、この海域を封鎖するために配置したものだろ
う。

アレの他に魔獣が全くないことから、敵味方問わず近づく者を皆食らう系の危険な存在に違いない。

「どーした先輩？ ワルい顔してるぜ」

「……くく、やっとならしくなってきたな」

心の底に封じ込めていた、愚かな雄の一面を思わず呼び起こしてしま
うくらいには――。

「さて、どーすつか。皆好きに意見を出してくれ」

全員が望遠鏡を通してアレを認識した後、一旦停泊し船長室にて作
戦会議が開かれた。

テーブルに広げられた海図の上にはあの魔獣とキングパスタ号代
わりの駒が二つ置かれ、それを取り囲んで皆一様に真剣な顔をする。

「はいはい！ 質問！ あれってタコ？ それともクラゲ？ あた
しはタコだと思っただけど」

手始めにうちの娘が糞ほどどうでもいい問いを提示した。

しかし一人としてどっちでもいいだろとは口に出さない。

「わたし的には断然クラゲだね！ ミーちゃんは？」

「……私もクラゲ」

「アタイはタコ。どっちにしても毒とか持ってそうねえん」

「船長、その本にはあの魔獣について何か記載されています？」

「ああ。一応アレに似た魔獣が載ってはいるが……あんな巨大じゃね
え。せいぜい五メートルくらいだと書いてある。それと俺はクラゲ
だ」

「それなら新種か変異種でしょうね。……タコで」

結局タコかクラゲかも決めきれず、有益な情報を持っている者もいなかったたので、ひとまず彼の魔獣をクラージェンと呼称することになった。

茶番はこれくらいにして、真面目に対策を考えていく。

「はい！ はいはいっ！」

「おう、名案が浮かんだか嬢ちゃん？」

そしてまたすぐにカレンが手を挙げた。

「おいカレン、ふざけた意見だったら三分間発言を禁止するからな」

「ふざけないよ！ 大回りして避けるつてのはどう？」

「あー、二点。十点中ね」

「ちよつと酷くない!? 直接戦って船が壊されでもしたら大変だからとか、ちゃんと考えたんだけど……」

「大回りした先で別の個体がないとは限らないだろう？ そもそもクラージェンが意図的に配置されているとしたら抜け道は残されていない。下手に大回りをしようものなら挟み撃ちに合うかもしれないぞ。……ただ、船を壊されないようにするという考えだけは正解だ。おおよしよし、いい子いい子」

「やっ、やめてよー！」

小さな頭に片手を乗せ、わしやわしやと撫でる。

「ウフフ、親馬鹿ねえん」

「いつもこんなんだぜ」

「……………いいなあカレンちゃん」

「全然よくない！」

周りからの微笑ましい視線と、それを受けて恥ずかしがるカレンをお構いなしに心ゆくまで続けた。

「よし、こんなところか」

十分補給できた。

これで仕事ができる。

「うう……次からはもっと軽くしてよ……。それとさつきは偉そうに言ってたけど、アレンは何かメイアンがあるの？」

「もちろんあるとも。船長、小船を出してもらえます？」

「それはいいが……まさかアレに近づくつてののか？」
「ええ」

不安を持たせないようにはかんで答え。
何をするかまでは口に出さず、降ろされた小船に飛び乗った。

しばらく全力で小船を漕ぎ続けて、クラージェンの触手が届かないギリギリのところまでやってきた。

おかげでいかにクラージェンが巨大かをしかと認識できた。

「あらやだあ、おつきい。ちよつとした要塞じゃない」

「キングパスタ号の二、三隻は腹の中に収まりそうだ」

「で、どうするのお？ 正面からやるわけ？」

漕ぎ手として一緒に来てくれたグーちゃんが真面目な声色で訊ねる。

「ケーちゃんミーちゃんならまだしも、アタイとアナタじゃどう頑張っても無理よおん？」

「ああ」

戦艦を一飲みにできるこの魔獣は五爪、とまではいかないが四爪上位……準五爪とも言うべき神話級の怪物だ。

特注の武器か魔法を無制限に使えるなら話は違うが、ステゴロで正面からやり合おうものなら命が百あつても足りない。……まあ、武器や魔法を使っても何回かは死ぬだろうが。

「実はこう見えても当代一のテンノでね」

「道理でいい身体してると思つたわあん」

「ならばテンノらしく潜入工作をしようかなと。要塞崩しには定評があるのさ」

ここまでありがとう、と一言礼を残して海へ飛び込んだ。

この場で魚に変化するわけにもいかないの、ヒトの姿で波に打たれながらも必死に泳ぐ。

そして自分のではない水を掻き分ける音も聞こえてきた。

振り向かずとも、音の大きさと息遣いから誰かは分かる。

「本気か？ 下手したら死ぬぞ？」

「あのタコを捌けはしないけど、攻撃を捌くくらいはできるわよ」
「……頼らせてもらおうぞ」

俺の泳ぎにピツタリとついて来れる者がそこまで言うのだ。
信じるほかない。

「来るぞ」

クラーゲンがついに我々二人を駆除すべき虫と認識し、丸太のようにぶつとい触手を振り上げる。

「うおっ！」

「やあんっ」

害虫二匹を潰さんと叩きつけられたそれは、まるで大砲が着弾したのと相違ない水しぶきと轟音を生み出した。

「平気か!？」

「これくらいならなんとかね。ほら次、来るわよおん」

子供が打楽器を叩くように、クラーゲンは乱雑に触手を叩きつける。

そして我々小さき者共は陸の上とは全く勝手の違う場所でそれに対応しなければならぬ。

俺はテンノ式水中矢避け術——くしゃみで身体が飛び跳ねるのを元に生み出された、体内で発生した力を一点に集約することによって水中でも瞬発的な移動を行う技術——によってどうにかやり過ごしているが、彼女はどうか。

「ッ!？」

余裕ができたので目を向けた矢先、グーちゃんに触手が直撃した。

「おい！ 大丈夫か!!」

「大丈夫よおん」

しかし彼女は何食わぬ顔で泳いでいた。
確かに避けきれなかったはずなのに。

「言ったでしょ？ これくらいなら捌けるって」

「……………そうか！ 柔の拳か！」

「あら、よく分かったわねえ」

またしても叩きつけられた触手を受けつつグーちゃんは答えた。
彼女が用いている柔の拳は流派によって差異はあれど、理論上は砲
弾さえも受け流せる強力な防御術だ。

ただ、あくまでそれは理論上の話である。

タイミング、角度、力加減のどれか一つでもズレてしまえば普通に
受け止めるよりも大きなダメージを被ってしまう。

だから柔の拳を修得しているとしても普通は格上相手にやらない
し、やれない。

しかしグーちゃんは柔の拳を極めていて、かつ気が狂っているので
続けることができた。

そして気付けばもうひと泳ぎ、キングパスタ号の尾から頭ほどの距
離まで詰まっていた。

「……だよなあ。やっぱりそうきたかあ」

だが、快進撃もここまでか。

片方の標的はハエのように攻撃をかわし、もう片方は当たっている
のにどうも潰した感触が無いことに違和感と不快感をつのらせ。

ついにクラーゲンは全ての触手を束ねて大きく振り上げた。

「アレはさすがに無理ねえ」

「俺も避けきれそうにないな」

今までの攻撃に比べて表面積と質量が何倍にも大きくなった一撃。

これまでと同じやり方で受け流すことは不可能。

これまでと同じやり方で避けることもまた不可能。

もはやこれまで——。

「——せえー……のツ!!」

だから我々は力を合わせた。

正確には足裏を合わせ、膝を曲げ、互いを蹴り飛ばした。

直後、元いた地点に水柱が隆起し轟音が空気を揺らす。

「今のうちだ!」

クラーゲンが水飛沫で我々を見失い、かつ今度こそ潰しただろうと

油断している間に距離を詰める。

同時に小指を千切り取ってヤツの頬のあたりに投げつけた。

――《ショウネンバクサイ掌念爆碎》

唱えずとも綴らずとも使えるほどに慣れ親しんだ魔法を一つ。

俺の愛しい小指は着弾と同時に爆発し、大人二人が同時に通れる大穴を空けた。

「こっちだ」

「ちよつとお！ 何よそれ!?!」

「テンノ専用七つ道具の一つさ」

「指みたいに見えたけどお？」

「テンノ専用七つ道具の一つさ」

第二十話 「まだまだ若いもんには負けんよ」

「――《^{ツッキ}月ノ^{カケラ}欠片ヨ我ガ^{モトテ}下照ラセ》」

唱えたのは闇征く者を導く言葉。

そして鮮明に浮かび上がったのはおどろおどろしい怪物の体内だ。心臓の弱い者や妄想癖の激しい者ならば、そこら中の体内構造が全身を溶かされながら泣き叫ぶヒトの姿だと錯覚して発狂するだろう。

しかしグーちゃんはそんなことよりも俺が魔法を使用したという事実に驚いていた。

「やだアナタ、ずっと隠してたわねえ？ 魔法も使えたなんて」

「優秀なテンノほど多くを隠しているのさ。何を隠したか本人でも思いつけないくらいにね」

出来ることなら魔法が使えるとはバレたくなかったが、仕方ない。

彼女が暗闇でも視える人間だとは限らないし、誤って胃に落ちて消化されてしまっても後味が悪い。

こうするしかなかった。

「こつちだ、ついてきてくれ」



「おおい二人共、揚げるぞ!？」

「いいわよおん!」

「よおしひつぱれエ!」

「オーエス! オーエス!」

「おーえす!」

しっかりと縄が括りつけられたことを確認してから、半裸の成人男性二名を乗せた小船が引き揚げられた。

「旦那もグーちゃんも、よく無事で帰ってきてくれたな! ……それでどうだった?」

神妙な面持ちで尋ねる船長に親指を立てて回答した。

「どうやら俺とグーちゃんの腕つぶしを知っているとはいえ、アレを

倒せるとまでは思っていなかったようで。

目をカッと開いて聞き直してきた。

「本当か!? あの化け物を退治したのか!? やったんだな!」

「本当よおん!」

「クラージェンを管理する者にバレたらマズいので殺ってはいませんよ。ちよつと脳みそをかき回したり、複数ある心臓を外したりして昏睡状態にただけなので。……あ、それはお土産です」

小船に積んである大玉がクラージェンの心臓だと説明すると、俺とグーちゃん以外の皆が無表情になつて沈黙した。

すでに距離を取っていたカレンはさらに三步下がって鼻をつまんだ。

「ほらほら! 今のうちにさっさと通り抜けちやうわよおん!」

「お、おお」

グーちゃんが率先して自分の持ち場に行き、他の者も皆この場から逃げるように自身の持ち場へ向かった。

そして残されたのは客人である我々と、中々の存在感を放つクラージェンの心臓だ。

「よいしょつ、と」

「待って」

俺がクラージェンの心臓を抱えて食糧庫に運び入れようとするのをカレンが止めた。

「なんだい?」

「それいらぬ。捨てて」

鼻を摘んだ状態できつく言い放った。

かなり険しい表情をしているので、いつものように小難しい言葉を並べて言いくるめるのはできないだろう。だから端的にカレンを魅了する言葉を一つ。

「これけつこう美味しいよ?」

「捨てるまでアレンとは喋らないから」

あつ、これはダメなやつ。

「はい捨てます」

この場に存在するだけで毎秒カレンからの好感度を削り取る忌々しい呪物を大海原に投げ入れた。

どんぶらことんぶらこと波に揺られて彼方へ流れていく。いつか君を愛してくれる人の元へ届きますように。

「これでよろしいでござんしょうか」

「……まあ、うん」

とりあえず鼻から指を離し会話を許してくれるようになったものの、距離はそのまま。

まだ何か疑念があるという顔をしている。

「なんで服着てないの？ グーちゃんもだけど」

「詳しく聞きたい？」

「べつに詳しくは」

「一から十までは聞きたくないと首を左右に振るカレンに全てを話した――」。

「いやー、アレは初めて見る魔獣だけどかなりの難敵だったよ」

あの巨体から生み出される破壊力はもちろんのこと、推定四爪の魔獣だけあって侵入者への防衛策もしっかりしており、強酸性の体液を噴出する触手や共生する魔獣達が待ち構えていた。ちなみに上着はその際に溶けて消えた。

まさしくちよつとした要塞であった。

生半可な実力の持ち主が侵入しようものなら、すぐさま栄養分に変えられてしまうだろう。

「だとしたらグーちゃんは相当ヤバいな。先輩についてこれたんだ口？」

「ごついが涼しい顔をして触手を捌いて魔獣を殴り飛ばしていたからね。あの若さであの練度の人間はそうそういるもんじゃない。ほとんど人外の域にいるよ」

あと二十年も経とうものなら俺と互角以上に殴り合えるだろうよ。

控え目に言っても百年に一人の才能を持った拳士だ。

「アレンがそこまで褒めるなんてよっほどすごいんだね」

ほへえー、と魚のように口を開けて感心なされたのは数千年に一人

の才を持つ小娘だ。

この子にカラテを教え込んでまだ一年と経っていないのに、足技を不使用のアルビンと互角にやり合えるレベルに達している。

常識外れの成長速度だ。

俺のような一般人からしたら気味が悪い。

誰しも上には上がいると言うが、これを超える才能は五千年生きて未だ出会っていない。

まったく未恐ろしいものだ。

◆?◆?◆?

時は夕暮れ寄りの昼下がりに。

昏睡したクラーゲンの横を恐る恐る通り過ぎたのがまだ鮮明に残っている時間帯だ。

「先輩、見えてきたぜ」

独り客室の天井に張り付いてトレーニングしていたところにカレンの遣いがやってきた。

ついに陸地が見えてきたという。

「おう旦那、いよいよだ」

舵の側にはカレンと船長が立っていて、手持ちの望遠鏡を貸してくれた。

覗くとたしかに水平線の上にどこまでも広がる陸地があった。

(……アレがそうだよね? 幻じゃないよね?)

(ああ、間違いない)

あれこそが魔の巢食う土地、我が第二の故郷でもある封魔大陸だ――

空がアカネ色に染まりきる前にキングパスタ号は陸地へ辿り着いた。

すぐさま中央大陸のものと相違ない砂浜に舷梯が下ろされる。

「荷物はそれだけか? 何か要り物があれば好きに持って行ってくれ

ても構わないが」

「大丈夫ですよ」

わざわざ全員で船から降りて見送ってくれることに。

今生の別れというわけではないが、ここまで命を懸けて送り届けてくれた船長に握手と熱い抱擁を。それと渡し賃代わりの宝石を気付かれないように忍ばせた。

カレンの方は「なぜか」馬鹿でかいリュックを背負っているケーちゃんやグーちゃん、リュックではなく杖を一本だけ背負っているミーちゃんにそれぞれ別れのハグをした。

「それで旦那、どれくらいここにいるんだ？ 帰りの船が必要だろ？」

「お気になさらず。帰りの便は竜でも拾いますから。……では」

またいつか会いましょう、と。

後腐れなく別れを告げた。

「またねーっ!!」

カレンが後ろ歩きをしながら縮んでゆく皆に手を振る。

しかし、船長以外の三人の大きさが途中から変わらなくなった。

「……あれ？ サツカク……じゃないよね？」

残念ながら錯覚ではない。

ニッコリと笑顔を張り付けた二人と無表情の一人が一定の距離を空けてついてきている。

なるほど、安全なところまで送り届けてくれるのだな。……うん。

「カレン、ちよつといいかい？」

「え？ なに？」

カレンを持ち上げて横抱きに。

「ふうー……。舌を噛むんじゃないぞ」

「ちよつと！ どういうこ——」

——夕陽に向かって駆け出した。

百秒後だ。

百秒後に太陽は完全に沈む。

「ねえ、いつまで逃げるのよ？ 誰も見てなくてもこの格好は恥ずか

しいんだけど……」

軽く一時間、距離にして五十キロ弱は走り続けている。

「ラクサ、奴らの様子は？」

「オレの見間違いないかなければピンピンしてるぜ。呼吸一つ乱れてねえナ」

「……そうか」

信じられないことに、彼女達は人の身で俺の走りについてきている。

しかもケーちゃんは大きなリュックを背負いつつ、さらにミーちゃんを横抱きして走っているのだ。

さすがは魔鬼を殴り殺したとされる剛の者と魔法学院を五百年に一人の成績で卒業した暴食の賢者、そして先の大戦で四将の一人を打ち倒した人族の希望といったところか。

「ここまでにしよう」

このままでは彼女達に負けると認めたくてではない。

認めたわけではないがこれ以上は本格的に夜になって危険だし、発汗も抑えきれなくなる。それだけはマズい。カレンの好感度を下げてしまう。

そう自分に言い聞かせて三人を迎えることにした。

「んもお、逃げることないじゃない。失礼しちゃうわあん」

「ねー。まあ、いい運動になったけどさー」

「……不愉快」

俺がカレンをそつと降ろして振り向いた時にはすぐそこに来たり、怒っているわけではないが不満げな顔で文句を垂れた。

「みんなこんなところまでできてどうし「カレン、ちよつと下っついていなさい」

もしも何かあった時のためにカレンを下がらせてラクサに任せる。

言葉を間違えれば人外三人と戦うことになるかもしれないからだ。

「やあやあ皆さん。こんなところまで見送っていただき感謝します。

それで、私達に何か言い忘れたことでも？」

何をされても反撃できるように感覚を研ぎ澄まして三人に網を張

る。

ただそれに少しばかりの殺気が含まれているせいで、彼女達も臨戦態勢に入った。

空気がピリツと張り詰める。

「えっと、わたしたちは二人に——」

——ぐうう、と。

我々が神経を尖らせて会話している外側で、カレンが一際大きな腹の音を鳴らした。

「……………ごめんなさい」

「あー、話しの前にまずは食事だな。準備をするから手伝ってくれ」

◆◆

カレンが最後の串焼きを一気に食し、串を焚火に投げ入れた。

「ぐちそうさまでした!」

互いが味方か敵かも分からないまま、船にいた時と同じ感覚で焚火を囲い食事を済ませてしまった。

もちろん食事中に敵対しないための言葉をいくつも考えておいた。

「……………あつ、そういえば何か話があるんだよね。あたしのことは気にしないで」

カレンが妙な気を遣って体育座りのまま少し下がる。

隠す気のない狸寝入りまでして輪の外に出た。

「それじゃあさっきの続きを。まずこれだけは先に言わせてもらおうが、俺は君達と敵対するつもりはない。あの勇者一行とやり合うのは三度死んでも御免だ」

「えっ? 勇者一行!? ケーちゃんたちが!!?」

それはもう狸寝入りですらない。

「あはは、バレちゃってたかー」

「もしかして、ケーちゃんがケイでグーちゃんがグリゴールでミーちゃんがミロシユってこと!?!」

「そうよおん」

「ん」

カレンはこれまでの言動を照らし合わせて彼女達が本当に勇者一行であると認めた。認めざるを得なかった。

そして膝に顔をうずめて再度沈黙。

「……それで、あの勇者御一行様が我々のような下賤な民に何用でしようか?」

「うん。わたしたちと一緒に来てほしいんだ」

「一緒に!?!」

「カレン、寝るか起きるかどつちかにしなさい」

もう次からは何も突っ込まないことに決めた。

「噂で聞いているとは思うけど、あの大戦の後に休養期間を取ったのよ。行方不明なんて言われてるけどねえん」

「だけど偉い人たちがさー。休んでないで魔界へ征伐しろってうるさくて」

「あー、なるほど」

俺が生まれる前から変わらない制度ではあるが、勇者というのは単なる称号に過ぎない。

多くの場合、中央大陸の主要国が集結した議会によってそれと相応しき者を選出するのだ。

もちろんそこには自国から勇者を排出しての国威発揚や、軍事力として我が物にしたいといった思惑が複雑に絡まる。勇者絡みの戦争紛争は数え切れないほど起こっている。

稀に各国首脳の大半が賢い時があり、内紛を起こすまいと一致団結する。

魔界の勢力か世界の敵認定された国や個人に対してのみ、勇者の力が用いられる。いわば国家公務員ならぬ世界公務員だ。

そのような忠犬に対するお偉いさん方の本音はこうだ。

『魔界へ征伐して、四将の一人でも倒してから討ち死にすればよい』

大型犬が放し飼いにされているのならば自分に牙を剥く前に死に絶えてくれ。

揃いも揃ってそう願っている。

なんとも酷な話だ。

「三年も無視してたらさすがに怒られて『勇者の称号を剥奪する』なんて言われちゃって。そしたらちようど二人……と一匹？　が魔界に行くっていうから後押しされたんだ」

「つまりは我々のせいで死地へ向かうはめになったと？」

「そう簡単に死んであげるつもりはないわよ？　乙女が運命のヒトと出遭う前に死ねるわけないでしょ？」

「申し訳ないと思うなら責任、取って」

「ミイの言い方はちよつとした冗談だけど……一緒に来てほしいのは本当だよ！　きみたちが悪いヒトじゃないのは分かるし、みんなでいけば楽しいしね！」

ケイのあつけらかなとした言葉に両脇の二人は黙って頷いた。

カレンも腕組みをして神妙な面持ち、というか師匠面をして頷いている。

「あつ、もちろんテンノの任務が忙しいっていうなら無理には言わないし、わたしたちに手伝えることだったら手伝うよ！」

「話はよく分かった。ところで今の四将の名は？」

「四将？　えつとたしか………お願いミイ」

「黒騎士アンデイ、咆哮する狂気ノヴァク、青土の王ラファードル、そして——」

——ビュオオオツ!!

ミロシユの声に知り合いの名は無いかと集中していたその時、急な突風に見舞われた。

思わず皆が目を塞ぎ、砂埃の落ち着くのを待つ。

そして再び目を見開いた時。

運よく焚火は消えておらず、ちやつかりと輪の中に紛れ込んできた何者かを照らしていた。

「やあ、お邪魔だったかね？」

見た目だけは壮年のロン毛パーマ男が胡坐をかいて焚火に当たっている。

それを見てカレンとラクサは固まり、勇者一行は瞬時に飛び退って臨戦態勢に。

(せつ、せせせ先輩ツ!! なんだよこの化け物ハ!!)

(……昔の知り合いさ)

かつて部下であり上司であり同僚でもあった彼のことはよく知っている。

こやつは三千年以上も四将の座に就いているしぶとい男だ。

五爪指定の誰もが怖気づく魔獣でもある。

その名は戦災龍――

「まだ討伐されていなかったのか、ロジャー」

「まだまだ若いもんには負けんよ」

《第三章：因果応報の不文律 前編完》

第三章 因果応報の不文律 後編

第一話 「後戻り」

これは七千年以上も昔、まだ神々が人の姿をとって地上で暮らしていた時代の話だ。

今や暴虐神と称されるヴィールタスもかつては地上に住んでいた。彼女はちよつぴり怒りつぽくて嫉妬深くはあったが、皆に愛される清らかな乙女であった。

しかしある時想い人である兄が豊穡の女神と恋仲になっていたことを知り、悲嘆し地上を去り月の裏側に引き籠ってしまふ。

当然兄と他の神々、彼女の世話になった地上の生物までもが慰め説得しようとした……がしかし固く心を閉ざしたままで何も聞き入れようとはしなかった。

そのまま幾十年と経ち、ヴィールタスを孫のように気に掛けていた工匠神アーチカルゴが最後に訪れた。

「このままではお前は忘れ去られてしまふ」

「それでもいい」

「よくない。そろそろ機嫌を直して帰ってきなさい。どんなものでも作ってあげるから」

「なら、わたしを隠して。入っている間は誰からも見えなくする天幕が欲しい」

「そんなものでいいのか？」

「できるだけ大きいのがいい。国一つ入るくらいの」

アーチカルゴは子供に「自分の部屋が欲しい」と頼まれた時くらいの軽い気持ちで、国一つどころか大陸をまるまる包み込めるほど巨大な天幕を作り贈った。

「お前にとつては辛いだろうが、二人の式には来てやれ。二人は今でもお前のことを心配している。よいな？」

「必ず行く。……必ず、ね」

その後すぐにヴィールタスは行方知らずとなり、もはや誰も探そう

とはしなかった。

そして三百年の月日が流れ、神々と長命の生物でさえも彼女を忘れつつあった中で。

戦神ボルトイカスピードが戦乱の世をついに平定して世界を一つにまとめ上げ、ファテイルとの結婚式を挙げるその日が到来した。

十年もの準備期間を要した式には大陸全土の王侯、名のあるつわもの達、種族問わずの人々と獣が訪れ、百日前から盛大な前夜祭が開催されていた。

となれば式当日は有史以来最大の催しとなることが決定付けられており、

たしかにそうだった。

誰も想像だにしていなかった形で――。

「なんか静かですねえ。波一つ立っていないし、いつもとはえらい違いだ」

「ああ。ここまで静かなのは妙だな。まるで水平線の向こう側に化物でも潜んでいるような」

その日、海沿いに住む者の肌が粟立った。

「あの雲を見ろ、風の流れが異様だ」

「なにより空気が重い。一体何が起こっているんだ？」

その日、山の頂に住む者が狼狽した。

「いよいよ式が始まるな。……だが、どこことなく嫌な胸騒ぎがするんだ」

「……俺もだよ」

世界中の勘のいい者が未だかつてない異変を察知をした。察知をしたものの、

『今は神々の統治する平和な時代なんだ、何を恐れることがあろうか』
人々には確信があった。

自分達は神々に守られているという確信が。

「では両名、誓いの」――オイ！ あれは何だ!？」

「何か降ってくるぞ!!」

最前列に一つの空席を出しながらも式は進行し、戦神と豊穰神の婚姻の誓いがまさに結ばれようとしている時に彼女は飛来した。

羽毛のように軽やかに着地し、三百年もの間姿をくらましていた乙女は二人を視界に収めて淑やかに笑う。

「おお！ 我が妹よ！」

「ヴィーちゃん、来てくれたのね！」

列席者の多くが彼女が誰であるかを知らない中で、二人は式を一時中断してヴィールタスの元へ駆け寄り抱擁した。

「三百年も何処に隠れていたんだ。ずっとお前を探していたんだぞ」

「探していた？ 昼も夜も絶えず戦場を駆け、血と屍の中にわたしを見出そうとしていたのですか？」

「そういうわけでは」

「兄さま、まだ気が変わりませんか？ わたしは今でも兄さまを恋い慕っております」

「……………お前は俺の…………大切な妹だ」

「そう、ですか」

改めて拒絶されたヴィールタスは俯きながら兄を強く突き放し。

右手を掲げて遙か上空に向けて赫く激しい光を放った。

満開の薔薇のように美しく、

瀑布の如き活力に満ち溢れ、

大陸に住む全生物の目を惹きつけるひとすじの光だ。

光は雲を貫き大気を抜け、ひるなかの月を紅く染め上げた。

人々は神たる乙女の御業に拍手し喝采した。

それが恐ろしい号令だとは夢にも思わずに。

「……………ばいばい」

「ヴィールタス？ 今なんと？」

「っ!? ヴィーちゃん!? あなた一体何をしようっ!!」

慈母神の名の通り、これまで一度たりとも怒りを露わにしたことのないフェアテイルが初めて眉を吊り上げた。

彼女の眷属たる動植物の声をいち早く聞いてヴィールタスの所業を知ったのだ。

「——こんな世界、壊れてしまえばいい!!」

ヴィールタスが行方不明の三百年で何をしてきたか。

ずっと月に引き籠っていたのではない。

工匠神より贈られた天幕を用いて秘密裏に北東の海に大陸を創り、そこで眷属を生み出していた。のちに魔人または魔獣と呼ばれる者達だ。

それらを我が子のように愛をもつて育て、鍛え上げ、大軍団を作り上げた。

軍団は今、四つに分けられて四方から中央大陸に揚陸し、殺戮を始めた。

なぜヴィールタスはそこまでするのか。

「許さない許さない! 絶対に許さない!!」

理由は一つ、彼女はほんのちよっぴり怒りっぽくて嫉妬深かったから。

「馬鹿者! アレはそんなことのために作ったのではない! 今すぐやめろ!」

「安心してアーチカルゴ。あなたの眷属には手を出さないわ。だけどそれ以外は……《みんな死んじやえ》!!」

神たる乙女の強き言葉によって一帯の力持ちし者とドゥーマン以外の全てが絶命した。

「ヴィールタアアアスツ!! お前はもう俺の妹ではない!!」

「……バイバイ兄さま」

『血の結婚式』を皮切りに始まった第一次人魔大戦により、神々が受肉を禁じて地上を去るまでの間に世界人口の九割が死に絶えた。

復興には千年近くもの時間がかかったという。

これが今日に至るまで世界中で魔人と魔獣、加えてドゥーマンが忌避される由縁である——。

「一杯もらえるか?」

「……ほらよ」

原初の四将はヴィールタスより直接力を分け与えられており、文字通り神々を傷付けることができた。

以降の四将は力を分け与えられてはいない。……がしかし神々に傷を負わずとはいかずとも、それぞれ世界の四分の一を恐怖させ滅ぼし尽くすだけの純粋な力は必要とされている。

このロジャーという古き龍には間違いなくその力がある。

「うーん美味しい、冷えた身体に染み入るわい。おかわり！」

「次で最後だからな」

茶目っ気のあるロン毛パーマが茶を悠々と啜る。

勇者一行の殺気を一身に浴びているにも関わらずだ。

ちらとロジャーから目を逸らして見ると、三人はいつでも斬りかかれると言わんばかりの鬼気迫った表情で構えていた。うちの二匹は擬態中の虫が如く固まっていたが。

「さて、身体も温まったし……やろうか」

「待て」

凶暴な龍がいよいよと、闘争心を満たすために腰をあげようとするのを俺は押さえた。

「なにゆえ邪魔をする。心配せずともヌシとヌシの身内には傷一つ付けんよ」

ロジャーはカレンとラクサの方を向いて「危害は加えないから安心してね」とおっさんのくせに若者ぶってウイंकをする。

それから勇者一行へ向き直り獰猛な瞳をギラつかせ、今度こそ俺を振りほどいて立ち上がった。

瞬きをした瞬間に、辺り一面が火の海に変わっていてもなんらおかしくはない。

ケイ達もすでに覚悟を決めていた。

「やつちやうわよおん！」

「そこにいと邪魔くさい。カレンを連れてきつさと消えて」

「ここはわたしたちに任せて！ きみたちは早く安全な場所に！」

三人の顔を立てるため、言われた通りにカレンを抱えて逃げるとうなるか。

グリゴールは確実に死ぬ。
ミロシユはおそらく死ぬ。

ケイは一命を取り留めるかもしれないが、死ぬまで立ち向かうだろう。

彼ら自身も薄々感付いているはずだ。

これまで戦ってきた相手とは桁外れの力と圧に。

《暴虐神の懐刀》とまで呼ばれる伝説の戦災龍とやり合えば、どうあがいても全員が無事でいられはしないと。

そこまで知っていてなお、前進する。世界から脅威が消え去るまで後退はおろか停滞すらも許されない。

それこそが勇者という称号に課せられた責務……いや、呪いだ。急速に傷つき骨と肉をぐずぐずにして死に至らしめる呪いだ。

(ニア先輩……。オレ達には手を出さねーつつてるし、早いところズラかろうぜ? ……ナ?)

(……………少し、待ってくれ)

俺に次いで現実主義者であり、『契約者を守る』という重大な使命を帯びているラクサが一刻も早い逃避を促してきた。

たしかにケイ達を助ける義理はない。

少しの間船旅を共にしただけで、赤の他人同然なのだから。

俺は彼女達のことをほとんど知らないし、彼女達も俺の正体を知らない。

何よりカレンを危険から遠ざけたい。

見捨てる理由ならいくらでも掘り出せる。

俺が年老いておらず理性的であれば、今頃は十キロ先に避難しているだろう。

だけど悲しいかな、千年も封印されていたせいで少々ボケてしまっている。

「そこまでだ」

気付いた時には間に割り込んでいた。

「ちよつとお！ どういうつもりよおん!？」

「極めて不快」

「わたしたちは大丈夫だよ！ これでも勇者なんだから！」
「ほごくな」

視えるぞ、勇者一行たるものが震えを抑えきれていないではないか。

聞こえるぞ、ひどく不安定で弾け飛びそうな鼓動の音が。

感じるぞ、死にたくないという強い本能を。

始まる前から勝敗の決まっている戦いほどつまらないものはない。

「——おいアレン、いつまでそこにいるつもりだ？」

俺が右を向いて三人と睨み合っていると、逆側から低い声と熱波とが伝わってきた。

ロジャーは辺り一帯が雷と噴石の降り注ぐ溶岩湖だと錯覚させるほどの殺気を俺に向けて放っていた。常人を秒で失神させてしまえる途轍もない殺気を。

よほど待ちきれないようだ。

邪魔者はさっさと去ねと顔に書いてある。

「言い残したことがあるなら手短かに済ませてくれ。ワシの気が元々長くないのは知っておろう？」

「俺の……」

その先を言ってしまうば最後、もう後戻りはできない。

冷静になれアレン。お前の目的はガエルを見つけ、カレンを両親の元に送り届けることだろう？ こんな小娘たちに付き合っただけでやる余裕はないはずだ！

見捨てて後味が悪いのなら忘却の魔法をかければいいだけじゃないか！

だからやめろアレン!! これ以上何も言っただけじゃない——

「——俺の仲間に出すな!!」

第二話 「思考停止」

それは紛れもない失言。

ここ二千年で五本指に入る失言だ。

「その娘共が仲間と言ったか？」

「そうだ」

「勇者に肩入れするのが何を意味するか分かっているのか？」

「くどいぞロジャー。何度も言わせるな」

前言撤回する最後のチャンスのみすみす捨ててしまった。

ああもう知らん知らん！

ここまで来たらもう止まれねえ！

なるようになれってんだ！

カレン！ サリイ！ そして俺の帰りを待っている全ての人達！

少しだけ寄り道します！ 御免ツ!!

「全員俺の仲間だ。誰にも手出しはさせん。それでもやると言うなら――」

言い終える前にロジャーはハアーツと残念そうに白煙の溜息を吐き。

変形させた龍の手を人のものに戻してから元いた焚火の前に腰を下ろした。

空のコップを手に取って一杯くれと催促してくるので、俺も腰を下ろして注いでやった。

ついでにケイ達のコップにも注いでやると、まだまだ訝しげに我々を注視しながらも武器を収めて座ってくれた。

「やけにあっさりしているな。戦狂いのお前なら『それでも構わん』とか言つて飛び掛かってくるものかと」

「若い勇者一行だけが相手ならまだしも八十九代目勇者、二十四代目及び四十九代目魔王様とやり合おうとは思わんよ。死んでしまつては元も子もないからのう」

「あつ、おまつー！」

「えっ？ 八十九代目勇者ってどういう……」

「魔王とも言ってたわよおん？」

「早く説明して」

思わぬ形でバレてしまった。

当然のことながらロジャーに向けられていた警戒がそっくりそのまま俺に移ってしまう。

「身の上を明かしておらんくせに仲間とな？ どれ、そういうことならワシが代わりに教えて」「それ以上言うな」

いまさら喧嘩大好きペラペラおじさんの口を塞いでも時すでに遅く。

ケイ達の俺を見る目は同族を見るそれではなかった。

「アレンくん、ちゃんと説明してくれる？」

「あー……ええつとお……」

これはまずい。非常にまずい。

下手な回答をしようものなら娘のカレン諸共世界の脅威として取り除かれてしまうかもしれない。

カレンがボロを出さないように狸寝入りしてくれているのがせめてもの救いだ。

「仕方ない、全て話そう。質問には濁さず答えよう。だから力に訴えるのはよしてくれ。これはあくまで話し合いだからな？」

「……どうしてみんな私を見るの？ 不愉快」

嘘は吐き通せそうにない。

なのでもういつそ、全てを曝け出して誠意を見せることに決めた。

「実は俺は……不死者なんだ。おんとし五千二百二十五歳のピッチピチの男の子」

「ちなみにワシは三千と九百歳」

にわかには信じがたい発言であるが、俺が戦災龍と対等に話せていることから三人は半信半疑ながらも冗談だと笑いはしなかった。

「不死者ねえん……？ 全然そうは見えないケド」

「不死者と言っても死んだら蘇るだけの……なんの変哲もない普通の人間だよ。長く生きているおかげで少しずつ強くなって、勇者として

飛び回っていた時であれば心変わりして魔王を務めたこともあるだけさ」

「二度も魔王を務めたというのに風格がこれっぽっちもないからう」

「うるせえやい。こればかりは生まれつきじゃい。……ま、そういうわけであつて何度も人類の敵だの世界の敵だのと呼ばれてきた。だけど今は何も悪いことをしていないしするつもりもないよ。可愛い娘がいるからね」

「ワシは昔のギラギラしたヌシの方が好きだつたがの」「ぬかせ」

とにかくそれらは全て過去の話です。

今の私は勇者様を煩わすような悪事は一切働いておりません。誓つて殺しはやってません、と。

善良な不死者であることを誠意をもって主張した。

これでも害悪だと見做されるのなら気の済むまで百回でも千回でも殺されてやるしかない。

客観的事実だけを述べるなら『陣営をコロコロ変えて数え切れないほどの破壊と殺戮を繰り返した』のだから、相応の報いを受けるだけだ。

それでもいい。カレンさえ無事ならそれでもいい。

俺だけならどうにでも殺してくれ！ 何度でも殺してくれ！ 首を刎ねてそこらにさらしてくれてもいい！

そう心の中で吠えつつ彼女達の言葉を待つ。

「うん、わかった」

真つ先に警戒を解いてくれたのはケイだった。

これからもよろしくねと朗らかに躊躇いなく手を差し出してくる。

「……本当に、いいのか？」

この問いには俺を仲間として認めてくれるのかという率直な疑問が半分。

もう半分は『裏切りの勇者』と呼ばれたアレン・メーテウスと友好関係に陥ることにより、勇者の称号剥奪はおろか国際指名手配のお尋

ね者になってしまってもいいのかという疑問で出来ている。

「昔のことは知らないけど、今のアレンくんはわたしたちを助けてくれたから。アレンくんが止めてくれなきゃみんなここで死んでたもん。ミイもグウもいいよね？」

「アナタがリーダーでしょ。アタイもミロシユも信じてついていってくださいよおん」

「異論はない」

「二人とも大好き！」

「ウフフ」

「……暑苦しい」

ケイは快く同意してくれた仲間にそれぞれ抱きついた。

姉御肌のグリゴールはケイを妹のように受け入れ、ミロシユは嫌な顔をしつつも引き剥がそうとはしない。

何年もかけて深めた絆というのが見て取れる。

「そういうわけだから、わたしたちを案内してくれる？ 一応地図はあるけど魔界に来るのは初めてで分からないことだらけだから」

「ああ分かったよ！ 連れてってやるよ！ どうせ後戻りはできねえんだ、連れてきやいいんだろ！」

「ありがとう！」

再び差し出された手を今度こそ握った。

「アレンくん、カレン、それとラクサクくん！ 短い間になるか長い間になるか分からないけど、みんなよろしく！」

「よろしくね！」

「なるべく早く安全に終わらせてくれよナ」

ここに史上八度目となる勇者と不死者の同盟が結ばれた。

「げにおそろしや。ヌシらがこの地から去るまで穴倉にでも籠っておくかの。そいじゃワシはこの辺りでお暇 「まだ帰るには早いぞ口ジャー。せつかく来たんだ、夜が明けるまでペラペラしてもらおうか」



「……で、ぜんぜん寝てないの?」

焚火を再利用して朝食を済まし、荷袋を背負って歩き出した直後に。

半開きの寝ぼけ眼を擦りながらカレンが言った。

「そうだよー」

「もしかしてずっと話してたの!?!」

「うん」

カレンは目を跨ぐ前に眠ってしまったが、我々は一睡たりともしていない。

情報を寄越せとは言ったものの、聞いていないことまでラフアラフアラツフアラツフアラペラペラペラペーラとしやべり倒す老害の相手をしていたらついに朝を迎えてしまったのだ。

おかげで魔界の情勢やら目ぼしい人物やら、ほとんど機密情報に近いことまで詳しく知れたのだが……ヤツはそのうち風呂掃除中に背中から刺されるのでは?

「アレンはいいけど……みんなは大丈夫なの?」

「わたしたちはほら、忙しくて寝れない時が多いから慣れちゃった。

一番長いので五日くらい寝れなかったこともあるよ」

「アタイは極力徹夜は嫌よお? 寝不足はお肌の大敵だもの」

人並外れた身体能力を持つケイとグリゴールはともかく、人並みどころか虚弱寄りのミロシユでさえ一日二日は睡眠を取らずに問題なく活動できる。

それは徹夜や無休が当たり前に感じてしまうくらいに勇者の仕事が苛酷であるからだ。個人的には二度とやりたくない職業五位以内、知る前と知った後で見方の変わる職業三位以内に入る。

どうもカレンはそこら辺を考えようとせずに浅はかな憧憬から勇者を志望している節がある。

なのでいかに苦しく魂をすり減らす仕事であるかを骨身に刷り込ませ、「あたしもいつか勇者になりたい」などとは二度と言えなくしてやろう。

(ラクサにも協力してもらおうぞ。これはカレンのためだけではない、君自身のためでもある)

(……分かってるヨ)

カレンには勇者などという前途多難な道を逸れ、健康で文化的な最低限度の生活を営んでもらう。

極端なことを言うなら世界一幸福な国の姫様にでもなってもらおう。据える方法は次から次へと湧いて出てくる。

もちろん姫様でなくとも魔法学院で教鞭を取らせるのもいいし、華の都でお菓子屋さんを経営させてもいいな。

くくく……どう調理してやろうか……。

「ねえ、アレンくんってもしかしてちよつと」

「……うん、ちよつと頭がおかしいのよ。よくああやって独りで笑ってるもん」

「かなり気持ち悪い」

「言い過ぎだつてミィ。たぶん年相応の悩みとかがあるんだよ」

先を行く三人の小娘がちらちらとこちらを見ながら小声で話す。

全部聞こえているぞ。

もうちつと年長者を敬え。

「ごめんなさいねえアレンちゃん。あの子達に悪気はないのよ」

「なに、気味悪がられるのは慣れてるさ」

いくら表面上は仲間になったとはいえ、そう簡単に心の底から信用してもらえないのは当然だ。

今はまだいてもいなくても変わらない薄気味悪いお兄さんだと思われてもいい。

……だが、それもすぐに必要不可欠で大変ありがたい存在に変えてやろう。

なにせ俺には五千年分の知識と経験があるのだ。第二の故郷である魔界のことだって人族の中では誰よりも熟知しているつもりだ。

俗に言う『頼れる大人』とやらを体現しようじゃないか！

(先輩のやり方、拝見させてもらおうぜ)

(うむ、存分に学ぶがよい)

栄光への第一歩としてまずはペラペラペーラと魔界の地理について解説し、休養と観光を含めた最適な道筋を割り出してあげないとな。

「おーいケイ、地図を見せてくれ」

「地図はえつとこの辺りに………はいこれ！」

「どれどれ——」

お偉いさんから支給されたであろう、手触りが良く染み一つない最高級の羊皮紙で作られた地図を広げる。

地図いっぱい描かれているのは馴染みのある封魔大陸の輪郭。

その内側を目にした途端思考が停止し、情けない言葉が漏れ出た。

「なにこれボク知らない」

第三話 「ケジメ」

「となるとこうか？ それともこうか！ いや、こうだな！」

上下逆さまにしても左右を反転しても、陽の光に透かしても何も変わらない。

「ならばこれだな？ —— 《芽吹ケヨ焰種》^{ホムラダネ}」

「ちよつとちよつと何してるの!？」

「《資^{タカラ}モ産^{ウツ}モ凍^イテ結^{ムス}ベ》」

指を発火させて炙り出そうとしたところで地図を没収され、首から下を氷の柱に閉じ込められた。

なぜだ？

「この地図すごい高いんだって！ 燃やしたりしたら怒られちゃうから！」

「大丈夫？ もしかしてまた頭のおかしくなる毒草でも食べたりした？」

本気で心配してくれているケイの目と酔っ払いを見るようなカレンとミロシユの目が突き刺さる。

一体俺が何をしたというのだ。炙り出しが間違っているだけでその地図には何かしらの仕掛けがあるのだろうか？

少なくとも今描かれているのは偽装されているはずだ。

「では早く仕掛けを解いてくれ」

「そういうのではないよ？ この地図はたしかえつと……なんだっけ
ミィ」

「それはドゥーマン製の魔法の地図。極めて正確」

「……これが、正確だと？」

もう一度地図を手に取り端から端までまじまじと見つめる。

やはり大陸の輪郭は俺の記憶にあるものと相違ない……が、中身が違い過ぎる。

魔獣の住まう大森林が砂漠と荒野へと脱色されており、その逆もまた然り。

三つ子の大山脈が双子に減っているかと思えば、大平原に山々が生

えていて。

魔界で最長の河川が半分の長さになり、国一つ入る巨大な湖が蒸発してぼっかりと穴が空き。

些細な変化から目に見えて分かる大規模なものまで、頭の中で広げた地図とは半分以上異なっている。半分以上だ！

千年も経っているのである程度の地形変動は想定していたが、ここまで様変わりするとは信じがたい。

「その地図は記憶にある建物や景色がどこにあるかを示してくれる。試してみれば？」

「そうさせてもらおう」

俺はまず始めに古巣でもあり観光名所でもある建築物を記憶の戸棚から取り出した。

それは神代から現代に至るまで増築改築を施された巨大な城であり、俗に「魔王城」と呼ばれている魔界の中枢拠点だ。

武骨な外観を鮮明に描写し、中に入ろうと扉に手をかけたところで、地図のある一点がさながら一等星のように光り輝いた。

記憶が正しければ魔界の中心からいくらか北東の地点にたしかに魔王城は位置している。

「どうアレンくん？　そこで合ってる？」

「合っているとも。だが、これだけではな」

次に思い浮かべたのは俺の知る限り魔王城に次いで巨大な要塞だ。幾度も侵攻を耐え抜き、魔界に秩序と平和をもたらし続けた防衛の要である。

しかし、いくら待てどもいくら鮮明に思い出そうとも地図は光らなかつた。

「ほれ見ろ！　やはりこの地図は間違っているではないか！　どこも光らんぞ！」

「ほんとだ、光っていないね。これはどうなのミィ？」

「ならアレンの知る建物はもう存在しない」

「存在しないだと？　ハハッ、何を馬鹿なことを。いいか小娘、コヤチ力要塞は約三千年前に建てられたが俺の知る限り一度として取り壊

されたことは無い。せいぜい城門を破壊されて侵入を許した程度だ」
「はあー」

彼女の目には俺がボケ老人にでも映っているのだろう。

ミロシユは面倒くさそうに溜息を吐いてから深く息を吸い。そして――

「――《捲土重嶺》」

唐突に一つ言葉を唱え、土で固めた小屋を造形した。

「まずこの家を思い浮かべて」

言われた通りに見て覚えて頭の中で描写する。

すると地図上では我々の現在地である南東端の一点が光り輝いた。

「――《疾レ風ヨ怒リニ答エヨ》」

用済みとばかりに小屋は跡形もなく吹き飛ばされた。

築一分も持たなかった。

「もう一度思い浮かべて」

見たばかりで色合いや影までハッキリと焼き付いているものを虚空に映し出す。

しかし地図に反応は無い。

どれだけ鮮明に描こうとも輝きは……しない。

「理解できた？」

「……そんな、嘘だ。俺の要塞が……別荘が……。みんなでつくったおうちがああ……」

理解はしたさ。

理解はしたが納得はできない。

だからせめて他はと、二十個ほど思い出深き処の生存確認を急いで

「やだあ……こんないやだいやだいやだあ！ ひかってよお！
あああ……うわあああん!!」

――約半数が応答せず。

ついにぼくのこころがいじょうをきたしてしまった。

「ちよつとミィ！ どうするのこれ！ ねえ大丈夫？ アレンくん大丈夫!」

「カレン、ラクサ。早くこれをどうにかして。いくらなんでも幼児を老人に戻す魔法は教わってない」

「どうにかしてって言われても……。ほっとけば勝手に治るんじゃない？」

「おい先輩、大丈夫か？ あつちの川で顔でも洗ってきたらどうだ？」

「……………うん、あらつでぐる……………」

◆◆

「先ほどはお見苦しいものを見せてしまい大変申し訳ない」

川に頭を一つ流してから戻り、腰を直角に曲げて深々と謝罪した。

「ちよつとびっくりしたけど全然大丈夫だから！ 頭をあげてよ」

「まだだ。もう一つ謝らなければならないことがある」

脳みそを新品にして冷静になり、その事実を受け止めてきたのだ。

とても恥ずかしく情けないことだが言っておかねばならない。

「俺にとってここは不案内な土地になってしまった」

魔獣も少なく治安も良い、極めて危険性の低い最適で快適な道を行くつもりだったがそれができない。

今の俺はちよつとばかり顔が利いて生態系に詳しいだけのただのカカシに成り下がった。しかもその知識は千年前の古いものだし顔なじみだっただけでほとんど死んでいる。現代では銅貨十枚の価値すらない粗悪な肉袋、それがアレン・メーテウスだ。

「本当にすまない」

これはケイ達だけに向けた謝罪ではない。

かつて俺を《決して錆びない羅針盤》《極星》《流星の智慧》といった大層な二つ名で呼んでくれた人々に対してだ。

今現在はその異名を名乗る資格はないが、何十年何百年かかろうとも必ず取り戻す。必ずだ。

「ぐつ……………」

「えっ？ アレンくん!?! なんで!?!」

「ケイ、もう見ない方がいいよ。たぶんキモいから」

誓うと共に最大限痛覚を敏感にさせて右の小指を斬り落とした。

まだ痛みが残っているうちに小指を拾い上げ、骨ごと咀嚼して飲み込む。

「あの……本当に大丈夫？」

「ケジメだっけ？ 気がすんだ？」

「うむ」

しかし慣れとは恐ろしい。

以前は目を塞いで背を向けていたカレンも、今では冷や汗一つかかずに冷めた目で一連の流れを見ていた。

「では気を取り直して進もう。ああそうだケイ、もう一度地図を見せしてくれ」

「……あつ、うん。地図ね」

まだ先ほどの衝撃から回復できていないケイが一拍遅れて地図を広げてくれた。

我々がまず目指すのは魔界の北西部ローランゼンフトウだ。そこはかつて森林地帯だったが、最新の地図には緑がほとんど残っておらず代わりに青く染められている。

これは暴虐神の涙で着色されたと謳われる、魔界特有の青^{ブルークレイ}土だ。

「ずいぶんとハゲたというか、砂漠化が進んでいるようだが……一体何が」

「それはねえん、ラファードルのせいよ。ローランゼンフトウを治めるカレが砂漠化を進行させているって話」

ぴつたりと左後ろをついてくるグリゴールが口を出した。

「知っているのか？」

「アタイのひいじじが当時最強の拳士で、大戦でラファードルとやり合ったのよ。ま、負けて見逃されたんだけど。ラファードルはアタイのブチ破るべき壁の一つよおん」

「なるほど、それで調べたのか」

「そっ」

意外な因縁を同時に知れたので話を先に進めることに。

「とりあえず現地点から砂漠手前のこの辺にある街まで行って補給するとして。このまま真つ直ぐ行ってもいいだろうか？」

残念ながら昔あった一本道が三本道に増殖していたので、俺の運が人並み以下だということも併せて伝え判断を委ねる。

「うーん、わたし達も全然分らないし……」

「この中で一番運の良い人を選ばせればいい」

「それは名案ねえん」

「オレも賛成だ」

そして俺とラクサとケイ達は揃って同じ一点を見た。

「あ、あたし？」

「これ貸してあげる。使って」

言いだしつぺのミロシユがずっと背負っていたドゥーマン製の魔法の杖をカレンに渡して手ぶらになる。

「えっと、何の魔法を唱えればいいの？」

「魔法を唱える必要はない」

「じゃあ、これってまさか」

杖にはゴーレムの核にも用いられる最高級の宝石がはめ込まれていて、とても高価で貴重な杖であるはずなのだが……まさか運任せの棒切れ代わりに使われるとは製作者も微塵も考えていなかっただろう。

「……いくよ？ 本当にいいんだよね？ この石割れない？」

「早くやって」

「えいっ！」

手を離すだけでいいのに、カレンは緊張のあまりちよつと浮かして放り出した。

勢いをつけて杖は倒れ右側を指した。ちなみに宝石にはヒビ一つ入らなかった。

「はい……これ。貸してくれてありがとう……」

「ん」

「それじゃあ、こっちの道でいいかね？」

「うん、それでいこう！ しゅっぱーっ！」

「……しんご」

後に我々は、二度と運任せはしないと決意する――

第四話 「未来予知の魔法」

砂漠手前の街を目指し、我々は内陸寄りに行くことに。寄り道をしなければ七日もせずに街が見えてくる予定だ。

初日は楽しくお喋りしながらも誰一人として警戒を怠らずにひたすら歩を進めた。日が暮れる前に遙か遠方、ちょうど目的地の方角に巨大な黒い柱か塔のような物体を視認できた。

一夜明け、空模様は初日と打って変わって重苦しい灰色に覆われていた。さらにどういうわけか羅針盤が狂うようになったので、例の黒い柱を目印にして進むことに。

木端魔獣共は我々の強さを本能で感じ取って避けているためか、三日四日五日と何事もなく経過した。

「……あれ？」

「どうしたカレン、何か見つけたか？」

「なんかさ、前にも同じ景色を見たことがあるような……」

「あー、うん」

一切危険な目に遭わず、そのせいで完全に警戒を緩めてしまっているカレンがふざけたことを言い出すようになった。

まったくしつかりしてほしいものだ。

カレンだけではなく、魔界側も三爪くらいのちよūdい魔獣を投入してくるとか人喰い花や毒の底なし沼を配置するとかして気を利かせてほしいものだ。

ひたすら平原平原森森平原では子供が飽きるに決まっているだろうに。

「この森も前に来たと思う」

「あらそうなのおん？」

「そりゃあ似たような場所ばかり歩いてるからなあ」

「絶対そうだって！……ほら！あそこに大きなバクエンタケ生えてるじゃんー！」

「はいはいもうすぐ着きますからねー。静かに良い子にしましょうねー。抱っこしてあげまぢゅよー」

「いらないうってばー！」

——さらに七日が過ぎ、未だ街の影すら見えず。

「ねえー、まだあ？ 一週間で着くって言うってたじゃん」

「アレンくん、さすがにこれはおかしいと思うけど」

「同感」

「うーむ……」

十三日目に突入したが我々はずっと似たような景色の中にいる。すでに街を通り過ぎているのなら青い砂漠に出ているはずだ。

何かが、おかしい。何かが、間違っている。

「ねえ、やつぱりここも前に来たよ。どうせみんな信じてくれないんだろうけどさー」

「オレは信じるぜ。嘘を吐いてねーのだけは分かるからナ」

「実は私も四日前に同じ景色を見た。もう少し行くと腐りかけの双樹があるはず」

思いついたことをすぐ口に出すカレンはともかく、三人の中で最も賢く思慮深いミロシユまでもが同じことを言い出した。

しかもその言葉通りに腐りかけの双樹が見つかったのだ。

よって俺はある仮説を立てた。

「もしかしたら、同じ場所を何度も回っているのかもな」
「……うわ」

「またもぎってる……」

「アレンくん大丈夫？ 痛くないの？」
「慣れだよ慣れ。それと痩せ我慢」

暗くなるまで一日中、ある程度の間隔を空けて手足を植えるかくくりつけるかしながら歩き続けた。

それから三日が過ぎ。

すでに予定の二倍以上も日数が経っているのに街も砂漠も見えてこないが、代わりにあるものが現れた。

「あの骨ってまぎか」

「ああ……」

地面から生え出た歪みのない丈夫で健康的な大腿骨は誰のものか。そう、私のです。

「決まりだな」

さらに進んでいくと、肉食獣に人気のアレン肉が次から次へと骨だけの状態で発見された。

よって、この世界には瞬間移動なる技術もないため仮説が実証された。

我々は知らず知らずのうちに同じ道を繰り返して歩いていたのだ。

「じゃあ道……というか土地が変化しているってこと？」

「それはない。俺たちが勝手にぐるぐるしているだけだ」

「でも、だいたい真っ直ぐ歩いているわよおん？」

「酔ってもいない」

「どうして真っ直ぐだと分かるんだ？」

厚い雲に覆われているせいで太陽が見えず、羅針盤も狂っているというのにどうして北に向けて直進していると思うのか。

何が我々をそう思い込ませたのか。

何が目印となっていたのか。

「その答えはただ一つ……」

「あの黒い柱！」

勝手に目印にして勝手に信じ込んでいた巨大な黒いブツを皆で睨む。

よくよく考えれば都合の良いすぎるそれとの距離は、初めて目視した時とほとんど縮まっていけない。

こちらが進むのに合わせて距離を取っているとでも言わんばかりに。

「というわけでカレン、ちょっとこいこい」

「うん？」

しかと確かめてもらうため、カレンにとある聖呪の文言を耳打ちした。

「やってもいいの？」

「許可する。やっておしまい」

すぐさまカレンは深呼吸して集中。

「闇が満ち、日が喰われしとも其は絶えじ。貴方は光の父祖なれば、つくばう子らに差し伸ばせ、ポイド虚宙の深淵差し照らせ——」

強力な言葉が即座に承認された。

カレンの両手が眩く発光して見えなくなる。

そこで狙いを違えないよう、背後からしっかりと腕を支えて黒い柱に向けてあげる。

「よしいいぞ。……やれエー！」

「——《闇裂ク戦神ノ威光》ツ!!」

いかづちほどに眩い光がカレンの全身を包み込んでもなお膨れ上がり、一気に解き放たれる。

象をまるまる飲み込めるほど極太で、それでいて歪みない一筋の奔流が遙か遠くの雲海を貫いた。

しかし惜しいことに光線は黒柱に触れず、その少し右を通っていた。

「どうしよう! 外れちゃった!」

カレンが姿勢そのままに首から上を歪めて本気で慌てる。

ずいぶん久しぶりに冷や汗をかくのを見た気がする。

「その光は君の手であり剣だ。自分で消したいと思うまでは勝手に消えないから安心しなさい。……薙ぎ払え!」

「うん……それえっ!!」

腰を捻って勢いよく、戦斧を振り回すように横薙ぎ。からのツバメ返し。

「やったカ!」

「カレンすごいー!」

柱は真つ二つに引き裂かれた。……がしかし崩れることは無く、二秒とせずに元通りになってしまう。

「なんで!? このっ、このっ!」

何度真つ二つにしようが三つに斬ろうが星型に斬ろうが、すぐに元通りになってしまう。

それでもカレンは無我夢中で振り回し続け、二百回斬った辺りでついに膝に手をついた。膝の裏から地面に光が照射される。

「アレン！ もう分かってるんでしょ!? 早く教えてよ!」

「それじゃあ一から説明しようか。我々は《ドンスタ現象》に遭遇している。今はその初期状態だ」

ドンスタ現象とは暴虐神から生まれた悪意の一種だ。

現象下に立ち入った者を迷わせ、惑わせ、狂わせて殺す恐ろしいものである。

具体的には我々がされているように方角を見失わせ、移動する目印——今回は黒い柱だが大木や城、何かの像の場合もある——を出現させて追わせ、次第に幻覚幻聴を味合わせ、狂って正常な判断ができなくなったところで魔獣に襲わせる。それが飢え死にさせる。

ドンスタ現象下の土地に好き好んで訪れるのは魔人の中でも相当な実力者が自殺志願者だけだ。

「もう少しで我々にも幻覚が見えてくるだろうね。多人数だからきつと同士討ちさせるようなのが来るだろうなあ……」

「待って。それじゃああの柱も」

カレンは再びブンブンと光線を振って切り崩そうとしながら尋ねた。

「あれは正確には幻覚じゃない。あの柱は空間投影という高度な技術なんだよ。要するにカレンがしているのは光で光を斬っているだけさ。ちなみにその光、直視し続けたら目に悪いけどそれ以外は暖かいだけで物を斬れたりはいしないよ」

「ええ!？」

「たしかに四十度強はある」

「冬に使えるわねえん」

「ねえカレン、これずっと出しっぱにしててよ。すごい暖かいから」
「ええ……」

ケイ達に群がられ、自身が暖房器具として扱われるのを嫌がったカレンはすぐに光を消した——。



体内時計がちやうど正午を指したので昼食を提案し。

まだ十日分は残っている食料を切り崩して腹を拵えた。

「ごちそうさまでした！ それでこれからどうするの？」

「とにかく方角を知りたい。羅針盤が狂った今、頼れるのは星の光だけだ。一度でも太陽がどこにあるかを確認できればいい。というわけです。我こそはという人―」

雲の上まで行つて直接見るか雲を消し飛ばせる者を募つた。

一応天候を操る聖呪がありカレンなら難なく行使できるだろうが、絶対にやらせはしない。

どうもあの聖呪は使用者への負荷が強く、とてつもない疲労感が襲つてくるというのだ。実際に俺の目の前で唱えた者は例外なく三日以上寝込んでいる。

だからダメだ。

「ん」

誰もいないのならば俺が雲の上まで飛ぶつもりだったが、すぐにミロシユが小さく手を挙げた。

「いけるのか？ 誉れ高き暴食の賢者様よ」

「千年眠っていたお爺さんに最新の魔法を見せてあげる」

ミロシユはふらつと立ち上がり虚空を見つめる。

一瞬にして心を整えた。

「――《海ヲ食ラワバ天マデ》《海ヲ食ラワバ天マデ》」

「ほお……」

口頭での連続詠唱、そして六本指での同時筆記によって八匹の小魚が生まれ空へと泳いでいった。

何食わぬ顔でやっているがそれは俺が千年かけて辿り着いた境地だ。いくら同じ魔法だとはいえ、四桁歳未満の……百にすら届かない小娘がしている芸当ではない。

やはりこの娘も傑物か。

「それでそれで!?!」

「次はどうなるの!？」

「後は待つだけ」

カレンとケイが興味津々で聞くも、ミロシユは私の仕事は終わつたと再び腰を下ろした。

そうしてミロシユ以外の全員が空を見上げて数分経つてからようやく変化が現れた。

「んー……？　ねえアレン、アレ見える？」

「ああ、何か見えるな」

一面の灰色に八本の蒼い筋が浮かび上がってきたのだ。

はじめは蜘蛛の糸よろしく辛うじて見えるか細いものであったが、伸びるにつれて太くなってゆき、先頭にいるものがハッキリと分かるようになった。

やはりというべきか、灰の海を縦横無尽に泳いで蒼を掘り起こしているのは先程ミロシユが放った小魚である。

もつとも、今では鯨などよりよほど大きくなってはいるが。

「なるほど、水気を食らつて成長しているのか」

「そう」

「良い魔法だ」

この魔法があれば子供からの人気と評判を底上げできよう。

後で練習しておかなくては。

「あつ！　太陽あつたよ！」

「となると北はあつちだな」

「急ごうか。もうあまり時間がないぞ」

曇天が無惨に食い荒らされたことにより、陽の光が我々の目に届いた。

二週間近く見ていないだけでこれほど眩しく感じるものだったか。

「それにしてもすごいねミロシユの魔法！　うちのアレンを弟子にしてあげてよ」

「弟子はとらない」

勝手に弟子入りを申し込まれて、勝手に拒否されて、鼻から脳みそが出るほど悔しい。悔しいが二人は俺より高みにいるのだ。

片方は俺が一つも使えない聖呪を自在に使えて、片方は俺の知らない魔法をいくつも知っている。

いつかぎやふんと言わせてやる。……いや待てよ、案外すぐにでも

「アレンくん今何か書いた？」

「ああ、ちよつとね」

杞憂かもしれないが、俺は俺の出来ることをしておいた。

「そういえばあの魚はどうなるの？ ずっと雲を食べ続けるの？」

「それはない。そのうち落ちて……………あ」

どうやら杞憂ではなかったようだ。

水を吸ってぶくぶくと太った魚が自重に耐えきれずそれぞれ墜落していた。

しかもそのうちの一つが運よく我々の頭上にも降ってきて、

「——《霜ヨ積……………えっ？》」

ミロシユが間に合うかどうかの魔法を放つ前に結果が出た。

巨大魚は落下しながら三枚におろされて勢いを殺され、それから空中で静止した。

こんなこともあるのかと、風の刃とまな板を設置しておいたのだ。

「一丁あがりだ」

「……………いつの間に」

若き大魔法使い様が疑るような、信じられないものを見るような目をこちらに向ける。

対して俺は鼻を鳴らして答えた。

「そんな大それたことではない」

この中で俺にしかない持ち味は年の功亀の甲龍の鱗、つまり脳みそに刻み込まれた無数の経験だ。

そこから染み出たものこそが経験に裏打ちされた気遣い……………種も仕掛けも知らぬ者がこそって『未来予知の魔法』と騒ぎ立てる技能だ。

「これこそがジジイの知つとる古い魔法じゃよ。お気に召したかの？」

第五話 「野蛮で困る」

「ごめんなさい。もうここまでみたい」

共に荷車を引く者が繊細な乙女らしいことを野太い声で言う。

「グリゴール！ もう少しなんだぞ！」

「これ以上はダメなの。アタイがアタイでいられなくなる！」

「……そうか」

いつ狂乱して暴れ出してもおかしくないグリゴールを背後から突き、荷車に横たわらせた。すぐ隣にはカレンとケイ、それと緑色の鳥が並んで眠っている。

「これで残るは俺達だけか。大丈夫か？ 耐え切れなくなったらいつでも「問題ない」

ミロシユは荷車を引かず、自身も荷物となる代わりに眠り続ける皆を見守って世話をしてくれている。加えて荷車がつかえないように魔法で地ならしと追い風までも起こしてくれている。

五百年生ける妖精でさえダメになっているというのに、何たる頑強な精神か。

ドンスタ現象下にいると判明し、今度こそ確実に北を目指してから七日が経つ。

初めて幻覚幻聴が表れたのは二日前からだ、その日のうちにカレンとケイが脱落した。

翌日にはラクサも耐え切れなくなり、そして今日、グリゴールまでも眠らせることに。

「アレンこそどうなの？ 不死者には効果がないとか？」

「んー、俺がまだ経験の浅い三百歳くらいの頃だったら真っ先にダメになっていたかもしれないけどねえ。今となっては登場人物が多すぎてお笑いだよ。お前を殺してやると叫ぶ人の隣で助けてくれと泣き叫んでる人がいるもんだから。右の耳に『死ぬ』と入ってきて、左の耳に『生きて』と入ってくるんだよ」

「……そう」

この幻は心の底に眠る恐れや消し去りたい記憶、それこそ消してし

まった記憶までも呼び起こして狂わせる。真に避けたいものをまぎまぎと見せつけられるのだ。

一般人は当然のこと、魔獣と戦えるような心強き者でさえ楽には凌げない。

それでもまさかケイが先に脱落するとは思ってなかったが。

「うちのカレンは十年間の記憶を無くしていてな。その間に何かあったのかもしれない。ケイはどうなんだ？」

「本人に直接聞いて。私からは言えない」

ミロシユはケイの暗い闇を知っていたが何も答えようとはしなかった。

なので深入りせず、代わりに「君は何が見えるんだ？」と尋ねたところ、

「馬鹿馬鹿しいものが見えるだけ」

ただ一言つまらなそうに呟いた。



「——待って!!」

ドンスタ現象の影響下から脱出して、一番最後にカレンが目覚ました。

今のは寝言だと思いが一応荷車を止める。

「はいはい待ちますよ」

「おはようカレン！ もう変なものは見えないから大丈夫だよ！ それよりもずつとうなされてたけど悪い夢でも見てたの？ 大丈夫？」

「……あ、おはよう。うん、もう大丈夫」

「ならよかった！ とところでどんな夢を見てたの？」

カレンよりも激しく幻に苦しんでいたケイであったが、今では何事もなかったかのように復調していた。

いつもの遠慮なし発言が光る。

「別に大した夢じゃないよ。そこまでちゃんとは覚えてないし。あんまり言いたくない」

「じゃあ、最後の『待つて』は誰に言ったの？」

「それは……」

二人旅をしていた頃から悪夢にうなされて同じ目覚め方をするのを何度も見てきたが、その内容については頑として話してくれなかった。

ただ、パパママと喧れていることが多いので、今回も離れ離れになった肉親を求めていたのだろう。

「……んに」

「え？」

「だから……アレンに待つて……って——」

一瞬耳を疑った。

そして次の瞬間には縮地術を以ってカレンを抱きしめていた。

「パパはどこにも行かないからな！ ずうつと側にいるぞ！ その先に俺はいるぞオ！」

「ほらあ！ こうなるから言いたくなかったのよ！」

「カレンがおばあちゃんになっても一緒にいてやるからなあ！」

「あらあら」

「甘えんぼさんだねー」

「……お子様」

愛犬にするように撫でながら頬ずりしていると、温かく見守られているのもあってカレンの顔が急激に赤く熱くなってきたのでそこで離れた。

少女は今とても難しい時期にいる。深追いは禁物だ。

もうすでに必要なないのだが、ここまで来たら最後までとミロシユ以外の全員で荷車を引いて街を目指し。

正午過ぎにはその全景が見えてきた。

「ねえ、いまさらだけど本当に大丈夫なの？」

先ほどのアレ以来ずっと目も合わせてくれなかったカレンが袖を引いて尋ねてきた。

酷く不安げな表情をしている。

「何がだい？」

「あの街には魔人がいっぱい住んでいて、あたし達は勇者一行なんだよ。」

「うん」

「街に入った瞬間に襲われない?」

「うーん、どうだろうねえ。……まあ、たぶん大丈夫でしょ」

「たぶんって何よ!」

望んでいたものとは異なる曖昧な答えに反発する。

仕方がないので納得のいくように一から説明してやることに。

「前にも話したが、魔界の生物は暴虐神の眷属だ」

ヴィールタスは中央大陸で匠人族^{ドゥーマン}以外を滅ぼした後のことも考えていた。それは共生の道だ。

魔人はたしかに血の気が多いが気高さと勇敢さを持ち、義に厚い。何を隠そう彼女の兄に似せて創ったからだ。

「少しずれるが、未亡人が夫の影を息子に求めたとでも言えればいいかね」

「嫌な例えねえん……」

だから魔人には理性があるし、ドゥーマンと共生できるということ
は人族や長耳族との共生も可能だ。俺の師がそうであったように。

逆にヴィールタスの悪意をふんだんに注ぎ込まれた魔獣に理性は
まずない。

生きるために他を喰らい、他を喰らうために生きる。

本能に操られて動く真正銘の獣だ。

「もちろん例外はある。人族にだって善人がいれば同じ種族だとは信じ
たくない極悪人もいるのだから、魔人にも温和で臆病な者がいる。
理性と知性を持った魔獣だって極稀にいるぞ。ロジャーが良い例だ」
まあ、奴は分類上魔獣としていてるだけでほとんど人みたいなものだ
が。

「そもそも、だ。勇者の顔を分かる奴がそういると思うか? 逆に聞
くが、この中で魔王の顔を知っている人は? もちろん俺は知らん」
カレンはケイ達と顔を見合わせたが、やはり誰一人として首を縦に
振りしなかった。

「そういうことだ。これで安心できたかい？」

「……うん」

他種族皆殺し令でも下されていない限りはまず襲われる心配はない。
い。

そこまで言わずともカレンは納得して荷車を引いた。

「ちなみにそこまで多くはないが《魔獣》^{イビルニア}の横に並べて《魔人》^{イビルマン}と呼ばれるのを嫌がる者もいる。彼らは《戦想族》^{ウォーゲイザー}を自称しているので言葉には気を付けるように」

「へえー」

「わたしたちもそれは知らなかったよ」

「……そこに私を入れないで。本で読んだから知っている」

蘊蓄を垂れながらいよいよ都市の眼前にやってきた。

中央大陸の都市と同じように石造りの城壁があり、鉄の城門があり、鎧を着込んだ門衛が配置されており、

これだけでも魔人がまともな知恵を有することが分かる。

「——その五人組、止まれ」

門は開かれているが、やはり素通りはさせてもらえなかった。

(どうすんだ先輩、やるの力?)

ラクサだけでなく、ケイ達もいつでも門衛を切り伏せられるように備えていた。

……まったく、これだから人族とかいう種は野蛮で困る。

「はいはい何でしょう？ 荷物検査でしたらどうぞどうぞ」

「もちろんそうさせてもらおう」

門衛の彼には六本の腕と四つの目があり、我々の荷物をまとめて探り始めた。

それと使っていない一つの目でこちらを一人ずつ見定めていく。

「人族と半長耳族……それと妖精か。珍しい組み合わせだが、何用だ？」

「ローランゼンフトウに行く予定なんですけど、この街で補給をと」

「そうか。……よし、通っていいぞ」

「ええっ!？」

あつさりと通行を許可されたことにカレンが驚いて声をあげた。

「なんだカレン」

「だってほら、こんな簡単に通れるとは思ってなくて。腕一本置いてけとか言われるんじゃない」

「おい。この娘っ子は初めて魔界に来たのか？」

「ええそうなんですよ。よく言い聞かせておきますので」

「娘っ子よ、恥をかかぬよう覚えておけ。人族の土地では我らを害虫のように扱っているそうだが、我らはそのような下卑た真似はせん」
彼はわざわざ腰を落とし目線を合わせて説いた。

カレンは爬虫類じみた四つ目と六本腕の迫力にいくらかこわばりながらも、最後まで聞いて頷いた。

「それじゃ、ごゆっくり」

もう何も言うことはない、門の側に戻って寄りかかり六本腕を組んだ。

「行こうか」

職務を果たした彼に軽くお辞儀をしてから進む。

それでもまだラクサとカレンは恐る恐る門の先へ踏み入れたが、後ろから襲われることなどなかった。

「あー、怖かったあ……！」

「ねー、いつやられるかと」

「そういった誤解や思い込みが争いを生むのだぞ」

「でもお、アタイも正直なハナシ『この先へ進みたくば俺を倒してゆけ』くらいは言われると思ってたわよおん？」

「それは……あつてもおかしくない」

力量差も読めず、というよりか読めた上で昂りを抑えきれずに挑んでくるような阿呆は实际多い。

……つたく、これだから魔人とかいう種は野蛮で困る。

第六話 「この想いは恋だろうか」

「なんか、思ってたのと違う」

街に入って宿を探している際にカレンがまたしてもよからぬことを口走った。

「そこら中に血みどろの死体が転がっているとでも思ったか？　すぐその屋台で人間解体ショーでもやっているとでも思ったか？」

「……………うん」

「こーれだからお子様はさあー！」

人族の街とそう変わらないレンガ造りの家並みに石畳。静かで緩やかな人の流れがあれば繁華街では騒々しくひしめき合っており。

菓子パンの甘ったるい香りで包まれたかと思えば鉄板で焼いた肉の塩辛さが鼻と胃袋を刺激し、どこからか薬品の青臭さなんかも漂ってきて…………。

目を瞑ってしまえば人族の街にいるのか魔人の街にいるのか判別できなくなる。

大昔の偉人も、俺の師匠であった者も『世界は繋がっている』と言っていた。

至言に違いない。

だというのに、何も知らない知ろうともしない臆病者が責任感のない勝手な憶測で、薄汚れた金と虚しい名誉のためにあることないことを詩や本に描写するせいで、カレンのように純粋な子供がろくでもない先入観を持つてしまう。

ただちよつと人族とは違って魔界の住民にはツノや尻尾が生えたり、背丈や横幅が倍近くあったり、手足が多かったり、身体から煙や炎やらを噴き出してたりするだけだ。

少しばかり闘争が趣味なだけの多様性に満ち溢れた素晴らしい種族である。

ざらざらして刺々しい者がいれば丸っこくてつるつるした者もいるので、カレンのような子供は慣れてしまえばむしろ好きになるはず

だ。

「皆の衆、アレを見たまえ」

ちようどいいものを見つけたので、全員の目を一点に向けさせた。年の頃はカレンより二つ三つ下だろうか。

それこそ人族とほとんど変わらない見た目をした子供が、異形と形容するほかない貌の子供と何の隔たりもなく楽しく遊んでいる。

「へえー……………すごい」

「ここではあれが当たり前なんだね」

「そうだ」

少なくとも五百年間はこの地に住んでいたので自信を持って言えるが、今も昔も魔人は素直で清らかな心をしている。

耳が長く長命であったり、背が低く筋肉質であったり、真つ二つにされようがバラバラに弾け散ろうが元通りに蘇るだけの、些細な身体的特徴の違いで恐れ蔑み迫害する人族とは比べるまでもない。……まあ、最後のは魔人でも許容できないかもしれないが——

「——おーいっ！」

それは唐突に。

いつか直視しなくてはならない事実が今、向こうからやってきた。

「なーなー、ねーちゃんたち人族だよな？」

「海の向こうからきたの？」

「うん、そうだよー」

二人の子供がこちらに気付いて駆け足で寄ってきた。

特に敵意などはなく、何か聞きたいことがあるようだ。

「ならさ、こいつのとーちゃん知らない？」

「きみのお父さん？」

「うん。ぼくが言うのもおかしいけど、けっこう変な見た目してるんだ」

そう言っつて地面に爪を立てて、ガリガリと父親の輪郭を描いていった。

完成した絵はヒトというよりかは虫や獣を混ぜ合わせたものに近い異形であったが、少年が愛をこめて描いたおかげでとても優しく思えた。

「お前のとーちゃんが行ってもう三年経つっけ？」

「四年だつて」

「きみはさつき『海の向こう』つて言つてたけど、お父さんは中央大陸に行ったの？」

「そうだよ。戦争に行つたきり帰つてこないんだ——」

◆?◆?◆?

「入るぞー」

カレン達のいる女部屋のドアに手をかけ、質量以上に重く感じるがそつと開く。

やはり室内には重苦しい空気が漂っていた。

「……あー、お嬢さんがた。少し遅めの昼食にでも行きませんか？」

女性陣と鳥一匹を見回したが誰もこちらを見返さず、すぐには答えなかった。

「ごめんねアレンくん、わたしはいいや」

「……じゃあ、あたしも」

「つーわけでオレも残るぜ」

「私が見張っておくから行っていい」

どこぞの街の大食い大会で優勝し、《山喰いエルフ》の異名を手にしたカレンまで遠慮するとは。

「そうか……。なら一人で行つてくるか」

「アタイは付きあうわよおん」

背後からやってきたグリゴールに腕を引かれ、そのまま棺の蓋を閉めて宿を出た。

街並みは俺が知っている頃のはすっかり変わっているので、また新しく詰め込みながら散策し。

グリゴールが休憩を提案してカップルが好んで座りそうな、広場の

噴水の縁に腰を下ろした。

「はあい、同じの買ってきたわよおん」

「お前わざとやってるだろ?」

「何のことかしら?」

彼女は昼飯代わりに小腹を満たすものを求めに行き。

よりにもよって二本合わせたらハートの形になる、頭が足りない人用の串焼きを買ってきた。

もしかしてまだ幻覚をご覧になっていて?

「旨いな」

グリゴールの口から「あーん」のあの字が出てくる前に掠め取って齧りついた。

動物性の濃厚な油がじゅわりと染み出てとても美味しい。

何の肉かは知らないが噛み応えもあって、千年の間に衰えてしまった咬合力の回復に良き。

「つれないわねえん。それでこれ、何の肉なの? 牛かしら?」

年頃の女性らしく豪快に齧りついてから純粹な疑問を口にした。

「ん……さあな。少なくとも牛でも豚でもないことだけは確かだ」

グリゴールは肉を咀嚼しながら目を細めて「どうして?」という顔をすする。

「魔界にいわゆる『動物』なんてものは住んじやいない。いや、住めないんだ。ヴィールタスが義姉を最も憎んでいるせいだな」

豊穡神ファテイルの眷属であるヒト以外の動物、それと植物なるものは魔界では生きられない。

環境が合わないだの魔獣が食い荒らすだの理由は様々だが、とにかくすぐに死滅する。そうなるようにヴィールタスは愛憎籠めて封魔大陸を形作つたのだ。

「つまりこの肉は三つ目で首が二つある牛似の魔獣とか、十本足で黒い翼を生やした蛇の顔を持つ豚似の魔獣とか、そんなところだろう」
「なるほどねえん。……ま、美味しいなら何でもいいケド」

平均して人族より体格の勝る魔人製の串焼きを黙々と食べ、小腹が破裂しそうなくらい満たしたところで、グリゴールの方からあのこと

について切り出した。

「今までなんだかんだ避けてきたけど、そりやいつかは向き合わなきゃいけない問題だったわねえん」

「君とミロシユはなんともないんだな」

「アタイとミロシユはそこまで澄み切ってはいないから。やるかやられるかが戦争だつて割り切ってるわよ」

相手が理性のない狂った獣であれば無心で駆除すればいい。……だが、魔人は狂った獣とは違ってヒトである。

我々と同じ言葉話し、理性と情とがあつて、愛する子がいて妻がいて親がいる。もちろん志を同じくした朋友だつているだろう。

グリゴールとミロシユはそれを理解した上で刃を交え、何十何百もの息の根を止めてきた。そうしなければ自分の愛する者が被害を被ってしまうからだ。

そして千を超える数屠ってきたケイは、今になって彼らがヒトであることを知った。

「さっきのが子供じゃなくて、お嫁さんか親御さんだつたらまだよかつたんだけど……」

「それはやはり、ケイの過去に関係しているのか？」
導き出した答えを思い切つてぶつける。

グリゴールは恋人が重い病に罹り余命宣告をされたような、いかにも乙女然とした憂いを帯びた目でここではないどこかを見つめた。

彼女はほんの数分慮りて、ほうつと息を吐いてからこちらを向いた。

「アレンちゃんになら教えてもいいわねえん。……ケイは孤児よ。そして今から八年前、まだ十四になったばかりの日に、育ての親である師匠と家族同然の仲間を皆殺しにされたのよ」

「誰にやられた？」

「ケイから家族を奪った男は、アナタから親友をも奪っているわ」
「ノヴァク……!」

その名を口にするだけで血潮が熱くなり腹の中が煮えたぎる。

この想いは恋だろうか。いいや、殺意だ。

必ず貴様の行動に責任を取らせてやる。

「大丈夫う？ 凄い顔してるわよおん」

「悪い……続けてくれ」

兎にも角にも合点がいった。

勇者様は魔人の子供と自らを重ねてしまったのだ。

自分のような思いをする者を無くすがために戦っているのに、知らず知らずのうちに生み出していったとなつては飯も喉を通るまい。

「あとはそうねえん。四年前の大戦で黒騎士アンデイに呪われた……正確には暴虐神の聖呪を受けたつてのは知っているわね？」

「ああ、どんな最後っ屁を喰らったんだ？」

「心を脆くする呪いよ」

「あー……」

よくもまあドンピシャな置き土産を残してくれたなど、不謹慎だが思わず拍手をしてしまった。

「アタイはさ、弱いじゃない？ アナタと同じ持たざる側でしょ？」

「そうだな」

二爪三爪の魔獣なら単独で撃破し、四爪魔獣の攻撃さえ捌いてみせる筋肉モリモリマッチョマンに弱いという言葉は当てはまらないのだが……。

魔法学院を五百年に一人の成績で卒業した大賢者、四将との一騎打ちを制した勇者様と比べると数段劣るのは仕方のないことだ。

「ケイがいなかったらとつくに十回くらいは死んでいるはずんだけど、姉として時々思うわ。あの子が何の力も因縁もない普通の女の子だったらしいのにつて。いつそ勇者なんかやめて帰りたいって言ってくれないかしら？」

「ああ、その気持ちはよく分かる。俺もカレンに常々思っているよ」

どうしたもんかねと、二人同時に溜息を吐いて肩を落とした。

しかし俺達がここでああだこうだと論じても最終的に決定するのはケイ自身だし、今は側にいる同性に任せるのが一番だと分かっている。

分かっているからこそ、己の無力さを感じて嫌になるのだ。

「これが励ましになるかは分からないが、俺はケイと同じく真実を知った勇者の末路を数多く看取ってきた。嫌気が差して引退し平穏な暮らしを営んだ者もいれば、目と耳を塞いで戦い続けた者もいる。中には不殺を誓ってどちらも救おうとした者までいたさ」

「どうなったの？」

「思想は立派だったが力及ばず……引退後に魔人ではなく同族に暗殺されたよ。しかも次なる勇者は彼の弟子であつてな、師の無念を晴らさんがため修羅の道を選んだ。種族問わず大虐殺の道を」

「励ます気あるのお？」

「だから分からないと言つただろう」

道は無数にあると伝えたのだがどうも励まされなかったようで、大きな溜息を吐いて脱力し空を見上げた。

ならば明るい未来に向けた明るい勧誘をしてあげよう。

「お詫びに一つ、秘密の道を教えてやろう」

「聞くだけ聞いとくわ」

「勇者などやめて共に来い」

「どういう意味よおん？」

「俺が真に望むのは『理不尽な死と悲しみのない世界』だ」

欲を言えば誰も死ぬことのない世界が一番だが、寿命や合意の上での仕合で命が尽きるのならいい。

だが、本人か周りの者が納得できない理不尽な死に方は駄目だ。多大な悲しみと後悔が生まれてしまう。

「それはなんというか、正しくない」

「ずいぶんと人間らしいことを言うわねえん」

「らしいとはなんだ、らしいとは。俺は正真正銘のヒトなんだから当たり前前だ。それも庶民代表だぞ」

いつの日か世界を統一して、誰も罪を犯さないように管理する。どうしても改心が見込めない悪には生まれ直してもらおう。

無益な争いをする者がいれば仲立ちを。

私益のために争いを起こす者がいれば鉄拳を。

悪神が天災を起こすのならば空の上まで会いに行き、宇宙の果てま

で殴り飛ばす。

「人様を泣かせる糞野郎は全員ぶつ飛ばす。単純明快だろう?」

「アタイもそういうのは好きよおん。それはそうとして、世界征服なんて出来ると思うわけ?」

「俺一人でやろうものならまた石の中に閉じ込められてしまうよ。だから君達のような善良で力ある人材を常に必要としている。もう一度言うぞ、俺と来い。わしと共に力を合わせて銀河系を支配するのだ!」

時を変え人を変え、何千何万と繰り返してきたいつもの勧誘をぶつけた。

どういうわけか成功率が極端に低いのだが、今回は行けそうな気がしなくもない。

「……………今はまだ保留ねえん。頭の片隅には入れておくケド」

「こちら側に来るならいつでも歓迎するよ。向こう千年は変わらず募集しているからね」

「はいはい、そろそろ帰るわよおん。ああそれと」

グリゴールは立ち上がり際にこちらを振り向き、苦笑しつつ付け足した。

「もつと言い方を考えた方がいいわねえん。あれじゃ勧誘というより大悪党の誘惑か洗脳だもの。今までほとんどまともに取り合ってもらえなかったでしょ?」

「おっしやるとおりで」

第七話 「二つある」

もしかしたら部屋の中では時間の流れが遅くなっているのか、ケイとケイを励まし隊の皆は一日中籠りっぱなしで夕食すらも摂らなかつた。

「おはよーっ!!」

ただそれでも一晩眠ればなんとやら、乙女心となんとやらで、朝にはいつも通りの状態に戻っていた。

「ごめんねグウ！ アレンくん！ わたしはもう大丈夫だから早く朝ご飯を食べにいこ！ もうお腹ペコペコ！」

男部屋のドアを勢いよく開けてまくし立て、寝起きの悪いミロシユを起こしに再び自室へ戻って行った。

彼女がどのような決断をしたのか、それともまだ迷っているのかはいづれ分かる。

こちらからは何も聞かない方がいいだろう。

「昨日のことには触れない方向で。あとは流れで」

「そうねえん」

「それといつまで俺を抱き枕にしているつもりだ。ふぎけた寝相をしやがって」

「あらあ、ごめんあそばせ」



ここら辺で最も大きくて盛況な店の中で。

周囲のどの席を見ても我々以外に純粋な人族はいなかった。

だからといってこちらを見てフオークやナイフを投げつけてくる者など一人もいない。

「注文がお決まりでしたらこちらの呼び鈴をお使いください」

オーダーメイドの制服を着た給仕ももちろん、他の客にするように丁寧に案内してくれた。

もはや我々の中に「魔人とはまともな意思疎通が取れない」などと

考える者はいないだろう。

ただ、ここで新たな問題が浮上した。

「で、どれが毒入りなの？」

「なんでいきなりそんなこと言うの？ おじぎして？」

食料問題である。

ドNSTA現象の土地に迷い込んでしまったせいで予定の二倍近く時間がかかってしまったが、ケイとグリゴールが背負う頭の悪そうなりユック——軽く見積もっても成人男性の死体がそれぞれ八個ずつ入る——に詰められた食料が枯渇することはなく、今の今までずっと中央大陸から持ってきた干し肉やら干し魚やらを食べてきた。

つまりまだ、串焼きを食べた俺とグリゴール以外の三人は封魔大陸産のものを口にしていない。

「そうだよカレン、失礼だって」

「だってさ、中央大陸にだって毒のある食べ物はいっぱいあるし、魔界にないわけがないじゃん」

「……よくぞ見破ったな。それではボクがおじぎします」

カレンは俺の洗練されたおじぎには目もくれずに、ケイとミロシユの間でメニューを開いて女子らしく話し合っていた。

悔しいので蘊蓄だけでも垂れ流してやる。

「ちなみに魔人だからといって毒に耐性があるわけではないからな。我々人族より身体が大きく頑丈なため致死量が大きいだけで毒は毒だ。オカエシダケを食べれば身体が崩れ落ちるし、マドロミクチナシの実を食べれば昏倒する。……まあ、中には完全な耐性を持つ者もいるが」

「へえー。それでどれが毒料理なの？」

「毒料理は注意書きと共にだいたい最後の方にある。クセになる味で美味しいいよっ。」

「いらない」

一応は言われた通りに最後の方をめぐって毒料理のページを開き、破り捨ててる幻影が見えるくらいの勢いで閉じた。

「ほらアレンちゃん、アタイ達も決めるわよ」

「そうだな。すみませーん」

自分で選ぶより店の人にオススメを聞くのが早いので呼びつけ。

給仕さんが複数の触手を用いて器用にお冷を配り終えたあとで尋ねた。

「そうですね、本日のオススメは双頭眼鏡鶏ツインヘッドグラスコックのオムレツでしょうか。人族の方でも美味しくいただけると思います」

頭髮代わりに生えている青色の触手をぐにやぐにやと蠢かせ、ヒトとは上下逆に位置する目と口でにこやかに笑いながら教えてくれた。

中々に衝撃的な貌をしているが、喜ばしいことに嫌悪感を持つ者はおらず、カレンに至っては口に出さないものの触りたそうにうずうずしている。

「じゃあそれをお願いします」

「アタイもそれにするわあん」

「わたしは昨日食べてないから、二皿ください」

「あたしもお腹すいてるから……とりあえず二十皿で！」

「右に同じく」

給仕さんはカレンの注文を聞いた瞬間触手をビクリと逆立たせて固まり、その次の人物の言葉で俺の思考も停止した。

「あの一？」

「あつ、申し訳ございません！ ええと、一皿と一皿と二皿と二十皿と二十皿……双頭眼鏡鶏のオムレツが計四十四皿でよろしい……ですか？」

本当にそれほど食べるのか。本当にあなた達は人族なのか。

などと言いたげな目で確認したが、カレンもミロシユもさも当たり前のような顔をしていたので何も言わずに控えた。

それからすぐ厨房より「はああッ!」と喚声が起こったが、我々ではないどこかのマナーの悪い客がふざけた注文を出したに違いない。きつとそうだ。

なぜか厨房内の騒がしさが一段階上がり、十分とそこらで先ほどの給仕さんが網のように束ねた触手に皿を乗せてやってきた。

ちようど半分の二十二皿を置き、卓のほとんどが白と黄と赤で埋

まっってしまった。

「残りの半分はいつ頃お作りしましょうか？ 三時間ほど経ってから
でよろしいですか？」

給仕さんが極めて常識的に考え常識的な質問をする。

対する非常識人二人の答えはというと、

「あたしは三十分くらいでいけるけど、ミロシユは？」

「私もそれでいい」

「……か、かしこまりした」

よって滑らかな触手をガチガチにこわばらせながら下がった。

さながら邪悪な魔獣に「皆殺しにされたくなければ生娘を生贄に差
し出せ」と脅された村長のような反応である。

これではどちらが魔人か分からない。

「いただきまーす！」

さつきは毒だのなんだのと言っていたカレンは視覚と嗅覚によつ
て目の前の料理が安全なものだと確信し、スプーンで豪快に掬って最
大限開いた口に放り込み。

誰よりも早く味を知って顔を綻ばせた。

これにて食料問題の解決である。

「あの、ミロシユさん？」

「……何」

カレンの毒味が完了し、ミロシユがスプーンを手にしてオムレツを
割ろうという時に止めた。

ムツとしてレンズ越しに睨まれたがそれでも聞いておかねばなら
ない。

「本当に食べるんですか？ その量を」

その体でとまで言うのと嫌われそうなのでやめておいたが、ミロシユ
は三人の中で最も小柄である。

ものさしを使っておらず目測なので正確性に欠けるが、グリゴール
が百九十センチメートル、ケイが百六十三センチメートル、そしてミ
ロシユが百五十四センチメートルと、成長期のカレンよりも少し大き
い程度である。

しかも運動量に至っては我々の中で最も少なく、極力動かないようにしている。

胃に穴でも空いていなければそれほど食べる必要があるとは思えない。

「私より小さいカレンも同じ量食べている。まだ何かある？」

「いえ……」

早く食わせろと言わんばかりにスプーンを握る手に力が込められていたのでそれ以上は何も追及しなかった。

しかしまさか、魔法学院首席の賢者様が子供染みた対抗心に突き動かされているのか？ 不愛想な顔をして可愛らしいところもあるものじゃのう。

などと心を爺にして二人の食いつぶりを見守った――。

おおよそ三十分が経ち。

あの給仕さんが何も持たずにやってきたが、どの皿にもかけら一つ残っていないのを見て少しの間硬直した。

「本当に平らげるとは……。すぐに残りを持って参ります！」

もちろんカレンがミロシユの分を食べてあげたとかではない。

彼女は自分で頼んだ分をきっちりと平らげた。どころか食べる速度に至ってはカレンよりも一段早かったのだ。

彼女が《暴食》の二つ名で謳われる理由がよく分かった。

ひよっとすると現代では度を越えた大食いは特異体質ではなく、探せばすぐに見つかるのだろうか？

(……おい、あそこの席見ろよ)

(あいつら人族だよな?)

(しかもどっちも女だぜ……。どうなってんだアレ)

耳をすませば次から次へと聞こえてくるわ聞こえてくるわ。

どうやら魔人からしても非常識な存在らしい。

「今まで食べたオムレツの中で一番美味しい！ いくらでもいけるよねこれ！」

「……ん」

二人は恥も外聞もなく思うがまま卓上に埋め尽くされたオムレツ

を食していく。

一時は盛り返した黄と赤が次々と白に染められていく。

そして、ついに。

「ぐちそうさままでしたーっ！」

「ぐちそうさま」

それぞれ二十皿、二人合わせて四十人前を完食してしまった。

立ち上がったたり直接話しかけてくる者こそいないが、そこら中から感嘆の声や拍手が鳴り出した。

俺から見てもちよつとした手品か魔法だと思えないのだから当然のことだ。どこへ行っても大食い芸だけで食っていけると保証しよう。

「あつ……えつと……」

今更恥ずかしくなったのか、カレンは顔を俯けて縮こまってしまった。

我々の中で群を抜いて凶太いミロシユは全く気にもせず飄々としていたが。

「それで、あの、ミロシユさん」

「何」

満足いくまで食べたからか、食事前と比べてわずかに声が弾んでいる。

これはかなり機嫌がいいな。

だから思い切って聞いてみることにした。

「どうしてあなた達はそこまで食べられるんですか？」

「どうしてって、私は《魔臓》持ちだから」

「ま……ぞう……っ？」

生まれて初めて聞く言葉だ。

全くの門外漢なので詳しい説明を求めた。

「簡単に言えば魔力を貯めておける不可視の臓器。魔力溜まりとも言われる」

「ほう」

この星の全ての生物は多かれ少なかれ魔力を保持している。

ヒトは魔力のほとんどが血液に含まれており、鍛錬によってその最大保有量を増やすことができる。

使用した魔力の回復には休眠や食事を必要とするので、余程のことがない限り短時間で使い切るのは望ましくない。

ここまですべてが千年前に最先端だった情報だ。

「魔臓は血液中の魔力とは別に膨大な魔力を貯めておける。もちろん魔臓にも容量はある」

つまりは血液中の魔力を全て使い切っても、魔臓から取り出して使えるわけだ。

普通の人が銅貨や銀貨を手で持ち運ぶのならば、魔臓持ちは高価な宝石をポケットや荷袋に入れて持ち運ぶのに等しいといったところか。

「魔臓にはどうやって魔力を貯めるの？」

「摂取した栄養を魔力に変換・凝縮し貯蔵する」

「どうりであそこまで馬鹿食いつたわけか」

思い起こせば人並み外れた魔力量を持つ者の共通点として、たしかに大食いが多かった気がする。よく食べよく飲みよく吸うことが偉大な魔法使いへの近道だと教えられるくらいには。

なるほど合点がいった。

「それじゃあミー」

「カレンにも魔臓がある」

一番小さい身体で誰よりも多く食べる少女に全員が目を向ける。

カレンの表情が困惑と照れの混ざりあったものになった。

「そう、なのかな？」

「魔臓が満杯じゃない限り、満腹なのにどこか一か所だけ穴が空いている感覚があるはず。私はこの辺り」

ミロシユが肝臓の下部を指差す。

「うん……あるにはあるんだけど……」

何か言いにくいことでもあるのか、急に言葉を詰まらせた。

もったいぶってないで早く言えとミロシユが目を細めたので、観念して右の人差し指で心臓の右あたりを。そして左の人差し指でヘソ

の上を指して、

「——たぶん、二つある」

この日俺は初めて、ミロシユの間抜け顔を拝見できた。

そして勇者一行や戦災龍と並んだせいで霞んでいたが、ようやく再認識できた。

「えへへ……」

やはりこの子は神々の欲しがる至宝——《ジ・ステラ焦がれ星》たる怪物だと。

第八話 「健闘を祈る」

一歩踏みしめる度にザクリザクリと音が鳴る。

それは昼の空と深い海の間くらいくらいの涼し気な色をしているが、成分上は紛れもなく砂と土であり冷却効果は一切ない。

どこを見回しても草木が一本もない青土砂漠ブルークレイデザート、水分の必要なほぼ全ての生物にとって過酷な環境に私たちはいる。

じりじりと痛めつけるような日差しが照りつける灼熱の砂漠で各々が距離をとって歩く中、五千歳を過ぎた老いぼれにぴたりと肩を寄せてくる女性が一人。

「アレン」

「はい、何でしょう」

「カレンを私に譲って」

「一時間おきにそれ言うのやめてくれませんかね？」

カレンが二つの魔臓を持っていると告白した日、ミロシユは観光と買い入れの誘いには乗らずただ一人部屋に籠り。

翌日何事もなかったように部屋から出て、カレンを朝から晩まで食べ歩きに連れ回した。

そうして互いの魔臓を満たした上でラクサに視てもらい。

『私とカレンの魔力量を比べて、どう？』

『アー……。嬢ちゃんはお前さんの二倍……いや、三倍近い魔力を持ってるナ』

それからはもう定期的にカレンをくれカレンを売ってくれあなたあなたの娘を私にくださいと、頭の悪い彼氏めいた頼み方をしてくるのだ。

「ねえ、カレンを譲って。代わりに私の全てをあげる」

「色仕掛けのつもりかい？」

炎天下で構わず腕を絡ませて柔らかい部分を押し付けてくる。

ミロシユは成長途中のカレンと変わらないほど小柄で、端正だが派手さのない物静かな顔つきをしているわりにケイやグリゴールよりもよっぽど主張の激しい豊満な肉付きをしており。それでいて勇者一行としての運動量が一般人よりは数段勝るので、引き締まるどころ

は引き締まっているという男ウケの塊である。

それこそ色仕掛けが初めてでぎこちなくとも、大抵の男を籠絡できるだろう。

だが、残念ながら、このアレンに付け焼き刃の技など通用せん。

そもそも二千歳未満の小娘はお断りだ。

「カレンは渡せないけど、俺ならいくらでもタダであげるよ？ お兄さんじゃダメかい？」

「興味ない」

今回も無理だと分かると、素早く腕をほどいて素知らぬ顔で離れていった。

うーむ、最近の若者とやらにはまだまだついていけないな。

一日、

二日、

三日と。

ただただ茹だる暑さの中を歩き続け、各々の脳みそが青を暖色だと思ひ込みつつあった。

「太陽が……」

「憎い」

カレンとミロシユが息を合わせて恨み言を呟いた。

ただでさえ歩きにくい砂の上と著しく水分を奪い取る灼熱の組み合わせがあつては、いくら勇者一行と言えど体力の消耗も激しいだろう。

こまめな水分補給と休憩も必要なおかげで、仮に砂漠ではない平坦な土地であれば二日で到達できる距離を五日かけている。

ドNSTA現象の地ではあれほどありがたかった太陽が、今では敵以外の何者でもない。

「うあー……」

ちよつとした丘を乗り越え、下り坂に入ったところでカレンが風呂上りの中年男性めいた掠れた声を出した。

「なーんか静かだなあ。魔獣は一匹もないし、今までとはぜんぜん

違う」

「そうねえん。魔界の戦力は軒並み向こうに回してるのかもね」

砂漠が広大で住む生物がほとんどいないからというのもあるが、我々はまだ魔獣や敵対的な魔人と遭遇していない。それだけがせめてもの救いか。

これを言うのと頭のおかしい人間扱いされるので心にしまっておくが、奴らは『出ない出ないと油断していると出てくる』ことが多い。だからできるのなら何も言わずに黙々と歩いてほしいものだ。

それでもラクサにだけは話すと、

（オレはどっちかと言えば先輩よりの考えだぜ。ジंकスってのは大事だ）

嬉しい答えが返ってきた。

やはり年を重ねると感じるものがあるのだろう。

「まっ、魔獣なんてもう関係ないけど!!」

「不機嫌だな」

「そりやそうよ！ 暑くて喉はカラカラになるし、砂のせいで脚は疲れるし、早く街に着いてベッドで休まないと！」

「ああ、そうだな。立ち止まらない限り街へと道は続——」

——ズズズズ！ ……と。

俺があと一語で言い終えるのを遮って突然の揺れと地鳴りが起こった。

「えっ！ なに!?!」

「地震!?!」

揺れと共に下り坂の先、すり鉢の底のような場所に大穴が空き、そこに砂が流れ込んでいく。

「アレン助けて！ 動けない！」

「掴まれ！」

咄嗟に対応できなかったカレンが背後から雪崩のように押し寄せてきた砂に胸の下まで埋まり、助けを求めた。

すぐさま駆け寄って、怪我をさせない力で引き抜きにかかる。

ケイとグリゴールも同じようになったミロシユを助けようとして

いた。

「ぬ……おりやあッ！」

どうにか引き抜くことはできたものの、

「下！」

「あッ」

すでに足元にはぽっかりと、底の見えない虚ろな黒が広がっていた。

「きゃあッ!!」

「絶対に離すなよ！」

俺だけならまだしも、このまま落下しては着地時の衝撃でカレンが痛みかねない。

それはまずいので、小刻みに足の裏を爆破させて勢いを殺す。

「うおっ」

ぼすんと、カレンを抱いたまま溜まっていた砂の上に着地し尻餅をついた。

これくらいなら問題ないはずだ。

「大丈夫かカレン？ どこか骨が痛まないか？」

「……うん、大丈夫えっ!？」

一安心したのも束の間、二人一緒にまとまって流れ落ちてきた砂に埋められてしまった。

それからすぐに揺れと地鳴りが止み、砂がざあざあと落ちてくる音も消えた。

（——《シヨウネンバクサイ掌念爆砕》）

カレンを片腕で離さないように巻き、もう片方の腕を伸ばして爆破と再生を繰り返す。

窒息してしまう前に砂を掻き出して抜け出さなくては。

「よし、手が出た」

砂の山から先に出て小さな身体を引き摺り出す。

「うげえ……砂食べちゃった……」

「今度こそ大丈夫か？」

「……いちおう」

ぺっぺつと口に入った砂を吐き出す娘を尻目に真上を見る。

あの穴は閉じていて、一切の光が差し込まなくなっていた。

(嬢ちゃん、先輩、聞こえる力!?)

(ラクサか、今どこだ?)

(地上ダ)

まだ思考の届く距離にいるラクサと通じた。

(今どうなっている? ケイ達は無事か?)

(揺れが収まったと思ったら、砂の中に隠れていたらしい魔獣が大量に湧いて出てきてヨ。絶賛交戦中ダ!)

(魔獣が出たの!?)

(どんなヤツだ? 数は?)

(アリジゴクとサソリを合わせてデカくしたような魔獣ダ。数は……正確には分からねーがとにかくたくさんダ。完全に包囲されているヨ)

(なら毒にだけ気を付けろとケイ達に伝えておいてくれ。では、健闘を祈る)

(……あいヨ)

そこで念話を遮断し、ふうとため息を吐いた。

「どうするカレン、休憩しようか?」

基本的に日の届かないこの場所はひんやりとして居心地が良
い。

熱った頭と体を落ち着かせるのには最適だ。

「みんなを助けに行かなくていいの!?! 魔獣に襲われてるんだよ!」

「仮にも勇者一行だぞ。大丈夫だって。彼らの実力を信じられないのか?」

仲間を信じろという陳腐だが刺さる者には刺さる言葉を有効活用してカレンを留めた。

ラクサの口調からしても大した危機ではないはずだ。

そもそも群棲のしよっぱい魔獣相手に追い詰められるようでは、どちらにせよこの先生き残れないだろう。

これで少しはサボ……休める。

「楽しみになさい。抱っこか膝枕でもするかい？」

「いらぬ。それよりもあたしたち、ここから出れるの？」

「いい感じに歩けばその内地上に出られるさ。ダメだったら天井を爆破して穴を空ければいい。——《月ノ欠片ヨ我ガ下照ラセ》」

光を生み出すと真つ黒な空間が真つ青に塗り替えられた。

天井は……目算で二十メートルほどの高さにある。

こんな砂漠にずいぶん広い休憩所があったものだ。

「あつ……あ……」

「どうしたカレン、まだ口の中に砂が残っているのか？」

「ちが……あれ……」

振り向いてカレンの震える指の先を見ると、光の行き渡らない薄闇の中に巨大な輪郭が。

「《月ノ欠片ヨ我ガ下照ラセ》………あちやー」

光を重ねて強くし、ハッキリと現れてしまった。

一応反響定位エコーロケーションを用いて幻覚や錯覚ではないかを確認するも。

たしかにアリジゴクとサソリを組み合わせたとしか表現できない、真つ赤な魔獣が目を光らせていた——。

「カレン」

「な……に……」

「俺が合図を出したら一目散に逃げろ。お父さんは今からこいつと話し合いをするから」

「わかっ……た……」

フシューフシューと。

興奮を高めつつある魔獣の吐息が聞こえる程度の小声でやりとりする。

「………走れッ!!」

カレンが翻って思い切り青土を蹴る。

貴重な餌を逃がしはしないと、魔獣が槍を何本も重ね合わせたような尾の先端から何かを射出した。

「させるか！」

確実に避けられないカレンを庇って飛び出す。

汚い緑色をした何かが鳩尾に直撃し、ドロリと溶けて落ちた。落ちずに付着したものは俺の衣服と肉をまとめて溶かしていく。

「なんだよ……けっこう溶けるじゃねえか……」

強酸性の毒弾が鳩尾から胸骨を、胸骨から臍物を、そして最後に背骨を溶かして貫通し、ボロボロの鍵穴にも見える空洞ができた。

滅茶苦茶痛い。身体の内側から赤熱した火かき棒でかき混ぜられている感じだ。

全身を同時に溶かされた経験のある俺でなきや、今頃激痛で気を失っているだろうよ。

「アレン!!」

「早く、行け。止まるんじゃねえぞ……!」——《血潮踊りテ腸隠セ》チンオオド

命が絶える前に、残りの全魔力と血液を投じて目くらましの煙幕を張った——。

(——早く!)

光も音も臭いもない真つ暗闇の世界で。

自分が自分であることだけは分かっている、手でも足でもない曖昧な何かでそこにある青白い光に触れる。

瞬間、目が覚めて私は帰ってきた。

「五秒は……かかってないな。よし」

赤く鉄臭い煙幕がまだ残っていて、カレンの駆ける音が五十メートル以上離れたところから聞こえる。

ほっと安らかな心で立ち上がった。

新品の血を巡らせて集中し、仁王立ちで構えていると次第に煙幕が薄れて消え、ヤツの巨体が視界いっぱいに現れた。

(おいラクサ、そこにいる魔獣は赤いか? 大きさはどれくらいだ?)

(何言ってるんだ? 擬態してたんだから青に決まってるだろ。大きさはせいぜい獅子くらいだな)

(……では、健闘を祈ってくれ)

ラクサが意地悪な妖精らしい嘘をついているのか、俺が目の当たりになっているのは青と真逆の紅に染まっただけで、竜にも勝る体躯の持ち

主だ。

どう考えても地上にいる群れの長である。

「俺の肉をあげるから上で暴れてる君の手下達を退かせてくれない？

実はこう見えてちよつとばかし昔に君達の主人、魔王をやつていてさ。もちろん今は違うから命令はできないけど、だめかな？」

「ギシイイツ」

「うおっと」

血の流れない停戦を求め、即座に返ってきたのはさっきのと同じ毒の弾。

なるほど、ハイワ的な話し合いをお望みか。

「ドーモ、アレン・メーテウスと申します。正々堂々戦いましょう。まずはおじぎをするのだ！」

第九話 「食べ放題」

——おじぎをするのだ！

言い慣れた言葉と共に《フルスベリンゲ十本指での筆記》を行い。

現在保有する魔力の半分を使用して圧力を与えた。生身の人間が受ければ二秒と持たず骨まで潰れる圧を。

「ギシ……イシイ……」

「ほう」

だが此奴は多少苦しそうにしながらも、高く上げた尻尾と重そうな鋏を地につけずに耐え切った。

ゆえに三爪以上の魔獣だと確定。

名前はそうだな、すでに別の誰かが名付けているだろうが
ブラッドハイスコープ紅 王 蠍とでも仮称しておこうか。

近頃の魔獣は丈夫だなと感心していると、怒りを感情を表すように尻尾の先端が膨らみ、再び毒の弾を撃ってきた。

それも一発ではなく、二発三発と続けて。

「連射も出来るのか！」

だがそれはすでに見切った。

追尾も分裂もしない遠距離攻撃などこのアレンには通じぬ。

余裕を持って避けつつ接近し、拳を叩き込む。

「壱の秘拳、壊門……ぐあぁッ！」

流石に主武装である巨大な鋏は最硬度を誇るのか凹ませることすらかなわず、返ってきた衝撃により指先から肩までを骨折。特に指の骨は全て粉々になってしまった。

まあ、薄々感付いてはいたが。

「なんのお！ 弐の秘拳！」

腹部は柔らかいはずだ。

滑り込んで切り裂く。

「斬鉄拳ンぬにゃアッ!？」

畜生オ、持って行かれた……！

「……んならこうだ！ 伍の秘拳——」

新しい腕を生やしながら滑り抜けて直ぐ尻尾に飛び乗りそこからさらに跳躍。

高所から回転を加えての踵落として背甲をぶち抜いてやる。

「——大噴石イッ！ ……いぎっ！」

骨盤を含む右脚の骨が全骨折および踵骨が粉々に砕けた。

身体を修復するため一旦距離を取る。

俺の拳が全く通じないのを知った魔獣は何の追撃もせず、ただ煽るように尻尾を左右に揺らしていた。

ならばその尻尾を二度と使えなくさせてやる。

「捌の秘けングほオッ!？」

鋼の柱を折る最大威力の蹴りが当たる寸前に。

ヤツは想定以上の速さで尻尾を振るって人をボールのように打ち返しやがった。

「がはッ!!」

ほとんど石のように固まった青土の壁に受け身も取れずに打ちつけられた。

よって複数の臓器が潰れ、潰れなくとも三十本近く折れた骨が刺さって穴を空け。

生きているのが不思議なくらい被害は深刻で十秒と動けなかったのに、やはり追撃は無く毒の弾も撃たず「次はどうする弱小な種族よ」などと小馬鹿にした目で佇んでいた。少なくとも俺はそう受け取った。

絶対に許さん。

「シュー、コォー……。シュー、コォー……」

熱くなつた血を頭と脚に回し、呼吸を整え……………瞬発——

（——星砕きイッ!!）

アリジゴクの大顎に捕らえられて腰から下を持って行かれながらも、顔面に頭突きをお見舞いしてやった。

さすがに少しはダメージが入ったようだが、同時に俺の頭蓋も弾け散った――。

「……まだピンピンしてるなあ」

俺が傷一つない身体で目覚めた時、ヤツもまた生きていた。

こちらを警戒しながらも、頭突きされた痛みと感触を払い飛ばすように大きく身体を震わせる。

そして相も変わらず犬のように尻尾を振るい眼をぎらつかせ、まだまだやれるぜと訴えていた。

「うん、間違いなく四爪だな」

《祖拳》《流星を砕く者》と謳われた我輩の拳を受けて倒れずにいるので、竜と同等以上の化け物だと断定。

人族の雑兵一万人と戦わせても皆殺しにできるだろう。

「それでも俺は、コレでいくぜ」

背負った異名と積み上げてきた経験が、拳で倒せと轟き叫んでいく。

彼にも王たる矜持があるらしく、俺を無視してカレンを追うとか地上にいる仲間を呼び寄せるといった卑怯な動きをしていない。全く当たらないと分かるや毒の弾も撃たなくなった。

その身一つで元魔王である俺に打ち勝とうとしている。

然らば応えねばなるまい、応えなくては名が廃る。

「化け物殺しの拳、しかと見せてやる。手始めにお前の鋏を壊す」

宣言。

瞬発、接近、壊門。

粉碎骨折。

鋏に変化無し。

修復、壊門。

粉碎骨折。

鋏に変化無し。

修復、壊門。

粉碎骨折。

鋏に――

「グフオッ！」

好き勝手に打たせてくれていた紅王蠍が急に殴り飛ばしてきた。それはなぜか。

「……今のでやつと、凹んだな？ 次で貫く」

一発で駄目なら二発、二発で駄目なら三発、三発で駄目なら千発でも万発でも同じ場所にぶち込んでやる。

「ギシッ……ギシイイイッ!!」

ついに王が雄叫びと共に重い腰を上げた。

その巨体からは予想も出来ないほど機敏な動きで鋏と顎を振るい、尻尾から絶え間なく毒の弾を射出して襲い掛かってきたのだ。

「そうだ、遠慮せずに来い」

一方的にやったりやられたりするのとはそれほど好きではない。全力で殴り殴られ蹴り蹴られ、最後に立っていた方が勝者だ。

「さあ、どっちが上かシロクロつけようぜ！」

◆?◆?◆?

「ごちそうさん。……おえ」

あの巨体を動かしていただけあって乾燥・圧縮してもなお大きいものをどうにかして腹に収め、感謝のおじぎを。

それから鋏にもたれて休んでいるとカレンが皆を連れて帰ってきた。

ケイとグリゴールは青い返り血塗れの自身をよそに、俺の側にある穴だらけの亡骸を見て驚く。

「これを……アレンくんが一人でやったの?」

「上にいたのとは比べ物にならないくらい強そうねえん?」

「うむ。まさしく強敵とともであった」

紅王蠍よ。

お前の魂は俺の中で生き続ける。

またいつの日か相まみえようぞ。

「そつちも凄いだか」

「うん、ラクサクくんが大魔法をバンバン撃って頑張ってくれたんだよー。すごい助かったよー!」

「大したことはしてねーヨ。それにオレの魔力は全部カレン由来だ。礼ならそつちに言ってくレ」

そう発声してカレンの方にクチバシを向ける。

「んもう、謙遜しちやってえん」

「謙遜もしすぎると嫌味」

「人間に直接感謝されたことなどほとんどないだろうが、今回は素直に受け取っておけ」

「そうだよラクサ! 勇者様に褒められるって凄いことだよ! コーセーに語り継がれるやつだよ!」

どうも褒められ慣れておらず気恥ずかしいのか、五百年生きる大妖精様は言葉の通じない本物の鳥と化して何も喋らなくなってしまった。

まだまだ若いものだ。

「カレンもよく頑張ったな。出口を見つけて皆を呼んできてくれたんだらう?」

「……ううん、出口は見つからなかったから魔法でトンネルを掘ったの」

「それはそれでよくやった。偉いぞー超絶偉いぞー」

自身の持てる力を発揮し、最善とはいかずともやれるだけのことをする。

極めて当たり前に思えるが、緊急時においてはこれが存外難しいのだ。

カレンとラクサにそれぞれ不死者ポイントを贈呈。

「さて……そろそろやるか」

「ん」

ミロシユが次から次へと魔法で焼くなり凍らせるなりして脆くした外殻を俺が力づくで剥がしていく。

「二人とも何するつもりなの!?!」

「まさかそれ、食べたりしないよね？」

「何って、決まっているだろう。なあミロシユ」

「当然」

魔法学院首席卒業者と魔法学院魔獣研究部顧問の二人がいて、目の前には貴重な魔獣の新鮮な死体がある。

ならばどうするか。

解体して調べ尽くす以外に何がある。……………試食はあるかもしれない。

「アレンくん、わたしも近くで見たい？」

「……あ、あたしも」

「好きにするといい。二人も俺達と一緒に解剖するかい？」

それは結構ですと息を合わせて即座に突っぱねられた。

「アレン、鋏剥がして」

「フンっ、があっ！」

「……うわあ、ぎつしり身が詰まってる」

「これは中々高密度な筋肉をしているな。あの重い鋏を振り回せるのだから当然ではあるが」

「今度はこっちやって」

「おう」

「結構スゴイことになってるね……」

「ねー」

最初は二人してパン窯の中を覗き見るように興味津々だったものの。

俺とミロシユがああでもないこうでもないと専門的な用語を並べて熱中するようになってから次第に興味も薄れ、グリゴールとラクサを連れて洞窟内の探索にでも行ってしまった。

もちろん残った我々は研究者としての血と好奇心の騒ぐままに解剖を続ける。

「しかしアレだな、毒袋が見当たらない。あれほどの強酸に耐えられるとなれば極めて優秀な材料になるのだが……」

「たぶん、ここの毒腺」

「……ああなるほど、発射直前に精製しているのか——」

探索から帰ってきたカレン達が呆れているのをお構いなしに時間も忘れて没頭した。

それでついに、紅王蠍を四十の部品に解体して調べたあたりで切り上げた。

「ふう、このくらいでいいだろう」

「……ん」

「やあつとユーイギな時間ってのが終わったのお？ 今何時い？」

何度も腹の音を鳴らしていたカレンが少し不機嫌そうに嫌味を垂れる。

「俺の体内時計によると七時過ぎつてところだが」

一応天井に指を投げて爆破し、この洞窟に落ちてきた時と同じくらいの穴を空けると。

ぱらぱらと流れ落ちる砂に優しい月明りが重なり、幻想的な青く煌めくカーテンが出来上がった。

「あああ、いい雰囲気じゃない」

「わあ……綺麗……」

「だねー」

おかげでカレンの不機嫌がころりと良くなった。

「これを肴に晚餐といこうじゃないか。喜べカレン、今宵は食べ放題だぞ！ 新鮮で貴重なタンパク源が山ほどあるからな！」

しかしどういいうわけか、いつもなら大喜びする「食べ放題」という単語にそこまで良い反応をせず。

どころか不安げな苦い顔をして目を細めた。

「貴重なタンパク源つてもしかして……それ？」

「うん、これ」

解剖済みで綺麗に肉と殻に分けられた紅王蠍を見ながら「そっかあ、これかあ」と四回頷き、

「ヤダァーっ!!」

悲痛な叫びが木霊した。

第十話 「不毛の地」

雨粒ひとつ降らない不毛の大地で一人の犠牲者も出すことなく歩き続け。

あと三日もすれば目的の街へ到達するところまでやってきた。

「ねえー、お菓子ちょうだい。あたしの魔臓がすいてるってー」

はじめは暑さにひいひい喘いでいたもののずば抜けた適応力を発揮し、今ではものともしなくなつたカレンが退屈しのぎに食い物をねだる。

「アレン肉と紅王蠍の肉、どっちがいい？」

「サソリ肉」

「私も」

家計の敵である魔臓持ちを二人——それも片方は二つ内蔵している——抱えているため、信じられない速度で備蓄が消費されていく。もちろん必要最低限の食料には手をつけさせないでいる。……が、それ以外の余剰分となればお構いなしに貪つていくのだ。

十日前に百キロ近くも仕入れた強敵ともの干し肉はほとんど残っていない。

四爪魔獣の死臭が付いてしまっているせいとか、そもそも魔獣が極端に少ないのかは断定できないが、あの日以降我々以外の生物は優雅に空を飛ぶ鳥しか確認していない。

なので今ある分を食べてしまえば余剰の食料は無くなり、朝昼晩の一日三食しか口にすることができなくなる。

とするとどうなるか。

カレンとミロシユの機嫌が大なり小なり悪くなる。

『ほどほどに味が良くて可食部が多く、危険度の低い魔獣が出てこないだろうか？』

ふと、そんな考えが頭をよぎったが、まかり間違つても口には出さない。

言霊にしまえば最後、やつらは現れる。科学的な根拠はこれっぽっちもないがそういうものなのだ。

とにかく一切の戦闘を行わず安全に到着できるに越したことはない。いつだって愛と平和が一番——

「にしてもさー、ぜんぜん魔獣出なくなつたよね」

全員に聞こえる声で、魔獣を食料として見るようになった怪物が退屈そうに言い放つた。

これはもう、人の思考を読んで故意にやっているのでは？

(ラクサ、分かっているな?)

(……おうヨ)

いつ空から竜が降ってきてもいいように、いつ地に大穴が空いてもいいように警戒を強めた。

そして警戒を強めて一時間近くが経ち、まだ何も異常はない。

なるほどさすがにこの広大な土地は生息数が少ないためか、そこら辺からぽんと湧いては出てこないか。

「……たく、ビビらせやがって」

「アレンくん何か言った?」

「いんや、ただの独り言じゃよ」

しかしよくよく考えなくても何の悪意も他意もないカレンに対して怒るのは理不尽というものだ。

となると全ては悪意を持って魔獣を生み出したクソ自己中暴虐ブラコンヴァイ癪癪ル持ち女タスのせいである。

いつか貴様の兄を真横に並べ、兄妹揃ってタコ殴りにしてやるからな。

そう誓って天を仰いだ、まさにその時であった。

——ズズと、後方で起こった小さな地鳴りを最高感度の不死者耳が拾った。

「待ってみんな! ……何か聞こえない?」

「……あら、なにかしらあん」

遅れて他の皆も気付いて足を止める。

前回は地鳴りがなった直後に分断され魔獣が湧いて出てきたので、誰も彼も神経を尖らせ臨戦態勢に入る。

そして尖らせたおかげで、少なくとも三キロは離れた地点から発信

されていることが分かった。

これはもしかしたら、いやほぼ確実に我々とは無関係の地鳴りだろう。

だが決してそれを口に出してはならない。出してしまえば最後――

「これだけ離れてたら関係ないんじゃない？」

「お馬鹿ア！」

「えっ？　もしかしてあたし、何か悪いことしちゃった……？」

「何かしたというか、言ったというか……」

カレンの言霊が魔獣を呼び寄せているのだから口を慎め、とは言えずに悩んでいると。

「……ねえみんな、地鳴りが大きくなってない？」

地鳴りが大きくなっただけではなく、小さな揺れも感じるようになって。

しかもそれは次第に増してゆく。

これではまるで、何かが砂の海を泳いでこちらに向かっているようではないか。

「全員備えろ。必ずここに現れる」

「どうしてわかるの？」

「そういうものなんだよ。……ミロシユ」

「……ん」

ミロシユと協力して青土を焼き固めた即席の要塞を建造する。

要塞が完成して高所に避難した時には、はじめ「ズズ」という茶を啜るくらいの頼りなかつた音が「ズドドド」という拳大の雨粒が降り注ぐような音になっており。

「アレ見てー！」

ほど遠くない場所で、砂の海を泳ぐ鯨か大蛇がいるのを示す巨大な隆起と沈降、神が砂に手を潜らせて遊んでいるような浮き沈みを目視で確認。

やはりそれは少しだけぐねぐねと曲がりながらもほとんど一直線にこちらへ向かって伸びてくる。

「……来るぞー！ 《電々霧刺》」

「《霜ヨ積モリテ嶺ヲ越セ》」

「《来ル者拒メヨ暴嵐帽》」

青土の浮き沈みが目と鼻の先に来たところで、それぞれ魔法を用いて要塞をさらに強固なものとする。

熟練者と大天才と年寄りの緻密な防衛魔法は干渉し合って邪魔することはなく、堅牢な三重の防護壁を構成した。

これを単独で突破できる者などこの世に百としない。

「さあいつでも来……い……う？」

「おいおいマジかヨ」

「……予想外」

槍袵よりも凶悪で攻撃的な防護壁を感知したのか、ついに砂の海から現れた。

そいつは目がなく大口に無数の歯を敷き詰めた、蛇というよりはミズか牛の腸に似た灰色の魔獣だが、魔獣を越えて怪獣とでも言うべき巨体であった。

即席で作った、それでも並の豪邸よりは大きい要塞を覆い隠せるほどの巨獣だ。

横幅がおよそ十メートル。ケツの方は砂に埋もれていて見えないが、全長は横幅の十数倍あるだろう。

「アレンくん、この魔獣知ってる!？」

「俺が知っているのはカレンくらいの大っきさで、毒を吐き出す可愛いヤツだよ」

ぼくはこんなばけものしりませーん。

こいつが暴れ回れば一夜どころか一時間とそこらで国が減ぶんじゃなーい？

などと言っている間に巨大ミミズが首……はないがヒトの首に相当する辺りを膨らませ、常に開けっ放しの大口から白い煙が漏れ出し

「……ナア、ヤバくねーかアレ」

「あたしも……ヤバいと思う」

——毒ではなく灼熱を吐き出した。

竜とは比べ物にならない、それこそ龍にも匹敵する青い炎の放射が雷電の網を難なく通過し、分厚い氷の壁をあつという間に溶かして穴を開ける。

そして最後の壁である暴風の渦にかき消された。

「《堤タル土塊》ツツミ ドカイ」

「《風抗盟毘》フウコウメイビ」

炎を吐くと分かれば当然、相性の良い土と風の防壁を貼り直す。

しかし向こうも学習し、より強く、より細く束ねて一点を狙うようになりやがった。

さらには上体をのけぞらせて鞭のように勢いよく叩きつけ、俺が三割近い魔力を注いで建造した土壁をいとも簡単に崩しやがる。

「《堤タル土塊》……クソツ、このままでは持たんぞ！ 次で俺は死ぬからな！」

「わたしが行く！ お願いミイ！」

「ふうー……。——《常勝己隆》ジョウショウウキリユウ《四面ノ歌喰工洞鏡》シメン ウタク ウロカガミ」

使い切った魔力を全回復するために死のうしたところで勇者様が動いた。

ミロシユは一度深呼吸すると、俺の最大値よりも多い魔力を用いて聞いたことのない魔法を唱え。

それを受け取ったケイがわずかな助走をつけて跳躍。

あろうことかひとつとびで風の防壁を越えて最前線の土壁に乗り移り、そこからさらに大ミミズの頭に飛び乗って剣を突き立てた。

「……は？ いまのなあに？」

ケイは当たり前のように跳んだが、どう見積もってもここから土壁まで三十メートルはある。

ただでさえ俺とグリゴールを超える身体能力がさらに上昇していて、魔人の中でも化け物扱いされるほどになっていた。

「おいミロシユ！ なんだあの魔法は!？」

「少し前に発明された身体強化の魔法。正確にはケイの動きを後押しする魔法と外部からの力に抵抗する魔法」

「なるほどな……。これから師匠と呼ばせてもらおうぞ」

そして俺が魔力を回復させるために死んで目を覚ました時、すでにミロシユは眼鏡を外し腰を下ろして休んでいた。

「おい、大丈夫なのか？」

「あの状態になったケイはアンディを倒した。後は任せておけばいい」

「そうか……。なら応援でもしておこう」

「ケイー！ がんばれえー！」

「やつちまエー！」

「怪我だけはしちゃダメよおん!!」

「うるさい。向こうでやって」

高度な魔法を用いて疲弊しているミロシユの怒りに触れないよう声を抑え。

怪獣ミミズが振り落とさんと砂埃を巻き上げてもがくのを意に介さず、人外じみた身体能力で蜂のように飛び回る勇姿を見守った。

「すつご……」

「ううむ、俺でもアレは無理だ」

「ただでさえケイは巨人の魂を持っているんだから、あの魔法をかければ無敵なのよおん」

観ている者を熱くさせ安心感すら与えるその働きぶりは《人族の希望》と称されるに相応しい。

今のケイには奥の手を使った我が師ライノと同等以上の身体能力がある。

さすがは歴代でも五本指に入ると名高い勇者様だ。

「……んん？」

ケイが着々と斬り裂いて弱らせていくおかげですでに祝勝ムードだったのが、唐突に一変した。

ズドドという嫌な、とても嫌な地鳴りが新たに聞こえてきたのだ。

「まさか!? もう一体いるのかッ!？」

「冗談……よねえん……?」

怠そうにしていたミロシユは目を見開いて立ち上がり。

俺はいつでも自爆できるようポンチヨ以外を脱ぎ去ってから。

どれだけ助走をつけようが筋力を酷使しようが三十メートルの跳躍は不可能なので、足を爆破して土壁に飛び移った。

「何が来るってんだ……？」

青い砂の海を見渡して巨大な影かうねりを探すが、どうも見当たらない。

しかし地鳴りはたしかに聞こえる。

もしかやこれは幻聴ではないのか？

……そう思い始めた時だった。

「何だアレは……人、だよな？」

三キロほど遠方に、激しく砂煙を巻き上げながらこちらに向かってくる人影を発見できた。

どうにも信じられないことだが、地鳴りの正体はあの者で間違いない。

どうにも信じられないことだが、時速百キロ近い速度で疾走している。

砂漠の暑さが見せる蜃気楼か幻覚の類だと思いたかったが、その者は少しずつ地鳴りを増しながら確実に近づいてきている。

残り二キロ、一キロと、早馬よりも速く駆けてきて、その姿が正確に分かるようになった。

身長はグリゴールとそう変わらずやはり鍛え抜かれたメリハリのあつた肉体を持ち、角や尾は無いが二本腕二本脚で褐色赤目の荒々しい見た目をした魔人だ。

ついでに頭髪も荒々しい不毛の地である。

「くおらああああアアアーツ!!」

なにやら怒っているのか、雄叫びを上げてさらに速度を上げた。

あつという間にすぐそこまできた魔人は、そのままの勢いでミミズの背を駆け上り。

「下がれケイ！……クソツ！」

ケイに退くよう呼びかけても、外部からの力に抵抗する魔法がかけられている——つまりは音にまで抵抗してほとんど何も聞こえてい

ない——おかげで気付かない。

「《シヨウネンバクサイ掌念爆砕》！」

なので少し強めに足と背中を爆破し、即座にケイの前に立ち塞がった。

ほぼ同時に魔人も目の前に到着したが、我々には一切見向きもせず垂直に十メートルほど跳躍。

そして——

「——を返せエーッ!!」

砂の海を真つ二つに割り、星の裏側まで貫通させるような破滅かかと落としの一撃が哀れなミミズに撃ち込まれた。

第十一話 「決勝で会おうぜ！」

真っ先に感じたのは小型の隕石でも落ちたかのような音と衝撃。なんとか目を閉じずに観れた光景はそれらと一致していた。

紅王蠍ほどではないがそれでも鉄よりは硬いであろう四爪魔獣の皮膚が、かかと落としの直撃した場所を起点にぐにやりと波打ってひしゃげたのだ。

「お、おお……うおっ!?!」

ほんの少しの浮遊感。

直後に足元から登ってきた衝撃が脳天まで突き抜ける。

怪獣ミミズは我々を乗せながら前のめりにノックダウンされた。

巨体が起こした青い砂煙で少しの間何も見えなくなり。

俺とケイは真の怪物に対して警戒を強めてじっと待った。

音もなく吹き付けた熱風が砂煙をまとめて払い去り、自身が空けた大穴の側に彼は立っていた。

「あの……」

さっきまでの殺気と怒気が消え去っていたので恐る恐る声をかけてみる。

しかし耳に砂でも詰まって俺の呼びかけが聞こえていないのか、こちらを見向きもせず地面に飛び降りた。

そこからさらに開けっ放しのミミズの大口へ入っていったではないか。

『なにあの人、敵なの味方なの?』

『さあ、全く見当もつかん』

要塞の上にいるカレン達と目を合わせても揃って首をかしげるばかり。

「ケイ!! 聞こえるか!?! 君は皆を守っていてくれ!!」

「……あ、うん! 了解!」

とりあえずはケイに皆の護衛を任せ、大口の前で待つことにした。時間にして五分弱、俺が余裕を持って服を着てから彼は出てきた。何故か頭の荒野が森林になっていたが、決して触れないでおこう。

「あの、助けて頂いてありがとうございます」

開口一番に感謝とおじぎを。

「ん。……ああ、いいってことよー!」

野生味の溢れる男はあっけらかんと笑い。

「コイツがさー、俺の昼寝中に “大切なモノ” を奪っていきやがったんだよ」

だから何も気にすることは無い、恩を感じる必要はねえぜと。

非常に気持ちの良いことを話してくれた。

「ところであんたら人族だろ？ こんなところで何してるんだ？ 修行か？」

「ええと、ローランゼンフトウに向かっている最中でして」

「お！ 俺と同じだな！ 方角とかちやんと分かるか？ 迷ってるんだったら案内するが」

「いえ、お構いなく。一応地図がありますので」

「ならよかった。それじゃ俺は先に行くよ。こう見えてけっこう忙しいんでな！ また会おうぜ！」

彼は名乗ることもこちらの名を尋ねることもせず北を向いて地を蹴りつけ。

またしてもズドドドという轟音と砂煙を上げ、嵐のように走り去っていった。

「……………なに今の」

長いようで短い沈黙の後、誰もが思っていることをカレンが呟いた。

「分からん」

暴虐神でも智慧神でも誰でもいい。

あの者が何者かを教えてくれ。

ここでどれだけ考えようとも俺が千年眠っている間にアレが魔人の平均レベルになったのか、それとも彼が規格外の化け物なのかの判断はつかない。

だからこれ以上深く考えるのはやめた。

「とりあえずは……コイツを調べるか。師匠、やりますよ」

「ん——」

大怪獣に襲われた日から三日、四日、五日と不毛の青土砂漠を彷徨い。
い。

ちよつとした山ほどの砂丘を登りきると。

「あつ!! あれがそうでしょう!?!」

それは見飽きた青ではなく灰色の。砂嵐や水害および魔獣の侵入を防ぐための頑丈な城壁と、その中にある街並みが遠方に現れた。

視力を上げて見回すと、戦士だったり隊商だったり旅人だったり
都市へと向かっているのが散見される。中にはあのミミズほどではないが、巨大な魔獣の死体を運び入れる者達もいた。

あれこそが現在の目的地、四将が一人《青土の王者》^{クレーキング}ラファードルの治めるローランゼンフトウで間違いない。

「うん、これならまだミミズ肉が残っているうちに到着できそうだ」

「じゃあとりあえず八本ちよーだい」

「私は十本でいい」

「無理に消費しなくてもいいんですよ?」

「あの街に着くまでずっと食べ続けるもん。ミロシユもそうでしょう?」

「ん」

いくら目視できる距離まで来たとはいえ、だらだら進んでいては備蓄を全て食い尽くしかねない。

だから俺とグリゴールとケイで示し合わせて歩調を速くした。

おかげでカレンとミロシユがミミズ肉を十キロも消費しないうちに城門に辿り着いた。

「混んでるねー」

「そりゃあ四大都市の一つだからな」

着く前からずっと見えていたが、旅人だの商人だの、あるいは戦士だのが複数の列を為して入城の許可を待っていた。

もちろんローランゼンフトウが魔界の主要都市だからというのもあるが、今は時期が時期なので平時よりも外からやって来る者が多

い。

「薬売りか。違法なブツは取り扱ってないだろうな？ ……よし、行っっていいぞ」

「せんぱーい、あの魔獣デカすぎて通れないっすよー！」

「あー、それは向こうの搬入口から運ばせとけ」

いつもより多めに配備された門衛が忙しなく働く様に元魔王として感心しながら、周りに同族はいないかと探し。

「次の者、こつちへ来い。その五人組だ」

魔人と魔獣以外見つからないままに我々の番が回ってきた。

「……む。よく見れば人族と長耳族か、珍しいな。何しにきた？」

獲物を見る目というよりは毒虫を警戒するような目で我々を睨んでくるが無理もない。

魔界に来る人族といえば、征伐目的の勇者御一行か中央大陸を追いつ出された危険人物と相場が決まっている。しかも実際その通りで、現勇者は平和を求めて話し合いに、元勇者は明確な殺意を持って四将の一人を抹殺しに来ている。

だが、その疑念を払拭する一言を用意してある。

「実は大会に出場しようと思ひまして」

「おおそうか！ それなら大歓迎だ！ 行っっていいぞ！」

その言葉を口にした瞬間、一切の警戒を解いて受け入れられた。

「ど、どうも」

いくらなんでも物分かりが良すぎて拍子抜けした。

流石に持ち物検査くらいはしておきなさいと思ったが……………ここは魔界なのでヨシ！

◆?◆?◆?

——魔界の統治者は誰か？

「魔王ー」

それは暴虐神の代行者たる魔王だと、読み書きの出来ぬ子供でさえ即座に答えられるだろう。

大人であればその下に四人の将軍がいることも常識として知っているはずだ。

ではどうやって魔王と四将を選出するのか？

「投票……とか？ それともセシユーセイってやつ？」

その問いには一定以上の教養がなければ確信をもって答えられない。

確信をもてないだけで、実は答えは極めて単純である。

「戦って勝てばいい。下剋上さ」

魔界においては腕っぷしこそが絶対。

強さこそ強さであり、力こそ力である。

だから四将を下した者が四将となり、魔王を破った者は魔王となる権利を持つ。

よほどの性格破綻者か無差別殺人鬼でもない限りは、上に立つ者が強いだけで魔人は素直に付き従う。

人族の世界とは違って、策謀を張り巡らせた醜い権力争いなどは一切起こり得ないのだ。

「でもそれだと年がら年中挑戦を受けることにならない？」

「大昔は実際そうだったよ。今は違う」

いくら下剋上で成り変わられて血気盛んだとはいえ、自身の力量も測れない弱者の相手を毎日してやれるほど暇ではない。

仮にも土地と民を管理する為政者であり、戦うだけが仕事ではないのだから。

なまじ高い地位を得てしまったおかげで好き勝手出来なくなるということだけは我々との共通点だ。

かといって常に突っぱねて居座り続けることは許されておらず、正式に挑戦する方法が数千年も昔から定められている。

「この大会で優勝すればいいんだね」

「その通り」

魔界では北西のローランゼンフトウ、北東のシバグラスゼンエイ、南西のヨークゼンヴェー、南東のタワシイルゼンゴの、それぞれ四将が治める都市において毎年武闘大会が開かれており。

そこで優勝した者が挑戦権を得るのだ。

郷に入ったら郷に従えで、きつちり大会で優勝してラファードルと話し合いをするために我々はここへ来た。

もつとも、ラファードルは戦闘狂らしく毎年律儀に大会に出場しているというので初戦で当たるかもしれないのだが。

「それじゃ行ってくるから、信じて待っていてくれ」
「ん」

「嬢ちゃんはしっかり見張つとくから、心おきなくやってくれ」

「みんな頑張つてね！」

「あつたりまえよおん！」

「頑張つてくるねー！」

あくまで今日行われるのは予選なのだが、我々三人は決勝前夜からの熱い思いを受け取つて。

二人と一匹に手を振られながらちよつとした城なんぞ目ではないくらいに巨大な、観客席を含めれば直径五百メートルはくだらない円形闘技場へと足を踏み入れた――。

「――それではこちらを持って会場で待機してください」

大会受付で名前と年齢だけの簡単な登録を済ませて。

チームの番号札を受け取ってから案内板に従って会場まで向かい、

「うっわあ……」

「中から見るととんでもないわねえん」

「……うむ」

薄暗い通路を抜けて、石ではなく青土の敷き詰められた舞台アリーナに躍り出た瞬間、その広さと迫力に我々は圧倒された。

本日は予選なので観客は一人もないが、代わりに三十万近い無機質な観客席が全方位からこちらを見下ろしている。

一周するのに歩きで二十分はかかる広大な舞台では、すでに百や二百ではすまない腕自慢の魔人と飼いなされた魔獣がたむろしていた。

予選はまだ開始されていないのに、今すぐにもおっぱじめそうな

雰囲気の方が数多くいる。というか普通に殴り合っているのがちよくちよく見当たる。

「わたしたちは……あそこだね」

無駄に因縁をつけられたりぶつかったりしないよう壁際を歩いて番号で組み分けされた場所へ行き、石のように固まってじつと時を待つ。

血気盛んな魔人達と目を合わせぬよう三人で円陣を組んで足元を見ていたのだが。

「——おい」

唐突に肩に手を置かれた。

……いや、もしかしたらこれは風かもしれない。

そう信じて小さく跳ねて振りほどいた。

「おいって」

そして再び同じ感触を受けた。

「無視するなよ」

どうも風でも幻聴でもないらしい。

「……私のような路傍の石ころの如き存在に何用でしょうか」

「いや、俺だよ俺。この前会っただろ？ とにかくこつち見ろつて」

新手の詐欺か何かではないかと疑いつつも、このまま邪険に扱って逆上して背骨を引っこ抜かれかねないので、円陣を解いてゆつくりと振り返った。

「あつー！」

「やっぱりそうじゃねえか。忘れられちゃったかと思つたぜ」

褐色の肌には赤い目の、グリゴールよりも分厚く盛り上がった肉体を持つ魔人が白い歯を見せて笑っていた。

四爪上位の怪物を一撃で葬った怪物の顔を忘れるわけがない。

「なぜか」前回と比べて髪が茶色く変色し、パーマがかかっており、さらには十日と経っていないのに十数センチほど伸びていて肩に届いていたが、きつとあれだろう。

魔界には超天才的な技術を持った美容師がいるのだろうかよ。

「いやーまさか、あんたらも出るとはなー。相当腕に自信があるんだろ!？」

「いやいや、それほどでも」

お世辞でも謙遜でもなく事実としてそれほどでもない。

男として、生物として、目の前の魔人より劣っていると本能が認められているのだ。

『まもなく予選を開始いたします。出場者の方は所定の位置でお待ちください』

唐突に、会場の至る所に設置された伝声管からアナウンスが流れ、知り合いと駄弁っていたり殴り合いをしていた魔人達が各々持ち場へ戻っていく。

「んじゃ、俺はあつちだからまた後でな。決勝で会おうぜ！」

「ええ、お互い頑張りましょう」

俺の経験上、その言葉を言ってしまった者は高確率で予選すら突破できずに敗退するのだが……。

「……あの人は、普通に勝ち上がってくるよね」

「間違いなく、な」

「決勝までに当たりたくないわねえん」

我々は例外なく確信していた。

あの男は軽々予選を突破し、ともすれば決勝にまで勝ち上がってくると確信していた。

第十二話 「巨人の魂」

一通り終わって、ふうーと息を吐きながら仰ぎ見る。

薄めた魚醤色の空にはこんがり焼きたパンが無数に浮かんでいた。

「みんなーっ！」

闘技場から出てすぐに、こちらに気付いたカレン達が両手を後ろに隠したまま小走りで寄ってきた。

口を結んで見上げる娘の額には「どうだった？」と書いてある。

「ああ、なんとか勝ったよ」

一応はチームのリーダーである俺がもったいぶらずに答えた瞬間、「おめでとーっ！」

「うお!？」

「やあんっ!!」

パパパパンツ!! と。

手品師のように素早く前に突き出したカレンとミロシユの両手から大きな破裂音と火花が弾け、ついでに紙吹雪が飛び出した。

それが危険物や魔法の類ではなく祝宴用火薬微使用玩具であることには、驚いて抱きついてきたグリゴールによつて骨にヒビを入れられてから気付いた。

畜生妖精に至つてはクチバシの中に仕込んでいて、時間差で使つてきやがった。おかげで肋骨が三本ほどポキリと折れたではないか。

それにしても、気が早すぎはしないか？

「結構なお出迎えだな。まだ予選を通過しただけだぞ？」

「それでも勝ちが勝ちでしょ!?! ならお祝いに美味しいもの食べに行こうよー！」

「カレン、台詞二つ飛ばしている。それだと不自然」

「あっ！」

「ンなるほどウ、君達の目的は元よりそれか」

どうも綿密な打ち合わせをしていたようで。

ミロシユも今回ばかりは「私を入れないで」とは言わずに目を背けた。

それから現地民に安くて味が良く大量に食べられる店がどこにあるかを聞き込み、いくつか拳がった中から一番近い場所にある店を選択。

「んーっ！ おいひーっ！」

「こら、ちゃんと飲み込んでから喋りなさい」

怪物達が卓上に所狭しと並べられた肉料理を平らげてゆく。

一応二人ともちゃんと噛んではいるのだが、食べるというより飲むという表現の方が合っている。

勇者一行としての旅で泥水を啜り腐肉を食らう経験があつたようなミロシユはともかく、毒野菜や俺の肉を食わなかつたりと好き嫌いの激しいカレンも今ではすっかり魔界飯の虜になっていた。

「おかわりー！」

「私も」

「これじゃどつちが祝われているのか分からないわねえん」

「全くだ」

「あはは……」

料理の湯気で眼鏡を曇らせながら、喜んではいるのだがほとんど無表情で食べるミロシユと。常に笑顔で頬張るカレン。

その様をただ見せつけられるは大会出場者の我々三人。

主客転倒とはこのことよ。

「大会の話を、詳しく」

「……んっ。うんうん！ 話して話して！ あたしも聞きたい！」

さすがに悪いと思つたのか、いかにも興味の無さそうなミロシユが話を切り出してきた。

「本当に聞きたいのかね？」

「なら聞かない」

「ああごめんなさい！ 話します、話しますから聞いてください！」

御二方の食事を彩るものになればと、今日行った予選から話した。今大会のルールではチームごとに最大三人まで出場できるのだが、

中には二人組や単独で、または魔獣と共に出場する者がいたこと。どいつもこいつも腕に覚えのある強者だったこと。

そして極め付けに、あの男も出場しているということ。

「……え、それ大丈夫なの？ だって、魔法は使っちゃダメなんでしょ？」

「無謀」

「まあ、大丈夫か大丈夫じゃないかで聞かれると……」

「ちよつと、キツイわねえん……」

「ミイに身体強化の魔法をかけてもらってもどうかなって感じ……」

隙も髪もない男と初めて出会ったのは一週間以上前になるが、その日目撃したものはまだ誰も忘れずに鮮明に覚えている。

それほど衝撃的だった。

砂の上を百キロ近い速度で走れて、四爪の魔獣を一撃で落とせる魔人なんてそういるものではない。ハッキリ言って異常だ。

だが、聞くところによればもつと異常な存在がここにはいるという。

「どうにか序盤でラファードルと当たって削り合ってもらうしかないな。できれば共倒れが望ましいが」

《青土の王者》《激動》《土魔神》の二つ名を持つ恐るべき四将がこの地を治めている。

ロジャーの言によれば、ラファードルは初出場した時から百三十年連続で優勝しているのだと。

そのペラペラおじさんもかつて大会で戦い、負けを認めたという。五年前には同じく四将の一人アンディを完封したとの話もある。

「はあ……」

考えれば考えるほど、頭の中でまだ見ぬ相手の影だけが大きくなってゆく。

アレン・メーテウスは選ばれし英雄様とは違う、心弱き一般庶民なので不安で不安で堪らない。

だけど知識だけはあるゆえ、こんな時どうすればいいかは知っている。

手始めにパンと両頬を叩いて気合いを入れた。

「……よし！俺達も思いつきり食うぞー！」

「そうねえん」

「だねー！ すみませーんー！」

よく食べ、よく笑い、よく眠る。

これこそが古来より変わらない英気の養い方だ。

◆?◆?◆?

おおおと、集中を掻き乱すかのような一際大きな歓声が聞こえてくる。

同時にコツンコツンと部屋の外より足音も近づいてきた。

「メーテウス様、 出番でございます。こちらへ」

軽くノックをされて待合室のドアが開き、事務的に告げられた。

「分かりました。……ケイ、グリゴール、いよいよだ。大丈夫かい？」

「バッチリよおん」

「わたしも準備万端！」

グリゴールは鋼鉄の手甲を装着し、ケイはお偉いさん方より賜りし業物の魔法剣を腰に佩いた。

今大会のルールでは魔法の使用は禁じられているが魔法のかけられた武具の使用は認められている。

ちなみに俺は我が身以外に何も武器を持参していないので、誰も死なせずに勝利するという心意気だけを携えて部屋を出た。

案内人の後に従ってランプの灯火だけで照らされた通路を歩き、

「どうぞお進みください。よき試合を」

向かい側から来る対戦相手も言われているであろう言葉を受け取ってから、眩い日の光を浴びた。

「うひゃあー……これはさすがに多いねー」

「こんなに見つめられたら照れるわね。もっと念入りにお化粧しとけばよかったわあん」

舞台へ一歩踏み出したグリゴールとケイが足を止めた。

圧倒的な熱気と圧を浴びたせいである。

この馬鹿でかい闘技場には座席だけでも三十万、立ち見と浮き見を合わせれば五十万近くの観戦客が収容されている。平均して一人につき二つ目玉を持っているので、百万の瞳が我々を捉えていることになる。

いくら凱旋式やら授与式やらで大勢の視線には慣れている勇者一行と言えど重く感じるに違いない。

「なあに、すぐに慣れるさ」

「……うん、そうだね」

目の前の相手にだけ集中しろと暗に伝え、舞台中央へ向かって再び歩き出す。

そうして何事もなく中央まで来て対戦相手と向かい合ったところで。

『お待たせしました皆さん！ これより第三試合を開始いたしますツ
!!』

闘技場に無数に設置された伝声管から威勢の良い声が響き渡り。

呼応するように大歓声が沸き起こった。カレンとミロシユはきつと耳を塞いでいるだろう。

……ああ、懐かしい空気だ。

『実況は変わらずわたくしミルカと、特別ゲストのロジャーさんでお送りします！』

『どうぞよろしく』

思わず視力を上げて実況席の方を見ると、ニタニタと笑うくどいロン毛パーマのおっさんが座っていた。

なーにやっつてんだか。

『それでは早速選手紹介から！ 北はこの方！』

パパパパンツと相手選手のすぐ後方で何かが派手に爆発し、砂煙が上がる。

昔ながらの小気味いい演出だ。

『デカアアアアアッ！ 説明不要!! 身長四百二十二！ 体重六百八！ 四十歳！ カルロイーボツ!!』

初戦の相手はチームを組まず、たった一人だ。

だかしかし、その体積はグリゴール五人分はあり、脚の長さだけでケイの背丈を超える。

携えし鉄の棍棒もまた巨大で、並の人間の使う武器などはしやもじに見えるだろう。

これほどまでに屈強な巨人は魔人の中でも滅多にいない。

『うーむ、いい身体をしておる』

『カルロイーボ選手は前回大会で準々決勝進出を果たしています！

今大会でも存分に暴れ回ってくれることでしょう！ 対する南の選

手はこちら——』

——パパパパンツ！

「やあんっ!?!」

我々の後方でも同じように爆発が起こり観客が沸いた。

『素性も目的も一切不明！ どこから来てどこへ行くのか!? なんな

なんと、人族の三人組が参戦だアーツ!』

『人族』という単語によってまた一層大きな歓声、そしてどよめきが起こった。

ほとんどの魔人は気付いていないだろうが、実際に戦場でケイ達を見たことのある魔人は感付いているかもしれない。できることなら大会が終わるまで隠し切りたいものだが……。

「人族だと?」

目の前の巨人もまた顔をしかめた。

『身長百九十、体重量共に非公表、グリゴール! 身長百七十六、体重九十六、年齢のみ非公表、アレン! 身長百六十三、体重二ひゃ……く……?』

そこで一旦実況を止め、手元にある台本が間違っているのではないかと確認する。

『……えー、申し訳ございません。こちらで少々手違いが生じました』
仕方のないことだ。

俺も初めて聞いた時は耳が腐ったのかと思った。

しかしそれで合っている。

試しにケイを持ち上げた時、たしかに岩のようであった。

——その者の肉は鋼よりも重く、その者の骨は金剛よりも硬し。

ケイは常人とは桁違いの骨密度と筋密度を誇る、通称《巨人の魂》と呼ばれる特異体質の持ち主なのだ！

『身長百六十三！ 体重二百六十三！ 二十二歳！ ケエエエイツ
!!』

今一度歓声が起こり、すでに順応したケイが笑顔で方々に手を振った。

『ロジャーさん、この試合どうなると予想しますか？』

『勝敗については終わってみるまで分からないので明言せんが、ワシの推しはケイですな。彼女は勇者ですから』

『勇者というのは……まさかあの、勇者でしょうか？』

『その勇者です』

超古株の四将という実力と信用ある者の発言を疑う者はおらず、本日最大級のざわめきが広がってしまった。

「あんのお喋りクソトカゲめ、あつさりバラしやがったな。後でぶん殴りにいくぞ」

「あはは……」

「案外早かったわねえん」

我々が諦めて試合後の話をしていたところで、目の前の巨人がこちらに聞こえるように大げさな溜息を吐いた。

「おい、そのケイとかいうヤツ。てめえ女だろ？」

「……そうだけど」

「勇者だか何だか知らねえが人族の、それも女子供がオレサマとやろうってのか？ 随分とナメられたもんだなあ」

前かがみに腰を曲げて目線を下げてくれても、彼の背丈はグリゴールよりも遥かに高く。

「女を殴る趣味はねえよ。早いとこ帰んな」

彼からすればケイだけでなく俺とグリゴール、ひいてはほとんどの魔人が女子供に見えるはずだ。

それでも本当の女と子供、つまり戦士でない者には手を上げないと

いった流儀があるのだろう。

なんとも紳士的なことで。

しかしその気遣いはケイの目には良く映らず、かえって神経を逆撫でてしまった。

「アレんくん、これ持つててくれる？　すぐ終わらせるから」

「おう。存分にやってきなさい」

俺に自身の魔法剣——いわゆる聖剣などと呼ばれる類の代物を預け、単独で前に出て拳を握った。

「死にてえのか？」

「わたしはお婆ちゃんになるまで死にたくないな——」

「……………後悔するぞ」

ここでようやくケイが戦士であることを認め。

しかしそれを蛮勇だと軽んじたのか、それとも礼儀を重んじたのか、自身も棍棒を捨てて拳を握った。

……………素直に武器を使えばいいものを。

『どうやら両者準備が整ったようです。それではロジャーさん、試合開始の合図をお願いします！』

『はい構えてー、始め』

溜めも勢いもないひどくあっさりとした合図と同時に、我々を囲んでパンツと爆発が起こり試合が始まった——

「——ふんツ……………らアツ!!」

先手を取ったのはカルロイーボ。

その凶体に似合わない速さで踏み込み、腰の捻りを加えた渾身の右ストレート。

誇張抜きで武器など必要のない、岩をも砕く巨人の一撃が打ち込まれた。

よって生じた衝撃が地に伝わり砂煙を上げ、わずかな間二人を覆い隠す。

『これは強烈ウ!!　まさかこの一撃で決まってしまうのか!?!』

『なかなか、なかなか良い拳ですな。じゃが……………』

「……………なツ!?!」

巨人の一撃を受けたのもまた巨人である。

ケイは両腕を重ねてしかと受け止めていた。

しかもその腕はひしゃげてても凹んでもおらず綺麗なまま。

「こんなもの?」

ケイの後ろ姿しか見えていないが、たぶんその顔はいつものように天真爛漫に笑っているだろう。

「……んのアマツ!!」

おかげさまで彼は激昂し、全力の拳をがむしやらに打ち続けるようになった。

それはいくら冷静さを欠いて乱れているといっても、俺とグリゴールならばまず受け止めずに避けるか柔の拳で受け流さざるを得ない威力のものだ。

ケイが受け止めるたびにドパンドゴンと響く音がその破壊力を物語っている。

『なんという猛攻だツ！ まるで人間破城槌！ 対するケイ選手もどうしてそれを受け止められるウーツ!!?』

『いやー、あの間には立ちたくないですなー。それにしても本当によく受け止めている……:~:というよりはもう遊ばれておるかの。さすがは勇者と言ったところでしよう。あのチームはですね、間違いなく上がってきますよ。ワシのお墨付きです』

「うがあああアアツツ!!」

ペラペラおじさんの偏向実況によって、弾けそうなほど巨人の頭に血が上り。

ついに大きく振りかぶってきた。

その瞬間をずっと待っていたケイが懐に入り込む。

「はあッ!!」

「ギユッ!?!」

鳩尾に強烈なアッパー。

巨人の身体が地を離れ、ケイの肩の高さまで浮き上がる。

「セイツ!!」

浮き上がった足が再び地に着く直前に、溜めた後ろ蹴りを下腹部

へ。

巨人が吹っ飛んだ。

文字通り身体を二つに折りたたまれ、弧を描いて吹っ飛んだ。

「ふうー……」

ケイは追撃に行かずにその場で呼吸を整え構えを取る。

しかし十数えても、巨人は見下ろされたままだった。

◆◆

「あつ！ おかえりみんな！ いえーいつ！」

「ただいまー！ いえーい！」

試合後すぐに観客席へと向かい、実況席付近の関係者席で行儀よく座っていたカレン達の元へ帰ってきた。

ここに来るまではどこもかしこも床が見えないほど混雑していたが、ほとんどの魔人がケイを見るや避けて道を作ってくれたので、面倒事の一つも起こさずにすんなりとやってこれた。

勇者様様様である。

「先輩とグリゴールもお疲れさん」

「アタイ達は何もしてないけどねえん」

カレンとミロシユがケイを間に座らせて褒めちぎっている代わりに、ラクサガがパタパタと飛んできて労ってくれた。

「それはそうと大変なことになったナ。そこら中から視線を感じるぜ」

「ああ……」

あの巨人をサシで倒してしまった時点で仕方のないことだが、我々が勇者一行であるということも相まって畏怖や好奇心、さらには殺気も含まれた無数の視線を受けるようになってしまった。

その一因である彼奴は今も最前列で呑気に実況しているので、背中に殺気と怒気を当ててやった。

『すまんて』

即座に俺の視線に気付き、こちらを振り向いて気まずい顔をした。

舌をちよっぴり出して、悪気はなかったんだと小刻みに首を振る。

『ぶち殺すぞ老害』

『本当にすまんで』

とりあえずはこれで貸しを一つ作れたので、心置きなく観戦にのめり込むとしよう。

「アレンさんとグウも立ってないでこっちで見ようよ！」

「おう」

「今行くわあん」

それから五人並んで観て。

『これにて一回戦の前半部が終了いたしました。後半部は一時間後に開始いたします』

前半の試合が全て終わったが、幸運なことにあの男もラフアードルも未だ舞台に出ていない。

つまりはこちらの山にいないということ。

決勝戦まで当たる心配がないということだ。

「よし」

「とりあえずは一安心ねえん」

「あとはどちらも元気なうちに削りあって共倒れしてくればいいんだが……」

そうしてあつという間に休憩時間が終わり、後半の試合が始まった。

百三十連覇中のラフアードルが最終試合に置かれているというのはトーナメント表を見て分かった。

なので後はあの男がなるべく遅く出場してくれるのを祈るのみ。

「いいぞ、まだ出るなよ出るなよ……。なんなら二人揃って棄権してしまえ……」

「ええ……」

「その祈りはどうかと思うわよおん」

星に願いをこめて。

一試合、二試合、三試合と観続けて、未だにあの男の姿は見当たらない。

「これはもしかすると、もしかするかもしれないぞ！」

「あはは……」

最終試合の一つ前の試合でもついに現れず。

思わず立ち上がって足腰に力を込めて見守った。

『さあ皆さん、お待たせしました。いよいよ第一回戦最終試合がやって参りました』

実況の神妙な声色に合わせて会場が静まり返る。

『まずは北の選手をご紹介いたします。身長百七十八！ 体重六十八！ 二十三歳！ 今大会初出場の期待の若手……ナガルツ!!』

先に紹介をされて舞台中央まで進んだ男は肌の色が青く頭髪も豊富だ。

あの男とは似ても似つかない別人である。

まさか本当に棄権したのか？

『南の選手はもちろんこの方ア！ 身長百八十五!! 体重三百二十五!! 三百四十歳!! 現在百三十連覇中!! 《青土の王者》《土魔神》《史上最強の男》——』

『——カモンツッ！ ラッフアーツツ!!』

戦災龍おじさんの咆哮に合わせて南の出入り口付近がド派手に爆発し。

対戦相手が可哀想に思えるくらいの大歓声を一身に受けて現れたのは……

褐色で、

赤眼で、

不自然な茶髪を乗せた筋肉の塊、

「……なんてこつたい」

見知った顔であった。

第十三話 「オコツテナイヨ」

闘技場から溢れ城壁の外まで届くほどの大歓声が沸き上がった。

『——しよ、勝負ありツ!! ナガル選手、起き上がれません! 期待の新人を一撃で砕いたラファードル選手、堂々の一回戦突破だアーツ!!』

試合開始直後に挑戦者がラツシュを仕掛け、絶対王者はその全てを受け切り。

返礼の一発で試合を終わらせてしまったのだ。

『ありやりや……もう少し手加減すりやよかつたかな……』

舞台上に音を拾う魔法か何かがかけられているのか、ラファードルの申し訳なきような眩きが観客席に流れた。

「顔が似てるだけの他人ってわけじゃなさそうねえん」

「……ああ、あの男で間違いない」

「実は何度も会ってたなんてねー」

「やっぱりあたしたち持つてるね! ……えっ? ちよつとなんでみんなしてこっち見るの? あたし変なこと言った?」

カレンが心の底から退屈すれば必ず新鮮が訪れ、余計なことを言えば何かしら余計なことが起こり。

見えない神の手が介入していると言わんばかりにこの子が引き寄せられているというのはすでに共通の認識である。

良くも悪くも持ちすぎているのはお前だと、誰しも口には出さない代わりにじつとカレンを見続けた。

本日の感想や明日以降の戦術を話し合っただけで時間を潰し、大半の客が出て行くまで待つてから我々も席を立った。

時刻はすでに四時過ぎ、じきに空が焼け始めるころだ。

「今日は何食べようかなあ。一回戦を勝てたお祝いに美味しいもの食べないかねー!」

「まだ夕飯には早いわよおん。美容効果のある砂風呂が有名なから先に行きたいわね」

「早く夜にならないかなあ……。ところであれ、何してるんだろ？」
特に物販などがあるわけでもないのに、出入り口付近で無数の魔人がたむろしていくつもの集団が出来ていた。

「おい、来たぜ」

「やつとか」

なぜか我々の行き先を塞ぐように集団が移動して広がり、さらに形を変えて輪となる。

流れるように包囲されてしまった。

「カレン、出るなよ」

「……うん」

誰に言われずとも四人でカレンを背にし、それぞれが一面を受け持つ陣形を取った。

「アンタらが勇者一行で間違いねえな」

「こいつらがあの黒騎士アンディをやったってのかよ」

「へっへっへっ……」

二百を超える戦闘種族が、揃いも揃って血走った目でこちらを睨みつける。

戦うことと喋ることしか能のない頭スカスカ老害龍の迂闊な発言により、俺達の正体が中央大陸からやってきた勇者一行だとバレてしまっているせいだ。

「まずは一回戦突破おめでどうと言っておくぜエ……」

「ケケケツ……」

いつ飛びかかれてもいいように警戒していると、群れの中から代表者らしき三人が前に出てきた。

彼らは大会には出場していないが、それなりに力ある魔人だということは一目で分かった。

「んもおん、砂風呂に行く時間が無くなるじゃない」

「ご飯の前に運動しとけてことだねー！」

「私の食事を邪魔するのは許さない」

これも魔界の醍醐味ゆえ仕方なしと諦めていると。

三人の魔人が大きく空気を吸い込んで肺を膨らませ、

「ここにいる全員との対戦を申し込オオムツ!!」

「もちろん大会が終わってからでいいぞゴルアアアツ!!」

「今日のところはサインだけ寄越せやアアアツ!!」

思いの丈を叫んだ――。

「……………えっ?」

「今、サインとか言ってなかった…………?」

予想していたものとは若干異なる台詞のせいで俺以外は困惑を露わにした。

(不可解)

(どういうことよおん?)

(アレンくん、これはそのまんまの意味で受け取っていいの?)

(……………まあ、そうだな)

背中を合わせながらも小声で話し合い、意見をまとめたケイが慎重に口を開いた。

「えっと、きみたちはわたしたちと戦いたいんだよね?」

「そうだ! 勇者を討つて名を揚げる!」

「俺は名声なんていらねえ。ただお前らとやりてえだけだ」

「ヒツヒツヒ…………」

代表者達の言葉に、後ろで輪を作っている魔人達がうんうんと頷く。

「やるのは今じゃなくて、大会が終わってからでいいの?」

ケイがもう一つ疑問に思っていたことを尋ねる。

変なことを聞くもんだなど、彼らは揃って不思議そうな顔をして答えた。

「大会期間中にやるのはマナー違反だろ」

「なんだ」

「日程はそっちが決めてくれ。もちろん大会で勝ち上がった後も負けても無事じゃすまねえだろうから、充分に回復してからで構わねえぜ」
振り向かずとも、ケイ達がぼかんと呆けた顔をしているのが分かる。

そうだ。

これが魔人だ。

魔人とはこういう生き物なのだ。

たとえ自身は傷つき疲弊してしようと万全な状態の相手と戦うことを好み、よほどの事情がなければ手負いの者を攻め立てはしない。それは彼らにとつての美德であり、他種族からすれば愚かな性質でもある。

もしも魔人の多くが人族のように目的のためには合理的で冷酷な手段を厭わない種族であれば、我々はとうの昔に滅ぼされていたに違いない。

「とにかく今日はサインくれ！」

「俺にも俺にも！」

「あつ！ ずりーぞお前！ 次は俺が予約してたんだよ！」

「んだとテメエ!? やんのか!?!」

「ああん!?!」

戦闘こそ起こらなかったものの、サイン攻めにあつたおかげで結局日が暮れてしまった。

◆?◆?◆?◆?

開会を告げる派手な花火が複数発打ち上がった。

『それではこれより大会二日目、第二回戦を開始いたします！ 盛り上がって行きますョーツ!!』

そして花火よりも数段大きな歓声が上がった。

今日も魔界のみんなは元気です。

『本日も実況はわたくしミルカと、特別ゲストのロジャーさんで送りします！』

『はいはい、ドーマドーマ』

一回戦が終わり中一日置かれたが、幸運なことに襲われることも妨害をされることもなかった。

四大会は次なる四将を、つまり広範な地域を治める王を決める大会でもあり、似たような大会が人族の国で行われた場合何が起こるか

想像に難くない。

出場者は身に覚えのない不正を仕立て上げられたり食事に毒を盛られたり道を歩いているだけで矢が飛んで来たりは当然のこと、それこそ臨時収入を得た『無関係』の何者かに寝込みを襲われることだつてあるだろう。本人の腕つぶしだけでどうにかなる方が珍しいはずだ。

やはり人族は滅ぼされた方が良いのかもしれない。

『北チームはこちら——』

そんな俺の思考を掻き消すかのように実況の声が響き、いつの間にか舞台中央に立たされていた。

『——そして南チーム最後の選手はこの方！ 身長百六十三！ 体重二百六十三！ 二十二歳！ 海を越えて魔人を皆殺しにやって来たアツ！ 《電光石火》《人族の希望》《怪力勇者》ケエエエイツツ!!』
前回よりも数段熱のある紹介と派手な演出。

「やだアナタ、大人気じゃない」

「みんな応援ありがとう！ 頑張るよー！」

実況では割と物騒なことを言っているのに観客席からとめどない勇者コールが起こり、ケイが方々に向けて手を振っていく。

一回戦で巨人相手に豪快な勝利を収めたおかげで魔人達の心を掴んでいたのだ。

『はい皆さん！ ケイ選手の腕が疲れてしまいますのでそれくらいでお願いしまーす！』

勇者コールが強制的に終了させられ、我々は目の前だけに集中する。

本日の対戦相手は三人組の魔人だ。それぞれ角や尻尾が生えているくらいで変哲のない姿をしている。

彼らは揃って軍の百人隊長だと紹介されていたので油断はできない。
い。

「まずは頭数を減らすべきだな」

「勇者は最後だ。どうにかして周りを削らないと勝ち目はない」

「あの気持ち悪いオカマからやるか？」

「そうしよう。おそろくアイツが一番弱い」

俺の不死者耳が高感度なおかげかそれとも彼らの声が大きいのか、作戦会議の内容が筒抜けで。

言われているぞと告げ口するまでもなく、グリゴールの顛顛には青い筋が浮かびあがっていた。

「……………アタイがやってくるわねえん」

「できる限り殺すなよ。いくら魔人とはいえ殺し殺されは禍根を残すからな。カレンも見ている」

グリゴールはこちらを見ずに「善処するわ」とだけ言い残して独り前に出て。

《憤怒の剛拳》と呼ばれるに相応しい力を発揮した。

彼らが殺されるよりも酷い仕方で搾られたのは語るまでもない――

開会を告げる派手な花火が複数発打ち上がった。

『それではこれより大会三日目、準々決勝を開始いたします！ 盛り上がって行きましょーッ!!』

そして花火よりも数段大きな歓声が上がった。

今日も魔界のみんなは元気です。

『本日も実況はわたくしミルカと、特別ゲストのロジャーさんでお送りします!』

『はいはい、ドードードーモ』

二回戦が終わり中一日置かれたが、幸運なことに襲われることも妨害をされることもなかった。

四大会は次なる四将を、つまり広範な地域を治める王を決める大会でもあり、似たような大会が人族の国で行われた場合何が起ころるか想像に難くない。

やはり人族は滅ぼされた方が良いのかもしれない。

『北チームはこちら――』

そんな俺の思考を掻き消すかのように実況の声が響き、いつの間にか舞台中央に立たされていた。

『——身長百九十！ 体重年齢共に非公表！ 乙女の恋路を邪魔するヤツはブチ殺す！ 《拳聖》《憤怒の剛拳》グリゴオオオールツ!!』
前回よりも数段熱のある紹介と演出。

観客席からは勇者コールと共に拳聖コールも生じた。

その卓越した技と力により、ケイだけでなくグリゴールまでもが魔人を魅了してしまったのだ。

「さすがは勇者御一行様。大人気ですねえ」

「あとはアレンくんだけだねー！」

「今日はアナタの番よおん」

「俺はできることなら戦わずにいたいよ。これでも狂信的な平和主義者なんでね」

戦わずに済むならそれでいい。俺の正体だけでもバレないよう、ケイトとグリゴールに暴れてもらって勝ち上がればそれでいい。

争いはそれほど好きじゃないんだ。

『いやあロジャーさん、予想通り勇者チームが勝ち上がって来ましたね!』

『そうですね。今年ばかりはワシも出場しておけばよかったと後悔しています』

『ところで勇者チームの一人、アレン選手についての情報がほとんどないので……魔界一の知恵者であるロジャーさんならば何かご存知でしょうか?』

「ツ!?!」

咄嗟にロジャーの方を向いて睨みつけた。

《虐殺機関》《二重の死を齎す魔王》などと呼ばれていた時代の、重く澱んだ目で睨みつけた。

お前マジでいらんこと言うなよと、本気で圧をかけた。

『もちろん知っていますとも。彼のことはたくさん』

しかしながら。

常人に明確な死を想像させ、意のままに従わせる圧をヤツはものともせず言葉紡いだ。

『若い子らは知らないでしょうが彼は元勇者です。魔王も二度務めて

ました。ワシより長生きですよ。四大大会制覇も何周かしてますしな』

『……はい?』

ペラペラおじさんの突飛な発言を聞いた観客が困惑しざわめき立つ。

『ええとロジャーさん。それは冗談、でしょうか? どう見てもアレックス選手は人族の若い男性にしか……』

『あの男は不死者ですから。大会の規則書ルールブックに「一度死亡が確認された選手はその時点で脱落とする」とあるでしょう? それは彼のおかげで追加されたものです。おーいアレックス、一回死んでみてくれんか?』

無視を貫き通そうと思ったが、実況のミルカさんにも是非ともお願いしますと頼み込まれ、観客の期待の視線も全身にささるので……仕方なく頭をもぎ取って。

新しく頭を生やして蘇った時にはラファエルが勝負を決した瞬間よりも大きな歓声が轟いていた。

今日も魔界のみんなは元気です。

「はあー……」

「人気、出たじゃないの」

「そ、そうだよアレックスくん!」

「なんだかなあー……」

とにかくアイツは後でカラッと揚げてカレンとミロシユに食わせてやるとして、切り替えて本日の対戦相手を見据える。

片方が鷲のような翼を背負い、片方が背丈よりも長い尾を生やしている以外にはほとんど見た目の変わらない双子の兄弟だ。

実況ではどちらも千人隊長だと紹介されていた。非常に油断のない相手である。

「一度殺せばいいとはいえ、まさか不死者が相手とはな……」

研ぎ澄ました不死者耳が二人の会話を捉えた。

「でもよ兄貴、アイツが元魔王だつて信じられるか?」

「いんや、どうにも信じらんねえな。これっぽっちも格つてもんが感

じらんねえ」

「だよな。とするとアレか、昔はアイツでも天下取れるくらいに程度が低かったってやつじゃねえの?」

「ちげえねえ」

仲睦まじい双子の弾んだ声色。

少し言い方を変えるなら、調子に乗ったクソガキ共の囃り。

「アレンくん、もしかして怒ってる……?」

「オコツテナイヨ」

アレン・メーテウスを程度が低いだの苔むした人間だのと侮るのはいい。

運も才能もない故にちまちまと積み上げ、命がいくつもあつて足りただけの、平々凡々な臆病者に違いないのだから。

たしかにかつて魔人の王座に就いたが、不死者でなければどう転んでも千人隊長どころか百人隊長にすらなれやしないのだから。

いくらでも軽んじておくれ。心の底から油断しておくれ。

……だが、

ほどほどの才能しか持たぬくせに。

たかが千人隊長の矮小な肩書きで。

吹けば飛ぶような軍団を任されただけのささやかな身分で。

俺様が何度も命を捨てて漸く打ち破ることのできた、誉高き傑物らを貶すのは許されない。

「決して怒ってはいないが、この試合は任せてもらおう」

半年は泣いたり笑ったりできなくしてやる――。

第十四話 「確認」

開会を告げる派手な花火が複数発打ち上がった。

『それではこれより大会四日目、準決勝を開始いたします！ 盛り上がって行きますショーツ!!』

そして花火よりも数段大きな歓声が上がった。

今日も魔界のみんなは元気です。

『本日も実況はわたくしミルカと、特別ゲストのロジャーさんでお送りします!』

『はいはい、ドーマドーマ』

準々決勝が終わり中一日置かれたが、やはり人族は滅ぼされた方が良いのかもしれない。

『ついに準決勝ですよロジャーさん!』

『楽しみですなー。この姿でも火を吐けそうなくらい昂ってきました』

『危険ですので決して吐かないでくださいね？ それではさっそく参りましょう！ 準決勝第一試合！ 北のチームはこの方々!』

実況と演出の爆発に合わせて舞台に出た瞬間、ドツと火山が噴火したように観客が沸き上がり空気が揺れた。

『細かい紹介はもういらないでしょう!』

——人族の希望と我々の期待を背負い、彼女は進む!! 勇者ケエエエイツ!!

——叩け! 壊せ! 拳の乙女よ華やかに!! 拳聖グリゴオオオールツ!!』

歓声に負けじと実況が声を張り上げる。

『そしてそしてエーツ! 四大会における総合優勝回数は歴代最多の八百二十六! 長き眠りより覚醒し、偉大な王が帰って来たツ!!

《ロードリロード再生霸王》《永劫なる意志》《不滅の大魔導》アレエン、メーテウスウウツツ!!』

勇者コールと拳聖コールに加え、俺の名までもが観客席の至る所か

ら声高に叫ばれるようになっていた。

我々は完全に受け入れられ、認められたのだ。

『対する南の選手はこちらア!!』

三人でも抱えきれない声援を受けながら舞台中央まで辿り着いた後、対戦相手が呼び出された。

向こう側の出入り口手前で快音と共に青砂が舞い上がる。

我々が受けたものとなんら遜色ない大歓声を送られる。

『二十年連続準優勝！今年こそは皿ではなく優勝杯を勝ち取れるかア!? 《筆頭竜騎兵》ティエティエエエーツツ!!』

それもそのはず、竜鱗の全身鎧を纏った相手は決勝常連の強者なのだから。

ラファードルさえいなければいつでも四将の座につける男なのだから。

『ティエティエ選手を支えてくれる相棒にも登場してもらいましょう!!』

舞台の西側、実況席とは逆の位置に設けられた巨大な扉が開き。

ぽつかりと黒い穴が現れると、

「——ワツフーン!!」

ティエティエがこちらへ来る途中で一度止まり、暗闇の奥に呼びかけた。

直後、呼びかけに応じるように音が生じた。観客の盛り上がりとは別のズシンズシンという重低音と振動が暗がりから生まれ出てくる。さらにはがりがりとして石が石を削るような音も。

次第にそれらは大きくなり、ついに音の主が日の下に姿を現した。

「ここで見るとやっぱり大きいわねえん」

「それにすごい硬そうだねー」

縦横十メートルはある魔獣用の通路を、それでも窮屈そうに体を縮こまらせた状態でようやく抜け出し、両翼を広げ咆哮。

『出たアーツー！ 岩竜のワツフンくんですツツ!!』

それは神話の時代から人々に恐れられしもの。

竜はドラゴンヴィールタスの創造した決戦兵器である。

個体差はあれど総じて強靱な四肢と頑強な鱗を持ち、さらには腹の中に溶鉱炉を隠し持った空の絶対的支配者だ。

その中でも岩竜または鎧竜とも呼ばれている種は最上位だと名高い。

見た目通りに鈍重で飛行能力は低いのが、溶岩の海を泳いで塗り固めた分厚い装甲が生半可な攻撃を通さない。火竜や風竜などといった他の竜種とサシで戦った場合もまず負けないとされている。

『どうですかロジャーさん。ワツフンくんの調子のほどは』

『ええ、良い感じですな。ワシの見立てでは過去最高に仕上がっています』

ああ、嫌になる。

竜の長たる男の見立てに間違いはないだろう。

ああ、嫌になる。

ラファールは毎年、たった一人で、四将相当の実力者と高位の竜を同時に相手取って勝利を収めているのだ。

おかげで俺の心の中ではすでにワクワクよりもウツウツが多く占めている。

もちろん雄という性のゆえ、戦いが好きだ。

互いを熟知した強敵と戦うのも全く見ず知らずの猛者と戦うのも好きだ。そのようなつわもの達とやり合う時には血潮が熱く燃え、いくらか口角が上がって心が躍る。いつ死ぬか分からない緊迫した状況のおかげで生を実感できる。

それはそれとして。

狂信的な闘争主義者たる魔人の血が流れてはいないし、人族の中でも勇者や英雄などと呼ばれるようなイカれた感性の持ち主でもない。

血沸き肉躍る戦いは好きさ。だけどそれ以上に戦って勝つのが好きなんだ。

一世一代の決戦でちよつとばかりのズルをして勝てるのなら、ほんのちよつとばかり悩んだ後で即実行する。

これらは魔界では少数派の臆病者にこびりついた薄汚い観念だが、人族の世界では一般的な多数派の考え方だ。

「アレンくんは岩竜を頼みたいんだけど、大丈夫？」

「ふっ、この俺様が今まで何千匹竜を狩ったと思っている？ 任せておくがいい！」

だから勝利宣言の出来ない試合を前に、決して顔には出さないだけで酷く憂いている。

あー、棄権したい。

どうにかバレないように魔法を使いたい。

試合開始直後に自爆して終わらせたい。

魔法は禁止、一回死んだらそれでおしまい、なんてクソみたいなルールを作りやがって。誰のせいでそんなルールができたんだよ。俺が自爆を繰り返して優勝回数を稼いだせいだよ。

あー、やだやだ。

「……うっっ！」

心の中でひとしきり吐いてから。

パパンと両頬を叩いて戦いに必要のない雑念を取っ払う。

弱音はナシだ。

『ティエティエ選手はロジャーさんの教え子でしたね。試合開始の前に何かかける言葉はあるでしょうか？』

『ティエー！ 気負わんでいいぞー！ そやつらには負けてしまっても構わんからなー！』

無神経老害龍の煽りとも取れる応援を受け。

それでも一応は自身を鍛えてくれた師に向けて一礼する。

そして再びこちらを向いた時、彼はすでに出来上がっていた。

「オレは今年こそはラファールを倒しゼンフトウの王になる。あの方に随分と買われているようだが、貴様らと遊ぶつもりはない。すぐ楽にしてやる」

ただしその目は我々ではなく、まだ自身が出場するとは決まっていない決勝戦を見据えていた。

「こりやまた、嘗められたものだな」

「ねー」

「気の早い男はモテないわよおん？」



『おおつとこれはあーッ!?』

『綺麗に分かれましたなあ』

試合開始直後、ケイとグリゴールが場所を変えるために明後日の方向へ瞬発し。

ティエティエも岩竜と共に俺を狙うのではなく二人を追っていた。

「アレンくん任せたよーっ!」

「頑張つてねえん!」

視界の外から聞こえてきた声に振り向かず、ただ親指を立てて応える。

たしかに任された。

「さあて……」

二人がティエティエを倒してくれることを信じてデカブツを中心に捉え、さらに視界を狭めて集中。そうでもしないとあっさり死にかねない。

それでも人として、おじぎだけは忘れずに。

「どうぞお手柔らかによろしくお願いします」

「ガアゴッ!」

俺が下げた頭を上げると、ワツフンくんは軽く鳴いて鉄の門扉じみた翼を開閉した。

残念なことに岩竜なだけあって知能が高く、どこぞの喋れてヒトの姿をとれる老害よりもよほど礼儀正しい。

取っ払ったはずの雑念が穴という穴から入り込んでくる。

(これは……カウンター狙いだな)

最初は互いに瞳を見つめ合って出方を窺い。

どうも向こうからは攻めてくる気配がないので、ありがたく観察を優先する。

正面に弱点は………ない。

ならばと駆け回って側面背面と探すも、傷一つ綻び一つ見当たらない。いかにも大会直前にマグマ風呂に浸かってきましたよといった具合だ。

『アレン選手とワツフンくんの方はまだ接触がありませんね。アレン選手は何をぐるぐるしているのでしょうか？』

『古傷でも探しているんでしょう。奴は狡猾な男ですからな』

少し癩に障る言い方だが、たしかにその通りなので何も言い返せない。

『おーいアレン、そやつに弱点はないぞー！ はよう突っ込め突っ込め！』

言われずとも分かっている。

彼はどこから打たれてもいよいよように待っていて、さらには紅王蠍と同等以上の硬さがあることも。

そして俺には拳しかないことも。

こんなことならそこそこ良質な剣でも買っておくんだった。

「ふうー……」

腹を決め、たっぷり息を吸って吐いて――

――瞬発。

間合いに侵入、

巨大な手と爪が振り下ろされる、

柔の拳にて大半を受け流し、

受け流せなかった分の力を乗せて、

「ハアッ！」

壱の秘拳、壞門。

「んんんーッ！」

巨木のような脚の付け根に打ち込んだ一撃が竜に悲鳴を出させることはなく。

こちらは反作用により指の骨から肩甲骨まで粉々に。

「うおっと」

痛くも痒くもない攻撃を受けると大概の魔獣は嘗めてかかるものだ。それこそヒトであろうと。

しかし賢いワツフンくんは即座に追撃をしてきた。

「知ってた。知ってたさ」

一旦間合いの外へ逃れ、呼吸を整える。

腫れ上がった肉と粉々になった骨を元通りに。

再び竜の瞳を覗いてみるも、やはりそこに油断の色は無かった。

「参ったなあ……」

もう十分に力量は測れた。

こいつは強い。

どれくらい強いかといえば千年以上昔の、今とは段違いに冴えていた俺とやりあっても四回に一回は殺せるくらいには強い。

つまりはリハビリ中に戦っていい相手ではない。

——だから、どうした？

魔法が使えなくとも、一度しか死ねなくとも、やるしかねえんだ。できないことをやるわけじゃない。できるかどうか分からないことをやるだけなんだ。千年前なら比較的容易にできたことを今、再現するだけなんだ。

やるぞアレン、やるんだアレン。

皆が見ている、カレンが見ているぞ。

勢いよく湧き出てきた弱音が形を成して凝り固まってしまいう前に、気合いと根性と愛情の大波で押し流した。

『アレン選手ラッシュを仕掛けたア！ 目にもとまらぬ速さの連撃！

長いこと実況をやっていますが私の目でも拳が捉えられません！

一体一秒に何発打ち込んでいるんだッ!?!』

『十八と三分の一つでとところですか。それでも彼の全盛期にはまだまだ及びませんよ。鈍りに鈍ってます』

「ぬおおおオオオオオッ!!」

ただひたすらに必殺の、並の生物が相手ならば必殺の拳を打ち込む。

並外れた頑強な鎧と接触するたび血と肉が飛び散り骨が折れる。

鎧を破壊するための命令、壊れた骨身を治す命令、竜の攻撃を回避する命令を同時に下し続ける。

痛みに泣き叫ぶ余裕はない。今に見ているとロジャーに悪態をつく余裕もない。

「ガアガッ！」

しばらく一方的に打ち込んでいるとワツフンくんがやけになった大振りをしてくるように。

未だ相手の攻撃はこれっぽっちも痛くないとはいえ、自分の攻撃が全く当たらないのは不快で堪らないだろう。

そのまま荒れ荒んでしまえ。冷静さを欠いて沸騰してしまえ。己の過ちに気付いた時にはもう――

「――ぬぐうおっ!？」

懐に潜ってがむしやらに拳を打ち込んでいると、彼は不意に飛び退り。

腕でも脚でもない第三の武器、巨大な尻尾が死角より現れた。

俺の拳が空を切った完璧なタイミング、そして今の今まで隠していた機敏な動きで繰り出された横薙ぎを避けきれず。

のけぞりながらもどうにか柔の拳で受け流せたが肘から先の感覚がない。

「おいおい、腕を返してくれよ。試合後のハイタッチができない――」

距離をとって軽口を叩いた最中に、ワツフンくんの口から高温の空気が漏れているのを感じ。

咄嗟におニューの両腕を顔の前で重ねて息を止める。

同時に視界が紅く染まる。

『紅だあああアッ！ 一瞬にして火炎に抱かれたアレン選手、絶体絶命かアーツ!？』

衣類は即座に焼け落ち、

皮は焼け爛れ、

肉は焼け崩れ、

最後に骨が焼け焦げた。

(痛ってえなチクシヨウ)

痛覚を遮断する余裕はない。

剥き出しになった神経をすりおろすような想像通りの痛みが止ま

ない。

だけど俺はまだ、生きている。

心臓が動いていて、血が巡っていて、ものを考えられる。

まだ、死んじやいない。

耐えて耐えて耐え抜いてみせろ——

『えー、ワツフンくんの息吹がもうすぐ収まりそうですが、心臓の弱い方は目を背けておいてください。きつと見るも無惨なことになつ、なななんとアレン選手!! 生きています! たしかに生きています!!』

視界から紅が消え去って直ぐに、実況の吃驚と共に大歓声が起こった。

『信じられません! あれだけの炎をもともしていない! これがかつて世界を恐怖に陥れた不死者の力なのかアーツ!!』

ものともはしているんです。

それでも必死に、死なないように焼けて溶けたそばから再生してただけ。

少しでも気が緩めば、少しでも再生が遅れば、少しでも痛みに耐えられなければ死んでいたでしょう。

こればかりはワツフンくんが岩竜で助かった。仮に火竜の放射であれば間違いなく再生が追いつかなかった。

『千年近い空白期間があるとはいえ、岩竜の炎くらいなら耐えられるようです。全盛期は理不尽でしたよ。ワシの吐いた炎を受け切ってピンピンしていましたからな。ちなみにあの薄汚いポンチョも再生しとるんですよ』

竜の炎で焼け焦げて消滅したはずなのに “なぜか” 元通りに修復されて足元にあるポンチョを拾ってかぶる。

これも子供の頃は膝下までの丈があつたが、大人になった今では腰までしかないので下半身がとてもスースーする。

ふと実況席の方を見るとカレン達と目があつたが、すぐにそっぽを向かれた。

すまないね。羞恥心なんてものは今さっき焼却されたんだ。

「それじゃ、第二ラウンドと行こうか」

アレだけ盛大に吐き出したんだ。しばらくは羊を丸焼きにする程度の可愛い火の玉しか出せないだろうよ。

その間に少しでも削らせてもらおう。

「そろそろ脚の一本はもらうぞー！」

再び懐に潜り拳を打ち込む。

「オオオオオッ!!」

矮小な人族の技は重みが無く、決定打とならないのは分かっている。

動く要塞たる岩竜を仕留めるのがどれほど困難かは分かっている。

だが、それは向こうも同じこと。

激しく損傷した箇所を即座に治し、最大火力の息吹でも殺しきれなかった。

両者ともに決め手に欠けている今、勝敗を決するは……心だ。

『おおっとおー！ グリゴール選手の拳がついに鎧を割りましたッ！』

そしてケイ選手のとんでもない猛攻だアーツ！ テイエティエ選手、

捌き切れるのか!?!』

「俺も負けてられな……い……い……」

不意に視界が真っ暗になり、体がとても軽くなった。

向こうの形勢が良いことを知ってわずかに気が緩んだせいか、賢い岩竜が見事に俺の逃げ先を読み切ったかのどちらかは分からない。

あるいはその両方かもしれない。

『ああーつと!! アレン選手、下半身を残して食べられてしまったアーツ!!』

あっさりと勝敗は決した。

◆? ◆? ◆?

巨大な卵を乗せるのにちょうどいい形状をした闘技場がよく見える。

照明は点けられておらず月に照らされているだけだが、それでもなお百万を超える魔人が住む街の中で抜きん出た存在感を放っている。

「すみませーん！ ツンザキイモトリウノザのミネストローネ、紫角牛のステーキ、それと毒棘盾蟹の毒抜き炒めご飯を三つずつ追加してくださいー！」

「私も同じのを四つずつ」

「か、かしこまりましたっ！」

決勝進出祝いの会場はロジャーに顔を利かせて確保させた最高級ホテルの屋上に置かれている。

このためだけに呼び出された一流の料理人達が魔臓娘らのせいで手を休める暇なく働いてくれているのだ。

大変ありがたく、そして大変申し訳ないとも思う。あとで秘伝のレシピをいくつか教えてあげよう。

「それじゃー！ エンモタケナワなので、みんなに意気込みを言ってもらおうっ！」

祝勝会が半ばを過ぎたあたりで。

酒は一滴たりとも飲ませていないのだが、誰かさんが持ってきた竜火酒の臭いだけで軽く酔っぱらったカレンが立ち上がった。

「まずはケイからー！」

「うん！ 決勝でも頑張ります！ 明日明後日とちゃんと鍛えて休んで……あ、明後日決勝だったね」

「……大丈夫？」

「え、うん。大丈夫だよ大丈夫。心配しないで、あははー！」

どうもケイは天然というか抜けているふしがある。

アンデイにかけられた心を脆くする呪いに知能低下の効果でも付属していたのだろうか。

「そ、そうなんだ……じゃあ気を取り直して、次はグリゴール！」

「アタイも死ぬ気で頑張るわよおん！」

「最後はアレン！」

「はい、決勝でも死なないように頑張りたいと思います！」

俺が立派な決意表明をした途端になぜか皆が静まり返った。

少し待っても誰も話そうとしないので、俺に次いで年長者の口ジャヤーが先陣を切った。

「アレンおヌシ、あの時絶対死んでたじやろ？」

「それあたしもずっと言おうと思ってた！」

「同じく」

「あれはどう考えても死んでたよナ」

全員がうんうんと頷く。仲間のはずのケイとグリゴールまでもが頷いた。

どうも先ほどの試合で俺が食われて死んだと考えていらっしやるようだ。

たしかに俺はワツフンくんに噛みつかれて下半分を持っていかれ、さらに咀嚼されて首から下も持っていかれた。だが……

「今大会のルールは『一度死亡が確認された選手はその時点で脱落とする』で間違っていない？」

「ああ、そうだが……まさか!？」

「そのまさかだ。誰が俺の死を【確認】した？　いつ俺が死んだよ？　ええ?。」

「……いや、いつも頭だけになったらすぐ死んどるじやろうが」

「はあーん？　それは昔の話だろ？　今の俺は……いや、あの時の俺は頭だけで生き延びてワツフンくんの腹の中に侵入して身体を生やせたんですう！　出来ないって証拠はあるんですか証拠はあ!？」

我ながら子供じみた言い分だが、ルール上は何ら問題はない。

アレン・メーテウスが死んでいたか生きていたかは俺のみぞ知るところなのだから。

あとは食われた直後の記憶を消して真相を闇に葬れば万事解決である。

「……フン、どちらにせよオレ達の負けだ」

なぜか皆が生ゴミを見るような細めた目でこちらを睨視してくる中、少し離れた席に座る金髪を短く刈り込んだ色男が独り呟いた。

テイエテイエくんである。

今日の敗北を糧にさっそく鍛え直すつもりだったところを口ジャヤーに無理矢理連れてこられたという。

「貴様が死んでいようといなかりうと、オレは二人に負けたのだ。残されたワツフンだけでは太刀打ちできまい」

「そうそう、話が分かるねえ。君にはうちのグリゴールを妻にする権利をあげよう！」

「あらやだ本当お!? 不束者ですが末長くよろしくお願いするわぁん！」

「な、何をっ!? おい貴様離せ! やめろ、それ以上寄るな——」

種族と性別の隔たりのない宴は盛り下ることはなく。

そしてこの日の夜、グリゴールに男同士の大事な話があると持ちかけられたのはあの色男ではなく、俺だった。

第十五話 「絶賛指名手配中の超絶訳アリ物件」

本日の空模様は雲一つない晴天。

そして青砂を運ぶ風がほとんど吹いていない静かな日だ。
なれど、どこもかしこも騒がしい。

『いよいよこの日がやって参りました。会場にお越しの紳士淑女の皆様、心の準備はよろしいでしょうか?』

実際に騒がしいわけじゃない。むしろ観客の多くが口を開けずじっと沈黙して待っている。

年に一度の、この地の王を決める一戦をいまかいまかと待ちわびている。

そうして生み出された何万何十万もの鼓動の高鳴りが膨れ上がり反響し合い、広大な闘技場をたしかに震わせていた。

『それでは入場してもらいましょう。まずは北の選手からアーツ!』
目の前の鉄格子の門が開けられ、盛大な爆発音と共に青砂が吹き上げられて幕となる。

「二人とも、準備はいい!？」

「いいわよおん！」

「ああ」

真つ青な帳が下がりきってから、我々は足を上げた。

『彼らは人族でありながら巨人を倒し、竜を倒し、数々の死闘を制し、ここまで勝ち上がってきました! 勇者ケイ!! 拳聖グリゴール!! 不死者アレン!! 誉高き戦士たちよ、真の栄光はすぐそこだッ!』
淡々と、しかし真心の籠った紹介で観客が沸き上がる。

今大会で最も有望な挑戦者である我々に溢れんばかりの大声援を送ってくれる。

その全てを受けながら舞台中央へと進む。

「すごい期待されてるねー!」

「そうねえん……」

「……そうだな」

カレンと同類で裏表が無く純粹、悪く言えば無知で鈍感なケイは我々の勝利を望む声をそのままに受け取った。

しかし俺とグリゴールは当然気付いている。

無数に飛び交う声援の中に、カレン達のを除いて我々の勝ちを確信しているものは一つもないと。

仕方のないことではある。

『続いて！ 南の選手、入場ッ！』

向こう側の入場口が派手に爆発し、波が引くように観客がスツと静まる。

『その強さ、まさに史上最強！ 長年に渡り数多の挑戦者を、力ある者どもを悉く粉碎せり！ 誰が青土に愛された男の敗れる姿を想像できようかッ！！ 本大会百三十連覇中！ 我らが王者、土魔神ラフアーダルツッ！！』

——客席が噴火した。

たった一人の魔人に向けて、どっと声援が大波となって押し寄せた。我々に向けられたものよりも激しく大きなものが。

「そういうことだったんだ」

さすがのケイもどちらのオッズが圧倒的に低いかを理解した。

少し落ち込んだケイを励ます暇もなく、彼が目の前にやってきて二ヤリと笑う。

「いよう、絶対にお前達が来ると思ってたぜ」

「それはそれは、光栄なことだ」

土色の肌に真つ赤な瞳と真つ白な歯を嵌めた筋肉の塊。

身長百八十五センチメートルと魔人の中では平均よりも少し小柄なくらいだが、体重は三百キロを優に超す。……そう、ケイと似た特異体質の持ち主である。

そしてその頭髪は“なぜか”準決勝までとは打って変わって派手な黄金色になり逆立っていた。

決勝戦は両者が準備完了の合図を出すまで開始されないの、まずは互いに相手の足元から頭の上までをじっくりと視て吟味する。

(本当にふざけた強さをしてやがるな。この男はヴィールタスの遣い

か何かか?)

それで分かりたくもないことが分かったところでラファアーダルが口を開いた。

「よーし、そんなじゃあいつちよ四将らしいことでも言つとくか!

えー……よくぞここまで来たな人族の勇者よ。我こそが魔王様よりこの地を賜りし四将が一人、ラファアーダルだ」

そこでラファアーダルは言葉を止め、少しの間固まってから実況席の方を見た。

追つて見るとロジャーが口をパクパクさせていた。……マジかコイツら。

「これまで方を超える戦士が我に挑み、あっけなく散っていった。お前達は我を蛮族させてくれるのか?」

『違うラッフア! 蛮族じゃなくて満足だ!』

「あ、そうなの?」

ちよつとしたおふぎけで闘技場全体が笑いの渦に包まれた。

なるほど人気があるわけだ。

「……とまあ、そういうわけで全力でお前達を叩き潰す。親しい人に別れの挨拶は済ませたか?」

なんて和んでいたらラファアーダルの気配が一変した。

皆に慕われる気の良い領主から、《激動》の二つ名通りに激しい闘争を求める狂戦士へと変貌したのだ。まだ五百歳にも満たない若さでよくやるものよ。不死者ポイントを贈呈。

「……………うん、いいよ。グウとアレンくんもいいよね?」

ケイはすでに準備万端だ。

腰にかけてた聖剣の柄に手を置き、いつでも一閃を放てるようにしている。

「ラファアーダルちゃん、ちよつと大事な話があるんだけど、待つてくれるかしらあ?」

「ん、おう。いくらでも待つぜ」

そこで予定通りグリゴールが遮った。

神妙な面持ちでこちらを向く。

「グウ？ どうしたの？」

「ちよつとした提案……というよりか頼みがあるわ」

「うん？」

「——アタイ一人で彼と戦いたい」

グリゴールは長らく温めてきた思いを解き放ち。それに対してケイは、

「……何、言ってるの？ ダメだよ、グウ一人で勝てるわけないじゃん」

乙女の純情をバツサリと一刀両断。

何も意地悪で言ったわけではない。ただ率直に客観的事実を述べたのだから。

俺だって何も知らなければ同じ内容をやんわりと諭すように告げている。

「だから言っただろうに」

「一応よ一応。それじゃアレンちゃん、あとは頼むわよおん」

「二人ともどういうこと？ あとは頼む……って……」

まだ試合開始前で、突拍子もない発言に動揺し、俺を仲間と認識しており、一切の警戒心を抱いていないケイの背中を突く。

彼女の意識はハッキリしたまま体が硬直した。

「どう？ もう大丈夫かしら？」

「石縛孔を突いた。これでしばらくは喋ることすらままならん」

「助かるわぁん」

「思う存分やってくるといい。重っ」

打ち合わせ通り、二人の戦いの邪魔にならないように成人女性五人分の質量を持つケイを運んで舞台中央から遠ざかる。

ケイは唯一動かせる眼球だけをこちらに向け、何かを言いたそうにしていた。

どうしてこんなことするのか、とか。早くグリゴールを止めて、といった辺りだろうか。

『これは予想外の展開です！ グリゴール選手は単身でラフアードル選手に挑戦するつもりです!!』

『北チームにはヤツがおります。何かしらの策を講じてはいるでしょうが、とはいえラフアーダルと一騎打ちさせるとするのは自殺行為としか思えませんな』

ラフアーダルは初戦から準決勝までに計八人の選手と戦い、そして拳を計八発命中させて勝ち上がった。そして

対戦相手のほとんどがグリゴールよりも体格が優れた魔人にも関わらず、たった一撃でのされてしまった。しかも本人曰く無闇に殺さぬよう加減しているという。

まさに一撃必殺、まさに史上最強。

初優勝以来、どの賭け場でもラフアーダルの配当倍率オッズが一，一を超えることはない。唯一二倍弱を記録したのがロジャーと対戦した時だ。

生身で龍に勝てると思われていて、実際勝ったのだ。

いくら勇者一行の一人といえど、ケイのような特異体質でもない人族の身で、そのような規格外の化け物に単身立ち向かうのは自殺行為だと捉えられるのは当然だ。

『グリゴール選手にラフアーダル選手、本当に試合を開始してもよろしいのでしょうか!？』

「ああ、いいぜ」

「いいわよおん」

ラフアーダルが利き手の左腕を引いて構え、応じるようにグリゴールが右腕を引いて構える。

ケイは必死に目を見開いて俺とグリゴールを交互に見ていた。早く止まってくれ、早く止めてくれと。

「まあ、見ておきなさい」

『それではロジャーさん、試合開始の合図をお願いします』

『両者構えてえー……始めイッ!』

グリゴールが地を踏む、

ラフアーダルが地を蹴る、

拳と拳が接触。

「うおっ」

生身同士なのに砲弾と砲弾がぶつかったような、誰も寄せ付けけない音と衝撃が生まれた。

各々の体を通って地面まで伝わった力が青砂を舞い上げる。そして力負けして下がったのはラフアードルであった。

「アナタ今、手え抜いてたわねえん?」

「抜いてたつつつても、六割は出してたぜ? ……お前、本当に人族か?」

観客が大いに沸き上がり、同時に激しく困惑した。

過去にワツフンくんの尻尾の振り回しを食らって弾き飛ばされるくらいはあっただろうが、ヒト同士の殴り合いで引き下がったことは一度もないのだろう。

少なくとも今日までは。

「ど……うし……て」

「もう喋れるのか!? ったく、勇者というのはいつの日もとんだ化け物だな」

ケイに目をかけている間にまたしても観客がどよめいた。

どうやら挨拶を済ませて一旦下がったグリゴールが上着を脱ぎ去っていた。

「なにあ……れ。どう……なってる……の」

ケイも観客も、グリゴールの鍛え抜かれた肉体に驚愕したのではない。

笑った時に見せた犬歯が獅子のように鋭く。

体中に浮き出た血管が黒々としていて。

肩甲骨のあたりからは蝙蝠のような翼が生えていたからだ。

『グ、グリゴール選手の身に一体何が!』

『あの身体は……。そういうことじゃな』

四千年生きるだけあってロジャーは何があったのかを軽く推察できたようだ。

お前、やったなと視線が届いた。

やっちまったぜと視線を送り返した。

「アレン……くん! グウは……どうしちゃった……の!?!」

「おとといの夜のことだ——」

◆?◆?◆?

決勝進出祝いの宴の後、神妙な面持ちをしたグリゴールに話があると誘われ、街外れの古びた監視塔まで連行された。

「よくこんな穴場を知っていたな」

命と営みの結晶たる街の全景が一望できる。

周りは農地のため人の気配は無く、風の音と虫の鳴き声だけがよく聞こえる。

密談するには持ってこいの場所だ。

「告白するにはどこがいいか聞いて回ったのよおん」

「おいおい。俺はバツイチ子持ち、ところによつては絶賛指名手配中の超絶訳アリ物件だぜ? やめときな」

ずっと思ひ詰めた硬い表情をしていたので軽い自虐をぶつけてみると。

ふふっと上品に笑いはしたものの、やはりそう変わらず険しいままだった。

不安と緊張、それと僅かに恐れが混じっている。

「アナタにしか頼めない、大事な話があるのよ」

「そうか。実は俺からも話があつてな。先に言わせてもらおうぞ」
覚悟を決めた乙女の言葉を遮り、ダメ元で先手を打つ。

「——明後日の決勝戦、君は棄権しなさい」

ケイとミロシユが言うに言えないことを大人である俺が代わりに告げる。

グリゴールとしても薄々勘づいていたようで、特に驚きはせず息を吐いた。

「ワケを聞いてもいいかしら?」

「うむ、理由は脆い重い厚いの三点だ」

たしかにグリゴールは鍛え抜かれた良い身体をしている。だが、ケイのように常識外れの頑丈な骨身を持っているわけではなく、俺のように死を超越しているわけでもない。

殴り合いにおいて史上最強とまで謳われるラファードルの拳を一発でもまともに受けてしまえば、枯れ枝のようにぽつきりといくか大穴が空く。あくまで人族の範疇に収まっており、ゆえに脆い。

いくら口では気にしないと断言していても、勇者たるケイは弱者たるグリゴールを庇うように戦うだろう。彼女の存在自体がケイにとって重荷となつてのしかかるのだ。ゆえに重い。

「そして何よりも、君達はカレンから厚い信頼と好意を得ている。あの子は優しすぎるくらいがあつてな」

他人の苦しみを自分の苦しみのように感じてしまえるのだ。

もしも親愛なるグリゴールが試合に出て、大怪我をするか無惨に死ぬものなら心に深い傷を負う。

カレンはまだ幼い。

いつか大切なものを失い悲しみに暮れる日はやって来るだろうが、今ではない。

幼い娘に哀しみを背負わせたがる父親がどこにいる。いたら名乗れ。徹底的に矯正してやる。

「これ以上の説明がいるかい?」

彼女は俺の話を一言一句漏らさず聞いて首を横に振った。

しかし、納得しているわけでもなかった。

「遠慮せずに述べたまえ」

「ええ、アタイが五体満足で勝てばいいのよねえん?」

「ほう? ならば今から十数える間に雪か雷でも降らせてみる。それが出来たら信じてやろう」

か弱き人族が《土魔神》を相手に五体満足で勝つなど、それくらいの確率だ。

万に一つもない。

「魔法の使用が許可されていたなら色々仕込んでやれたんだがな……。君をラファードルとやり合えるほどに強くする術は持ち合わ

「せちやいない」

「嘘はダメよおん、一つだけあるじゃない」

「はて、なんのことやら……」

彼女はいやらしく細めた目で俺の懐を、隠された膨らみをじつと見下ろしてくる。

「早く出しなさいな。アナタが試合中以外は肌身離さず持っているそれよおん」

しばらくすつとぼけて口笛を吹こうがこちらを睨んで静止したままだったのだ。

ぶつとい手を伸ばして手荒くまさぐられてしまう前に、仕方なく命よりも大切なものを取り出した。

「これが何かを知った上で言っているのか？」

黒い革水筒の首を摘んで軽く左右に振る。

ちやぷんちやぷんと可愛らしい音が鳴った。音の正体は可愛さと正反対に位置するものだが。

「もちろん知ってるわよ。それを飲めばアタイは強くなれるってことも」

「生きていたらの話だ」

この液体は滋養強壯の良薬などではない。むしろその逆、猛毒だ。歴史上で最も偉大で強力な吸血鬼の血は、飲んだものをまず死に至らしめる。

肉体が耐えきれずに自壊するのだ。

俺だって安定して飲めるようになるまで三十年はかかった。

「でも、それしかないでしょ……」

「……まあ、な」

事実、ラファールに對抗する力を得るにはこれしかない。

化け物を倒すには自らも化け物となつてぶつかるとしかない。

ヒトのままではアレには勝てん。

「十中八九死ぬぞ？」

ガエルの血を飲めば高確率で死に、飲んだ上でラファールと戦つても……まあ、勝てないだろう。

だというのに、グリゴールは穏やかな目で呆れたように笑っていた。

「アタイが死んだら誰があの子達の面倒を見るっていうの。ケイは朝飯一つまともに作れないしミロシユは全部吹き飛ばす以外に掃除が出来ないのよおん？ シモーネちゃんのところまで住み込みで働いていた頃は週一でアタイがあの子の部屋を掃除してあげてたんだから。それにまだ生涯を共にしてくれるイイ人も見つけてないのに。そんなんで死ねるわけじゃないじゃない。——生きて、勝つわよ」

「……………合格だ。好きにしろ」

かあーつと、肺の中の空気をほとんど吐き出してから投げ渡した。

もちろん、齡三桁に満たないガキンチョの著しく根拠に欠けた決意を認めたくわけじゃない。

ここで拒否しようものなら殺してでも奪い取りにくるだろうから仕方なしにだ。

ここで力尽くで抑えようとも必ず抜け出して単身挑むだろうから仕方なしにだ。

それならまだ、万に一つしかない希望でもくれてやった方が良くだろうよ。

決して認めたくわけじゃない。

「あ、ちよつと待て」

グリゴールが水筒の栓を抜き、躊躇なく口をつける直前に止めた。「なによ。いまさら小言はよしてちょうだいな」

「最後にこれだけは聞いておかないとな。どうしてそこまでしてヤツと戦いたいんだ？」

何が君を突き動かす。

誰が心の中で咆哮している。

「そうねえん……………ひいじじの代から続く因縁……………なんてのは正直言っただうでもいいわ」

「ほう」

「彼は史上最強の拳士じゃない？ 一応聞くけど、アレンちゃんの見てきた中で彼にステゴロで勝てそうな人はいたかしら？」

「……いないな。いてたまるか」

「そ。ならよかった」

水筒を握る手に力が籠る。

「ラフアーダルに勝って、アタイがこそ史上最強の乙女になるわよおん!!」

第十六話 「挑戦者」

ケイはまるで実の両親と初めて対面した時くらいの啞然とした顔を見せた。

「そんな……理由で……」

「そうだ」

普通の女性的感性を持つ者にとつては到底信じられないことなのだろう。死を顧みず吸血鬼となり、それでもなお勝てないとされる相手に命懸けで挑むというのは。

だが、我々のような高みを求め続ける者にとって世界最強という称号には命を投げ出すだけの価値がある。

「理解してやれとは言わん。その代わりせめて見守つて、応援してやってくれ」

少し間を置いてケイは静かに頷き、グリゴールの晴れ姿を視界に収め。

またしても目を見開いた。

『信じられません!! あのラファードル選手と拮抗! 拮抗しております!!』

『拮抗ではないでしょう。今のところはラツファアが押されていますな』

グリゴールは史上最強の魔人と拮抗……いや、たしかに押ししていた。

ラファードルの圧倒的な暴力と俊敏な動きに対し、極めた柔の拳と吸血鬼の身体能力を以って封じ込めているのだ。

『いやー、このワシの目をしても予想できませんでした。一昨日まで彼女は人族だったはずですが、まさか一日二日でここまで仕上げるとは。もしやすると勇者以上の天才かも知れません』

あの伝説の戦災龍がグリゴールの才能を褒めちぎった。全くその通りだと思う。

グリゴールは一昨日の夜に人族を辞めたばかりだが、すでに血の操作による肉体強化まで使いこなしつつある。

アレン・メーテウスなる人物は安定して吸血鬼になるのに三十年、そこからさらに吸血鬼としての力を使いこなせるようになるまで十年近くかかったというのにだ。

なーにが「アタイもアナタと同じ持たざる側」だよ裏切り者め。君もケイやミロシユと同じ世界の住人だったじゃないか。

「どーおー？　これが弱つちい人族アタイ達の編み出した技術よおん」
「ははっ、こりやすげえや。渦潮と戦ってるみてえだ」

もちろん吸血鬼の力だけでどうこうできるのなら彼は史上最強などとは呼ばれていない。

ラファードルの攻撃は軽めの突き一つでさえ、三爪魔獣以下の生物に対しては即死級の必殺技だ。

グリゴールはそのような隕石の雨とも称せる乱打を余さずいなし、凌ぎ、僅かな隙をついて反撃しているのだ。彼女の練り上げた技術なしには出来ぬ芸当よ。

「ハアツツ!!」

「ぐあッ！」

『おおっとお！　決まったア!!』

試合開始から十分は経過し、ラファードルが未だ一つも有効打をとれてない中で、グリゴールの渾身の前蹴りが鳩尾に食い込んだ。

筋肉の塊が弧を描いて吹っ飛んで青土の上を転がり観客が盛大に沸き上がる。

『初出場から百三十年続く不敗神話が！　今日で終わりを迎えてしま
うのかッ!?!』

「アレンくん！　この調子ならグウは勝てるよね!?　……アレンくん
?」

「……………」

二時間は身動きひとつできないはずの束縛をほぼ完全に解いてしまったケイが手をブンブンと振って嬉しそうに聞いてきたが、良い返事ができない。

「……からだ」

「えっ？」

「ここからが本番なのだ。」

「へへっ、今のは効いたぜ」

「あと十回同じのをやってようやくってところかしらあん？」

ラフアーダルは手をつかず飛び跳ねるように立ち上がって再びグリゴールの元へ向かう。

流星というべきか、アレだけ派手に吹っ飛ばされたというのにまるで効いていない。

「で、そろそろ本気を出してもいいんじゃない？ 焦らす男は嫌いよおん」

「わりいな、別にお前をナメてたわけじゃねえ。ついて来れるか試してたんだ。下手したら跡形もなく殺しちまうからな」

ラフアーダルは深く息を吐き、左腕を引いて構えをとる。

グリゴールも対応する構えをとって静止する。

「ここからは本気でいかせてもらうぜ」

「望むところよ」

不思議と風も止み、実況も観客も静かに二人の出方を待つ。

「ねえアレンくん、ラフアーダルはずっと力を抑えてたの？」

「いいや、全力だったさ。……そう、まるで子供のようにね」

「……………あ」

これまではただ殴っているだけだ蹴っているだけ。

極めて直線的で回転数が多く、誘いも惑わしもないガムシヤラな打ち込み。

それこそ道理を何も知らない子供や獣のような戦い方をしていた。

だが、彼はヒトである。

三百四十年生きて経験を積んでいる。

グリゴールの十倍以上の年月を経て、技の一つや二つ極めていないわけがない。

「バモォー……………」

「いまさら怖くなったなんて言わないわよねえん？」

奇怪な息遣いと共にラフアーダルの身体が小刻みに震える。

あのような技は……………まさか！

「まずい！ 避けろッ——」

俺の声が届くより先にラファードルの拳が届いた。

右胸に打ち込まれることを読み切っていたグリゴールは当然のように柔の拳で受け、

「なっ」

グチュンと肉を押し潰す音。

さつきラファードルが吹っ飛んだのと似た形でおおよそ倍の距離を飛んだ。

あの技を完全には流せなかったのだ。

「やべ……死んじまったか？ おーい！」

「ダイ、ジョーブ……よおん」

吹っ飛んだ先で巻き上げた青砂が落ち着いて、そこからさらに十数える前にグリゴールは起き上がった。

千切れた右腕を拾ってどうにか起き上がった。

「グウー！ 腕が！ もう棄権して！」

「これくらいどうつてことないわ」

ケイの心配をよそに、千切れた腕に向けて無数の血管を伸ばして結合し、潰され抉り取られた骨肉も元通りに治していた。

これこそが対エルフ用に造られたとされる吸血鬼の再生力である。

「さ、続きをしましょ」

「へっ、そうこなくちやな！」

不撓の挑戦者を讃える歓声に後押しされ、彼女は再びラファードルの目の前に立った。

ただ、巖のような足腰と拳はほんの僅かに震えている。

そして激しい打ち合いが再開されたが、やはりグリゴールの戦法が変化していた。

『避ける！ 避ける！ また避けるッ!! グリゴール選手、全く受け止めようとしません！ ただひたすらにラファードル選手の攻撃を回避しています!!』

「ううむ……」

アレばかりは吸血鬼の肉体と柔の拳を以ってしてもどうにもでき

ないか。

『ロジャーさん、どうでしょうこの展開』

『一見逃げ回っているだけに見えますが、アレが正解ですな。ラツファのあの技は剛の拳系統の究極奥義が一つ「バモヒャーゲ』』

『バモヒャーゲ、ですか?』

『ここ五十年は「バモスピン」の方しか使っていないなかったので知らない者も多いかのう。バモヒャーゲは筋肉を激しく振動させて多方向に力を分散させる技です』

つまりは一本しかなかった力の矢印が何本にも増えて襲いかかってくるということだ。

こちらを受け流せばあちらを防げず、あちらを受け流せばこちらを防げず、どうにかしてこちらとあちらを受け流してもそちらから破壊される。

対応策が避けるまたは受けて耐えるの二つしか存在しない。

受けて流すを主とした柔の拳との相性は最悪である。

『バモヒャーゲを見極めて完全に受け流せる者などこの世には存在しないでしょう』

技の性質ゆえにただ全力で殴るよりも三割ほど威力が抑えられてはいるだろうが、ラファードルはデコピンで飽魔銀ミースリルの兜を砕くという。それが真実ならば威力が半減していようとまず耐えられん。

ゆえに避けるしかないのだ。

『ちなみにワシは百年前のこの大会であの技に負けました。悔しいですが未だに攻略法を模索中です』

あの負けず嫌いの戦災龍でさえ殴り合いにおいては勝てないと素直に認めている。

見た目通りの豪放磊落、しかし雑というわけではなく繊細で練り上げられた技を持ち合わせている。四将ラファードル、まっこと恐るべき戦士だ。

だというのにグリゴールの目に諦めの色はない。

「アレんくん、流石にもう止めた方が……!」

「……止められるものなら止めたいさ」

どんな理由であれ俺は俺以外の犬死にを、無意味な滅びを心底憎んでいる。万に一つも勝てない勝負ならば問答無用で割り込んで止めている。

しかしこの試合は違う。

百に一つ……いや、二十に一つくらいの確率でグリゴールは勝てる。

風で巻き上げられた青砂がラフアーダルの目に入れば、砂に埋もれていた小石で躓けば、どこからともなく飛んできた小枝か花卉が視界を遮れば。

それくらいイレギュラーの幸運があれば勝ちを望めるのだ。

何よりも本人の心が折れちゃいない。

「もちろんダメだと思っただけに止める。そうならないように信じて応援するぞ！」

「……うん！ 頑張れええっ!!」

剛柔入り混じった激しい応酬が繰り広げられる。

息さえつけない瞬きすらできない高度な攻防がしばらく続いたが……史上最強の名に偽りはなかった。

「おいおいどうしたグリゴール！ 動きが鈍ってんぜエ！ いや、俺がキレてるのか!!」

回避と防御に徹するグリゴールの動きをラフアーダルが見極めつつあり、強烈無比の凶拳が次第に身体を中心を捉えていく。

「ツラア！」

「ぐううっ!!」

『これは痛いッ!! ラフアーダル選手の強烈な上段蹴りがヒット！ 左肩から先が千切れ落ちました！ しかもロジャーさん、まさか今のは!』

『はい、バモヒャーゲですな。まさか足でも使えるようになっていたとは……』

それでもなお、何度手足がもがれようとも、脇腹を挟りとられて吹っ飛ばされようとも、彼女は立ち上がった。

一つ、また一つとグリゴールを後押しする声が増えていく。

不屈の挑戦者に観客は絆され声援が一色に染まってゆく。

「へっ、これじゃ俺が悪者みてえじゃねえか」

「アタイというヒロインのために悪者らしく負けてくれないかしら？」

二人は距離を取って軽口を交わし、構えて静止する。

グリゴールの筋肉が膨れ上がる。

ラファードルも同様に膨れ上がり、さらには振動している。

どちらも限界まで力を解放するようだ。

次で全てが決まる――。

「があっ!!」

「フンツ!!」

それは一瞬だった。

二人は互いに気を読み合って同時に飛び出し。

ラファードルは左ストレートを、グリゴールは右アッパーを繰り出した。

左ストレートは鳩尾を中心に大きな風穴を空け、右アッパーは史上最強の男の脳味噌を揺らした。

「……………つぶねえ」

先に安堵の声を漏らしたのはラファードルだった。

ものの数秒たしかにふらついたが、耐えきった。ノックダウンには至らなかった。

「ど……………して、今ので……………落ちな……………いのよお……………」

胸に大穴を空けて倒れ、起き上がることもできなくなったグリゴールが悔しげに呟く。

「いやー、結構やばかったぜ。中身まで鍛えてなかったらな!」

その言葉を聞いてグリゴールはやり遂げたような晴れやかな顔をした。傷口の再生を止めて「ありがとう」とだけ言い残して目を閉じた。

『……………これは勝負あり、でしょうか?』

『ええ、まっこと良き仕合でした!』

負けず嫌いが転じてろくに他人を褒めない龍が唸って喝采し、それ

はすぐに会場全体に伝播した。

そして、世界の中心にいるラファエルが礼儀を、トドメを刺すために一歩二歩と前進する。

「あばよグリゴール。楽しかったぜ」

勝者がはなむけの拳を振り上げたところで……。

俺は予定通り二人の間に採れたての右腕を投擲し、腹の底から声を張り上げた。

「そこまでえええいッ!!」

第十七話 「裏アレン流究極奥義」

粟立とうとする肌を抑え、青土を踏みしめて前へ。

「おうおうおう、よくも俺の弟子をやってくれたナア兄ちゃん?」

グリゴールを庇うように立ち、猛る獣のぎらついた瞳を覗く。あちらも覗き返してくる。

巨人と呼べるような上背があるわけでもないのに近寄りがたい途轍もない圧力を感じる。例えるなら鉄溶かし燃え盛る炉のような男だ。

本能がコイツとは決して戦わずに逃げろと、そもその生物としての格が違うんだと必死に訴えかけている。

彼女はよくもこんな化け物を相手に怖気ず戦えていたもんだ。

「どういう……つも、り。それにアナタの弟子に……なった覚えはない……わよおん」

背後からか弱い乙女が尋ねてきた。

ラファードルを信用して振り返って答える。

「グリゴール、君は奮闘した。だけど負けたんだ、今回はな」

「今回……ですってえ? アタイに次なんて「なんだ? 無様に負けたくせに何をやり遂げた顔しているんだ? まさかこれで自分の人生が終わりだとも勘違いしているのか?」

今回がダメだったら次回が、次回がダメだったらまた次々回と、命ある限り何度でも挑戦できるのだ。

たった一度の勝負に負けて自ら命を差し出すなんて華々しい幕引きが俺様の前でできると思うなよ。

「仇は師匠が取ってやるから休んどれ」

ということとで穴の空いた肉袋を拾い上げ、問答無用でケイの側に放り投げた。

そして代わりにあるものをこちらへ投げてもらおうように頼んだ。

「ケイ、その剣を貸してくれないか?」

「うん、いいよ」

ケイは二つ返事で答えて代々勇者に受け継がれてきた聖剣リター

ンエースを鞘ごと投擲した。

落として土をつけないよう丁重に掴み取り、すぐに抜こうと柄を握ったその瞬間、

「オアチチッー」

柄がボワツと赤く燃え上がり、あつという間に右手を焼き焦がした。

炭となって崩れた手と共にそれは地面に落ちる。

「ああそう、まだ許しちやくないのね。クソが」

初めて握った時から四千年以上経つが未だに一振りも出来ない駄剣をケイの足元へ蹴り飛ばした。

もしかしたらと期待してはいたが、こうなることは薄々気付いてもいた。

結局はこの身一つでやらねばならないのかと溜息を吐き、それから覚悟して深く息を吸う。

「待たせた。やろうか」

「やろうかってあんだ、その手……」

「心配ご無用、ほら」

新たに手を生やし、いつでもどうぞと表す構えを取る。

ラファードルも応じて構えを取った。

世界から余計な音が消える。

『いよいよ現四将と元魔王の直接対決が始まりますが、どう予想しますかロジャーさん？』

『うむ……。あの二人は拳闘においてワシより強いゆえ、間違いなく百年に一度観れるかどうかの仕合となるでしょう。ワシから言えるのはこれだけです。皆の者、一瞬たりとも目を離すでないぞ!!』

ロジャーが高いハードルを設置したことで会場全体が熱狂的に湧き上がった。……が、それはすぐに嘘のように静まり返った。

どうも皆さん俺達の一挙手一投足を脳裏に焼きつけたらしい。

「あんだとやるのを一番楽しみにしてたんだぜ。ロジャーのおっさんが『アレンには気を付けろ。ヤツは何をしてくるかわからん。頭だ、頭を潰せ』ってしつこく言ってくるからよ」

「俺としてはどちらかが敗退して当たらないことを願っていたよ。あのボケた龍が散々君の強さを語るせいだな」

皆が固唾を飲んで見守ってくれている中で、俺とラファードルの二人だけが笑い声を上げる。

これは良い仕合になりそうだな。

「俺はラファードル。つえー奴とやるのが好きなだけの魔人だ」

「アレン・メーテウス。娘に弱いだけのどこにでもいる父親さ」

息を吸って足腰に力を溜める。

向こうも同じく。

「うラァ!!」

三百キロの質量があるとは思えない瞬発力。

左の拳に力と速度を全乗せした全身全霊必殺の一撃が飛び込んでくる。

「いや無理」

当然これは避ける。

「避け、んなアツ!!」

しなやかな肉食獣のように瞬時に切り返し、無数の拳を打ち込んできた。

うん、これならいける。

『出だしから凄まじい連打だッ！ アレン選手万事休す……いや、これは!?!』

「んなつ、その技はアイツの!」

「さつき言つたらろう？ 俺はグリゴールの師匠だよ」

グリゴールの得意とする柔の拳、アレン流では「象滑ぞじっすべり」と呼ぶ技術を用いて凶拳をいなす、逸らす、受け流す。

吸血鬼ではない人族の脆い身体のため、何枚か皮を削り取られはしたが問題なく無効化した。

「さらに言うとなりの師匠でもある。バモオー……」

身体のあるとあらゆる箇所を限界ギリギリまで捻って絞り、解放した力を拳に乗せる。

「うおっ!」

ラフアーダルは見事に反応してガードしたが十歩分後方へ押し下がり、遅れてきた痛みを顔に歪ませた。

「いいってえーっ！　ぜってー骨にヒビ入ってるぜこれ！」

「ヒビだと？　それはいけないな。大事をとって棄権するといい」
そうか、今のでヒビか。

粉々に砕くつもりで撃ったんだけどなあ……どうすっかなあ……。

『み、見間違いでしょうか!?　アレン選手が今、バモスピンを!』
『見間違いではありませんよ。ヤツは何千年も昔に世界中のありとあらゆる技を習得し、一つに纏めたのです。そして時が経ち、アレン流はいくつもの流派へ分かれて継承されてきました。剛の拳でも柔の拳でもこの世に現存するほぼ全ての流派は元を辿ればアレンに繋がります。ゆえにヤツは《祖拳》と呼ばれているのです』

「というわけで俺のことは師匠か大先生って呼んでくれるかい？」

ついでに師匠を立てるために降参してくれたら嬉しいなどと、上目遣いでおねがいしてみたがラフアーダルの赤い瞳はギラついたまま。

「この拳は一子相伝だよ。師匠を殺して一人前を名乗れるんだ。だけど俺の師匠は戦わずに手紙を置いて逃げちまった」

そりゃあこんな化け物を育ててしまったとなれば逃げたくもなる。

「あんたは要するに師匠の師匠のずーっと前の師匠ってことだろ？」

「そうだと」

「なら、あんたをぶっ殺せば俺は一人前ってこった！」

清流のように透き通った悪意なき殺害予告を頂いてしまった。

とても反応に困るのでやめていただきたい。

「バモオー……」

俺をぶっ殺すという宣言通りラフアーダルの筋肉が膨れ上がり、身体が節々が捻って絞られ、そして振動する。

信じたくはないがバモスピんとバモヒャーゲを同時に使うつもりだ。

「フンツ！　ハアツ！　ラアツツ!!　おいおい、避けずに受け止めてくれよ！」

「無理無理、死んじやうから」

一発でも当たれば二階から落としたトマトのように弾け散ってしまおう。

まさに死の雨と言う他ない猛攻をすんでのところで避け続けながら、一つ新たに提案する。

「君、まともに武器を使えないでしょ?」

「まあな、ちよつと力を入れるとすぐ壊れちまう」

「そうだろうよ。実は少し前に希奇鉱オロキンセルをいくらか手に入れてね。それで君のために頑丈な武器を作ってあげようかなと」

「そりゃ本当か!?!」

特注の武器を作ってやると言われてラファードルの力が少し緩み瞳の奥が輝く。

このあたりはやはり人族も魔人も変わらないものだ。

「ただし今すぐ棄権してくれたらの話だ」

「……そういうことなら遠慮しとくぜ」

しかし残念なことに突っぱねられてしまった。

しょんぼりとして力が戻る。

「つーかよ、なんでそこまで棄権させたがる?」

「なに、単純な理由さ。もしも俺が負けたら次は我々の勇者様が戦うことになるだろう? そうしたら君はケイを殺してしまう」

「まあ、一応立場つてもんがあるしな」

「ならば俺がどうにかするしかあるまいて」

「もしも、万が一……いや、ここは素直に認めよう。拳を交えてよく分かった。この条件下においてラファードルは明確な格上だ。」

今の俺では十中八九勝てない。全盛期の俺でも十回やって三回勝てるかどうかだろう。

そのような化け物とやればケイは死に、グリゴールも自死を選択する。

不死者アレン・メーテウスは人族の味方でも魔人の味方でもない中立の立場なので勇者が何人殺されようと構わないが、いつかに最愛の娘と約束してしまったのだ。

助けられる人がいれば助ける、誰も見殺しになんてしない、と。

とはいえ、脱力した状態で首を後ろから蹴りでもしない限り、表のアレン流では太刀打ちできそうにない。

「はあー……」

ラフアーダルの脇腹を押すように蹴って距離を取り、少し先の未来に向けてため息を。

「なんだ？ 雰囲気がちよびつと変わったか？」

あまり人の多い所では見せたくなかったが、背に腹はかえられん。「真のアレン流を見せてやろう——」

◆?◆?◆?

——この拳を使うからには勝つて、生きよ。

アレン流を伝授した弟子全てにもれなく言い聞かせてきた。死んでも勝つなどとは口が裂けても言ってはならないと。そんなふざけた事をぬかしたやつは俺が殺すと。

ゆえに通常の、つまり表のアレン流には相討ち覚悟の捨て身技と呼ばれる類のものは組み込まれていない。

そういったものは存在すらもほとんど知られていない裏のアレン流に取り入れてある。

腕の一本や二本、心臓の一つや二つくらい無くしても元通りに治せるような、俺の同類にだけ教えているのだ。

「うわぶっ!?!」

『血ですッ！ 目眩しでしょうか!?! アレン選手の目と口から血が噴射されました!』

『今のは裏アレン流奥義「ちげしやう血化粧」ですな。ここからじゃ、不死者の本領とやらは』

ロジャーがやけに持ち上げてくれるせいで期待と興奮混じりの視線が突き刺さるが、奇術師のように次から次へと新たな技を出すつもりはない。

三つだ。三つの技だけでいい。というよりもこの三つしか通用しないだろう。

「にやろう、目眩ましなんて粹な真似しやがっぐえっ!」

血の噴射を併せた死角からのアッパーで上手く顎を捉えた。

……がしかし少し呻いた程度でふらついてはいないし顎骨にヒビを入れられた感覚もない。

一旦距離を取る。

構わず距離を詰めてくる。

牽制のフック。

直撃。

ようやくラファードルが飛び退る。

「待て待て待て! あんた今魔法使っただろ!」

「ロジャーが監視しているのに魔法なんて使えるわけがないだろう」

「じゃあなんで腕が伸びてんだよ!」

「さあ? 見間違いじゃないのかい?」

『私にもアレン選手の腕が一瞬伸びたように見えましたか……ロジャーさん、今のは錯覚でしょうか?』

『あれもまた裏アレン流奥義が一つ「蜃気螂」です。錯覚ではなく関節を抜き差しして実際に伸ばしているんです。一応ワシもできますよ、ほら』

そうやってすぐに種明かしするのやめてもらえませんか?

「関節を抜き差しするとか……あんた、イカれてんな」

「まともなままじゃ勝てない相手が多くてね」

青土から栄養を吸収しているなどと噂されるほど、存在自体が世界の不具合のような男に言われて心外ではある。

しばらくの間一撃離脱を繰り返して十発は良いのを当てられたのだが……

「俺、こんなに非力だったかなあ……」

「まあまあ痛えぜ、へへっ」

ラファードルはとてもピンピンしている。

俺が当てた打撃は全て象を昏倒させる程度の威力がある……はずだというのに。

しかも拳を交わすごとに蜃気螂の間合いに慣れつつあり、このまま

ではいずれ捕まる。

もう、アレを使うしかないのか。

「おっ?」

脚の血管がほとんど破裂するほど地を強く蹴り、ラフアードルと大きく距離を取る。

当然逃がすまいと突っ込んできたのでダメ元で手を突き出す。

「ちよつとたんま。少し深呼吸をさせてくれ」

「ん、おお」

すんなりと応じてくれたことに感謝し、深く息を吐く。そして吸う。

それを何度か繰り返して、埃臭い穴倉の奥で寝たきりになっている全盛期のアレンを呼び覚ます。

寝ぼけ眼を擦りながら起き上がってくれた気がした。

やれるだろうか、俺よ。やれるさ、俺よ。

記憶の海に眠る怨敵よ、宿敵よ、強敵よ。

今こそ力を貸してくれ。

「……いよおおしツ!!」

「もういいのか?」

ああと頷いて一步踏み出し。

ハツと思い出して一旦止まる。

「一つ、言い忘れていた」

「なんだ?」

「棄権をするならこれが最後のチャンスだぞ? 俺のいない間に史上最強だのなんだのと持て囃されていたようだが……今この瞬間、史上最強は俺達だ」

「……おもしれえ」

当然仕合は続行、と。

うん、これで心置きなくぶつ潰せる。

そんな俺の自信を感じ取ってか、ラフアードルはいつものように飛び込んでこない。珍しくカウンターの構えをみせている。

「はいはい、今行きますよ」と

恋人との待ち合わせ場所にも行くように、スキップを踏んで軽やかに近づく。

そのまま止まらずに必殺の間合いに踏み込んだ。

「ラァッ!!」

刹那ラフアーダルの左拳が襲ってくる。俺はしゃがんで青土を観察していた。髪が拳圧で揺らいだ。

ラフアーダルの下段蹴りが迫りくる。俺は童心に帰り蛙の真似をして跳ねていた。途中で額に顎が衝突した。

「っ!?! はっ!?!」

予想外の一撃を食らい、ラフアーダルは反射的に距離を取る。

「な、なんだあんたっ! ふざけてんのか!?!」

「綺麗な青土だなあとと思って……。断じてふざけてはいないよ」

なので今度はきちんと拳を構えてすり足で近づき、静かに玄関口に立ち入った。

どうも歓迎されていないのか強烈な右ストレートが伸びてくる。

俺は腰を曲げて靴紐を結んでいた。

さっさと出ていけと左の打ち下ろしが降ってくる。俺は地面を寝転がって頼み込んでいた。

人のことを邪魔な石ころだと思っているのか青土を抉りながら顔面に蹴りが飛んでくる。俺はどうか家に入れてくださいと逆立ちままでして懇願していた……。が、誤って主人の鼻を蹴ってしまった。

「っつう!?!」

ラフアーダルは一旦間合いの外に出て、折れた鼻を無理矢理戻して血を吐いた。

一連の流れを見ていた観客が激しく動揺する。

ふざけてるのか、真面目に戦え、八百長するな、といったヤジもちらほら聞こえてくる。

「……あんた、俺に何をしやがった?」

「特には何も」

今度は顔に疑問符を浮かばせながらもあちらから間合いに突入してきた。

槍のような鋭い前蹴りが伸びてくる。俺は後ろの雲が見たくなつて腰を反らしていた。そして腰を痛めた。

続け様に右左の繊細なコンビネーション。俺は痛めてしまった腰をほぐすために揺らめく海藻の真似をしていた。

山を引き裂くような回し蹴りが繰り出される。俺は腰を痛めずに雲を眺めたかったので滑り込んでいた。その際ラファードルの軸足を蹴って倒してしまった。

「あつ、ぐめん」

「ワケがっ……わかんねえ……」

顔中に青い砂をまぶした彼はゆっくりと起き上がりながら疑問と唾を吐いた。

その様を見て観客達の不満がいよいよ大きくなる。

いい加減本気で戦え、遊んでんじゃねえ、どっちも死んじまえ、なんて心ない声がそこかしこから耳に入ってくる。

もちろんラファードルは本気で俺を殺そうとしているし、俺も本気で戦っているのに、なんてヒドい人達なのだろう。

『これは一体どういうことなのかッ!? なぜ当たらない! 明らかにアレン選手はふざけた動きをしているのに、なぜ当てられないッ!? ロジャーさん、解説のほどを!!』

『……たしかに、何も知らなければ遊んでいるように見えるでしょう。ですが、断じて彼らはふざけているわけではありません!』

戦災龍が真剣な声色で放った言葉が喚き散らす観客を鎮めた。

『と、言われますと?』

『あれこそがヤツの切り札、裏アレン流究極奥義「普天愚者」ふてんぐしゃに他なりません』

『普天愚者……ですか。どのような技でしょうか?』

『うむ……』

そこでロジャーは言葉を止め、俺の目を見つめてきた。

さすがに究極奥義の種を明かしていいものかと躊躇いが生じたらしい。

どうせ止めても口を滑らすだろうし、いまさら構わないと視線を返

した。それに、この技ばかりは理屈を知ったところでどうにもならないのだから。

『アレンには数千年分の膨大な戦闘の経験があります。普天愚者とはアレンが過去に戦った者の中から近い体格気質戦法の者を引き出し照らし合わせ、相手自身でさえも気付かない癖まで見抜いて、ほぼ確実に動きを予測し虚を突く技です』

『な、なるほど……』

『そうですね。【狙ってラツキーパンチを起こす技】とでも言った方が分かりやすいかのう』

「ご丁寧に解説、ご苦労。」

『つまりアレン選手は極めて真面目に戦っているというわけですね』

その通りでございます。

俺だってできることなら渾身の右ストレートや上段蹴りで華麗に決めたいさ。しかしこの男にはまず通じない。いわゆる正統派な打撃は通じないと導き出しただけ。

『一見するとどれもふざけた攻撃のようですが、あの一撃一撃は全てラツファの意識外からのもので途轍もなく重いはずです。例えるならそう、タンスの角に小指をぶつけるのと同等の威力があるでしょう』

「どーりで、やけにいてえわけだ」

無敗の王者が苦い顔で頭を掻く。

「負けるかもしれないって思わされたのはいつぶりだっけな……。まさか俺の動きが全部読まれてるなんてよ」

「君の十倍以上生きているのだから当然だ……と言いたいところだが、昨日までの俺だったらこうはいかないさ」

「そりやどいうことだ？」

「言っただろう？ “今の俺達” は史上最強だと」

いくら過去の戦闘経験を基に分析・予測ができるとして、目の前の相手を知っているといえないとでは正確さに大きな差が出る。

なので決勝までの試合を観て補うつもりでいたが、どの試合でもこの男はほとんど動かず一撃で決めていた。

これは困ったことになったぞと悩んでいたところをグリゴールが、正直言つて全く期待していなかったグリゴールが長い時間堪えてくれたのだ。

おかげでラファードルを知ることができ、究極奥義が完成した。

「陳腐で青臭い言葉だが、仲間がいたから強くなれたつてヤツさ」

もしも仲間を得ず、孤独な不死者のままだつたら。

不完全な普天愚者を使っていたら、今頃は地を舐めていたかもしれない。

「さあ皆様ご覧あれ、怪物退治のひとときを！ これより無敗の土魔神を跪かせてしんぜよう！ 何度打たれてくたばるか、二でも三でも眼を見開いて数え給え!!」

景気の良い宣言で観客を沸かし、長年この地を支配する暴君を打ち倒さんと突つ込んだ。

回避回避貫手、

突進おじぎ頭突き、

足掛け回避肘打ち回避おじぎ……と、あちらからは指一本触れさせず、こちらからは有効打を浴びせ続けて十数分が経過し、

「……なぜだ」

なおも青土の王者は崩落せず。

「なぜその身体で倒れない？」

両側頭骨、鼻骨、上顎骨、下顎骨、両頬骨、胸骨、第一から第九及び第十三から第十六肋骨、両上腕骨、右前腕骨、右第四第五指骨、左第三指骨、右腸骨、右大腿骨、両下腿骨、右第一中足骨、左第三第四中足骨、右第一第二趾骨、左第四趾骨を骨折。

大小問わず計二十六箇所を裂傷。

複数の内臓機能の低下。

これらが今現在ラファードルの負いし傷である。

常人ならば意識を保っていることすらできない、半年は寝たきりになる負傷具合だ。……というのに、

「ほんと……すっげえなあんだ。この俺が赤子扱いされてるなんて、よオッ！」

『ラッファア！ 一発だ！ 一発でも当てればソイツは殺せる！ 落ちていて狙え!!』

「もう少しでッ！ 当たりそうなんだよッ!!」

動きのキレが落ちないどころか増している。

一つ拳を交えるたびに少しずつ、紙を重ねるようにはあるが確実に普天愚者をとらえつつある。

「まさかお前、この期に及んでまだ力を隠していたのか？」

「いや、ずっと本気でやってるぜ？ 俺ってばさ、追いつめられると力が出るタイプなんだよ」

「あー……。そういう、ね」

お前もそうか。

物語の主人公にありがちな、都合のいいクソみたいな性質たちの持ち主だったのか。

俺様それ嫌い。若い頃そういう奴らに散々苦汁を飲まされたから。もちろん歳を重ねてからは積み重ねた力で押し込み叩き潰してきたのでそこまで嫌悪感は無くなった。

だけど、今回だけは嫌な感じがする。

今のところは五千年かけて培った技術によってラファアールを圧倒している……。のだが、そこまでだ。

膂力、耐久力、敏捷性と、純粹な身体能力においては何一つ勝っていないのだ。それこそロジャーの言う通り、何かの間違いで一発もらってしまえばそれでおしまいだ。

徐々に泥水を吸って重くなっていくような、とても嫌な感じがする。

この辺りが引き際かもしれないな。

「……そろそろ、決着をつけようじゃないか？ 次の打ち合いで最後にしよう」

「おう！ 乗ったアッ!!」

これが本当の本当に最後の手段、一か八かの大博打だ。

大博打といっても、一発も貰わずにラファアールを行動不能にさせるよりははるかに勝算がある。

それでも負けてしまったら魔法でも何でも使ってケイ達を連れて逃げよう。百年ぼつちは魔界に顔を出せなくなるが、やむを得ん。ぎらぎら燃える赤眼と視線を交わし、互いに距離を取って呼吸を整える。

『ついに！ ついに決着の時が来てしまうのか!? 私は一旦実況を止めて観させていただきます!』

『気を付けろラッフア！ そやつは確実に何かロクでもないことを考えて——んなことわかってらあ！ 何が来ようが全部まとめてブツ壊スツツ!!』

最強の魔人はかかってこいと咆哮して肉体を捻じり震わせる。全身全霊を以って迎え撃つつもりだ。

「ならば、こちらからいくぞ」

血流を制御、脚腰に力を溜め、解き放つ。

脚の血管と骨が碎ける音と共に光となる。

これが俺の出せる最速、人族の限界——

「——やっと、掴んだぜ」

身体感覚がほとんどない。

それはなぜか？

今現在俺の身体はヘソから下を失った、言うならば案山子のように削ぎ落とされているからだ。

そして、背骨をがっしりと握られているからだ。

俺が顔面に打ち込んだ一撃をラフアーダルは見切って避け、バモスピンとバモヒャーゲを併せた拳で見事貫いた。

「俺の、勝ちだな」

「ああ、個人戦だったら君の勝ちだよ」

「……なんだと?」

「後ろを見たまえ」

ラフアーダルが俺を持ったまま振り返る。

「ん……………あアツ!!」

すぐに素っ頓狂な叫び声をあげて顔を歪めた。

横たわるグリゴールと傍らでしゃがんでいるケイ、そしてケイの手に金色でふさふさしたものが握られているのを認識したのだ。

「あつ、てめ……………アレは……………」

ラフアーダルは俺を放り捨ててぶるぶると震え出した。

それはバモヒャーゲを使う時の震えではない。人が弱みを握られた際に起こす震えである。

俺のことはもうどうでもいいようなので死ぬ前に身体を再生して起き上がる。下半身がとてもしろすろする。

「いやー、見事見事。今回は俺の負けだよ。だけどこちらにはまだ勇者様が残っている」

敗者は敗者らしくとぼとぼと仲間の元へ戻って腰を下ろす。

「いやー、下半分の服がないから寒いなあー。火を起こそうにも燃料が……………おや? 勇者様勇者様、その手に持ったものをいただけませんか? 寒くて寒くて凍えてしまいそうなのです」

「……………はい」

「おお、ありがとうございます勇者様! ……武運を!」

左手に金のふさふさを持ち、

「待ってくれ!!」

右手に火を灯したところでラフアーダルが制止した。

「おや、どうされましたか?」

「それを燃やすのだけはやめてくれ……………頼む! 返してくれ!」

「そう言われましても寒くて凍え死にそうですし、勇者様とあなたの試合は長引きそうですからねえ。今すぐに棄権してくださいれば燃料を焚べる必要も無くなりますが——どうされます?」

大人しく棄権するか、命よりも大事な勝負力ツラを失うか。

本人にとっては究極の二択を迫った。

「ぐう……………」

とても恨めしそうな目でこちらを睨んでくる。

そして唇を震わせながら口を開け、絞り出すように言葉を発した。

「……俺は棄権………する……っ
」

第十八話 「約束」

——棄権する。

その言葉を聞いた誰もが声を失った。

五十万の観客がいるとは思えない静けさだ。

『ええと、ラフアーダル選手？ 本当に棄権されるのでしょうか？』

「背に腹は変えらんねえ。俺は棄権する」

それ以上は何も語らず俺の手からカツラを取って、観客に手も振らずさっさと出口に向かっていく。

『わ、分かりました。……と、いうことで第三千八百七回ゼンフトウ武闘大会優勝はアー……！ ケイ、グリゴール、アレン選手の勇者チームだああアーツツ!!』

実況がどうにかして盛り上げようと声を張り上げても乗ってくれる者は一人もおらず。

「きたねーぞテメエーツ！」

誰が言い出したか、異なる場所で同時に発生したかは問題ではない。

一が十となり、十が百となり、百が千となり、千が万となり。

「最後まで正々堂々殺し合えーツ!!」

「ビビってんじゃねえぞコラア!!」

「こんな決着認められるか!! 再戦しろーツ!!」

『加齢臭がここまで臭うわい！ もう一回封印されるーツ!!』

「ぶっ殺すぞ租チン野郎ーツ!!」

罵詈雑言誹謗中傷殺害予告の雨あられが降りかかってくる。

さらに魔人が口にする「お前を抹殺する」は大概冗談でも脅し文句でもない。

それを示すように殺意漲る十数万の観客が最前列へと押し寄せて膨らんでいた。将たる戦災龍が号令を出すかどこかで縁が壊れでもしたらそこから雪崩れ込んでくるだろう。

お前だけは生かして帰さないという強い意思がひしひしと伝わってくる。

「アレンくん、これはちよつとマズくない？」

「少しの間、グリゴールを連れて離れていてくれ」

「何か考えがあるの？」

「まあね」

ケイはそれ以上何も聞かずにグリゴールを抱えて隅へ。

『皆さん落ち着いてください！　まずは先に表彰式を……アレン選手？　どうして服を脱いでいるんですか？』

『ちよいと、登山の予定があることを思い出したのでワシはこの辺りで。ではまた来年』

『え？　あ、はい。お疲れさまでした！』

魔人側の最大戦力であるペラペラおじさんは一方的に言い残してからヒトの姿のまま翼を生やして飛翔し、あつという間に雲の彼方へ消えた。勘のいい奴め。

……どれ、いつちよやるかな。

「者共オ！　よく聞けイ！　君達外野がなんと言おうとラフアードルは敗北を認め、我々は勝利した！　これは決して覆すことのできない事実であるツ!!」

闘技場の外にまで聞こえるほど声を大にして、軽く煽る。

当然皆さんの怒気怒気がかさ増した。

溢れ出てしまう前にさつさと本題へ。

「しかあし！　それでは納得できないのもよおく分かる！　……なーのーでツ！　これよりツ！　観客参加型の特別試合を執り行う!!」

大いなる怒りの渦に困惑が流入してざわめいた。

大方このまま戦わずに逃げる小賢しい人族だとも決めつけていたのだろう。

だが、勘違いしてもらっては困る。たしかに戦略的撤退が得意ではあるが、

「ルールは何でもありだ!!　千人でも万人でも死にたいヤツは立ち向かってくるがいい！　この俺様を討ち取るか封じることができたのなら、王の座をかけて再びラフアードルと戦おう。今度こそ生きるか死ぬかの死合を遂げてみせよう！」

俺は俺より弱いヤツには決して背を向けぬわ!!

「――《我々ト同化セヨ》」

あの野郎に押し付けられた外なる世界の言葉、この世界の理から外れた秘法を唱えると。

虚空より無機質な、温かくも冷たくもない黒い靄が溢れ出てこの身を覆い隠す。

上も下も分からない闇の中であつという間に身体の構造が組み替えられていく。骨の髄の細胞から、ヒトとはかけ離れたものになってゆく。

その全てが完了し靄が晴れた時、視える景色はやはりヒトの時とは異なっていた。……と同時にぎよつという悲鳴のような大量の喚声を、俺自身でも位置を正しく把握できていない聴覚器官が感じ取った。

『ア、アレン選手っ!? その姿は!』

少し前に喰らった巨大サソリと超巨大ミミズを組み合わせ、ついでに竜の翼を生やした貌を見た誰も動転した。

陸上戦艦とでも言うべきこの姿を見ただけで、はちきれんばかりに詰まっていた魔人の大多数が引き下がった。

それでもまだ、優に千を超える数の命知らずが縁に張り付いている。

ならばこうだ。

「――《掌念爆砕》」

怪物ミミズのふざけた体積の肉体を破裂させて舞台一面にまき散らし、いくらかの肉片に浮遊の魔法をかけて半球に散りばめ、

『アレン選手、一体何をしようと……っ?』

「――《掌念爆砕》ッ!」

再び唱えて観客席に近い肉片をまとめて爆破した。

直接被害は出ないよう威力を抑えたが、音と風圧で恐ろしさのほどは感じ取れたであろう。

これこそが悪名高き「小死滅帯」だ。

戦地で使おうものなら向こう三十年間は公共の敵扱いされる非人

道的奥義である。

「もう一度言うぞ？ 死にたいヤツからかかって来い！」

爆破による砂煙が鎮まった時、最前列の縁から身を乗り出す者は一人もおらず。

「うむ、賢明だ！」

それもそうだ。いくら魔人が命知らずの戦闘種族だとはいえ。

穴蔵から出て稲妻と雹の降り注ぐ荒れ地に立ち、舗装された道を踏まずに底なし沼を渡り、雲の上から崖の下に叩き落とされたい、などと真に望む愚か者がどこにしよう。

死にたがりと自殺志願者は似て非なるものなのだ。

「——《掌念爆破》 ツツ!!」

使わずに済んだ肉片を全て空に打ち上げ、花火代わりにまとめて爆破した。

あかくさきほこるはなのようで、われながらとてもきれいだった。きつとみんなのわすれられないおもいになるだろう。

◆? ◆? ◆?

「それじゃ皆さん揃ったことですし、始めましょうか」

それは大会が終わって三日と経たずして。

誰の心にもあの激闘がまだ鮮明に残っているうちに。

この都市で最も高い塔の最上階に置かれた、正方形の会議卓を挟んで我々は顔を合わせた。

対面には元絶対王者、右には人族の希望、そして左には自分の領地をほったらかしにしている情報通おじさん。

「——で、誰が今から“一年間”俺の代わりをするんだ？」

開口一番、ラファードルが瞳の奥を燃え上がらせて尋ねた。

やけに含みを持った言い方である。来年は絶対に出場しないでおこう。

「四将の席にはこのまま君が座っていてくれ。それでいいよなケイ、グリゴール?」

「うん」

「構わないわよおん」

「あ? そりやあどうして」

「どうせロジャーから聞いているだろうが、俺たちは魔界を乗っ取りに来たわけでもましてや滅ぼしに来たわけでもない。ノヴァクとかいう野郎と話し合いに来たんだ」

そもそも勇者様を魔界の要職に就けるわけにいかないだろうが。

そんなことしたら何もかも俺のせいにされて向こう百年間は日の下を出歩けなくなるっての。

「代わりと言っちゃあなんだが、ノヴァクとの話し合いに口出しはしないでくれるか?」

「あー、そういうことか! ったりめえよ! なんなら俺もロジャーと加勢してやりてえくらいだ!」

「ワシも同意見じゃよ」

最優先事項の干渉はすんなり確約できたが、やはり共闘とまでいかないか。

魔王の許可なく四将同士の私闘ができないよう契約を結ぶのがここ四千年の通例となっているため、仕方のないことではある。

……まあ、その通例を創めたのは俺なんだけど。

「はあー……」

「どうしたのアレンくん?」

本題があっさり終了した脱力感も相まって机に突っ伏すと。

すかさずケイが心配そうに声をかけてくれた。

「過去の俺が今の俺を苦しめているようなことばかりだなあ……と」

「そりや、おヌシは良きも悪しきも刻み続けてきたからの。どうせ千年封印されていたってのも自業自得じゃろうて」

「国をまるごと一つ消したんじゃねーか?」

「一つですむわけないじゃん。絶対三つはやってるわよ!」

「大量殺戮。百万人はくだらない」

先の大会で仲間を守るためなら手段を選ばない気高き精神性を魅せたはずなのに、誰も擁護してくれないどころか俺が悪事を働いたという前提で盛り上がっていく。

息苦しいとはこのことよ。生き苦しいとも言う。

「あーもう黙れ黙れ！ その辺りで止めてくれ！ それよりも口ジャァー！ ラファードル！ 君らの同僚について詳しく話をしてくれ、詳しくくだ！」

「おう、まかせろ！」

「もうちつとつつきたいところじゃったが、まあよいか」

当代の四将は歴代屈指の強さを誇ると恐れられている。四将が足並み揃えて総攻撃を仕掛けてくれば人族になす術はないと言われているほどに。

もつとも、うち一人はすでにケイ達に撃破されているのだが、残りの三人が三人とも歴代の魔王と同等以上の力があるという。

「では、語るとしよう。多少後味の悪い話になるじやろうから覚悟しておくがよい。あの男はの——」

殺し合いの最中でも緩んだ顔をしている二人が、今回は硬く重苦しい顔をして紡いでいく。

「——皮だけが残されていた……とな。これらがワシの知る全てじやよ」

小一時間の長話が終わって。

「苦勞」

沈黙——。

俺に続いて声を発する者は無し。

話が長かったせいと皆が眠ってしまったわけではない。口を開けられないほど空気がとてつもなく重いのだ。

それもそのはず、二人が語ったものは英雄譚などとは真逆に位置する、怪談とでも言うべきおどろおどろしい内容だったからだ。

曰く、ノヴァク・グルテムムリーは四将であると同時に権威ある生物学者として、日夜怪しい人体実験に励んでいると。

曰く、ノヴァクは魔人のくせに手段を選ばない、合理的で冷酷な人

族じみた精神構造をしていると。

曰く、野郎は不死身の化け物だと。

「ところで二人はさ、ノヴァクとタイマンしたら勝てる？ ルールは何でもアリ」

「あー、こことか青土の多い場所でやったらたぶん勝てるぜ。それ以外だったらキビシイけどな」

「勝てる勝てないは置いといて彼奴とはやりたくないのう。おヌシとやりたくないのと同じ理由で」

「一応聞いとくけど、ケイ達三人がノヴァクとやることになったとして、勝率はどの程度だ？」

「日頃の行いが良ければ、その場で楽に死ねるじやろうな」

少なくともロジャールの送り込んだ者は皆、魂を抜かれたようになるか文字通り中身を抜かれて帰ってきたという。

「そういうわけで勇者様、今回ばかりは「――帰らない」

小娘は年長者の言葉を最後まで聞かずに遮った。

どうせそう言うだろうなどは予想していたが、頭を搔かすにはいられない。

「……二人からも言ってみてやれ」

「悪いわねえん、アタイはいつだってケイの味方よおん」

「右に同じく」

三人が三人とも、確固たるケツイをキメた目でこちらを見つめる。

己の力量も計れんガキ共が……。

「自分の立場を理解していないようだから教えてやろう。いいか？」

勇者つてのはただの称号やお飾りじゃない。人族の象徴であり希望なんだ」

弱き人々にとっては勇者の存在そのものが生きる糧となる。

傷付き苦難に苛まれようといつか勇者様が救ってくださる世界を変えてくださる、ならばそれまで頑張ろう。……と、前を向いて生きてゆけるのだ。

「お前らはまだ若い。生きてさえいればこの先数十年と世界を飛び回って何千何万と救うことができる。だが死んでしまえば救える人

も救えなくなっちゃまうんだ。ここで無駄死にするのは大勢を殺すと変わらない。分かるだろう?」

ケイが目を伏せる。

そうだ、よく噛み締めて考え直せ。

その命はもう自分一人だけのものじゃない。

「……うん、そうだね」

「理解してくれたか? 中央大陸まではロジヤーの背に乗って帰るといい。世界一安全な交通機関だ」

「アレンくんの言うことは全部正しいよ。でも、ここで帰ったらわたしは一生後悔する。そのせいで救える人も救えなくなっちゃう……かも」

「ねえアレン。ケイはあたしよりも頑固だよ。もう諦めたら……?」

なんなんだよもおおおおおおお!!

明後日の予定すら間違えるくせにどうしてこういう時だけ弁が立つんだよおおおお!!

カレンまでそっちの味方をするなよおおおおおお!!

「フウ………」

一年に一度あるかないかの大きな溜息が腹の底から吐き出された。

あーもう知らん知らん、好きにしろ。

だけど俺は止めたからな。

勇者一行の腸詰めが各国首脳に贈与されてもアレン・メーテウスのせいにするんじゃないぞ。

「おいロジヤー」

「なんだ」

「ケイとミロシユを鍛え上げろ。それで貸しを半分チャラにしてやる」

「それはまたとない申し出だが、ワシの修行は厳しいぞ?」

「ついてこれないようなら殺して構わん。それとラファードル」

「おう」

「グリゴールを弟子にしてやってくれないか?」

「そうしたいのはやまやまなんだけどなー、こう見えてかなり忙しい」

「いんだよな」

「もちろんただでは言わん。知り合いのドゥーマンに頼んで最高級のカツラを作らせよう」

「まかせときなア！ 俺の次に強い漢にしてやるぜ!!」

というわけで、とんとん拍子で話が進み勇者一行は四将の弟子になりましたとき。

展開の速さに追いつけていない三人にさらなる追い打ちをかける。

「二年だ。一年後に俺の求める水準に達していなかった場合、問答無用でぶっ飛ばして帰らせる。二度と魔界の土を踏まないと契約させて、だ」

「……っ」

「せいぜい強くなるんだな——」



「もう三日経つよね」

「ああ」

ケイとミロシユはロジャーの本拠地である《竜哭き峰》に連れていかれ、グリゴールはラファードルの故郷であるマヒルカ島へ帰省した。

今頃は少なからず弱音を吐いているだろう。

対して俺達は優雅に魔界観光を楽しんでいる。

「あたしたち、遊んでていいのかな」

カレンがぼそつと声を漏らした。

厳しい修行にもがき苦しむ三人のことを考えているのか、この都市で流行りの化粧を施し、伝統衣装の青赤のマントを羽織り、指の間に串焼きを二本ずつの計十六本挟みながらもぼつが悪そうに俯いている。

「アレンもいいの？ 何もしなくて」

「いいのいいの。今は頭を空っぽにしてケイ達の分まで楽しみなさい」

「そうだぜ嬢ちゃん。休むのも大事だ」

「……うん」

俺は彼らのような天才ではないので、一年ぼっち修行した程度で劇的に強くなったりはしない。そんなことよりも今はいつか去ってしまふカレンとの時間を大切にしたい。

さらに十日が過ぎ去り。

ローランゼンフトウを堪能し終えたので次なる観光地へと向けて青土砂漠に飛び込み。

「——あたしも修行する」

まだ半日と経っていないのに暑さで頭がやられたのか、幻聴が聞こえてしまった。

「どうだねラクサ君、想像していたよりは魔界も悪いところじゃないだろう?」

「ああ、魔獣さえいなければ永住してもいいナ」

「二人して無視しないでよッ!」

「どうしたカレン、何をそんなにカリカリしている? どれ、一息吸うだけで死人のように落ち着けてかつ高揚感の得られる粉末を「——そういうのはいいから!」

なるほど、冗談は通じないし決意も固いと。

……まいったなあ。

「カレンが命を懸ける必要はどこにもないんだぞ? 俺とケイ達だけでどうにでもなる。正直な話、今のカレンがいたところで足手纏いしか「——それ」

またしてもカレンは遮って答えた。

「それがイヤなの。いつまでも何もできずに守られる側はイヤ! あたしもみんなの役に立ちたい! みんなと一緒に戦いたい!」

「そうかそうか。やはりカレンは良い子だな。……そして聡い子でもあるから分かるだろう? 一年ぼっち修行したところで彼らのようにはなれないと」

カレンはまごうことなき天才だ。千年に一人いるかいのないかの天才だ。

だが、彼らもまた百年に一人存在するかどうかの抜きん出た逸材よ。その上で鍛え上げた年月も踏んだ場数もまるで違う。

そうやすやすと追いつけるものではない。

そんなことはカレン自身も重々承知しているはずなのだが……熱の冷める気配はない。

「追いつけなくても半分、せめて三分の一くらいには強くなれる方法を知ってるんでしょ？ 教えてよ！ どんなに厳しい修行でもついでくからっ!!」

もちろん知ってはいるさ。

過去に何度か施してきたとっておきの修行法がある。あるにはあるが……

「今回だけは退かないから。どうしても教えてくれないっていうならあたし一人で魔——いいよ」

今度はこちらから遮った。

こうなったカレンは梃子でも動かない。

これ以上拒否し続けたら何をしでかすか分からないし親子関係も悪化する。それはいけない。

「……え？ 本当!?!」

「本気が先輩!?!」

「カレンの気が済むまで強くしてあげるよ。だけど一つだけ約束してほしい」

「うん!」

一瞬きよとんととして、すぐに瞳を輝かせた愛娘にとある誓いを立てさせる。

これだけは誓約してもらわないと秘密の修行は施せない。

「——俺のことを嫌いにならないでくれ」

第十九話 「親子喧嘩をしよう」

カレン・メーテウスは不死者の娘である。

父であるアレンはしばしば気色悪かったり突拍子の無いことを言い出したりもするが、それでも心の底から嫌悪したことなどこれまで一度としてない。

「もう……無理……いったあツ!!」

「はいはい休むな休むなー！ そんなんじや何年経っても終わらんぞー！」

しかし今回ばかりは本気で憎しみを抱きかけていた。

ことの始まりは一月前まで遡る――。



「俺のことを嫌いにならないでくれ」

なんてことの無い要求に拍子抜けした。

朝昼晩の三食以外口にしてはならないとか、修行の途中で抜け出しではならないとかいった厳しい約束をさせられるのとはかり思っていたのに。

「そんな約束でいいの?」

「できれば聖呪を用いて契約して欲しいけど、そこまでは強要しない。口約束で構わない。俺はカレンを信じている」

「嫌いになるわけじゃないじゃん。あたしのお願いを聞いてくれるのに」
するとアレンは大げさに口角を上げて不気味に笑い。ではゆくぞと走り出した。

一時間、

二時間、

三時間と。

水分を補給する時以外は止まらずに灼熱の青い砂漠を駆ける。

「オイ嬢ちゃん、大丈夫か?」

「なんとか……。ねえアレン、もしかしてこれっってもう」

「ああ、修行はすでに始まっている」

アレンが露骨にペースを上げる。ついて来れるかなと言わんばかりに。

(こんなんで諦めないんだから！)

もともと体力には自信がある。加えて一年間で中央大陸をほぼ横断する旅を経て、そこんじよそこらの大人じゃ相手にならないくらいの基礎体力を手に入れた。

なんだかんだついていける自信があった。

なにより、自分からやりたいと言い出したのだから意地でも食らいついてやる。

カレンは無心で腕を振り脚を回し、アレンの背中だけを見据えて追いつけた。

そして、修行開始から五時間が経ち――。

「あ……脚が……」

何の前触れもなくその場に崩れ落ちた。

カラクリの重要な歯車が外れてしまったように急に動けなくなってしまった。

精神より先に肉体が根を上げてしまった。

「嬢ちゃん、大丈夫か!? よくこんなに頑張れたナ！」

安定した呼吸ができない。心臓と肺が苦しい。脇腹が痛い。脚が震えて感覚がない。日差しが痛い。身体の芯から燃えるように熱い。視界が何重にもなってぼやける。耳がキーンとなる。

走っている間は気にしないで無視していたものがまとめて降りかかってきた。

「ほう」

常に一定のペースで目の前を走っていた父が立ち止まり、振り返って娘の碧い瞳を覗く。

カレンは酷く憔悴しながらもどうにか笑ってみせた。

いつものように暑苦しく大袈裟に褒めてくれると思ったから。身体は限界を迎えてしまったけれど心は負けなかったことを認めてくれると思ったから。

「そんなものか？」

それは全く予想だにしない言葉だった。

「脚はもう動かせないのか？」

「……え……うん。動か……ない」

「ならば腕を使え」

少しの間、アレンが何を言っているのか分からなかった。

「脚が動かないなら腕を動かせ。腕が動かないのなら首を動かせ。それもダメなら背でも腹でも舌でも、使えるものは全て使って前に進め。休んでいる暇なんてないぞ」

細かに言われても、アレンの言葉を理解できなかった。

「ナア先輩……さすがにそれは厳しすぎるんじゃないか？」

「これが厳しいだど？ 死なないように加減しているのか？ いいからラクサ、一切手助けするなよ」

アレンは一切の慰めも励ましもせずに再び歩き出し。

思い出したように「ああ、そうそう」と呟いて足を止めた。

「やめたくなったらいつでもどうぞ。いつもの甘く優しいパパに戻ってあげるよ」

あからさまな挑発ではあるが。

人一倍負けん気の強いカレンは真正面から受け取った。

「ゼツタイに……やめたり、しない……！」

言われた通りにまだ動かせる腕を使い、脚を引きずって這うように前に進む。

青砂に触れる腕が熱い。火傷しそうに熱い。うなじと背が熱い。日差しが外套を貫通して身体を炙っている気さえする。

もう休みたい。魔法で氷のベッドを作って横になりたい。もう嫌だ。

だけど、こんなところで負けるのはもっと嫌だ。

（最後まで、諦めないんだから——）

カレンはナメクジのような速度でも止まることなく前進し、すつかり日が沈んで空の方が濃い青になっていた。

「……も……む、り……」

そこでついに精魂尽き果てた。

何も考える気力が起きない。指先すらろくに動かせない。ここから一歩たりとも動けない。まるで大地と同化したような気分だ。

青砂はまだ人肌並みに熱を保ってはいるが、今のカレンにとってはとても涼しく感じる。

「今日はここまでだな」

「すげえよ嬢ちゃん。オレには真似できねエ」

「さて、そろそろ飯を作るか」

「……あ」

半日近く絶食していたことを思い出してしまった。

途端に苦しくなる。腹に穴が空いたように苦しい。筋肉痛や疲労が全く気にならないくらいに苦しい。

「食事も修行の内だからな」

アレンは悶え苦しむ娘を気にかげず食料袋からいくつかの見慣れぬ食材を取り出し、火を起こして調理を始めた。

歴史上で最も偉大な料理家百人の中の一人を自称する男は軽快な音を出して奇妙な色合いの食材を調理していく。

十分と経たずに三皿の料理が完成した。

「一人で食べられるか？」

「……起きれない」

「そうか、ならば食べさせてあげよう」

起き上がれないのでどんな料理かは見れなかったが、匂いは感じ取れた。腐った魚と石鹼を混ぜて煮たような、あまり好ましくない匂いだ。

それでもさすがに味は良いだろうと信じて、辛うじて動かせる口を開ける。

「はい、あーん」

スプーンから舌の上に移された料理はロールキャベツのようなも

のだった。

葉に包まれていた肉は味といい感触といい、前に一度口車に乗せられて試し食いさせられた芋虫のような……

「んぐっ!? げほっ! げほっ!」

最後の力を振り絞って即座に吐き出した。いくら腹が減っているとはいえ、身体が受け付けなかった。

「ああそうか、固形だと食べられないか。悪い悪い」

「ちが……そういう問題じゃ……」

目に涙を溜める娘を見て父は動いた。

全ての料理を鍋に入れ、どこからか取り出した棒だか骨だかですまめ磨り潰していく。

ぎゅっぎゅっとう鳴っていた音が次第にべちやべちやべちやべちやと変わっていく。そうして完全に滑らかな液体に変わったところでアレンは鍋ごと持ってきて、膝の上にカレンの頭を乗せた。

「待つ……て……やだ……」

「好き嫌いはよくないぞ。はい、あーん」

もはや抵抗する力も逃げる力も残っていない。

出来ることと言えば涙を流して情に訴えることだけ。

「そうかそうか。泣くほど美味しいか」

「んんんんーっ!!」

こじ開けられた口に容赦なく絶望が流し込まれていく。

カレンはこの日、生まれて初めて食事という行為を憎んだ。



アレンが用意した食事と十分な睡眠のおかげで一晩眠ればすっかり身体は良くなり筋肉痛すらも無くなっていた。

おかげで日中はボロ雑巾のようになるまで砂の海を行軍し、日に三度ゲテモノ料理を流し込まれて眠らされる、などという耐え難い修行が日を跨ぐことなく続いているのだが。

それでも同じ場所をぐるぐるしていたわけではないので、ついに緑

の濃い土地へと上陸することができた。

「やった……！ やつと出られた……！」

森だ！ ひと月ぶりの森だ！

身体の中に半分流れる長耳族エルフの血が喜んでる。

「七日かかったか。まあ、及第点でしょう。それと本日より修行内容を変更する。一時間後には開始するから休んでおきなさい」

「次も頑張ってくれよナ！ 応援してるぜ！ 嬢ちゃんならどんな試練も乗り越えられるはずダ！」

「ところでラクサクくん、何か思い違いをしていないか？」

「エ？」

「主が死力を尽くしているというのに傍観を決め込むつもりか？ たかが五百年培った程度で満足しているのか？」

「……い、いや、そんなわけじゃ」

アレンが鳥の瞳に鋭い視線を向けた。

「お前はいつもカレンに『頑張ってる』と応援していたな？」

「ア、アア……」

「頑張ってるじゃねえよ！ おめえも頑張んだよツ!!」

一喝。

横で聞いていたカレンまでビクッと硬直させるほどの迫力があつた。

「というわけで、大妖精の皆さま方にお越しいただきました!!」

「……ハ？」

ぼうつと、音もなく四つの白い炎がアレンの背後に現れた。

よく見るとどの炎の中にも小さなヒトが佇んでいた。

その誰もが着飾った王族のような豪華な装いをしている。力ある

妖精の証だ。

「我が君、そやつを鍛え上げればよろしいので？」

「うん、ビシバシやつちやって。中央大陸産の軟弱妖精だから」

「ねーねーアレンー。終わったらいっぱい食べさせてくれるー？」

「おう、百年分は食わせてやる」

アレンは妖精たちと親しげに話し、あつという間に話がついた。

「彼らから手解きしてもらおうといい。全員が君の二倍以上は生きているからいい勉強になるはずだ」

「ちよ、ちよつと待ってくれ先輩。急な話すぎて心の準備ガ……」

「連行しろ」

「はっ」

鳥の肉体から抜け出して逃げようとしたラクサであったが、大妖精が射出した半透明の鎖に縛られて引っ張られていく。

助けてくれと泣き叫ぶラクサに対し、カレンは呆然と見守って手を振ることしかできなかつた。

「さて、そろそろやるか」

ラクサが森の奥深くに消えてしばらく経ち、カレンが砂漠で溜めた疲労もいくらか抜けたところで新たな修行が開始されることに。

「……」

どんな恐ろしい修行なのだろうと、思わず生唾を飲み込んだ。

ラクサのことを案じる余裕はなくなつた。

「そう身構えるな。今回はちゃんと休憩も取る。まずはこれを着なさい」

そう言つて差し出されたのは何かの皮で作られた真っ黒なつなぎだ。

一見すると何の変哲も危険性もないように思えるが、いざ手に取つてみると、

「おもたつ!?!」

ずつしりと重い質感。まるで鉄板が仕込まれているかのような。

「二十キロある」

「これを本当に着るの?」

「そうだ」

言われるがまま一苦勞して着ると、アレンも同じものを取り出して着込んだ。

「それで今から何をするの?」

「これだ」

重り付きの服を着ているとは思えない速さで目の前まで跳んできて、引いた拳を突き出した。

「え——」

腹に拳がめり込む。

激しく嘔吐いた。

それから尋常ではない痛みがやってきた。

「かっ……あぐっ……」

前のめりに崩れ、半分混乱しながらもカレンはこれが何をする修行かを理解した。

「さあ、たのしいたのしい親子喧嘩をしよう。魔法以外なら何をしてもいいよ。槍でも弓でも罨でも使うといい。パパはコレだけ使うから」

「うううう!!」

激痛のせいで呻き声しか出せないが、確かな敵意を父に向けてやった。

本格的な反抗期がやってきたのだ。

「傷やアザが残らないように痛めつけてあげるから安心して泣くといい」

「ゼッ、タイ……!　ゼッタイに一発いれてやるんだからアツ!!」

第二十話 「よくやった」

「やあっー！」

とにかく一発。一発は食らわせてやる。

そんな心持ちで突っ込んでかつて父から学んだ技を繰り出す。

「はいダメー」

重い服のせいで生まれた隙を容赦なく突かれた。

痛い。

立てない。

立ちたくない。

「この修行はね、普通の人は十年かけてやるものなんだ。パパは十二年かかったけどね」

嫌な唾液を垂れ流しながら苦悶するカレンを尻目にアレンは話を続ける。

「それ……を……。一年で、やれって……?」

「ううん、百日。百日でやってもらう。できなかつたらそこで修行はおしまい」

できるわけがない。

心の底から湧き上がった感想がそれだ。

もう一年も一緒に過ごしているのだ。父の強さはよく知っている。

つい先日の武闘大会でもその雄姿はまざまざと見せつけられた。

最後は少し情けない勝ち方をしたが、それ以外は並み居る強豪たち相手に圧倒的な試合運びで勝利したのだ。

自分がまあまあ強くなったのは自覚できている。それでも一回戦負けの選手を相手にしたところで、よっぽど運がよくないと勝てる気がしない。

だというのに、たった百日で大会優勝者を倒すというのは無理な話だ。

でも、今は兎にも角にも……

「やって、やるわよッ！」

一発入れるのが先決だ。

「ぐうっ!？」

蹲りながらこっさり握りしめた砂を投げつけた。かつて頭の形が三角形で悪人顔の男に教わった喧嘩殺法である。

「しっ—」

成功だ！ アレンの目が開じている！

カレンは立ち上がる勢いのままバツタのように飛びかかり、

「なんてね」

小虫の如くはたき落とされた。

「全部視えているよ」

「エっ……ヒュッ……」

飛び込んだ勢いを地面に向けて落とされ胸を強く打ちつけた。

呼吸ができない。

苦しい。

助けて。

死にたくない。

「ダイジョブダイジョブ、その程度で死にはしないさ。しっかしどこでそんな汚い戦法を覚えたんだか……。今度会ったらアイツの一番いい酒を塩水に変えてやらんとな」

まだ父としての優しさが残っているのか、悶え苦しんでいるうちはじつと視てくれていた。

ようやく呼吸も安定して動けるようになったがすぐには立ち上がらず、もしかするところうしているうちは休めるんじゃないかと考えた途端、

「はい立って立ってー。まだ休憩時間じゃないんだから」

脇腹を蹴り上げられた。

全て見抜かれていたのだ。

「サボっちゃダメだよ。強くなりたいでしょ？」

固い土の上を転がされて木の根元に背中をぶつけ、再び強烈な痛みに襲われた。

整いかけた呼吸が一瞬にして崩された。

おかげでようやく父の優しさなんてものがどこにもないと分かつ

た。

「もおーいいーかい？」

ぎっぎつと聞きなれた足音が近づいてくる。いつもなら不思議と安心するものが今だけはとても怖い。

食肉にされる家畜の気持ちが無理解できた。

（早く！ お願いだから早く動いて！）

砂漠で累積した疲労はまだまだ残っている、痛みだつて取りきれない、呼吸も完全には安定していない。それでも追撃される前に跳び上がって構えた。

死ぬ気で戦わなくちゃ！

こんなところで終わりたくない！

「そうそう、それくらい気持ちでやってもらわないとね。それじゃあもう少しハンデをあげよう」

「……え？」

そこでアレンは目玉を抉り取って捨て、さらには両耳に指を突き刺して血を流した。

「これでもう反響定位は使えない。さあどうぞ」

さあどうぞと言われても、何か裏があるのではと勘繰ってしまう。

「本当に目も耳も使えないから安心していいよ。……おーい？ 聞いてる？ そこにいるよね？」

そこまで言われてようやく動く。強く地を踏んで殴りかかった。

今ある力を振り絞った渾身の一撃。

それをあつさりと避けられた。

次も、そのまた次も。その次は強烈なカウンターを打ち込まれて崩れ落ちた。

何も見えない何も聞こえないはずなのに。

「なんつ……で……え……」

「長く生きているとね、目が増えるんだ。第一第二第三と。今使っているのは第三の目」

またしてもアレンは不可解な言葉を発した。

いや、かろうじて第一第二は分かる。たぶん目と耳のことだ。

「ただ第三とやらが見当もつかない。

「これだ」

アレンは両手を突き出して奇術師のように回した。

「この手が、正確には体の表面全体が第三の目だ。触覚ともいう」
そこまで言われてもまだ半分しか理解できない。

カレンは首を傾げた。

「カレンが踏み込んだ時の振動。カレンが動いた時に変わった空気の流れ。あとは予想と勘を併せてよく視える」

「……嘘でしょ」

ようやく残りの半分も理解できた。理解はできたが信じられないし信じたくもない。

「ちなみに第四の目はここ、鼻つまり嗅覚だ。だけどこれはまだまだ正確性にかける。今のところはせいぜい敵意があるかないか、人がいるかないかくらいしか分からない」

ヒトじゃない。

改めてそう思った。

『時間をかければ誰でも同じことが出来る』

アレンがよく言う言葉だ。

果たして本当にそうだろうか？

時間をかければ目を瞑っても視えるようになるのだろうか？ 時間をかければ目と耳が使えなくとも満足に戦えるのだろうか？

無茶だ。百年かかってでも出来る気がしない。

それなのにこの、人のフリをした底知れぬ化け物を倒さなくてはならない。たった百日以内だ。

いつもはどんな無理難題を課されても、なんだかんだできるかもしれないという自信はどこかにあった。

「ただ今回ばかりは微塵も湧いてこない。

なにをどうすればいい？

「ねえアレン、そこまでやったらもうちょっとだけハンデを「悪いね。何か言っているのは分かるけど音までは読み取れないんだ」

今のカレンに出来ることはただ一つ、痛みに耐え抜くことだった――

」。

「――よし、本日の親子喧嘩はここまで！」

「ハア……ハツ……ハー……」

本当に辛い修行だった。

昼食のための休憩を挟んだ以外は休まずに組手をさせられた。後半は立っている時間よりも、倒れて悶えている時間の方が長かった。

「終わっ……たあ……」

大の字になって息がてら、焼けた空に浮かぶ星々をぼーつと眺めた。こうすると節々の痛みや疲労を少しだけ気にせずいらられる。

十日前の自分に今の状況を伝えられたらどうするだろう。さすがに修行したいだなんて言わないだろうな。そうであってほしい。

緑の匂いがする風が母の歌ってくれる子守唄のように心地いい。母の顔も声も覚えてはいないが。

「まだ終わりじゃないぞ。これでようやく準備完了だ。ほら起きろ」
気持ちよく眠れそうだったところで現実に引き戻された。

アレンの言葉の意味は分からなかったが聞き返す気力さえ湧かなかった。

「アアア……」

とりあえずは言われるがまま、老人のようになった体に鞭打って立ち上がる。

「あたし……もう、何も……できない……よ」

「何もできないとは砂漠を走った後のような状態を言うんだ。でも今、自分の力で立ったよね？ まあ、そうなるように調整したからなんだけど」

それを聞いて背筋がゾツとした。

ここまで全て計算されているのだと。自分は掌の上で弄ばれている操り人形なのだと思ってしまった。

「……………で、今から……何、するの」

「アレ」

アレンが指差した先には何の変哲もない岩があった。

休憩時間の間にどこからか拾ってきた岩だ。成長期であるカレンの背丈よりも大きい。

「百数える間に割ってごらん」

「魔法を使つて？」

「ううん、生身で」

「もう寝ていい？」

「百日以内に割れなかつたら修行は終わりだよ？」

「……えっ？」

そこでようやく、ひよつとして思い違いをしているのではと考え付いた。

「ちよつと待つて。あの岩を割りさえすれば次の修行に進めるんだよね？」

「そうだ」

「組手でアレンに勝てなくてもいいの？」

「別に勝てなくても構わんが……ああ、そういうことか」

説明不足だったな、ごめんごめんと照れ笑いで謝罪された。

「なんだあ……良かったあ……」

「いやしかし、勘違いするカレンもカレンだぞ。ちゃんと大会観てなかつたの？ この俺様を倒せるわけないじゃん。今のカレンになら指一本で逆立ちしながらでも勝てるよ」

何一つ言い返すことができない。

怒りよりも悔しさと不甲斐なさがこみあげてくる。

「それに今まで難題を課しても不可能を望んだことなどない。今回だつてそうさ。カレンならできると信じているからこそだ」

「……どおだか」

不可能な課題ではなくなったとはいえ、結局のところそれほど難易度が変わったとは思えない。「翼を生やして空を飛べ」という課題が「尻尾を生やせ」に変わったようなものだ。

立っているのもやっとの状態なのに、身体一つであの岩を壊せるわけがない。

同じ疲労具合でもグリゴールやケイならば難なく割れるだろう。

でも、たった百日でその域に達するのは無理だ。想像すらできない。「まーまー、騙されたと思つてやつてみなさい。自分でも気づかないうちに強くなつているかもしれないよ?」

そんな負の感情を読まれてしまったのだろう。

希望を持たされて背中を押され、流れるままに岩の前に立たされた。

「厄介な怪我をしちゃいけないから、一応これ付けてね」

厚皮のグローブを渡されて装着する。

「大丈夫大丈夫。君ならできる。今までもそうだったじゃないか。君は野を越え山を越え、恐ろしい魔海と砂漠を抜けてここまでやってきたんだ! 自分を信じろ! 君こそが次の勇者だ! 今日から君は竜哭き峰だ!!」

「……………うん!」

カレンはまだまだ幼く単純だった。

疲労でまともな思考ができないのもあるが、子供騙しのような煽てが通用してしまうくらいには。

「いよおし…………」

ありったけの空気を吸い込んで握り拳を振りかざし、今日はもう動けなくなつても構わないという心持ちで打ちこむ――

「――イッたあああーッツツ!!」

ヒビすら入らなかつた。



翌日、賢いカレンは考えた。

(とにかく今日は温存しよう)

目的がアレンを倒すことではなくあの岩を割ることならば、組手で力を使い切る必要はない。

可能な限り余力を残して組手をやり過ぎそう。

「あーあ、もう手を抜くことを覚えちゃって。カレンは悪い子だなあ」
なんて浅慮は即座に見抜かれてしまった。
当たりが強くなり、さらには重りが追加された。激しく後悔した。
そうこうして凡そ一月が経過した。

こちらの攻撃は一切通じず痛めつけられてばかりの半ば虐待染み
た組手に、

どんなに全力で殴っても手と足が痛むだけで一向に割れる気のない
岩と、

未だ強くなつた実感が毛ほどもない。

初め抱いていた向上心や責任感も今ではすっぱり覆い隠され、怨恨
にも似た敵意が積もり積もってゆくばかり。

父の名を呼ばなくなつて十日と経つ。

またしてもそんな負の感情を読まれてしまったのだろうか。

「今日は修行を、いたしません」

「えっ？ なんぞ？」

「丸一日出かけてくるよ。みんなの様子をこっそり見てこようと思つ
てね。だから休んでいてもいいしもちろん自主的に鍛えていてもい
い。あつ、俺の抜け殻を置いておこうか？ 軽い組手ならさせられる
よ？ ついでに風船もいる？」

「……いらない」

それじゃあ弁当置いておくからちゃんと食べなさい。知らない人
に誘われてもついていけないでね。あまり遠くに出過ぎてはいけな
いよ。本当に一人で平気かい？

などと過保護な母の如く言い残してから、脚を爆破して雲の向こう
へと飛んでいった。

「はっや、もう見えない」

急に訪れた静寂。

唐突にやってきた自分一人だけの時間。

ラクサに念話を試みても遠く離れた場所にいるのかやはり繋がら
ない。

「あー……」

こうやって一人きりになったのは何年ぶりだろうか？

修行で毒されたせいか、こういう時に何をすればいいか定まらない。

遊ぶ？ 休む？ それともいつそ一人で鍛える？

「……そうだ」

カレンの頭にちよつとした閃きが舞い降りた。

「魔法を使う以外は何をしてもいい」という言葉を思い出して、アレンのつなぎに細工をしてやろうと考えたのだ。

「そもそも同じのを着てやってるのがおかしいのよ。ハンデがハンデになつてないじゃん」

誰に言うともなく呟いて、岩の上に天日干ししてあるつなぎの袖を引っ張――

「あれ？ 動かな……んーっ!!」

どれだけ力を入れてもどういいうわけか引きずり下ろせない。

まるで岩の上に貼り付けられているみたいだ。

「なにがどうなつて……」

岩の上に登つてつなぎの袖や股下を掴んで持ち上げようとしてようやく分かった。

「そんなバカな」

岩の上に貼り付けられてなどいなかった。

つなぎそのものがとてつもなく重くて動かせなかったのだ。

正確には量れないが百や二百キロではすまない。

それが分かった途端にいくつもの感情が込みあがってきた。

情けない。情けない。同条件だと思ひ込んでいた自分が情けない。

悔しい。悔しい。何もできない自分が悔しい。

アレンは真摯に鍛えてくれているのに、勝手に腐っていた自分があまりにも小さく格好悪く思えた。

「……ばっかみたい」

何かが吹っ切れた。

絡み合つて凝り固まつて解けなくなっていた悪感情がハサミでばつつりと切られた。

複雑な思いが一本の糸に結ばれて、遠く離れていた初心に繋がられた。

「少し休んでから、がんばろ」

それはそうとしてスツキリしない部分もあったので、つなぎの中に目いっぱいひつつき虫とひっさき虫を入れてやった。



一つのこと熱中しているとあつという間に時が流れるもので、一月二月三月と過ぎ去った。

「今日の組手はこれまで！ 本修行に移りましょう！」

カレンの心は焦りに焦っていた。

約束の期日まで残り三日。

だというのに未だ岩にはヒビの一つも入っていないからだ。

「今日……こそ……」

修行の成果が全くないというわけではない。むしろその逆で三か月前とは比べ物にならないほど体力は付いている。

栄養価の高いとされる魔獣の肉だか臓器だか分からないゲテモノを食べ続け、強い肉体も形成された。

しかしながらアレンはその増えた部分を正確に見極めて組手の強度を上げてくるので、毎回同じように疲労困憊にさせられてしまう。

カレンの筋力でも岩を破壊できる技を教わってはいるが、あくまでそれは疲労のない万全な状態でしか使えない。

手詰まりだ。

奇跡でも起きない限りはどうしようも――

(……あれ？ なんで?)

それは覚えのない感覚。

「ねえ……もしかしてあたしに……魔法でもかけた？」

「ほう？ どうしてそう思った？」

なぜかアレンはニヤリと笑っている。

やはり何かされたのだ。でなければこんなことはありえない。

まさに奇跡としか思えない現象が自分の身に起きているのだから。

——驚くほど身体が軽い。

「俺は何もしていないよ。今感じているものはカレン自身の力だ」

「だって……あたし今、すごい疲れてるはずなのに」

「そうだろうとも。体力はほとんど残らないようにしているからね」

「じゃあ、どうして」

「それは君が、上手く力を使えるようになったからさ」

アレン曰く、体力は有限だ。

どれだけ体力に自信のある者でも使い続けられればいずれは底をつき動けなくなる。何をするにも体力は使用されるので、休息を挟まず永久に動き続けることなど不可能だ。しかし、永久とはいかずとも半永久的に動き続けることは可能である。

「できる限り無駄を減らせばいい。節約だ」

「節約？」

「例えばカレンの体力が百あるとして。パンチを十回打つのに十の体力を使うところを九に、八に、七にと減らしていき、最終的には限りなく無に近づけてしまえばいい。もちろん、体力の上限を増やすことも大事だよ」

ではどうやって無駄を減らせるようにするのか。

それがこの修行の本質であった。

極限まで体力を削り、残り僅かな力で大事を成せと命ずる。すると身体と頭は考える。

どうすればできるのか？ どうすれば体力を残せるのか？

立ち上がる時にここの筋肉は使わなくてもいいんじゃないか？

こうやって歩けば消費を抑えられるのではないか？ 立ち合いは強く当たって後は流れでよいのでは？

それを繰り返していけば自ずと無駄のない動きをしてくれるようになる、というのがアレンの理論だ。

「だから俺やラファードル、それにケイやグリゴールも全力で何時間

だって走り続けることができる。前に見ただろう?」

「そういえば……たしかに」

「もちろん俺もラファエルも走り続ければいつか動けなくはなるぞ? 人外などと呼ばれるような者はいても所詮は生物だ。始まりがあつて終わりがある。この世界に無限のパワーなんてものは存在しない」

それはそれとして、と。アレンは岩の横に立った。

「その感覚を掴むのが今やつてる修行の目的だからほぼ達成したようなものだけど。一応これも割つところか?」

「うん!」

軽やかな足取りで意気揚々と岩の前に行く。

よーい、始めとアレンが時間を数えだす。

「フウー………やあッ!!」

信じられないくらい身体が軽い!

何の問題もなく技が使える!

これなら、いける!!

これまでの鬱憤を晴らすかのように物言わぬ憎き岩に打ち込む。

今回ばかりはぬかるんだ不安はどこにもなく、ただ一つの確信があつた。

「七十、七十い……うむ」

それは制限時間を三十秒近く残して起きた。

ようやく小さな亀裂が入ったと思つたら、そこを起点にピシピシと鳴つて亀裂が大きくなり、自分の背よりも高い岩が真っ二つに割れて倒れた。

あれだけ強固に思えたものが、驚くほどあっさり割れてしまった。

「あ……えつと………その……」

ここに至るまでに積み重ねた苦勞と感情が一挙して押し寄せてくる。

喜んでいいのか泣いていいのか分からず茫然と立ち尽くしている
と、右の方から力強い拍手が聞こえてきた。

「——よくやった」

ただ一言の簡素な褒め言葉。

だけどそれは今までに聞いたどんな言葉よりも価値があると思っ
た。

アレンは優しく笑い、そして右の手を差し伸べてきた。

「ようこそ、こちら側へ」

「よ、よろしくおねがいます。……えへへ」

何か月かぶりに父の胸に飛び込んだ。

たぶん涙は出ているけど、これっぽっちも恥ずかしいとは思わな
い。

生まれて初めて無理な目標を達成できた喜び。自分の成長を実感
できた喜び。そして何よりも、父に認められた喜び。

それら全てがとにかく嬉しくてたまらない。

賢く我慢強く責任感のあるカレンは父を強く抱きしめながらも、さ
らに先へ進もうとしていた。

「それで次の修行は？ 魔法はいつ教えてくれるの？」

「魔法？ んなもんまだまだ教えんよ」

「えー、じゃあ何するのよー」

「次の修行はそうだなあ……判断力を養ってもらおうか。先に言っ
ておくが次の修行は今回よりも数段きついぞ？ なんとって死ぬほど
頭が痛くなるからな！」

そこでようやくやく、カレンの喜び舞い上がっていた心は地に打ち落さ
れた。

「——やだあああああーツツ!!」

第二十一話 「迷宮」

迷宮^{ダンジョン}と呼ばれる建築物が古より世界中に現存している。

それは時の権力者が己の力を誇示するために建てたものであったり、魔法使いの訓練施設であったり、高知能の魔獣が造った巣であったりと、成り立ちからして様々である。

どこぞの大国が予算と威信をかけて攻略に臨んだものの帰還者は確認されず、などといういかにもな迷宮があれば。とうの昔に内部の秘密通路まで調べ尽くされて、今では子供の遊び場となっているものまで存在する。

「アレがそうじゃない？」

「雰囲気あるわねえん」

勇者一行の前に現れた苔むした四角錐の迷宮は、間違いなく前者に分類される危険な代物である。

「あつ、見て見て二人とも。あそこに何か書いてあるよ！」

「ええつとおん……『生を求めし者よ、引き返せ。死を訪ねし者よ、考え直せ。力持ちし者よ、ここが汝の死に場所ではない』ですつて。やーねえん」

百段近い階段の先、四角錐の上部にはぼつかりと開いてヒトを飲み込まんとする暗い入口と。

階段の手前に立てられた石碑にはとにかく立ち入らないことを勧める警告文が刻まれていた。

「なら二人で行ってきて。私はここで待っているから」

「ダメだってミイ。アレンくんも言ってたでしょ。三人で行きなさいって」

おのおのが死と隣り合わせの修行を乗り越えて、一年前の自分よりは格段に強くなれたと自信を持ってアレンと再会した日に告げられたのだ。

『それでは最後の試練を与える。とある迷宮の地下最深部の宝物庫に三千年前から封じられている秘宝がある。絶対に中を開けずにそれを持ってくるんだ。一人も欠けることなく達成できたら認めてあげ

よう。……あ、ちゃんと三人で仲良く攻略しなさい。というか三人でやらないとたぶん死ぬから』

そこまで言われてミロシユは気だるげにしながらも二人の前に出た。

「ミイ？ 何するつもりなの？」

「下がってて」

ミロシユは師である魔法学院学長より授けられた大杖をかざし、二つの言葉を唱えた。

「——《経ル年劣ル華》《疾レ風ヨ怒リニ答エヨ》」

石と鉄で作られているだろう迷宮の上部から砂に変えられてゆき、そのまま暴風に吹き飛ばされていく。

あれよあれよという間に迷宮の顔である地上部——要塞と表現できくらいの体積はあった——が石碑だけを残して風と共に消え去った。

「迷宮、無くなっちゃったけど……」

「秘宝は地下にある。なら上はいらない。……ほら」

あそこミロシユが杖で指す場所、地面と同じ高さに均された床石に、地下へと続く階段があった。

ミロシユは小さい歩幅でさっさと近づき、魔法で光を投げ入れてから二人を見た。

（ほんと強引よねえ。あの子、将来はきつと旦那を尻に敷くわよおん）
（ねー）

少し留まっているだけで早く来いと睨まれたので、小声で話しながら向かう。

「余計な心配。死ぬまで独身で構わない」

魔法使い特有の高性能聴覚にしっかりと捉えられていた。

「なんて言う人ほど早いつて聞くわよ。アレンちゃんとかどーお？ カレ、顔はつまらないけど中身と身体は素敵よおん？」

「無理」

食い気味に否定するミロシユを見てケイは思った。アレンくんごめんと。

けれども今はそんな些細なことよりも目の前の未知に心を囚われていた。心の底からワクワクしていた。

「それでどうするの？ 誰が先に「アタイが先に行くわ。女は度胸なのよおん！」

表に出していかないだけでグリゴールも同じく昂っているのだろう。強くなった自分の力を試したい、と。

そのように感じとったケイは先頭を譲ることにした。

「今日中に帰りたいわね」

その言葉の通り罠の有無を気にせずはずかずかと下っていく。

運よく迷宮にありがちな罠が一つも作動しなかったのか、そもそも仕掛けられてはいなかったのか、何事もなく階段を下りきった。

その先はまたしても闇であつた。

「やつほーっ！」

闇の奥に声を飛ばすと小さく反響して返ってきた。

アレンのように正確な反響定位を使えるわけではないが、広いか狭いかくらいは分かる。ここはかなり広い空間のようだ。

「――《^{ツッキ}月ノ^{カケラ}欠片ヨ^ワ我が^{モトテ}下照ラセ》」

誰に言われるまでもなくミロシユが声と指で綴り、強い光を生み出した。

「うわーっ！」

「らしいわねえん」

「単純」

最も離れた場所にはさらに下へと続く階段があり、そこへ着くまでにはいくつもの罠が待ち構えている。

細い足場と飛び飛びの足場がある以外には鋭い棘の床と壁が張り巡らされており。

天上から吊るされているは巨大な振り子の斧と棘付きの鉄球。

そこかしこに炎か矢を射出するような罠が設置されている。

いかにもな、いかにもなとしか言いようのない景色が広がっていた。

「――《経ル年「待つて。ここはアタイにまかせてちょうだい？」

ミロシユが魔法で解決するのを遮ってグリゴールが先に出た。

しかしどういいうわけか足場の方にはいかずに棘床の前に立った。

「どうしたんだろ？」

「不可解」

「いくわよおん……」

グリゴールは右脚を後ろに上げてしならせ、

「ハアッ！」

思い切り蹴りつけた。

バキバキバキと歯切れの良い音を鳴らして、床から生え出た鋼鉄の棘がドミノ倒しのように次々と折れていく。

「ええー……」

「尖ってるなら折って平らにしちゃえばいいのよおん。アナタもやる？」

「わたしはいいかな……」

歴代最強の吸血鬼の血と、史上最強の魔人の修行によって鍛え上げられた乙女はやはり凄まじいものであった。

巨大な振り子の斧を手刀で割り、棘付きの鉄球を殴って砕き。

射出された矢を全て掴むか叩き落とし、吹きつける炎に至っては吸血鬼の翼を羽ばたかせて寄せ付けない。

意気揚々と進んで自分とミロシユのために道を作ってくれるので「翼があるなら飛んで行けばいいんじゃないの？」とは言えなかった。

「はあい到着う！」

まかせての言葉通り、横に一切逸れることなく安全な一本道を作ってくれた。

もうこつちにきても大丈夫よとグリゴールが手招きしたその瞬間、

「——ッ!? 避けてグウ!!」

今の今まで天井裏に隠されていた巨大な振り子の斧が現れ、音も無くグリゴールに襲いかかったのだ。

当の本人はまだ気付いていない。

ミロシユの魔法も間に合わない。

自分がここから跳んでも剣を投げても届かない。

一秒先の残酷な未来が見えてしまった。

「きゃああーッ!!」

乙女の肌に鋼の刃が接触し、バキリと大きな音になる。野太い悲鳴が響き渡る。

「……なんてねえん」

割れていた。

薄い氷の板を踏みつけた時のように。

グリゴールの肉体に触れた鋼鉄の刃はボロボロに割れていた。

幻としか思えないものを見て、ケイとミロシユはくぐもった声しか出せずにいた。

「ちよつとちよつとお。どうしちゃったのよおん。そんな驚くことないじゃない」

「……すごいよグウ」

自分はその畏を避けることができるし壊すことができる。剣を使つて防御だつてできる。

けれども、生身で受けて耐えることだけはできない。棘を踏めば刺さつて痛いし、振り子の斧で斬られたら血が出て涙が出る。

本当に、すごい。

「本当に強くなつたんだね」

ケイはこれまでグリゴールのことを仲間だと言いつつも、心のどこかで『背後に隠して守るべき弱者』だと認識していた。剣を持てば当然のこと、徒手で戦つてもほとんど負けたことがないからだ。

そうやつて無意識のうちに見ていた彼女が今日初めて『背中を預けられる対等の仲間』に変わった。

感じたことのない嬉しさがこみあげてきた。

「何笑つてるのよケイ？ 大丈夫？」

「竜の血肉を食べた副作用？」

「あ、ううん、何でもないよ大丈夫！ それにしてもすごいねグウ！今のどうやったの!？」

「ちよつと血と筋肉と皮を硬くして呼吸を合わせただけよおん。アナタもラツファに鍛えてもらえば三日でできるようになるわよ」

「あはは、無理だって」



「わたし結構方向音痴なんだけど、大丈夫かなあ」

「壁を全部壊せばいい。付き合ってあげる必要はない」

「賛成よおん」

「ええ……」

生き物のように変化し、一度迷い込んでしまえば永久に彷徨うとされる迷路を突破し。

「まだ熱いわねえ。もうちよつと冷やしてもらえるかしら？」

「〈資^{タカラ}モ産^{ウツ}モ凍^イテ結^{ムス}ベ〉」

「そうそう、これくらいよ。いい湯加減だわあん。アナタたちも入ったら？」

「無理だって……」

落ちてしまえば最後、骨まで溶かしてしまう溶岩の湖を越え。

「《戒^{イマシ}メノ磐^{バンロウ}牢》《烈^{レツ}炎^{エン}咆^{ホウ}唳》……まだこんなに。鬱陶しい」

「いいじゃない。中々手ごたえがあるわよこの子達」

「ねえ、この人たちについてももしかしなくてもアレンく「それ以上は言っちゃダメ」

顔は覆い隠してあるがどこか見覚えのある、生きのいい死者の軍勢を相手にし。

魔界最凶と謳われる迷宮を勇者一行は破竹の勢いで攻略していった。

そして、ついに。

「長い階段だねー」

「ほら、見えてきたわよおん」

これまでとは桁違いに長く続く階段を下り終え。

地下第七層、迷宮の最深部へと到達した。

「広いわね。それに綺麗ねえん……」

「ここ本当に地下だよね？」

「無駄に広大」

三人はパタリと足を止めた。

階段を下りた先にあったのはローランゼンフトウの闘技場を思わせるほどの広々とした空間だったのだ。天井までの高さは二十メートルはくだらない。

壁に床に天井に魔法の照明と空色に淡く光る鉱物がはめ込まれており、どこにも影が生まれぬように計算されている。

「まるで別世界ね。それが夢の中」

グリゴールがうつとりと呟いた。

あの奇妙な物体さえ目に入らなければ自分も領いていた。

「それでアレは何だろ？」

それは中央に佇む三つの丸。

妖しく黒光りする無機質な球体が、ここが夢の中ではなく現実だと認識させる。

「アレんちゃんの言ってた宝物庫の秘宝ってわけじゃなさそうねえん。向こう側にある金ぴかの扉がたぶんそうでしょうし」

「——《揮^{フル}イ分^ツカレテ城^{シロ}》待って待って！ ダメだってミイ！」

危うく先制攻撃を仕掛けそうになったミロシユを制止した。

ミロシユはいつも自分とグリゴールのことを短絡的で危なっかしいと言うが、この中で誰が一番危険な思考回路を持っているのかは言うまでもない。

「ほんとアナタってば物騒ねえん」

「アレはどう考えても敵。今のうちに壊しておいた方がいい」

「何もしなければきつと大丈夫だって。近づかないようにこうやって壁に沿って扉まで行けば——」

——ピカッ。

ケイが横を向いて一步踏み出した瞬間、三つの球体から赤い光が照射された。

光線はそれぞれ三人の頭の上から足までをゆっくりとなぞっていく。体の表面だけでなく自分の心の中まで覗き込まれているような、と

ても嫌な感じがした。

「……はあ」

「これは……アナタの言った通りかもしれないわねえん」

「ご、ごめんねミイ」

三人をなぞった赤い光線が消滅して十数える間もなく……球体が動いた。

丸いままで転がり出したのではない。

貌を変えたのだ。

一つは筋骨隆々で豪気な印象を抱かせる魔人の貌に。

一つは無数の疵痕を重ねた風格ある古き龍の貌に。

そのどちらもたしかに見覚えがあった。

「本物……じゃないよね？ 黒いし」

ケイの質問に答える者はいなかったが、ミロシユは一人納得したような顔で頬を膨らませていた。

「ミロシユアナタ、アレが何か知ってるわね？」

「ん、本で読んだことがある。攻撃対象が心の中では勝てないと思っ
ている相手に変化するゴーレムがかつて製造されていた」

一つ造るのに国一つ買える資金が必要であり、三桁と製造されていないがその危険性ゆえにほぼ全て破壊されたと、学識ある魔導士は表情ひとつ変えずに語った。

「で、世界に残り十台とないうちの三台がこんなところで番犬をしてるってワケねえん」

「わたしがロジャーでグウがラファードルってことだよな？ ……あれ？ ミイのは？」

経年劣化により故障したのか、ゴーレムの内一つは姿を変えず球体のまま動かない。

「私は別に、倒せない相手なんていないから」

しかしミロシユは何の気なしに故障とは別の理由を述べた。

「アナタってほんとそういうところあるわよねえん。ま、そこが頼りになるんだケド」

「ねー」

「……馬鹿にしてる？」

半分は冗談でもう半分は本当だ。

グリゴールの女性よりも女性らしい気遣いに日頃助けられているのと同じく、ミロシユの遠慮も手加減もない核心をついた言葉には幾度となく救われた。

自分がただの人殺しだと知って塞ぎ込んだあの日だってそうだ。

他のみんなは自分を傷付けないように優しく見守ってくれたけれど、ミロシユだけはいつもと接し方を変えずに厳しい言葉をぶつけてくれた。

『いつまでそうしてるつもり？ 悩む暇があるなら素振りでもしてきたら？ 戦う以外に何もできないんだから』

『わたし、もう……戦いたくないよ』

『なぜ』

『なぜって……。わたしが戦ったらみんな殺しちゃう。誰も殺したくない』

『なら誰も殺さないように加減して戦えばいい。腕や脚の骨を折ったくらいで誰も死なない。手加減しても問題ないくらい強くなればいい』

責めるわけでも慰めるわけでもなく、普段通りにミロシユの考える最善を提案してくれた。おかげで今の自分がある。

本当に、頼りにしてる。

「……何？ 私の顔に何か付いてる？」

「あ、ううん違うよ！ それよりも早くアレを倒しちゃおう！ 一発大きい決めちゃって！」

先制の一手を頼まれたミロシユは先程下りてきた階段に戻り、ゆっくりと腰を下ろした。

「えっ？」

「どうしちゃったのよアナタ。具合でも悪いの？」

突然の離脱に二人は困惑を隠せない。

二人が立ち尽くしているとミロシユは怠そうに口を開いた。

「私の相手はそもそも動いてないから。自分の分は自分でやって」

「んもう意地悪ねえん！」

「いいよグウ、帰ったらアレンくんに言いつけよう。ミイだけ協力しようとしませんでしたって」

「……………まだ何もしないとっては言っていない。身体強化の魔法くらいはかける。強度は？」

そよ風が背中を押すくらいに弱さにすることもできるし、ちよつとでも体の動かし方を誤れば骨が砕けるくらいの強さにもできると続けた。

「そんなの決まってるじゃない」

「だね」

ケイとグリゴールは互いに目を合わせ、

「一番強く!!」

共鳴した。



グリゴールの決死の捨て身技により、体の三分の一が抉れてバランスを崩したゴーレムがラファードルの貌を取り戻そうと再生を始める。散った欠片がそれぞれ意思を持っているかのように本体に戻ろうとしている。

「トドメは……………任せた……………わよお……………」

「ヤアああッ!!」

グリゴールの犠牲を無駄にはしないと、無防備なゴーレムの正中をリターンエースで貫き通す。

硬い核を割った感触がたしかに返ってきた。

「やった……………」

「みたいねえん」

突き刺した剣をゆっくりと抜くと。

一足先に堕ちて動かなくなった龍モドキに続き、土魔神の贗作も目から光が消えて停止した。帰宅中の欠片もだ。

「はいこれ」

「ありがとう」

捨て身技の際に千切れ飛んだ右脚を取ってきて渡した。

「やったわねえん」

「うんー」

当たり前のように脚をくつつけて立ち上がったグリゴールと拳を合わせる。

遅れてミロシユもやってきて拳の代わりに杖を突き出した。

「ほら。私がいなくてもどうにかなる。二人を信じていた」

「んもう、上手いんだから」

「あはは」

歓びに浸りながらも、凄惨な残骸二つとミロシユの心を覗いて停止したゴーレムに触れないように迂回して、グリゴールの背丈二つ分の高さがある黄金の扉の前へとやってきた。

「ケイ、そっちを押しちゃおうだい」

「うん。せーのおっ！」

常人の何倍もの筋力を持つ者と吸血鬼の肉体を持ち限界まで力を引き出せる者に押されては、如何なるものも抗えない。

ギシイ……と、見た目通りに分厚く重たい扉が開かれ、眩い光が溢れ出した。

「……すっぴん」

それを目の当たりにして反射的に声が漏れ出た。

金塊、宝石、金塊、宝石、煌びやかで縫い目のない繊細な織物、あらゆる国の金貨。

三人が死ぬまで遊んで暮らし、三人の死後も子々孫々が何不自由なく遊んで暮らし、再び生まれ変わってもまだ遊び尽くせるだけの輝きがそこにはあった。

世界の半分の富がここにあるとまで思わせる財の山脈だ。

物事をよく考えてから口にするグリゴールとミロシユはしばらくの間息すら吐けなかった。

「自由にお取りください……だって」

宝物庫の中で唯一、何の変哲もない木材で作られた立て看板にはそ

のように書いてあった。

おかげでようやく二人は声を取り戻し、宝の山の中から本来の目的を探すことに。

「そっちはあったー?」

「全然見つからないわねえん……」

誰が運び入れたのか、五千年以上も昔の古いものから千年ほど昔の比較的新しいものまで、とにかく膨大な量の財宝が積まれているせいで目当ての秘宝が一向に見つからない。

「どいて。私がやる」

ついに業を煮やしたミロシユが魔法で風の渦を起こし、時短料理を作る主婦がボウルの中身を掻き回すように宝物庫の財宝を乱雑に掻き回した。

互いにぶつかり傷つけ合い、着実に価値を落としてゆく宝の中にそれはないかと目を見張り、

「あそこの床だけ変じゃない?」

ふと地面を見たときに他とは微妙に色の違う場所を見つけた。

ミロシユに魔法を止めてもらい、今更ではあるが他の財宝を傷付けないように丁寧にどかしていく。

「あった!」

たしかに色の違う箇所があり。

台所の床下収納染みた取っ手も見つかった。

「……開けるわよおん?」

「……うん」

「……ん」

これほどの宝があるというのに、さらに奥に隠されているのだ。

それ一つで国一つを買い取れるようなとんでもないモノに違いないとさすがのケイも緊張して生唾を飲んだ。

ガコツと気持ちのいい音を立てて床下への扉が開く。

「……え?」

「ずいぶん飾り気がないわねえん」

予想とは程遠いものが目に入った。

煌々と光り輝く財宝ではなく、黒や茶の地味な色をした壺がずらりと並べられていたのだ。

その全てが蓋をされて鎖や紐で嚴重に縛られている。

「これ、もしかしなくても違うんじゃない?」

「秘宝って感じはしないわね」

「多分これでいい。底を見て」

また一から探すのかと落胆していたところ、一番小さいのを取って観察していたミロシユが何かを見つけた。

言われるがままに別の壺を持ち上げて底を見ると、何やら文字が記載されていた。

「製造年、神^{しん}帰^き曆四^し千^{せん}九^{ひゃく}八^{ひゃく}……じゃあこれ二千年前の物ってこと!」

「そう」

「こつちのは二千五百年前に作られたらしいわねえん」

三人で手分けして壺の裏側を見ていくと、約三千年前に作られたとされる物がたしかに見つかった。

しかし本当にこれでいいのか、周りにある財宝と比べてあまりにも地味で輝きを感じられないが、本当にこんなものが秘宝なのかと思っただ。

「アレンは三千年前のものだと言っていた。そして絶対に開けるなども。その二つに該当するのはこれしかない。他にあるなら探してきて」

そんな思いをミロシユに見透かされていたのか理路整然と説得された。

「そろそろ帰りましょ。じゃあこれはケイ……に任せたら絶対に我慢できなくなつて開けるわねえん。任せたわよミロシユ」

「ん」

「えー! 開けないって!」

「アナタとアタイは護衛よおん」

グリゴールの言った通り、心の中ではすでに開けたくなくなつていたのでその判断は正しかった。これもラファードルと修行をした成果なのだろう。すごい。

目的の品を手に入れた三人は地上を目指し、今度は下ってきた階段を上っていく。

「それにしてもアタイ達、本当に強くなったわねえん……」

「だねー」

「ん」

雑に攻略されて危険性の無くなった迷宮を歩きながらそんな話をした。

何度思い出してもやはりあのゴーレムは恐ろしいものだった。

いくら模倣だったとはいえ、本物とそう劣らない力があつた。土の無い場所なのでラファードルは格闘しか仕掛けてこなかったが、ロジャーの方は本物と同じように魔法を用い灼熱まで吐き出した。なんなら再生能力がある分本物よりも厄介だったかもしれない。

そんな化け物二体を正面から相手取って勝利を収めた。

(わたしたちは無敵だ！)

三人で力を合わせればどんな相手にだって勝てると、心の底から実感している。

厭味つたらしい不死者が口を酸っぱくして忠告するような過信や慢心ではない。

「地上よおん！」

特に新たな罫が作動するようなこともなく、ただ来た道に戻っただけで地上にたどり着いた。

「生きて帰ってきたぞー！」とケイとグリゴールが雄叫びをあげてミロシユが耳を塞ぐ。

「まだ明るいけど、一日経ったわけじゃないよね？」

三人は朝から迷宮に突入し、そして空の焼けないうちに秘宝を持ち帰った。

たとえば不死身の人間が挑戦するとして。どんなに早くてもひと月、場合によっては一年はかかると言われている難攻不落の迷宮をたった半日で制覇したのだ！

中央大陸に伝われば間違いなく人族史に記される大偉業である。

ことの大きさを知ってか知らずか興奮冷めやらずにいると、朝通っ

た道から何か小さなものが近づいているのに気づいた。

それは少しずつ大きくなり、夏草色の鮮やかな鳥が真っ直ぐ飛んできていたのだと分かった。

あれは知っている。カレンが契約している妖精のラクサだ。

「やつほーラクサクーん！ 迎えに来てくれたのー!？」

こちらからも歩み寄って羽ばたきがくつきりと視認できる距離まで近づき、少し様子がおかしいことに気付いた。

ラクサはクチバシをパカパカ開閉させて必死に何かを伝えようとしている。

なので凱旋のような歩きから小走りに変えて駆け寄った。

「ラクサクくん……だよね？ どうしたの？」

「たっ、ただ大変なことになっちゃった！」

大妖精のただならぬ雰囲気と声色で空気が引き締まる。

「あの、あああつ、あのだナツ！」

「落ち着いてちょうだい。ちゃんと聞いてるわよ」

「何があったの？」

「じ、実はつい先日——」

一体どんな話が飛び出てくるのかと、三人揃って生唾を飲み込んだ。

「——先輩と嬢ちゃんが掻っ攫われタツ！」

第二十二話 「最後の試練」

「アレンさんとカレンが攫われた!？」

「……アア」

ケイが今聞いたことをそっくりそのままオウム返しで尋ねると、血の通っていない緑鳥はゆっくりと首を曲げて頷いた。

「冗談だよね?」

もちろんそんなことは信じられない。

グリゴールとミロシユも口々にありえないと言っている。

なぜか妖精に当たりの強いミロシユは「つまらない嘘を吐くなら焼き鳥にする」とまで言って杖の先に火を灯した。

「嘘じゃない、本当ダ。二人揃って連行されたんだ」

「だって、カレンはともかくアレンくんがそう簡単に捕まるわけが……あつ」

「そういうことダ」

「カレンちゃんが人質にされたってワケねえん」

「迂闊」

それならば仕方がない。

伝説の不死者の弱点が義理の娘だというのは周知の事実である。カレンのためなら世界の半分を焦土にし、空に浮かぶ月を真つ二つに割ることだって躊躇わない、などと嘘か本気か見分けのつかない物騒なことも言っていた。

とにかくアレンにとっては自身の命よりも世界の命運よりもカレンが大事だ。

それが人質にされたとなつては無抵抗で従う他なかったのだろう。

「それで二人はどこに連れて行かれたの? 誰がそんなことを?」

「奴らは親衛隊を名乗ってたナ。我らの王がお呼びだとかなんとか言ってやがったぜ。それで二人を首都の方へ連れて行つタ」

「てことは……」

人族最大の仇敵たる魔人の総本山——魔王城。

数多の御伽話で毎度お決まりのように姫君が囚われる地に二人は

いる。もつとも、実際は王族が人質として捕らえられたことなど歴史上で三度とないのだが。

兎にも角にも十中八九メーテウス親子は魔王城へと招待された。

「どうするのよおん？」

「もちろん今すぐ二人を助けにいくよ」

「オレはどうすル？ 魔王城まで案内する力？」

「ラクサクくんはロジヤーを呼びにいつてくれる？ 弟子の晴れ舞台だつて言えばたぶん来てくれるから」

「分かつタ」

ケイはリーダーに相応しい判断力で誰に相談することもなく即座に決定し、二人もそれを受け入れた。

「それじゃ行くわよおん！」

そうと決まれば話は早い。

グリゴールが長く太い腕を広げてケイとミロシユを脇に抱え、黒々として威圧感のある翼を広げた。

バサリバサリと豪快な音を出して羽ばたき飛翔。

ぐんぐんと地面が離れて草木が小さくなっていく。

形を変えて流れる雲と同じ高度まで昇って、熱くなりかけた頭を冷やしてくれるように空気が冷たくなった。

「今日中に着くわよ！ ミロシユ、追い風をちようだい」
「ん」

少しでも速度を上げるために壺を大事に抱えるミロシユに魔法を唱えてもらう。

「うわっ!？」

「ちよつと強すぎるんじゃない？ けどまあいいわ、二人共しつかり掴まってるのよ！ 飛ばすわよおん!!」

足の裏から服と皮を剥ぎ取るような強風が吹きつける。グリゴールが羽ばたきの回転数を上げる。

地上近くを飛んで得物を探す蝶に似た魔獣を追い越し、彼方で火を吐きながら悠々と舞う竜を尻目にし。

三人は今、風よりは遙かに迅く音にも迫る速度で雲を貫いている！

そうして休むことなく飛び続け、日が地平線の下へ隠れてしばらくしてから営みの光が目に入った。

一つ見つけたと思えば新たに十見つかり、十見つけたと思えば新たに百見つかり。

すぐにそれが魔界の首都ヴィルタニアに住まう人々のものと分かった。

「大都市ねえん」

「想像以上」

「……だね」

なんて大きな街なんだろう。

中央大陸でもここまでの都市は見たことがない。人族より魔人の方がよほど素晴らしい国を作っているじゃないか。

などとお偉いさんに聞かれたら勇者の称号を剥奪された上で国際指名手配されそうな思いを抱いたが口には出さなかった。すぐ別のものが目に入ったからだ。

「山……じゃないよね？」

「そうねえん……」

初めは暗闇にうっすらと浮かぶ巨大な影がただの山に見えた。都市のど真ん中に山がそびえ立っているんだなと思った。

しかしよく見ると山にしては人工的な角や円が無数にあり。節々から青や赤、紫色の妖しい光を漏らしている。

まるで闇の奥深くからこの世界に侵入してきた異界の怪物のようにさえ見えてしまった。

「これが……魔王城……」

「緊張してるのケイ？ アタイはもちろんしてるわよおん」

ミロシユはなんとも思っていないでしょうけど、と苦笑して付け加えた。するとミロシユが当たり前と鼻で笑った。

きつとグリゴールは緊張をほぐそうとしてくれたのだろう。

だからそれ以上は何も言わずに無言で飛んでいた。

「到着、よおん！」

グリゴールが羽ばたきの回転数を下げ、ほとんど衝撃もなくふわ

と着地した。

そこは城の真正面。一般的な人族の城よりは一回りも二回りも大きい門と扉の間に不法侵入した。

もちろん今は夜なので、人を喰らう巨大な怪物の口は固く閉じられている。

「どういわけか番をする者もいなかった。

「こんばんは」

なのでちよつとふざけてノックを試してみる。……と、

「えっ」

「あらやだ」

開いた。

竜の火炎を難なく防ぎそうな重厚な扉が音もなく開かれて、中から強めの光が放流される。

「あ、えつと……お邪魔します」

砦を三つ収容できるような馬鹿げた広さのエントランスに。

扉のそばから奥に見える階段まで、揃いの制服を着た小ささまざまな魔人がズラリと整列して道を作っていた。

無数の力強い瞳が三人を見つめる。

「勇者御一行様ですね？ 我が王の元へ案内いたします。どうぞこちらへ」

扉が開いた時から三人の前に立ち塞がっている紳士然とした魔人に案内され、警戒しながらもその背を追った。

広く長い廊下を歩いて階段を上り、また広く長い廊下を歩いて階段を上るのを何度か繰り返し。

この城には人の国と同じようにいくつも省や部門があつて正しく組織されていることが分かった。

そして七階まで上つて少し歩いて。

威圧感のある赤々とした扉の前で案内人が足を止めて脇にどいた。

「この先で待っておられます。勇者様御自身の手でお開けください」

「あ、はい。ありがとうございます」

では私はこれで、と。

ここまで無言で案内してくれた魔人は軽くお辞儀をして、来た道へ帰って行った。

その足音が遠くなってから、ふうーっと大きめの息が堪え切れなくなつて溢れ出す。

「大丈夫う？ アナタの好きな時に開けていいわよおん」

「集中して」

「……うん、大丈夫」

いずれにせよノヴァク討伐の許可を貰いに謁見するつもりではあつたので、それが少し早まつただけ。ついでにアレンとカレンを解放しろという要求が増えたただけだ。

覚悟は、できている。

「いくよ——」

意を決して真つ赤な扉に付けられた金の取っ手を掴んで押す。

何の抵抗もなくすんなりと開いた。

「広いわね。それに綺麗ねえん……」

「ここ本当に城の中だよね？」

「無駄に広大」

扉の向こうにあつたのは今日行つたばかりの迷宮最下層と似た円柱の部屋だ。ただしあの迷宮と同様に部屋と呼ぶには広すぎる。

唯一の違いはと言えば……天井から床に至るまでの全面が、零れた血が映えるような純白で染められていることくらい。

もちろん黒い球体が三つ置かれてはいない。しかしその代わりに言うべきか、部屋の中央に黒い人影がポツンと佇んでいた。

「あれが魔王かしら？」

「置物、じゃないよね？」

「試しに撃つ？」

「だからそういうのはだめだつて！」

非現実的な白の中を真つ直ぐ進み、ある程度の距離まで近づいてから「すみません」と声をかけた。

その者は吸い込まれるような漆黒のマントで身を包み、黒光りする不気味な仮面で頭を覆い隠しているので男か女かも分からない。

耳を澄ませば「コーホー」という呼吸音が聞こえてくるので置物ではなく生ものであることだけはたしかだ。

「待ち侘びたぞ」

黒い影が答えた。

仮面越しに話すのでくぐもってはいるが、間違いなく聞き覚えのあの声だった。

「えっと、アレンくん……だよね？　ここで何してるの？」

「俺はアレンではない。魔王様の右腕アクリン・ランドランナーだ」「え？」

「つまらない冗談はよしてちょうだい。それよりカレンは？　無事よねえん？」

「そのような者は知らんな」

黒装束の男はあくまで己はアクリンだという姿勢を崩さない。

「貴様らが魔王様の御前に立つに相応しきかどうか、見定めさせてもらおう。では、いくぞ」

「何言ってるのアレンくん？　そのふざけた仮面を外——」

ケイが一足歩み寄った時、アクリンはすでに間合いに潜り込んでいた。

漆黒のマントから拳が繰り出される。

「くっ!」

咄嗟の判断でリターンエースを抜いて防ぐ。

強力な拳を剣の腹で受けてミロシユとグリゴールの後ろまで押し飛ばされた。

剣を握っている手が痺れる。

(……本気だ)

拳を受けた瞬間、飽魔銀ミースリルよりも硬い戦神鋼ボルトメットで作られた剣身がしなったのをこの目で見た。

防御せずに食らっていたら間違いなく頭と体が離れていた。

一年前の自分だったら今のは防げなかった。

アレンは自分達を本気で殺すつもりだ。

「ミイ！　グウ！」

名前を呼ばれるまでもなくミロシユは後方に下がり、グリゴールはケイの横に並んで一番慣れた戦闘隊形を取る。

アレンが本気で戦うつもりだということに二人も気付いているようだ。

「ようやく覚悟が決まったか」

「アナタもしかして、カレンちゃんを人質に取られて戦わされているんじゃない……」

「カレンとやらは知らんが断じて戦わされてなどいない」

グリゴールが疑問を代弁してくれたが、どうやら無理やり戦わされているわけではないらしい。

だったら自らの意思で自分達を殺そうとしていることになるが、どうして……？

「うむ、最後にこれだけは言っておこうか。何を隠そう俺は不死身の身体を持っていてな。日に二度蘇ることが出来る。魔王様にお目通りしたくばこの俺を三度殺して進め！ でなければここで果てるがいい！」

そこまで言われてやっと、以前アレンが言っていたことを思い出せた。

『二年後に俺の求める水準に達していなかった場合、問答無用でぶっ飛ばして帰らせる』

つまりはそういうことだ。

これは自分達に魔王とノヴァクに挑む力が備わっているかどうかを見極める最後の試練だ。

「——《常勝ジョウシュウヨウキ己リユ》待つてミィ！ それはまだ使わないで」

「何故。理解できない」

「どれだけ強くなれたか。今のわたしがどれだけ通用するかを試させて！」

「アタイ達の成長っぷり、アレンちゃんにタアアップリ見せてあげるわよおん！」

「あそう。なら私は見てるから。さっさと終わらせて」

ミロシユが呆れた顔をして距離を置く。

「愚か者め、素直に三人でかかってくればいいものを……。だがこれもまた一興か、貴様らの試みに付き合っただけ——」

一際コーホーと大きな呼吸音を立て、かつて最強の名を恣にした男が床を強く踏みつけた。

空気が震える。

肌がひりつく。

マントと仮面に覆われていようとその迫力は隠し切れない。

「——まずはこの拳で叩きのめしてくれようッ！」

第二十三話 「勇者様のやり方」

「クソツ、離せ！」

「ケイ！ 早く！」

「ごめんツ!!」

かつては守り抜くと心に決めていた仲間を背から貫く。おかげで向こう側にいる男の心臓を貫くことができた。

「か……ハツ……」

二人から剣を抜くとアクラインだけが純白の床を血で染めて倒れ、そして何事もなかったかのように起き上がった。

「グウ、大丈夫？」

「これくらいなら問題ないわよおん。アナタの腕が良かったおかげでね」

吸血鬼の再生能力を持つグリゴールもまた傷を塞いでケイの隣に並んだ。

「……これで一度か。少々貴様らを見くびっていたようだ」

「一年前のアタイと同じだと思わないことねえん。真の乙女は日に日に強く可愛くなっていくものなんだから。今なら三十回に一回はラファールに勝てるわよ！」

「アレンくんも遊んでないで魔法を使えば？ このままだとすぐにあと二回倒しちゃうよ？」

「クク……言うじゃないか」

三つしかない命を一つ失ったというのにアクラインの声はなおも愉悦を帯びている。

その声を聞いて悪寒が走った。

口では余裕綽々なフリをしていても、頭の中では認めざるを得ない。

彼は究極奥義の「普天愚者」どころか裏アレン流の技を一つも使わずに戦っていた。

自分達は一段階手加減している状態のアレンに勝ただけであると。

「それではお言葉に甘えて、魔法ではなく武器を使わせてもらおうか。来い、クアッドフォルト——」

アクラインが右手を開いて名を呼ぶと。

どこからか黒い筒が飛んできてその手の平に吸い付いた。

「力を貸せ」

アクラインが筒を力強く握りしめると、ヴーンという重低音と共に筒から真つ赤な刀身が生え、程よい長さまで伸びきってから禍々しい光を帯びた。

どこからどう見ても魔剣や妖刀と呼ばれる類の代物だ。国によっては所持しているだけで罪に問われるくらいの。

「悪そうな刀ねえん。世界平和のために折ってア・ゲ・ル」

小手調べとばかりにグリゴールが威勢よく飛び込んだ。

吸血鬼の身体能力と幼い頃より練り上げた技術を併せて矢のような速度のタツクルを仕掛け。

しかしアクラインはマントを翻してひらりと躲した。

「アタイから逃げ切れるつも……り……いつ？」

彼女は即座に向き直って再度仕掛けようとしたが、それは叶わなかった。

まず初めに右腕が床に落ち、次に左腕、そして両脚から上が滑り落ちた。

「何よ……今のは」

「貴様はここでじっとしている。勇者よ、覚悟は出来ているな？」

コーホーと不気味な呼吸音を立てて一歩また一歩と迫りくる。

ケイの聖剣を握る手には汗が滲んでいた。

(——勝てる気がしない)

初めてロジャーとラファードルの強さを垣間見た時と同じ思いを抱いた。

どうにか目で追うことのできた太刀筋を見て思い知らされた。さつきまでとは別次元の強さだ。

アレンにとって空手で戦うというのは単なる手加減に過ぎないことを理解できた。……いや、少し考えればわかることだ。

生涯を剣に捧げて極めた者と拳に捧げて極めた者がいるとして、二人が戦えばどちらが勝つかは決まりきっている。

武器持ちが徒手より強くて有利なのは当たり前なのだから。

「……………ミイ、お願い」

「——《常勝己隆》《四面ノ歌喰工洞鏡》」

だから仲間を頼る。

自分が唯一アレンより優っている身体能力をさらに引き上げる。

「はあああああっ!!」

こちらから飛び込み、ロジャーの元で一年かけて修めた『双竜の型』を繰り出す。

圧倒的な力と手数で防御を強制させ、その上から叩き潰す。

これが今の自分に最も適した剣術だ。

「それが勇者様の戦い方か？　まるで加減を知らぬ暴れ龍ではないか」

「アレンくんこそ、守ってばかりでつまらないね」

思いつき反撃してきなよと遠回しに挑発する。

すると乗ってくれたのか反撃に転じ、躊躇なく左腕を犠牲にして裏拳染みた回転斬りを放ってきた。

これを待っていた。

ここで全身全霊をぶつけてアレンの刀を弾き飛ばす——

「やアアッ!!」

歯を食いしばり、足腰に力を込め、刀を弾き飛ばすより叩き折つてやるくらいの気持ちでリターンエースを振るう。

そして聖と魔が重なった刹那、爆発音にも似た金属音と衝撃が迸り、

「ククク……」

「……………どうして」

——結果として、どちらの得物も折れず弾かれず。

「力比べなら勝てると思っただか？」

その通りだ。

純粹な力比べにおいて人族には生まれてこの方負けたことがない。もちろんアレンにだって。

ではどうして今、お手本のような鏢迫り合いが成立している？

ミロシユに身体能力増加の魔法をかけてもらってさえいるのに、どうして拮抗している？

「不思議か？」

仮面の下で薄気味悪い笑みを浮かべたのが分かった。

このままではやられる気がしたのでひとまず鏢迫り合いを中断して距離を取る。

だけどアレンは追撃をしてくるわけでもなく、禍々しい刀をまるで愛猫にするように優しく撫でていた。

「貴様の剣リターンエースは悪を滅するがために燃え上がり強くなる。対して俺のクアドフォルトは持ち主が抱く悔恨の数だけ強くなる。二度と過ちを繰り返すなど力を貸してくれる」

どちらも同じ時代に同じ血の流れた兄弟が命を捧げて造ったものだ……と、全てを実際に見てきたかのように語った。

おかげでどうして拮抗しているのかが分かった。

アレンは地上の誰よりもクアドフォルトの力を引き出すことができる。

しかし自分はリターンエースの力を引き出すことができない。どうしてもアレンを悪だと思えないからだ。

これだけの差があつてまだ押し負けずにいることの方が奇跡だ。

(……ありがとう)

自分を育ててくれた人達と、自分を産んでくれた名も顔も知らぬ両親に心の中で感謝を述べた。

そしていつか出会えた時に誇れるように、声に出して誓う。

「わたしは絶対に負けないッ!!」

自分でも喧しく思える雄叫びをあげて突っ込んだ。

力の全てをぶつける。

学んだ全てをぶつける。

ひたすら全力をぶちかます。

「ははは、青いな。青すぎる」

「ぐうー！」

だからといって威勢だけでどうこうできるのなら、彼は《龍おろし》や《剣神》とまで呼ばれていない。

ケイは技、知恵、そして経験の全項目でアクラインに劣っている。唯一自信のあった力ですら今となっては優位《アドバンテージ》を取れない。

グリゴールも切断された手足を治すたびに加勢してくれるが、鬱陶しい羽虫を叩き落とすようにすぐさま斬り捨てられてしまう。

「貴様のように生意気な奴を五百六十人殺した」

何度も決定的な隙を晒し続けているのにアレンはひと思いに首を斬り落とそうとはしてこない。

歴史の重みを教えてやると言わんばかりに一つ、また一つと皮膚を浅く斬ってくる。

つまりは圧倒的な力の差があつて、遊ばれているということだ。だけど諦めない。

百に一つ、万に一つでも勝ち目がある限り諦めない——

「はあアアー！」

「んなっ!？」

「ここ、だアツ!!」

それはまさしく奇跡だった。

ほんの一瞬、自分でも信じられないくらいの力が出た。

グリゴールとアレンが得意とする筋力の制限解除、俗に言う火事場の馬鹿力を発揮できた。ロジャーと一年修行してもまだ四割しか発揮できないが、この瞬間だけは間違いなく限界を超えた力が出ていた。

おかげでアレンをのけぞらせ、

「貴……様ア……！」

がら空きの左胸を貫くことができた。

万に一つを掴めてしまったのだ。

ケイがりターンエースを抜くとアクラインは力なく倒れ、そして五秒後に当たり前のように立ち上がった。

ただしわなわなと怒りに身を震わせている。

「てめえもかよ。戦いの最中に都合よく強くなりやがってよオ。クソツたれがよオ……！」

まるで活劇において二枚目役に倒されるためだけに湧いて出てくる、下っ端のならず者染みた口ぶりで吐き捨てた。

ただしこの男は中身まで小物のそれではない。どころか最終章の最後に立ちはだかる巨悪と言つてもいいくらいの力がある。これは一種の詐欺だ。

「あー、もういいや。なんだかんだ生かしてあげるつもりだったけど気が変わった。ぶつ殺す」

アクラインは今なお仮面を被ったままではあるが、取り繕った口調は完全に脱ぎ捨てた。

「――《我々ト同化セヨ》」

それはなんとも冷静で冷徹な声音だった。

アクラインはこの世のどの書物にも記されていない言葉を唱え、虚空から発生した黒い霧に包まれた。

そして一分と待たずに霧が消え去り中から現れたのは、これまでと何一つ変わらない黒い影。

「今のって変身する魔法……だよな？」

身体が巨大化しているわけでも翼や尻尾が生えているわけでもない。

一体どこが変わったのだらうと警戒していると、アクラインが勢よくマントを脱ぎ捨てた。

「……あれ？」

ケイは少しの間錯覚を起こしているのだと考えた。アクラインの両腕が二重に見えてしまったからだ。

しかし何度か瞬きをしても目を擦っても見えるモノは変わらない。

「アナタ、ついに人間をやめたわねえん？」

「吸血鬼に言われる筋合いはない」

アクラインの両肩からは二本ずつ腕が生えていた。

ケイ達がそれに気づくと同時に得物を持たない三つの手を広げて「来い」と命ずると、クアッドフォルトと同じように黒い筒がどこから飛んできてそれぞれ吸い付いた。

それらを力強く握りしめるとやはり重低音と共に刀身が生え、程よい長さまで伸びきってから禍々しい光を帯びた。

刀身と光の色はクアッドフォルトと異なり青、緑、紫と様々であるが、どう見ても魔剣の類である。

「夜にだけは会いたくないね……」

「あんなの昼でも嫌よおん」

子供が見たら喜びそうな色合いと光り方をしているが、ケイはすでに成人している。

ゆえに恐怖以外の何も感じなかった。

「さて、あと一度俺を殺せば先へと進めるが……方に一つも勝てると思うな。我に死角なし」

アレンの宣言が虚勢やハツタリだとは到底思えなかった。

この手でたしかに二度殺したはずなのに、三度目は不可能だと心のどこかで諦めてしまっている。

身体が強張る。本能在、アレはどうやっても倒せないと認めてしまっている。

「ねえアレンくん。その、弱点とかって……ないの？」

「あるにはある。四刀流に集中するためにロクに魔法が使えない——」

《狂イ踊^{オド}レヤ巖^{イワノ}ノ亀^{カメ}ヨ》《舞^マツテ爪^{ツマビ}弾^{ツマビ}ケ炎^{エン}尾^ビ鷹^{ヨウ}》《浮^フ環^ワ雷^{ライ}導^{ドウ}》」

今までごろ寝で静観を決め込んでいたミロシユが即座に立ち上がって杖を大きく振るう。

壁と天井から百の巨礫が削り抜かれ、礫の一つ一つが炎と雷を纏いつた一人の人間に猛烈な勢いで襲いかかる。

魔法を使えないアクラインに情け容赦ない裁きが下され——

「——《風^{フウ}抗^{コウ}盟^{メイ}毘^ヒ》《霜^{シモ}ヨ積^ツモリテ嶺^{ミネ}ヲ越^コセ》」

突如として現れた風と氷の防壁により、百の巨礫はアクラインを砕くことなく砕け散った。

死刑執行の直前に恩赦が与えられたのだ。

「今の声って……まさか!？」

ミロシユの対怪物用魔法を防いだのはアクラインではない。

アクラインの背後、魔王の元へと通ずる扉から隙間風の如く乱入してきた人物が唱えたものだ。

「言っただろう？ 死角はねえって。俺の代わりに優秀な弟子がそつちの魔導士を抑えてくれるって寸法よ。というわけで梅雨払いは任せたぜルーア」

「はいマスター師匠」

ルーアと呼ばれる弟子はアクラインと同様に漆黒の仮面とマントで性別すらも覆い隠していたが、その明朗な声に覚えのない者はいなかった。

「カレン……よねえん？ アナタまでどうしちやつたのよおん？」

「邪魔をしないで。本気で私とやるつもり？」

決め手を台無しにされたミロシユが不機嫌そうに問う。

「《追エヨ貪ムサボレ蛇蒼炎》《百渦ヒヤツカリ獵嵐》」

その問いに対してルーアは無数の竜巻と燃える蛇の群れを遣わして返答した。

よって強大な魔法使い同士の決闘が始まってしまった。

「ミイ……カレン……」

「ケイ！ 来るわよ！」

「オイオイ勇者様よ、自分の身より仲間の心配をしている場合か？」

お優しいこつたなア……。ならお望み通りてめえから殺してやるよ！」

アクラインが前進を開始した。

二本の刀を回転させて床を削りながらケイを視界の中心に据えて歩を進める。

そうだ。

今はミロシユの心配をしている場合じゃない。

アレンから一瞬でも目を逸らすな。瞬きすらもするな。意識を研ぎ澄ませろ。さもなければ首を持っていかれるぞ。

そのように自戒してリターンエースを構えた。

「ククク……遺言は決まったか？」

アレンはじりじりと、一定の歩幅で確実に迫ってくる。

ならば間合いに踏み入ろうと足を上げた瞬間に仕掛けよう。

「アタイを無視してんじゃないわよッ!!」

アクラインがあと二十歩進めばケイに斬りかかれるといったところで、アクラインの視界から外されていたグリゴールが回り込み、斜め後ろの死角から虎のように飛びかかった。

しかしアクラインは振り向くことすらせずに関節を外して四本の刀を振るい。

「……馬鹿が」

クアッドフォルトだけを手にしていた時よりもさらに細かく、一瞬にしてグリゴールを二十等分に切り分けた。

「グウッ！ そんな……」

一連の流れを目の当たりにしたせいでこちらから仕掛けようという浅はかな考えはかき消された。

死角から飛び込んであなるのだ。

馬鹿正直に真正面からいったらどうなるか、背筋に嫌なものが走った。

クアッドフォルトに斬り裂かれた傷が激しく痛んで警告してくれている。

「どこへ行く？ 今更逃げるつもりか？」

攻めても守っても絶対にやられる。

今の自分じゃどうしようもならない。

とにかく今は逃げて、逃げて、逃げ続けて、グリゴールの回復とミロシユがカレンを抑えて合流してくれるのを待つしかない。

「待たせたわねえん！」

グリゴールが百秒とかけずに飛び散った身体を繋ぎ合わせて復帰し、アクラインから距離を取り続けるケイの横に並んだ。

（どう？ 二人で同時に行けば勝てそう？ それともアタイを囷に使ってみる？）

(たぶんどつちも無理)

自分とグリゴールだけでは天地がひっくり返っても倒せはしない。ミロシユを含めた三人ならば僅かに勝機が生まれるが、そのミロシユは今現在カレンと互角の勝負を繰り広げている。

(じゃあどうしろっていうのよおん？ 弱点とかないワケ？)

(アレンくんの弱点……弱点は………そうだ——)

アレンは大人げない意地悪な男ではあるが悪人ではない。絶対に乗り越えられない試練を与えたりはしない。

そのように考えたケイに革新的な閃きが生まれた。

(ケイ？ 何か思いついたの？)

(……うん)

ケイは苦い顔で答えた。

その閃きというのは勇者の資格を失うどころか人の道すらも外れるものだからだ。

だが、それ以外に生き残る術はない。やるしかない。

自分にそう言い聞かせて獣めいた聴力を持つアレンに聞かれないよう見られないよう、背中でサインを出す。

「グウ、頼んだよー！」

「本当にそれでいいのね？」

「こんなところで死ねないから」

「……そうねえん」

ケイとグリゴールは最終確認を取り合っつてすぐ、二手に分かれてアクラインを挟んだ。

「また挟み撃ちか？ 芸がないな。今度こそすりおろしてやる」

「あらやだ、怖いわあん」

グリゴールが挑発するような独特のステップを踏む。アクラインは一度だけ振り返ってグリゴールを視認したが、即座に危険性はないと判断してケイだけを視界に収めた。

そして二本の刀を回転させて床を削りながら前進を開始した。

「そうそう、わたしから目を離さない方がいいよ。アレンくんがあつちを向いた瞬間にロジャーに教えてもらった必殺技を出すから」

「ハッ、生まれたての吸血鬼など目を瞑ってでもあしら——」
アクラインが何かを察知して急転換した。

(もうバレたの!?)
グリゴールの駆ける音が近づくどころかその逆、遠ざかっていることに気付く。

その目的にすらも気付いたようだ。

流石は数千年の経験を積んだ不死者なだけある。

「野郎ツ!!」

アクラインはとある一点を目がけて駆けるグリゴールに対し、二本の刀を高速で投擲した。

一本は右の太ももに、もう一本は背中のご真ん中に突き刺さってグリゴールの動きを止めた。

「チツ、まだ生きてやがんのか」

「させない!」

そしてトドメの三本目を投げようとしたところでアクラインの前に勇者が立ちふさがった。

「邪魔だ! 退け!!」

「グウ! 早く!! あんまり持たない!!」

二本減ったとはいえ、今の自分ではアレンと渡り合うことはできない。
い。

なので仲間を信じて防御に徹する。

あと十秒でも耐えることができれば勝てるのだから!

(お願い! もう一回だけ出て!)

それでも唯一アレンを凌駕できる奇跡を信じて剣を振るい——
「らあアアツ!!」

—— 極限下においてそれは再び起こった。

「畜、生オ……」

「もらったアツ!」

得物を二本同時に弾き飛ばされ、体勢を大きく崩したアクラインに勇者が聖剣を振り下ろす。

「……なんてな」

だがしかし、アクラインはケイが奇跡を起こすことまで予測して罠を仕掛けていた。崩れたのも演技だったのだ。

即座に体勢を正し腕を三本犠牲にしてリターンエースを受け止め、残りの一本でケイの首を掴んで持ち上げた。

「あつ……ぐ……」

苦しい。

息ができない。

痛い。

視界が狭くなっていく。

苦しい。

助けて。

岩をも砕くアクラインの手に握られ、さしものケイといえど死にずるずると引きずり込まれていく。

首の骨を折られるのが先か意識が飛ぶのが先か、この世の淵にひっかけた最後の指が外れる寸前に――

「――そこまでよおん!!」

今しがた命を救ったばかりの仲間が救いの手を差し伸べてくれた。途端にアクラインの握力が弱まり視界が広くなる。

土壇場の秘策が通じたのだ。

「さ、早くケイを離して大人しく斬られなさい。それとも、この子がどうなってもいいワケ？」

グリゴールはルーアの首根っこを片手で掴んで持ち上げ、もう片方の手でその仮面を外した。

あつさりと正体を晒された少女は申し訳なさそうな顔でだらりと脱力して俯いている。

「それがてめえらのやり方か？」

何より大切な弱点を人質に取られてしまったアクラインの震えが腕を通して伝わってくる。

「それが勇者様のやり方かって聞いてんだよオオオオーツツ!!」

雷が至近距離に落ちたような咆哮。

鼓膜が破けるかと思った。

「うん、そうだよ。でもわたしが考えたわけじゃないよ？　だってこれはアレンくんが教えてくれたやり方だもん」

広い空間に反響する声が消え去ってからケイは答えた。

アクラインは「ああそうかよ」とぶっきらぼうに返答してケイを放り捨てる。

それから黒い筒状に戻っていたクアッドフォルトを引き寄せ。

「……クソが」

再び握りしめて生やした刀身を自身に向け、

「合格だよ」

その首ごと仮面を外した。

第二十四話 「真紅の宝石」

白、白、白。混じり気のない白だけが手を伸ばした先に在る。

触ろうとしても触れない、夢幻を見ているかのような距離感を狂わせる純白。

よく見れば所々割り抜かれているので夢ではなさそうだ。

「……アレンくん？」

「何ぼーっとしてるのよおん」

一つ二つと見知った顔も生えてきた。やはりこれは現実だ。他人の吐瀉物を飲み干すよりも受け入れ難い現実。

「まさか、なあ……」

まさかこの俺が、百歳にすら届かぬ若造に三度も敗れるとはな。

いや、二度までではない。二度までは上手い具合に勝たせて自信を付けさせてやろうと考えていた。それから死なない程度に勝つて世界の厳しさを骨の髄まで沁み込ませてやるつもりだった。元より二度俺を殺せた時点で合格を与える気でいたのだから。

その結果がこのザマだ。

俺は一体どうすればよかった？

あそこで確実にグリゴールを仕留めておけば、石縛孔にでも刺して完全に動きを止めておけばよかったか？ ケイが勇者にあるまじき戦法を閃かぬよう、ラファールのカツラを人質に取らず戦い切れればよかったか？ そもそも俺とケイ達に大人と赤子ほどの圧倒的な実力差があれば――。

◆◆

白、白、白。混じり気のない白だけが手を伸ばした先に在る。

触ろうとしても触れない、夢幻を見ているかのような距離感を狂わせる純白。

よく見れば所々割り抜かれているので夢ではなさそうだ。

「……アレンくん？ 何で今爆発したの？」

「んもう！ どうしてくれるのよおん！ アナタの脳味噌で汚れちやつたじゃない！」

「ちよつと、頭を切り替えたくてな」

しようもない自己問答に陥った頭を廃棄して綺麗さっぱり切り替えた。

「……さて」

手をついて立ち上がり、すでに集合していた四人の顔を見回す。

「おおー、どいつもこいつも立派な顔つきになりやがって。」

「これにて最終試験は終了だが、最後にそれぞれ批評していこうと思う。まずはケイ！」

「はっ、はい！」

「よくぞ双竜の型をモノにしたな！ それは俺様が二番目に戦いたくない優れた剣術だ、誇れ！ あとは筋力解放を自在にできるようになれば、数千年後も語り継がれる偉大な勇者になるだろう！ 次にグリゴール！」

「んふふ、はあい！」

「もつと命を大切にしろ、馬鹿者が！ 吸血鬼といえど頭を潰されたらそこで死ぬんだぞ!? ラファードルの影響でネジが外れてしまったのかもしれないが、アレの真似はしようとするな。命がいくつあっても足らんぞ？ それ以外はまあ、まづまづだ！ 次にミロシユ！」

手放して褒められるかと思いついていたのか少しムスツとした乙女を放って、無駄な時間に付き合わされたときさらに不機嫌そうな賢者様を見る。

「さつさと済ませろ。早く休ませろと顔に出ていた。」

「ミロシユさんは……うん、何も言うことがないっすね……。これからも精進してください」

「ん」

ミロシユが最初に放った流星群のような巨礫の雨はカレンが防いでくれたからいいもの。もし俺が生身で受けることになったとして、果たして剣四本でどうにかできるだろうか。

手数はたぶん足りているだろうが半々の確率で一発は打ち漏らし

て死ぬ。二回に一回は俺様を殺せる魔法が使える時点で合格です。

そもそもミロシユの身体強化魔法が無ければケイとグリゴールは俺に太刀打ちできないので、本当に何も言うことがございませぬ。ミロシユさんこそが勇者一行の屋台骨です。

食あたりにだけは気を付けて欲しいところです。

「そして最後！ カレンー！」

一人だけずっと気落ちしている娘に目を向ける。

威圧的で堂々とした漆黒のマントと戦闘服を纏っているのに、飼い主を誤って噛んでしまった犬のようにしよんぼりとした顔で俯いていた。

「……ごめんなさい」

「どうして謝る必要がある？ 君はよくやった。カレンを殺す気がないとはいえ腕の一本くらいは躊躇なく奪うつもりだった賢者様を相手によく持ちこたえた」

「えっ……。そうなの!？」

カレンは即座に首を回して隣の大食い仲間を見下ろした。「あたし友達だよな？ ミロシユはそんなことしないよね？」とでも言いたげに見つめている。

「聖呪が使えるなら腕くらい取れても接着できるから」

「ほらな」

「……ウソでしょ」

女の友情に亀裂が生じてしまったかもしれないが構わず続けよう。

「とにかくよくやったなカレン。暴食の賢者様と引き分けたんだ、誇って——引き分けじゃない。あのまま続けていたら私が勝った」
大人しそうな見かけによらず負けず嫌いの気がある狂犬が噛み付いた。

「一年前はそうだったかもしれないけど、今のあたしは負けたくないよ？

必殺技とかもいっぱい覚えただから！」

なんてこった、狂犬は二匹いた。

「身長だってミロシユより高くなったし」

カレンが勝ち誇ったようにミロシユを見下ろす。

成長期に栄養価の高い食事をさせたこともあつてか修行期間でぐんぐんと背が伸び、今ではミロシユを大きく抜かしケイと並ぶほどになったのだ。顔つきにはまだまだ幼さが残るが身体はすらりと大人びてきた。なので悪い男に言い寄られても粉碎できるように鍛えてある。

「私は人より胸が大きい。カレンには全然ない。つまり背が高いだけでまだまだ子供」

「はあー!? そんなのあつても動きづらいだけだからいらないし!」

「んもうアナタたち、やめなさいってば!」

「二——《タカラ資ウツモ産イモ凍ムステ結ベ》」

白熱する二人の間に止めに入ったグリゴールが吸血鬼だからと雑に氷漬けにされた。

「こうなったら決闘よ決闘! どっちが上か白黒はつきりさせなきや!」

「返り討ちにしてあげる」

戦闘経験はミロシユが圧倒的に上回っているが、魔力量とセンスはカレンの方が上だ。

そんな二人が本気でやり合えばどうなるか気になるところではある。もちろん今やらせるつもりはないが。

「勝った方が相手の言うことをなんでも一つ聞く、でいい?」

「それで構わない」

まだなんとか理性が残っているのか、決闘開始の合図をしてと二匹で俺を見る。

「あー、うん。気が済むまでやっていいよ。あっちにご馳走を用意してあるけど全部食べておくから」

「……………決闘はまた今度ね!」

「ん」



「それじゃ開けるぞ。覚悟はいいな?」

「……うん！」

謁見の間へと繋がる青い扉を押し開く。

「つたく、いつまでやっておるんじゃ。ラッフアが半分は食っちゃまったぞい」

そこはもはや謁見の間ではなく、ちよつとした宴会場と化していた。

由緒正しき部屋の中心に置かれた馬鹿でかいドーナツ型のテーブルと、その上に隙間なく敷き詰められたご馳走。それらを囲む三人の魔人と緑色の鳥が一羽。

「ひはひほはふはへへは、ふひほーふー！」

うち一人が両手に持った骨付きの肉を頬張りながら弟子を褒めた。

「あらやだ、見られてたの？ 恥ずかしいわあん！」

「んぐ……。おう、全部見てたぜ。後ろ向いてみ」

ラフアーダルに言われるまま勇者一行は振り返り、それぞれ大なり小なり驚きの声を漏らした。

白い壁があつて覗き穴もないはずなのに向こう側が見通せる。つまりは一方鏡《マジックミラー》になつていたからだ。

「それじゃあ、ずっとわたしたちを見てたつてこと？」

「それを……食べながら？」

「おいラッフア、どうしてくれる。ヌシが食いすぎたせいでワシの弟子が怒り心頭じゃぞ」

「俺だけのせいにすんなよ！ おっさんもさつきまでバクバク食つてたじゃねえか！」

「ワシは龍なんだから仕方なからう！」

いい歳をした大人二人が責任のなすりつけ合いを始めた。ラクサは何かを予感したのか我関せずと剥製のフリをしている。

すると背後から「わたしはラフアーダルを」「私はロジャーを殺す」なんて物騒なささやきが聞こえてきた。

これはいけない。話題を変えねば。

「そ、それはそうとケイ！ 魔王様に何か頼み事があるんじゃないか？」

「あ……うん、そうだけど。どこにいるの？」

部屋の奥の、床が一段高い場所に置かれた玉座には誰も座っていない。

ロジャーとラファール以外には前髪が目にかかって男だか女だか分からない影の薄い気弱そうな魔人しかいない。

そのため勇者一行はキョロキョロと見回して魔王の影を探し始めた。

「……あの、僕が魔王です」

たまらず魔王様自らが弱々しく名乗りを上げた。

「……えっ?」

「本当にアナタが魔王ベルなのおん?」

「信じられない」

「う、嘘じゃないです。信じてください。僕が魔王ベルなんです。今はベルデイヒって言いますけど……」

いくら本人が魔王を自称しても三人は顔をしかめるばかりで一向に信じようとはしなかった。

おそらくロジャーとラファールから「魔王は七つの顔を持つ」とか「自分の戦い方ができれば誰でも倒せる危険な存在」などデンジャラスと聞かされてきているのだろう。だとすればこの、風格というものが一切ない気弱な男を魔人の王だと信じるのは無理な話だ。俺も魔王をしていた時は、ここまで気弱ではなかったのにまず信じてもらえなかったのだから。

「ベルデイヒ様、たぶんもう無理です。ベルダイク姉さんに代わりましょう」

「そうするよ……うう」

ベルデイヒが前髪の間隙からうつすら見える瞳を閉じ、二秒と待たずに開くと。

ほんの一瞬、熱風が吹きつけたような気がした。

「ええっ!?!」

「それどうなってるのよおん!?!」

するとみるみるうちにベルデイヒの頭髪が伸びて前髪はかきあげ

られ、金色の目を輝かせる姉御肌の女性に変わった。

顔だけでなく体格すらも弱々しい男性から肉感的な力強い女性のものに変わっていた。

その雰囲気や佇まいはまさしく女帝や女豹と評するほかない。

「私がベルダイクだ。これなら魔王だと信じてもらえるかい？」

ロジャーやラファードルと同等の気迫を感じ取れたのか、ケイはブンブンと首を縦に振った。

「信じるわ。今のアタイじやアナタの魅力には敵いつこないもの」

グリゴールもよく分からない理由で納得した。ミロシユも魔王を睨んで背中の杖を握っているので信じてくれたのだろう。

「でもどうしてベル……デイヒさんがベルダイクさんに変身したの？」

二人は別人なの？」

「それはだな……どうだミロシユ、分かるか？」

「……………多重人格」

「つまり魔王様は気を狂わせている。ベルデイヒとベルダイクは妄想の産物であり同一人物ということだな？」

「そう」

なるほど実に合理的で夢のない答えだ。

しかし現実というのは存外非合理で夢に溢れている。

「残念ながらその答えでは赤点だ。ハツハツハ、まだまだ見識が足らんな！ よくぞそれで賢者を名乗れたものよ！」

「……………あそう。なら早く答えを。それと私は賢者を自称したことはない」

ミロシユは落ち着きながらも、これ以上しつこく追い打ちしたら問答無用で消し飛ばすという凄みをきかせていた。

藪蛇にならぬよう話を進める。

「魔王様は世にも珍しい七つ子としてこの世に生を受けた——」

互いに場所を奪い合うことなく母親の胎内ですくすくと成長していた日に、父親が旅行に行かないかと提案した。もうすぐ陣痛が始まるので、今のうちに気晴らしをするつもりだった。

そんな希望と幸福に満ちた旅先で事故は起こった。魔界に住んで

いれば誰にでも起こり得る、不幸な事故だった。

ワイルド
亜竜に襲われたのだ。

父親は特段強い戦士ではなかった。母親を守るために戦い、三爪の魔獣になすすべもなく殺され。

母親は父親が食われているうちに逃げたが女の、それも身重の体ではろくに走ることもできずに追いつかれ。

自身の生を諦め、食い殺される直前に祈った。

『神様、どうか子供達の命だけはお助けください』

亜竜は母親の胸から上を食いちぎって満足し、次の得物を探しに飛んでいった。

その一部始終を彼方から観ていた者がいた。魔人を創造した神、ヴィールタスだ。

彼女は腹の中に遺され、光を見ることも叶わず朽ちていく子らを哀れに思った。

ゆえに七つの肉体を組み合わせて唯一無二の器を作り、七つの魂をその器に注ぎ込むことよって生き長らえさせた。

ヴィールタスは暴虐神と呼ばれるほどに自分勝手に残虐ではあるが、それはあくまでドウーマン以外の他種族に対してのみだ。

身内に対しては今なお清らかな乙女と呼ばれた日の顔を残しているのだ。

『この子が件の……うむ、強くなる目をしておる』

さらには古よりの懐刀に命じて育てさせた――。

「……おかげさまで立派な魔王様になりました、とさ」

「このワシが丹精こめて育てました。……んまあ、今ではワシより強くなっているがの」

「何言ってるんだいオヤジ！ あの時のオヤジは風呂掃除中に怪我をしたせいで弱っていたじゃないか」

まるで実の親子のように和気あいあいとした二人を見て微笑ましく思った。

俺とカレンも周りからはそのように見られているのだろうか？
そのように見られていたらいいな。

「そういうわけで！ 魔王様は多重人格ではなく実際に七つの魂を持つていて、七人が共生しているのだ。ベルデイヒ、ベルデイハ、ベルダイク、ベルディツシュ、ベルツチ、ベルディフ、それともう一人は、たしか……」

「ベーグルディツヒだ」

「以上の七名が魔王ベル様なのだ。忘れずに覚えておくがいい！」

「なんか色々と凄すぎてついていけないや」

「……」

至極丁寧な解説を終えて。

ケイは口を開けて唾然とし、ミロシュは納得できないといった表情を貼り付けたままカレンと共にご馳走を頬張っていた。

「そろそろ他の兄妹達に変わってもいいかい？」

「え？ ……あつ、わざわざ大丈夫です……よ？ わたしまだ頭の整理が追いついてないし」

「そ、そうねえん……」

「そんな寂しいことを言わないでおくれ。みんなアンタ達と話したって言っているんだ——」



魔王ベルは何度も姿を変え、それぞれが満足するまで語ったり尋ねたりをしていった。

そんな終わりの見えない質問攻めと長話にケイとグリゴールが辟易した顔色を隠し切れなくなってきたところで、再びあの気弱で影の薄い男ベルデイヒが表れた。

「その……ごめんなさい！ 僕の家族が迷惑をかけました……」

「ぜ、ぜんぜんそんなことないですよ！ とても新鮮で楽しかったです！ だよねグウ！」

「そ、そうそう！ アナタが気に病む必要はないわよおん！」

「えつと、それでそのう……。勇者さんは僕に用があつて来たんです……よね？ 何でも言ってください。僕に出来ることだったら力に

なりませんから。殺し合いとかも……本当は嫌ですけど………受けて、立ちます」

果たしてこれが古来より死闘を繰り広げてきたとされる勇者と魔王の会話だろうか？

七人兄妹の中で未っ子のベルデイヒはあまりにも気弱がすぎる。新しい器を用意して、そこに一人だけ魂を移した方がいくらいには魔王に向いていない。

それでも実力は確かだ。先日試合を行い、三度俺を殺したくらいには強い。

「実はわたしたちはあなたを倒しにきたわけじゃないです。四将の一人ノヴァク・グルテムムリーを討伐する許可をもらいにきました」

「あ、そうだったんですね……。それなら僕は止める気はないで——おい貴様、貢物も無しに許可を貰うだと？ 魔王様を怒らせたいのか？」

いくらなんでもあつさり話を通りそうだったので口を挟んだ。

「あの……アレン……？ 僕そういうのはいらぬし怒りもしないけど……」

「ダメです魔王様、こういうのは威厳が大事なんです威厳が。さあどうぞー！」

「え……ええつと……それじゃ……ノヴァク・グルテムムリー討伐を許すので、代わりに何か価値あるものをくだ……よこ、せ……う？」

なぜそこで疑問形なのかと死ぬほど声に出したかったがどうにか飲み込んだ。

一応意味は伝わったようでケイとグリゴールは互いに顔を見合わせた。

「価値のあるものって言っても、リターンエース……はさすがにあげられないし」

「アタイも大したもののは持ってないわねえん。こうなったらもう、身体を捧げるしか……」

「あつ……それなら何もいらぬです。本当に気持ちだけで——何もないだとオ？ ではその古びた壺はなんだ!？」

今の今までベルデイヒよりも影の薄くなっていたものに光を当てる。

すぐにケイが壺を取ってきて「ははーっ」と仰々しく献上した。

「ふうむ、どれどれ……。なるほどこれは三千年前に製造されたのか。……むむ、この印はまさか！ あのアレン・メーテウスが造ったものではないか!？」

「あ、やっぱりそれアレンくんが造ったものなんだ」

「さて、茶番はこれくらいにして……。みんな集まれ！ 開封するぞ！」

古ぼけた壺をテーブルから離れた床に置き、それを皆で囲む。

頬袋に食べ物を詰めたカレンとミロシユが最後にやってきて、誰が黙れと言ったわけでもないのに一人も声を発さなくなった。

静かなのでそれぞれの鼓動の音がよく聞こえる。

これを餌に招集したロジャーとラファードルは中身を知っているが、それ以外の何も知らぬ者達は一様に鼓動を高鳴らせている。

「ねえアレンくん、この中には一体何が入ってるの？ 秘宝って言うてたよね？」

「この中にはな、真紅の宝石が何十個も入っている。しかもその一つ一つに国家予算並みの価値がある」

国家予算という言葉聞いた複数人が唾を飲み込んだ。

壺を嚴重に縛っていた鎖と紐を一つずつ丁寧に解いていき、残るは蓋を外すのみとなった。

「では開けるぞ？ 皆の衆、覚悟はできているな？」

開封を目前にして、鼓動の音がますます大きくなる。

このまま心臓を破裂させて死傷者が出ては困るので、あまり溜めずに蓋を取った。

「え？」

壺の中に詰まっていたのは白くざらざらした、砂のような何か。

「……………塩？」

「そう、これは塩だ」

「真紅の宝石ってのは？」

せつかちな若人のために塩の中に指を三本突っ込み、一番最初に触

れたものを摘まんで取り出す。

「これだ」

「おお！ いい出来じゃのう！」

「だろ！ ここまでするのに苦労したぜ！」

「早くくれよ！」

「まあまあそう焦るな焦るな！ ちゃんと全員分あるから！」

俺とロジャーとラファールとダルのいわゆる師匠連中は真紅の宝石を実際に目にして、デカイカブトムシを捕まえた子供のようにはいしやいだ。

しかしそれ以外の連中からは先ほどまでの鼓動の高鳴りが失せてしまっている。

はて、どうしてだろうか？

「……ねえ、アレン」

「どうした娘よ!？」

「それが真紅の宝石……なんだよね？ ふにやふにやしてて石には見えなだけで？」

「そりゃあ鉱物ではないからな」

真紅の宝石というのはあくまで比喩だ。どうやら最近の若い者は総じて頭が固いらしい。

「わたしの故郷にはすごく似てるものがあるんだけど、もしかしてそれって……」

「ああそうだ。もちろんこれは——」

「——梅干しだ」

第二十五話 「知らぬが慈母神」

「この梅干しはだな、まず最初に栄養価の高い竜の血と魔角象の髄液と俺を三十回食わせたヒトクイヒョウタンの搾り汁に十年漬け、それから百年おきに「アレンくん、もう大丈夫だから」

人が親切に秘密の製造法を教えてあげるといふのに遠慮された。

たしかに遠慮は美德だが、使いどころを選ばないとかえって失礼に値するのを知らないようだ。

だが俺様は寛大だ。そのような些細なことで気分を害したりなどしない。

「それもそうだな。言葉で聞くより実際に味わった方が早いかな」

宝石をいくつか驚掴んで手に取り、まずは一人一粒おたべと差し出した。

しかしどういうわけか、四人揃って口を固く閉ざしている。

「どうしたお嬢ちゃんたち、食べないのかい？」

「……いらない」

気まずそうに顔を見合わせる三人に代わってカレンが答えた。

「美味しいよ？」

「だからいらないって。アレン達で食べてていいよ」

「そっかあ……。なら仕方ない——」

一旦振り返って待ち侘びている魔人に一つずつ投げ渡し、

「——なんて言うと思ったか!? 黙って食べオラアーツ!!」

「んんんんーっ!?!」

それから四人まとめて束縛と開口のツボを圧して間髪入れずに放り込んだ。吐き出してしまわないように閉口のツボも圧してあげた。

「存分に味わうといい」

さすがに無理矢理咀嚼させると好感度を著しく下げてしまいかねないので、そこだけは個人の判断に任せる。

やはり四人ともツボの効果が切れるのを待って咀嚼しようとはしなかったが、好奇心に負けたケイとカレンがほぼ同時に口の中を動かした。

「……………あれ？ フツーにおいしい…………？」

「……………うん、わたしが故郷で食べたのより全然おいしい。グウとミイも食べて大丈夫だよ。というか食べた方がいいよ！」

ケイがそこまで言うならと後の二人も諦めて咀嚼した。

そしてすぐに前の二人がしたのと同じように目を丸くさせる。

「だから美味しいと言っただろう？ しかも美味しいだけじゃないんだ。どうだカレン、ケイ。調子のほどは？」

「身体がすごいポカポカする」

「それに疲れも全部消えて軽くなってる。ありえないくらい調子が良いけどまさかこれも」

「そう、梅干しの疲労回復効果だ」

それだけじゃない。

「ケイ、腕の包帯をとってみろ」

「うん？ ……………ウソっ!？」

最終試験で何箇所も浅く斬って流血させた。試験後に包帯を巻いて止血こそしてあるが、当然傷は残っているし激しく動けば傷口が開いてしまう。

そのように考えていたはずだ。

「全部、消えてる…………」

驚いたことにあれほど大量にあった生傷が綺麗さっぱり無くなっているではないか。

もちろんそれだけでもない。

「どうだミロシユ、さつき浪費した魔力は回復しているかね？」

「もう一度製造法を教えて…………ください」

「うむ、素直な子にはいくらでも教えてあげるし二千年物を二壺差し上げよう」

そう！

秘薬の伝説は世界中に多々あれど、この梅干しこそが疲労と傷と魔力までも回復させてしまう世界最高の万能薬なのだ!!

「これを一粒口にすれば病までも治る。流石に即効性の猛毒と心の病までは治せないがな。これで諸君にも真紅の宝石と呼ばれるワケが

理解できたかな？」

「分かったからもう十粒ちょうだい！」

「そうじゃそうじゃ。御託はいいからはようはよう」

本来は魔王への献上品であることを忘れ、皆でご馳走と共にそれをつつついた。

何千年も敵対してきた種族同士とは思えない賑やかな宴は続き、ラファードルとグリゴールが余興に腕相撲なんかを始めたあたりで。

「そうじゃアレン。ヌシに見せたいものがある。ベル様、ちよいと禁書庫の鍵を貸していただけますかのう」

「はい、どうぞ。好きに使ってください」

カレン達に不審がられないよう一服しにいかないかくらいの軽い感じで何気なく誘われた。

そのまま断るまでもなく着いていくが、なんとなく覚悟はできている。

そして玉座の右方、魔王の寝室とは反対の場所に隠された扉を開けて入った。

「えーとたしか、どこじゃったかの……」

「前より広くなってるな。改築したか」

我々が入った途端に天井の中心から紫光が放たれて部屋全体を淡く照らした。

まるで天文台のような形をした部屋には一万や二万ではすまない数の書籍が並べられている。それもそのはずで、禁書庫には城が建造された当時から今に至るまで魔界中の膨大な記録と記憶が保管されているのだ。

その中には魔王や四将など、地位の高い者が計画実行してきた所謂機密情報と呼ばれるものまで含まれている。

「お、あったあった。ほれ、これを読んでみい」

魔界の環境変化について調べようとしたところでロジャーがとある本を手渡してきた。

「えーなになに、強化人間製造実験？ 責任者がノヴァク・グルテンムリーで被験者が……」

その本にはノヴァクが行ったとされる、非人道的な人体実験についての記録が事細かになされていた。

その本には実験に成功した被験者の名前が二つ記されていた。

一人は人族を裏切って魔人に寝返った四将アンデイ。そしてもう一人は――

「どうする？ 全て明かすのか？」

「……………知らぬが慈母神だ。この話は墓場まで持っていくさ」

◆◆

そこそこ凶悪な魔獣がうようよ住んでいると評判の深い森の中を進む。

魔王からノヴァク討伐の許可を貰い、城を発ってから三日経った。あと五日もすればノヴァクの治める都市タワシルゼンゴに着くだろう。

「ふうー…………」

「アナタもうこれで二十回目よ？ 今日はやけに多いんじゃない？」

「そ、そうかな？ あはは…………。なんか緊張しちやって。ちよつとヤな予感がするっていうか」

「ケイもなの？ ……実はあたしもなんだけど」

「くだらない。根拠がない」

ケイだけでなくカレンまでもが嫌な予感がすると言い、それをミロシユが真正面から否定した。

「どうだラクサ。五爪魔獣でも見つけたかい？」

「いやいねえナ。三爪くらいの奴でもオレ達を察知したらすぐ逃げちまってるヨ」

真の大妖精にしごかれた自称大妖精のラクサは魔界の草花と話せるようになり、最大で三キロ先までは探れるようになった。

「今回ばかりは嬢ちゃんの勘が外れたナ。……………いや、やっぱり外れてない！ 一体来ていれ！」

その言葉を聞いて即座に全員で戦闘準備態勢をとる。ほらねと一

瞬自慢げになったバカ娘もすぐに真面目に構えた。

「方角は!?」

「南東!・ 木の上を飛んで一直線に向かってきてイル! あと二十秒くらいだ!」

南東の空を木々の隙間から覗くと、たしかに翼を生やした人影が一つこちらに飛来している。

「――《疾^{ハシ}レ風^{カゼ}ヨ怒^{イカ}リニ答^{コタ}エヨ》!!」

ヤツが来る前に見晴らしをよくするため、暴れ狂う風を起こして周囲の木々を薙ぎ倒す。

「来た!!」

そいつは我々の前方に小型隕石の衝突じみた着地をして土煙を巻き上げた。

なお吹き荒れる暴風によって土煙は一瞬で木々と共に吹き飛ばされたが、そいつは何の問題もなく立っていた。

「あつ……」

「あらやだ、アナタまだ生きてたのおん?」

暴風が止んでその者の姿がハッキリと分かるようになった。

男は真昼間から上半身裸の変態的な格好をしているが、ケイ達三人は見覚えがあるようだ。

そしてこの俺にも見覚えがある。

どうしようもない怒りで胃液が沸騰してきた。

「てめえ……! その身体はどういうことだ!」

「アレんくん、アンデイを知ってるの?」

「アイツが、アンデイか」

「ちよつとどういふことよおん?」

アンデイとやらの顔は知らんが、その身体が誰のものかは知っている。

肉を容易く切り裂く鋭い爪、鋼鉄よりも硬く鍛え抜かれた色黒の肉体、そして黒く威圧的な翼――

「――どうしててめえがガエルの身体を持つてやがる」

首から下は紛れもなく親友のものだ。

第二十六話 「死んだ人間は蘇らない」

身体の厚さと筋肉の付き具合、平均的な吸血鬼より二回り大きい翼、そして方向性の違いから大喧嘩した時に創った傷跡まで、最後に見た時のまんまだ。

あの身体は間違いなくガエルの身体だ。

人違いならぬ体違いなんてことはない。三千年来の友の姿を忘れるわけがない。

「アンデイ、とかいったな。その首を消し飛ばされたくなければ今すぐ説明しろ」

人を捨てて魔人となり、そこからさらに身体をすげ替えて歪になった男に向けて両腕を真つ直ぐ伸ばし構える。

この状態で上腕を爆破すれば肘から先が音より速く飛んでいき、相手の首を攫っていく。初見での回避はほぼ不可能。仮に避けるか受け止めたとしても爆破して粉微塵に消し飛ばせばいいだけ。

妙な動きをしたら撃つ。

何も喋らなくとも撃つ。

という決意を感じ取ったのかは分からないが、アンデイはすぐに口を開いた。

「そうだ。この肉体はノヴァク様が与えてくださったものだ」

人族から魔人になる手助けをしてくれたのも、四将にまで上り詰めたのも全てノヴァクのおかげなのだ。自分はノヴァクには決して逆らえない犬だと自己紹介をしてくれた。

「なるほどな。ではお前には首から下を残して死んでもらおう。その身体を待つ人達がいるんな。何か残す言葉はあるか？」

「待つてアレンくん」

他人に翻弄され続けた哀れな男をせめて楽に殺してやろうと思っていたところでケイに腕を下げられた。

「アンデイは今度こそわたしが倒す。いいよね？」

「……ああ、いいだろう」

俺はあの男の首から下に縁があるが、ケイはあの男の首から上に因

縁がある。

たしかにそれを言う資格がある。

「しかし一人で大丈夫か？ 君がかつて倒した時よりも強くなっているに——」

ケイの顔を覗き込んだ瞬間に任せられると確信した。

大いなる責任と深い哀しみを背負った真に強き者の目をしていただけ。

俺はこの目をした者が俺以外に敗北するのを未だかつて見たことがない。

「よし、行ってこい」

我々は大きく下がって距離を取り、ケイとアンディだけが歩を進める。

「四年ぶりだね」

「この日を待っていた」

勇者と四将が対峙する。

ここは詩に伝わる騒々しい戦場ではなく静かな森の中ではあるが、二人は身体から蒸気を噴き出そうなくらいに昂っている。

「それで、いいのか？」

「何が？」

「あの女に身体強化の魔法をかけてもらっていないだろうか？」

四年前の一騎打ちではケイに身体強化の魔法がかけられた上でどちらが勝ってもおかしくない死闘を繰り広げたというのに。

吸血鬼の王の肉体を手に入れ、さらに強くなった自分を相手に駒落ちで戦うつもりなのか。

ひん曲げた唇でそう言わずとも表現している。

「うん。これでいいよ」

ケイはリターンエースをすらりと抜いて構えた。

「……そうか」

アンディという男は話に聞いた通り怒っているのか笑っているのか見分けのつかない珍妙な顔をしているが、こめかみに黒い筋が浮き出たのでこれは簡単に判別できる。

「貴様アアアアアーツ!! なめるのも大概にしろオオオツ!!」
筋肉を収縮させ、怒号と共に瞬発してケイの顔面を砕かんと拳を振るう。

野生の肉食獣をはるかに凌駕する俊敏性と膂力だ。具体的には射られた矢を追い抜き、戦神鋼で作られた兜にヒビを入れることだって出来るだろう。

借り物とはいえ三千年鍛え上げた王の肉体を使っているのだから当然ではある。あんなものは誰が使っても強いに決まっている。

そんな暴君相手に躊躇わずケイは飛び込んだ。

二人は一瞬だけ交差し、場所を入れ替えて振り返る。

「なん……だど!?」

ぼとり、と。

それらはほぼ同時に落ちた。丸太のように太い吸血鬼の両腕が胴体から離れた。

「貴……様ア……っ!」

ケイが追撃しないのをいいことに、四将ともあろう男が苦痛に顔を歪ませながらみつともなく落ちた腕に血管を伸ばして接着する。

そして「今のはまぐれだ、まぐれに違いない」と自身に言い聞かせるように呟いて再び襲い掛かった。……がしかし結果は変わらず、十秒前の出来事を再現しただけ。

「……ありえない! こんな、はずでは!」

アンディは再び両腕を付け直し、今度はその場で足を止めた。

何度も肉体改造を施されたせいで知能を著しく低下させてしまったのか、現実を受け入れられずに混乱している。

「俺はあの日より遥かに強くなったはずだ! しかもケイ……貴様ツ! どうしてその剣が燃えていない!」

彼はようやく聖剣リターンエースが燃えていない、つまりは何の力も発揮していないという事実気付いた。

魔法による支援もなし。聖剣に秘められし力もなし。あるのは巨人の魂と呼ばれし特別な肉体のみだが、それでもガエルの肉体であれば渡り合えるはずだ。

それがどうして一方的になっているのか。

アンデイが借り物の身体を十全に使いこなせていないというものがあるが、最たる理由はケイ自身にある。

「ケイったら、もう掴んでるわねえん……」

「ああ、未恐ろしいな。今のうちに後ろから刺し殺した方がいいかもしれない……」

最終試験においてこの俺様に抗えた唯一の術、力の枷を外すコツを掴んでいるからだ。

もちろん常時制限を解除出来ているわけではない。攻撃の瞬間だけ、防御の瞬間だけ、跳躍の瞬間だけ、ここぞという場面で十割を出しているのだ。しかもそれが大きな緩急となり、アンデイはなすすべもなくやられている。

「オアアアアアーツ!!」

男は雄叫びを上げ、何度も何度も泥臭く立ち向かっていく。

元人族としての意地、かつては勇者当確間違いなしとまで言われた男の意地があるのだろう。

だが、意地だけでどうにか出来るのなら俺が何千年も昔に世界統一を果たしている。勇者なんてものが選ばれない世界になっている。

「ふっ、ぐああっ!!」

ついには両腕だけではなく両脚までも切り捨てられて無様に転がった。

「クソ、どうしてここまで差が……。くそオ……ツ!!」

「……」

血管を伸ばして四肢を取り寄せることもせず、ただただ悔し涙と血液を流す男を哀れに思ったのか、代わりにケイが全部拾ってアンデイの側に置いた。

しかしそれを再び繋げようとはしない。七度打ち負けてさすがに満足したようだ。

「……なぜトドメを刺さない。早くその剣で俺を焼き殺せ」

「どうしてっ!」

「はっ… どうしてっ!」

もはや四将としての威厳も糞もない気の抜けた声でオウム返しをする。

「そんなもの決まっているだろう。俺が四将で、貴様が勇者だからだ」「だったら四将を辞めてわたしの仲間にならない?」

「馬鹿にしているのかッ!?!」

どうにか威厳を取り戻して声を荒げたものの「そうか貴様は馬鹿なんだな」とかえって冷静になった。

「俺はもう人族ではなく吸血鬼で、何千人と貴様ら人族を殺したんだぞ」

「うん、知ってる」

「それがどうして勇者の仲間になれるというのだ?」

ケイがアンディから目を離しこちらを向いて指差す。

「えつと……まずあそこにいるグウだけど、今はもう立派な吸血鬼」

「そうか。だが不当に人族を殺してはいまい」

「それと隣の、最近仲間になったアレンくんだけど」

仲間になったつもりはないがツツコまないでおこう。

「不死者で五千年は生きてるらしくて、昔はけっこう悪いことしてたんだって。アレンくん、今まで何人殺しちゃったの?」

「……………一億と少々」

「ね?」

ケイが再びアンディに目を向ける。

「アレンくんからあなたの過去を聞いた。どうしてそうなってしまったのかも全部知ってる」

男は黙って聞いている。

「わたしが本当に悪い人だと思えないと、この剣は燃えない」

なおも答えない。

「だからあなたはまだやり直せる。わたしの仲間になって」

ケイがそこで話を終えてしばらくして、アンディはついに口を開いた。

「いいのか? この俺がやり直しても」

「うん、一緒にがんばろう!」

汚泥の底に埋まりながらも辛うじて残っていたヒトの心が掘り起こされた。

つり上がっていた目と眉は垂れ、まるで憑き物が取れたように穏やかな顔になり。

そして彼はケイの差し出した拳に軽く額を打ちつけて再起を誓った。

「だからほら、早く治して！　いくら吸血鬼でも血が全部抜けちゃったら死んじゃうでしょ」

「ああ、そうさせてもら……があっ!!」

それは突如として訪れた。

アンデイが脚より先に両腕を接着した直後、血相を変えてケイを突き飛ばした。

反動で自らの身体が吹っ飛ぶくらい全力で突き飛ばしたのだ。

「えっ？　何？」

「早く逃げろッ!!　ヤツが来——」

「——《ショウネンバクサイ掌念爆碎》」

森の奥から響く声が重なる。

その瞬間、四将アンデイは木端微塵に弾けた。

◆◆

「ぐううッ……！　おい皆！　大丈夫か!？」

「問題ない」

「……うん、ありがとう」

咄嗟の判断で俺とミロシユ、そしてラクサの三人で暴風を起こして爆発にぶつけた。

おかげでこちら側に負傷者は出ていない。

「……なんで。一緒にがんばるって、約束したのに……」

負傷者こそ出ていないものの、ケイだけは精神的苦痛に蝕まれつつ

あった。

かつてアンデイがかけた心を脆くする呪いがこんなところで効いていやがる。

そんな有様を見てグリゴールがケイの元へ駆け寄り、

「切り替えなさいー!」

躊躇なく頬をぶっ叩いた。平均的な成人男性が受けたら頸椎を捻挫するくらいの力だ。

「泣くのは全部が終わってからよ! 今は前を向きなさい!!」

「切り……替え……。ああ、うん。そうだね! ごめんグウ!」

「分かればいいのよおん。……来るわよ!」

全員でアンデイが爆発四散した向こう側、声の響いた方向を注視する。

耳をすませば木々の間から草花を踏みつけこちらへ近づいてくる足音が聞こえる。

(ラクサ! 気付かなかったのか!?)

(オレが感知できるのは生き物だけだ! それができねーってことハ……)

生き物ではない。それか、死んでいる。

現に足音は聞こえるものの、どれだけ集中しても鼓動の音だけは聞こえない。つまりはそういうことだ。

「来るぞ」

時が経つにつれ足音はますます大きくなっていき。

そしてついに深緑の中から、鼓動のない男が現れた。男はラファールと同系統の顔つきで薄毛にはならない髪質をしているが、それ以外にはさほど変哲のない、武器すら持たない人族だった。

「お前が……お前がノヴァクだな!」

「ようやくお出ましてわけねえん」

「……………違う」

カランと乾いた音が鳴る。

男の顔を認識したケイが手から聖剣を落とした音だ。

「どうしたのケイ? 何が違うの?」

「あの人はノヴァクじゃない——」
ケイは落とした剣に見向きもせず、引つ張られるように一步踏み出す。

「——わたしのお父さんだ」

誰一人として考え付かなかったであろう事実を告げた。

「フェレーノレ……なんだよね？」

「そうだケイ、ずっとお前に会いたかった」

その者の名はフェレーノレ。ケイ曰くノヴァクに殺された育ての親だ。フェレーノレは各地から身寄りのない子を集めて鍛え上げていたらしく。ある日ケイを含めた弟子たちを守るためにノヴァクと戦い、一度は真つ二つに斬り伏せたものの甦ったノヴァクに後ろから刺されて死んだという。

その後他の弟子たちは皆殺しにされたが、どうにかケイだけは逃げおおせて仇討ちを誓い今に至るとのことだ。

「よかった、生きてたんだ……」

フェレーノレが両手を広げて待つ。

花の蜜に惹かれる蝶のように一步また一步とケイは近寄っていく。

「止まれ」

だから止めた。

たしかに一見すると親と子の感動的な再会にも思えるが、これは間違っている。

奴は花なんかじゃない。花に擬態した蠅螂だ。

「アレンくん？ どうしたの？」

「戻れケイ。あいつは君の師匠でも親でもない」

「いきなり何言ってるの？ あの人がフェレーノレだよ」

「たしかにあいつはフェレーノレかもしれん。だがフェレーノレではない」

哲学的な話だとも思っているのかケイは何度も首をかしげて眉をひそめた。

なのでどうしても行くのならこれを持っていけど、捨てられた聖剣をケイの足元に蹴り飛ばした。

「君が責任をもって斬れ」

「わけわかんないよアレンくん……それにみんなも……。なんでそんなに怖い顔してるの？　ねえ？　みんな変だよ？」

「どうかしているのは君だ。まだ気付かないのか？　アンデイを消し飛ばしたのはあいつなんだぞ？」

「そ、それはきつと……わたしを、守ろうとして……」

ケイは天然だが馬鹿ではない。頭ではなんとなく理解できているはずだ。

しかしそれを心が、情が、どうしてもあの男を良いように取り繕ってしまっている。よっぽど愛情深く育てられたのだろう。

「なあ、ケイ。分かっているだろう？」

だからもうこの言葉を吐くしかなかった。

「——死んだ人間は蘇らない」

それは子供から老人に至るまで、誰でも当たり前前に知っているこの世界の理だ。

愛する人に生きていて欲しいという思いが盲目にさせてしまったのだろう。

運悪くアレン・メーテウスという、外の世界の力を与えられた例外と長く触れ合ったせいで曖昧になってしまっていたのもあるだろう。

「だって……！　お父さんはノヴァクに殺されて……それで……」

勇者だろうが魔王だろうが、聖者だろうが大罪人だろうが、他人を蘇生させることなど出来はしないのだ。

それが可能なのは遠い場所から見下ろしてやがる六大神くらいだ。しかしこの世界の神々は第一次人魔大戦以後、地上の生物の蘇生を互いに禁じている。

だからアレはケイの親ではない。

「——《掌念爆砕》」

フェレーノレの皮を被ったソレに向けて、手をまるごと爆破して人差し指の骨を撃つ。

音が伝わる速さで飛んだ骨は額から後頭部を貫いて背後の木に突き刺さった。

「……あれでもまだ、自分の父親だと言えるか？」

ケイは押し黙って、油の切れたカラクリのようにぎこちなく首を振った。

額のど真ん中に風穴を開けられたというのに何事もなく立っているソレを目に焼き付けてしまえば、誰だって認めざるを得ない。ソレはヒトではないと。

「お見事！ よくぞ見破りました！」

フェレーノレの皮を被った何か……いや、もういい、ノヴァクと呼ぼう。四将アンディを所有物扱いして爆破させることの出来る者などノヴァク以外にあり得ない。

とにかくそれが仰々しく拍手をした。

「勇者御一行様、それと最古の不死者様。お会いできて光栄です」

「……それじゃああなたは、誰？」

「四将の一人を務めております、ノヴァク・グルテムムリーにございます。以後、お見知りおきを」

恭しくおじぎをし、取って付けたような笑顔で答えた。

「ようやくお出ましか。今すぐてめえを捕まえて消し飛ばしてやる。そこから動くんじゃないぞ」

「まあまあお待ちを。私は四将アンディを討伐なさった勇者様にお祝いの品を差し上げたいだけなのです」

「お祝いの品だア？ こちとらてめえの命以外に興味はねえぞ!!」

「品と言っても手に残るようなものではございませんが、勇者様の知らない真実を教えてくださいよう」

「ッ!？」

それだけはダメだ。決して喋らせてはならない。今すぐ消さねば。

そのつもりで地を蹴ったのに身体が前に進まない。

ぶつと腕と脚が俺の身体に絡みついているからだ。

「おい！ 放せ！ どういうつもりだグリゴール!?」

「悪いわねえん。今こそ向き合うべきだと思うわ。それにアナタも悪いのよおん？ 何か知ってるくせにアタイ達に話そうとしないじゃない？」

全てを知り、全てを受け入れて前に進む。なるほど、実に素晴らしい。実に英雄的な姿勢だ。

しかしながら、世の中には絶対に知るべきではない真実だって存在する。下手な真実なら知らない方がいい。

「クソツ！ おいケイ！ 耳を塞げ！ ソイツの話は絶対に聞——」
グリゴールのでかい手で口を塞がれ、さらにはミロシユに二人まとめて首から下を氷漬けにされ、いよいよ何もできなくなった。

四千年前のあの時とは違って念ずるだけで自爆し抜け出すことはできるが、それをすればグリゴールは死ぬのでどちらにせよできない。い。

つまり俺の精神性は大昔と何一つ変わっちゃいない。人にああだこうだ言うようになっただけで、いつまでたっても甘つちよろいクソガキのままだ。

「疑問に思ったことはありませんか？」

「疑問？」

「なぜ自分は産みの親の顔を知らないのか！ なぜ自分は人並外れた筋力を持っているのか！ なぜあの日、自分だけは都合よく逃げ切れたのかア!!」

何がそんなに楽しいのか、ノヴァクは自慢げに意気揚々と語り続ける。

もういいい！ もうやめてくれ！ だれかやめさせてくれ！

「それ以上言うなんんんんーんんーツ！」

「その答えはただ一つ……ハハア……」
やめろオ!!

「それは貴方が！ 世界で初めてツ！ 強化人間製造実験に成功した被験体だからだア——ツ!! ハハハツ！ アア——ハツハツハツハツ!!」

「わたしが……被験、体……？」

「ええ、そうですよ！」

ケイは世界中から集めた優秀な雄と雌を無理矢理交配させて産まれた子だと。赤子のうちから多種多様な投薬や秘法を施し、生き残った一人なのだ。その被験体達の監視兼教育係の一人がフェレーノレなのだ。

ケイを産んだ両親は目も耳も声すらも取り除かれ、ただ子を製造するための機械となって番号で呼ばれている。父親の方はケイが生まれて二年後に頭を打ち付けて自殺し。母親の方は合計で十六回出産したが、産まれる子の質が悪くなって廃棄されたので二度と会うことはできない。

その他諸々口にするのも憚られる真実を事もなげに垂れ流しやがった。

しかしまだ、ケイにとって致死の毒となる言葉だけは口にしていない。

それさえ知らなければ彼女は勇者でいられる。

「嘘だ……。わたしを騙そうとしている……」

「ならばもう一つ、貴方が忘れていることを教えてあげましょう。貴方の師であるフェレーノレと弟子達を皆殺しにしたのは私ではありません」

「……………え？」

ケイは自分の生まれた理由を知って激しく動揺し、それでもまだノヴァクに向けて燃え盛る聖剣を握っている。

今ならまだ間に合う。

（ラクサア!! ケイの耳を塞ぐかノヴァクを飛ばせ! 早くしろ!!）

（……ナア先輩、ここまで来たら最後まで聞くべきだとオレは思うぜ）
（うるせえ!! いいから黙って従えつつってんだろツ!!）

俺がどれだけ怒鳴り散らそうとラクサは怯えることすらなく、ただ黙って鳥畜生のフリをした。

！
真実は明かされるべきだと? どいつもこいつもふざけやがって

外野は何とでも言えるかもしれないねえが、誰にだって死んでも知っちゃいけねえ真実の一つや二つ——

「——貴方が殺したんですよ。もっとも、そのように命令したのは私ですが」

……時間切れだ。

ついにノヴァクがそれを口にした。

「わたしが……？ そんなの嘘だよ。わたしがみんなを殺すわけがない」

「言葉一つで私に従うように暗示をかけていましたから」

「それでも！ あの時みんなを……あッ、頭が……!?! う……うああ……っ！」

「ケイ!? 大丈夫!?!」

突如としてケイがリターンエースを手放し、頭を押さえて苦しみ出した。

蓋をして都合良く塗りつぶしていた記憶が溢れ出したのだろう。こうなったらもう止める術はない。

「さあケイ！ 私だけの希望よ！ 再び貴方の仲間を殺しなさい!!」

ノヴァクは苦しむケイに暗示の言葉をかけて命令した。

しかしいつまで経ってもケイは頭を押さえて苦しんだままでこちらに刃を向けようとはしない。

「……ああやはり、フェレーノレが暗示を解いていましたか。まあいいでしょう」

勝手に納得し、特に落胆することもなく淡々と続ける。

「ともあれケイ、貴方のおかげで研究が大きく前進しましたよ。心より感謝しています——」

次の瞬間、ノヴァクの口から何か光るものが射出された。

予備動作などなく吐き出されたそれはケイに向けて一直線に飛んでいく。針と思しきそれは音よりは遅く、せいぜい弓矢と同程度の速

度しかない。普段のケイならば難なく避けられるはずだ。

普段のケイならば。

「あぐっ……い！」

苦しみ喘ぐ勇者様は凶弾を避けられない。

どの魔法を用いてもきつと間に合わない。

だから一番近くにいた少女が飛び出した。

カレンが庇つたのだ。

「『仇ヲ蝕メ巖ノ驚ヨ』」

一拍遅れてミロシユが巨大な礫を放ってノヴァクの首から下を挟り取ると同時に、俺とグリゴールを固めている氷を溶かした。

「良い仲間を、持ちましたね。また会えるのを、楽しみに——『掌念

爆碎』！」

首だけで転がってもなお減らず口を叩くそれを、ケイには申し訳ないが怒り任せに跡形もなく消し飛ばした。

邪悪が消え去って直ぐにミロシユとグリゴールはケイの元へ、俺とラクサはカレンの元へと駆け寄る。

「おいカレン！ しっかりしろ!!」

カレンの胸元に刺さった毒針を抜き。

そつと地面に寝かせてから、気を失わないように呼び掛ける。

「えへ、へ……」

息をするのも苦しいはずなのに、カレンは笑顔で答えた。

「あたし、やっと……みんなの役に、立てた……よ。だから、ねえ……褒めてよ、アレ……ん」

カレンにはケイの跡を継ぐに相応しいだけの勇氣と自己犠牲の精神くそつたれがあり。

ワガママを押し通すための判断力と瞬発力、その他諸々の力があつた。

力を与えてしまったのは他でもないこの俺だ。俺が丸一年鍛えさえしなければ、カレンは反応することすらできなかったのに。

「ああー、よくやった！ 偉いぞカレン！ ご褒美に好きだけ美味しいものを食べさせてやる！ だから絶対に死ぬな!! 死ぬ気で生

きろ!!」

「やつ……たあ……」

鼻と口から血を流しながらも、満足気な顔でゆっくりと瞼を下ろした。

「クソオツ!!」

用済みになった実験体を廃棄処分するために作っただけあって毒の周りが早すぎる。ただでさえ小さい鼓動がみるみる弱まっていく。毒を治療するような魔法はない。

解毒薬も持ち合わせてはいないし、そもそもノヴァクの作った毒にどの薬が効くかすら知らない。都合の良い万能解毒薬なんぞ存在しない。

「健やかなるは称えたる、康らかなるは誉れたる。活ある瞳で星望み、我らが母を微笑ません——ファティルスブレス《慈母神ノ息吹》!!」

だから神に頼った。神頼み以外に道はなかった。

「乙女の雫は毒にも勝り、血肉潤し傷癒す。なれば今こそ袖引き濡らし、愛する者をゆかせるな——ヴァイールタステイア《清廉神ノ涙》!!」

いつまで待っても、三度同じ文言を繰り返しても。

俺の手が光を帯びることはなく。

天から熱い涙が降り注ぐこともない。

そうしているうちに、ロウソクの火が儂く消えた。カレンの鼓動が止まってしまった。

「おい!! 六大神共!! ずっと見てんだろ!? カレンを救ってくれたらためえらの駒となってむこう千年働いてやる! だから今だけ使わせろ! 使わせやがれツ!!」

両手を重ねて、カレンの胸をあばらが折れそうなくらい何度も強く押しつつ天に吠える。

なあ! 分かってんだろ!?

この子はこんなところで死んじやならねえって!

いずれ世界を大きく変革させることになるって!

ここで恩を売って陣営に引き込めば莫大な利益を産むんだぞ!!

それを見捨てんのか!?

「先輩……もう、そこまですてしてくれ」

ラクサが鳥の肉体を抜け出して俺の手の上に乗った。

「邪魔をするな!!」

「嬢ちゃんとの契約つながりが——途切れた」

聖呪による契約を解く方法は二つ。

一つは両者合意の元で解呪の言葉を唱えること。

もう一つは片方の魂が肉体を離れた時、それは解消される。

今この時、最愛の娘が死んだ。

「……………そうか」

幾度となく他人と己に言い聞かせてきた言葉が頭の中で重なって響き、胸を圧す手を止める。

『死んだ人間は蘇らない』

第二十七話 「お前を抹殺する」

カレンは死んだ。

二度とこの子の笑顔を見ることはできない。

「ラクサ、後は頼む」

それを認めてしまったというのに泣き叫ぶでも怒り狂うでもなく、不思議と冷静でいられた。

自分の責務とやらが嫌というほどハッキリ見える。

「ハ？ 後は頼むって」——《ショウネンバクサイ掌念爆破》

下半身を推進剤として爆破と再生を繰り返し上昇する。

あつという間に雲の下まで届き、数十キロ先の緑の切れ目まで見渡すことができた。

「……………あいつか」

遠隔で死人を操る魔法はたしかにあれど、使用者の技量によって距離は制限される。どれほど優れた魔法使いでも十キロ離れた場所にある死体を動かすことなど出来はしない。

五キロと離れていない地点にやはり不審な人影があった。

「力を借りるぞ、ガエル」

決してヤツから目を離さないようにし、懐から黒革の水筒を取り出して栓を外す。

人族のものと同じように鉄臭いそれを全て飲み干した。

「グッ……………！ があアッ！」

体内に取り入れた王の血が暴れ出す。体の隅々まで枝分かれして伸びる血管の内側から、鋭い棘で肉と骨をズタズタにされているような激痛が走る。

ああそうだ、こんな感じだったな。痛覚を遮断せねば意識を失うほどの痛みだった。

「ノヴァアアアク……………！！」

奥歯が欠けそうなほど喰いしぼり、俺はあえて痛みを消さずに受け入れた。

毒で殺されたカレンの苦痛に比べれば、同胞を殺されたガエルの心

痛に比べれば、この程度の痛みは擦り傷にも満たない。

今すぐお前に総まとめで返してやる。

痛みが過ぎ去ってから脚の爆破を止め、千と数百年ぶりに生やした翼でヤツのもとへと降下した。

「よお、どこに行くつもりだ？」

好き勝手して立ち去ろうとしている男を引き留めた。

今度こそ鼓動があつて熱がある。間違いない、ノヴァク本人だ。

「これはこれは不死者様。まさかこんなに早く再会できるとは」

二メートル強はある長身痩躯の男が振り向いて微笑んだ。たしかに話通り何を考えているか読めない知的で不気味な顔をしている。

筋肉が全くついていないわけではないが、グリゴールやラフアードルのように隆々としているわけでもない。いかにも魔法使い然とした恰幅と立ち振る舞いだ。

「それで私に何か御用でしょうか？」

「ああ、ちよつくら話し合いをしようと思つてな」

ハナシアイの前には通常おじぎをするのが礼儀だが、コイツ相手にはやれないしやらない。一瞬でも目を離したら何をされるか分かつたもんじゃないし、絶対に逃がすつもりはない。

「まずは一つ、これだけは聞いておかなきゃならねえ」

どうして他人の命を軽く扱える、どうしてお前は救いようのない悪なのか、なんて質問ではない。そのような問いかけはしなくともおおよそ分かり切っているし、どんな答えが返つてきても余計に苛立つだけだ。

「死人を意のままに操る魔法を使つたな？」

「ええ」

「なぜお前がそれを知っている？」

アレは三千年ほど昔に編み出された禁忌の魔法だ。西方の国のイカれた魔法使いが開発して広まり、各国の要人を次々と暗殺して世界を混乱に陥れた恐るべき魔の法だ。

もちろんすぐさま滅至月会や平和を望む知り合い達の力を借りて事態の収拾にあたった。結果として使用した者を皆殺しにし、使わず

とも詳しく知ってしまった者の記憶を封じ、ありとあらゆる書物から消し去ることに成功した。

当然ロジャーとガエルも知っていたが本人の許可を取って記憶を封じ、今では俺と同年代のあの男しか知らないはずだ。まだ生きていたらの話だが。

「誰に教わった？」

あの男から聞き出した？ いや、それはないはずだ。そもそもこの三千年の間に一度でも使われるのを見たことも聞いたこともない。

「誰にも教わっていませんよ」

「俺達が燃やしそびれた本でも見つけちゃったか」

「いえいえ。私はあの魔法を教わった方ではなく、人に教えて書に記した方です」

「……あー、そういうこと」

道理でな。

ノヴァクの過去の話を見聞きする限り魔人らしくないやり方をするなと思っただが、ようやく合点がいった。

元人族としての記憶が残っているならそうだ。情と熱よりも合理性を優先して冷徹に動く。しかもあのイカれた魔法使いだっていうならなおさらだ。そういうや三千年前もこの男は人体実験に没頭していた。俺は騙されて被験者になったふりをして潜入および暗殺したのだから。

兎にも角にもこのノヴァクという男は、絶対に野放しにしてはならない人間だ。

「そんじゃ、殺すか。……と言いたいところだがノヴァクお前、運が良かったな」

ヤツに飛びつくために地面を蹴る足を、ヤツの身体を引き裂こうとする手を、今は亡きカレンの遺志が止めた。

あの子はいくらにも清く慈悲深かった。慈母神なんぞよりよっぽど。

どんな悪人であれ、俺が手を下そうとすれば必ず止めに入った。相手にやり直す機会を与えようとしていたのだ。

「お前相手でもたぶんそうだ。今ここにいたら絶対に止めてくると思うんだよ。だから一度だけ提案してやる。生き残るチャンスをくれてやるよ」

「と、言われますと?」

「世界平和に貢献しろ。お前が物のように使い捨てた命の数だけ救って償え。それが全部終わったら楽に死なせてやる」

「なるほど、実に魅力的なご提案ですね。ですがお受けできません。これでも立て込んでおりまして」

「だろいな」

フウーと溜息と共に肺の空気を全て吐き出し、ハアーと吸えるだけ吸い込み、

「——お前を抹殺する」

地を蹴った。

筋力の全開放、吸血鬼としての身体能力、血管と血流の精密操作。その全てを合わせて最速でノヴァクに詰め寄り膝蹴り。

細長い身体が地面を離れて浮き上がった二秒間に五十発の拳を打ちこんだ。

今の俺は魔法を使わずとも音より速く動ける。

「ツラァー!」

上半身の骨をほとんど砕き肉をボコボコに腫らし意識を失った男を切り裂いた。

「……ま、そうだろうな」

頭の上から股の下まで真っ二つに切り裂いて分離したが、それはものの十秒とせずに断面が蠢いて再生・結合し、再び起き上がった。

不死身と呼ばれているだけある。

「いやはや、なんという圧倒的な速度。それにこれほど痛い打撃は初めて受けます」

「あ? お前痛みも何も感じてねえだろ」

凶星を指されて照れ隠しを表現しているつもりなのか、片目を細め

て不気味にニヤリと笑う。

こいつには人の心も痛覚さえもない。

自分から殺してくださいと乞うまで苦しませてやるつもりだったが仕方ない。もう消してしまおう。時間の無駄だ。

だけどせめて。

「お前がいくら不死身だと言ってもガエルが負けるわけがない。真の姿を隠してんだろ？ 早く見せろよ」

カレンとガエルがこんな雑魚にやられたとなつては二人の名誉に關わる。であればせめて実力を引き出した上で滅殺してやる。

癩ではあるが「よくぞ斯様な化け物に立ち向かったな」との誉れを受けさせるため、ノヴァクの強大さと恐ろしさも記憶し語り継がねばならない。非常に癩ではあるが。

「流石は伝説の不死者様、そこまでお見通しでしたか」
では失礼してと呟いてからノヴァクは大口を開けて咆えた。

《咆哮する狂気》の二つ名に相応しい轟きは世界を震わすような……いや、実際に地面が揺れ動いている。

ノヴァクの足元から蜘蛛の巣のように亀裂が走り、落とした花瓶の如く地が割れて隆起し、巨大な影が浮かび上がった。

「それがお前の正体か」
「ええ、恥ずかしながら」

無数の目と口と手と足と尾と翼と棘と触手と気孔と、その他諸々の要素を併せ持ったそれは異形の怪物と称する他ない貌をしている。

何か一つや二つの魔獣に類似しているなどと例えることのできない全長五十メートル近い異形。強いて言うなら全種族の子供を一人ずつ集めて、とにかく強そうな魔獣を設計させたといひか言いようのない化け物だ。

その怪物の頭部……と思われる前面上方にはノヴァクが腰から下を埋めていた。

「《掌念爆砕》」

なのでとりあえず腕を発射して爆破し、ノヴァクの人型ごと頭部を抉り取った。……がしかしやはりといひべきか、断面が蟻の大軍のよ

うに蠢き泡立ち肉を成し、全ては元通りに。

「とんだご挨拶ですね」

「核とかある？ それとも十回くらい殺せば死んでくれるか？」

「申し訳ありませんがそれについてはお答え致しかねます」

当然答えてくれるわけもなかったので俺は脚を爆破し翼をはためかせて急上昇した。

「どこに行かれるおつもりで？ 私も魔法使いだということをお忘れですか？」

おそらくあの巨体自体にはろくな対空手段が備わっていないため、魔法による風の刃と氷の飛竜、それと直接礫を投擲したものが大量に降り注ぐならぬ噴き上がってくる。

「逃しませんよ」

逃がさないだと？

笑わせるな。

お前こそ今すぐ逃げればいいのに。

「《掌念爆砕》」

対空攻撃を全て避けつつ、雲の中で体を上下逆にし急降下。

なおも追尾してくる氷の竜には、脚を爆破して加速するついでに余った指を食わせてやった。

「これで」

空気が熱を帯びた壁となって俺を止めようとする。

それでもノヴァクの影はますます大きくなって視界を侵食してゆく。

「終わりだ」

突き出した拳が醜い怪物の背に触れる間際、再びそれを唱えた――

「――《掌念爆砕》ッ!!」



無より肉体が形成されてから目を開いた。

透き通った青空と飄々と流れる雲が最初に飛び込んできた。

首を左右に倒せば円形の巨大な窪地の中心に横たわっていると分かった。

「涼しくなったな」

無から生まれなおしたことによって吸血鬼の翼も牙もついでに衣類も全て消え去り、いつものポンチョ以外には何も残っていない。全身全霊で爆ぜたのは千と数百年ぶりだ。

生まれたままの姿で窪地から這い上がって半径五、六百メートル先まで緑が消え失せているのを確認できた。忌々しい怪物の影も見当たらない。

もしもノヴァクが核を壊さない限り死なないとしても、細胞の一片でも残っていれば全て元通りになるとしても関係ない。

何一つ残さず消し去ってしまったえばいいのだ。この世界には無から有を生み出す術などないのだから。

兎にも角にも、不死身と呼ばれて好き勝手していた野郎は死んだ。

「カレン、ガエル」

窪地の淵に腰を下ろして二人の名を呼ぶ。

いくら待てども生者の声が返ってくることはない。

「仇は、取ったぞ」

「ええ、二人も喜んでいることでしょう」

「ッ!?!」

その瞬間、全身の毛が逆立った。

振り向いた時にはすでに首の大動脈に何かしらの液体を注ぎ込まれていた。

視界が急激に霞んで狭まる。

「《掌にえ……ん………ひやく、しゃ」

まずいまずいまずい。

ろれつが、まわらない。

まとも、しこう、できな——

「ぐゆるりとお休みください」



頭が重いし痛い。

あの睡眠薬のせいか。

「う……」

それでも呻き声と共に目をギュツと瞑つてから開いた。

「……ああ、研究所か」

体質のせいで幾度となく検査と実験に付き合わされた経験があるので、ここがどういった場所なのかは一目見てすぐに分かった。

かろうじて隅まで照らされている程度の薄暗い大部屋の中は歩道と薬品置き場、それと実験場以外はガラスの箱で埋め尽くされている。箱の中には人と獣が生死を問わず収容され、手足やら内臓やらの部位だけでも整然と保管されている、いかにもらしい部屋だ。

俺自身も一辺が二メートルほどの狭苦しいガラスの立方体に閉じ込められていた。隅にはポンチョと寝巻きが綺麗に畳まれて置かれている。小さな優しさがじんわりと沁みるねえ。

もちろんこんな場所に長居するつもりはないのでさっさと出よう。

そして今度こそノヴァクを殺そう。

《『掌念爆砕』……ま、当然魔封じは施してあるよな》

寝巻きとポンチョを着てからガラスについた手を爆破しようとしたが、何も起こらなかつた。

二度ガラスを叩いてその厚さと強度を調べたが大したことはない。これなら俺の骨を犠牲に割れる。

「お目覚めでしたか！」

呼吸を整え、ガラスを叩き割ろうと拳を引いた時にヤツが来た。特注の白衣を纏ったノヴァクは黒い布を被せた四十センチ四方の箱か何かを両手で携えている。

「少々お待ち下さい」

目の前の通路を挟んだ向こうの台に箱を設置し、何やら管のようなものを台の下から床の穴に繋げた。

それからようやくこちらを向いて笑みを浮かべる。

「ようこそ私の研究所へ！ 今日から貴方も家族です！」

「血も心も繋がってねえのにか？」

「貴方は私の研究を支えてくれるのですから家族と言えます。互いを慈しみ支え合う心がヒトを家族たらしめるのです」

「ヒトの心がないくせによくもそんなことがほざけるな。……で、この程度の檻で俺を閉じ込められると思っただか？」

「ええ、閉じ込められます。これがありますので」

ノヴァクは箱に被せられた布を摘み、間をあげずに勢いよく引つ張った。

やはりガラス製の箱の中は黄緑色の液体で満たされていて、

「……………まさか、生きて……………いたのか？」

首だけになりながらも生き延びていた友と目があった。

たしかに親友ガエルだ。ガエルではあるのだがその目にかつての輝きはなく、犬にすら噛み殺されそうな弱々しいものになってしまっていた。

「もしも貴方が逃げ出そうとしたら、あの管から毒が注入される仕組みになっております」

つまりは人質というわけだ。

「彼もまた私の研究に大いに役立ってくれました。是非とも平穏な余生を過ごさせてあげてください」

それだけ言い残すとノヴァクは白衣を翻して帰っていった。

コツンコツンという足音が聞こえなくなっただけでも俺は何も言い出せずにいた。

『すまん。本当にすまん』

先に口を開いたのはガエルだった。

液体の中にいるせいで声は聞こえないが、読唇術を用いれば何を喋っているかは分かる。

吸血鬼の王ともあろう偉大な男がひたすらに詫びている。

ずっと弟だと思っていた男の無様な姿を見ているだけで胸が張り裂けそうになる。

「違うだろ。そこは嘘でも『会えて嬉しい』と言ってくれよ、なあ」
お願いだからもうやめてくれ。己を誇るのはいままでにしてくれ。

そんな想いが伝わったのかガエルは口を閉じた。
少ししてから再び口を開き、今度は別の言葉を紡いだ。

『俺のことは気にするな。やれ』

それはつまりガエルの命と引き換えに世界の危機を救えと。

今度こそノヴァクを討つてくれと。

そう言いたいんだな。

「断る」

この子のためなら世界の半分を敵に回しても構わない。

そのように思っていた娘を救えず死なせたばかりだというのに。

そのうえ弟まで失えと？

ふざけるな。

『どうしてだ』

「俺はもう、何も失いたくない」

俺の心境を知ってもらうために、ガエルにこれまでの経緯を全て話した。

石の中に千年間封印されていたこと。

封印が解かれた日にカレンという少女を拾ったこと。

少女を我が子のように育てながら旅をしたこと。

ガエルを探すために勇者一行と共に魔界までやってきたこと。

魔界での日々のこと。

そして、カレンが殺されたことを。

『……すまん。本当に申しもういい、二度と謝るな。次謝ったら絶交だ。そもそもお前のせいじゃない。全ては俺の責任だ』

そうだ。

全て俺が悪い。

あそこでノヴァクに何も喋らせず、問答無用で消しておけばよかった。

カレンに何の力も与えなければよかった。

そもそも石の中に閉じ籠っていたらよかったのだ。

そうすればカレンは売られこそすれ、こんなに早く死ぬことはなかったはずだ。それに神々と運命に愛されたカレンのことだ。輸送

中に白馬の王子様が現れて助けてくれるのではないだろうか。俺が何もせずとも良き師に拾われてすすくと育ったのではないか？

大昔に誓ったせいで「俺はこの世に生まれるべきではなかった」とは口に出せないが、どうしても思わずにはいられない。もしもこの世界に一切の縁が無ければどれほど楽なのだろう。

ああしていればよかった、こうしていればよかった。全部、何もかもお前のせいだと、俺の中の俺が責めるのをやめてくれない。

「……しばらく寝る」

もう、いやだ。

今はもう、何も考えたくない。何も見たくない。

だから目を潰し鼓膜を破り仮死状態になるツボを押し、暗闇の中に閉じ籠った――。

「――うわ、今時ガツチガチのファンタジー世界住民じゃん。魔王とかドラゴンとか跋扈してる系の。首輪物語観たくなってきた」

「でも新入りのやってることほとんどオジギモートとかボイダー卿じゃない?」

「ボイダー卿で思い出したけどさ。EP8マジで酷すぎて許せんかったから監督を中性子砲で滅して魂捕らえて、クアトロヘッドサイクロンアトミックシャークが人類を支配する星系に送り届けてやったわ。今どうなってんのかな」

「やっぱアレあんたの仕業だったの? 過激派じゃんヤバすぎ」

全てを諦めて閉じ籠ってから十秒と経っていかないかもしれないし、一週間が経過しているかもしれない。

とにかく聞き覚えの無い声が聞こえてきた。

「ねえすげーいよこの子……。才能ゼロだよゼロ! 超絶一般人なんだからどー」

「アイツもひでえことすんなあ、こんな弱者に与えるなんて」

「可能性がどうか系のアレでしょ。それでもコレはどうかと思うけど」

無視を決め込むつもりでいたが、どうにも俺のことを言われている

気がしてならないので思い切って目を開けてみた。

「ハロー」

「エキスキューズミー？ 言葉、通じてマスクー？」

「ねーえー？ 無視はひどくなーい？」

なんだここは。

何も無い暗い世界が広がっている。無の世界か？

いや、無ではないか。闇の中で煌々と輝く粒が無数にある。……とするとここは星空の中？

「くっ、動かん」

自分が横たわっているのは分かったが体が動かせない。

そんな俺を囲んで見下ろす珍妙極まりない者達。

「……はあ」

いないものとして目を合わせず意識すらもしないようにしていたが、仕方がないので目を向ける。

ヒト、虹色に発光する服を着たヒト、頭が半透明になって脳味噌が見えているがたぶんヒト、魔人でもなかなか見えない異形だがきつとヒト、紫色に発光し浮遊する正十二面体、ヒト……の輪郭を取る黒い線、白い岩……なのか？

「オイラは元々ケイ素生命体なんだ、よろしくな」

ケイ素生命体とやらが何かは知らないが、俺の思考を読んで挨拶してくれたということは岩ではなくヒトだ。

おかしな夢の中だとはいえ、挨拶されたら返すのが礼儀か。

「よ、よろしくお願いします。ところであの、ここは何処なんでしょうか？ 皆様はどちら様で？」

「アンタの星では人に名を聞くより先に自分が名乗るのが礼儀なんじゃないの？」

「そうですね、すみません。俺はアレン・メーテウスと言います」
「それだけ？」

俺の好みではないが、桃色の異常な髪色をした美女がつまらなそうにしかめた顔を近づけてくる。

それだけ？

何を話せば満足してくれるのだろう。驚きを求めているのだろうか？

ならば思い切って正体をバラしてしまおうか。どうせ夢の中なのだから。

「実は俺、不死者なんです。死んでも死ねないんです」

「へえ、そうなんだ。どうして不死者になったの？」

「ええっと、子供の頃にカミサマを名乗るイカれたヤツに魂を分けられて……だったかと」

「うん、私達もみんな同じ。だいたいそんな感じでアイツの魂を持つてる。あとこれ夢じゃないよ、現実だから。……ま、現実っていうのも厳密には違うんだケド」

分かりやすいヒトの姿をした者達がうんうんと頷く。

「は？ 同じ？ 夢じゃない？」

「アレン君さ、アイツから一切説明されずに何か貰ったでしょ？」

一年前に確かにもらった。

無理矢理押し付けられたのに「人に聞かずに自分で考えろ」と子供扱いされて腹が立ったのを覚えている。今でも思い出すだけで滅茶苦茶ムカつく。

「それね、アイツの魂を分けられた同類と通信できる力なんだ。今の君は使うのにちよつとした条件があるけど」

「条件、ですか？ それはどんな」

「全てを諦めること」

「全てを、諦める……」

「使い所はブラックホールに飲み込まれたり、全自動殺害マシンでスキルされ続けたり、自分以外の人間が全員ゾンビ化したり……石の中に封印された時、とかね！」

そうだ。

今回ばかりは俺の力では無理だと投げ出してどうでもよくなった。

ノヴァクが寿命で死ぬか、運良く他の誰かが倒してくれる以外には何も出来ない。

「とにかく自分の力ではどうしようもなくなったら、世界を越えて不

死者同士で助け合いましたよってこと」

「それなら千年前に欲しかったですね。はは……」

こんな凄い力を与えてくれたというのに、アイツへの感謝どころか逆に怒りがふつつつと湧いてきた。

それでも使えるものは使うしかない。

「たぶん俺の現状知ってますよね？ カレンっていう女の子がいるんです。俺を助けるというならどうかその子だけでも助けてください！ あなた達なら自分だけでなく他人を蘇らせることもできますよね!？」

「ヨユーヨユー」

容易いとの返事をもらって思わず目を見開いた。身体は動かないが心だけでも舞い上がった。

「だけど今は私達の出る幕じゃない」

「だな」

「え……そん、な……」

そしてすぐに突き落とされた。

まさかこの人達もアイツと同じく性悪だというのか。

「勘違いしないで。助けないってわけじゃない、助ける必要がないってこと。だって君、まだまだ詰んでないから」

「詰んで……ない？ この状態で？」

「うん、詰んでない。戻れば分かるよ」

「応援してるぜ新入りイ！ 典型的なマッドサイエンティスト野郎にいつちよかましてこい！」

「暇な時に見てるYO」

「ガンバツテネ」

心のうちは読めないがたぶん誰も嘘を付いていない。

全員が全員俺の未来に幸あれと励ましてくれた。

正十二面体のヒトも輪郭だけのヒトもケイ素生命体のヒトも、表情筋は無いのにも優しく微笑んでいるように見えた。

「分かりました。頑張ります。才能はないですけど諦めないでやれるだけやってみます!!」

「言おうか迷ってただけだね、君にもひとつだけ取り柄がある」

「そうなんですか？」

「自分が弱いことを知っているからこそ仲間を集められる、それがアレン・メーテウスの才能だよ——」

その言葉を最後に先輩達と星空は消え、俺の意識は再び闇の中に引き戻された。

「——アレン！ ねえ起きてアレン！」

今度こそ幻聴か。聞こえないはずの声が聞こえる。

「いつまで寝てるの!? 早く起きてよ！」

「早くしろ先輩！ 時間がねえんだ！」

バンバンとガラスを叩くような音も聞こえてくる。

ノヴァクめ、よくも俺にこんな幻聴を聴かせやがって。絶対にゆるさ——

「……………なん……………で」

睨んでやろうと目を開けた。

しかしガラスの向こうにいたのは不気味な長身ではなく、この世に存在しないはずのいとしいひと。

「助けにきたよ!!」

最愛の子、カレンの姿がそこにあった。